
ポケットモンスター ラグラーズの冒険

探偵コアラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター ラグラージの冒険

【Nコード】

N7328J

【作者名】

探偵コアラ

【あらすじ】

世界を『悪』から救った英雄を先祖に持つラグラージのラグ。

この世界では現在問題として心を闇に染めて戦闘力を上げる「ダーク化」が発生しており、それを解決するためラグは仲間を集めて旅に出た。

『個性的な仲間達』、『街で会う色々なポケモン』、『様々な思いの中で続いていくストーリー』

そして伝説の力を秘めたオトボケな主人公

その全てが混ざり合い一つの物語を生み出す。

ちよっぴりシリアスでちよっぴりおバカでだけど心にグツとくる「
絆」の冒険物語！！

略称はラグ冒です

主題 第一章「絆（仲間）」 第二章「命（生死）」です

プロローグ（前書き）

どうも、初投稿です。初めての小説なので色々下手ですが暖かい目でみてやってください。
よろしくお願いします。

プロローグ

ここは水の街「ルマーテ」。ここには一人のラグラージとその仲間たちが住んでいる。そのラグラージの先祖はこの世界を救った英雄であり、みんなの憧れ。もちろんその先祖もラグラージだったのだが、今でもそのラグラージ以上に強いポケモンはいないと言われている。そんな偉大な先祖を持ったラグラージだがバトルは弱かった。理由は・・・そう、ただ自分の力に目覚めていないだけ。この物語はそんなラグが仲間と共に冒険をし、強くなる物語・・・。

プロローグ（後書き）

ラグ「こんにちは」

おいおい、君はプロローグだけしか出てないのにこっちに顔出してどうすんの？

ラグ「だって早くでたかくて・・・しかもこの小説いつ止まるか分からないし・・・」

もうスランプのこと考えてるの？

ラグ「もちろん。この小説は作者さんがメールで書いてたやつを題材にしてるじゃん？しかもそれが4話ぐらいまでしか出てきてなかったからそれ以降、もしくはその途中で展開に困って止まると思うたから・・・」

まあそりゃそうだけど・・・でも頑張るよ。確か困るだろうけど・・・そこは頑張る！！

ラグ「近い内絶対止まるなこの小説・・・。」

第一話 登場（前書き）

いよいよ第一話投稿です。よろしくお願ひします。

第一話 登場

ここはルマーテにあるバトルフィールド。今はラグとシャワーズがバトルをしている。

ラグ「いくよ、”みずのはどう”!!」

ラグがそう言いながら拳を地面にぶつけると水が出現しそこを中心として勢いよく広がっていく。なかなかの威力だ。しかし相手のシャワーズは避けもしなければ相殺もしない。そのまま直撃した。

ラグ「よしっ!!」

ラグは攻撃が直撃したので自分が有利になったと思いガッツポーズをする。しかし・・・

ラグ「・・・ってあれ?なんで?アクアが立ってる!?!」

驚きながらラグがそういうとアクアと呼ばれたシャワーズは呆れながら言った。

アクア「だから私は水タイプだから水タイプの技を当ててもあまり

効果はないの。しかも特性の“ちよすい”で逆に回復したし……。

ラグ「あ、そっか。そうだったそうだった。」

ラグは恥ずかしそうに顔を赤らめながら言う。一方アクアの方はムスツとしていた。このラグのおバカさ故だろう

アクア「もう……ラグちゃんったら……」

???「まあまあそれぐらいにしとけよ、アクア」

アクア「あ、お兄ちゃん」

そんな二人の様子に仲裁に入ろうとしたのか1人のサンダースが割り込んだ

サンダース「そんな目くじらたてることじゃないだろ？」

アクア「だって……」

サンダース「なあに、大丈夫。ラグはいざとなったら強くなるやつだからな」

アクア「それはそうかもしれないけど……」

サンダース「とにかく今日の練習は終わりだ。帰るぞ」

ラグ&アクア「はあ〜い。」

サンダースの言葉に二人は素直に返事をし帰り始める。二人にとってサンダースはお兄さんのようなものなだろう。実際にサンダースはアクアの兄である

帰り道

アクア「そう言えば、この前ギャロップが暴れたの知ってる?」

ラグ「ギャロップってあの隣街で配達の仕事をやってる?」

突然の質問に反応し、ラグが答えた。どうやら知っていることらしい

アクア「そう、そのギャロップ」

サンダース「あいつか・・・あいつはな・・・俺の友達だ」

ラグ「えっ!?!」

アクア「友達?」

ラグとアクアは意外な事実には驚く。しかしそんな二人の言葉に続き、サンダースは話しを続けた。

サンダース「ああ、結構前からの友達だ。あいつは暴れるようなやつじゃないんだけどな
・・・」

ラグ「それならなんで？」

ラグの言葉にサンダースは少し曇った表情で答える。そんな彼の問いにサンダースははっきりと答えた

サンダース「これは俺独自の意見だが・・・「ダーク化」したではないかと考えている」

アクア「ダーク化？」

サンダース「そうだ」

ラグ「ダーク化ってあれだよな。心を闇に染めて自分の力を極限以上に高める・・・あれ？」

サンダース「そうだ」

サンダースは少し悲しそうに言った。やはり自分の友人がそういうものに手を出しているのではないか、そう考えるとなんとなく辛いのだろう

アクア「でもあれは専用の機械がないと出来ないんじゃないか？」

ラグ「しかもその機械は今全て壊されたんじゃないか？」

サンダース「壊されてもまた作ればいだろうか？不可能ではないんだ」

ラグ「でもなんでギャロップが・・・」

「ダーク化したのかな」とラグが言おうとした時、空から強大な炎、
“だいもんじ”がとんできた。

ラグ「よー!!」

アクア「わっ!!」

サンダース「はっ!!」

3人ともなんとか直前に気付き、回避に成功する。ポケモンが独自に持っている身体能力のおかげだろう。”だいもんじ”のあたった地面は「シュー」と音を立てており、次第に炎は消えていった。

アクア「な、なに、いきなり」

ラグ「危ないなあ」

サンダース「この威力・・・まさか!？」

サンダースかそついいながら上を見上げた瞬間、空からあるポケモンが現れた。

このポケモンは一体誰なのか？

そしてギャロップのダーク化の真相は!？

第一話 登場（後書き）

アクア「こんにちはは、シャワーズのアクアです。」

サンダース「俺はサンダースの・・・名前がない!？」

なんか思いつかなかったなのでそのままいっちゃいました（笑）

サンダース「おいおい、まあいいけどさ」

アクア「いいんだ・・・。」

サンダース「ところで次回はだいたいもんじ野郎とバトルか？」

うん。

アクア「よし、頑張ろー。」

いやごめんアクア、戦うのはサンダースだけなんだ。

アクア「えゝそんなあ。」

まあまあその内アクアの戦闘場面を書くから。

アクア「・・・わかった。」

サンダース「ところでラグは？」

ラグ？ああ、昨日の夜「魔法少女リリカルなのは」のゲームやって

てまだ寝てる。

サンダース「なるほど」

アクア「ラグちゃんも作者さんと同じでゲームが大好きなのね」

まあね。

サンダース「しかもやるゲームが作者の流行りとほぼ一緒だ。」

おもしろいものはみんなするんだよ。その内この小説でもスターライトブレイカーみたいなオリジナル技を出したいね。

サンダース「おいおい誰が使っただ、あんな強力技。」

ラグ。

アクア「やっぱり……。」

サンダース「ラグばかりだな。」

……ちゃんと君たちのオリジナル技もつくるから。

アクア「ほんと!？」

サンダース「なら問題なしだな。」

ほんとは題材では考えてなかったんだけど……なんか考えよ。

アクア「なんか言った?」

いや何も。

第二話 VSギャロップ（前書き）

サンダース「ついに俺とギャロップの対決だ。」

いや〜結構長くなっちゃた。

アクア「しかも私達の出番なし。」

まあ今回はサンダースのバトルが主体なんで・・・

ラグ「主役は僕なの？」

うっ・・・。

第二話 VSギャロップ

バトルの練習から帰宅する際に突如攻撃を仕掛けられたラグ達。しかしその攻撃をかわすことに成功、なんとかダメージは免れた。そして空からは1匹のポケモンが舞いおりた

ラグ「ひゃ〜危ないなあ。」

アクア「誰よ、こんなこといきなりしてきて・・・」

サンダース「・・・ギャロップ」

ラグ&アクア「えっ!?!」

ラグとアクアは騒いでいたがサンダースは静かに、ただど確かに「ギャロップ」と言った。

ラグ「ギャロップ!?!」

アクア「まさか、彼は隣街にいるんじゃない・・・。」

サンダース「だが間違ない。あの”だいもんじ”はギャロップのもんだ」

サンダースはまたかなしそうに言う。

アクア「でも……どこにもいないよ」

ラグ「いや……いる！！アクア、左に移動して！！」

アクア「え、うん。」

アクアは急いで移動した。するとさっきまでアクアのいた場所になにかが落ちてきた。煙に包まれて何がいるかはわからない。

アクア「きゃあ」

ラグ「なにかくるよ」

サンダース「任せとけ、“でんげきは”」

サンダースがでんげきはというとサンダースから電気の波動が生まれ正体不明の煙の中へ突っ込んでいく。するとダメージをくらったからか煙の中から本体が現れた。

ラグ「……うそ」

アクア「あれって……。」

サンダース「ああ、オレの友達のギャロップだ。」

サンダースが唇をかみしめながら言った。そう、煙の中から現れたのはさっきまで話してたギャロップだった。

サンダース「ラゲ、アクア、とりあえずおまえらは逃げる。お前らの実力で勝てる相手じゃない」

アクア「でもお兄ちゃんが……。」

ラゲ「そうだよ、そんなことしたらサンダースさんが……。」

二人の不安そうな顔を見るとサンダースは笑って言った。

サンダース「なぐに俺は負けない。俺の強さはおまえらも知ってるだろ。」

ラゲ「そりゃ知ってるけど……。」

アクア「大丈夫?」

サンダース「大丈夫だ!!だから早く逃げろ。」

アクア「うん、わかった。」

ラグ「気をつけてね、サンダースさん。」

ラグ達はそう言ってその場を離れそれを確認すると「フッ」とほほ笑む。しかしギャロップを見ると一変、さっきの優しい顔が変わり、ギャロップの方を睨んだ。

サンダース「おいギャロップ、お前は俺たちに何の用だ」

ギャロップ「お前たちの排除を命じられた、それだけだ」

サンダース「排除だと!？」

サンダースの険しかった表情が余計に険しくなった。突然友人から「排除しに来た」と言われれば納得の反応だ。

サンダース「いったい誰に命じられた？」

ギャロップ「そんなことを言うわけないだろう。なによりお前はここで終わるんだ。聞いても無駄だ」

サンダース「おいおい、まさか俺の実力を知らないわけじゃないよな？」

サンダースが少し笑いながら言う。その実力ゆえのほほ笑みだ。サンダースはここ「ルマーテ」の学生の中でも上位に入る強さを持

ったポケモン。なのでバトルで負けた経験は少なく、キノコ頭の「ある人物」、データの宝庫と言われる「ある人物」と共に強者として名をはせていたのだ。

ギャロップ「ああ、もちろんだ。昔からの友・・・なのだからな。だが俺は今とても強くなっている。力を手に入れたのだ」

サンダース「ダーク化・・・か？」

少し笑っていたサンダースの顔が一変し険しくなった。そんなサンダースの回答にギャロップは感心のまなざしで見ると

ギャロップ「ほう、ちゃんと知っているじゃないか。そうだ、俺はダーク化した。だから強くなっている」

サンダース「（そうか・・・ホントにダーク化を・・・）だが俺はそんなダーク化の力でパワーアップしたお前には負けない。自分の体を見てみな」

ギャロップ「・・・なに？」

ギャロップが自分の体をみると少し痺れており「ビリビリ」と小さな音がしていた。

ギャロップ「なるほど麻痺か」

サンダース「そうだ、今の会話の最中に”でんじは”をかけさせてもらった。これで少しは動きにくいだろう?」

ギャロップ「なるほど、これでお前は有利になったつもりだろうが、今の俺にそんな小細工は通用しない」

そう言うとギャロップは自分の体から闇を放出し体を覆う。黒い煙の容易なものがギャラップを包む込んだ

サンダース「一体なにを・・・」

初めて見る後景、それに驚きサンダースがつぶやくとギャロップは闇の中から出てきた。黒い、闇を纏って

ギャロップ「残念だったな。ダーク化は異常状態を治す」

サンダース「つまりお前に異常状態技は効かない・・・と言っことか」

ギャロップ「そう言うことだ」

ギャロップは得意げに鼻で笑いながら言った。

サンダース「へえ、結構得意げじゃないか」

サンダースも気で負けないように余裕な表情をした。しかし実際はそこまで余裕は無かった。

サンダース「まずいな、俺の戦術は麻痺にしたところから始まる。なのに麻痺が効かないってことは・・・麻痺しないやつらの対策戦術を使うしかないか。しかしあれはうまくいくか・・・」

サンダースはこの場で勝つための作戦を考える。彼の基本戦術は通用しない、ではどうすべきか、どうすれば勝てるか、そう考えたのだ

ギャロップ「なんだ、それで終わりか？あのサンダースが情けないな。」

ギャロップは馬鹿にしたように言う。恐らくサンダースの冷静さを無くさせようと思ったのだろう。頭を使って戦う戦術型のサンダースから冷静さがなくなれば確かに勝利をもぎ取るのは簡単になる。しかし

サンダース「なあ・・・俺とお前はいつから会って無かったっけ？」

サンダースは怒るところか寂しそうな顔をしながら言った。どうや

ら作戦の為ではなく只単に聞きたかったようだ。

ギャロップ「なんだ、ピンチで頭がおかしくなったか？まあいい教えてやるよ。約1ヶ月だ」

ギャロップはまた馬鹿にしたように言う。この追い詰められた状況でどうしようもないサンダース、そんな彼を相手にし勝利を確信しているからこそ余裕が生まれバカにしたように言っているのだ、しかしサンダースはそんなことを気にせず話を続けた

サンダース「そうだよな、まだ1ヶ月しか経ってないよな？なのにいつからお前は変わった？あの優しいギャロップはどうした？」

ギャロップ「俺はその1ヶ月の間に偉大な闇の存在を知った。俺はあまりに強力過ぎるその力に引かれある所へ行った。そしてそこでボスに会った。そして俺はボスに協力したんだ。世界を闇で染めるため」

サンダース「なんで・・・なんでそんなことしたんだよギャロップ
！！」

ギャロップ「・・・っう！？」

サンダースは叫びながら言う。するとギャロップは急に倒れた。

サンダース「ギャロップ!？」

サンダースはびっくりして走って近づく。すると……

ギャロップ「く、来るなサンダース。」

サンダース「な、ギャロップ!?意識が戻ったのか？」

ギャロップ「いや、今は闇を……ダーク化を抑えている。頼む俺を倒してくれ。俺は闇の力に引かれたんじゃない。急に闇が俺を襲ってきていまのようになった。」

サンダース「ということは……。」

ギャロップ「ああ、俺は自分の意志でダーク化した訳じゃない。だから……俺を倒してくれる……よな？」

サンダース「……ああ、お前がピンチならすぐ助けてやる」

ギャロップ「ありがとう、頼む……。」

そう言うとギャロップの口調が変わった。それと同時に危機感を感じサンダースもギャロップから離れる

ギャロップ「はぐ、ったく、奴め余計なことを。さてサンダース、さっさと終わらせよう」

サンダース「ああ・・・そうだな、終わらせよう」

そう言うとサンダースは足（4本）に力を入れてあまり動かないようにした。

ギャロップ「おいおい、それはなんのマネだサンダース。」

サンダース「いいのか、前ばかり見て。後ろを見て見るよ」

ギャロップ「むっ!?!」

サンダースに言われて後ろを向くとそこにはサンダースが3体いた。

ギャロップ「なに!?!」

サンダース「会話の途中で“身代わり”を使って増やしたのさ」

ギャロップ「なるほど。しかしこれくらいなら・・・“ふんえん”」

そう言うとギャロップは自身の体から火の塊を飛ばして攻撃する。
“ふんえん”の当たったサンダースの身代わりは燃えて消えた

ギャロップ「ふんっ!これぐらいの戦術が効くとも・・・。」

っとサンダースの方を振り向くギャロップの表情が変わる。まるで何か珍しいものを見つけたようだった

ギャロップ「な、なんだそれは……？」

そう、ギャロップがサンダースの方を振り向くとサンダースの前に黒いエネルギーの塊が電気を帯びていた。

サンダース「これか？これは……こうするんだ……！」

サンダースはエネルギーに意識を集中させると……

サンダース「くらすえ、サンダーランチャー」。

エネルギーの塊……サンダーランチャー”がギャロップの方に素早く飛んでいく。

ギャロップ「そんなもの……だいもんじ……！」

ギャロップは”だいもんじ”で”サンダーランチャー”を消し飛ば

そうとした。しかし”だいもんじ”は”サンダーランチャー”とぶつかると吹き飛んだ。

ギャロップ「なにっ!？」

サンダース「無駄だ。“サンダーランチャー”は電気タイプのトックラスに入る技だ。“だいもんじ”じゃ相殺すら出来ない」

ギャロップ「なんだと!？だが残念だったな、避ければ・・・なに!？」

ギャロップが驚いた理由、それは・・・

サンダース「電気の拘束・・・“エレキバインド”。それは麻痺じゃない。電気の拘束だ。ダーク化ではどうしようもないだろう?」

ギャロップ「く、くそオー!!」

ギャロップの悔しがる声が聞こえると同時にサンダーランチャーはギャロップに当たり、周囲に電気独特のしびれを漏らすとギャロップの体全体に電気が流れた。そして爆発する。

数秒後、ギャロップはその場に倒れていた。

サンダース「なんとか勝てたか・・・麻痺が効かないんじゃ”サンダーランチャー”打ち込むしかないからな、うまく行って良かった。

・・・くっ!?!」

サンダースはその場に倒れる。

サンダース「・・・はあはあ、いくらなんでも疲れた・・・。おっ
!?!」

サンダースの嬉しそうな視線の先には・・・

ラグ「サンダースさあゝん。大丈夫?」

サンダース「ああ、なんとかな」

アクア「って全然大丈夫じゃないじゃない!」

サンダース「これは“サンダーランチャー”をつかったあとの反動だ。なんてことはないよ」

ラグ「なに“サンダーランチャー”って?」

サンダース「まあ後から話す、とりあえず病院に運んでもらってもいいか?」

そう言うとサンダースは病院へ運ばれた。

第二話 VSギヤロップ（後書き）

サンダース「か、勝った〜。」

うん、勝ったね。まあギリギリって感じだったけど。

サンダース「まあな。」

アクア「でも勝ったから良かった〜」

ラグ「でも今回はサンダースさんの新ワザがでたね。」

サンダーランチャーとエレキバインドでしょ？

アクア「そうそれ。まあサンダーランチャーは題材にあっただけどオリジナル技だけどエレキバインドは原作の方にも題材の方にもなかったよね？」

うん、書いてるときに考えたよ。

サンダース「なんと言いきまぐれ……。」

ていうかこの時点ではサンダーランチャーすら登場してなかったからね。

アクア「ギヤロップももつと簡単に倒してたし……。」

ラグ「題材とは大きく離れたね、この小説。」

まあ色々考えるから楽しいけどね。

アクア「さて次回は……。」

ラグ「題材によれば呼ばれるね、僕たち。」

アクア「誰に？」

ラグ「街の町長さんに。」

アクア「えっ！町長さん!？」

サンダース「つまりかめさんだな。」

アクア「えっ、カメさんって……。」

ラグ「まあつまりかめみたいなポケモンってこと。」

アクア「なるほど。」

サンダース「まあそう言うことで次回もよろしく。」

ラグ&アクア「よろしく〜。」

完全に忘れられてる……。

第三話 かめさん登場、そして「デンライジ」？（前書き）

今回はかめさん登場だよ。

サンダース「つまり町長な。」

ラグ「そう言えば何で呼ばれたんだろう?」

アクア「まあそれなりの理由があるんじゃない?」

第三話 かめさん登場、そして「デンライジ」？

サンダースとギャロップの戦いから3日経ったある日のこと、ラグたちに一通の手紙が届いた。

トントン、ガチャ

ラグ「サンダースさ〜ん、アクア〜。お見舞い来たよ。」

ラグはドアを開けた。ここは病院、ラグはお見舞いに来たようだ。ベットで横になったサンダースがラグに気付き声をかける

サンダース「お、ラグか。わざわざ病院まで今日も見舞いにきてくれるとは・・・うれしいな」

アクア「まあ遊びに来たって感じだけどね。でもラグちゃんがいたら空気が和むよね」

サンダース「ああ」

サンダースもアクアもラグの登場に自然と笑顔になる。彼がいると
なんとなく落ち着くようだ

ラグ「ありがと。んでサンダースさん、具合どう？」

サンダース「安心しろラグ、今日が退院の日だ」

ラグ「ええ〜！？ホントに？」

サンダース「ああ、ホントだ。なあアクア？」

アクア「うん、元々単なる電気回復のために来て、少し様子を見る
ために入院してただけだからね。んでそれも今日でお終りってこと」

ラグ「そ、そっかあ」

ラグは少し悲しそうな顔をした。そんな彼の顔を見てサンダースは
聞いた

サンダース「なんだラグ。そんな悲しい顔して？」

突然のラグの変化にサンダースは心配する。するとラグは顔を上げ
て答えた。

ラグ「だってサンダースさんのお見舞いに行ったら毎回グミが貰え

るよね？でも退院したらお見舞いが出来なくなってグミも貰えなくなるでしょ？」

そう、この病院ではお見舞いに来た人にグミを配る、というシステムがあり、ラグの好物もグミだった。もちろんサンダースのため、ということもあるがグミもここにくる理由のひとつだったのだ

サンダース「なんだそんなことが・・・」

ラグ「そんなことって・・・」

サンダース「あんな、ラグよ。世の中にはな、グミと同じくらいまいもんがた〜くさんある。なのにグミばかりを見ていてはそれに気づくことができない」

ラグ「そうなの？」

サンダース「ああ、だからラグ、もっと世界を・・・まいもんをみるんだ」

ラグ「はい」

サンダース「見るラグ、あの夕日を。あの夕日の先にうまいもんがきつとある」

ラグ「はい、コーチ！！！！！」

サンダース「ラグよ、いつかあの夕日の向こうに行ってうまいもん

を食べよう」

ラグ「はい!!」

サンダース「ではまず病院から脱出だ。行くぞ」

ラグ「はい!!お供します!!」

そう言いながらラグたちは荷物を持って病院をでた。そう、ただ一人、アクアを残して

アクア「・・・はあく、あの2人のおバカっぷりは物凄いなあ。しかもまだ朝の10時だし・・・。あ、お世話になりました」

呆れながら病院から出るアクアであった。

アクアが病院の外にでるとラグとサンダースがなにかを話していた。

サンダース「お、来たな、アクア。」

アクア「うん、んで二人で今なにを話していたの？また食べ物の話？」

サンダース「アクア、俺たちはそんな頻繁に食べ物の話はしないぞ、なあラグ？」

ラグ「うん、ごく稀だよな」

サンダース、ラグの言葉にまたまた呆れるアクア。この二人のおバカっぷりはそれほどまでに強力なのだ。そんな中、ラグがあるものを見せながら言った。

ラグ「今ね、かめさんに貰った手紙を見ているところだったんだよ」

アクア「えっ、手紙？かめさん？」

アクアの頭が？（クエスチョン）マークだらけになる。いきなり言われても分からないのも当然だろう。

サンダース「ほら、かめさんって言うのはルマーテの町長さんで手紙は……。」

ラグ「僕の家に来たから、持ってきた手紙のことだよ」

アクア「そっかぁ……で何て書いてあるの？」

アクアはまた首を傾げて言った。

サンダース「まあ簡単に言えば呼び出しだ」

アクア「呼び出し？」

ラグ「多分この前のギャロップのことだと思っただけど」

アクア「なるほど、それなら早く行こうよ」

サンダース「ああ」

サンダースがそういうと一行はかめさんの家に向かって歩き始めた。

かめさんこと町長の家

サンダース「かめさん、入るぞー。」

ラゲ「こゝんにちわ〜。」

アクア「ちよつとちよつと、なんか「入ります」とか言わなくてもいいの?」

アクアが礼儀について注意する。しかし

かめさん「いいんじゃないんじゃない、そんな堅苦しいあいさつはいらんよ、アクア」

やさしそうな声でアクアに話したのは一人のカメックスだった

アクア「えっ・・・あの・・・」

ラゲ「あ、かめさん」

アクア「えっ、かめさん!? かめさんってカメックスのことだったんだ」

サンダース「ああ、みんなには「かめさん」って呼ばれてるけどな」

かめさん「そう、わしこそカメックスのかめさんじゃ、フオフオフオフオ」

アクア「げんきなおじいちゃんカメックスなんだね」

そう、このカメックスなかなかの年でこのルマーテの街長をやって20年を超える。とまあ豆知識は置いといてサンダースがさっそく話に切り替えた

サンダース「まあな、ところでかめさん話はなんだ？」

かめさん「あ、それが。内容はお前さんたちに旅に出てもらいたい
のじゃ」

サンダース「ふうん、そっかそっか、旅ねえ……って、うん？
・旅！？」

ラグ&アクア「え〜！？」

それから15分後

サンダース「んで旅にでる理由はなんなんだ？」

かめさん「ギャロップの様なダーク化……ポケモンがダーク化している原因を調べて欲しいんじゃ」

アクア「ダーク化の原因？」

かめさん「ああそうじゃ」

ラグ「なんか目的が大きいね」

「ダーク化」、それは今この世界で起きている問題であり、各地域のポケモンたちがその調査にあたっている。そんな大きな問題の解決をするために旅に出てくれと頼まれているのだ、大きくも感じるだろう。

かめさん「まあ各地域で調査員を決めておつてな、この街の調査員も決まってはいるんじやがそれとは別に「旅」をして調査してほしいんじやよ。まあそれなりにつらいとは思うが・・・」

サンダース「ああ、でも俺は行くぜ。世界を旅出きるんだろ、楽しそうだ」

ラグ「うん、色々なポケモンと友達になれてみんなを救えるかも知れないなんて・・・ぜーったい行く!」

アクア「ラグちゃんが行くなら私も!」

かめさん「なら決定じゃな」

かめさんはうれしそうに表情で答える。しかしラグが手を上げた。

ラグ「かめさん、いくつか質問があるんだけど・・・いい?」

かめさん「なんじゃ？」

ラグの言葉にかめさんは不思議そうな表情をした。

ラグ「まずなんで僕らなのか、あと旅つてことはチームが必要だよ
ね？確か7人以上。その人は決まってるの？」

かめさん「フオフオフオ、さすがラグ、旅に関してはなかなか鋭い
のオ。まずお前さん達を選んだ理由はラグ、お前がいるからじゃ」

ラグ「え、僕？」

まさか理由の1つに自分が関係しているとは思わなかったラグは街
長の言葉に驚いた。

かめさん「そうじゃ、お前さんはデンラージになれるからじゃ」

ラグ「デンラージ？」

サンダース「なんだ、デンラージって？」

かめさん「それはのオ……。」

かめさんが口を開いた。

果たしてデンラージとはなんなのか・・・。

そしてこれからラグたちを待つ運命とは!？

第三話 かめさん登場、そして「デンライジ」？（後書き）

ラグ「デンライジ・・・？」

サンダース「ついに出てきたな。」

アクア「なんかラグライジに似てる気が・・・。」

あー言っちゃダメ。

アクア「でも読んでる人分かんと思うよ。」

んっ・・・。

第四話 デンラージ(前書き)

ついにデンラージについて少しわかるよ。

サンダース「少しかよー!」

だって・・・なんかねえ。

アクア「あゝデンラージかあ、やっぱりラグちゃんに似て・・・」
ないないないない。

ラグ「作者さんすごい焦りようだ・・・。」

第四話 デンライジ

かめさん「ではデンライジについて教えよう。」

ラグ「うん。」

かめさんの言葉にラグは大きくなずいた。サンダース、アクアもはじめて効くことに興味があるようだ。

三人はきちんと座り、真剣なまなざしだった。

かめさん「デンライジとはお前さんの先祖もなることの出来たラグライジの進化系じゃ。」

ラグ「え？」

アクア「でもラグちゃんはラグライジで最終進化系なんじゃないの？」

アクアのもつともな意見にかめさん自身も納得の表情をした。ラグ、ラグライジはミズゴロウというポケモンからヌマクロー、そして現在のラグライジへと進化していく中で最上級の進化形態なのだ。それ以上上はないのだ。しかし

かめさん「まあ進化系というか・・・自分の意志で自分の能力を飛

躍的に上げることの出来るようになるんじゃない。その時に姿も変わるから進化系みたいに言われとる」

ラグ「なるほど。」

ラグは納得したようだが、サンダースのにはまだ疑問があるらしくそんな顔をしていた。

サンダース「でもそれなら“ビルドアップ”とかを使うのと同じじゃ……」

かめさん「それがのオ、上がりかたが比べものにならないんじゃないよ」

アクア「比べものにならないというとどれくらい？」

かめさん「うーん、ドビヤーンとドドバババーンくらい。」

アクア「わかりにくいなあ」

かめさんのわけの分からない説明にアクアは苦笑いした。お年寄りなのでそこは仕方ない。

かめさん「ならば試してみるかのオ？」

ラグ「えっ、なれるの？」

まさかなれるとは思ってなかったラグはいきなりのかめさんの言葉に少し喜びも混じった声で驚いた。

かめさん「まあのオ。しかしミュウにあって方法を効かなくては・・・」

サンダース「ミュウってあの幻のか？」

この世界ではミュウは有名でサンダースは驚く。ミュウ、それはすべてのポケモンのDNAを持つとされる幻のポケモンでこの世界の授業でも名が出るほどの有名度だった。しかもすべてのポケモンのDNAを持っているという点から強さもかなりのものといわれていた。

かめさん「うむ、彼ならおそらく知っている」

アクア「でも幻のポケモンなら会うのはそう簡単には無理なんじゃ・・・」

アクアが少し残念そうに言う。するとかめさんは・・・

かめさん「いや、普通にラルサームに住んどる。」

ラグ「ええ、幻のポケモンなのに!？」

かめさん「うむ、何でもひとり寂しいとかで・・・確か今日は町のちびっ子たちにバトルを教えるはずじゃ。」

ラグ「ホント!？」

ラグは驚くがアクアとサンダースは「そんな理由でか・・・」というような顔をしていた。

かめさん「ああ、嘘は言わん。チームをつくって行ってくるといい。」

サンダース「やっぱりチームは7人以上か？」

かめさん「そうじゃ、頑張つてさがしてくるといい。」

この会話から5分後・・・

サンダース「さて、それじゃあまず誰を誘つ？」

アクア「うーん、そうだなあ・・・」

迷うアクアだったがラグの頭にはすでに仲間になりたい人が決まって

いたらしく

ラグ「あのさ、キノガッサはダメかな？」

といた。

サンダース「キノガッサか？」

ラグ「うん」

アクア「確かに強いしラグちゃんや私達とも仲いいもんね」

サンダース「よし、それじゃあキノガッサのところへいくぞ」

ラグ&アクア「おおー！！」

こうして三人はキノガッサの元へと向かうことになった。

第四話 デンライジ（後書き）

サンダース「結局あんまり分かってないじゃん。」

いやいやとても強くなるって分かったでしょ。

アクア「まあまだ謎が多いね。ところで次は……」

うん、キノガツサのそこだよ。

ラグ「だけどキノガツサは題材では……」

うん、ナンパキャラだね……。

サンダース「そのまんま行くのか？」

分かんない。ただ彼女はもちろん登場するよ。

第五話 キノガツサとキノ（前書き）

さあ今回は新しい仲間の登場です。

ラグ「キノガツサとキノさんだね。」

そう、キノは敬語をつかうおしとやかな可愛いキノガツサなんだけ
ど……（設定）

サンダース「ギャップをつけてみたんだろ？」

うん。

アクア「ギャップがあると面白い場合はあるよね。」

それならアクアになんかギャップを……

アクア「それはいらなあい。」

第五話 キノガツサとキノ

かめさんから聞いた謎の存在「デンライジ」、それについて知る為にラグ達はその方法を知っているという幻のポケモン「ミュウ」に会うためにミュウがいるというラルサームに向かうことにした。しかしその前に旅を始めるための仲間を探していた。

ラグ「ここだね、キノガツサの家」

アクア「まあ家って言うよりは大きなバトル場って言った方が正しいかもしれないけど」

サンダース「んじゃ早速行こうぜ。」

キノガツサの家を見てこんなコメントをして入って行ったラグたち。ちなみにキノガツサの家は見た目が四角いドームの様な感じで大きさはとても大きく東京ドームぐらい。なかは真ん中にバトルフィールドがいくつもあり、入り口のすぐ左側には管理室のような部屋がある。

ラグ「おい、キノガツサ、いるかい？」

大きなドームなので声をのばして呼ぶラグ。すると・・・シュツ！と音がした。

キノガツサ「……もし俺がお前の敵だったらお前はやられてたぜ、ラグ。」

いきなり高速で来て、ラグの顎に“スカイアッパー”をする直前で現れたキノガツサ。どうやら自分の実力をラグに見せつけたらしい。しかし……

ラグ「あ、キノガツサだ」

ラグは動じていなかった

キノガツサ「おいおい、自分で呼んどいてそりゃないだろ」

少し呆れながらキノガツサは言った。実際先ほど呼ばれて、怯むような登場したのに「あ、キノガツサだ」なんて言われたら呆れるだろう

キノガツサ「まあいいさ、それよりも……」

そういつてキノガツサの視線はラグからアクアに移った。そしてキノガツサはアクアの方へ高速で行くと

アクア「ああ、アクア相変わらず可愛い。今度一緒にお茶でも……
ぐふっ!？」

なんとナンパをし始めたキノガッサ。しかし彼が喋られたのはここ
までだった。理由は簡単。吹っ飛ばされたからである

キノガッサ「な、なんだよキノ」

殴られたほっぺをおさえながら言うキノガッサ。視線の先には……

キノ「もう、キノガッサが嫌なことばかりするからでしょ」

もう一匹メスのキノガッサがいた

サンダース「キノがいるのにお前も相変わらずだなあ。」

キノガッサ「う、うるさい」

サンダースに少し笑われながら言われて焦るキノガッサ。するとキノ
はアクアに

キノ「ごめんなさいね、アクアさん。キノガッサがご迷惑を・・・」

アクア「大丈夫です。あんまり気にしてませんから」

ニコニコの笑顔で答えるアクア。本当に気にしていないのだろう

サンダース「アクアもなかなかヒドいこと言うな」

アクア「え？なんで？」

サンダース「・・・いや、なんでもないさ」

キノ「まあとりあえず上がって下さい」

キノにそう言われてラグ達は奥の部屋に行った

キノ「・・・それでご用件とは何でしょう？」

キノガッサ「手短に話せ・・・ぐふっ！」

「手短に話せよ」と言うはずがキノに殴られ阻止されたキノガッサ。しかし今度は飛ばない程度のようにだ。そんな後景に動じず、ラグは口を開いた

ラグ「実はさ、キノガツサに僕らと一緒に旅にでてほしいんだ」

キノガツサ「旅？そりゃまたなんでだ？」

ラグ「それが・・・」

かめさんに言われたことを伝えたラグ。その話を聞いてキノガツサは頷いていた。そして

ラグ「ってことなんだけど・・・どうかな？」

キノガツサ「なるほど、なんか楽しそうだな。なあキノ？」

キノ「うん、楽しそうだし・・・良いと思うよ」

どうやらキノも話を聞いて事件の絡みはあるものの旅自体は楽しそうと感じてくれたらしい。更に

キノ「それで、あの・・・ラグさん、その旅に私も行っちゃダメでしようか？」

ラグ「え、来てもらえるの？」

キノ「はい、なんか楽しそうですし、行ってみたいです」

ラグ「そっか、もちろんオツケーだよ！それなら新しい仲間が2人だね」

そう言っつて握手をしたラグとキノガツサたち。これで仲間は5人。あと2人以上だ。次回は誰が仲間なるのか？

ちなみに・・・

キノ「さてそれじゃあ早く仲間さんを探しましょう。」

キノガツサ「あ、まっつてくれキノ。今日は女の子たちとボウリングに・・・あっ」

弾みで口が滑ってしまったキノガツサ。そんな彼にキノは

キノ「へ〜女の子とボウリング。それは楽しそうね」

キノガツサ「いやキノさん、顔と言葉は笑っててもオーラが・・・オーラがやばいって」

キノ「も〜・・・キノガツサ〜！！」

キノガツサ「ひい〜、ちよ、ラグ助けて」

ラグ「いやいや浮気はだめだよね。」

キノガッサ「いやまだ結婚してないからな。アクア」

アクア「今日もいい天気、なんか良いこと起こりそう。」

キノガッサ「今日は曇りだからな、アクア！無視してるのがバレバレだぜ！！サンダース」

サンダース「……………」

キノガッサ「寝てるしー！！」

そして助けてもらえなかったキノガッサがどうなったかは言つまでもなかった。

第五話 キノガツサとキノ（後書き）

キノガツサ「よう、みんな。強くてカッコいいみんなの憧れの……
くふっ」

キノ「せっかく登場させてもらったのにすいません。」

いやいやいいよ、キノガツサはそういうキャラだし。

キノガツサ「ふう、にしても作者、俺を題材どうりにしたな。しかもストーリーの展開も一緒。」

まあね。君のキャラはもしかしたら人気が……でるかもしれないじゃないか。

キノガツサ「まあ人気が出たらいいけどよ。」

そして

キノガツサのいないところ……

キノ「ところでキノガツサにもオリジナル技ってあるんですか？」

うーん、今は考えてないけどどうして？

キノ「え、いやあのそのなんというか……」

なるほど、自分の好きな人のそういうかっこいい姿をみたいというわけか。君も可愛い女の子だね。」

キノ「か、からかわないでくださいよ。」

大丈夫それならなんか考えるから。ていうかみんなにつくるべきかな、オリジナル技。

キノ「かもしれませんね。」

宣伝

今度ラグやアクア、サンダースなど「ラグラーズの冒険」のキャラの説明をする小説や物語の番外編っぽいものを作ろうと思います。なのでもし良ければそっちの方も見て下さい。

ラグ「あとなにか僕らに関する小説（「ラグの過去」のように）を感想のところに書いていただければその小説を書く……かもしれません。」

まあ君らの過去はまたいずれ書くけど。

ということでした。

第六話 ポリゴンZとあのポケモン（前書き）

さあ今回はポリゴンZが登場だ。

ラゲ「仲間は題材どうりなんだね。」

まあね。でも誰か途中でいれたいなあ。

ラゲ「まあ頑張って」

第六話 ポリゴンZとあのポケモン

キノガッサとキノを仲間にし、5人になったラグのチーム。残りの2人以上必要なのだが……

ラグ「ねえ次は誰の所に行く？」

サンダース「そうだなあ……というか早くしないと明日になっちまうぜ。」

そう、今は午後2時。ミュウのいる街まではルマーテからは1時間ぐらいかかる。

アクア「うーん……あ、いるじゃない、仲間にできそうなポケモン。」

ラグ「え、誰々？」

アクア「ポリちゃんよ、ポリちゃん。」

ラグ「あゝなるほど。」

サンダース「たしかにいるな。」

キノガッサ「しかしアイツは研究は大丈夫か？」

キノ「まあとりあえず行ってみましょう。」

そんな話をしてラグたちは目的地へ歩いた。

ちなみにポリちゃんとはポリゴンZのことで研究者、故に頭がいい。

それにラグたちの友達でもあるため仲間にしようと思ったのだ。

ポリゴンZの家

ラグ「ついたね、ポリZの家。」

アクア「でもこれって家っていうより研究所だよ。まあ研究家だから当然だけど。」

サンダース「・・・なんで俺たちの友達は家が普通じゃないやつが多いんだろっな?」

サンダースが疑問を持ちつつラグたちは家に入っていった。

ラグ「ごめんください。誰かいますか?」

ラグがたずねると・・・

ポリZ「おゝラグじゃないか。」

ラグ「久しぶり。」

笑顔で答えるラグ。

ポリZ「それにアクアにサンダースさん、キノガッサとキノさんまで・・・どうかしたんですか?」

不思議そうにポリゴンZが問う。

ラグ「じつはね・・・」

とラグが話だそうとすると

ポリン「あ、ごめん、とりあえずあがって。」

といわれ研究所に入った。

研究所の接客ゾーン

ポリン「んで話っていうのは？」

ラグ「うん、それが・・・」

ラグはキノガツサたちに行ったことをポリゴンZにも伝えた。

ポリン「なるほど・・・いいよ、僕も行く。今は研究もないし。それにほっとけないしね。」

ラグ「ありがとう、ポリン。」

サンダース「というかラグはポリゴンZのことポリZっていうんだな。」
キノガツサ「ああ、あれはポリゴンZの名前がポリで、進化してZがついたんでポリZになったわけだ。」
サンダース「なるほどな。」

みんなが話していると・・・

???「おいポリZどうかしたの?」

誰かがポリゴンZを呼びポリゴンZの方へ向かってきた。

ポリZ「ああハスボー。」

ラグ「あ、ハスボーだ。」

ハスボー「ラグ、今日はどうしたの?みんな集まって・・・。」

ラグ「ねえ僕ハスボーも仲間にしたんだけどいい?」

アクアたち「賛成!。」

嬉しそうに答える一同。

ハスボー「え、なにになに?」

なにがなんだか分からず焦るハスボー。

ラグ「あのさハスボー、・・・」

ハスボーに現状をしっかりとらうために説明をした。

ハスボー「それってラグやポリZたちも行くの？」

うん、と頷いて答える2人。

ハスボー「他のみんなも？」

これまた頷いて答えるみんな。

ハスボー「わかった、僕も行くよ。」

こうして新たな仲間が2人増えた。

第六話 ポリゴンZとあのポケモン（後書き）

ポリZ「こんにちは、ポリゴンZと」

ハスボー「ハスボーです。」

いよいよ仲間が集結してきたね。

サンダース「にしても作者、なんでポリゴンZなんだ？ハスボーはお前の好きなポケモンだからわかるけど。」

さあ、なんででしょう。

アクア「うーん、わかった。ポリゴンZもキノガッサと同じような立場になるんだ。」

ポリZ「え！？」

ブブー、はずれ。

アクア「えーちがうのか？」

ポリZ「よかった。」

ラグ「んじゃなんでだろう？」

キノ「あ、キノガッサは近距離戦担当でポリZさんは遠距離戦担当にするためじゃないですか？」

うーんおいしいかんじだけどはずれ。

ラグ「答えは？」

おいおいみんな、俺のバトルワーカーの常連メンバーは？

アクア「え〜っとキノガッサとポリゴンと・・・あ。」

ね、バトルワーカーの仲良しコンビなんだよ。

ラゲ「なるほど」

第七話 意外と強い？エテボースたち（前書き）

今回は砂漠です。

サンダース「砂漠ってつまりめっちゃくちゃ暑いよな」

いや夕方なんで暑くない設定にしたよ。

アクア「設定って怖いね……。」

なんでも出来るよ（笑）

ラグ「んじゃ僕を無敗の勇者に……。」

しません（即）ただでさい勇者の子孫なんだから我慢して。

ラグ「はぐい。」

第七話 意外と強い？エテボースたち

ポリゴンZとハスポーを仲間にし、ようやくミュウのいる街ラルサームに向かい始めたラグたち。今はその途中であった。

ラグ「ねえラルサームってまだなの？」

アクア「なんか遠回りとかしてないよね？」

先頭をあるくラグとアクアは疲れた〜といわんばかりの顔で聞いてきた。

サンダース「ただ、あと20分ほどかかる。」

アクア「え〜そんな〜。長いなあ〜。」

キノ「確かにこまりますよね、まさかラルサームへの道が砂漠だったなんて・・・」

そう今ラグたちの歩いている道とは砂漠であった。

ルマーテからラルサームの間は広大な砂漠で砂嵐こそないが、それでも先は砂ばかりなので歩く気がなくなってしまう。
幸い夕方なので暑くはないのだが・・・。

ポリゴン「疲れましたね〜。」

ハスボー「どこか休憩できそうな場所はないのかな？」
キノガツサ「・・・おいみんな、あれってなんだ？」

キノガツサに言われてもキノガツサの目線にあるものをみる一同。
そこには・・・

ラグ「砂漠のオアシス メロンパン？」

サンダース「いや、ちよつとまでラグ。砂漠のオアシスは分かるが
メロンパンって・・・。」

アクア「全然関係ないよね。確かに書いてあるけど。」

キノ「絶対怪しいですね・・・。」

呆れながら言う3人。しかし・・・

キノガツサ「いや、意外とああいうとこにうまいもんがあるかも知
れないぜ。」

ポリZ「美味しいものですかあ。」

ハスボー「疲れたし休憩にはちよつどいいかも・・・。」

他の3人は行きたがっていた。

そして残ったのは・・・

キノガツサ「なあラグ、あのオアシスに行こうぜ。」
サンダース「だめだろどう見たって怪しいじゃないか。なあラグ。」

ラグだった。

それから3分後・・・

ジャンケンの結果行くことになった。

ガラガラガラ

????「いらっしやい、ようこそメロンパンへ。」

入ると店員であるエイパムが挨拶をした。

エイパム「ご注文はなんにします?」

エイパムは注文表を渡しながら言った。

ラグ「え〜つと・・・」

ラグが言おうとした時だった。なにかの衝撃がラグたちを襲い外までとばされてしまった。

ラグ「え、ちょ、なに？」

サンダース「吹き飛ばされたんだよ。“とつておき”かなんかでな

」

驚くラグにサンダースが冷静に説明した。

ポリズ「にしてもなかなかの衝撃でしたね。」

ハスボー「だつて“とつておき”は威力高いから……。」

キノガツサ「大丈夫かキノ？」

キノ「うん大丈夫、ありがとう。」

みんなが色々言っていると……

エイパム「なんだ倒れてないのか。」

エテボース「そりやお前の“とつておき”の威力不足だ。」

エイパム「はい、すいませーん。」

こんな会話をしながらエイパムと共にボスであるエテボースも出てきた。

サンダース「そのエイパム、お前がやったのか？」

サンダースは睨みながら言った。

エイパム「まあね。ボスの命令だったんでやらせてもらいましたー」

エイパムは睨まれているにも関わらず余裕だった。

ラグ「ボスっていうのはそのエテボースのこと？」

エイパム「ピンポーン、正解。こちらのエテボースがボスだよ。」

またもや余裕な感じで言う。

キノガッサ「あゝもゝお前その言い方やめろ、なんかイライラしてくる！」

キノガッサは頭をかきながら言った。

エイパム「いやだよゝん、これが僕のしゃべり方だ・・・もん！」

エイパムはいい終わるとほぼ同時に“きあいパンチ”をしてきた。

あたりは砂煙でいっぱいになった。

エテボース「おいもう少し考えろ。俺の方まで砂が飛んできた。」
エイパム「ごめんなさ〜い。でもこれで奴らも……」

と言いかけた瞬間、砂煙から電気が飛んできた。“10万ボルト”
だ。それをエイパムとエテボースは軽々と避ける。

エイパム「うわ〜あれで倒れないなんてしつこいな〜。」
エテボース「お前が手を抜いているからだ。」
エイパム「いや僕はちゃんと……」

と言いかけた瞬間今度は後ろからパンチが飛んできた。

エイパム「えっ!?!」
エテボース「“きあいパンチ”だと!?!」

驚きながらエテボースたちは吹き飛ばされる。

エイパム「くっ、まさかあの瞬間に後ろに……。」
エテボース「速すぎ……る。」

エテボースたちが倒れると砂煙からサンダースたちが、エテボースたちの後ろからはキノガツサが出てきた。

サンダース「意外と回避は弱かったな。」

キノガツサ「ああ、簡単に終わった。」

ポリズ「いやまだです！」

ポリズが気づいた時にはもう遅かった。エイパムとエテボースは最後の力を振り絞り“とっておき”を使おうとしていた。

サンダース「くっっ！」

キノガツサ「この野郎〜。」

サンダースたちが止めようとするが間に合わない。

エイパム&エテボース「くらえ、“とってお……”」

そこまで言うとエテボースたちは草で縛られ、無数のあわで攻撃されて“とっておき”を使えなくなり、ほうしによって眠らされた。

サンダース「はあ、良かった。ありがとなアクア、ポリズ。」

キノガツサ「キノとハスボーもありがとな。」

サンダースとキノガッサはホツとしながら言った。

アクア「なんのなんの、こつこつ時はやくだつよね“バブルこつせ
ん”って。」

ハスポー「いやあ、僕の“くさむすび”も役にたつて良かったです。」

ポリズ「まあ僕は気づいただけですけどね。」

キノ「眠らせるのはとくいなんです。」

4人は照れながらいった。

サンダース「あれ、そう言えばラグは？」

ポリズ「ああラグならさつきアクアと一緒に“みずのはどう”を使
つてたんですが、気づいてもらえなかったんでいじけてますよ。そ
こで。」

といいながらポリゴンZは隅っこを指さした。

サンダース「あゝ……。」

キノガッサ「ごめん、ごめん。あれだ、うつかり気づかなかっただ
けだ。」

ラグ「いいよ僕弱いから……。」

アクア「まあラグちゃん、その……。」

ラグ「僕ゼーったい強くなつてやる〜。」

一同（闘争心がわいたか……、良かった〜。）

それからラルサームへの道のりでラグがバトルをしながらいって少し強くなったのはいうまでもない。

第七話 意外と強い？エテボースたち（後書き）

ラグ「・・・」

どうした、ラグ？

ラグ「なんか僕めちやくちや弱くない？」

まあそうなってるからね。

ラグ「僕だってほんとはもっと強いんだよね？」

うんデンライジになったらもっと強くなるし、あれから砂漠でバトルして強くなったんでしょ。

ラグ「もちろん。アクアの“バブルこうせん”に対抗できるくらい強くなった・・・と思う。」

うん、怪しいなあ。まあ頑張つて。

ラグ「うん、頑張る。」

第八話 ミユウさんはいずこへ？（前書き）

キノガッサ「ようやくラムサールに着いたな。」

うん、ポケモンのタイプでいうと地面タイプ・・・砂の街ラムサールだね。

ラグ「それにしても疲れた〜。」

そりゃ君は砂漠でバトルしたからね。で少しは強くなった？

ラグ「多分・・・。」

まあ頑張れ。

第八話 ミュウさんはいずこへ？

砂漠を超えてようやくラルサームについたラグたち。街につくとみんなは疲れていたが、とりあえずミュウを探すことにした。しかし

ラグ「ねえ、ミュウってどこにいるの？」

アクア「うんそういえばかめさんに聞いてなかったね。」

キノガツサ「あゝもゝなんで聞いてないんだよ。聞いたけば今頃ちやんと・・・ぐふっ！」

キノ「そんなにラグさんたちを責めないの。今から捜せばいいですよ。」

サンダース「ごめんな、みんな。」

ポリズ「いいんですよ、別に。」

ハスポー「そうそう、うっかりは誰にでもあるしね。」

キノ「ということで捜しましょうか。」

とキノが言った瞬間だった。街の中心・・・ラムサール広場の方で雷が落ちた。

ラグ「え、今雷が落ちたよね？」

アクア「うん、確かに落ちた。」

サンダース「それに物凄い音と光だった。よし様子を見に行こう。」

一同「うん。」

そしてラムサール広場

キノガツサ「なんだ？なんでみんな集まってるんだ？」

キノ「それはやっぱり雷が落ちたからじゃ・・・。」

キノがもつともな理由を言おうとすると・・・

ポリズ「いや、違います。なんかみんな喜んでますよ。」

ハスボー「雷が落ちたのが嬉しいのかな？」

ラグ「いやいやそんなはずはないでしょ。」

ハスボーの疑問に手を横に振り答えるラグ。

サンダース「それじゃあなんで・・・。」

サンダースがここまでいうとまた雷が落ちた。

ラグ「もう見てられない。みんな行こう。」

ラグの一言にみんな同意し集まりの中へ飛び込んで行く。そして謝りながらポケモンたちをかき分け進み、ようやく抜け出すとそこには・・・

ラグ「あっ……」

アクア「もしかしてあれって……ミュウ？」

サンダース「ああ間違いない。ミュウだ。」

ポリズ「ほんとにいましたね。」

ハスボー「しかも街の中央に」

そういつていると少し遅れてきたキノガッサとキノも驚いていた。
すると……

ミュウ「あゝだめだよ、割り込みは。ちゃんと順番を守らなくちゃ。」

と腰に手を当てラグたちを少し叱った。

サンダース「ごめん、それは悪かった。でもここに雷が落ちたんだ。」

ミュウ「雷？」

ラグ「そう、だから僕らは様子を見に来たんだ。」

サンダースとラグは少し焦って説明した。すると……

ミュウ「あゝごめんね、その雷僕が使ったワザなんだ。」

サンダース「えっ……」

ラグ「ワザ？」

ラグとサンダースは驚きながら言った。

ミュウ「うん、そうだよ。僕の“かみなり”だよ。」

そう言われて立ち尽くすラグたちにミュウは優しく声をかける。

ミュウ「驚かしちゃってごめんね。」

ミュウは手を顔の前で合わせて目をつむりながら謝った。
この気まずい空気を打破したのはポリゴンZだった。

ポリZ「にしてもすごいですね、“かみなり”の威力。」

ミュウ「ありがとう。ところで君たちって僕を捜しに来た人たち？」

ラグ「えっ・・・なんでそれを・・・。」

ミュウ「友達が教えてくれたんだ。ルマーテから砂漠をこえてお前を捜しにきているやつらがいたぞって。」

キノガツサ「へえ〜。」

キノ「その友達って誰なんですか？」

キノが問うと

ミュウ「まあここで立ち話もんだからうちの家においでよ。そして
たら友達にも会えるから。」

そう言っただけに誘ってくれた。

ラグ「どうしようか。」

サンダース「ちょうど泊まるどころもないし……。」

ハスボー「僕ミュウさんの家行ってみたいなあ。」

ポリズ「それに友達が誰なのかも気になりますしね。」

キノ「行きたいですね?」

キノガツサ「ああ、行きたい。」

ラグ「じゃあみんな意見は同じということ……。」

みんなは顔を見合わせてニカッと笑い……

一同「お願いしま〜す。」

ミュウの家に行くことになった。

第八話 ミュウさんはいずこへ？（後書き）

今回はミュウの家にお邪魔します。

アクア「幻のポケモンの家ってどうなってるのかな？」

キノガッサ「そりゃ豪華な家だろ。」

サンダース「いや、もしかしたら意外に普通家かもしれないぞ。」

まあそこは今考え中なんで……。

アクア「あとはミュウさんの友達か……。」

キノ「でもだいたい想像できますね。」

ポリZ「ミュウさんの友達……エスパータイプ？」

ハスボー「やっぱり強いのかな？」

そこ、ネタバレ禁止（泣）

第九話 ミユウの家、友達は……（前書き）

いや〜投稿にかなり時間がかかってしまった。

キノガツサ「なにやってんだよ、作者。」

ごめん、実は3月は忙しくてねえ〜なかなか書く時間が……

サンダース「まあ作者は学生で部活も結構遅いからな。」

まあそういうこと。でもみんなのオリジナル技は考えたし、ストーリーも少しずつ考えてるよ。

キノ「え、いつ考えるんですか？」

授業中（笑）

キノ「ダメじゃないですか。」

しかもかなりの確率で寝てます。

アクア「作者さんは学校に何しに行ってるんだか……。」

まあ主に友達に会いにと部活かな（笑）

ポリズ「もはや学校ではない感じが……。」

ラグ「ねえねえ早く第九話始めようよ」

ハスボー「お腹すいたよ」

ああごめんごめん、では第九話です。

第九話 ミュウの家、友達は……。

ラグたちはミュウに誘われて彼の家に来てきた。

ミュウ「さあ、ついたよ。ここが僕の家。」

ミュウがそういうとキノガッサは驚いた反応をしていた。

キノガッサ「ここがミュウの家!?!」

ミュウ「え、うんそうだよ。」

キノガッサ「そうか、伝説のポケモンは豪華な家は嫌いなのか……」

キノガッサが落ち込んでいると

ミュウ「あの〜なんで落ち込んでいるのか分からないけどここより別荘の方が豪華だよ。」

この言葉にピクリと反応し

キノガッサ「そうか、なら俺の予想はハズレてはいなかったな。そういうことだサンダース!!」

腕をサンダースに向けて言った。

サンダース「ん？なぜに俺？」

キノガッサ「まあこっちの話だ。ハツハツハツ。」

サンダースが不思議そうに答えたがキノガッサはほとんど無視して笑っていた。ミュウ

「ま、まあとにかく入って入って。」

苦笑いしながらミュウに言われたラグたちはミュウの家に入ってしまった。

ミュウ「ただいま。」

ラグ「ここがミュウの家かあ。」

アクア「結構広いね。」

ポリZ「ところでミュウさん、友達さんはどこですか？」

ポリゴンZが最もな質問をした。

ミュウ「ん、僕の友達？ああ、この時間は料理を作ってると思うよ。」

キノガッサ「料理、上手いのか？」

ミュウ「うん、上手いよ。特に彼の作るカレーは絶品だよ。」

ハスボー「そういえばさっきからカレーの匂いがしない？」

みんなは当たりをかいでみた。するとカレーの匂いがした。

ミュウ「本当だ、今日はカレーかあ。」

キノガツサ「なあミュウ、カレーって俺たちも食べていいの？」

キノ「人様のお家に泊めてもらうのにお食事まで……ダメに決まってるでしょ！」

キノガツサが調子に乗って質問するとキノに怒られた。しかし……

ミュウ「いいよ、みんなで食べた方がおいしいし。」

キノガツサ「ホントか？」

ミュウ「嘘はいわないよ。」

キノガツサ「よっしゃー。ということで今日はミュウ家のカレーが夕食だ〜。」

ラグ「やった、カレーだ〜。」

ポリズ「しかも絶品ですよ、絶品。」

ハスボー「楽しみ〜。」

アクア「い、いいのかな？こんないきなり……。」

サンダース「まあいいんじゃないか、せっかくだし。」

みんながカレーを食べることに喜びを感じていた頃……

キノ「すいません、いきなり大人数で上がりこんで、夕食までいた

だいて……。」
ミュウ「いいんだよ、みんな元気のいい子たちだし一緒にいたら楽しそうだったからね。これは僕のワガママさ。」

ミュウはニコツと笑って言った。

台所

ミュウ「ただいま」

???「おかえりー。今日もみんな元気だったか？」

ミュウ「うん、いつもどおり元気だったよ。ところで今日はお客さんを呼んでるんだけど……。」

???「ああ、あの砂漠にいたやつらか。別に泊めてもいいぞ。なんなら夕食をごちそうしてもいい。」

ミュウ「ありがとう。さあてと、入ってきていいよ。」

ミュウたちの会話が終わるまでドアの外で待っていたラグたちが入ってきた。すると……

ハスボー「あれ？あそこにいる人って……。」

ポリズ「ミュウツーだね。」

キノガッサ「ミュウツー？」

キノ「ほら、伝説のポケモンのミュウツーよ。」

ラグ「え、ミュウの友達って……。」

ミュウ「そうだよ、あのミュウツーさ。」

アクア「うわゝすごいね。伝説と幻が友達かあゝ。」

サンダース「確かにすごいな。」

ポリゴン「でもミュウツーって凶暴なポケモンでは……？」

ポリゴンZがそういうとみんなは固まった。しかし……

ミュウ「大丈夫さ、このミュウツーはとっても優しいポケモンだよ。」

ミュウツー「怖がることはない。お前たちはミュウの友達だろ？なら私とも友達だ。安心していい。」

ミュウツーは優しい顔でそう言った。

ハスボー「そうよだね。こんなに優しくそうだし友達だもんね。」

ラグ「それに怖いポケモンならカレー作ったりしないもん。」

ポリゴン「そうですね、ミュウツーさん先程は失礼しました。」

ミュウツー「なあに気にすることはない。分かってもらえればそれでいいさ。さあてカレーも出来たし、みんなで夕食にしよう。」

ミュウツーがそういうと夕食の準備が始まった。

そして……

一同「いただきます。」

キノガッサ「これすげー旨いな。」

キノ「キノガツサ、口の周りにカレーがついてるよ。」
ラグ「なんていうかまるやかなんだけどコクがあるという・・・素
晴らしい！」

サンダース「おいラグ、調子に乗って食べ過ぎるなよ。」
アクア「ああでもホントおいしい。」

ミュウツ「おかわりならまだあるからジャンジャン食べてくれ。」
ポリズ「でもこれホントすごいですね。食材を見ても栄養バランス
バッチリですし。ってハスボー、もうおかわりですか!？」

ハスボー「うん、だっておいしいからね。」

ミュウ「みんなに大好評だねミュウツ。」

ミュウツ「ああ、これぞつくりがいがあったもんだ。」

そんな感じで夕食も終わり、テレビを見たりして過ごし、寝る前の
こと・・・

ミュウ「みんなが僕に会いに来た理由はなんだっけ？」

ラグ「うん、デンラージについて教えてほしいんだ。」

ミュウ「デンラージについて？」

ラグ「うん僕たちはルマーテでかめさんに聞いたんだ。僕がデンラ
ージになれるって。でもそのなりかたが分からないんだ。だから教
えてほしいんだ、デンラージについて」

ミュウ「うん、僕もあまり知らないしなあ。でもなりかたぐらい
なら知ってるよ。」

ラグ「ホント？」

ミュウ「うん、ホント。教えてあげる。そのかわり僕とバトルして
くれない？」

ラグ「え、バトル？」

ミュウ「うん、勝敗に関わらずデンラージについては教えてあげる

から。」

キノガツサ「いいぜ、俺が相手になってやるぜ。」

キノガツサは嬉しそうに言うがミュウは少し苦笑いしながらも真剣に言った。

ミュウ「ごめんね、でも僕の相手はラグにやってもらおう。」

ラグ「え、僕？」

ラグはまさか指名とは思わなかったのだととても驚いていた。

ミュウ「そうだよ、ラグ。君が僕とバトルするんだ。」

キノガツサ「おいおい、ちょっとまってよ。なんで指名なんだ？」

サンダース「まあ確かに気になるな。バトルしたいならわざわざ指名にしなくてもいいんじゃないか？」

ミュウ「うん、それがラグはデンライジになれるんですよ。」

ラグ「うん・・・多分。」

ミュウ「なら実力をみておかなくちゃいけないでしょ。」

アクア「確かに・・・。」

ミュウ「だから僕はラグとバトルしたいのさ。」

ラグ「分かった、そのバトル受けるよ。」

ミュウ「そっか、ありがとね。」

ミュウはニコツと笑って言った。しかし一人不満そうなやつがいた。

キノガツサ「ああ、俺もバトルして〜。」

キノ「コラ、我慢しなさい。」

ハスポー「そうだよキノガツサ。我慢も大事だよ。」

キノガツサ「でもなあ〜。」

キノガツサが言っていると

ミュウ「ならキノガツサはミュウツーとバトルする?」

キノガツサ「なに!? ミユウツーとか?」

ミュウ「うん、いいかなミュウツー?」

ミュウツー「ああいいぞ。バトルは好きだしな。」

ということにキノガツサはミュウツーとバトルすることになった。

ミュウ「でも今日は遅いから早くねて明日しようか。」

ラゲ「うん。」

そうしてみんなは眠りについた。

第九話 ミユウの家、友達は……。 (後書き)

いや〜ついにデンラージの秘密に近づいてきたね〜。

ラグ「でも僕がバトルかぁ。強くないのになあ〜。」

でも精一杯やるでしょ。

ラグ「そりゃあもちろん。全力全開だよ。」

あ、そこになのはさんのセリフだ。

ラグ「うん、僕の好きな言葉だよ。」

まあとにかく頑張ってる。

ラグ「うん。」

ところでキノガッサはミュウツーとバトル大丈夫？

キノガッサ「おい、それはどういう意味の大丈夫だ？」

怪我しないで帰ってこれるかってこと。

キノガッサ「そんなの大丈夫に決まってるだろ。今から燃えるぜ〜。」

「
そうかい、まあ君も頑張ってる。

第十話 ラグVSミュウ（前書き）

いよいよラグVSミュウの始まりだ。

ラグ「あんまりやる気になれないなあ。」

まあとりあえず思いっきりやってきてほしいわん。

ラグ「うん、頑張るよ。」

第十話 ラグVSミュウ

ミュウと出会った次の日、いよいよとは言えないが、ミュウとバトルする日が来た。

今ラグとミュウの2人はバトルフィールドに立っている。

そのフィールドはアニメのポケモンの岩タイプのジムから岩を無くした感じの、つまり足元に少々砂があるくらいの障害物が何も無いフィールドだ。

アクアはラグのバトルを、キノはキノガッサのバトルを見て、他のメンバーはミュウの願いで街の子供と遊んでいた。

ミュウ「さてと、ラグ。まあそんな堅苦しいバトルじゃないからリラックスしてやろう。」

ラグ「うん、でもやるからには全力全開でいくよ。」

ミュウ「もちろん、さて・・・君の先攻でいいよ。」

ラグ「なら・・・行くよ。」

ラグはそついつと手を前にだし、

ラグ「みずのはどう。」

ラグがそう言った瞬間ラグの前に水の輪が現れそこから同じ輪が分身のように現れミュウの方へ飛んでいく。

ミュウ「確かにいい“みずのはどう”だね。でも……」

そういつとミュウは目をつむり集中力を高めた。するとみずのはどうはミュウにとどかず途中ではじけて消えてしまった。

ラグ「え、“みずのはどう”が……。」

ミュウ「“サイコネシス”さ。それで君の“みずのはどう”破裂させたんだ。それじゃあ次は僕の番だ。“エナジーボール”。」
ラグ「わっ!!！」

ラグはギリギリのところまで避ける。しかし……

ミュウ「……甘かったね、“きあいパンチ”!!！」
ラグ「は、早い!?!」

ミュウはラグが“エナジーボール”を避ける時にはすでにラグの背後に回り“きあいパンチ”を溜めていた。そしてラグが気づいた時にはすでに溜めは完了しており、そのままラグに当たった。

ラグ「うわー!!！」

ラグは“きあいパンチ”の勢いで後ろに飛ばされ壁にぶつかった。ラグがいると思われる場所には砂埃が漂っていた。しかし砂埃がおさまるとそこにはラグが立っていた。

ラグ「ん〜、今はすごかったなあ〜。ミュウってやっぱり強いね。」
ミュウ「ふふ、ありがとう。でも僕の“きあいパンチ”を受けて立つなんて・・・君もさすがだよ。」

お互いに笑っていた。

もちろんミュウの方が有利だしラグが不利にかりはない。しかしお互いに相手の強さに驚いていた。ラグはミュウの動きの速さに、ミュウはラグの防御力に驚いていたのだ。そして・・・

ミュウ「はどうだん」
ラグ「ストーンエッジ」

ミュウのはどうを集めた玉がラグに向かっていくがラグは地面から突き出した岩に当たって互いに相殺された。その時のラグの動きを見てアクアは思った。

アクア「なんかラグちゃんの動きがいつもと違うような・・・。」

そうラグはこのミュウとのバトルの中で成長していた。
ラグは向上心が高く、強くなろうと努力はしてきた。

しかしあまり強くならなかった。

理由はラグはデンライジになればかなりの力を手に入れるため、あの程度自分の力をコントロールできるようになるまでリミッターがかかっていた。

しかしたまたまミュウとの戦いでそのリミッターがはずれかけてきたのだ。

ミュウ「エナジーボール」

ラグ「その手はもう効かないよ、“れいとうビーム”」

ラグはミュウの放った“エナジーボール”を“れいとうビーム”で凍らせて防いだ。

ミュウ「やるねえ、だんだん強くなってる。それじゃあ“ギガドレイン”」

ミュウは“ギガドレイン”でラグに4倍ダメージ、しかも回復を狙った。しかし……

ラグ「マッドショット」

ラグはエネルギーを吸収する“ギガドレイン”の対象を“マッドシヨット”に移してダメージをなくした。

ミュウ「ん〜これは予想外だったね、ここまでやるとは……。んじゃこれで決めようかな。」

そういつとミュウは右手に緑色のエネルギーを集めた始めた。

ラグ「（緑色のエネルギー……。草タイプの技かな？ならば……。）“きあいパンチ”」

ラグはきあいパンチのチャージを始めた。そして……

ラグ「くらえ〜。」

ラグは走ってミュウの元へ行き“きあいパンチ”を決めた。しかし・

ラグ「あれ？」

なんとミュウは煙になって消えたのだ。

アクア「ミュウが煙になっちゃった……。」

ラグもいきなりいなくなったのであたりをキョロキョロ見渡していた。すると……

ミュウ「リーフストーム」

なんとミュウはラグの頭上において、しかも“リーフストーム”を撃ってきたのだ。流石にこれはラグも避けきれず当たり、倒れてしまった。

アクア「ラ、ラグちゃん!？」

アクアは心配してラグに駆け寄る。

ミュウ「大丈夫、気を失っているだけだよ。怪我は特にない。」

アクア「よかったあ〜。」

ミュウ「それにしてもラグはすごいね、こんなに早くリミッターがはずれかけてきたなんて。」

アクア「リミッター?」

ミュウ「いや、こつちの話だよ。さあラグを医務室へ運ぼう。今はゆっくり寝かせてあげよう。」

アクア「うん。」

ラグはそう言っ^て医務室へ運ばれた。

医務室

ミュウ「さあここが医務室だよ。」

アクア「はい……ってキノガッサどうしたの?」

医務室に入ったアクアの目の前には包帯でグルグル巻きにされたキノガッサがいた。

キノガッサ「ミュウツーにやられたのさ。3分ぐらいでな。んで少し怪我したから包帯を巻いてもらおうと思っ^{たら}グルグル巻きにされち^{まつ}た訳だ。」

ミュウツー「すまない。どうも苦手なもんで……。」

ミュウツーはキノガッサに申し訳なさそうに言^{った}がキノガッサは気にするなよというようにウインクして言^{った}。

アクア「あれ、キノさんは?」

キノガッサ「サンダーズたちのとこ。アイツは子供の相手が得意だからな。」

アクア「なりほど。」

しばらく辺りは沈黙する。するとミュウが

ミュウ「さて、それじゃあ今日の夜にでもデンラージについて教えてあげようか。」

デンラージ、その謎の存在について明かされるときはだんだん近づいていた。

第十話 ラグVSミュウ（後書き）

ラグ「いや〜やっぱりミュウは強いね。」

そりゃ幻のポケモンだし、いろんな技がつかえるからね。それに戦術もなかなかだよ。

ラグ「確かに・・・あの“きあいパンチ”や“リーフストーム”のコンポはびっくりしたよ。」

まあ基本的だけど基礎を固めてマスターしたコンポだったね。そしてミュウがはなすデンラージについてだけ・・・

ラグ「デンラージになる方法だね。」

うん、まあまだデンラージにはなりませんかね（笑）

ラグ「え〜。」

おいおい、いくら少し強くなったって言ったって君はまだまだ弱いんだよ。

ラグ「んじゃどうやって強くなるの?」

そこでコラボの力を借りるのだよ。

ラグ「ええ〜コラボ!？」

そう、コラボ。

ラグ「誰と?」

フォックさんとだよ。

ラグ「フォックさんってことはラッシュ君たち?」

うん、ラッシュ君たちとのコンボだね。

ラグ「やった〜ラッシュ君たちの世界に行けるんだ。でもそしたらこっちの小説はどうするの?」

大丈夫考えがある。

ラグ「考え?」

まあとにかくこの話題は次回わかるから待ってて。

ラグ「はい。」

第十一話 ミュウの語るデンラージ（前書き）

いよいよデンラージについてです。

ラグ「やっとだね。」

まさか十一話でやっとなりかたが分かるとは……（汗）

ラグ「時間かかりすぎじゃない？」

・・・

第十一話 ミュウの語るデンラージ

今はラグがミュウとバトルした日の夜。ラグも目を覚まし今からミュウの話が始まるところだ。

ミュウ「それじゃあ話そうか、デンラージについて。」
ラグ「うん。」

ミュウ「デンラージっていうのは昔この世界を破壊しようとした者がいたんだ。だから戦ったりしたんだけどその者はとても強い力を持っていて誰も勝てなかった。そしてもうすぐ世界が終わるっていう時に一匹のポケモンが現れたんだ。」

キノガッサ「おい、まさかそれが・・・」

ミュウ「そうそのポケモンがデンラージ。彼は100匹でも歯が立たなかった者と互角に戦った。そしてお互いに限界まできたところでデンラージは自身のオリジナル技で倒したんだ。」

ポリZ「なるほど。ところでそのオリジナル技って・・・」

ミュウ「“プラズマバスター”っていう電気のエネルギーを集めてビームとして発射する技なんだ。まあ初代デンラージのオリジナル技はね。」

サンダース「え、ちょっと待ってくれ。初代って・・・」

ミュウ「ああ、今までデンラージになった人が2人いたんだけどその初代の人のことだよ。まあ二人ともラグの先祖なんだけどね。」

アクア「ええ、ラグちゃんの先祖さん!？」

ハスボー「しかも二人とも!？」

ミュウ「うん、そうだよ。」

ラグはこのミュウの話聞いて不安になった。
自分の先祖が世界を救ったのは知っているがまさかデンライジにな
っていまとは思わなかった。

そこで思ったのだ。

そんな世界を救った力をちゃんと操れるのか？

力に支配されてみんなを傷つけてしまうのではないか？そんな不安
がラグの頭をよぎった。

そしてどうしても聞きたくなりラグは不安について質問した。

ラグ「それって僕に扱える力なの？みんなを傷つけたりしない？」

ミュウ「それはもちろん君しだいさ。」

ラグの質問にミュウは答えた。しかしこの答えはラグにとって予想
はしていた答えだったがやはり不安が増してしまった。

弱い自分に操れるわけがない。そんな不安が新しくラグの頭を再び
よぎった。

しかし・・・

ミュウ「もしかしてラグは自分が弱いとか思っていない？」

ラグ「え・・・うん、思ってる。」

ラグがしよげながら言つとミュウは少し笑いながらため息をついて
話した。

ミュウ「ラグ、君にはリミッターが掛かっている。だから強さが制限されているんだ。」

ラグ「リミッター？」

ミュウ「ん、分かりやすいかどうか分からないけど、ラグ、君にはデンライジになれる素質がある。もし精神的に弱い状態でリミッターが掛かっていなくて元の強さを持ったままデンライジになってしまったら、元のエネルギーとデンライジのエネルギーが合わさって暴走しちゃうんだ。だからリミッターが掛かっているんだ。」

するとハスポーが何かに気づいたらしく口を開いた。

ハスポー「・・・ん？ということももしかしてラグはもつと強いってこと？」

ミュウ「そゆこと。そのかわりまだリミッターははずれかけているだけだから、まだ完全じゃないよ。」

アクア「なるほど、ラグちゃんにはそんな秘密があったんだね。」

ミュウ「まあ秘密といえば秘密だけどそうでもないような・・・。」

ミュウは苦笑いしながら言った。

サンダース「そういえば先祖の話に戻るが先祖はオリジナル技で最後にそいつを倒したんだよな？」

ミュウ「うん、そうだけど、どうかした？」

サンダース「いや、その・・・ていうことはラグもオリジナル技・・・作れるってことだよな？」

ミュウ「まあそうなるね。」

ラグ「ホント!？」
アクア「ラグちゃんどんな技つくるの？」
ポリズ「やっぱりビーム系ですか？」
キノガツサ「いや、ここは打撃技だな。」
キノ「ここはあえて回復や補助技を……。」

みんな盛り上がってラグの技の案を出したが、ミュウが言った。

ミュウ「あのね、みんな。ラグがオリジナル技を使えるにはまずデ
ンレンジにならないとダメなんだよ？」
キノガツサ「あ……。」
キノ「そうですね、確かに。」
ラグ「ということはもしかしてオリジナル技を作るのってかなり大
変？」
ミュウ「いや、デンレンジになっちゃえばあとは君の想像した技が
オリジナル技になるよ。まあかなり想像力があるけどね。」
ハスボー「それって数に限りは？」
ミュウ「分かんない。それに関しては何も分らないんだ。」

ミュウが苦笑いしながら言う。

ラグ「そっかあ……、それじゃあさとりあえずデンレンジになる
方法を教えてよ。」
ミュウ「うん、デンレンジになるためには雷攻玉っていう玉が必要
なんだ。」

ラグ「雷攻玉？」

ミュウ「そう、雷攻玉。これはラムサールの近くにある雷の山って
いう山の頂上にあるらしいんだけど守護神であるサンダーとライコ
ウに守られていて近寄れないんだ。」

ポリズ「それじゃあどうやってその雷攻玉を手に入れるんですか？」

ポリゴンZの質問にミュウは苦笑いしながら答えた。

ミュウ「・・・彼らを倒すしかないね。」

ポリズ「え・・・あの伝説の二人をですか・・・。」

みんな落ち込んだ表情を見せる。しかし・・・

ミュウ「大丈夫、秘策ならあるよ。」

この言葉を聞いた瞬間みんな顔を上げた。

サンダース「なあその秘策ってなんだ？」

ミュウ「みんなオリジナル技をもって戦いに挑むんだよ。強力な技
なら勝てるかもしれないでしょ。」

サンダース「なるほど。」

アクア「それじゃあ明日から頑張らないとね。」

ミュウ「あとラグはもっと強くなるために異世界に言ってもらおう
か。」

ラグ「い、異世界!？」

ミュウ「そう異世界。そこで鍛えてもらいなよ。」
ラグ「え、じゃあ僕何日もみんなに会えないの？」

ラグが悲しそうな顔で質問する。すると・・・

ミュウ「君の分身を作ってその子にいつてもらったらどう？」

ラグ「そんなことできるの？」

ミュウ「出来るよ、君と全くというほど同じ分身をね。」

ラグ「それやる、それやる。ん、待ってよ。それならその分身がつけた力は・・・？」

ミュウ「今の君の力になるよ。」

ラグ「いくいく」

そういつてミュウはラグの“かげぶんしん”に“サイコネシス”のようなものをかけて準備をした。

ミュウ「それじゃあ送るよ。」

ラグ「うん。」

ミュウ「ところで異世界ではどんな修行をするの？」

ラグ「とりあえず攻撃はこっちの僕が鍛えるから異世界の僕には防御技を覚えてもらって攻撃と防御の両方を使えるようにするよ。」

ミュウ「つまり異世界では“カウンター”や“ミラーコート”みたいな防御技を鍛えるってことだね。」

ラグ「そういうこと。」

ミュウ「それじゃあ行くよ。“テレポート”」

ミュウがそつ言つとラグの分身は異世界へとんでいった。

第十一話 ミュウの語るデンライジ（後書き）

ということでもラグ、異世界にいつちやいました。

ラグ「分身だけどね。」

まあ君と変わらないからね。さてラグ君、君は強くなれるのかなあ？

ラグ「もちろん、フォックさんとここでラッシュ君に鍛えてもらうんだ。」

そうか、頑張って技覚えておいで。

ラグ「うん。」

さてラッシュ君の名前をみて気づかれた方もいると思われませんが、今回は異世界へ行くということでフォックさんにコラボをさせていただきました。フォックさんの作品にうちのラグを出していただけそうです。

ホント感謝感激です。

フォックさん、ありがとうございます。

第十二話 修行（前書き）

サンダース「ついに俺たちにもオリジナル技だ〜。」

そうだね、ついに君たちのオリジナル技習得修行の始まりです。

キノガッサ「どんな技を覚えようか今からワクワクだぜ。」

気が早いなあ（汗）

第十二話 修行

ミュウに自分の分身を異世界に送ってもらったラグ。異世界のラグは色々な技を覚え修行に励んでいた。一方こちらのラグは……。

ラグを送ってもらった次の日

なぜかメンバー＋ミュウがミュウの家の前にいた。

ミュウ「さあ、特訓を始めるよ!!!」

ミュウは随分と気合いが入っていた。しかし……

ラグ「ねえミュウ、いくらなんでも早すぎない？」

ミュウ「なにが？」

ラグ「時間がだよ。いくらなんでも朝6時って……」

そう現在の時刻は6時と少し。まあとにかく早い時間なのだ。

ミュウ「何を言ってるの？。これぐらいしなきゃ強くなてなれないよ。それに体操は大切だよ。」
キノガッサ「た、体操？」

そう、なにを隠そうミュウは6時に始まり6時30分に終わるポケモンラジオ体操が大好き&日課だった。故にこんな早い時間に起きていたのだ。しばらくして

ラジオ「さあ今日も元気にラジオ体操〜」

ラジオ体操が始まった。

長いので省略します。

30分後

ミュウ「はあ〜、良い汗かいたねえ。」

ミュウは輝かしい汗を拭いそう言った。しかし

ラグ「も〜ダメ。」

キノガッサ「いくらなんでもムリがある。」

サンダー「ラジオ体操ってこんなにきつかったか？」

アクア「いや、絶対に違う。違いすぎる〜。」

みんな完全に伸びておりもうヘトヘトだった。ポリゴンZとハスボ

ーにおいては寝ている。

そんなメンバーを見てキノさんは一言

キノ「ラジオ体操の恐怖ですね。」

キノは幸い朝早く起きてこのラジオ体操をしていたのでそこまできつくなさそうだった。

メンバー（キノ以外）「キノさん恐るべし……。」

ラジオ体操から3時間後

ミュウ「さてそれじゃあ第一段階は終わったから次は第二段階だね。」

ラグ「第一段階？」

ミュウ「そうだよ。これからの第二段階は技の練習。みんな別々に別れてね。」

サンダース「なんで別れるんだ？」

ミュウ「だって技がバレちゃうじゃん、みんなのオリジナル技が。」

ミュウは「当然」という顔をして言った。しかしメンバーは驚きでいっぱいだった。

サンダース「オリジナル技？」

キノガッサ「俺達の？」

ミュウ「もちろん、君たちのだよ。」

この会話から30分後

ミュウ「さあそれじゃあ第二段階始めるよ。」

アクア「ところでどうやってオリジナル技を覚えるの？」

アクアが首を傾げてミュウに聞いた。

ミュウ「そりゃあみんなが使える技をアレンジして覚えるんだよ。」

するとみんな首を傾げて言った。

キノガッサ「デンラージみたいにイメージしてじゃダメなのか？」

ミュウは少し怒りながら

ミュウ「そんなに簡単じゃないよ。しかもデンラージだってイメージ+練習しないといけない場合だってあるよ。」

ハスポー「そうだったんだ。」

ポリズ「まあ人生甘くないってことですね。」

サンダース「でも甘くないって言っても具体的にはどんなことをするんだ？」

ミュウ「そんな特別なことはしないよ。普通に技を出して実際にやってみるんだよ。もちろん最初は失敗すると思うけど何度も何度もやるんだ。」

サンダース「なるほどな。」

ミュウ「やるのが分かったところで早速やってみようか。」

ミュウ言われてメンバーはそれぞれ別々に別れた。

ただ別れたと言ってもラムサールの中なので会おうと思えば会える距離なので注意。

とにかくこんな感じでみんなの修行は始まった。

第十二話 修行（後書き）

サンダース「ついに修行が始まったな。」

そうだねえ始まったねえ。

キノガッサ「次回からは修行の様子か？」

うん、そうなるね。

まあとにかく

サンダース&キノガッサ「次回もお楽しみに〜。」

第十三話 修行（アクア編）（前書き）

ミュウに負けたものの「デンライジ」について教えてもらったラゲたち。

そして「デンライジ」になるためには「雷攻玉」というものが必要と知る。

しかし「雷攻玉」は伝説のポケモン「サンダー」と「ライコウ」によって守られていた。

そこで2人を倒す力をみんなに与えるためミュウは修行を始める。

友達からアドバイスをもらったんで今度からこんな感じで前書きを書きたいと思います。

第十三話 修行（アクア編）

ミュウに言われて修行を始めたメンバーたち。
その一人アクアは水を操って攻撃しようと考えていた。

今、オリジナル技を考えているアクア。しかしなにも考えが浮かばず困っていた。

アクア「どくしよ、なにも浮かばない……。」

そう言いながら空を見るとハクリューがメタグロスと一緒に“サイコキネシス”で飛んでいた。

「
アクア「綺麗だなあハクリュー……。青いからまるで水の龍……。」

その瞬間アクアの頭の中でアイデアが浮かんだ。
アクア「水の……龍……。」

アイデアが浮かんだアクアはすぐさま水場に行き精神集中を始めた。

アクア「（水で作るんだ、龍を。そう、水の龍。）」

アクアは頭の中で水の龍を想像しそれを目の前に作るうとする。すると水面が揺れて少し水が浮かび水の塊が現れた。そして塊の形は変化し小さな龍のような形に近づいていく。

アクア「（も、もう少し・・・）」

アクアがそう思うと塊は破裂し元に戻ってしまった。

アクア「あゝ油断した。でも絶対に成功させてこれを私のオリジナル技にしよう。」

アクアのオリジナル技は名前は決まっていなかったが水の龍に決定したようだ。

次の日

アクアは今日も水の龍を作る練習をしていた。昨日よりも大きく作れるようになり、形もちゃんと出来てきた。しかし失敗はする。今も失敗したところだ。

アクア「あゝこれで26回目・・・成功するのかな・・・？」

水を操りなにか形を作るのは非常に難しく、一度やると休憩を必要とする。そのため26回という数字なのだ。

休憩しながら・・・

アクア「んゝなんで出来ないんだろう？水は形がないから力を抜いたらすぐにダメになっちゃうんだよねゝ。そうだ、水に原型があれば・・・いや液体だから無理か・・・。」

アクアはこの「液体」という言葉でなにかに気づいた。

アクア「そっか、液体は個体が変わる。原型がないなら作ればいいんだ。」

そういつとアクアは休憩を終え水の龍を作り始める。

しかし今度は“なみのり”の時のように自分で発生させた水で作っている。その水の中にはキラキラ光る物も含まれていた。氷だ。

アクア「（水が原型がなくてダメなら原型を作ればいい。その為には・・・）」

アクアがそう思いながら集中すると水はいつもどおり龍の形になる。そしてある程度できたところで変化が起きた。なんと水が凍り始めたのだ。

アクア「（龍を作るときに凍らせながら作れば、原型がある状態で龍が作れる。）」

そして・・・

アクア「出来た。」

アクアのオリジナル技は完成した。アクアの目の前には大きな水・・・
・ だけど凍っている龍があった。しかし問題が一つ・・・

アクア「これでどうやって攻撃しよう？」

そう、この水の龍が自分から相手に突っ込んだりしてくれば別だが、動かない大きな銅像のような物を作ってもバトルでは意味がなかった。

アクア「え〜じゃあこれって無駄〜？」
ミュウ「無駄じゃないよ。」

アクアが落ち込んでいるとミュウが来た。

アクア「え、ミュウ、それってどういう意味？」

アクアはあきらめ顔で言う。

「
ミュウ「言葉の通りさ。よつはその龍に意識があればいいんですよ。」

アクアはミュウの言ったことを聞いて改めてあきらめ顔で言う。

アクア「あのねミュウ、世の中にはできることと出来ないことが・
・。
「
ミュウ「赤き炎の不死鳥よ、その生命を司る力を今ここに。我はミ
ユウなり。」
アクア「ミ、ミュウ？」

アクアはミュウが突然訳の分からないことを言うので驚いていた。
すると・・・

アクア「え？」

なんとアクアの作った水の龍が自分で動き始めた。

アクア「こ、これって……。」

ミュウ「今僕の友達の力を借りてこの龍に命を持たせた……というのも変だね。まあ元々ある水の命の力を強くしたんだよ。」

ミュウの言葉に？マークばかりのアクア。

ミュウ「まあ簡単に言えばこの龍に命が宿った……ってこと。」

ミュウのとっても簡単な非現実的な説明にアクアはとりあえず納得した。

ミュウ「さて、こうして動くようになった訳だけど、とりあえず名前ぐらい付けてあげなよ。」

アクア「そうだなあ……氷龍なんてどう？」

ミュウ「ちよつと簡単すぎない？」

アクア「うーん、なら氷水凍化龍なんてどう？」

アクアはあえて漢字ばかりの名前を出した。

ミュウ「さっきは簡単だったのにいきなりすごい名前だね。」

アクア「だって水と氷で出来た龍でしょ。しかも凍ってるからこんな名前になったんだ。なんかカツコいいしダメかな？」

ミュウ「この龍・・・氷水凍化龍は君が自分の力で作った龍だ。名前も君がそれがいいならそれでいいと思うよ。」

アクア「そっか、それなら私のオリジナル技名は“氷水凍化龍”で決定！！んでこの子の名前が龍ちゃん。」

ミュウ「まあもちろんいいんじゃない、龍ちゃんでも。」

アクアがオリジナル技完成に喜んでいると

ミュウ「でも龍をつくるのに5分もかかってたらダメだと思わない？」

アクア「うっ。」

そうアクアは龍を作るのに5分かかってた。一見5分はかなり短く、別に悪い感じはしない。しかし敵との戦いの中で“氷水凍化龍”を使う場合、5分かかっていては敵に攻撃されまくりである。そのためミュウはそこを指摘したのだ。

ミュウ「とりあえずせめて30秒・・・出来れば15秒ぐらいで作

れたらベストだよな。」

アクア「15秒!？」

ミュウ「大丈夫、ラムサールをでるまでにはそれができるように練習すればいいんだよ。しかもこんどは龍は意識を持っている。サポートしてくれるさ。だから今作れば1分ぐらいでできるんじゃない?」

アクア「え、1分で!？」

ミュウ「そりゃあ龍だって自分で体作って凍らせるんだから短くなるよ。多分明日ぐらいにはできると思うよ。」

アクア「そっか、それなら頑張ってみようかな。」

ミュウ「うん、頑張ってるね。」

こうしてアクアの“氷水凍化龍”は完成した。

第十三話 修行（アクア編）（後書き）

アクア「ふう、疲れた〜。」

おつかれさん、氷水凍化龍・・・龍ちゃんはどう？

アクア「うん、いいと思うよ。なんか自分で作ったから愛着が・・・」

そんなところは僕に似てるね。

アクア「それにしても今回は長かったね。」

うん、最初は作る技名だけで終わろうと思ったんだけど、書き始めたら“氷水凍化龍”完成まで書きちゃった。

アクア「まあ悪いことではないけどね。」

さて次回も修行編です。

アクア「次は誰の修行？」

さあ？

アクア「計画性無し・・・。」

第十四話 修行（サンダース編）（前書き）

今回はサンダースの修行です。

サンダース「俺の過去にも少し触れるよな。」

うん、そうだね。

第十四話 修行（サンダース編）

ミュウに言われて修行を始めたメンバー。

そのうちの一人サンダースは所持している技“サンダーランチャー”の強化版をオリジナル技として覚えようと思っていた。しかし

サンダース「サンダーランチャー” 自体高威力の技だからなあ、強化のしようがないな。」

そう“サンダーランチャー”はサンダース技の中では最高、電気技の中でもトップ5にはいる技だ。それを強化といたら相当難しいことだった。

サンダース「強化はやめるか・・・、いやこれを強化するって決めただ。」

サンダースは強い意志を持っていた。それにはサンダースの過去が関係していた。

・・・

何年前か前サンダースとギャロップともう一人でチームを作り「ボル

ト」という名で世界を冒険&救助していた。

といつても冒険は大してしてないので主に救助を行うチーム・・・救助隊として活動していた。

その救助隊「ボルト」はサンダースがリーダーのチームでなかなかの活躍しており、なによりメンバーの仲がいいことでそこそこ有名だった。

しかし事件は起きた。もう一人が突然抜けてしまったのだ。そして彼はこれっぽいことをいつていた。

「俺はボルトを抜け新しい世界へ行く。」

それ以来メンバーが抜けたということでボルトは解散となった。

これと“サンダーランチャー”との関係はこの“サンダーランチャー”はサンダースがボルトのリーダーとして頑張っていた頃に練習した技であり、みんなで作った技でもあった。

だからサンダースはどうしても“サンダーランチャー”を諦めきれなかった。

そこへミュウが来た。

ミュウ「どうしたの？困った顔して。」

サンダース「ああ、ミュウ。実はな・・・」

サンダースはミュウにオリジナル技の件について話す。

ミュウ「うん、確かに“サンダーランチャー”は強化しにくいね。それならいっそのこと威力アップを試してみたら。」
サンダース「威力アップか。でも問題は“サンダーランチャー”でいっばいっばいのエネルギーをどうするかなんだよなあ。」
ミュウ「それなら自然の電気を使えば？」
サンダース「自然の電気？」

ミュウの答えに首を傾げるサンダース。

ミュウ「そう、自然の電気。ほら、雷とかは自然に出来てるでしょ。だからそのエネルギーをもらうんだよ。」
サンダース「なるほど、それならなんとかなるな。」

ミュウのヒントによって“サンダーランチャー”の強化版を作る段階は1つ上がった。

サンダース「集まれ雷^{いかずち}」

昨日のミュウのヒントを得てサンダースは修行をしていた。昨日からずーっと雷を集める練習をしているので雷を集めるのはだいぶ出来てきた。しかし・・・

サンダース「いくぜ、”サンダーバズーカ”」

サンダースが技を発動させる。ちなみに“サンダーランチャー”の強化版なので“サンダーバズーカ”という技名になっただけらしい。

それはさておきサンダースが技名を言い技を出す。すると目の前に“サンダーランチャー”と同じ黒い穴がサンダースの頭上に生まれる。

その中からは少し電気が出ていて2秒ほどで黒かった穴が黄色に光った。

サンダース「発射!!」

サンダースの声と共に穴から電気のビームが出てくる。なかなか大きい。だいたい直径2、3メートルといった所だろうか。

しかしビームを放つと同時にサンダースまで吹き飛ばされてしまった。

サンダース「うわ〜!?!」

飛ばされたサンダースはそのまま地面に倒れる。

サンダース「あゝ、どうしても反動で吹き飛ばされるなあ〜。」

そう、サンダースの新しい問題“サンダーバズーカ”の強い反動を

どうやって受け止めるか、それが問題だった。

サンダース「さあてどう、しよう、かな・・・」

それによって疲れたサンダースはウトウトして寝てしまった。

サンダースの夢の中

・・・

サンダース「おい、まてよ。なんで・・・なんでそんな裏切りを・・・」

????「俺はこの世界を変える。卑劣な行動やおかしな常識、全てを壊して再生させる。だから俺はボルトを抜ける。安心しろ、邪魔をしなければお前とギャロップは助けてやる。」

サンダース「待てよ、全てを壊す？無理だ。壊すことは出来ないし俺たちがさせない。戻って来いよ。今までこの世界を守るために俺たちは・・・」

????「うるさい！変えるんだ世界を、どんな手を使っても。お前らも俺が正しいと直にわかる。じゃあな。」

サンダース「ま、まてよ・・・。」

・・・

サンダース「はっ！な、なんだ夢か・・・」

サンダースは夢から覚めたようだ。今は午後6時ぐらい。

サンダース「いやな夢見ちゃったなあ。」

サンダースの夢に出てきた???とはサンダースのチーム「ボルト」のもう一人のメンバーである。

サンダース「アイツが出て行って結構経つんだな……。」

サンダースは空を見上げていた。まだ少ないものの星がいくつかピカピカと輝いていた。

サンダース「俺は必ずアイツを助ける……連れ戻すんだ。そして新しいボルトとして活動を再開するんだ。……やつぱりそう考えると“サンダーランチャー”を強化したいが……反動はどうしたものか。」

サンダースは空を見ながら考えた。すると何となくボルトのことを思い出した。

どんな時も3人で頑張ってきた。

辛いこともきついことも、苦しいことも全部3人で分かち合ってきた。そんなことを考えているとサンダースに考えが浮かんだ。

サンダース「3人で分かち合う・・・これだ。」

サンダースはなにかひらめいたようで“サンダーランチャー”の準備をする。すると今度は穴が3つ出来た。

サンダース「一つの穴で反動が強いのであれば3つに分ければいい。」

サンダースの考えは一つの穴から強化版を出すと反動が強いが3つにすれば少しは反動を削れるのではないかという考えだ。そして準備が出来た。

サンダース「いくぜ“サンダーバズーカ”」

サンダースがトリガーとなる技名を言うと電気のビームが3つの穴から発射される。すごい威力だ。そしてサンダースは・・・

サンダース「はあ、はあなんとか耐え切れた。」

“サンダーバズーカ”の反動に耐えていた。“サンダーバズーカ”の完成だ。

サンダース「みんな、この技でもう一度ボルトとしてメンバーを集めるからな。そしたら再活動だ。」

サンダースは少し光る空に向かって静かに誓った。

第十四話 修行（サンダース編）（後書き）

サンダース誓いかッコイイ。

サンダース「やめてくれ（照）でもほんとにアイツには戻ってもらいたいんだ。」

うんうん、サンダース、アンタ優しいいいやつだ。きっと再活動できるよ。

サンダース「ありがとな、これからも頑張るぜ。」

第十五話 修行（キノガツサ編）（前書き）

キノガツサ「今回は俺の修行か。」

うん、そうだよ。

キノガツサ「俺の技名・・・そのまんまじゃねえか？」

まあそこは俺のネーミングセンスの問題だね（笑）

キノガツサ「笑い事じゃねえ。」

第十五話 修行（キノガツサ編）

ミュウに修行の話しを持ち出され修行を始めたラグのメンバーの一人キノガツサ。キノガツサのオリジナル技はだいたい決まっていたが問題があった。

キノガツサ「うん。どうやったらエネルギーを集められるんだ？」

キノガツサは迷っていた。

キノガツサのオリジナル技は“エネルギーボール”のエネルギーを拳に集めてパンチする という技だ。

しかもエネルギーは“エネルギーボール”の3倍で集めるのが難しい。それなりの実力と集めることになれるための根性が必要な技だ。

そのエネルギーの集め方に対してキノガツサは困っていた。

キノガツサ「どうやったら集まるんだ？」

キノガツサは手のひらに“エネルギーボール”を作り眺めながらいった。

キノガツサ「“エネルギーボール”は手の中心にエネルギーを作った周囲に集めりゃ出来るんだが……。」

そう言いながら困っているとミュウが来た。

ミュウ「どうしたの？キノガッサも困ってるの？」

キノガッサ「お、ミュウか。ってキノガッサもってなんだ、もって。

「
ミュウ「ああ他のみんなも自分のオリジナル技の為に困ってるんだよ。」

キノガッサ「なるほどな。」

ミュウ「ところでキノガッサはどんな技にするか決めた？」

ミュウのこの質問にキノガッサは少し間を置いて答えた。

キノガッサ「・・・ああ、まあな。」

あまりにキノガッサがそんな顔をするのでミュウは気になり質問を続ける。

ミュウ「練習・・・しないの？」

キノガッサ「練習は・・・したい。でも分からないんだ。俺の考えている技は“エナジーボール”のエネルギーを拳に、しかも何倍のエネルギーを集めて叩き込む技なんだ。でもそのエネルギーの集め方が思いつかないんだ。」

キノガツサの話しを聞いてミュウは言った。

ミュウ「エナジーボール”と同じ集め方じゃ駄目なの？”
キノガツサ「それで集まればそれが一番いいんだが、大技だからも
つと特殊な集め方じゃないと駄目だと思うんだ。」

キノガツサの話しを聞きミュウは納得もするが否定もした。

ミュウ「キノガツサ、今言った“エナジーボール”と同じ集め方は
一度でも試してみた？」

キノガツサ「いや、無理だろうからしてないが……。」

キノガツサがこう答えるとミュウは真剣な眼差しで言った。

ミュウ「キノガツサ、無理って思って諦めてたら駄目だよ。もしか
したら可能性がありかもしれないじゃないか。どうせなら低くても
可能性にかけてみたくない？」

キノガツサ「まあそりやできるかもしれないからかけたいな。でも
今回はエネルギーが何倍も……。」

ミュウ「も〜キノガツサ、君は頭を使うより体動かす方が得意でし
よ。それならやってみようよ、実際に。それに基本に戻ることは大
事だよ。」

キノガツサ「まあ確かに。」

ミュウ「それじゃあ頑張つて。」

キノガツサ「おう、やってみるぜ。ってあれ、ミュウはどうするん
だ？」

キノガッサはどこかにいこうと空に上がり始めたミュウに言った。

ミュウ「まあ僕にも色々あるんでね。」

キノガッサ「そっか、まあとにかくありがとな。」

ミュウ「うん、どういたしまして。」

こう言ってミュウは空へ飛んで行った。

キノガッサ「可能性か・・・、信じてみたいもんな。さてやってみるか。」

キノガッサはそういうと黙々と“エナジーボール”と同じようにエネルギーを集めてそれにもっとエネルギーを集める練習を始めた。とてつもなく長いので（というか同じことの繰り返しなので）省略・

そしてミュウに言われた次の日の午後2時頃・・・

キノガッサ「・・・出来たあ!!！」

キノガッサの拳には緑に輝くエネルギーが集まっていた。

キノガツサ「そしてこれを・・・」

キノガツサは岩に向かって構える。

キノガツサ「放つ!!」

そう言いながら岩にエネルギーを叩き込むとパンチとエネルギーの力で岩は吹き飛び凄まじい威力なことを物語った。

キノガツサ「よし、「リーフメガパニッシャー」の完成だ!!」

いつの間にか技名は決まりオリジナル技は完成した。

第十五話 修行（キノガツサ編）（後書き）

キノガツサ「なんか途中省略しやがったな。」

しゃーないでしょ。ずっと“エネルギーボール”作ってそれに集めての繰り返しなんだから。

キノガツサ「でも大事なことだぞ。」

まあね。俺はこの小説を最初は趣味で書いてたんだ。でも、この修行編でだんだん新たな思いがでてきたんだ。

この小説を読んでくれる人に色々な大事な事を伝えたいなって。例えばキノガツサみたいに同じことでも繰り返しやることは大事なことだってことやサンダーズみたいに辛い過去があっても楽しく生きて欲しいって思いがあるんだ。

キノガツサ「なるほど、まあ作者はそんな偉いやつじゃないけどな。」

確かに、こんなこと書ける立場じゃないかも・・・（汗）

でもせっかく読んでくれるなら辛い時や悲しいときに「ラグミみたいに頑張ってみよう。」とか思っただけじゃいいじゃん。

キノガツサ「そっか、まあ悪いことじゃないな。」

ありがとう、まあもちろん全部そうじゃないけどね。

キノガツサ「おい（汗）」

第十六話 修行（キノ編）（前書き）

さあ今回はキノさんの修行です。

キノ「なんだか短くないですか？」

それは言わないで。

第十六話 修行（キノ編）

ミュウの話から修行を始めたラグたち。そのメンバーの一人キノは技について困っていたところで通りすがりのチルタリス、ボーマンダと話していた。

キノ「そうですか、お二人はこれから故郷に帰られるんですか。」
チルタリス「はい、そうなんです。」
ボーマンダ「俺は妹の付き添いですがね。」

どうやらこのボーマンダが兄でチルタリスが妹のようだ。まああまり重要でもない情報だが……。

ボーマンダ「ところであなたはなにを？」
キノ「あ、私は修行を。」
チルタリス「修行……ですか？」
キノ「はい、仲間の人と旅をしているのですが、強くなるための修行中です。」
チルタリス「そうですか、ところでどんな修行を？」
キノ「自分のオリジナル技を作るんです。」
ボーマンダ「それはすごい。」

ボーマンダの驚きぶりにチルタリスは首を傾げる。

チルタリス「そんなにすごいのか？」

ボーマンダ「ああ、自分で技を考え、実行し、鍛えなければならぬ。相当大変さ。」

チルタリス「それは大変ですね。」

キノ「ええ、私の場合はどんな技にするかを迷っているんですよ。」

キノは少し恥ずかしそうに言った。

ボーマンダ「そうですか……でも技にも色々ありますもんね。攻撃系はもちろん、防御系や補助系など……。」

ボーマンダのこの言葉を聞いた瞬間キノは はっ！！ っとした。それから色々話し……

ボーマンダ「それじゃあ〜。」

チルタリス「修行頑張ってくださいね〜。」

キノ「ありがとうございます。」

ボーマンダたちが再出発しキノはさっき得たヒントを思い出した。

キノ「防御系、補助系……。」

そうキノはそんなに攻撃的ではないのでオリジナル技をどんな攻撃系にしたらいいかをずっと考えていた。しかしボーマンダは言った。「防御系や補助系など……。」と。

その時キノは思った。

無理に攻撃にしなくていい。自分はみんなをサポートするほうが得意だからそつちをやればいい……と。

そうなると沢山アイデアが浮かんだ。

シールド系や回復系など種類は豊富だ。その中でキノが選んだのは・
・

キノ「よし、パワーアップと回復を同時に出来るような補助系の技を作りましょう。」

なんとキノはとても難しい2つのことを同時に行う技に決めた。しかしまだ問題はあ

それはその技の形だ。

つまり魔法陣のようなものを味方に出現させて効果を行ったり、ビームとして発射し、当たった対象をパワーアップさせたりと色々ある。

このようにある中キノが決めたのは15分後だった。

キノ「魔法陣のようなものつかいましょう。」

結果キノの技は効果の対象に魔法陣を作りそこからエネルギーを送るという技になった。

そして練習が始まる。まずは回復をさせることだがこれはキノにとつては基本で簡単なことだった。なぜなら……

キノ「リーフフォール」

キノがそう言いながら技を出すと周りの木々が光り、まるで水を浴びたように元気になった。

そうキノは元々回復やパワーアップなど補助が得意でこの手の技は朝飯前だった。

その後パワーアップの技も成功し、いよいよ本題のオリジナル技に入った。

キノ「エンシエントサークル」

キノがそう言うのと地面に魔法陣のようなものが現れて小さな光が浮上し、回復&パワーアップメーターは40%を表示する。

ちなみにメーターはミュウから借りたもので回復やパワーアップ技をメーター対象に使うとその成功率、影響率を%で表示してくれる。しかしメーターは40%のままだ。

キノ「はあはあはあ、疲れました……。」

キノはそういうと地面にゆっくり座った。

キノ「なんで40%で止まるのでしょうか・・・？」

この時キノは自分の力不足だと思った。本来旅になんてでる強さは持っていない。

ではなぜ旅に出たのか。みんなが・・・そしてキノガッサがいたからだ。

キノガッサは普段はバカだがやるときはやるポケモンだ。

自分はそこに引かれて好きになった。

一緒にいて楽しかった。

退屈な日々を変えてくれた。

だから力になりたいと思った。だから来た。

無謀すぎるのに来た。

自分はみんなの力になりたい。直接戦わなくてもその力になりたい。キノがそう思うとなんだか力が湧いてきた気がした。そして思った。

キノ「今ならできるかもしれない。」

キノはそう思い魔法陣を発生させる。そして・・・

キノ「エンシエントサークル」

そういつて技をメーターに発生させる。すると今までと同じように順調に%が上がっていき40をこえた。

そうキノのこの原因は力不足ではない。気持ちの弱さだった。自信

のなさだった。しかし今はそんなこと忘れて%を上げるのに手一杯だ。
そして・・・

ピーーーーー!!!!!!

メーターが100%になったことを示す。

キノ「や、やったあ〜。」

こうしてキノのオリジナル技“エンシエントサークル”は完成した。

第十六話 修行（キノ編）（後書き）

キノ「エンシエントサークル”ですか。」

そっだよ。まあ君が補助が得意なのはしってるからね。攻撃ばっかりな中あえて補助にしました。

キノ「でも名前がそのまんまじゃ・・・」

そこはノーコメントで。

第十七話 修行（ポリゴン編）（前書き）

いやあ、やっと携帯が返ってきたから小説書けるよ。

ポリゴン「今度からは気を付けて下さいよ。」

はっい。

第十七話 修行（ポリゴンZ編）

ミュウに修行を勧められ修行を始めたラグ達。その一人であるポリゴンZも修行をしていた。

ポリZ「うーんオリジナル技は何にすべきでしようか・・・」

今はちょうど悩んでいた。

ポリZ「一体どんな技がいいのか・・・」

頭の良いポリゴンZはこうやって技を考えるとときに色々な場面を想定して考える。

相手から技を放たれたとき、相手が何か特殊な技を使ってそれに反撃しないといけないとき、相手に必殺の一撃をくらわせるとき・・・。

まだ他にもあるがこれらの状況に一つの技で対応するのはかなり難しい。

しかし、なるべく対応種類が多い技の方が頻度は高くなり使い勝手のいい便利な技となる。ポリゴンZはこの対応種類が多い技を覚えようとしてるのだ。

ポリゾ「んゝなかなか難しいですね……ん？」

ポリゴンZが迷っていると空から何かが飛んできた。

ポリゾ「あれは……かえんほうしゃ”！？”

そう、ポリゴンZに迫ってきたのは誰かの“かえんほうしゃ”だった。

ポリゾ「わゝ、どうしましょう（汗）そうだ、“ランダムビーム”を使いましょう。”

この“ランダムビーム”は使つと何らかのビーム系の技がでるとい
う技だ。

ポリゾ「それでは……“ランダムビーム”」

ポリゴンZがビームをうつ。すると四角いものが沢山引っ付いたビ
ームが出てきた。

ポリゾ「わゝ、失敗ですかね（汗）」

ポリゴンZのビームが“かえんほうしゃ”に当たろうとした次の瞬間、“かえんほうしゃ”は消えてしまった。

ポリン「え……。」

なんともビックリな出来事にポリゴンZは驚いていた。
すると上から……

カイリユー「あゝ、すいません。“かえんほうしゃ”の練習でミスしてしまって……。大丈夫でしたか？（焦）」

カイリユーがポリゴンZの安否を心配していた。

ポリン「（え、カイリユー……。いや、違うか）はい、大丈夫ですよ。」

カイリユー「それは良かった。本当にすいませんでした。では。」

カイリユーは去っていった。

するとポリゴンZは一人でなにかを決心したような顔をしていた。

ポリゾ「よし、いつまでもどんな技にするか迷っている訳にもいけないですし、一人で万能にならなくてもみんながいてくれるのだからみんなに頼りましょう。さっきのビームが私の新たな必殺技“デリートビーム”です。」

どうやらポリゴンは一人で万能にならなくてもみんながいてくれるのだからみんなで万能になるうと考え、自分に一番欠けている高威力の技にしたようだ。

ポリゾ「それじゃああの技を“ランダムビーム”でなく、自分でだせるようにしなければ。」

ポリゴンはそう確認するとそらを見ながらいった。

ポリゾ「カイリユー……。」

ポリゴンはこの一言を言ってから修行をまた始めた。

第十七話 修行（ポリゴンZ編）（後書き）

ポリZ「なんか短くないですか？」

まあ俺は文章力ないからそこは許して。

ポリZ「まあ仕方ないですね。」

ありがとう。ところでカイリユーになんかあったの？

ポリZ「まあ色々と・・・今は話ませんが・・・。」

そっか・・・それじゃあ話せる時になったら話してよ。

ポリZ「はい。」

第十八話 修行（ハスボー編）（前書き）

さて修行編も終了間際です。

ハスボー「今回は僕が主役だよ。」

確かにね。

第十八話 修行（ハスボー編）

ミュウにお勧めされオリジナル技を覚えるための修行を開始したらグ達。今回はハスボー編・・・

ハスボー「うーん、オリジナル技なんにしよう・・・。」

ハスボーも他のみんなと同じようにオリジナル技について迷っていた。

ハスボー「ねえ、僕のオリジナル技ってなに？」

一体誰に話しているのか・・・

ハスボー「作者さんだよ。」

ええ、僕！？

ハスボー「うん。だってもうみんな同じような感じだから読者の皆さんは飽きたと思うよ。」

うう・・・

ハスボーがこんな感じで作者と話していると・・・

????「エアスラッシュ」

誰かが“エアスラッシュ”をハスボーに放ってきた。

ハスボー「うわー!？」

ハスボーは避けきれずにダメージを負った。

ハスボー「だ、誰!？」

ハスボーの質問に・・・

オオスバメ「俺はオオスバメだ。そこのお前、弱そうだからバトルだ。」

ハスボー「弱そうだから・・・ってバトルもしてないのに決めつけるなんてヒドいなあ。」

こうしてオオスバメVSハスボーのバトルは始まった。先制したのはオオスバメだった。

オオスバメ「つばめがえし」

オオスバメは凄いい勢いでハスボーに突進してきた。

ハスボー「しぜんのちから」

オオスバメに対してハスボーは地面からつるをだして壁を作り“つばめがえし”から身を守った。

オオスバメ「へっ、やるじゃねえか。それならこれはどうだ？“かげぶんしん”から“エアスラッシュ”」

オオスバメは“かげぶんしん”で5体分身を作るとその5体全員で“エアスラッシュ”を撃ってきた。

ハスボー「なみのり」

ハスボーは自分を“なみのり”で包み込ませて“エアスラッシュ”

を防ごうとした。すると

オオスバメ「やっぱり水で防いだか。それなら“にほんばれ”」

オオスバメが“にほんばれ”を使ったことで“なみのり”は蒸発して消えた。しかしそれだけではなかった。

ハスボー「ハアハア暑いなあ・・・」

そう、“にほんばれ”を使ったことで暑くなりハスボーはピンチに陥った。

オオスバメ「ふん、ここまでだ。くらえ、“はかいこうせん”」

オオスバメは5体の分身と共に自身の最強技“はかいこうせん”を放った。ハスボーには光るエネルギーのビームが迫ってくる。

ハスボー「なにか盾みたいなき・・・あ、あれだ。」

ハスボーはとつさに“ひかりのかべ”をイメージして使おうとした。もちろんハスボーには使えないので“ひかりのかべ”は出てこなかったが・・・

ハスボー「えっ？」

なんとハスボーの目の前には光る壁が現れた。

オオスバメ「ふん、どうやって“ひかりのかべ”を出したかは知らないがそんな技では防げん。」

オオスバメは自信たっぷりで言ったがハスボーには分かっていた。

ハスボー「ちがう、これは“ひかりのかべ”じゃない。偶然出来たけど僕のオリジナル技“リーフリフレクトバリアー”だ。」

そういうとバリアーには5つの“はかいこうせん”が当たった。しかし……

オオスバメ「な、なに。受け止めた!？」

・
・
そう、バリアーは“はかいこうせん”を吸収し光っていた。そして

ハスボー「リフレクト！」

ハスボーがそういうとバリアーから大きなビームが放たれた。

オオスバメ「な、なんだと。なんとでかいビーム……」

そこまでいうとオオスバメはビームに吹き飛ばされてしまった。

ハスボー「ふう、初めてだったけど想像どつりの効果でよかった。」

こうしてハスボーのオリジナル技は完成した。

第十八話 修行（ハスボー編）（後書き）

ハスボー、いきなら僕に話しちゃダメでしょ。

ハスボー「だって・・・ごめんなさい（笑）」

笑いが気になるけどまあ反省しているようだからいいよ。

ハスボー「ところで僕の技は防御技？」

そうだよ、だからみんなを守ってあげなくちゃね。

ハスボー「うん、僕、頑張るよ」

第十九話 修行（ラグ編）（前書き）

いよいよラグ編です。

ラグ「そう、忘れられた主人公こと僕、ラグ編です。」

ああ、ごめんよラグ……。

第十九話 修行（ラグ編）

ミュウの話聞いて修行始めたラグ達。その一人・・・主人公のラグは今ミュウといた。

ミュウ「さあ修行を始めようか。」

ラグ「そうだね。でもさあミュウ。」

ミュウ「なに？」

ミュウは首を傾げて言った。

ラグ「僕ってデンラージにならないとオリジナル技使えないんじゃないの？」

ミュウ「ああそのこと？それは大丈夫、デンラージの技・・・つまり電気技のオリジナル技はデンラージにならないと使えないけど、水や地面のオリジナル技なら作れるよ。」

ラグ「なるほど。それじゃあ練習しよう。」

ミュウ「・・・」

ラグ「・・・」

ミュウ「・・・」

ラグ「・・・どんな技にしよう？」「ミュウ「そうだなあ・・・ラグにない技が良いと思うよ。」

ラグ「僕にない技？」

ミュウ「うん、例えば“きあいパンチ”や“ギガインパクト”みたいに打撃系の技しかもってない人が遠距離技ばかりの人と戦ったら敵しいよね？」

ラグ「うん。」

ミュウ「だから一つくらい遠距離技を覚えた方がいいってこと。もちろん打撃系を主体だから打撃系が一番のばさないといけないけどね。」

つまりミュウは自分の長所はのばさないといけない。しかし対策も一つはもつといた方がいい、そう言いたいようだ。

ラグ「なるほど、それは分かったけど僕にない技って何だろう？」

ミュウ「うん。あれじゃない、広範囲型の攻撃。」

ラグ「ああ、確かに。」

そう、ラグの技は1対1で使う技が多かった。一応“じしん”があるがそこまで威力に期待はできない。

ラグ「それじゃあさ、水の剣を沢山作って飛ばす技はどうか？」

ミュウ「いいんじゃない？必殺技だから数を沢山にして。」

ラグ「それを打ち込めば威力も高くなるね。よし、水の剣を作る技にしよう。」

それから2時間後、ラグが一番手が掛かるからということを手伝っ

てくれたミュウの協力もあってラグは水の剣を2つ作れるようになった。そして……

ラグ「ハイドロステインガー」

ラグが技名を言うと水の剣は飛んでいき、目標物である岩に当たった。そして砕いてしまった。

ミュウ「うん、上出来だよ。流石ラグ。」

ラグ「えへへ。」

ミュウ「でももっと数を増やさないとダメだね。」

ラグ「うん、そうなんだよね。でもそのコツが掴めなくて……」
ミュウ「なるほど。」

しばらく沈黙が続いた。そして……

ミュウ「ねえラグ、空間を確認するんだよ。」

ラグ「空間？」

ミュウ「そう、空間。僕の友達にそれ関連の人がいるんだけどその人が言っていたんだ。「空間にもものを作るためには空間を意識して作らなければ作れない」って。」

ラグ「どうやってやればいいの？」

ミュウ「確か自分が作りたいものを置く空間を想像してそこに意識を集中させるんだって。」

ラグ「こう？」

ラグは自分の横に“ハイドロステインガー”があるように意識した。すると“ハイドロステインガー”が2つから3つになった。

ラグ「すごい！」

ミュウ「でしょ。よしこの調子で頑張ろう。」

こんな練習を何回も、何十回も続けた。そしてだいぶ時間が過ぎたころ。

ラグ「ハイドロステインガー」

ラグが言つと水の剣が横に12個出来ていた。そして剣は岩に飛んでいき、砕いた。

ラグ「や、やった。」

ミュウ「おめでとう。これで出来だね。オリジナル技“ハイドロステインガー”。」

こうしてラグのオリジナル技“ハイドロステインガー”は完成した。

第十九話 修行（ラグ編）（後書き）

ラグ「なんか単純じゃない？」

たまには単純でいいよ。

ラグ「それにしても“ハイドロステインガー”、よく考えたね。」

うん、あれはリリカルなのはクロノ君のステインガーレイ エクスキューションシフトをパクりました（笑）

ラグ「フェイトのフランクスシフトにも似てるよね。」

うん。まあとにかくカッコいい技です。

第二十話 修行終了 雷の山へ・・・その前に？（前書き）

ラグ「いよいよ雷の山へだね。」

うん。

ラグ「もうすぐデンラージだあ。」

楽しみ？

ラグ「楽しみ。」

サンダーとライコウと戦わないといけないのに・・・。

ラグ「そこはオリジナル技でなんとかするよ。」

第二十話 修行終了 雷の山へ・・・その前に？

修行を終えていよいよ雷の山へ「雷攻玉」をゲットしにいく準備が整ったラグ達。今は雷攻玉をゲットしにいく前日の夜だ。

アクア「きれい。」

アクアは今星を見ていた。ここラムサルでは星がよく見える。噂ではもつと見えるところもあるらしいが、アクアはそんなことは知らない。

アクア「そういえばラグちゃん達と旅にでてもう数日たつんだ。」

そう、修行はみんな約3日で終了しておりそれから考えると数日だがたっていた。

ラグ「どうしたのアクア、こんなところで。」
アクア「ラグちゃん。」

ここでラグが登場した。
今ここはラムサールのちょっとした草原、アクアが横になっていた
のでラグも横になった。

ラグ「あ、ごめん。なんか考え事してた？」

アクア「え、うんちよつとね。ラグちゃんと旅に出てもう数日たつんだなあと思って。」

ラグ「そっかあ、でもさ、ごめんね、アクア。」

アクア「え、なんで？」

アクアはラグのいきなりの謝罪を不思議そうに返した。

ラグ「だって今から少し前はルマーテにいて楽しい生活をしていたのに、旅にさそって自由を奪うみたいなことしちゃって……。」

アクア「違うよ、ラグちゃん。」

アクアはそういうとラグの顔を見て言った。

アクア「この旅はラグちゃんに誘ってもらったけど行くって決めたのは私だよ。それに自由を奪うどころかルマーテにいるよりも自由だよ。私はこれから何が起きるか分からないけどラグちゃんとずっと一緒にいるよ。」

ラグ「アクア……。」

ラグはアクアの話聞いてホツとした。

自分のせいで仲間迷惑をかけているのではないか、旅に出たくないのにでてくれたんじゃないか、そう思っていた。

しかし違った。

アクアは自分の意識で旅にでた、しばしながら故郷を離れ自分を鍛えることを選んでた。だからラグにはある思いがこみ上げていた。

ラグ「・・・ありがとうね。」

暗闇であまり分からないがラグはにっこり笑って言った。

アクア「当然じゃない。私、ラグちゃんのこと好きなんだから・・・」

その時アクアはハツとした。

アクア「私今好きって言うっちゃった。」

赤くなるアクア。そしてラグの返答は・・・

ラグ「僕もアクアのこと大好きだよ。」

ラグもアクアのことが好きだった。

アクア「え、ホント!？」

ラグ「うん、だって友達じゃん。」

アクア「友達・・・? あ、なるほど。友達としてってことか・・・」

オトボケなラグに対するアクアの苦勞はまだまだ続きそうだ。

第二十話 修行終了 雷の山へ・・・その前に？（後書き）

アクア「さ、作者さん！？」（照）「

ん、なに？

アクア「なに？今回のストーリー。」

雷の山に行く前日の話ですが？

アクア「じゃなくて私とラグちゃんの話。」

ああ、照れてるけど実はうれしいんじゃない？

アクア「うう・・・。」

さていよいよ次は雷の山にいきますよ。

アクア「バトルするの？」

かもね。

アクア「気分次第か・・・」（汗）「

第二十一話 サンダー&ライコウとの出会い(前書き)

いよいよサンダー&ライコウの登場です。

ラグ「もつすぐデーンラージだね。」

まあサンダー&ライコウのペアを倒したらね。

第二十一話 サンダー＆ライコウとの出会い

強くなるために攻雷玉を手に入れると決めたラグ達。

しかしその玉は守護のポケモンによって守られていた。

そこでラグ達にさらなる強さを与えようと修行を勧めた幻のポケモンミュウ。

ラグ達はそれぞれの修行を終えてお互い顔を合わせてそれぞれの成長を確認した。

そして雷の山を登山する当日・・・

ミュウ「みんな準備はいい？」

ラグ「うん、大丈夫。」

ミュウ「まあ登山はそこ3時間ぐらいで済むからね。そこからはよいよサンダーとライコウとの戦いだからね。」

ラグ「うん。」

キノガッサ「サンダーにライコウなんて俺がさっさと倒してやるぜ。」

キノガッサは自信満々でいうが・・・

ミュウ「多分戦うのはラグだよ。」

このことばにしばらく沈黙が続く。そしてキノガッサが・・・

キノガッサ「あ、なるほど。そりゃラグも戦うよな。」

ミュウ「いやいや」も「じゃなくてラグが戦うんだよ。」

キノガッサ「ハア〜!? じゃあ俺たちがオリジナル技覚えた理由はなんなんだよ?」

キノガッサが少し怒り気味で言った。

ミュウ「それは行ってからの楽しみだよ。」

キノガッサ「とにかくオリジナル技を使う機会はあるんだな?」

ミュウ「うん、多分。」

キノガッサ「ならよし!」

どうやらキノガッサは自分のオリジナル技を使ったかったらしい。。。

なにはともあれ一同は出発した。

そして約3時間後・・・

ミュウ「ついたよ。」

ラグ「ここが雷の山の山頂・・・」

アクア「なんか山って言うよりは荒野ってかんじだね。」

ラグ達の目の前に広がったのは荒野。山とは思えない程荒れており木も枯れ木しかなかった。

キノガツサ「おいおい、こんなところにサンダーとライコウがいるのか？」

キノガツサは疑いの目でミュウを見る。

ミュウ「いるよ。おい、サンダー、ライコウ。」

キノガツサに疑いの目で見られながらもミュウは呼んだ。すると・

????「お〜ミュウじゃんか。」

????「元気だったか？」

突然聞こえてきた声にラグ達は驚いた。

ラグ「ねえ、もしかして今は・・・」

アクア「うん、多分・・・」

そこまで言うとサンダーとライコウは現れた。

ミュウ「やあサンダー、ライコウ久しぶり。」
サンダー「だな。」

ライコウ「ところでコイツか？例の攻雷玉を使えるやつっていつのは。」

ミュウ「そうだよ。ラグラージのラグ。」

ミュウが説明するとサンダーとライコウはラグに近寄ってガン見した。

サンダー「うん、ホントにコイツか？」

ライコウ「なんかラグラージは水・地タイプだろ。電気は関係ないんじゃないか？」

ミュウ「でも彼は攻雷玉を使う才能はあると思うよ。それに今までだってラグラージだったでしょ。」

ミュウは呆れたサンダーとライコウに説明した。

それから15分後・・・

サンダー「わかった。それならコイツが俺らと戦って勝てたら攻雷玉を渡そうじゃねえか。」
ライコウ「その代わりお前が負けたらポケモンフーズ ビリビリピリ辛味10袋おごってもらうからな。」

ちなみにポケモンフーズ ビリビリピリ辛味はサンダー達の好物である。

ミュウ「いいよ。ラグは負けないから。ね〜ラグ。」

ラグの方を笑顔で見るミュウ。一方ラグは

ラグ「ムリムリ。相手は伝説のポケモンだよ。しかも2対1はひどすぎるってばあ〜（汗）」

拒絶していた。

それからミュウが説得してバトルをする決心をしたラグ。他のメンバーは……

キノガッサ「なるほど、ミュウがいったのはこれか。」

サンダー「なかなかしぶといな、コイツら。」

アクア「でもここでオリジナル技が役にたつなんてね〜。」

キノ「やつといて正解でしたね。」

ポリZ「それにしても数が多いですね。」

ハスボー「やったー30匹目だあ〜。」

山のポケモンと戦っていた。

そしてラグ&ミュウとサンダー&ライコウは・・・

サンダー「さうそれじゃ始めるか。」

ライコウ「ラグ・・・だっけ？準備はいいかあ？」

伝説組は余裕たっぷりで言った。

ミュウ「いいよ大丈夫。ラグ、これは君がデンライジになるための試練だ。君にはそれをクリアする力がある。だから自分を信じて・・・全力で戦っておいで。」

ラグ「わかった・・・行つてきます。」

こうしてラグはサンダー達の方へ一歩踏み出した。

第二十一話 サンダー＆ライコウとの出会い（後書き）

ラグ「まだバトルじゃないんだ。」

うん、次回ですね。

ラグ「やっぱりオリジナル技使うの？」

他のオリジナル技も出すよ。

ラグ「あんまりチートな技はやめてね。」

はーい。

第二十二話 ラグVSサンダー&ライコウ(前書き)

いよいよラグVSサンダー&ライコウの戦いです。

ラグ「よし、頑張って勝つぞ。」

いいぞ、ラグ。そのいきだ。

第二十二話 ラグVSサンダー&ライコウ

攻雷玉を手に入れるため、サンダー&ライコウとのバトルを決心したラグ。今バトルが始まるうとしていた。

ミュウ「ラグが勝ったら攻雷玉を貰うよ。」

サンダー「いいぜ。そんな代わりラグが負けたら俺とライコウにポケモンフーズをおごってもらうからな。」

ミュウ「もちろん。それじゃあ行くよ。よーい・・・始め!!」

ミュウの合図でバトルが始まった。それと同時にラグへ向かってきたのはライコウだった。

ライコウ「お前には何もうらみはないが攻雷玉は選ばれし者のみか使える物だ。それを守るため全力で行かせてもらう。“でんじほう”」

ライコウはラグに向かって来ながら“でんじほう”をラグに向けて撃った。

ラグ「で、“でんじほう”!?!でもそれは電気タイプの技。地面タイプの僕には効かない。」

ライコウ「だれがコイツでお前を攻撃するって言った？
ラグ「えっ？」

そうラグが驚いた瞬間にライコウの“でんじほう”には変化があった。それは“でんじほう”に何かがぶつかりその物体に“でんじほう”の電気が吸収された事だ。

ラグ「何が・・・」

ラグはそこまで言うと“でんじほう”を吸収したものがなにか分かった。

ラグ「サ、サンダー!？」

“でんじほう”を吸収し、ラグへ向かってきたものはサンダーだった。

サンダー「俺は電気タイプだ。電気技ならある程度は吸収できんだよ。」

ラグ「そ、そんな・・・でも吸収したって何も・・・」

サンダー「ない訳じゃない。」

ラグ「え・・・」

ラグが驚くとサンダーはラグに凄いスピードで突進してきた。

ラグ「な・・・」

サンダー「くられ、雷撃砲」

ラグはサンダーの技をくらい飛ばされた。

サンダー「ふう、案外飛んだな。」

ライコウ「ああ、威力が強すぎたんじゃないか？」

サンダー「まあこれぐらいで折れてもらっちゃこまるんだけどな。」

サンダー達が話していると岩にぶつかり下敷きになっていたラグが起き上がった。

ラグ「う・・・つよい。」

サンダー「そりゃそうだ。だてに伝説のポケモンやってないからな。」

ライコウ「にしてもまだ立ち上がるとはな。なかなかの根性じゃないか。」

そう、ラグはこのコンボ技をくらったものの立ち上がった。

ラグ「そりゃそうさ、僕はデンライジになるためにここに来たんだ。」

そう簡単にはやられないよ。」

ラグは苦しそうにはするものの顔は笑っていた。

サンダー「そうか、だが我々もそう簡単には攻雷玉は譲れん。」
ライコウ「これは何百年に一度だけ出来る聖なる雷の力の塊。我々にとっても大切なものだ。」

サンダー達も負けじと意志を伝える。

ラグ「いくよ、今度は僕の番だ。“じしん”」

ラグはそう言うのと地面に手をついた。するとそこから衝撃波が発生。サンダー達に襲いかかる。

サンダー「“じしん”・・・確かに電気タイプには効果抜群だが俺は飛行タイプも持っている。狙いはライコウか。」
ライコウ「しかし俺だってこれぐらいで倒れるわけではない。“はかいこうせん”」

ライコウは地面に“はかいこうせん”を放ちその衝撃で自身を宙へと運んだ。衝撃波はライコウの下を通っていく。

ライコウ「ふん、案の定俺ねらいか。だが甘かったな。」
サンダー「ライコウ、まだまだ。アイツを見て見るよ。」
ライコウ「ん？」

ライコウはサンダーに言われてラグを見る。

ライコウ「なんだあれ？」

ラグの周りには水の塊が複数あった。

サンダー「どうやらお前、ハメられたみたいだな。」
ライコウ「・・・何？」

ライコウは考えた。今の自分の状況・・・宙に浮いている。そしてラグの周りの奇妙な塊。

ライコウ「ま、まさか・・・」

もちろんこの考えはライコウの頭にすぐよぎったがすでに遅かった。

ラグ「いくよ。“ハイドロ”・・・」
ライコウ「くそ、このままじゃ空中で避けられずに当たる。早く地

上に……」

ライコウは急いで地上へ行こうとするがラグの方が早かった。

ラグ「ステインガー」

ラグの声で水の塊“ハイドロステインガー”は一斉にライコウを襲った。そして塊はライコウに命中する。

ライコウ「く……」

そして塊がなくなると同時にライコウは地面に落下しその場に砂ばかりがまった。

サンダー「いや〜凄いな。“ハイドロステインガー”か。良く考えたもんだ。」

サンダーは上空からライコウの様子を見ていた。

ラグ「ひ、ヒドくない？仲間が倒れたかもしれないのにそんなのんきに……」

サンダー「心配どうも。だけど大丈夫。俺もそんなヒドいやつじゃ

ない。それによくみてみるよ。アイツはそんなにやわじゃない。なあ、ライコウ？」

ラグ「そんなあれをくらってまだ・・・」

ラグがライコウの方を見てみるとライコウは立ち上がっていた。

ラグ「そ、そんな。」

ライコウ「ふう、俺を空中へ移動させ、そこに必殺技を当てて倒す。なかなかの作戦だ。それに技の威力もすごかった。だが・・・あと一歩だったな。微妙に俺に体力が残った。次の技で終わりにしよう。また何十年後に挑戦しにこい。準備できたか、サンダー？」

サンダー「ああ、出来てるぜ。今回の威力は凄そうだ。」

サンダーはラグとの会話の最中もパワーをためていたようで自信に溢れていた。

ライコウ「そうか、それじゃトドメだ、ラグ。」

ラグ「く・・・」

ラグは“ハイドロステインガー”のダメージであまり動けなかった。

ライコウ「いくぜ“ステルスロック”」

なんとライコウは本来使えない“ステルスロック”を使った。これによりラグは次のサンダーとライコウの攻撃にほぼ100%あたることになった。

ライコウ「サンダー、頼む。」
サンダー「ああ、「おいかぜ」」

サンダーの技によってサンダー達の後ろから風が吹いてくる。

ライコウ「でんじほう」

ライコウは自分の目の前に「でんじほう」を作った。

サンダー「それじゃあいくぜ。」

ライコウ「あばよ、ラグ。」

サンダーは急降下してライコウの横に行き、二人で「でんじほう」に当たりながら電気を吸収しさらに「おいかぜ」でスピードを増してラグに突っ込んでくる。さらに・・・

サンダー「オマケだ「こつそくいどつ」」

サンダーの「こつそくいどつ」によってもっと速さをましてしまっ
た。

サンダー＆ライコウ「くらえ、
「高速雷撃二重砲」」

サンダーとライコウの合体最強技“高速雷撃二重砲”がラグに突っ込んでくる。
そしてあたりは砂ぼこりに包まれた・・・。

第二十二話 ラグVSサンダー&ライコウ（後書き）

ラグ「なんか僕、ピンチじゃない？」

ピンチ・・・ですね。

ラグ「主人公なのにもう負けちゃうの？僕弱っ。」

おいおい、そこはなんとか逆転してくれよラグ。

ラグ「僕にそんなこと言われても・・・。」

第二十三話 トドメの一撃“ウォーターカリバー”、そして……(前書き)

ラグ「僕やられたの？」

まあ負けることも大事です。

ラグ「そんなあゝ(汗)」

第二十三話 トドメの一撃“ウォーターカリバー”、そして……

あたりは砂ぼこりでいっぱいだった。

バトルの中でサンダーとライコウは二人の最強技“高速雷撃二重砲”をラグに使った。その勢いであたりは砂ぼこりだらけなのだ。

ミュウ「あらま、サンダー達があれを使っちゃうなんてねえ。よっぽど長期戦にしくなかつたんだね。でも残念ながら……」

砂ぼこりが薄れていく。

ミュウ「そう簡単には終わらないんだよね。」

砂ぼこりが完全にはれるとそこには意外なこうけいがあった。

サンダー「くそっ！」

ライコウ「なんてこった」

サンダー達は悔しがっていた。その理由は……

ラグ「ハアハア……“ウォーターカリバー”……水の大剣だよ。

本来なら水は硬くないけどこの状態になった水はちゃんとした剣となる。」

ラグの使った技“ウォーターカリバー”。これによりサンダー達は突進系の技である“高速雷撃二重砲”を止められていた。

サンダー「このままじゃラグの攻撃をマトモにくらう。ライコウ、一旦離れるぞ。」

ライコウ「ああ。」

そういつてサンダーとライコウはラグから離れる。しかしそのあとの異変に気づいた。

サンダー「ラグのあの体制・・・」

ライコウ「いかにもなんかしてきそうだな。」

そう、ラグは今にも剣を振ろうとする体制だった。

サンダー「だが距離も距離。単なる構えかもしれん。ライコウ、もう一度“高速雷撃二重砲”いくぞ。」

ライコウ「少しキツイがしかたないか。」

そう言うと伝説組は技の準備をする。そして・・・

サンダー「それじゃあいくぜ。」

ライコウ「高速雷撃二重砲」

そう言いながらラグに突進して行く。すると

ラグ「僕の方も準備は出来たよ。いくよ“ウォーターシュート”」

そう言いながらラグは大剣“ウォーターカリバー”を振る。

するとそこから水の衝撃波がでてサンダー達にぶつかる。またもやあたりは砂ぼこりだらけになった。

ミュウ「うわ、ラグったらいつの間にかあんな新ワザを・・・やっぱり素質あるね。」

ミュウのコメントからしばらくして砂ぼこりは晴れてきた。そこには

ラグ「ハアハア流石に疲れるなあ。」

サンダー「く・・・ライコウ・・・」

そう、ライコウはラグの“ウォーターシュート”をくらって倒れていた。サンダーもそれなりにくらっていたがまだ少し体力は残って

いるようだ。

サンダー「ラグ、残念だがお前の秘策は“ハイドロステインガー”、“ウォーターカリバー”ともに敗れた。むろんライコウを倒したことは認めてやる。正直こんな勝負をする必要はない。」

ラグ「それじゃあ・・・」

ラグはライコウの言葉に喜ぶが・・・

サンダー「しかし一度はやると決めた勝負。まだお互いに負けを宣告はしてない。」

ラグ「そ、そんな・・・」

正直ラグはこの勝負をここで終わらせたかった。

自身がミュウと共に作った技“ハイドロステインガー”、切り札としての“ウォーターカリバー”、この二つが強い伝説組に対抗する手段だった。

しかしその二つを使っても倒せたのはライコウのみ。

目の前でサンダーは飛んでいる。

今自分の手には“ウォーターカリバー”があるのみ。とうてい勝てない。

ラグ「く・・・これで手はすべて消された・・・。」

サンダー「だろうな。しかも今は大技であろう“ウォーターカリバー”での“ウォーターシユート”を使ったあと、お前はそれを何度

もは使えないはずだ。だから諦め……」
ラグ「でも諦めないよ。」

ラグの言葉に驚きラグの目を見る。まだ光を失ってない目だ。

ラグ「僕が負けるのは覚悟してたよ。でも途中で諦める覚悟はしてない。まだ動けるのに……まだ負けてないのに諦めるのは嫌だ。」

ラグの思い強かった。諦めない、それが今のラグの気持ちだった。

サンダー「いいだろう、もちろんこちらも力はかなり出したが全力ではない。俺個人の最強技もある。この差があってもまだやるか？」
ラグ「やるよ。僕はまだ負けてない。」

ラグもサンダーも気迫では負けていない、互角だ。

ラグ「いくよ、うおおおおー!!」

ラグは“ウォーターカリバー”を構えて走り出す。サンダーも迎え撃つ準備をしていた。

サンダー「ハアアアア……」

ラグ「いつけー!!」

ラグはサンダーの前で“ウォーターカリバー”をふり落とした。それと同時に

サンダー「ライトニングバースト」

サンダーも負けじと自身の最強技である“ライトニングバースト”を放つ。“ライトニングバースト”は体内の電気を一気に放つ“チャージビーム”の上位技。ラグの“ウォーターカリバー”とサンダーの“ライトニングバースト”がぶつかり合う。

サンダー「く……（かなりのパワーだな。油断したら一気にやられる。）」

ラグ「（っ、強い。流石最強技、“ウォーターカリバー”が止められるなんて。でも勝つのは僕だ。）カリバー、切り裂けー!!」

ラグはカリバーにさらに力をいれてビームを切り裂こうとした。しかしなかなか切れない。ラグにビームがどんどん近づいてくる。

ラグ「く……」

サンダー「（この勝負・・・俺の勝ちだ。）」

サンダーは自分の勝利を確信した。しかしその時予想外の事が起きた。

ピカ！！

何かが光る。

サンダー「あれは・・・まさか」
ラグ「な、何あれ？」

その光はラグの方へと寄ってきて、ラグを光で包み込んだ。

サンダー「まさか・・・嘘だろ？このタイミングでかよ。」
ミュウ「あの光は・・・。」

その場にいたサンダーとミュウも次の瞬間に起きた出来事には驚いた。ラグを包んでいた光が弾けるように飛び散り中からラグが現れた。しかしいつもと違う。頭のエラとおびれは伸びておりおびれはとがっているような形をしていた。さらになんといっても周りでバチバチと電気の音がした。

サンダー「アイツ……」

そこから何かを言おうとしたとき、ラグはその場から消えていた。

サンダー「なっ……」

そしてサンダーの目の前にラグは現れて技名を言った。

ラグ「デンインパクト!!」

次の瞬間、サンダーは地面に倒れていた。

第二十三話 トドメの一撃“ウォーターカリーバー”、そして……（後書き）

というわけでラグは無事&サンダーライコウ倒しちゃいました。

ラグ「でも最後の僕なに？なんか変化してたけど？しかも“デイン
ンパクト”って……」

あ、案の定バレバレかな。

ラグ「だと思っよ。」

第二十四話 ついに覚醒！―デンラージ（前書き）

ラグ「ついにデンラージになれるの？」

まあ一応ね。

ラグ「まだバトルはしないんだよね。」

まだだね。とりあえず今回はデンラージになるとこまでだよ。

第二十四話 ついに覚醒！―デンラージ

ラグがサンダー達を倒してから3日経った午後7時、ラグはあのバトルからずっとミュウの家で寝ていた。

ラグ「くー……。」「

アクア「ラグちゃん……。」「

ラグを心配してアクアは様子を見ていた。アクアやサンダース達はラグの変化をちょうど見ていた。

アクア「あのいつもと違うラグちゃん……。あれって何だったんだろっ？」「

アクアにとっていまだに謎だった。光に包まれてラグになにがありあの姿になったのか。

アクア「周りで電気みたいなのがバチバチいってたし……。」「

コンコン、ドアの方からノックがあった。

アクア「はい、どうぞ。まあラグちゃんじゃないけど。」
ミュウ「入りま〜す。．．．アクア、ラグはどう？」
アクア「うん、特に何にもないよ。」
ミュウ「そっか．．．」
ラグ「う、う．．．。」
アクア「あ、ラグちゃん！！」

ラグは突然ながら起きた。

ミュウ「ごめん、起こしちゃった？」
ラグ「いやあ．．．だいたい寝たから起きちゃった。」

ラグは寝起きのためかまだ頭がぼーっとしているようだ。すると
ユウさ何かを思い出したように

ミュウ「あ、アクア。それにラグ。」
ラグ「ん？」
アクア「なあに？」
ミュウ「今日の夜話があるから．．．」

ラグとアクアはミュウの話を理解したらしく

ラグ「うん、分かった。」
アクア「夜だね。」

理解の言葉を述べた。

夜

ミュウ「それじゃあみんな集まったね。」

ミュウはラグやアクア以外にもサンダースやキノガッサなどラグの仲間を呼んでいた。サンダー達もだ。

ミュウ「さてそれじゃあ話を始めるよ、デンラージについての……」
ラグ「デンラージについて……」

ラグはやはり少し緊張していた。

ミュウ「まず思い出してほしいんだけどデンラージはラグの強化版……ちょっととした進化なのは知ってるね？」
サンダース「ああ。」
ミュウ「そしてサンダー達との戦いの途中にラグの姿が変わった……あれがデンラージだよ。」
アクア「あれが……。」

アクアはデンライジの目撃者として少し震えた。周囲の空気に少しでも感じたあの威圧感・・・とは少し違うもののパワーがあふれることを証明するしびれを思い出したからだ。

サンダース「それじゃサンダーが倒れた理由はなんだ？」

ミュウ「おそらくオリジナル技を使ったんだと思うよ。」

サンダース「オリジナル技？俺達の“サンダーバズーカ”みたいなか？」

ミュウ「うん、多分デンライジになってからのオリジナル技だから電気技だと思うよ。」

ミュウが説明しているとラグが口を開いた。

ラグ「“デン・・・インパクト”だよ。」

アクア「“デンインパクト”？」

アクアは突然のラグの発言に確認するように言った。

ラグ「そう、僕がサンダーを倒す時に使った技だよ。あの時意識はあったんだけど体が勝手に動いて腕に電気が溜まったと思ったらパンチして倒していたんだ。」

ミュウ「なるほどねえ、“デンインパクト”っていうのは“雷パンチ”の強化版ってことだよな？」

サンダー「いや、少し違ったぜ。ラグが使った技・・・“デンイン

パクト”は“雷パンチ”と比べた時の威力の差がありすぎる。あれは“雷パンチ”じゃない。」

真面目な表情でサンダーは言った。

ミュウ「言うことは完全なオリジナル技かぁ……。」

ミュウもまた真剣な表情だ。

キノガツサ「ところでなんでラグはデンラージから戻ってるんだ？」

ミュウ「そりゃ長時間はなれないから……だよな？」

サンダー「まあな、あれはかなりのエネルギーを消費するから慣れるまでは短時間しかなれない。」

ラグ「もしかしてもうデンラージになれないの？」

ラグは不安そうに言った。しかし

ミュウ「大丈夫だよ。そこらへんはサンダー達が知ってるんでしょ？」

サンダー「まあな、ラグ、これからお前は自分の意志でデンラージになることができる。」

ラグ「ほんと！？それじゃあデンラージになれ〜。」

・・・、・・・、・・・。しばらく沈黙が続いた。そしてラグは口を開いた。

ラグ「ならないじゃん!？」

サンダー「事が早すぎた。まだ何にもやってないからなれる訳ないだろ、なあライコウ?」

ライコウ「ああ、まだ何にもやってないのにデンラージになれないさ。」

キノガツサ「なんだライコウ、いたのか?」

ライコウ「いたさ!!しゃべるタイミングが無かったただだ。」

ライコウは少しムキになって言ったが・・・

キノガツサ「冗談だ、冗談。」

キノガツサに軽く流された。

サンダー「とにかく今からその儀式みたいなのをやるからちよつとついて来い」

サンダーに連れられて行った先は庭だった。

ハスボー「ここってミュウの家の庭だよな?」

キノ「ですよ？なんか威圧感が・・・」

ハスボーとキノが庭に違和感を覚え、言葉として表現した時、ポリゴンZがあるものに気づいた。

ポリZ「み、見て下さい。なんか光ってますよ。」

ポリゴンZの目線の先には光る玉があった。

ポリZ「あれは何でしょう？」

サンダー「・・・攻雷玉だ。」

みんな「え？」

サンダーの発言にみんな驚いた。

キノ「あれが攻雷玉・・・ですか？」

サンダー「そうだ。」

ハスボー「なんかバチバチいつてるね。」

ライコウ「そりゃ超高電圧の電気を凝縮して作られた玉だからな、そっという音がするんだよ。」

ライコウが説明した通り、攻雷玉はまさに電気エネルギーの塊みたいなものだ。

ラグ「それでどうするの？」

サンダー「攻雷玉の近くに行ってあれに触れるだけだ。」

ラグ「それだけ!？」

ラグはあまりにも単純で簡単そうな作業に思わず驚いた。

ライコウ「そうだ、早く行ってこい。」

ライコウに言われて攻雷玉へ近づくとラグ。しかしあと1メートルぐらいのところでラグの足は止まった。

アクア「ラグちゃんどうしたんだろ？」

サンダー「いきなり止まったな。」

ラグの突然の変化に疑問を持つメンバー達。そのメンバーにサンダーは言った。

サンダー「あいつは今自分と相談してるんだ。」

キノ「相談・・・ですか？」

サンダー「まあ大げさに言えば戦っているだけだな。」

キノガッサ「それってどういうことだよ？ちゃんと攻雷玉をくれるんじゃないのかよ!！」

キノガツサはイラつときたようであつて少し荒く言つていた。

サンダー「勝負に勝つたのはラグだ。だからラグにはデンライジの力を使う権利はある。」

キノガツサ「じゃあ・・・」

サンダー「しかし！！あくまでも権利を得ただけだ。本人がそれを拒むこともできる。」

キノガツサ「ばか言つてんじゃねえ！！ここまで頑張つて来たんだ。それを拒否るやつなんて・・・」

ミュウ「なるほどね。」

キノガツサが猛ラッシュで怒つているところにミュウが入つた。

キノガツサ「どういふことだミュウ。権利だの拒否るだのそんなことはいい。なんであいつが止まつたかだけを答える！！」

キノガツサはミュウの肩を掴んで言つた。そしてミュウはその理由を言つた。

ミュウ「・・・怖いからだよ。」

キノガツサ「怖い・・・だと？」

怒つていたキノガツサが肩を掴むのも止めて静かに驚いた。他のメンバーもだ。

ミュウ「そうさ、怖いんだよ。今からラグは強大な力を手にする。その力をちゃんと使えるか。ラグがサンダー戦のことを言ってた時「意識はあつたけど体が勝手に」みたいなことを言ってたでしょ。」

キノガッサ「ああ、確かに。」

ミュウ「それはつまり自分じゃ操れなかったってこと。それを考えたら近づいて止まるのも理解できるよね？」

あたりがしばらく沈黙にさらされた。すると

アクア「ラグちゃん、頑張つてー!!」

アクアが突然叫びだした。それに続いて他のメンバーも

サンダース「進めーラグー!!」

キノガッサ「ラグ、お前にはみんながついてんだ、心配なんていらねえ!!」

キノ「あとちよつとですよ!!」

ポリズ「勝つて・・・勝つて下さい自分に。ラグー!!」

ハスボー「負けないでー!!」

その声はラグに届いたらしく

ラグ「うん、ありがとう。みんな。」

ラグはまた近づいて行った。

ミュウ「まさかこんな試練が残っていたなんてねえ、ねえサンダー、ライコウ?」

ミュウはラグを見ながら言った。

サンダー「別に俺たちの任意ですることじゃねえ。言うなら必然的ある事だ。さっきお前が言った通り、攻雷玉に触れば強大な力を得る。しかしそれをコントロールできるか、それでみんな足を止めちまう。」

ライコウ「だからある意味俺たちを倒すのが試練ではなく、これが試練とも言える。それにしてもこれを友情で乗り越えるとはなあ。」

ライコウが関心したように言うとサンダーも言った。

サンダー「確かに驚いたな。今まではここで引いてもう一度挑戦するのが一般的だが一発クリアとは・・・新しい歴史だな。」

ライコウ「よっぽど良いメンバーに恵まれていてなおかつミュウの言う通り資質がある。あいつすごいなラグは。」

サンダーやライコウが正直な感想を述べているうちにラグは攻雷玉に触れようとしていた。そして

ラグ「とどいた!!」

ラグが攻雷玉に触れた瞬間攻雷玉は激しく光り、ラグを包んでいった。

光の中

ラグ「なんだろう、体に力が湧き出てくる。それにこの少ししびれる感じ・・・体に電気が流れているみたい。」

ラグが光りに包まれて約30秒後光りは弾け飛んでラグが現れた。

アクア「ラグちゃん!!」

サンダー「ついにやったなラグ。」

キノガッサ「デンラージの光臨か。」

キノ「凄い気迫・・・。」

ポリZ「ほんと強大な力って感じですね。」

ハスボー「ラグかつこい〜。」

そう中から現れたのは以前アクアの見たデンラージだった。

ラグ「みんな・・・ありがとう。」

ラグは静かに感謝の気持ちを伝えた。

第二十四話 ついに覚醒！―デンラージ（後書き）

ということでラグはなんとかデンラージになれました。

ラグ「やったね、途中危なかったけど（汗）ところでデンラージの特徴は？」

うんとね・・・

・エラが少し長くなった。

・頭のヒレが丸いじゃなくて尖っている。（三日月を横に半分にしたようなかんじです。）

これくらいかな？

ラグ「なんか特徴少くない!？」

だって元そんなに変化したらほんとに進化になっちゃっじゃん。

ラグ「確かに・・・」

まあとにかくデンラージになれてよかったじゃないか。

ラグ「うん!！」

第二十五話 優勝？賞金？バトルフェスティバル（前書き）

さて、今回は少々短いです。

ラグ「なんで？」

だって1日に2度更新は初めてだよ？そりゃ短くなります。それに内容も・・・ねえ？

ラグ「まあとにかくラグラーズの冒険、始まります。」

あ、それはリリカルのパクリ・・・。

第二十五話 優勝？賞金？バトルフェスティバル

ラグがデンラージになってから一週間メンバーはそれぞれの課題を練習していた。

アクアは龍の高速召喚、サンダースは“サンダーバズーカ”の操作の安定、キノガッサは“リーフメガパニッシャー”の威力アップ、キノはアクアと同じ高速化、ポリゴンZはビームの射程距離増加、ハスボーはバリアーの面積拡大とそれぞれの課題克服に努めていた。そしてラグは……

ラグ「はあ……はっ！！」

デンラージに長時間なるための練習をしていた。

ミュウ「ダメだよ。まだ気を抜いちゃ。」

ラグ「ごめん、ごめん。でも長くない10分って」

ミュウ「うぬぼれたらダメだよ。まだまだなんだから。」

ラグ「うう……スパルタ……」ミュウ「……なんか言った？」

ラグ「い、いや何も。」

こんな感じで練習していた。するとミュウツウが飛びながら現れた。

ミュウ「ミュウツウ、どうしたの？」

ミュウツウ「どうしたもこうしたもない。ミュウ、知ってるか？」

ミュウ「な、なにを？」

ミュウツー「バトルフェスティバルの話だ。今回はラムサールでやるって話したよ!!」

ミュウ「え〜!!今回はラムサールでやるの？」

ミュウツー「今テレビで言った。間違いない。しかもあと2日後だ。」

ミュウ「あと2日後!？」

ラグ「あの〜・・・バトルフェスティバルって何？」

ミュウとミュウツーの話しが分からないラグは質問した。

ミュウ「ポケモン達が集まって勝負して優勝を決める大会さ。」

ミュウツー「ただしチームでできることになるがな。」

つまりバトルフェスティバルは優勝をきめるトーナメント大会。チーム（7人）で勝ち上がっていき優勝を目指す大会だ。

ラグ「それって勝つたらなんかあるの？」

ミュウ「賞金にトロフィがもらえるよ。」キノガッサ「おい、その話は本当か!？」

ミュウ「うん、本当・・・ってキノガッサ、もう練習終わったの？」

キノガッサ「ああ威力は1.2倍上がった・・・ハズだ。」

ミュウ「ハズって・・・」

ミュウが苦笑いしながら言うと

キノガツサ「だってしょうがないだろ。岩を壊した時の衝撃が少し上がったくらいしかわかんねえんだからよ。」
ミユウ「まあとにかく威力アップはしたみたいだね。んでなんでさっきの話に興味をもったの？」

キノガツサ「だって賞金があるんだろ？ということとは大会で優勝してそれを見てた女の子達と賞金で遊びに行けるってことだろ？」

ミユウ「いや、そう言う訳じゃないと・・・」

キノガツサ「とにかく俺達も大会に参加してその栄光を掴もうじゃないか、なあラゲ。」

ラゲ「え、いや・・・そういうのは止めた方が・・・」

キノガツサ「いいじゃねえか、この頃修行ばかりだったからこゝらで一回休憩を・・・ゴフっ!!」

キノガツサは何者かの襲撃を受けて宙に舞った。

キノガツサ「いててて・・・ってキノ!？」

キノ「女の子と遊びに行くんだ・・・賞金で？」

キノガツサ「いやそれは・・・」

キノ「キノガツサー!!」

キノガツサ「はいー（泣）」

それからキノガツサにお説教があったのはいうまでもない。

お説教終了後

キノ「バトルフェスティバルですか。」

ポリズ「確かに賞金というのは欲しいですね。」

キノガツサ「ポリZ！！（期待）」

ポリZ「まあ僕の場合は生活費などに使えるからですけど。」

キノガツサ「（泣）」

ハスポー「でも優勝しないといけないんだよね？」

サンダース「なにより日にちが少くないか？」

ハスポーやサンダースの現実を見たときの問題点にメンバーはしばらく考えた。そして

ラグ「やっぱりでてみない？僕たちだって一生懸命練習してきたんだしその成果を見て見ようよ。」

アクア「そうだよね、あたしも出るに賛成！！」

ラグやアクアの意見に続き・・・

キノガツサ「俺は最初から賛成だぜ。」

キノ「私も賞金の使い方はちゃんと使うなら賛成です。」

ポリZ「まあ実力を確かめたいですし僕も賛成ですね。」

サンダース「まあみんなそういうなら俺も賛成だ。」

ハスポー「別に賞金を目的にしなくてもいいから僕も賛成！！」

こうしてラグ達はバトルフェスティバルに参加することになった。

第二十五話 優勝？賞金？バトルフェスティバル（後書き）

ということでバトルフェスティバルに参加します。

キノガッサ「よっ、作者。」

あ、今回飛んでったキノガッサだ。

キノガッサ「そればかりいうな！！それよりいいのが、バトルフェスティバルなんてやって。」

え、何で？

キノガッサ「だって次の街、フォル・・・」

あーネタバレはダメ（汗）

キノガッサ「そうだったな（笑）」

（笑）じゃないよ・・・（汗）あとこの小説をみて下さっているみなさんにお知らせ・・・というかお願いがあります。

キノガッサ「なんだよ、お願いって？」

できるだけ感想を書いてほしいんです。

キノガッサ「そりやまた何で？」

だって感想見るの楽しいじゃないか。「あ、こんな風に思ってくれ

てるんだ」「とか」「ここはこうしたほうがいいな」とか分かるじゃん？

キノガッサ「なるほどな、という訳でみんな、感想を頼むぜ。」

「キノガッサが飛ばされていて楽しかった」なんていうのも良いかな？

キノガッサ「そりゃダメだ（怒）」

第二十六話 開催！バトルフェスティバル（前書き）

ラグ「いよいよバトル」

じゃないよ。

ラグ「え〜。」

多分次回からかと・・・

ラグ「次回かあ〜」

第二十六話 開催！！バトルフェスティバル

バトルフェスティバルの開催決定から2日、あれからラムサールはお祭り騒ぎだ。ちなみに今ラグ達は大会開始まで時間があるのであたりをみていた。会場のラムドームの周りではたこ焼きや焼きそばなど定番の食べ物にくじや金魚すくいなどの定番の遊びの店の開かれていた。

ハッサム「へいらっしやい！ウチのたこ焼きは旨いよ。しかも安い！10個入りでなんと300ポケ！」
ハガネール「らっしやい、らっしやいウチの焼きそばはなんと320ポケ！しかも材料は国産だから安心だ！こりゃ買っしかないね！」

会場周辺に屋台のポケモンの声が鳴り響く。

ラグ「凄い・・・、街中がお祭り騒ぎだね。」サンダース「ハッサムのたこ焼きにハガネールの焼きそば・・・」
アクア「ゴルダックの金魚すくいにムウマのくじかあ・・・」
キノ「本当にお祭りみたいですね。・・・あれ、キノガッサ？」

キノガッサがないことに気付きキノがあたりを見回すと・・・

キノガッサ「うめえなこれ！」

ハッサム「だろ？うまいだろ」

キノガッサ「ああ、うめえよ。このふんわりした食感がたまんねえ。

「
ハガネール「おい、そのキノガッサ。ウチのもみてくれよ。」

キノガッサ「ああ、いいぜ。おっ、この焼きそばも良い味してるじやねえか。」

ハガネール「だろ？5日寝かせた特性ソースを絡めてんだ。」

キノガッサ「なるほどな、どつりでコクがあつてまるやかな味な訳だ。」

キノガッサが食べた感想を述べていると

バシャーモ「おい、旦那。次はウチのお好み焼きを・・・」

ガルーラ「ウチのたい焼きも。」

キノガッサ「おお、みんなじゃんじゃんもってこーい。」

屋台の人が次々に食べて欲しいと言ってきていた。

キノ「はあ、もうキノガッサつたら・・・」

ポリズ「まあいいんじゃないですか？迷惑とかはかけてないみたいですよ。」

ハスボー「みんなとすぐ仲良くできるのがキノガッサのいいところ
一つだしね。」

キノ「まあ、それもそうですね。」

キノもキノガツサを了承したようだ。

それから数時間後

カバルドン「え〜では只今よりバトルフェスティバルインラムサルを開会いたします。」

パチパチパチパチ

ラムサールの市長であるカバルドンからの開会宣言を初めとしてバトルフェスティバルは始まった。

ラグ「さて、いよいよだね。」

アクア「そうだね、それにしてもバトル形式がダブルバトルなんて・・・。」

そう、今回バトル形式はダブルバトルで決勝はリーダー一人がシングルで戦うというものだ。つまりダブルで3回、そしてシングルで勝てば優勝だ。

キノガツサ「っしやーたつぷり食ったから食後の運動に頑張るか。」
ポリズ「キノガツサ張り切ってますね。」

キノ「沢山食べたから調子いいんですよ。」

サンダース「さて、トーナメントの順番は……」

ハスポー「あ、僕たち4番目だ。ねえそう言えばダブルバトルのメンバーはどうするの？」

ポリ2「そうか、ダブルバトルだから誰と誰が一緒に出るか決めないといけませんね。」

そう、この大会のルール上バトルに出られるのは一回だけ。（例えば一回戦にでたポケモンは2回戦や3回戦、決勝には出られないということ。）

だからしかもダブルバトルなのでチームもよく考えないといけない。しかし……

ピンポーン
ピンポーン

「選手の皆様、ダブルバトルのメンバー決定をするため抽選を行います。至急メインホールへ集まって下さい。繰り返します。ダブルバトルの……。」

キノガッサ「なんだ、メンバーは抽選で決めるのか。」

キノ「そうらしいね。」

ラグ「それじゃあとりあえず行こうか。」

抽選会場

ラグ達は抽選をするため列に並んでいた。

サンダース「意外と少ないな。」

ポリズ「チーム数はぼちらしいですよ。」

ハスボー「でもどこも強そう。」

キノガツサ「はっ、それぐらいないと困るぜ。」

アクア「あ、私達の番だ。」

それからくじを引いた。すると

ポリズ「私とハスボーがペアですね。」

ハスボー「やったあ。」

キノガツサ「俺はキノとか。」

キノ「そうみたいだね。」

サンダース「俺とアクアがペア・・・」

アクア「ってことは・・・」

みんなの視線がラグに集まった。

ラグ「あはははは・・・引いちゃった・・・。」

ラグは自分の手にある物を見せながら言った。ラグの手にあった物、それは引いた者がリーダーになる先の赤い棒だった。

キノガツサ「ラグがリーダーか。シングル戦頑張れよ。」

ポリズ「というかシングルって確か決勝だったような気が・・・」

キノガツサ「それなら決勝まで上がるだけだ。」ポリズ「なんと
いう単純さ……(汗)」

キノガツサ「とにかくこの大会で勝って勝って勝ちまくって優勝す
るぞー。」

ハスポー「おー」

サンダース「もちろんだ。」

アクア「やるからには一番狙わないとね。」

キノ「ですね。」

ラグ「みんなで頑張ろー。」

ポリズ「あの〜すいません。」

キノガツサ「なんだよポリズ、もう狙うは優勝だぞ。」

キノガツサは少し怒り気味で言った。

ポリズ「いやそれは分かりましたけど……もう私たちの出番がき
ますよ。」

みんな「え〜!?!」

ポリズが告げた真実にラグ達は驚いた。そしてバトルフィールドへ
と急いだ。

第二十六話 開催！バトルフェスティバル（後書き）

ラグ「この回意味は無くない？」

なんで？

ラグ「だってバトルはないし抽選だけだし・・・」

まあ意味無いかも。

ラグ「そうなんだ・・・」

第二十七話 オリジナル技の威力（前書き）

いよいよバトルフェスティバルでのラグ達のバトルです。

ラグ「よし頑張ろう。」

今回は君じゃないよ。

ラグ「え？」

第二十七話 オリジナル技の威力

バトルフェスティバルに出場するメンバーを決めて間もなく時間がないためラグ達は急いでバトルフィールドに向かっていた。そして今はバトルフィールドに着いた時だった。

ラグ「なんとか間に合ったね。」

アクア「ハア、ハア疲れた〜。」

サンダース「でも良かったじゃないか間に合つて。」

キノガッサ「ところでよ、最初に誰が戦うんだ？」

一同「あ・・・。」

そう、ラグ達はまだ最初出るタッグを決めていなかった。

ラグ「ど、どうしよう。」

アクア「ここはてきとくに決めちゃう？」

ポリZ「そ、そうします？」

ハスボー「もう時間ないしそうしよう。」

サンダース「それじゃあジャンケンだ。」

キノガッサ「さあ〜いしよはぐー、ジャンケン・・・ポン!〜!」

ポケモン界にジャンケンがあるのか、なにより手が・・・という「
とはおいといて、結果は・・・」

ポリZ「わ、私の勝ちですね。いきますよ、ハスボー。」
ハスボー「え、僕負けちゃったけど・・・まあいいか!！」

そういいながらポリZ&ハスボー組はフィールドへと向かった。

キノガツサ「なんだポリZ?随分緊張して・・・冷静さのかけら・・・はあるけど。」

キノ「多分はりきってるんじゃないかしら?キノガツサ早く観客席に行こう。みんな行っちゃったよ。」

キノガツサ「あ、ああ。」

こうしてキノガツサ達は観客席に向かった。一方ポリZは・・・

ポリZ「なんか勢いで出てきちゃいましたね。」

ハスボー「え、勢いだったの?」

ポリZ「はい・・・」

ポリZは自分のミスにかなり落ち込んでいた。しかし・・・

ハスボー「大丈夫だよ。勝てば次にまわせるんだし、それに僕達だつてオリジナル技とか頑張ったじゃん。」

ポリZ「ハスボー・・・そうですね。それじゃあ行きましようか。」

こうしてポリZ & ハスポー組はフィールドに入った。

ポリZ「ここは・・・」

ハスポー「ひろーい。」

そう、2人の目の前には草原のようなフィールドが広く広がっていた。そこにカイリキーとヘルガーが現れた。

カイリキー「俺達の相手はお前らか。」

ヘルガー「せいぜい怪我しないようにな、へっ！」

カイリキーとヘルガーはポリZ達をバカにして自分たちの指定位置に行った。

ハスポー「なにあれ！そりゃ僕は弱いけどバカにしすぎだよ。」

ポリZ「こらこらハスポー。相手の挑発に乗っちゃだめですよ。」

ハスポー「だって・・・」

ハスポーはふてくされた顔をしたが、ポリZを見るとすぐに普通の顔に戻った。

ポリZ「バカにしてきた分はバトルで返しませう。お釣りつきで。」

「

ポリズの顔は冷静さを取り戻し、自信に溢れていた。

サンドパン「さあ次の対戦は・・・カイリキー&ホリゴンズ&ハス
ポー!!!」

司会のサンドパンに呼ばれて4人は現れた。

カイリキー「ふう〜ヘルガー、どうする、手加減する?」

ヘルガー「してやった方がいいんじゃない?なあお二人さん?」

ハスポー「だからバカにして・・・」

ポリズ「手加減なんていりません。本気でどうぞ。」

4人の間ではすでにバトルは始まっていた。

サンドパン「それでは。レディ・・・ゴー!!!」

ポリズ「トライアタック」

ヘルガー「かえんほうしゃ」

サンドパンの試合開始のコールと同時にホリゴンズとヘルガーは技を放った。しかし二つの技は互いに打ち消しあった。

ヘルガー「なるほど、やるじゃねえか。」
カイリキー「おいヘルガー、上だ。」

カイリキーは余裕な表情で上を指差した。そこではハスボーが“みずのはどう”を撃とうとしていた。

ヘルガー「カイリキー。」

カイリキー「まさせとけ。」

カイリキーは自信満々で言い右拳を後ろに構える。

ハスボー「いくよ、”みずのはどう”」

ハスボーが技名を言うとハスボーの溜めていたエネルギーが弾けて飛んでいく。

カイリキー「れいとうパンチ」

それに対してカイリキーは“れいとうパンチ”をつかって“みずのはどう”を防いだ。

カイリキー「どうした？こんなじゃ勝てないぜ？」

ヘルガー「大丈夫かあ？」

カイリキーとヘルガーはバカにして言った。

ハスボー「ん〜」

ポリゴンZの横に戻ったハスボーが怒ろうとするがポリゴンZが頭をなでて言った。

ポリZ「大丈夫ですよ。そろそろ本気で行きましょつか。そうですねえ・・・あと1分以内で。」

ポリゴンZの話しをきいてハスボーは冷静さを取り戻した。

カイリキー「今度はこっちの番だ。と言ってもこれで終わりだな。ばくれつパンチ」

カイリキーは勝負を決めようと自身の持つ威力の高い技を使った。しかし

ポリZ「その技を今使ったのがあなた達の敗因です。まあいつ使っても負けは負けですが。」

ヘルガー「なに？」

ヘルガーはポリゴンZの言った意味が分からず少しこんらんした。しかし次の瞬間その意味が分かった。

ヘルガー「カ、カイリキー!？」

ヘルガーが驚いた理由。それは・・・

カイリキー「俺の“ばくれつパンチ”を止めただと!？」

ハスボー「そうだよ。この“リーフリフレクトバリアー”でね。」

そう、ハスボーは“リーフリフレクトバリアー”で“ばくれつパンチ”を止めていた。

ハスボー「でもそれだけじゃないよ。」

カイリキー「なに!？」

カイリキーが驚いた瞬間にバリアーからエネルギーが爆発した。

カイリキー「な、なんだ!？」

ハスボー「リフレクトっていうくらいだからね。跳ね返したんだよ。」

そしてカイリキーは吹き飛ばされ壁に埋まった。

ヘルガー「カイリキーが吹き飛ばされただと!？」

カイリキーが吹き飛ばされるなんて考えもしなかったヘルガーは目を丸くしていた。

ヘルガー「こんにゃろー、くらえ“オーバーヒート”」

ヘルガーはポリゴンZだけでも倒そうと“オーバーヒート”を出した。しかし……

ポリゴンZ「その“オーバーヒート”……消させてもらいます。“デリートビーム”」

ポリゴンZが技名をいうとポリゴンZの口の前にエネルギーが集まりビームが放たれた。

そのビームは“オーバーヒート”に当たったがその瞬間“オーバーヒート”の炎は消えた。

ヘルガー「なに!？」

ポリゴンZ「私の“デリートビーム”はエネルギーを消していきます。

威力は・・・“かみなり”と同じくらいですかね。」
ヘルガー「つてことは高ランク技!？」

ヘルガーの気づきもむなしく“デリートビーム”はヘルガーに当たりヘルガーもカイリキーの横にとばされた。そして

カイリキー&ヘルガー「つ、強い・・・。」

ポリZ「もちろんです。私とハスボーのペアですし、ラグ達の仲間ですからね。あ、時間は50秒・・・完璧ですね。」ハスボー「もう人のことバカにしちゃダメだよ?」

カイリキー&ヘルガー「はい・・・。」

こうしてこの勝負はポリゴンZ&ハスボーペアの勝利で終わった。

第二十七話 オリジナル技の威力（後書き）

ということでポリZ達の勝ち・・・だけどポリZなんか怖いなあ。

ポリZ「なぜですか？」

あ、いたのか、ポリZ。まあそれはいいとして色々発言が怖いよ。

ポリZ「そうですか？」

うん、例えばお釣りつきで返すとか・・・

ポリZ「やられたらやり返す。これ大事です。」

あ、そうですか（汗）

第二十八話 パワー&サポート（前書き）

さあ次の戦いです。

キノ「今回は私たちです。」

キノガツサ「目え開いて俺の活躍をよく見と……ぐふっ!~!」

あ、キノガツサが飛んでった……（汗）

第二十八話 パワー&サポート

ポリゴンZとハスボアのペアのバトルが終わり今は休憩室。

ラグ「おめでと〜う。」

アクア「ハスボアの“リーフリフレクトバリアー”にポリZの“デリートビーム”、格好良かったよ。」

ポリZ「ありがと〜。」

ハスボア「ほめてもらってうれしいよ。」

ポリゴンZもハスボアもほめられて少々照れていた。

ポリZ「ところで次のバトルはいつですか？」

サンダース「もうすぐだ。キノガッサがキノをつれてバトルフィールドに行つてたからな。」

ポリZ「なるほど、それでいないわけですか。」

アクア「ねえ、もうすぐ時間じゃない？」

サンダース「あ、確かに。もう行かないと間に合わないな。」

ラグ「よしそれじゃあ観客席へレッツゴー。」

こんな感じでラグ達も観客席へ向かった。

ラグ「さ〜て、キノガッサとキノさんは・・・」

アクア「あ、いたいた。あそこ。」

アクアの目線の先にはキノガツサが堂々と、キノが普通に入場していた。

アクア「なんかキノガツサ目立とうとしてない？」

ラグ「うん、それ僕も思った……。」

ポリズ「キノさんは普通に入っているんですがね……。」

サンダース「まああの二人らしいといえはらしいけどな。」

ハスボー「ねえねえ見て。あれって対戦者？」

ハスボーが見たのはベトベトンとミミロップ。するとミミロップの前に何か黒い影が登場し、同時にキノガツサも消えた。

キノガツサ「う、美しい。ミミロップさん、僕と君の出会いには運命だ。今度ぜひ僕とお茶でも……ぐふっ!？」

キノガツサはまたナンパしていたがそれをキノは普段どおり止めた。

キノ「相手の人に迷惑でしょう？」

キノガツサ「キ、キノ。これはその……体が勝手に……。」

キノ「言い訳無用!！」

それから30分後

サンドパン「それでは試合を始めます。レディ・・・ゴー!!」

サンドパンのコールで試合が始まった。

ベトベトン「へドロばくだん」

最初にベトベトンの“へドロばくだん”がキノガッサたちに向かって撃たれた。

キノガッサ「あまいぜ、“しんくうは”」

しかしキノガッサは“しんくうは”で“へドロばくだん”を打ち消した。

キノガッサ「まだまだく“アイアンテール”」

それからキノガッサはベトベトンに突っ込み“アイアンテール”を使う。

ベトベトン「あまいのはお前もだ、“かえんほうしゃ”」

キノガッサに対してベトベトンは“かえんほうしゃ”で応戦する。

キノガッサ「な、“かえんほうしゃ”だと!? くそつ “はかいこうせん”」

キノガッサは“かえんほうしゃ”を防ぐために“はかいこうせん”を放った。二つの技はぶつかり合いあたりには爆煙がまった。その衝撃でキノガッサはキノのもとに吹き飛ばされた。

キノガッサ「ふう、危なかった。」

キノ「ちよつとキノガッサ大丈夫?」

キノガッサ「あぁなんとかな。にしてもあいつまさか“かえんほうしゃ”を使えたとはな・・・以外だったなあ。」

キノ「もう・・・気を付けてよね。それで勝てる方法はある?」

キノガッサ「知らねえ、だから大技叩き込んで終わらせる。あんま長引くとミスつて“ヘッドロばくだん”とかくらいそうだからな。」

キノガッサは苦笑いしながら言った。

キノ「そう・・・分かった。2人とも一撃で?」

キノガッサ「もち。“リーフメガパニツシャー”で沈める。だから・・・」

キノ「うん、サポートね。“エンシエントサークル”」

キノは“エンシェントサークル”を発動。キノガツサを回復させた。

キノ「これで回復とパワーアップしたからあとは……」
キノガツサ「おう、“つるぎのまい”」

キノガツサは“つるぎのまい”をつかってさらに攻撃力を上げた。

ベトベトン「なにをしようとしてるかは知らないがキノガツサが向かってこないなら好都合だ。ミニロップ！」
ミニロップ「うん。」

ミニロップはベトベトンから合図をもらってキノガツサたちに向かっていく。

ミニロップ「ほのおのパンチ」

ミニロップはキノガツサに“ほのおのパンチ”を当てようとする。
キノガツサは今“つるぎのまい”を使用中。動けないので反撃できない。

ベトベトン「これでキノガツサは沈んだ……」

ベトベトンは攻撃が当たると確信した。しかし・・・

ベトベトン「なに!？」

ミミロップ「そ、そんな・・・」

“ほのおのパンチが” あたったと思われ発生した煙。その中にあった後景は・・・

ミミロップ「あなたはもう一匹のキノガッサ!？」

キノ「残念ですがあなたの“ほのおのパンチ”を当てられる訳にはいかないのです・・・」

煙が完全にはれた。

キノ「止めさせていただきました。」

そこには“ほのおのパンチ”を“まもる”で止めたキノがいた。

ミミロップ「私のパンチを受け止めるなんて・・・」

ベトベトン「それなら・・・“どくどく”」

ベトベトンは冷静に判断しキノに“どくどく”を使った。それと同

時にミミロップはキノから離れる。

キノ「それくらいしません。“しんぴのまもり”」

キノは自身の周りに聖なる結界をはって“どくどく”を防いだ。

ベトベトン「くっ……」

ミミロップ「なにか手は……」

ベトベトンとミミロップが混乱していたとき、2人の後ろに何か影が現れた。

キノガツサ「隙ありだあああ！！」

その影、それはキノガツサだった。

ベトベトン「な、いつの間に……」

キノガツサ「キノの“エンシェントサークル”は回復と同時に強化もする。だから今ここにいるのさ。」

ミミロップ「それなら“てだすけ”」

ミミロップは“てだすけ”でベトベトンをパワーアップさせた。そ

して

ベトベトン「くらえ“ダストシユート”」

ベトベトンは自身の最強技“ダストシユート”でキノガツサを撃退しようとした。しかし

キノガツサ「いいぜ、その技と真っ向から勝負してやる。」

キノガツサは“ダストシユート”を自分に使われているのにも関わらず笑っておりさらに弱点の技なのに真っ向から勝負すると言った。

ハスポー「そんな・・・“ダストシユート”はどくタイプの技なのに・・・大丈夫かあ。」

ラグ「大丈夫だよ。キノガツサは強いから。」

ハスポー「ほんと?」

ラグ「うん。」

サンダース「アイツのことだ、何か考えがあるんだろう。」

ハスポー「ベトベトン達を倒す?」

サンダース「ああ、それと大技で倒せばカッコいいのかな・・・」

ハスポー「あ、そっちな・・・。」

さてバトルフィールドでは今まさに“ダストシユート”がキノガツサに当たろうとするくらいの距離までできていた。

キノガツサ「いくぜ、これが一撃必殺の“リーフ……”」

キノガツサが技名を言うとキノガツサの拳に緑のエネルギーが集まりそれが光りだす。

ベトベトン「な、なんだこのパワー!？」

ベトベトンはその光が放つパワーに驚く。そして拳に十分光が集まった。

キノガツサ「メガ……」

キノガツサの拳は“ダストシュート”にぶつかると“ダストシュート”を消し飛ばした。

ベトベトン「な!？」

ベトベトンは自身の最強技を消し飛ばされて驚いた。

キノガツサ「……“パニッシャー”」

キノガツサは光の拳をベトベトンにぶつけた。その瞬間爆発が起きて近くにいたミミロップも爆発に巻き込まれた。そして2人とも吹き飛ばされた。

ベトベトン「っ、強い。」

そして2人は倒れた。

サンドパン「勝負あり。キノガツサ&キノの勝ち!!」

サンドパンのコールと共にキノガツサは拳を上げて言った。

キノガツサ「俺がっこいいー!!」

キノガツサの言葉にメンバーはこけた。

サンダース「あ、アイツは・・・」

アクア「こんなときでもそう言うんだ・・・」

ポリズ「自信家ですね。」

ハスポー「まあいいんじゃない？キノガツサらしいよ。」

ラグ「確かに。」

そしてバトルフィールドでは・・・

キノ「キノガッサ・・・調子に乗っちゃダメでしょー!!」
キノガッサ「ぐふっ!!」

キノガッサは30メートルぐらいとばされていた。

第二十八話 パワー&サポート（後書き）

いや〜キノさんナイスサポート。

キノ「そんなことないですよ。」

キノガッサもよく“ダストシュート”を破ったね。ていうか無謀だね。

キノガッサ「うるせえ、あそこで消し飛ばせばさらにカッコイイだろ?。」

あ、やっぱりそっぴいっぴい……（汗）

第二十九話 雷の球と氷の籠（前書き）

さて更新です。

アクア「随分早いね。」

うん、なのはのあるMAD聞いてたらいつのまにか完成してたんだ。

アクア「なのはさんってすごい……。」

第二十九話 雷の球と氷の籠

キノガッサ達のバトルが終了して1時間、ラグ達は観客席にいた。

ラグ「いよいよダブルバトルは最後だね。」

ポリズ「ええこれに勝てれば次はラグの出番ですよ。」

ラグ「あはは・・・。」

キノガッサ「まあアイツらなら勝だろ。」

ハスボー「強いもんね。」

キノ「あ、相手ですよ。」

キノが対戦者にきづいた。登場したのは・・・。

キノ「チルタリスとヨルノズクですか・・・。」

ハスボー「相性的には有利だね。」

キノガッサ「まあ油断はできないがな。」

・・・・・・あたりがしばらく静かになった。

キノガッサ「ど、どうしたんだ？」

キノガッサは少し驚きながら言った。すると・・・

ポリズ「キノガツサがまともなことを・・・」
キノ「明日は雨・・・いや嵐ですね。」
ラグ「食料ため込まなきゃ。」
ハスポー「それからミュウの家の補強を・・・」
キノガツサ「嵐なんてくー!!」

そんなこんなでバトルは始まるうとしていた。

サンダース「アクアと一緒に戦うのは久々だな。」
アクア「うん、ホント久しぶり。お兄ちゃんこの勝負絶対かとうね。」
サンダース「ああ。」
サンドパン「では準備できましたね。それではレディ・・・ゴー!!」

サンドパンが試合開始のコールをする。その瞬間サンダースの体から電気が放たれた。

サンダース「でんじは」

サンダースの“でんじは”はヨルノズクに放たれたが

ヨルノズク「なんと、私にきましたか。ならば“しんぴのまもり”」

ヨルノズクは冷静に“しんぴのまもり”で対処。“でんじは”は無効化されてしまった。

サンダース「へっ、やるじゃないか。」
アクア「それなら“れいとうビーム”」

アクアは異常状態技の効かないヨルノズクに効果抜群の“れいとうビーム”を放った。しかし

ヨルノズク「あまいです。“みがわり”」

ヨルノズクは“みがわり”を使いもう一人の自分を生成、“れいとうビーム”は“みがわり”に当たった。

アクア「んっ、“れいとうビーム”まで防がれちゃうなんて・・・」
ヨルノズク「よそ見していいんですか？」
サンダース「なに!？」

サンダースはヨルノズクの言葉に反応しあたりを見回す。チルタリスの姿がなかった。

サンダース「くそつどこだ!？」

サンダースが混乱した時頭上から何かがくるのを感じた。

サンダース「上か!! アクア、チルタリスは上にいるぞ。」
アクア「上?」

アクアが頭上を見る。するとチルタリスがすごいスピードで向かってきていた。

チルタリス「ゴッドバード」

チルタリスの“ゴッドバード”がアクアにヒットしようとしていた。
しかし

サンダース「アクアー!!」

サンダースはアクアの方へ飛び込んだ。そして“ゴッドバード”がヒット。あたりは砂埃で見えなくなった。チルタリスは技を使ったのでヨルノズクの横に戻っていた。

ヨルノズク「さすがです、チルタリス。」
チルタリス「すこし頑張ってみました。これであの人達も終わ・・・

「

チルタリスが終わりと言おうとした時アクアとサンダースは立っていた。

チルタリス「りじゃない。すごくしぶといね。」

チルタリスはしとめられなかったことを悔やんでいた。

アクア「お兄ちゃん大丈夫？」

サンダース「ああ大丈夫だ。“ゴッドバード”はひこうタイプの技だ。電気タイプの俺にはいまひとつだ。・・・くっ。」

サンダースは大丈夫だと思表示をするが“ゴッドバード”はひこうタイプでも最強クラスの技。いくら半減できるとはいえサンダースにはかなりのダメージだった。

アクア「（“ゴッドバード”はひこうタイプの中でも指折りの超高ランク技・・・あまり長く戦ったらいけない。）お兄ちゃん、私が前にでるから隙ができれば“サンダーバズーカ”でヨルノズクをお願い。」

サンダース「おい、アクア。俺は大丈夫・・・」

アクア「ぶしゃないでしょ。お兄ちゃんが私を守ってくれたんなら私も守らなきゃいけないの。だからお願い。」

サンダース「……わかった。無理はするなよ。」
アクア「うん。」

そう言うとアクアは何歩か前にでる。

ヨルノズク「サンダースをかばうためにできましたか。1対2、私達の方が圧倒的に有利ですが油断しないように、チルタリス。」
チルタリス「了解。」

ヨルノズク「さて、ではいきますよ、「さいみんじゅつ」」

ヨルノズクは“さいみんじゅつ”でアクアを眠らせようとした。しかし

アクア「くらっ訳にはいかないんだよね“まもる”」

アクアは“まもる”で“さいみんじゅつ”を防いだ。

ヨルノズク「いいんですか？私……いえ、私達の目的は違つんですが。」

アクア「え？」

アクアが驚きあたりをみまわすとチルタリスが上空から“ゴッドバード”を仕掛けてきた。

ヨルノズク「それをくればこの勝負は終わりです。」
アクア「いやまだだよ。」
ヨルノズク「なに!？」
アクア「とける」

チルタリスが“ゴッドバード”でとっしんしてきた瞬間アクアは“とける”で回避した。

ヨルノズク「まさか“とける”が使えるとは……、しかしまだです。チルタリス!」
チルタリス「オツケー”10まんボルト”」

チルタリスはアクアに有効かつあたる“10まんボルト”を使ってきた。当たればアクアに大ダメージだった。しかし

チルタリス「……君、まだ動けたんだ。」
サンダース「もちろんだ。お前の“10まんボルト”の電気はいただいた。」

なんとサンダースが“こうそくいどう”でアクアの前にいき“10まんボルト”を特性の“ちくでん”で吸収した。

アクア「お兄ちゃん……」
サンダース「ごめんな、でもお前のバトルみてたらやりたくなっち

やって……」

サンダースは少し照れながらアクアに言った。

ヨルノズク「くう……ならばチルタリスアレでいきましょう。」
チルタリス「勝負を終わらせるんだね、わかった。“りゅうせいぐん”らん」

チルタリスがヨルノズクのことを了解し“りゅうせいぐん”を發動させた。

サンダース「りゅうせいぐん”か……あれはドラゴンタイプの超高ランク技だな。」
アクア「どう対抗しよう、私の“まもる”じゃ防ぎきれないだろうし……。」

アクアが対抗策を考えているとサンダースが言った。

サンダース「防ぐ必要なんて無いぞアクア。」
アクア「え？」

アクアはサンダースの言葉の意味が分からなかった。

サンダース「攻撃は最大の防御。つまり攻撃すればいいんだ。」
アクア「なるほど、お兄ちゃんにしては珍しく消し飛ばす作戦かあ。」

サンダース「だってあるだろ、消せる技が。お前にも、俺にも。」
アクア「まあね。それじゃあ・・・」

アクアは力を溜始めた。チルタリスも“りゅうせいぐん”をだす準備をしていた。
そして1分後

サンダース「アクア、準備できたか？」

アクア「うん、もうできてるよ。」

サンダース「そうか、それじゃあいくか。」

アクア「うん。」

チルタリス「それが僕の方もたまったんだよね。“りゅうせいぐん”」

チルタリスのかけ声と共に空にあったエネルギーの塊は隕石のようにアクアとサンダースに向かってきた。

サンダース「きた。いくぜ、アクア。」

アクア「うん!!」

サンダース「いくぜ、“サンダーバズーカ”」

アクア「お願いね龍ちゃん“氷水凍化龍”」

サンダースとアクアは自身の最強クラスの技で“りゅうせいぐん”に対抗した。“サンダーバズーカ”と“氷水凍化龍”は“りゅうせいぐん”を破壊していった。

ヨルノズク「なに!？」

チルタリス「そんな・・・。」

チルタリスとヨルノズクはまさか破られるとは思っていなかったよ
うで驚きを隠せなかった。

サンダース「そのままいくぞアクア。」

アクア「うん。」

サンダースは“サンダーバズーカ”をヨルノズクに、アクアは“氷
水凍化龍”をチルタリスに向けた。

チルタリス「く・・・。」

ヨルノズク「ここまでですか・・・。」

それからヨルノズクは電気に、チルタリスは氷に覆われあたりには
砂埃がまった。そして砂埃がはれたところには・・・

サンドパン「ヨルノズク、チルタリス、共に戦闘不能。勝者サンダ

「イス&シャワーズチーム。」

ヨルノズクとチルタリスは倒れアクア達の勝ちとなった。

第二十九話 雷の球と氷の籠（後書き）

さてさてお疲れ様でした。

サンダース「ああ、少し疲れたけどやっぱりオリジナル技はいいな。強い強い。」

まあね。

サンダース「ところでこういう必殺系の技しかないのがオリジナル技？」

どんなのは考えてないけどなんかほしいね。その内考えとくよ。

第三十話 ラグVS??? (前書き)

いよいよラグのバトルです。

ラグ「僕誰と戦うの?」

それは見てのお楽しみ。

第三十話 ラグVS???

アクアとサンダーのダブルバトルから2時間、今ラグは控え室にいた。

ラグ「ついにシングルかぁ、どんな相手とバトルなんだろう？」

ラグは次の対戦相手が気になるようだ。

ラグ「もしかしてガブリアスとかボーマンダ？いや、サンダーかも。はたまたレックウザ！？とにかくキノガッサやサンダーさん達と同じくらい強かったら・・・勝てるのかな？」

ラグは自問自答していた。そして入場の時間になった。

ラグ「まあどんな相手かは知らないけど頑張ろう！」

ラグは自身に気合いを入れて入場した。すると相手側も今ちょうど入場したところらしい。

ラグ「さて、相手さんは・・・えっ、うそ!？」

ラグは対戦相手を見て驚いた。一方観客席でもみんな驚いていた。

サンダース「おい、あれって……」

アクア「まさかだったね……」

キノガッサ「おいおいうそだろ？」

キノ「これはビックリですね……」

ポリ2「この状況が起こる確率はかなり低いですよ。」

ハスボー「ラグ大丈夫かなあ？」

アクア達だけではなく観客みんなが騒いでいた。その理由は……

ラグ「これはビックリだよ、まさか自分と同じラグラージとバトルすることになるなんて……」

そうみんなが驚いた原因、それは対戦がラグラージVSラグラージだったことだ。

そこにサンドパンが現れた。

サンドパン「え、両者準備は良いですか？」

ラグ「はい。」

ラグラージ「ああ。」

サンドパン「ではレディ……ゴー!!」

サンドパンの合図で試合は開始された。

ラグ「アクアスター」

ラグは星の形を彩った水で攻撃した。しかし

ラグラージ「はかいこうせん」

ラグラージは「はかいこうせん」で応戦、「アクアスター」は消えてしまった。

ラグ「くっ、それなら「ウォーターソリューション」」

ラグは「はかいこうせん」に対抗するため大量の水を発射し「はかいこうせん」をくいとめた。

ラグ「まさか最初から「はかいこうせん」を使うなんて……恐

ろしい人だ。」「ウォーターソリューション」

ラグは再度“ウォーターソリューション”を使いラグラージを攻撃した。

ラグラージ「みずのはどう」

ラグラージは“みずのはどう”を“ウォーターソリューション”にあてて相殺させた。

ラグ「それなら“ハイドロポンプ”」

ラグは水タイプの大技“ハイドロポンプ”を発射した。しかし

ラグラージ「ハイドロポンプ」

ラグラージも“ハイドロポンプ”を使いお互いの技は打ち消し合った。

ラグ「ハイドロポンプ”まで使うなんて・・・強い。」

ラグは冷や汗をかいた。自分の全てを超越されている、そう思った

からだ。

ラグラージ「なんだ、もう終わりか？」

ラグ「くっ……」

ラグラージ「何も来ないんならこっちからいくぞ。」

ラグラージは右手を前に出した。するとラグラージの周りに水の塊が生まれる。

ラグ「あれは……まさか“ウォーターソリューション”！？」

ラグラージ「そうだ、お前のこの技マネさせてもらった。」

ラグラージは驚くラグに平然として言った。

一方観客席では……

サンダース「“ものまね”だな。」

アクア「“ものまね”？」

サンダース「ああ、だよな？キノガッサ、ポリZ？」

キノガッサ「ああ、ありや“ものまね”だ。」

ポリZ「私もそう思います。」

サンダースの問いにキノガッサとポリゴンZは納得の表情で頷いた。

アクア「バトルの一流が言うならそうなんだ……。」
キノ「ところでラグさんはそれに気づいているのでしょうか？」
サンダース「そうか！」
キノガッサ「……まずいな……。」

バトルフィールドでは……

ラグラージ「いくぞ“ウォーターソリューション”」

ラグラージが技名を言うと水の塊はラグを襲った。

ラグ「くっ “ウォーターカリバー”」

しかしラグは“ウォーターカリバー”を使って“ウォーターソリューション”を防いだ。

ラグラージ「なるほど、それがお前の切り札か。」
ラグ「今の僕の……ね。」
ラグラージ「今の？……そうか、確かに今の……ラグラージのお前の切り札はそれだな。」

ラグはラグラージの発言に奇妙なものを感じていた。

ラグ「（この人なんか不思議だ。今の発言からして多分デンラージのことを知っている。それになんだ？なんで“アクアスター”や“ウォーターソリユーション”を使える？あれは異世界の僕が覚えた技なのに・・・とにかく今は攻めるしかない。）“マッドショット”」

ラグはとにかく攻めることを考えて“マッドショット”を放った。

ラグラージ「“ハイドロポンプ”」

それに対してラグラージは“ハイドロポンプ”を放った。

ラグ「みずタイプの超高ランク技をまた!？」

2つの技はぶつかったが“マッドショット”はすぐに消されてしまった。

ラグ「それなら“ミラーコート”」

ラグは“マッドショット”を打ち抜いてきた“ハイドロポンプ”に対して“ミラーコート”を発動した。

ラグ「これなら“ハイドロポンプ”を反射できる。」

ラグラージ「甘いな。」

ラグ「えっ!？」

“ミラーコート”に“ハイドロポンプ”が激突した。しかし“ミラーコート”は反射していない。

ラグ「ど、どうして……」

ラグラージ「“ミラーコート”をよく見て見ろ。」

ラグ「え?」

ラグはラグラージに言われて“ミラーコート”を見た。すると“ミラーコート”にはヒビがはいつており今にも壊れそうだった。

ラグ「そんな……」

ラグラージ「そして……崩れる!!!」

ラグラージが言った瞬間に“ミラーコート”は割れ“ハイドロポンプ”がラグを襲った。その衝撃でラグは吹き飛ばされ壁に激突した。

キノガッサ「な、なんだよあの威力。」

サンダース「アイツ強すぎだろ。」

ポリ2「“ものまね”も使えて能力も高い……なんなんですかあ

のラグラージ。」

アクア「でもあのラグラージどこかでみたような・・・」

ハスボー「あ、それ僕も思ったよ。」

キノ「あ、またなにか技を出しますよ。」

バトルフィールドではキノの言ったとおりラグラージがなにか構えをしていた。

ラグラージ「くらえ“しんくうは”」

ラグラージはパンチを空振りするとそこから空気の渦が生まれラグの方へ飛んでいった。

サンダース「おい、あいつ“しんくうは”使ったぞ。」

キノガツサ「“しんくうは”は本来ラグラージは覚えられない技・・・

・ましてやタイプが違うのに覚えられないはずがない。」

ポリZ「ですよね？あのラグラージなんなんでしょう？」

サンダース、キノガツサ、ポリゴンZはラグラージが“しんくうは”を使ったことに不信感を抱いていた。

キノ「本来覚えられない技を使うなんて・・・」

ハスボー「ラグ、大丈夫かなあ？」

ハスボーの不安そうな問いにアクアが答える。

アクア「大丈夫だよ。ラグちゃんだって強いしいざとなればデンラ
ージがあるし。」

ハスボー「そうだね、ラグなら大丈夫だよね。」

ハスボーは改めてバトルフィールドを見た。しかしアクアは不安そ
うな顔をした。

アクア「（ああやって言ったけどホントはとても不安だよ。でもラ
グちゃん、私はラグちゃんを信じてるから。だから全力で頑張っ
て！！）」

アクアは思いを心の中でのみ語った。

第三十話 ラグVS??? (後書き)

ラグ「なんで僕とラグラージなの？」

いやなんでって・・・理由があるからだよ。

ラグ「理由は？」

それは秘密。

ラグ「なんか変だなあ。」

こら、僕が授業中に頑張って考えたのをバカにして・・・

ラグ「授業中に考えたんだ・・・(汗)」

・・・まあ許してくださいえ、ラグの兄貴・・・(汗)

第三十一話 謎のラグラージの正体は？（前書き）

さて、今回はラグラージの正体が分かります。

ラグ「意外な人？」

多分誰も予想していないだろと思ってるよ。

第三十一話 謎のラグラージの正体は？

今、ラグは息は荒いが立っていた。相手のラグラージは余裕そうだが隙はない。ラグラージが“しんくうは”を使った後どうなったのか、それは数分前になる・・・

ラグラージ「くられ“しんくうは”」

ラグラージの“しんくうは”は真っ直ぐラグの方へ飛んでいった。しかしその“しんくうは”は途中で尖った岩に止められてしまった。

ラグラージ「なんだ“ストーンエッジ”だと！？まだ動けたか。」

ラグラージは少し不思議そうにそう言った。すると壁の瓦礫がボロボロと落ちながらラグが壁から脱出した。

ラグ「もちろん、まだ動けるよ。防御は堅いから。まだ倒れないよ。」

ラグラージ「そうか・・・」

ラグラージはフツと少し笑って言った。そして現在に至る。

ラグ「あなたは一体なんなの？僕のオリジナル技を使ったり“しんくうは”を使ったり・・・まさかなにか自分に改造をしたり・・・」
ラグ「ラージ」してない。教えてやるう。お前の技は“ものまね”でまねただけだ。実際に覚えている訳ではない。」
ラグ「なるほど、そういうことか。」
ラグ「ラージ」そして“しんくうは”は・・・努力したからだ。」

ラグ「ラージは恐そうに威厳のある感じで言ったがラグはその言葉をきっかけに真剣な表情からいつもの天然な表情に戻った。

ラグ「へえ、すごいや。努力したら僕もできるかな？」

ラグは地面に座ってそう言った。口調や態度からして分かるとおり、ラグは普通に友達や親類と話すようにだ。

ラグ「ラージ」お前今は仮にもバトル中だぞ？そんな無防備な態度を・・・」
ラグ「だって疲れちゃったんだもん。口調も堅苦しいし、僕堅苦し
いのは苦手だから。」

ラグは苦笑いしながら言った。

ポリ「さ、流石ラグ。のんきですね・・・。」
キノガッサ「まあそこがアイツのいいところ。」
ポリ「それはもちろん、分かってますよ。」

キノガツサ「アイツがのんきだからみんないつも楽しいんだ。」

キノ「へえ〜キノガツサもたまにはいいこというだ。」

キノガツサ「まあな。」

アクア「ラグちゃん、なんかリラックスしてるね。」

ハスボー「ねえ、僕思い出したんだけどさ。」

アクア「ん？」

ハスボーの発言にみんなが注目した。

一方バトルフィールドでは

ラグラージ「ははは。」

ラグ「な、何？いきなり笑って・・・どうかしたの」

ラグはラグラージの変化に戸惑い質問する。しかしラグラージから返ってきた答えはラグをびっくりさせるものだった。

ラグラージ「そりや笑いたくもなる。なにせ息子の天然な性格は全然直ってないんだからな。」

ラグ「直ってないって・・・あれ今息子って・・・」

観客席

キノガツサ「なあハスボー、何が分かったんだ？」

ハスボー「うん、もしかしてバトルフィールドにいるラグラージは

ラグの・・・」

バトルフィールド

ラグラージ「そうさ、お前は俺の息子。つまりお前の・・・」

ハスボー&ラグラージ「お父さんだ。」

ラグ&メンバー（ハスボー以外）「ええー!？」

キノガツサ「あの人がラグのお父さんか？」

サンダース「でも確かに言われてみれば・・・」

アクア「ラグちゃんのお父さんもラグラージだから・・・」

ポリズ「それなら“しんくうは”以外のつじつまが合います。」

キノ「あの人はラグさんのお父さんだったんですか・・・。」

バトルフィールド

ラグ「お、お父さん!？」

ラグラージ「そうだ。」ラグ「じゃあ名前は？」

ラグラージ「ラトルだ。」

ラグ「お父さんと同じ名前・・・」

ラトル「だから言っただろ、お前のお父さんだって。」

ラトル・・・という名前のラグラージはラグにため息まじりにそう言った。

ラグ「でも・・・」

ラトル「詳しい話しはバトルが終わってからだ。今はまだバトル中だぞ？」

ラグはラトルの意見を正しいと思い頷いた。

ラグ「それじゃあいくよ。」

ラトル「お前の・・・全力でこい。」

その瞬間ラグは力を解放し光に包まれる。

キノガツサ「ラグがなんか光ってるぞ。」

ハスボー「これって・・・まさか。」

アクア「うん、ラグちゃんのデンラージだよ。」

メンバーだけでなく観客もみんな驚いていた。そして光が飛び散った時中からは金色のデンラージが現れた。

ラトル「それがデンラージか。」

ラグ「そうだよ、僕の全開だよ。」

ラトル「そうか、ならば俺も・・・」

ラトルはそういうと、「リミットバースト」と小さくつぶやいた。するとラトルの周りに風がまった。

ポリズ「ラトルさんもなにか仕掛けてきましたね。」

サンダース「ああ、そのせいで会場全体の空気の流れが変わった。」

一方バトルフィールドでは

ラグ「それがお父さんの本気？」

ラトル「ああ、今自分にかけていた制限リミットを解除した。」

ラグ「さっき言ってたリミットバーストか・・・。」

ラトル「では始めようか、デ NRAI ジ VS ラグ ライジ リミットバースト Ver の勝負だ。」

ラグ「うん!!」

今ここに1つの歴史が刻まれようとしていた。

第三十一話 謎のラグラージの正体は？（後書き）

ラグ「僕のお父さんかあ。」

そう、君のお父さんでした。

ラグ「それにしてもリミットバーストって……」

将来ラグも使うよ。

ラグ「ホント!?!」

バージョンアップさせてね。まあものすごく先だけど。

ラグ「はぁ……」

第三十二話 雷光の蒼水VS限定解放の蒼水（前書き）

さて、親子対決に決着です。

ラゲ「どっちが勝つの？」

たあ？

第三十二話 雷光の蒼水VS限定解放の蒼水

自身を最強の姿へと変化させた2人のラグラージ、ラグとラトル。

その2人が立つフィールドには少しの電気とすがすがしい風が舞っていた。

最初に動いたのは自身の能力の制限を解放ーリミットバーストーしたラトルだ。

ラトル「アクアジェット」

ラトルは自身の周りに水を帯びてラグへ突進していく。普通のラグラージなら出せないスピードだ。しかし

ラグ「はああああ!!」

伝説の存在ーデンラージになったラグも負けずに持っている大剣“ウォーターカリバー”で対抗する。その2つの技がぶつかり合った瞬間、2人の間には凄まじいエネルギーが発生し爆発した。

アクア「な、なにこれ!？」

サンダース「普通に戦ったらこんなことにはならないぞ。」

2人のパワーに唾然とするメンバー達や観客達。一方バトルフィールドでは

ラトル「ハイドロカノン”は今のお前には効かないな。“ハイドロランチャー”」
ラグ「お父さんのオリジナル技か、それなら“ホーリーティアブレス”」

2人はお互いに自身の高ランク技を放ちそれがぶつかると。
フィールド、それを通り越して観客席までその衝撃は伝わる。

ラトル「強いじゃないかラグ。」
ラグ「お父さんこそ、オリジナル技まで持つてるなんてビックリだよ。」

ラトル「お前の父親だぞ？まだまだこんなものじゃないさ。」
ラグ「それじゃあ・・・“10まんボルト”」
ラトル「“はかいこうせん”」

2人は少し話をしてまた技と技をぶつける。

キノガツサ「またか」

キノ「すごいですね、技を出す度に衝撃がここまで・・・」
ハスボー「あれ、ポリZ何やってるの？」

ハスポーはパソコンをうつっているポリゴンZをみて質問した。

ポリZ「2人の技などのデータを見ているんですが・・・凄すぎます。」

ハスポー「なんで？」

ポリZ「普通“はかいこうせん”でたまる数値は500なんです。ラグモラトルさんも最高値が640なんですよ。」

ハスポー「ええー!？」

あまりの数値の高さにハスポーは驚きの表情を見せた。他のメンバーもだ。

キノガツサ「こりゃあれか、俺たちのレベルじゃないってことか？
サンダース「かもしれないな。」

バトルフィールド

ラグ「ウォーターシユート」

ラトル「水流波」

ラグは“ウォーターカリバー”の“ウォーターシユート”で、ラトルは“みずのはどう”の強化版で互いを攻撃、相殺し合った。そし

てぶつかり水しぶきが上がった瞬間ラグはラトルの方へ移動した。
ラトルもだ。

ラグ「“きあいパンチ”」

ラトル「“ギガインパクト”」

互いに相手に接近し打撃系の技を使うがこれも相殺してしまつ。

ラグ「“かみなりパンチ”」

ラトル「“れいとうパンチ”」

互いに拳と拳でぶつかりあふ。その度に会場ではドン！！と音がする。

ラグ「（相殺・・・僕の方も結構頑張ってるんだけどやっぱりお父さんは強いなあ。どうやったらダメージをあたえら・・・）」
ラトル「“アームハンマー”」

ラグがどうやったらダメージを与えられるか考えているとラトルは隙を見て“アームハンマー”をラグに使う。しかしラグはそれを避けきつた。

ラトル「“アクアテール”」

ラトルは隙もなく“アームハンマー”をよけられ自分の尻尾の近くにいるラグに対して“アクアテール”で追撃、あまりにも素早い判断にラグは攻撃をくらいラトルからすこし離れた。

ラグ「（隙がない・・・まるで僕が“アームハンマー”をよけることを分かってて攻撃したみたい・・・。それなら）“ウォーターソリューション”」

ラグはなにを考えたのか“ウォーターソリューション”をラトルに向かって放った。

ラトル「“ものまね”、そして“ウォーターソリューション”」

ラトルも“ものまね”で“ウォーターソリューション”をコピーしすぐ放つ。

2つの技はぶつかりまた水しぶきをあげたがその水しぶきが終わったとき、ラグの周りに水の短剣があることに気づいた。

ラトル「オリジナル技か。」

ラグ「いくよ、“ハイドロステインガー”」

ラグの声と共に水の短剣はラトルめがけてとんでいく。

ラトル「く、「まもる」」

ラトルはなんとかしようとして“まもる”を発動、“ハイドロステインガー”をやり過ぎた。ラトルは正面を見た。しかしそこにラグはいなかった。

ラトル「一体どこへ・・・」

その時ラトルは頭上からなにかがくるのに気づき頭上を見上げる。そこにはラグがいた。

ラトル「なにをしようとしているのかは知らんが無駄だ。“はかいこうせん”」

ラトルはラグにむかって“はかいこうせん”を放ち撃墜しようとする。しかしラグは煙になって消えてしまった。

ラグ「ウォーターソリューション」

ラトルが驚いているところにラグがラトルに“ウォーターソリューション”を放つ。ラトルは避けきれずくらったがラトルもまた煙に

なつて消えてしまった。

キノ「2人共に“かげぶんしん”だったんですかね？」

サンダース「そんなところだろう。」

キノガッサ「まさか俺たちが気づかない程のスピードで“かげぶんしん”するとはな。」

この“かげぶんしん”には観客はもちろんメンバーも驚いた。

ラトル「まさか“かげぶんしん”していたとはな・・・強くなったなラグ。」

ラグ「僕はまだまだだよ。でもすこしでも強くなれた気がする・・・みんなのおかげで。」

ラトル「そうか、いい仲間をもったな、ラグ。」

ラグ「うんっ!!」

ラトルの言葉にラグは自信を持って答える。

ラトル「さて、それじゃあ見せてくれ。お前の、このたった何日間かで成長を。」

ラグ「うん、その代わりお父さんもだよ。」

ラトル「もちろんだ。」

ラグとラトルはお互いに全てをぶつけると約束するとそれぞれ技の

構えに入る。

するとラグの周りには電気が、ラトルの周りには水の粒が発生した。同時にラグの右拳に電気が、ラトルの右拳には水のエネルギーが集まる。そのエネルギーはしだいに増えていき、大きな光を放つ。今バトルフィールドには金色と蒼色の光が溢れていた。

サンダース「す、すごい。」

ポリズ「もの凄いエネルギーですよ。数値は850って・・・」

ハスボー「850!？」

キノ「凄まじいですね。」

キノガツサ「まさかこの会場壊したりしてな・・・いやありえるか。」

こうやってメンバーがそれぞれ感想を述べている中、アクアだけはずっと思っていた。

アクア「（そつかあ、デンライジになったらこんなに強かったんだ、ラグちゃん。ラグちゃんのお父さんも相当強いけど全力で悔いの残らないようにがんばってね、ラグちゃん。）」

アクアは心の中でラグを応援していた。

その頃バトルフィールドではエネルギーが膨れ上がり、今にも爆発しそうな状態だった。

ラグ「いくよ、お父さん。」ラトル「こっちからもだ。」

2人の準備が終わりお互いに突っ込みながら技を発動させる。

ラトル「清らかなる蒼水よ、我が力となりこの拳に宿れ、清水包羅

“ハイドロスマツシャー”」

ラグ「雷よ、僕に力をかけて。雷拳撃衝“デンインパクト”」

ラグとラトルの技は拳と拳でぶつかり合った。その瞬間凄まじい風が発生した。

もちろん観客席にも衝撃がくる。

キノガツサ「くわー、コイツらはあんまりだろ。」

ポリズ「ええ、ぼ、僕のパソコンもあまりにも数値が高すぎてエラーを起こしていますよ。」

ハスボー「と、飛ばされそう。」

キノ「ハスボーさん大丈夫ですか。」

サンダース「どうしたアクア？」

サンダースはアクアが静かなので気にして声をかけた。すると

アクア「ほらみて、フィールド……」

そう言われてサンダース、それに続いてメンバーや観客がフィールドを見た。すると

サンダース「穴が・・・開いてる・・・。」

そう、フィールドにはまるで隕石でも落ちたかのように大きな穴が開いていた。

そしてその両サイドにはラグとラトルが倒れていた。

サンドパン「りよ、両者戦闘不能よって・・・。」

サンドパンが決着を宣言しようとしたとき、ラグの体が少し動きラグの口から言葉が発せられた。

ラグ「ま・・・って。」

非常に弱っており弱々しいはずなのに力ず良くさが感じられる声で発せられたその一言によりサンドパンの宣言は止められラグは立ち上がった。サンドパンはラトルの様子も見るがラトルは呼吸はしているが動く気配はない。

サンドパン「では改めて勝者は・・・ラグ。よってバトルフェステイバル ラムサール大会優勝はラグのチームに決定いたします。」

こうしてバトルフェスティバル ラムサール大会は幕を閉じた。

ラグ「僕たちの絆の勝ちだったね・・・お父さん。」

第三十二話 雷光の蒼水VS限定解放の蒼水（後書き）

ラグ「はあくなんとか勝てた。」

ラトルも強かったね。リミットバーストってすごいねえ。

ラグ「流石お父さんだよ。」

尊敬してるの？

ラグ「もちろん。」

そりゃラトル出して良かった。

第三十三話 真相、そして決定チーム名（前書き）

さて、親子対決のあとです。

ラゲ「しんくうは”の理由って・・・」

意外に普通だったね（汗）

第三十三話 真相、そして決定チーム名

バトルフェスティバル終了から3時間後ラグもラトルも回復し今はラトルの話を聞いていた。

ラトル「まあラグがデンライジになれるのは知っていたが本当になつていたのにはびっくりしたよ。まさかここまで強くなっていたとは。」

ラグ「えへへ。」

ラグはお父さんにほめられて少し照れていた。

ポリズ「ところでラトルさん。」

ラトル「ん？」

ラトルは真剣な眼差しでみるポリゴンズに目を向けた。

ポリズ「教えてくれませんか、あなたの“しんくうは”について。」
ラトル「ああそうだな。簡単に言えば“しんくうは”は本当に努力なんだ。」

ポリズ「でも本来は覚えられません。なのに覚えたのはすごすぎることです。」

ラトル「あ、そう？」

ラトルはポリゴンZの話に驚かず、まるで当然のごとくきょとんとしていた。

ラトル「だって努力すればできるだろ？キノガッサのバトルの時に
“ものまね”すれば。」
ポリン「え……。」

ラトルの言葉にあたりはしばらく静まり返った。

ポリン「“ものまね”……ですか？」
ラトル「ああ。」

まさかキノガッサの時に“ものまね”を使っていたとは知らず、驚くポリゴンZ。他のメンバーもだ。

ポリン「でも“ものまね”は“ウォーターソリューション”をコピーしたからつかえないんじゃない……。」
ラトル「“ものまね”を2つ使えばできるぞ。」

ラトルの言葉にまたあたりは静まり返った。

サンダース「ラトルさんって“ものまね”を使い分けれるのか？」
ラトル「まあな、といつてもたまたまそついう質を持ってただけさ。」

「キノ「たまたま・・・ですか。」
ラトル「そう。」

キノガツサ「流石ラグの父ちゃんだな。すげー。」

キノガツサはあまり人を尊敬しない性格だがこれには尊敬していた。

アクア「でもそれってある意味反則じゃない？」

ラトル「まあ普通ならな。だけど許可を取ったんだ。」

アクア「許可？誰に？」

ラトル「ミュウにさ。」

一同「ミュウ!？」

ミュウ「そうだよ、僕がいいよって言ったんだよ。」

ラトルが許可を取った相手がミュウだと言つとミュウはどこからともなく現れた。

キノガツサ「おい、ミュウ。人にセコいことさせるなんて・・・」

ミュウ「違うよ〜（汗）ちゃんと理由があつたんだよ。」

キノガツサ「理由だと？」

ラグ「理由ってどんな？」

ラグはミュウに不思議そうに聞いた。

ミュウ「ラグはデンライジになって強くなった。でもその力を正しくしかもフルで発揮できるとは限らない。」
キノガツサ「まあな、強い力を手に入れてもそれをちゃんと使えるとは限らないな。」

ミュウ「でしょ？そしたら君たちがバトルフェスティバルにでるっていうから、せっかくならそれを試してみようと思っただけ。でもデンライジは相当強い、少なくともラムサールに勝てる相手はいないと思っただんだ。」

サンダース「まあ確かにあれはイレギュラーな強さだもんな。」

ミュウ「うん、そうなんだよね。んで、そしたらちようどバトルから連絡があつてラムサールに用事があるらしいからそれならバトルしてみないって誘っただんだ。」

ポリズ「なるほど。」

ミュウ「そしたらバトルするって言ってくれたんだ。でもバトルするにしてもラグが強すぎるから“ものまね”の許可を出したんだ。」
アクア「なるほどね。」

ミュウの長い長い話しを聞いたラグ達はそれに納得した。

ラトル「でもやっぱり“ものまね”より“水分身”の制限をなくしてほしかったなあ。」

ミュウ「それはダメ。いくらなんでもダメだよ。」

ラグ「ねえ、なに、“水分身”って？」

ラグはラトルの言った“水分身”という言葉が気になり質問した。

ラトル「“水分身”は“かげぶんしん”を水で作るようなもんだ。」

水で出来ている分重さもあるし体積もある。まあある程度技をくら
つたら水になり飛び散るけどな。」

ラグ「それってつまり・・・」

ラトル「使えればあのフィールドに俺がもう一人いたことになる。」

ミュウ「だからそんなことしたら会場が無くなっちゃうでしょ。」

ラトルは楽しそうに話したがミュウに怒られていた。

ラグの頭の中ではラトルのホントの本気はどれほどのもんなんだろう
うと思った。

すると・・・

???「すいませ〜ん、ラグさんいらっしやいますか？」

ドアの方で声がした。

ミュウ「はあ〜い、ってネンドール？」

ミュウがドアを開けるとそこにはネンドールがいた。

ネンドール「ご無沙汰です、ミュウさん。」

ミュウ「うん、久しぶり。ところでどうしたの？」

ネンドール「いえ、今回のバトルフェスティバルで優勝したチーム
がここにいと聞いたので・・・。」
「ミュウ「ああ、ラグ達のこと
か。いいよ、上がって。」

ネンドール「お邪魔します。」

ネンドールがミュウの家に行くと後ろにはヤジロンがいた。

ミュウ「アシスタント？」

ネンドール「はい、良い子ですよ。」

ミュウ「こんにちは。」

ヤジロン「こ、こんにちは。」

ヤジロンはまだ子供らしく幻のポケモンを目の前に少し緊張していた。

ネンドール「すいません、この子いとこなんですよ。仕事を見たいって言うもんで・・・」

ミュウ「そっかあ、あ、ごめん。上がって上がって。」

ミュウは話しに夢中になり客をずっと玄関で話していたのでとりあえず上がらせた。

ミュウ「という訳でこの人はネンドール。ラムサールの新聞を書いている人だよ。」

キノ「新聞記者の方ですか・・・そちらの方は？」

キノは不思議そうにネンドールの後ろに視線をやりながら言った。

ミュウ「あの子はヤジロン。ネンドールのいとこなんだ。」
キノ「そうだったんですか。」

キノガツサ「ところでその新聞記者のネンドールがなんでここに？」
ミュウ「君達を取材しにきたんだよ。」

キノガツサ「取材!？」

ミュウ「そう・・・だよ、ネンドール?」

ネンドール「はい。今回のバトルフェスティバルは参加チームは少
なかったもののやはりバトルフェスティバルですから人気があつて
・・・」

ラグ「でも取材といつてもどんな感じですか、いいのかな・・・」

ラグは・・・というかメンバーは取材自体が初めてなので何をすれ
ばいいか戸惑った。一人を除いて・・・

キノガツサ「さて、なにかから答えようか?ん、強くなる秘訣?そり
ゃバトルしまくることさ。そうすりゃ強くなる。・・・なにキノガ
ツサさんかっこいい?おーそうかそうか。ありがとよ。これからも
ちびっ子たちにかっこいい俺を・・・ごぶっ!？」

キノガツサは調子に乗って発言しているとどこからともなく拳が飛
んできた。

キノ「キノガツサったら・・・なんですぐ調子に乗るのかなあ。」
ネンドール「ははは、皆さん仲がいいんですね。」

サンダース「まあ悪くはないな。」
ラグ「みんな仲良しだもん。」
アクア「というか友達の集まりだしね。」
ポリズ「仲良しが一番です。」
ハスボー「そうそう。」

こうして和やかなムードで取材が始まりいよいよ最後の質問になった。

ネンドール「では最後に……このチームの名前はなんですか？」
ラグ「名前……ですか？」
ネンドール「はい、チーム 優勝みたいな表紙にするので……」
ラグ「ん〜。」

ただ大会に出ただけなのでチーム名を全然考えていなかったラグ達は困っていた。すると

ラトル「「絆」がいいじゃないか？ラグが俺に勝ったときに「絆」って言うてたし。」
ラグ「いいね、絆。みんなはどう？」
アクア「私は賛成。」
サンダース「俺もだ。」キノガツサ「文句のつけようがねえ。」
キノ「いいチーム名ですね。」
ポリズ「なんかしつくりきます。」
ハスボー「それにかっこいい。」

メンバーはチーム名に賛成してくれた。

ラグ「それでは。僕達のチーム名は「絆」です。」

こうしてラグ達のチーム名は「絆」になった。

第三十三話 真相、そして決定チーム名（後書き）

ラグ「チーム名は絆にきまり〜。」

うん、いい名前じゃないかラグ。

ラグ「ありがとう。」

さて次回からは次の街へいきますよ。

第三十四話 フォルターナーへ行こう（前書き）

今回短いです。

ラグ「なんで？」

ついに次の街へ・・・と思ったら前回の時点ですどこに行くかはつきりしていなかったからさ（汗）

ラグ「要はミスしちゃったんだね（汗）」

第三十四話 フォルターナーへ行こう

ラトルとの会話から1日経った今日、ラグ達「絆」はラムサールを去ろうとしていた。

ミュウ「よし、忘れ物はないね？」

ラグ「うん、大丈夫。」

ポリズ「ミュウ、本当にありがとうございました。」

ミュウ「みんなが強くなれて何よりだよ。」

キノ「ミュウツーさんもありがとうございました。」

ミュウツー「俺はなにもなっていないさ。今回手に入れた強さはお前達が自分で掴んだ強さだ。これからの旅も自信もって頑張れよ」

キノ「はい。」

キノが返事をした瞬間

キノガツサ「ミュウツー、次は負けないからな。」

とミュウツーに拳を突き出しながら笑顔で言った。

ミュウツー「ああ、その時はお互いに全力で勝負だ。」

ミュウツーも拳を突き出し、キノガツサの拳に合わせた。

アクア「キノガッサはホントにバトル好きだね〜。」
ハスボー「あのミュウツーもバトル好きみたいだよ。」
アクア「そうなの？」
ミュウツー「うん、さっきミュウに今度バトルしようっていったから。」
アクア「そうなんだあ。」

こんな感じで話しているとミュウは思い出したようにメンバーに聞いた。

ミュウ「あ、そうだ。みんなこれからの行き先は？」
ラグ「それが・・・ダークポケモンの情報もないからとりあえず近くの街に行こうかって。」
ミュウ「そっか、それならちょうどよかった。」
ラグ「ん？」
ハスボー「なんでちょうどよかったの？」

ラグ達はミュウの発言に？マークを出しており、ハスボーは質問した。

ミュウ「実はここの近くの街でポケモンが暴れてるって情報が入っているんだ。」
アクア「ポケモンが・・・」ラグ「暴れてる？」
ミュウ「うん、そのポケモンが暴れてる影響で地割れが起きたとか。」

「ポリZ「地割れですか!？」」

ポリZ地割れを起こしたと聞き驚きの表情をしていた。

ミュウ「それだけじゃない、火山まで噴火寸前らしいんだ。」

サンダース「火山まで操るのか。」

キノ「すごく強大な力の持ち主ですね。」

ミュウ「うん、そのパワーに街の人は困っているらしいんだ。」

ラグ「ところでそのポケモンってなんていうの?」

ミュウ「分からないけど地面を裂き、火山を動かすポケモンとしか・

・ね。だけどそうとう強いと思うよ。」

キノ「その街というのは・・・?」

ミュウ「フォルターナーっていう街だよ。近くに火山がある街さ。」

キノ「近くに火山・・・私とキノガッサやハスボー君は行っても大

丈夫でしょうか?」

キノは炎が苦手な自分とキノガッサ、ハスボーは大丈夫か心配そうに聞いた。すると

ミュウ「大丈夫だと思うよ。街はもちろん火山だって長時間でなければ。」

キノ「そうですか、よかったです。」

キノは大丈夫と聞いて安心したようだった。

ラグ「それじゃあ次はフォルターナーに行こうよ。ダークポケモンの情報も入るかもしれないし。」

サンダース「ああ、いいぜ。」

アクア「街の人の助けになれるかもしれないし。」ポリズ「私も気になりますね。大地を切り裂き火山を操るポケモン・・・研究したいです。」

ハスボー「僕もそのポケモンみてみたい。」

キノガッサ「俺も行きたいな。暴れてるポケモンとバトルしたいし、かわいい娘もいるかも・・・ぐふっ!？」

キノ「キノガッサのナンパは反対ですけどフォルターナーには行ってみたいです。」

ラグ「それじゃあ全員の意見で次はフォルターナーに行こー!」

そんなこんなで会話は終わりいよいよお別れの時がきた。

ラグ「それじゃあね。」

ミュウ「うん、みんなも元気でね!。」

こうしてラグ達は砂の街「ラムサール」を去った。

「新たな力」と「結末のチーム名」を手に、次の街フォルターナーにむかうために。

第三十四話 フォルターナーへ行こう（後書き）

ラグ「次の街はフォルターナーっていうんだ。」

うん。

ラグ「名前の由来は？」

思いつき（笑）でもなんか炎って感じがしない？

ラグ「まあ確かに……。」

第三十五話 炎の街 フォルターナー+??? (前書き)

さていよいよ炎の街フォルターナーに到着です。

ラグ「今回暴れているポケモンもわかるんだよね？」

そっだよ。

第三十五話 炎の街 フォルターナー+???

ミュウやミュウツーに別れを告げ砂の街ラムサールから炎の街フォルターナーへ向かったチーム絆。

今はもう少しでフォルターナーに着く位の距離まできており雑談をしていた。

ハスボー「そういえばさ、ラグはラトルさんとのバトルの時にいつ“かげぶんしん”を使ってたの？」

ハスボーの質問にラグは答えた。

ラグ「あれは僕が“ハイドロステインガー”を使ってお父さんが“まもる”を使ったときに使ったんだよ。多分お父さんもね。」

ハスボー「なるほど。」

ハスボーはラグの説明に納得したようだ。

キノ「さて着きましたよ、フォルターナーです。」

キノに言われて見てみるとそこには街があつた。一番印象的なのは奥にそびえる大きな火山。次に高い煙突がムクムクと煙を出していた。

サンダース「あれがフォルターナーか。」

キノ「はい。」

キノガッサ「でかい煙突にでかい火山。ホント炎の街って感じだな。」

キノガッサは火山や煙突を見上げていった。

ポリズ「あの煙突は鍛冶屋の人やパン屋の人が使っているらしいですよ。」

アクア「鍛冶屋の人かあ。」

キノガッサ「なあ鍛冶屋もいいけど、そのパンうまいのか？」

キノガッサは目をキラキラさせながらいった。

ポリズ「人気は・・・あるみたいですよ。なんでもくるみパンがおいしいらしいです。」

キノガッサ「おおく行ってえ、行ってえ。それじゃあ、まずそこに行こうぜ。」

ラグ「うーん、泊まれそうなところも探さないといけないしなあ。」

キノガッサ「そう言わずに・・・な！」

ラグ「うーん、みんなはどう？」

困ったラグはメンバーに意見を聞いた。

サンダース「まあ宿屋探さないといけないのは事実だからな。」
アクア「そう考えるとやっぱり宿屋探しが大事かな。」
キノ「野宿は大変ですしね。」
ハスボー「でも宿屋探しをした後なら……。」
ポリズ「何にも問題ありませんね。」
キノガツサ「おー、ホントか？それじゃあ早く宿屋を探さねえと
！！」

結果的に宿屋探しをした後パン屋を訪れることになりそれが決定した瞬間キノガツサは猛スピードで街の中心へ向かった。

キノ「……良かったんですか？」

キノは不思議そうな顔でラグに言った。

ラグ「まあ実は僕もお腹空いてたし、宿屋を探した後なら問題ないしね。」

キノ「でもお金が……。」

キノは不安そうに聞く。しかしラグは余裕の表情だ。

ラグ「大丈夫、この前の大会の賞金があるからそれをみんなで分けて使えばいいよ。」

キノ「なるほど、それなら安心ですね。」

そして歩くこと10分後、炎の街フォルターナーの中心街に到着した。

ラグ「はあくやつと中心街だね。」

サンダース「ああ、意外に長かったな。」

キノ「えつとキノガツサは・・・」

キノはキヨロキヨロと先に街に行つたはずのキノガツサを探した。
すると

キノガツサ「おゝい。」

ポリズ「キノガツサ？」

キノガツサが手を振りながらこちらへ走つてきた。

ハスボー「キノガツサ、どうしたの？」

ハスボーは走つてきて汗だくなキノガツサに聞いた。

キノガツサ「どうしたもこうしたもねえ、見つけたんだよ。」

ハスボー「な、何を？」

キノガツサ「宿屋だ、宿屋。」
メンバー「え〜!?!」

メンバーはキノガツサの発言に驚きを隠せなかった。

ラグ「ねえ、もうその宿屋に「泊まります」言ってきたの？」

キノガツサ「ああ。」

アクア「どんな宿？」

キノガツサ「きれいな和風の宿だ。」

サンダース「お金は？」

キノガツサ「なんと無料だ。」

キノ「・・・その宿大丈夫？」

キノガツサ「大丈夫！まだ全然きれいだったぜ。」

ポリズ「他のお客さんは？」

キノガツサ「いねえよ、俺らだけで使えるぜ。」

ハスボー「わーい、宿屋さんを僕たちだけで使えるんだ。」

ハスボーは自分たちだけで使えると喜んだが、他のメンバーは怪しいと思っていた。しかし

ポリズ「怪しいですがこの時間帯だと他の宿も開いてるか分かりませんね。」

アクア「え〜!?!」

サンダース「そんなに早く閉まるのか？」

ポリズ「閉まるというか近頃フォルターナーの焼き物を買おうと旅行者が増えてますからその予約がいっぱいかと。」

ハスポー「なるほど。」

ラグ「それじゃあとりあえずその宿屋さんに行ってみる？」

サンダース「ああ、そうだな。」

メンバーは納得の表情でキノガッサについて行った。

サーナイト「いらっしやいませ、お待ちしておりました。」

宿屋の前では女官と思われるサーナイト達がチーム絆の到着を心待ちにしていた。

サーナイト1「お疲れでしょう、お部屋はこちらです。」

サーナイト2「お荷物をお持ちいたします。」

ラグ「あ、はい。ありがとうございます。」

サービス精神満タンのサーナイト達にラグ達は少し押されていた。それから少し歩くとすぐ部屋に着いた。

サーナイト「ではごゆっくり。」

サーナイトはそう言い残すと礼をして部屋を出た。

サンダース「すごくサービスの良い宿だな。」

アクア「ホント、親切だよね。」

キノガツサ「だろ、しかもこの女将さんが美人で……」

キノ「なるほど、それが狙いでこの宿にしたわけね。」

キノガツサ「え、いや、違うんだ、ホント。」

キノ「ホント?」

キノガツサ「ホントホント。探してたらむこうから宿をお探しですか?って聞いてきたんだ。」

キノ「ふん。」

キノガツサの話しを疑いつつキノは一応了承した。

その時扉からトントンとノックの音がした。

サーナイト「失礼します。お飲みをお持ちいたしました。」

ラグ「あ、どうぞ。」

ラグはなれない丁寧語に苦笑しながら了承するとサーナイトは丁寧に入室して来た。

サーナイト「どうぞ……。」

サーナイトはテーブルにお茶を置いた。しかししばらく黙ったまま止まっていた。

ラグ「サー……ナイト?」

ラグはサーナイトの様子が変わったと思い彼女の前を呼んだ。すると涙を流しながらサーナイトは言った。

サーナイト「お願いします。なんとか私のお願いを聞いて頂けないでしょうか？」

ラグ「サ、サーナイト？」

サーナイト「いらっしやっただお客様にいきなりこんなことを言っただけ失礼だとは分かっています。でもどうしても助けて差し上げたくて・・・」

ラグ「え、え〜とと・・・」

サーナイトのいきなりの行動にラグは戸惑っていた。

ラグ「あわわわわ、ど、どうしよう?」

キノガッサ「ど、どうするもこうするもなあ・・・」

ハスボー「サ、サーナイトさん。泣かないで〜(汗)。」

サンダース「こ、こういう場合どうすれば・・・」

アクア「分かんないよ〜。」

ポリズ「と、とりあえず落ち着いてもらおうというのは・・・」

ラグだけでなくメンバーはいきなりのことに慌てていた。しかし

キノ「大丈夫ですか？落ち着きましょう。お話はそれからしましょう。」

キノが冷静に判断し、サーナイトは落ち着いた。

キノ「・・・それでどうされたんですか？もしよかったら話してくれませんか？」

サーナイト「はい、私達このサーナイトはみんなある一族なんです。」

アクア「このサーナイトさんみんなですか？」

サーナイト「はい、みんなです。私達サーナイトはあるポケモンの側近のような立場だったんです。」

ポリZ「あるポケモン・・・ですか。」

サーナイト「はい。」

キノ「そのポケモンのお名前は・・・？」

サーナイト「はい、グラードンというポケモンです。」

キノ「グラードンさん・・・ですか？」

サーナイト「はい。」

メンバーは聞いたことのない名前に首を傾げた。するとポリゴンZから説明が入った。

ポリZ「グラードンは大陸をつくりあげたと言われる伝説のポケモンです。」

ラグ「大陸をつくったの？」

ポリZ「はい、彼にはそんな能力があります。」

アクア「すごいポケモンなんだ。」

ポリZ「なんでも天気まで操れるとか。」

サンダース「て、天気もか!？」

ポリZ「はい・・・ですよね?サーナイトさん。」

ポリゴンZは優しい目でサーナイトに聞いた。

サーナイト「はい、グラードンはそんな力をもっておられます。でも優しく私達に接してくれるお方です。」

ハスボー「威張ってないってこと?」

ハスボーの質問にサーナイトは苦笑いしながら言った。

サーナイト「威張ってないわけではないですが、みんなのために頑張ってくれるんです。」

キノガッサ「いいやつなんだな。」

サーナイト「はい。しかしこのところグラードンの様子が変わなんです。」

キノ「様子が変わ・・・ですか?」

サーナイト「はい、なんだか急に気が荒くなりして・・・」

ポリZ「急にですか?」

サーナイト「はい、その結果私達はフォルターナーに逃げてきたんです。」

キノガッサ「そして宿屋を経営してる・・・と。」

サーナイト「はい。」

サーナイトはなんとも言えない悲しい表情で答えた。

ポリズ「実は僕達は、このフォルターナーで暴れているポケモンがいるってきいて来たんですよ。」

サーナイト「暴れているポケモンですか・・・ッ!!」

ポリズ「もう皆さんも分かりましたよね？」

ポリゴンZが問うとメンバーはみんな首を縦に動かした。

ラグ「つまり僕達が探しているポケモンと暴れているポケモンは同じ・・・グライドンってことだよね。」

ポリズ「そういうことです。」

ポリゴンZが返答し終わるとサーナイトはラグ達にお願いしてきた。

サーナイト「すいませんがグライドンを助けていただけないでしょうか？私達ではどうしようもないんです。大変なのは分かっています。それでも・・・」

サーナイトが必死でお願いしているとラグはサーナイトの肩の上に手を置いた。

サーナイト「え・・・」

ラグ「僕達はさっきも言ったとおり暴れているポケモンを止めにきました。だから止めます。止めて元の優しいグライドンさんに戻っ

てもらいましょう、ね。」

サーナイトはラグの言葉を聞くとありがととお礼を言った。

それから食事をしたりしてグラードンを止めに行くためのミーティングを行った。サーナイトからは火山の道を教えてもらい明日行くことになった。

そして寝る時間。

その日の夜はメンバーは一つの部屋で寝た。

キノガッサ「いよいよ明日だな。」

サンダース「ああ、そうだな。」

アクア「グラードンさんってやっぱり強いのかな？」

ポリZ「伝説のポケモンですからね、相当でしょう。」

ラグ「僕のデンラージは通用するのかな？」

ラグは少し不安そうに言った。

ハスボー「グラードンさんのタイプで変わるよね。」

ポリZ「グラードンは地面タイプですよ。」

ラグ「・・・“デンインパクト”は聞かないよね？」

ラグは自信の“デンインパクト”が効かないことに結構ショックを受けた。しかし

ポリZ「分かりませんよ、もしかしたら効くかもしれないですよ。」

ラグ「だといいなあ。」

キノ「さあ、明日に備えて寝ましようか？」

キノの一言でメンバーは電気を消し布団に入った。

ラグ「サーナイトのため、ダークポケモンの真相を知るために明日
頑張ろうね。」

アクア「うん。」

サンダース「ああ。」

キノガッサ「おう。」

キノ「はい。」

ポリZ「もちろんです。」

ハスボー「頑張ろー。」

こうしてチーム絆は明日のために眠りについた。

第三十五話 炎の街 フォルターナー+??? (後書き)

キノ「こんにちは作者さん。」

こんにちは、キノさん。今回はキノがきてくれたんだ。

キノ「はい。それにしても暴れているポケモンがグライドンだとは・・・」

まあ大体火山つていたらグライドンかヒードランらへんでしょ。

キノ「でもグライドンはキツくないですか？」

まあね。でも頑張ればかてるかもよ。

キノ「それはもちろんがんばりますけどね。ところで作者さんさつきからパソコンにイヤホン付けてなにを聞いているんですか？」

ん？リリカルなのはのボーカルコレクションだよ。みんな歌うまいし歌詞が良いから心が落ち着くんだ。

キノ「なるほど。」

とくにSnow Rainといつの日にかとなのはさんの歌は最高だよ。

キノ「いい歌ですもんね。」

第三十六話 発見！地底の王（前書き）

さて今回は会っちゃいます。

ラグ「グランドンさんと？」

そう。

ラグ「ああ、負けるのかあ。」

どうかな？

第三十六話 発見！地底の王

自分達の探しているポケモンとサーナイトの助けたいポケモンが同じグライドンであることを知ったラグ達。

サーナイトの思いを通すため、ダークポケモンの情報を知るためにグライドンを止めに行くことにした。

キノガッサ「あちいゝもう倒れそう。」

キノ「もう、まだ10分しか歩いてないでしょ。」

ハスボー「僕やキノさんはまだ平気なのにキノガッサはもうバテばてかあ。」

只今フォルターナー付近の火山「フォル火山」内部を探索中。しかしキノガッサが開始10分でバテていた。

サンダース「キノガッサも暑いのは苦手か。」

キノガッサ「ったりまえだ。俺は草タイプだぜ？火とか暑いのは苦手なんだよ。」

ラグ「それじゃあなんでキノさんやハスボーは大丈夫なの？」

ラグの素朴な疑問にキノが答えた。

キノ「多分ハスボー君は水タイプも入っているので大丈夫なんですよ。で、私の場合は里で少々の暑さになら耐えられるように修行し

たのでそのおかげかと。」

ラグ「なるほど。」

アクア「ってことはキノガッサはちゃんと修行をしてなかったってこと?」

キノ「はい、修行の時間にモモンの実などを探しに行っていましたよ。」

キノガッサ「それで何回長老に怒られたことか。」

自身の苦い思い出にキノガッサはため息をしながら言った。

そんな会話から10分後

ラグ「マッドショット」

アクア「みずのはどう」

突如現れたポケモン達とバトルしていた。

キノガッサ「たく、コイツらなんなんだ“しんくうは”」

サンダース「たぶんあれだろ、グラードンに近づかないように俺たちをここで始末しようとしてるんじゃないか。“10まんボルト”」

ハスボー「でも始末されたらグラードンさんを助けに行けないよ。」

「みずでっばう」

ポリズ「だからこうやって戦っているんですよ。“トライアタック

”」

メンバーが必死に対抗していると一匹のマグカルゴが放った“かえ

んほうしゃ”がキノガツサにかすった。

キノガツサ「あっちいゝ、キノゝ!!」

キノ「はいはい、“ホーリーサークル”」

キノガツサ「おお、キノありがとな。」

キノ「どうしたしまして。」

キノガツサはキノの“ホーリーサークル”という回復技によって回復したようだ。

サンダース「にしても数が多いな。」

ポリズ「流石につかれてきますね。」

メンバーはかれこれ30分程戦っていた。それでも敵はまだまだいた。

キノガツサ「あゝもゝめんどくせえな。誰か広範囲攻撃技もってねえのかよ。」

アクア「一応龍ちゃんがいるけどここ暑いからなあ……」

ポリズ「他の皆さんもないですよね……」

ポリゴンZが問うとみんな頷いた。
ただ一人を除いて。

ポリズ「え、ラグ？」

そう、ラグだった。

ラグ「一応あるけどやる？」

キノガッサ「ああ、もう疲れたんでたのむ。」

ラグ「オツケー。」

そういうとラグは自身の手に“ウォーターカリバー”をだした。

ラグ「あ、ハスボー。危ないからバリアーでみんなを守つといて。」

ハスボー「うん。」

そしてハスボーはバリアーを展開し準備ができた。

ラグ「よし、いくよ〜・・・ハッ！」

ラグはデンラージになった。

アクア「デンラージになってどうするんだろ？」

キノガッサ「まさか一体一体“デンインパクト”で・・・」

サンダース「それじゃ広範囲攻撃じゃないだろ。」
キノガッサ「うっ……」

一方ラグは“ウォーターカリバー”に自身の電気を流していた。そして満タンまで溜まるとカリバーは青と黄色の美しい剣になっていた。

キノガッサ「すげー……」

キノ「綺麗ですね。」

アクア「ホントだ」

ポリズ「水に電気を混ぜましたか……」

ハスボー「なにをするんだろう？」

メンバーが見ていると

ポリズ「えっ……」

サンダース「カリバーが……」

キノガッサ「伸びただとおー!？」

そうラグのカリバーが伸びたのだ。

ハスボー「結構大きいね。」

キノ「ラグさんの1.5倍ぐらいありますね。」

アクア「も、もしかして……」

カリバーを巨大化させたラグは

ラグ「よし、それじゃあ・・・えいつ！」

カリバーを横に振った。すると敵はバタバタと倒れていき、ラグがカリバーを戻すと全員気絶していた。

キノガッサ「す、すげーな。」

サンダース「ラグにしては大胆にいったな。」

ラグ「カリバーは切れないようにしたからみんなたんこぶができるくらいだよ。」

キノ「それにしてもラグさんのカリバーはなんでも出来ますね。」

ラグ「まあね。」

ハスボー「というか電気は意味あったの？」

ラグ「その分威力が上がるんだよ。」

ハスボー「なるほど」

メンバーはラグのカリバーの凄さを改めて知り、先へ向かった。

それから1時間

ラグ「ここがたぶん最深部だよ。」

サンダース「長かったな。」

アクア「大体1時間くらいだよ。」

キノガッサ「あゝ暑い。」

キノ「ホント、だいぶ暑くなりましたね。」
アクア「水タイプの私でもキツいなあ……。」
サンダース「おい、みんな伏せる!!」

サンダースの呼びかけでメンバーは伏せた。すると頭上を炎が通り過ぎた。

ラグ「か、“かえんほうしゃ”!？」

ポリズ「みたいですな。」

キノ「一体誰が……」

キノガツサ「おいキノ、よく見て見るよ。」

キノ「え……」

キノガツサは火山の奥を見たのでつられてキノも奥を見た。他のメンバーもだ。

サンダース「なるほどな。」

ラグ「ついに出てきたね。」

アクア「お、大きい……」

グラードン「ぐるるる……」

そう現れたのはグラードンだった。

ポリズ「暑い理由は彼でしたか。」

ハスポー「え、なんで？」

ポリズ「彼には「ひでり」という特性があります。「ひでり」は周りを“にほんばれ”状態、つまり晴れた状態にするんです。」

ハスポー「なるほどね。」

グラードン「グオオオオオ！！」

グラードンは侵入者に対して余程怒っているようだ。

キノガツサ「なんだコイツ。喋れないのか？」

グラードン「ふん、ばかにするなキノコ。」

キノガツサ「なんだ喋れるじゃねえか……ってキノコだと！？
メエなめてんのか？」

キノガツサは自分をキノコと呼ばれてキレた。

グラードン「その頭、まさしくキノコじゃないか。キノコ野郎。」

キノガツサ「おお、いい度胸してるじゃねえか熱熱怪物野郎。」

グラードン「な、熱熱怪物野郎だと！？」

キノガツサ「だってそうだろ、お前暑いし怪物だろ？」

グラードン「貴様、俺様をばかにしやがったな。」

キノガツサ「お前がキノコ野郎なんて言うからだ。今謝れば許してやるぜ。」

グラードン「なに！？そりゃこっちのセリフだ。」

キノガツサ&グラードン「むむむむ……」

キノガッサとグライドンは睨み合つがメンバーはため息をはいていた。

ラグ「なんかキノガッサと似た性格なんだね。」

アクア「みたいだね。」

サンダース「でも伝説のポケモンなんだろう？」

ポリZ「はい、そうですよ。」

ハスボー「それなら強いよね。」

キノ「ですよね。」

ラグ「それじゃあグライドンを助けようか。」

メンバー「おお〜。」

キノガッサ「……………おお……………」

かくしてグライドンとのバトルが始まった。

第三十六話 発見！地底の王（後書き）

キノガツサ「ホントに会っちゃったな。」

そっだよ、会っちゃったよ。今回はキノガツサか。

キノガツサ「ああ、ていっかなんでグライドンの性格あんなにし
たんだ？」

だってグライドンは俺キャラかなあって・・・

キノガツサ「キノコ野郎は？」

口が悪い方が俺様キャラになるからね。

キノガツサ「つまりキノコ野郎っていったから俺キャラから俺様キ
ャラになったのか。」

そゆこと。

第三十七話 VS グラードン（前書き）

今回はグラードンとバトルです。

ラグ「ほとんどキノガッサが戦っけどね。」

まあね（汗）

第三十七話 VS グラードン

グラードンを探すためフォルターナーの近くにある「フォル火山」を探索していたラグたちはその最深部で目的のグラードンを発見していた。そして今バトルをしていた。

ラグ「ハイドロステインガー」

ラグは自身の周りにハイドロステインガーを作り、それを発射する。しかし

グラードン「あまいな、「ストーンエッジ」」

グラードンは地面から岩を出してハイドロステインガーを防いだ。

グラードン「そんな攻撃俺様には効かん。」

キノガッサ「これならどうだ？「ウッドハンマー」」

キノガッサは自身の拳に草を集めてグラードンを殴る。

グラードン「ぐおおおお。」

グライドンはバランスを崩し倒れそうになりが耐えた。

グライドン「このキノコ野郎よくもやったな、“かわらわり”」
キノガツサ「ぐお!？」

グライドンはキノガツサに負けじと“かわらわり”で対抗した。凄まじい衝撃がキノガツサに伝わった。

キノガツサ「こんにやろう・・・」
グライドン「まだやるか・・・？」
キノガツサ「調子のんじゃねえ“リーフメガパニツシャー”」

キノガツサは自身の最強技である“リーフメガパニツシャー”をグライドンに放った。

グライドン「ふん、大したこと・・・ぐ!？」

グライドンは大したことないと判断しモロにくらったがあまりの威力に大ダメージを受けた。その威力はグライドンが宙を舞いとばされるほどだった。

グライドン「ハアハア、やるじゃねえか。」
キノガツサ「だからいっただろ、調子のんなつて。」

こんな感じでほとんどキノガツサVSグライドンの形でバトルは進んでいった。

15分後

グライドン「ハアハアつよいなキノガツサ……」
キノガツサ「ハアハアお前もな、グライドン……」

二人は一度息を整えて……

グライドン「きあいパンチ」
キノガツサ「それならこつちも“きあいパンチ”」

グライドンとキノガツサは互いに“きあいパンチ”で互いの拳をぶつけ合った。

するとキノガツサはその場から消えた。

グライドン「なに、消えただと？」

グライドンは突然のことに驚いたが気配を感じ後ろをみた。

グラードン「なに!?!」

キノガツサ「“こうそくいどう”からの……くえ“やどりぎのタネ”」

グラードンの後ろに回り込んだキノガツサが腕を振るとそこからタネがとんでいき、グラードンにあたると急速に成長した。

グラードン「ぐ……」

キノガツサ「どうだ!?!」

そのタネは成長するとグラードンに巻き付くよなツタになった。

グラードン「やるな、キノガツサ。しかし……うおおお」

キノガツサ「な、なんだ!?!」

キノガツサが地面に着地し上、つまりグラードンを見るとツタはちぎられて意味がなくなってしまった。

キノガツサ「力づくかよ……」

グラードンの力技にさすがのキノガツサも苦笑いになる。

グラードン「いくぞ“マッドショット”」

グラードンはキノガツサに向けて土の塊を放った。

キノガツサ「それくらい余裕だぜ“ソーラービーム”」

“マッドショット”に対しての“ソーラービーム”は非常に強力ですぐに“マッドショット”を貫いた。

グラードン「やるじゃねえか、“きりさく”」

グラードンは“きりさく”で“ソーラービーム”を切り裂いた。

キノガツサ「やっぱりお前も打撃の方が強いんだな。」

グラードン「もちろんだ、ていうかお前もだろ？」

キノガツサ「まあな」

互いに打撃が得意だと判断した二人だったが・・・急にグラードンに異変が起きた。

グラードン「す、すまないキノガツサ。俺様の意識があるのはここ・ま・でだ。」

キノガツサ「ん？グラードン？」

キノガツサはグラードンの異変に気づき近よる。しかし

グラードン「くるな！！早く逃げろ、暴走が・・・ダーク化がは・・・
じま・・・る。」

その瞬間グラードンの体から黒いオーラが出てきた。

キノガツサ「お、おい。あれなんだ！？」

サンダース「あのオーラは・・・マズい。キノガツサすぐに奴から
離れてこっちに来い。」

キノガツサ「ああ。」

キノガツサは言われたとおりサンダースたちの元へ戻った。

キノガツサ「おい、アイツは・・・」

サンダース「ダーク化してるんだ。」

ラグ「え・・・」

キノガツサ「ダーク化？あれがか。」

サンダース「ああ、俺はギャロップがダーク化したのを見たことがある。」

そうサンダースは以前ギャロップのダーク化をみていたのでダーク化と分かった。

キノガッサ「つまりこの状態になったから火山で暴れてたって訳か。」
ポリズ「でしょうね、あのグラードンさんもいきなり暴れるような人じゃないでしょうし。」
キノガッサ「よし、それならさっさと助けようぜ。サンダース、どうしたらいい？」

キノガッサは真面目な表情でサンダースに聞いた。

サンダース「とりあえず倒すしかないな。だがダーク化したことでパワーアップしているぞ。」
キノガッサ「なあに今度は俺一人じゃねえ、絆のみんながいるじゃねえか。なあ？」

キノガッサが振り返るとみんな頷いた。

ラゲ「みんなで助けよう、グラードンを。」
キノガッサ「おっしゃー、張り切っていくぜ!!」
メンバー「おおー」

こうしてチーム絆VSダークグラードンの戦いが始まった。

第三十七話 VS グラードン（後書き）

サンダース「グラードンがダーク化だど!？」

おっ、今回はサンダースだね。

サンダース「それはともかく作者、グラードンがダーク化したぞ。」

ギャロップの時代だね。

サンダース「通常であんなにつよいグラードンがダーク化でさらに強気に・・・俺たち勝てんのか？」

それはネタバレになるんでスルーで。

第三十八話 敗北！？ 絆VSダークグレードン（前書き）

いよいよダークグレードンとの対決です。

ラグ「ダークグレードンさんって相当強いよね。」

まあそりゃダーク化してるからね。

第三十八話 敗北！？ 絆VSダークグライドン

ダーク化したグライドンを元に戻すためバトルによってグライドンを倒し助けることを決意したラグ達チーム絆。

しかしグライドンのその強力な力に大苦戦していた。

サンダース「てだすけ」、からの・・・」

ラグ「ハイドロポンプ」」

ラグはサンダースによって“てだすけ”された大量の水をグライドンに放つ。

グライドン「ほのおのパンチ」」

しかしそれはグライドンの“ほのおのパンチ”により防がれその場に水蒸気のみを残した。

ラグ「くっ・・・」

サンダース「まさか水タイプの高ランク技まで防がれるなんてな・・・」

ラグ「っ！！サンダースさん、右に動いて！！」

サンダース「お、おお。」

ラグに言われてサンダースは右に動いた。するとさっきまでサンダースがいた場所には強烈なパンチがきていた。

サンダース「畜生。水蒸気で見えない間に“きあいパンチ”とはな・
・ありがとよラグ。」

ラグ「どう致しまして。僕にはリーダーがあるからそういうのは自然と分かるんだ。」

キノガツサ「おらおらあゝ次々いくぜ“ウッドハンマー”」

サンダースとラグに続きキノガツサも効果抜群をねらって技を使う。

グラードン「ストーンエッジ」

グラードンはそんなキノガツサの技までも“ストーンエッジ”で防いでしまう。

キノガツサ「くそ、コイツ防御が固てえ・・・」

ポリズ「技で攻撃を防ぎ、防ぎきれない攻撃は自身が体で受け止める。恐ろしい防御力ですね。」

サンダース「さらに隙があれば大ダメージの大技だ。」

キノガツサ「それならその防御を破るまでだ。“きあいパンチ”」

キノガツサはグラードンに対して“きあいパンチ”を繰り返すがまた“ストーンエッジ”で防がれてしまった。

キノガツサ「これくらいなんともねえ、“きあいパンチ”」

しかしキノガツサは“ストーンエッジ”で防がれようとも“きあいパンチ”を連発した。すると“ストーンエッジ”の岩は砕けた。

ハスボー「やったー。」

ポリズ「“ストーンエッジ”を破りましたね。」

キノガツサ「すまねえキノ、頼む。」

キノ「うん、“エンシエントサークル”」

キノは“ストーンエッジ”を突破したキノガツサに対して“エンシエントサークル”を使い、回復とパワーアップを行った。

キノガツサ「いくぜ、“リーフメガパニッシャー”」

キノガツサはもう一度最強技を使い、グラードンにダメージを与えた。

グラードン「ぐおおおおー!!」

しかしそれはグラードンを怒らせる材料にしかならなかった。

キノガツサ「なんて防御力だ・・・」

ポリゴン「一応くらってはいってグラードンさんの体力じたいは残りわずかです。がダーク化によってダメージを感じにくい体になっているようです。」

キノガツサ「めんどくせえな。」

キノガツサは厄介なダーク化のその能力に嫌な表情をする。
そのとき

グラードン「かえんほうしゃ」

グラードンは“かえんほうしゃ”でラグたちに攻撃した。

ポリゴン「きましたか、 “デリートビーム”」

ポリゴンは“デリートビーム”で“かえんほうしゃ”を相殺した。

グラードン「くらえ」

グラードンは“かえんほうしゃ”を相殺されて、メンバーに向かってきた。そしてパンチを繰り出した。

ハスボー「リーフリフレクトバリアー」

そのパンチに対してハスボーがいち早く反応し、「リーフリフレクトバリアー」を展開し、パンチを受け止める。

ハスボー「ぐっ……り、リフレクト」

ハスボーはあまりにも強いそのパンチの衝撃に苦しそうな顔をしたがそれでもなお攻撃を弾くためのコマンドを言う。

その瞬間グラードンのパンチの衝撃ははじかれてグラードンに返ってくる。

しかしその衝撃でさえグラードンはダメージをくらった様子はなかった。

ハスボー「そんな……」

キノガッサ「アイツの……ダーク化はここまで……」

サンダー「そうだ、ダーク化は……強い。」

こんな感じでバトルし数十分経った。

この数十分でチーム絆が使った技は

ラグが“ハイドロポンプ”3回、“ストーンエッジ”が2回、“ハ

イドロステインガー”が2回、“きあいパンチ”が1回。
アクアが“ハイドロポンプ”2回、“とける1回”、“みずのはど
う”が4回。

サンダースが“てだすけ”8回、“しぜんのちから”2回、“まも
る”3回。

キノガツサが“きあいパンチ”6回、“リーフメガパニツシャー”
2回、“ウッドハンマー”が4回。

ポリゴンZが“デリートビーム”5回、“シャドーボール”3回。
ハスボーが“リーフリフレクトバリアー”3回、“みずのはどつ”

5回、“あまごい”1回。

キノが“エンシェントサークル”10回、“てだすけ”2回だ。

これだけの技を出したということもありメンバーにはかなり疲労が
あった。

キノガツサ「く、くそ……」

ラグ「これだけやったのに……」

サンダース「何でもないって顔してるな。」

そう、グラードンはこれだけの技をくらったにも関わらず平然とし
ていた。すると

ハスボー「うつ……」

ポリZ「ハスボー!？」

ポリゴンZはハスボーの言葉を聞き近寄るが、ハスボーは気絶して

いた。

ラグ「ポ、ポリZ、ハスポーは!?!」

ポリZ「大丈夫です、あまりにも大技ばかりを使いすぎたので気絶したらしいです。」

ラグ「グライドンの攻撃を何回も防いでくれたもんね……。」「ポリZ「はい。」

その時他の方からもドサツと倒れる音がした。

キノガツサ「キノ!?!」

サンダース「アクア!?!」

その音はキノとアクアが倒れた音だった。

キノガツサ「くそ……。」「

サンダース「二人ともハスポーと同じように技の出しすぎか……。」「

ポリZ「もうかなり戦っています……。から……。ね。」

ラグ「ポリZ!?!」

そのとき、ポリZまで倒れてしまった。

ラグ「ポリZまで……。」「

キノガツサ「おい、サンダース。しっかりしろ!?!」

ラグ「サンダーズさんまで!？」

ポリズが倒れると同時にサンダーズまでもが倒れてしまった。

キノガツサ「くっ……畜生おおおお!!」

ラグ「キノガツサ!？」

キノガツサは怒りでいっばいになりグラードンにむかっていった。

キノガツサ「よくも……ぜってえ許さねえ、“リーフメガパニツシャー”」

キノガツサはこんしんの力で“リーフメガパニツシャー”を使った。その攻撃はグラードンのお腹にクリーンヒットする。その衝撃でグラードンは倒れた。

ラグ「やった!？」

キノガツサ「へへ、どんなも……んだ。やべーな、序盤に……調子に乗……りす……きた……」

キノガツサは序盤の“にほんばれ”の暑さと大技多様のため、その場に倒れてしまった。

ラグ「キノガツサ!？」

その時だった。

ラグ「まさか……うそ……」

グライドんがゆっくりと起き上がったのだ。

ラグ「まだ倒れないなんて……それなら……」
「ウォーターカリバー」

ラグは「ウォーターカリバー」をだしてデンラージになり電気を流す。

「ウォーターカリバー」は雷光を帯びて青と黄色の美しい剣になる。

ラグ「プラズマカリバー」。そして「プラズマスラッシャー」

ラグは自分のエネルギーを全てプラズマカリバーに注ぎ込み大きくしてグライドんに振りかざす。

グライドんは巨大故に避けきれずそのままくらった。

ラグ「ハアハア、この電気は威力をあげるためのもの。これなら地

面タイプにも効く。さらにハスボーが“あまごい”をしてくれたおかげで“ウォーターカリバー”本来の威力も上がり、その派生技である“プラズマカリバー”の威力も上がった。」

ラグは自身が考えた最高の戦法でグラードンを倒した。しかし

ラグ「そんな・・・粘り・・・強・・・いんだ・・・ね。」

グラードンは起き上がり、それと同時にラグは倒れた。

グラードン「ここまでだ。さらばだ。デンライジ、そして絆。」

グラードンはメンバーに近づき“きあいパンチ”を発動。そのままパンチをし、強烈な衝撃がラグ達周辺を襲った。

グラードン「これで・・・ん？」

グラードンは自身が“きあいパンチ”をしたはずなのにその腕は地面に当たらず止まっていることに疑問を持った。

グラードンは自身が“きあいパンチ”をしたはずなのにその腕は地面に当たらず止まっていることに疑問を持った。

グラードン「なぜだ・・・」

その瞬間、グライドンの腕の隙間からグライドンに“はかいこうせん”が放たれた。攻撃をくらったグライドンは吹き飛ばされるがなんとか無事に着地できた。

グライドン「・・・誰だ？」

グライドンが睨んだ先には・・・

ギラティナ「悪いな。コイツらはお前らダーク化を止めるために旅をしているやつらだ。

もしかしたらコイツらがダーク化を止めてくれるかもしれない。

だからここで倒させる訳にはいかないんだ。」

グライドンの睨んだ先・・・そこには伝説のポケモン、「ギラティナ」がオリジンフォルムでいた。

第三十八話 敗北！？ 絆VSダークグレードン（後書き）

ギラティナ「なんだ、俺が登場か？」

そっだよ。ってギラティナ、いくらなんでもあとがきでの登場さ早くない？

ギラティナ「まあ堅いこというな。ところでなんで登場したのが俺なんだ？」

だって好きなポケモンだし、オリジンフォームかつこいいし、その他もろもろで。

ギラティナ「要は色々あるんだな（汗）」

第三十九話 影の世界の王（前書き）

たて、今回はVSダークグラードンの最後です。

ラグ「ギラティナってオリジナル技多いね。」

まあね。

第三十九話 影の世界の王

ダークグライドンとの戦いの最中に暑さと疲労で倒れてしまったチーム絆。ダークグライドンがラグたちチーム絆にとどめをさそうとしたとき、伝説のポケモン「ギラティナ」が現れ、チーム絆を助けた。

グライドン「ギラティナ……」

グライドンはとどめをさすのを防がれたことをとても怒っていた。

グライドン「よくも俺のジヤマをー!!」

グライドンは怒りに任せてギラティナを殴ろうとした。しかし

グライドン「なに……!?!」

グライドンは驚いた。それも無理はない。いきなりグライドンの体が動かなくなったのだから。

グライドン「これは……」

ギラティナ「無理もない、もはやその体は限界を超えているのだ。

怒りだけでもついても体は動かない。それなりの体力が残っていないとな。」

ギラティナは悔しそうなグラードンを見た後にメンバーの方へ向かった。

ギラティナ「回復役はたしかキノだったな。ほれ」

ギラティナはそういうとキノにかいふくのくすりを飲ませた。するとキノは意識を取り戻し起き上がった。

キノ「あれ？あなたは・・・」

ギラティナ「俺のことはいい。こいつらを治してやれ。」

ギラティナが後ろを見るとラグたちが倒れていた。

キノ「あ、はい」

キノは急いでメンバーの回復をした。

アクア「助かりました。」

サンダース「ナイス回復だな。」

キノガツサ「だって俺の彼女だからな。」

ポリズ「あまり関係ないような・・・」

ハスポー「まあいいんじゃない、助かったんだし。」

ラグ「キノさん、ありがとうね。」

キノ「どういたしまして。まあラグさん以外の皆さんはまだ十分には回復してないみたいなんで戦ったりしないでくださいね。」

ラグ以外のメンバーは「はい」と返事をしてじっとしていた。

ラグ「ところでキノさん。」

キノ「はい？」

ラグ「・・・あの人誰？」

ラグの目線の先にはキラティナがいた。

キノ「あの人が私を回復させてくれたんですよ」

ラグ「なるほど」

キラティナ「ついでにお前らを助けたのも俺だ。」

ラグ「えっ」

キラティナの言葉にラグは驚いていた。

キラティナ「お前らがグラードンにつぶされそうだったから助けてやったんだよ。」

ラグ「あ、ありがとうございます。」

キラティナ「俺に敬語は不要だ。ここで会ったのもなんかの縁だからな。」

ラグ「はい・・・じゃなかった、うん」

ラグたちは少々キラティナのペースに乗せられた。

キラティナ「さて、お前は起きたわけだが他のやつらはまだ回復しきれてない。だからおれがしばらくグラードンと戦う。お前は隙があればなんか一撃叩き込め。いいな？」

ラグ「でもさつき・・・」

キラティナ「ごちゃごちゃうるさいな。やるっていったらやるんだよ。分かったか？」

ラグ「うん」

ラグは了解し、頷いた。

キラティナ「おっしや、それじゃいくぜ“シャドーボール”、そしてオマケだ“りゅうのいぶき”」

キラティナは自分の前に“シャドーボール”をつくり放ち、さらに青と紫の息を飛ばした。

グラードン「ぐおー!」

グラードンはそれを避けきれずそのままくらったがあまりダメージはなさそうだった。

ギラティナ「ダメージは少ないか、だが・・・」

ギラティナがニヤリと笑うとグラードンの“りゅうのいぶき”をくらった右腕がしびれていた。

ギラティナ「“りゅうのいぶき”の効果で麻痺はしたらしいな。」

ギラティナは麻痺を狙って“りゅうのいぶき”をしたらしい。しかし

グラードン「ぐるううう・・・」

グラードンが闇を腕に集中させると麻痺していた腕は治り元の通りになった。

ギラティナ「それがウワサの「ダークバツク」ってやつか。なかなか便利そうだでも・・・“りゅうのいぶき”」

ギラティナは麻痺が治ったグラードンに対してまた麻痺を狙って“りゅうのいぶき”を放った。

ラグ「ちょっとギラティナ、それじゃ意味が・・・」
ギラティナ「よく見てろ。」

ラグは意味がないと主張したがギラティナの言葉に消されてしまった。そして“りゅうのいぶき”がグラードンの右腕にあたりまた麻痺した。

グラードン「ぐるううう・・・」

グラードンはまた闇を腕に集中させた。

ラグ「ああ、回復されちゃう・・・」

グラードンの麻痺は治った。しかしその治り方にはさっきと違いがあった。

ラグ「治り方が・・・遅い？」
ギラティナ「そうだ。」

ギラティナは笑顔で言った。

ギリティナ「ダークバックは便利だが、回数を重ねるとその速度は遅くなる。これがダークバックの弱点だ。」
ラグ「なるほど、そうなんだ。」

ラグは知らなかったダークバックの弱点に納得した。

ラグ「でもギリティナはそれをいったいどこで知ったの？」

ギリティナ「ミュウに教えてもらったんだ。」

ラグ「ミュウに？」

ギリティナ「そうだ、ミュウは俺の結構昔からの友達でな。情報が入る度に連絡してもらってるんだ。」

ラグ「そうなんだ。」

グラードン「なめるなあ！！“だいもんじ”」

グラードンは自分を無視して話している2人に対して怒って“だいもんじ”を放つ。

ラグ「くっ、”ハイドロポンプ”」

ラグは“だいもんじ”に対して“ハイドロポンプ”を放ち、迎え撃った。

ギリティナ「なんだ、やるじゃないか。」

ラグ「ハアハア、正直きついけどね。」

その証拠にラグの息は荒れており、肩で呼吸していた。

ギラティナ「それだけの力を持つてんならこのまま倒れるのは勿体ないな。“シャドールステイ”」

ギラティナは“シャドールステイ”と言うとラグは影の様な黒い輪に包まれた。

ラグ「え、これって……。」

ラグはそのまま影に包まれた。

グラードン「“シャドールステイ”だと!?”

ギラティナ「そうさ、この技は対象者を回復させる回復技。さらに・
・・」

その瞬間、ラグを包んでいた影が一気に消えた。

ギラティナ「パワーアップ効果もある。キノほどではないがな。」

ギラティナが言った瞬間、ラグの周りには黒いオーラがあった。

ラグ「すごい。力が・・・みなぎる!!」

次の瞬間、ラグはデンライジになる。しかしその周りにはさっきと同じ黒いオーラがあった。

ラグ「これって・・・」

ギラティナ「「シャドーアーマー」と呼ばれるオーラだ。そのオーラは闇ではなく影。俺「ギラティナ」が認めた相手だけがまとえるオーラだ。」

ラグ「それじゃあ・・・」

ラグは驚きの表情で聞いた。

ギラティナ「そうだ、俺はお前を認めた。さあ、力を出して戦え!!」

ギラティナに言われるもののラグは躊躇していた。

ギラティナ「・・・どうした?」

ラグ「だって“プラズマカリバー”は効かなかったし、デンライジになっても“デンインパクト”は無駄じゃ・・・」

ギラティナ「いいから行けー!!」

ラグ「う、うん(汗)」

ラグは無駄だと分かっているがらにグラードンに向かって行く。

ラグ「（デンライジは電気技が主体・・・グラードンは地面タイプだから電気技は効かないのに・・・無茶いなあ〜。）」

ラグがむかひながらそう思うと

ギラティナ「いけー、効かないなんて概念壊してグラードンを倒せ
！！」

ギラティナの言葉にラグはわかった。

ラグ「そうだ、電気技が効かないのは通常はだよ。それじゃあ僕はその通常を超える！！！」

ラグの決意が固まるとラグのデンライジ独特の金色がより一層輝きを増した。

ラグ「いくよ！！！」

ラグはジャンプしてグラードンの顔面まで飛んだ。

グラードン「ドラゴンクロー」

グラードンは“ドラゴンクロー”でラグを撃退しようとした。しかし

グラードン「なに!?!」

ラグ「今の僕には効かないよ。」

ラグはグラードンの“ドラゴンクロー”を左手で止めた。グラードンはまさか止められるとは思っておらず、驚いていた。

ラグ「そして……」

ラグは素早くグラードンのお腹の前まで行く。

ラグ「これが……」

ラグは左手を前に構えて右手を後ろに引いた。グラードンは本能で危険と感じたがどうしようもなかった。

ラグ「雷拳撃衝“デンインパクトオオオ”!!!」

ラグは雷をまとった拳でグラードンのお腹を殴る。その衝撃は凄まじく、あたりは揺れてグラードンもしばらく揺れた。

グラードン「ぐっ、ぐああああああ!!?」

そして50メートル程さきの岩にぶつかった。

ラグ「はあ、はあ、や、や・・・った?」

ラグは疲れすぎたらしくその場に倒れ込んだ。

ギラティナ「ここまでとは・・・上出来だ。ミュウの目は嘘ではなかった。コイツらなら・・・ラグ達チーム絆ならホントにダーク化を・・・なんとかしてくれるかもな。」

ギラティナはラグに近寄り背中に乗せ、他のメンバーも乗せた。

ギラティナ「キノは回復させて疲れ他の奴らも寝たか。とにかくお前もこれからラグと共に頼むぜ。あとは・・・」

そのままキラティナはグラードンの方へ行く。

キラティナ「お前には今回のことをしっかり教えてもらわないとな。
“サイコグラビティ”」

キラティナは“サイコグラビティ”と言うとグラードンは浮いた。

キラティナ「さあ、行くぞ。」

キラティナは静かに火山を去った。

第三十九話 影の世界の王（後書き）

原作 ポケットモンスター

制作 コアラ

登場キャラ

ラグ（ラグラージ）

アクア（シャワーズ）

サンダース（サンダース）

キノガッサ（キノガッサ）

キノ（キノガッサ）

ポリゴンZ（ポリゴンZ）

ハスボー（ハスボー）

ギラティナ（ギラティナ）

グラードン（グラードン）

ストーリー コアラ

オリジナル技 コアラ

発案 コアラ

技参考 ポケットモンスター、魔法少女リリカルなのはシリーズ等

今回のあとがきはアニメのエンディングみたいにしてみました

ラゲ「技参考とかあるっけ？」

アニメにはないけどまあ参考にしてるから一応書いといた方が雰囲気ですよ。

第四十話 ダーク化、そして次へ・・・（前書き）

さて、今回はグラードンを助けたあとです。

ラグ「いやあ、あれは疲れたよ。」

だろうね（汗）

第四十話 ダーク化、そして次へ・・・

ギラティナと共にグラードンとのバトルに勝利したチーム絆。今はフォルターナーにあるサーナイト達の経営する宿の近くに来ていた。

サーナイト「グラードン!!」

グラードン「お、サーナイトか。」

サーナイト「サーナイトか、じゃないですよ。私たちがどれほどアナタを心配したか・・・」

サーナイトはいきなりのグラードンの態度にムキになって文句を言おうとしたがグラードンに止められた。

グラードン「知ってるさ、お前らが心配してくれたこと。でも安心しろ、俺様はこうやって戻ってきた。ラグ達チーム絆とギラティナによってな。」

サーナイト「グラードン・・・」

グラードン「さあ飯だ飯。俺様はもう腹が減ってたまんねんだ。だからサーナイト、飯を作ってくれ。めちやくちやウマイやつをな。」

サーナイト「・・・はい!!」

サーナイト達はグラードンに頼まれると急いで料理場に向かった。

グラードン「さて、お前らも助けに来てくれてありがとな。」
ラグ「いいんですよ、そんな。」

グラードン「キノガツサも、ありがとな。受けた傷は大丈夫か？」
キノガツサ「へっ、俺をなめんじゃねえ。これぐらいなんともねえよ。」

グラードン「そうか。」

キラティナ「ところでグラードン。」

グラードン「うん？」

グラードンはキラティナに呼ばれてキョトンとした。

キラティナ「教えてくれるか？お前のダーク化した理由を。」

グラードン「ああそうだな。まあ飯食ってからじゃダメか？」

キラティナ「構わんが。」

グラードン「んじゃ飯食ってからだ。」

それから1時間後

サーナイト「さあ皆さんもどうぞ。」

サーナイト達は大量の食べ物を用意していた。

ポリズ「す、すごいですね。とんかつにから揚げ・・・」
ハスボー「お味噌汁に真っ白ごはん・・・」

キノ「和風だけかと思えばスパゲティやピザ・・・」
サンダース「あそこにあるのはマーボー豆腐じゃないか？」
ラグ「僕の好きなグミもある」
アクア「私の好きなホットケーキも」

みんなが食事に感激しているとき、一人だけうつむいて何も言わないやつがいた。

ラグ「キノガツサ？」

そう、あの普段は騒がしいキノガツサがなんと黙ってうつむいているのだ。

ハスボー「キノガツサ、どうしたの？」

サンダース「グラードンとのバトルで疲れたか？」

グラードン「そ、そうなのか!？」

グラードンは自分のせいでキノガツサがうつむいていると思い焦った。

キノ「キノガツサ・・・大丈夫？」

キノがキノガツサを覗き込んだ。すると・・・

ポリズ「どうですか？」

キノ「・・・心配いりませんよ。」

ポリズ「えっ!？」

キノ「だって・・・」

キノがそういうと・・・

キノガツサ「う・・・」

ハスボー「う?」

キノガツサ「う・・・」

サンダース「う?」

キノガツサ「うまそ～～～～」

「

キノガツサは大声でそう言った。メンバーはビックリして耳をふさいでいた。

アクア「び、ビックリした」(汗)

キノ「こういうことです」(汗)

ラグ「なるほどね」(汗)

グラードン「やはりキノガツサは元気だな」(汗)

メンバーは苦笑いしていた。

キノガツサ「さあ～～～食うぞ～～」

それからメンバーはご飯を食べた。
キノガツサとグラードンの食べた量はすごかったらしい(汗)

キノガツサ「ふう〜ウマかった〜。」

グラードン「さすがサーナイト達の作った料理だ。」

サーナイト「ありがとう、そう言ってもらえると作ったかいがあります。」

サーナイト達は嬉しそうに言った。

ギラティナ「さて、そろそろ話しをいいか？」

ギラティナは真剣な表情で言った。

グラードン「ああ、そうだな。話そうか。俺様のダーク化について・
・・。」

ギラティナ「頼む。」

こうしてグラードンの話しが始まった。

グラードン「あれはいつかは覚えてないがな、俺様はいつもどおり火山・・・つまりフォル火山で見回りをしていたんだ。」

ラグ「うん。」

グラードン「するとな、あるポケモンに会ったんだ。」

サンダース「あるポケモン？」

キノガッサ「誰にだよ？」

グラードン「ヒードランだ。」

ハスボー「ヒードラン？」

メンバーはヒードランという名前を知らず疑問に思った。

ポリズ「ヒードランっていうのは四足歩行の炎・鋼タイプのポケモンです。体の鋼が溶ける程の高温な体温を持っていて、ヒードランだけが使えるとされる技“マグマストーム”はかなり強力です。また手足の爪で壁を登ったりできますよ。」

ハスボー「なるほど。」

サンダース「詳しい説明だな。」

ポリゴンZの話してヒードランがどんなポケモンかは知れた。しかし

ラグ「あれ？炎タイプなら火山にいてもおかしくないよね？」

ポリズ「いえ、ヒードランは準伝説のポケモンです。あまり姿を見せません。」

グラードン「それにな。」

グラードンがポリゴンZの説明に付け加えた。

グラードン「やつの体から黒いオーラが出ていたんだ。」

サンダース「黒いオーラ？」

ラグ「シャドールステイ”じゃないよね？”

キラティナ「もちろんだ、あれは対象が限定されている。お前がたまたま対象だったからお前はシャドーアーマーをまとえたんだ。」

ラグの問いにキラティナが答えた。

ラグ「となると・・・」

サンダース「ダーク化だな。」

ポリズ「ですよね。」

キノガツサ「んでその後どうなったんだ？」

グラードン「分からん、その後何がおきたか分からんのだ。そして気づいたらいつもどおり火山にいた。」

キノガツサ「つまり会ってから別に何もなかったってことか？」

グラードン「ああ、まるで夢みていて気づいたら何もなかった感じだ。」

グラードンの話しがメンバーは疑問だった。その時何があったのかおそらくそこにダーク化の理由があるから。

キラティナ「とにかくグラードン、お前はダーク化していた。その時の記憶はあるか？」

グラードン「キノガツサとバトルしたのは覚えているがそこからは

・・・」

ギリテイナ「そうか。」

キノ「あの・・・すいません。ちょっといいですか？」

キノが申し訳なさそうに言った。

ギリテイナ「なんだ？」

キノ「ギリテイナさんって・・・なんなんですか？」

ギリテイナ「ん？」

アクア「あ、それ私も思った。」

キノ「ですよね。」

この二人の意見の分からない他のメンバーはキョトンとしていた。

ラグ「アクア、どういうこと？」

キノガツサ「どういう意味か教えてくれ、キノ。」

キノ「ギリテイナさんのさっきの発言とか気になりませんでした？」

ラグ「どこが？」

ラグだけでなく他のみんなも首を傾げた。

キノ「ミュウさんと知り合いだったりダーク化について知っていたり・

・

アクア「一番気になるのはダーク化の情報を沢山知りたがっている

ところ。これ全部怪しくない？」

つまりキノとアクアの主張はギラティナがダーク化についてのあらゆる情報を求めていること、それがなぜかということだ。

キノ「ギラティナさん、教えてください。」

アクア「あなたがダーク化の情報を集めている理由を。」

二人はギラティナに迫って聞いた。迫られたギラティナは汗を垂らしながら答えた。

ギラティナ「分かった、分かったからそんなに迫らないでくれ（汗）」

二人が引っ込むとギラティナは言った。

ギラティナ「俺はな、臨時調査員なんだよ。」

ギラティナはため息をついて話した。

キノ「はい？」

ギラティナ「だから、フルでいうと世界警護隊迷害対策部ダーク化対策部調査部の緊急召集班の臨時調査員だ。」

ギラティナの長すぎる役職名にメンバーの頭はフリーズしていた。

ラグ「・・・分かんない。」

ギラティナ「まあ略してダーク化対策部でいいと思うがな。」

キノ「どんなことをしているんですか？」

ギラティナ「今少しづつ現れているダーク化ポケモンを調査、制圧し事情を聞くんだよ。」

キノ「なるほど。」

アクア「緊急つて言ってたけどどういうこと？」

ギラティナ「世界警護隊の迷害部じゃ人数が足りないから依頼されただ。」

ポリズ「他にもいるんですか？」

ギラティナ「いるさ。個人情報だから言えないがな。」

キノ「なるほど、だからダーク化の情報を・・・。」

キノと同じようにアクアも納得したようだ。

ギラティナ「分かってもらえて何よりだ。にしてもチーム絆、噂には聞いたがかなりのチームだな。」

サンダース「噂？」

ギラティナ「ああ、この前のラムサールでのバトルフェスティバルの優勝チーム、絆。知ってるやつは知ってるさ。」

ハスボー「僕たち有名なんだあ。」

ギラティナ「そりゃな、あんな小さな大会でも全てのバトルをオリジナル技で勝ち進み、決勝においては異世界からの習得技、対戦者

の片方は使い手が限られてるリミットバーストの所持者、そしてもう片方は伝説のデンラージなんだ。それなりに有名だ。」

ラグ「僕たちのオリジナル技制作はミュウが手伝ってくれたんだ。」

ギラティナ「ミュウが？」

ラグ「うん、それに僕の異世界の技も僕の友達が手伝ってくれて……」

ギラティナ「そうか。ラグ、お前は……いや、お前たちは色んなヤツらから力を借りてきたんだな」

ラグ「うん。」

ギラティナ「これからも仲間を、友を大切にな。」

ラグ「うん!!」

その時のラグの表情はとても嬉しそうな表情だったらしい。

次の日の朝

グラードン「もう行くのか？」

ラグ「うん。世界のダーク化したみんなを助けたいから。それに次行こうと思っているインルーラへはモノレールで行けるみたいでその時間もあるしね。」

グラードン「そうか。ありがとな、俺を助けてくれて。お前らのおかげでまたサーナイト達と共に暮らすことができる。」

サーナイト「本当にありがとう。」

ラグ「どういたしまして。」

サンダース「みんな仲良くな。」

グラードン「キノガッサ、お前とのバトルはまたいずれ……だ。」

キノガッサ「ああ、俺にフルボッコにされないようにしとけよ。」

グラードン「それはこっちのセリフだ。・・・それからギラティナ、
これからもダーク化したヤツらを頼む。」

ギラティナ「ああ、もちろんだ。」

グラードン「よし、これで後言うことはないな。絆、ギラティナ、
気をつけてな。」

ラグ「うん。」

アクア「うん。」

サンダース「ああ。」

キノガッサ「おう。」

キノ「はい。」

ポリズ「はい。」

ハスボー「はい。」

ギラティナ「ああ。」

こうしてチーム絆とダーク化対策部のギラティナは次の目的地へと
向かって歩き始めた。

その後ろ姿をグラードンとサーナイト達が見送っていた。

心の中で「ありがとう」と何回も、何回も言いながら。

第四十話 ダーク化、そして次へ・・・（後書き）

ということでフォルターナーを去りました。

ハスボー「グライドンともサーナイトともお別れだね。」

お、今回はハスボーか。フォルターナーはどうだった？暑かった？

ハスボー「暑さはそこまでなかったけどモノレールの中で大変だったよ。キノガツサが「パン食ってねぇ〜！！」って暴れてたから。」

あゝ忘れてたなあゝ（汗）

ハスボー「それはともかく次の街は・・・」

インルーラだね。電気の街だよ。

ハスボー「そこでもまた何か？」

あるかもね。

第四十一話 電気充実？ 電気の都市 インルーラ（前書き）

さあ、次は電気の都市です。

ラグ「とっても明るいんだよね？」

・・・さあそれでは第四十一話 スタートです。

ラグ「なんかあるんだ・・・」

第四十一話 電気充実？ 電気の都市 インルーラ

炎の街フォルターナーでグランドン、サーナイト達に別れを告げて次の街 インルーラに行くためモノレールにのったラグ達チーム絆。今ちようどインルーラに付いたところだった。

キノガツサ「やつと着いたなあ。」

ポリズ「結構かかりましたね。」

アクア「でも車内はすいてたよ。」

ハスボー「ラッキーだったね。」

キノ「それにしてもなんで駅は暗いんでしょうか？」

キノが少ししか明るくない辺りをキョロキョロ見て言った。

サンダース「それはな、駅の壁がソーラーシステムになって、その影響で外の太陽光が届かないんだ。」

ラグ「なるほど。」

サンダース「でも作った電気でここも明るいはずなんだが、おかしいな。」

そんな疑問を抱きながらラグたちは出口へと向かった。そして

ハスボー「出口だ。」

ラグ「さあ、いよいよ電気の都市インルーラへ……」
キノガッサ「レッツゴーだ!!」

先頭に行く三人が走りながら出口を出た。

アクア「元気がいいね……」

サンダース「とうか子供だな。」

ポリズ「まあいいんじゃないですか？」

キノ「楽しそうですし。」

後から四人も出口を出た。

サンダース「さあて電気の街で発展都市のインルーラは……つえ
!？」

サンダース達がみた後景、それは街が静かで活気がない寂しい街だ
った。

キノガッサ「うそだろ……」

キノ「インルーラって都市ですよね？」

アクア「都市にしてはなんか静かな気が……」

ポリズ「人一人もいませんね。」

ハスポー「降りる駅間違えたとか？」

サンダース「いや、あのモノレールはフォルターナーとインルーラ

をつなぐものだ。間違いない。」

ハスボー「じゃあなんで・・・」

ラグ「とりあえずいろいろ見てみようよ」

ラグの提案によりメンバーは街を見回ってみることにした。

ハスボー「わあ、あれって何？」

ハスボーが、見つけたビルを見て聞いた。

サンダース「あれはモノレールのビルだ。モノレールの管理者が住んだり働いたりしてるんだ。」

ラグ「あれは？」

サンダース「あれはお菓子屋のビルだ。」

ラグ「工場じゃないんだね。」

サンダース「工場はまた別の場所にある。」

ハスボー「へえ、物知りなんだね、サンダースさん。」

サンダースの物知りさにハスボーは驚いた。

サンダース「そりゃな、一応2、3年住んでたしな。」

ハスボー「ええ、サンダースさんここに住んでたの？」

キノガッサ「そういえばお前はルマーテには引っ越してきたんだっけな？」

サンダース「ああ」

キノ「あのころのサンダースさんは少し荒れてましたね。」

サンダース「アクアと離れ離れだったからな、確かに荒れてたな。」

メンバーはサンダースの過去を聞き、そしてまた他の場所を見回った。

そしてある広場にたどり着いた。

キノガッサ「ここはどこだ？」

サンダース「ここは街の広場だ。このインルーラにはいくつか広場があつて名前がついているんだがここは第六広場だな。」

キノガッサ「いったいくつまであるんだよ……」

サンダース「第三十までだ。」

キノガッサ「第三十!？」

キノ「多いですね。」

あまりの多さにキノガッサとキノはとても驚いていた。

ポリZ「まあインルーラは大都市ですからね。それぐらいないと足りないんですよ。」

キノガッサ「なるほどな。」

サンダース「それにしてもこの街は相変わらずだな。」

メンバーが会話していると草むらから突如ポケモンが現れた。

アクア「な、なに？」

ラグ「・・・そこに誰がいるよ。」

キノガッサ「なんだと？」

ラグは頭のリーダーで存在を確認しメンバーに教えた。

ラグ「さあ、出ておいでよ。隠れても無駄だよ。」

その瞬間草むらからポケモンが出てきた。

ポリズ「ヨノワールにヌケニン、ヤミラミですか・・・」
サンダース「なんかバトルしたそうだな。」

そして3匹はいっせいにラグたちに襲い掛かった。

キノ「ほんとにバトルする気みたいですね。」

ハスボー「よくがんばっちゃうもんね。」

ポリズ「あんまりはしゃいじゃだめですよ、ハスボ。」

ラグ「よしそれじゃあ、バトル開始!!」

こうしてチーム絆とゴーストポケモン3匹のバトルが始まった。

第四十一話 電気充実？ 電気の都市 インルーラ（後書き）

というわけで次回バトルです。

サンダース「いやあ、インルーラ、懐かしいなあ。」

あ、サンダース。なんでインルーラに住んできたの？しかもアクアと離れて。

サンダース「あれだ、昔は条例があつてな、電気タイプはインルーラに住まなくちゃいけないっていう決まりがあつたんだ。」

なるほど。

サンダース「でアクアはルマーテ、俺はインルーラに住んでたつてわけだ。」

へえ、お父さんとお母さんは？

サンダース「父さんは電気だからインルーラに、母さんは水タイプだからルマーテに住んでたんだ。」

そっか・・・なかなかつらかったね。

サンダース「まあそのあと条例も無くなったからな。それからアクアと暮らせてうれしかったさ。さて今回はバトルだな。張り切つていくぜー!」

第四十二話 電気がないと困るんです。 VSゴースト×3 (前書き)

今回はゴースト×3とバトルです。

ラグ「強いのか？」

そこそこにはね。

第四十二話 電気がないと困るんです。 VS ゴースト×3

ラグ達チーム絆の前に突如現れたヨノワール、ヌケニン、ヤミラミ達3匹のゴーストポケモン。3匹はラグたちを睨み今にも襲い掛かっつきそうだった。

キノガッサ「こいつらバトルする気満々じゃねえか。」

サンダース「構えにあまり隙がない・・・結構なレベルだな。アクア、ハスボー、キノさんはそこにいてくれ。こいつらは俺とキノガッサ、ラグでやる。ポリZは3人を守ってくれ。」

サンダースは何を考えてか3人を後ろにいさせて、その3人を守るようにポリZに指示、バトルは自分達がやると言った。

キノ「え、ちよ何ですか？私達もバトルできますよ。」

アクア「そうだよ、私達だってちゃんと戦えるよ。」

ハスボー「仲間じゃないの？」

もちろん3人は嫌がった。しかし

サンダース「別に戦ってもらわないわけじゃないさ、見てみるよ後ろ。」

3人はサンダースに言われたとおりに後ろを見たとそこにはゴースやヨマワルがたくさんいた。50匹以上はいるだろう。

アクア「あゝなるほど。面倒な相手を私達に渡したわけね……。」
サンダース「違うさ、お前らの実力を考えてだな……。」
アクア「でも相手がいないよりはマシかな。」

キノ「ですね。」

サンダース「んでもってポリズはその防御……じゃなかったな。」
ハスボー「そうそう。」

ポリズ「役目が逆でしたね、私とアクアが攻めで……。」

ハスボー「僕とキノさんが守りだよ。」

サンダース「だったな。」

サンダースは自分のミスに苦笑いしつつヤミラミの方を向いた。
そしてバトルは始まった。

サンダース「まずは小手調べだ”10万ボルト”」

先手はサンダース。”10まんボルト”を使いヤミラミに攻撃した。

ヤミラミ「あまいな、”シャドーボール”」

それに対してヤミラミは”シャドーボール”で対抗。2つの技はぶつかり、相殺した。

サンダース「やるな。」

ヤミラミ「まだまだ。」

一方こちらはラグ。ラグが戦っているのは・・・

ラグ「ハイドロポンプ」

ヨノワール「あくのはどう」

ヨノワールでこちらもなかなか強かった。

ヨノワール「みんなの為に負けれないんだー!!」

ラグ「(みんなのため?) ヨノワール、どういうことか教えてよ。」

ヨノワール「うおおおお、”シャドーパンチ”」

ラグ「くっ、”れいとうパンチ”」

ラグは話しを聞こうと説得するがヨノワールは落ち着かず”シャドーパンチ”を繰り返してきた。仕方なくラグは攻撃に対抗する為”れいとうパンチ”を使い相殺、お互いにそのまま離れ、元の位置に戻った。

ラグ「このヨノワールかなり強いね・・・」さて、どっやって倒そうかな？」

ヨノワール「ふう・・・。」

ラグとヨノワールはお互いに動きを待っていた。

キノガッサ「うおおおお、”たねばくだん”」

一方キノガッサは相手に対して”たねばくだん”を繰り返してダメージを狙った。しかし

又ケニン「そんなもの・・・効かない。」

又ケニンは自身の特性により効果抜群以外の技を受けない。よってこの”たねばくだん”は又ケニンを通って地面で爆発した。

キノガッサ「そうか「ふしぎなまもり」か。チツ、厄介だな。」

キノガッサは又ケニンの特性に舌打ちしながら悔しそうな顔をした。

又ケニン「お前の技、全て効かない。」

キノガツサ「確かに普通のキノガツサならな。」
又ケニン「・・・どういう意味だ？」
キノガツサ「こういう意味だ!!！」

そういうと突如キノガツサの周りに岩が浮遊した。

又ケニン「ストーンエッジ”か。くそッ、不覚だ・・・。」
キノガツサ「ストーンエッジ”？そいつは違っぜ。」
又ケニン「何だと？」

又ケニンはキノガツサの言葉が気になりますますあせった。キノガツサの周りにはもう数十個の岩があった。しかし

又ケニン「岩・・・なのか？」

そう、又ケニンが岩を見ていると岩は岩と呼べるかわからないくらい小さくなっていた。

キノガツサ「気になるか？悪いがどうせお前は俺がこの岩を”ストーンエッジ”として放ったところを”まもる”で防ごうと思ったんだろ？確かにあれはれんぞくで何回も出すのは俺でもきつい。だから・・・こつするんだよ!!！」

そういうと岩はキノガツサの手に引っ付いてきた。

又ケニン「な、何だと!？」

いきなりすることに又ケニンは驚きを隠せなかった。だがキノガツサは笑っていた。

キノガツサ「簡単なことだ。”ストーンエッジ”の岩を付けた、それだけだ。」

又ケニン「それだけって……くう……」

又ケニンはキノガツサの”ストーンエッジ”を”まもる”で防ぐつもりだった。1度防げば次に”ストーンエッジ”が使えるころには”まもる”も使えるようになり自分に負けは無かった。しかしキノガツサはその岩を自身の手に付けた。これでは1度防いでも次に”まもる”を使えるのはかなりあと。その間に岩を纏ったパンチでも食らえば一応岩タイプの技なので効果抜群、一瞬で終わる。

又ケニン「くつ……」

キノガツサ「その様子だと俺が何するかわかったらしいな。じゃあいくぜ。」

案の定キノガツサは岩のついた手でパンチした。

キノガツサ「くらえ、” ロックバルカン” だ。」

キノガツサがそういうと岩のついたパンチが複数又ケニンを襲った。

又ケニン「複数！？” まもる”」

これはキノガツサがパンチして腕を戻したまたパンチをする この動作が速く、目でおえないため複数に見えるのだ。

キノガツサのパンチは” まもる” によって防がれたがそれは何発かだけ。そのあとのパンチは又ケニンを襲った。そして又ケニンは吹き飛ばされ近くの木に激突。気を失った。

キノガツサ「あちゃーやりすぎたか（汗）」

その後又ケニンをキノ達のとこまで運んだ。

一方サンダースは

サンダース「” サンダーランチャー”」

ヤミラミ「” あくのはどう”」

” サンダーランチャー” は” あくのはどう” をぶち破り、ヤミラミのとこまでくるが、ヤミラミは避けた。ヤミラミはサンダースの技や戦術に大苦戦し押されていた。

ヤミラミ「このサンダースかなりのレベルだ。俺では倒せないか・
・・」

正直ヤミラミはサンダースの方が強いと気づきヤバイと思っていた。

ヤミラミ「（だがやれるだけはやる！！）しねんのずつき。」

ヤミラミはやれるだけやろうと自身の自慢の技”しねんのずつき”
をし、サンダースに向かって行った。ヤミラミはあく・ゴーストタ
イプ。本来なら”あくのはどう”や”シャドーボール”が得意だが、
このヤミラミは攻撃の方が自信がありここは特攻より攻撃でいこう
と思ったようだ。

サンダース「最後に大技か。だが俺は負けないぜ。」

サンダースはすでに”サンダーバズーカ”の用意をしていたようだ。

サンダース「サンダーバズーカ”発射！！”

サンダースが勢い良く技名を言うと用意してあった穴から電気のビ
ームが出てきた。

ヤミラミ「な、なんだありゃ……。」

ヤミラミは突進しながら驚いた。

ヤミラミ「あれは食らったらやばいな……。つてとまらない!？」

そういまヤミラミは全力で突進中。もはや避ける手段は無かった。そのまま3つのビームはヤミラミに当たった。煙が晴れてみてみるとヤミラミは目を回して倒れていた。

サンダース「さて、いったん戻るか。」

そのままサンダースはハスボー達の元へと向かった。

そしてラグは

ラグ「そろそろ本気でいこうか」

ヨノワール「なに、今までが本気じゃないのか!？」

ラグ「そりゃね、本気を最初に出すのはあまりしないよ。」

ヨノワール「(コイツら・・・向こうでもヌケニンやヤミラミがやられたみたいだし、ゴースたちも続々やられてるし、一体何なんだ

「?」ならばみせてもらおうか、本気つてやつを。」

ヨノワールはすこしからかうような感じで言ったがラグは挑発に乗らず

ラグ「え、ほんとにいいの?」

ヨノワール「あ、ああ。(なんだ、コイツ。ほんとに強くなるのか?それとも単なる脅しか?)」

ヨノワールが疑問に思っている間ラグはパワーをためていた。

ラグ「いくよ」デンライジ「!!」ウォーターカリバー「そして
プラズマカリバー」

ラグはデンライジになりさらに「ウォーターカリバー」そして電流を流し「プラズマカリバー」にした。

ヨノワール「な、なんだ?あいつがわけの分からん姿に・・・しかもなんだあの剣は?」

ヨノワールは目の前で起きた出来事に驚きすぎて、頭が混乱していた。

ラグ「いくよ、”プラズマスラッシャー”」

ラグが剣を振ると電気の衝撃波をだした。

ヨノワール「ぐ、ぐわああああ。」

攻撃を受けたヨノワールはあまりの威力に倒れた。

ラグ「ふう、やっとだね。でもやっぱりデンラージや”ウォーターカリバー”、”プラズマカリバー”は威力高いなあ。デンラージと”プラズマカリバー”は特に。さてこの子を運ぼうかな。」

そうしてラグはキノたちの元に行った。

第四十二話 電気がないと困るんです。 VS ゴースト×3 (後書き)

ということで意外に簡単に終わりました。(笑)

ラグ「それにしてもデンライジと”プラズマカリバー”は強くない？」

サンダース「俺の”サンダーバズーカ”もだ。」

まあそりゃ修行で手に入れた強さだからね、でもそのうちその上もくるよ。

キノガッサ「あと俺の新技もでたな。」

ああ”ロツクバルカン”ね。あれはキノガッサに普通に”ストーンエッジ”を使わせても面白くないと思って考えたんだよ。15秒ぐらいで。

キノガッサ「なにー！！つまり元々無かったのか？」

うん。

キノガッサ「思いつき多いな作者・・・(汗)」

第四十三話 ヤミラミ達の秘めたる思い（前書き）

さて、今回は何があったのかを言ってもらおうかな。

ラグ、「インルーラに何があったっけ？」

いや、ヤミラミ達がこの街に来た理由だよ

第四十三話 ヤミラミ達の秘めたる思い

突如でできたゴーストポケモン3匹とのバトルに勝利したラグ達。キノ達の所もゴース達が逃げ出し、撃退に成功していた。今は街のポケモンセンターのような場所「リフレッシュセンター」にゴーストの3匹を連れて行ったところだ

ヤミラミ「うう・・・」

ラグ「気がついた？」

ヤミラミ「うわぁ、な、なんだよ。俺達をどうする気だ!？」

ヤミラミはさっき負けたサンダーズの仲間であるラグに驚き少し強い口調で言ってみる。しかしそんな警戒心も無駄で

ラグ「どうもしないよ。ただ大丈夫かなあって思ったからさ」

ヤミラミ「そ、そうか。・・・って、あれっ!？ヨノワール?ヌケニン?」

ヤミラミは二人の事が気になり不安になりながらあたりを見渡した

ラグ「ああ、彼らは隣の部屋だよ。もう気がついて今、ご飯食べてるよ」

ヤミラミ「なに？」

ヤミラミはラグの言ったことが本当かどうか気になり、ゆっくりと隣の部屋に向かった。すると

ヤミラミ「お前ら……」

そう、ヤミラミが見た先にはヨノワールとヌケニンがモリモリ食べている姿があった。

ヌケニン「お、ヤミラミ。気づいたか」

ヨノワール「お前も食つか？こいつらいいやつだぞ」

ヤミラミ「な、な、な……」

ヤミラミは二人のを見ると下を向いて体をわなわなと震わせる

ヨノワール「ヤミ……ラミ……？」

気になったヨノワールが声をかける。ヌケニンも不安そうだ。しかしそんな不安も持つ必要なく

ヤミラミ「お・・・」

ヨノワール「お？」

ヤミラミ「俺にも食べさせるー!!」

ヤミラミは二人の間に入り込み、用意されていたご飯を食べ始める。
・・・と

キノガッサ「俺にもくれー!!」

キノガッサはそれに飛びついていた。

メンバー「・・・(汗)」

それから1時間後、ヤミラミ達の食事が終わった。いや実際はヤミラミ達は20分ぐらいで終わり、あとはキノガッサがずっと食べていた。なので「ヤミラミ達」と言うよりは「キノガッサの食事」と言った方が正確かもしれない

ラグ「・・・さて、それじゃあ何があったのか、聞かせてもらっていい?」

ラグの問いにヤミラミ達はコクリと頷いた。

ヤミラミ「もちろんだ。俺たちは・・・電気をもらいにきたんだ」

ラグ「電気?」

ヤミラミ「あゝ」

キノガッサ「そんな電源をつけたりすればいいじゃねえか」

キノガッサは簡単に言った。しかし現状はそんなに簡単に片付く問題ではなく、ヤミラミは達は口を開いた

ヤミラミ「違う、電源をつけても電気はつかない」

キノガッサ「は?」

サンダース「電気が・・・通ってないんだな?」

ヤミラミ「あゝ」

キノガッサ「ん、どういう意味だ?」

サンダース「つまり、こいつらの住んでる所自体に電気が流れてないんだ」

キノガッサ「よくわかんないけど・・・とにかく電気がないってことか？」

サンダース「多分な」

サンダースは更に説明をしようかとも考えたが、時間がもつたいな
いと思い、それを止めた（ちなみにキノガッサは学校で問題児ラン
キングトップ5に入る程賢くない。）

ラグ「あれ？そう言えばポリZとハスボーは？」

アクア「ああ、二人は今街の探索に行ってるよ。ちよつと調べたい
ことがあるって」

ラグ「ふうん」

サンダース「それじゃあとりあえず・・・この街の電気管理をして
いる会社に行くか？」

キノ「え、そんな会社があるんですか？」

サンダース「ああ、インルーラ電管社って会社だ」

ヤミラミ「ちなみに電気管理を縮めて電管になってるんだ」

アクア「へえ〜ヤミラミもこの街のこと知ってるんだね」

ヤミラミ「そりゃ俺たちの村は近いからな。時々買い物にくるんだ」

アクア「へえ〜」

ヤミラミの意見に感動するアクア。するとキノが何かに気付いたのか

キノ「そう言えばヨノワールさんとヌケニンさんは大丈夫ですか？
さっきからしゃべってませんが・・・」

キノは心配して大丈夫かを確認する。

ヤミラミ「なあに大丈夫だ。なにせ・・・ここで寝ているだけだからな」

ヤミラミは自分の後ろを見て言った。

ヨノワール「すすすすもう食べられない・・・」

ヌケニン「く〜。」

二人とも見事に寝ていた。

キノ「いっぱい食べましたもんね。」

その日の夜

サンダース「ところでポリZ達は何してたんだ？」

ポリZ「え、調査ですよ。」

ハスボー「調査、調査」

サンダース「なんのだ？」

ポリZ「それは秘密です」

ポリZはウインクしながら言った。どうやら何か意味のある調査だったらしい

サンダース「そっか、でもいつかは教えてくれよ。気になるし」

ポリZ「はい、もちろんですよ」

そうしてメンバーは眠りについた。

第四十三話 ヤミラミ達の秘めたる思い（後書き）

ポリズ「こんな理由だったんですね。」

お、今回はポリズか。

そうですね。電気がないと困るのはポケモンだけじゃないってことだね。

ポリズ「でもインルーラに何があったかは？」

あと少し先。

ポリズ「なるほど。」

ところでポリズは何してたの？

ポリズ「調査ですよ、調査。」

だからなんの？

ポリズ「それは秘密です。」

うーイジワル。

第四十四話 電管社で知る真実（前書き）

今回は電管社へ行きます。

ラグ「進展？」

あるかもね。

第四十四話 電管社で知る真実

ゴーストポケモンのヨノワール、ヌケニン、ヤミラミの3人とバトルを行い見事勝利したラグ達。それから色々あり電気をもらうため今インルーラ電気管理社（通称電管社）へ向かった。

サンダース「電管社はこつちだったよな？」

ヤミラミ「ああ、こつちだ。」

インルーラに詳しい2人が先頭を歩き、他のメンバーは後ろからついて行った。

ラグ「そういえばどれぐらいかかるの？その電管社ってところまで。」

ヨノワール「う〜んどれくらいだったか・・・」

ヌケニン「大体15分くらいだ。」

ラグ「あ、そうなの？」

ヨノワール「さすがだぜ、ヌケニン。」

ヨノワールは自分の答えられなかった質問に答えたヌケニンをすくいと思ひ詰めた。

ヌケニン「いや、ここはいつも通っているからな。自然とわかる。単なるヨノワールの勉強不足だ。」

ヨノワール「うっ・・・」

ヨノワールは痛い所を付かれ苦笑いした。

それから15分後

サンダース「ここだな。」

ヤミラミ「ああ。」

キノガツサ「ここが・・・」

キノ「電管社ですか。」

キノガツサ「でけえな。」

そうキノガツサの言った通りこのビルは高く20階ほどある。

キノ「ところでこのビルどうやって登るんですか?」

キノの質問にサンダースが反応し答えた。

サンダース「高いからエレベーターだな。」

ハスボー「すごい、あんな便利なものがあるの?」

ハスボーは一度だけ見たことあるエレベーターを思い出して言った。

サンダース「ああ、発展した都市だからな。」
ヤミラミ「あれで一直線に市長室に行けるぜ。」

ヤミラミは中に入りエレベーターのボタンをおした。しかしエレベーターには何も変化がない。

ヤミラミ「あ、あれ？」

ポチ、ポチ、ポチ

ヤミラミは何回も押したが全く変化がなかった。

ヤミラミ「なんでつかねえんだ？」

サンダース「ま、まさか・・・」

サンダースは何か考えたらしくまさか・・・に続いて言った。

サンダース「街自体に電気が通ってないんじゃないか？それならここが開かない理由がわかる。」

サンダースの考えは街全体に送られるはずの電気がどこかで遮断されており、そのせいで街全体に電気が流れず、エレベーターも動か

なくなつたのではないか。

またそのように街で異常が起こっている故にヤミラミ達の村にも電気が流れないのではないか、という考えだった。

ヤミラミ「確かに・・・その可能性は高いな。」

アクア「けどそれだと疑問が・・・」

サンダース「そうだな、一体なぜ電気が遮断されたかが疑問だ。」

サンダースは難しい顔をした。話しがよく分からないラグとキノガツサ以外にもその疑問に頭を悩ませた。ある2人を除いて・・・

サンダース「なんで笑ってるんだ、ポリズ、ハスボー？」

そうポリズとハスボーは得意げに笑っていた。

ポリズ「サンダースさん、私達が昨日なぜいなかったと思います？」

サンダース「うん・・・まさか、このことについての調査!？」

ハスボー「うん、そうだよ。ポリズはね、バトルの後そのことを考えてあらかじめここに来てたんだ。」

ポリズ「すると分かったんですよ、大体の理由、というか怪しい人物が。」

ポリズは少し暗い雰囲気であった。

ラグ「誰なの？」

ポリズ「この街の街長さんです。」

サンダース「街長だと？」

あまりの予想外さにサンダースは驚きを隠せなかった。

ポリズ「その人なら街の電気を管理してますから止めることぐらいは……。」

キノ「できる、ってことですね。」

ポリズ「はい。」

この意見にメンバーのほとんどは確信をもったがヤミラミ達はまだ信じられないようだ。

ヤミラミ「そんな、それじゃあ俺たちの村はどうなるんだよ!？」

ヨノワール「そうだそうだ。みんな困ってんだ。」

又ケニン「なんとかしてくるって約束したのに……。」

ゴースト3匹はそれぞれ村のみんなの期待を預かってここにきた。

それが信頼していた街長によって果たせなくなろうとしていた。エレベーターが使えない!! 最上階にいけない。

つまり街長と話してもできない。

ここで無力を感じながらここににいるか帰るしかない。

そんな絶望感に浸っていた。しかし

ラグ「まだだよ、まだ終わってない。」
サンダース「そうだ、階段がある階段で行こう。」
ヤミラミ「いいのか？大変なのに。」

ヤミラミは助けると言われて改めて確認した。

ラグ「もちろん、困ったときはお互い様だよ。」

ラグは笑顔で言った。

それから2時間後途中迷いながらもなんとか街長室にたどりついた。

キノガッサ「やっとついたな。」

ラグ「あゝつかれた〜（汗）」

メンバーはヘトヘトだった。

ヤミラミ「ん・・・？」

ヤミラミは机の上にあった紙に注目した。

ヤミラミ「おい・・・」

サンダース「ん？」

アクア「どうかしたの？」

キノ「何か見つけました？」

メンバーは何事かとヤミラミに聞いた。するとヤミラミは額に汗を流しながらいった。

ヤミラミ「おい、これみてくれよ・・・」

メンバーは気になりヤミラミの紙をみた。

キノガッサ「おい、うそだろ・・・」

ポリズ「これに関しては知りませんでしたね・・・」

キノ「誰かの陰謀でしょうか？」

サンダース「分からない・・・だが異常は起きている。」

そうその手紙には

「街長は預かった。返して欲しいならこのブルの地下にい。おまもなくはこの街の電気はこのままだ。」
と書いてあった。

アクア「ヒドい・・・ポリちゃん今回一番悪いのは誰なの？」

ポリズ「それが・・・分からなくなりました。」

アクア「え・・・」

ポリズは悔しそうに言った。

ポリズ「先ほども話した通り私は街長が犯人ではないかと思いましたが。しかしその街長は捕らわれている・・・私の考えは通りません。」

アクア「そんな・・・」

キノ「このままじゃ・・・」

サンダース「ああ、電気は止まったままだ・・・。」

ヤミラミ「そ、そんなぁ・・・」

メンバーはこの事態にしょげてしまう。しかし

ラグ「みんななに言ってるの？」

サンダース「ん？どういうことだ？」

ラグのいきなりの発言にサンダースは少し驚いた。

ラグ「だからさ、落ち込む必要はないんじゃない？」

ヤミラミ「なんでだよ、怪しかった街長は捕らわれているんだぞ。」

キノガツサ「だから下にいるやつぶったたけばいんだろ？」

ヤミラミ「あ……」

ラグとキノガツサの考えにメンバーは顔を上げ話しをきいた。

ラグ「ホントに悪い人がこの下にいる。それならその人を倒して街長をかえしてもらっただけだよ。」

話しを聞くとメンバーは言った。

キノ「そうですね。」

ポリズ「犯人を叩けばなんとかなるかもしれないです。」

アクア「ていうか早く気づけば良かったね。」

サンダース「すっかり諦めに入ってたな。」

ヤミラミ「でもそれでなんとかなるのか？」

メンバーが希望を持った中、ヤミラミ達ゴーストの3人はまだ不安そうだった。そんな3人に近づきラグは言った。

ラグ「大丈夫、なんとかなるよ。」

ヤミラミ「なぜ、何を根拠にそんな……」

ラグ「根拠じゃないよ。」

ヤミラミ「え？」

ラグの言葉にヤミラミは驚いた。

ラグ「根拠はない。だけどやってみないと分からない。もしかしたらなんとかなるかもしれない。それならそっちの可能性にかけてみようよ、ね。」

ラグは笑顔で言った。そんなラグの言葉にヤミラミは頷き・・・

ヤミラミ「そうだな、まだ希望はあるんだよな。よし行こう、早く村に電気を送るために。いくぞ、ヨノワール、ヌケニン!!」
ヨノワール「おっしやああああ!!張り切っていくぜ!!」
ヌケニン「村のみんなのために・・・がんばる。」
ラグ「よしそれじゃあ地下へレッツゴー!!」

こうしてラグ達は地下へと向かった。

第四十四話 電管社で知る真実（後書き）

ポリズ「下・・・地下ですか。」

そうだよ、どうしたのポリズ、そんな悲しそうにして？

ポリズ「だって私の情報役に立たなかったから・・・」

でも調べたことはそれだけじゃないんでしょ？

ポリズ「もちろんです！！次回こそは僕の情報でみんなのサポートを・・・」

よし、復活した（笑）

第四十五話 捕らわれた街長（前書き）

今回は地下に行きます。

ラグ「敵いる？」

もち。

ラグ「はぁ・・・」

第四十五話 捕らわれた街長

捕らわれた街長を助けるため電管社のビルの地下へと向かったラグ達。

1階までは楽に戻れたがここからが問題だった。

ラグ「地下への入り口が・・・ないね。」

そう、1階には地下への入り口はなく隠されているようだ。

ヤミラミ「まさか隠されているなんて・・・」

ヨノワール「誰か場所知らないのか？」

アクア「わかんないよ・・・。お兄ちゃんは知らない？」

アクアは頼みの綱であるサンダースに聞いた。しかし

サンダース「流石に知らないな・・・電管社自体そんなにきたこと無かったし・・・」

キノ「・・・！！ラグさんのヒレで分からないんですか？」

そう、ラグ達の種族であるラグラージにはヒレがあり、そこは津波などを察知するレーダーになっている。

そこでキノはそのレーダーを使い、隠された地下への入り口を探せないかと思ったのだ。

ラグ「ごめんキノさん。それも考えてやってはいるけどムリみたい
・・・」

キノ「そうですか・・・」

キノもラグも考えが通らず落ち込んでいた。

キノガツサ「くそっ！！こんな壁壊れないのかよ！！」

キノ「ちよつとキノガツサ！！」

キノガツサはイライラし、壁を殴ろうとするがキノに止められてしまふ。

ポリズ「・・・よし、出来ました！！」

ラグ「え、なにが？」

ポリズのいきなりの発言にラグは驚きポリズを見た。他のメンバーもだ。

ハスポー「ついに分かったの？」

ポリズ「はい。キノガツサ、絵の横にあるスイッチと花瓶の近くのスイッチと階段の近くのスイッチを技で同時に押してくれませんか？」
キノガツサ「ん、俺か？」

ポリズ「うん、お願いします。」

ポリズは何か考えたらしくキノガツサに3つのスイッチを同時に押ししてくれと頼んだ。

特に断る理由がなかったキノガツサは言われたとおり技を発動させる。

キノガツサ「エナジーシューター」

キノガツサの周りに小さい“エナジーボール”が3つ生まれそれぞれにスイッチの元まで行き爆発を起こした。どうやらキノガツサが威力を調節したようで小さい爆発しか起きなかったがスイッチは押された。すると

ゴオオオオオオオオ

激しい音を立てて1階の真ん中の床が動いた。

ラグ「な、なにこれ!?!」

アクア「床がうごいてる」(汗)

キノ「もしかしてさっきのキノガツサの・・・」

キノガツサ「俺じゃねえ」(焦)

キノガツサはさっき自分が放った“エナジーシューター”によって

起きた現象ではないかとキノに言われ焦った。

ポリズ「あ、これですか？キノガツサのおかげですよ。」

キノガツサ「やっぱり俺かー!?」

サンダース「でも、おかげ？」

サンダースはポリズの言った言葉に「キノガツサの」のあとの「おかげ」という言葉が気になった。

ヤミラミ「なんでだよ、そのキノガツサがスイッチ押したからこんななっているんじゃないのか？」

ポリズ「そうですね。でもキノガツサは悪いことはしてません。むしろ助かりました。なにせ入り口を作ってくれたんですから。まあ説明はしますからとりあえず地下へ急ぎましょう。」

そうポリズが言うとメンバーは現れた地下へ続く階段を下り始めた。するとポリズが説明を始めた。

ポリズ「さっきの3つのスイッチを押すことによって地下への入り口……つまりこの階段が現れるという仕組みになっていたんですよ。」

ラゲ「なるほどね。」

キノ「疑ってごめんね、キノガツサ。」

キノをはじめとするメンバーはキノガツサに誤った。

キノガツサ「いいんだよ、別に。それより早く行くこっぜ。明かりが見えてきた、出口はすぐそこだ。」
キノ「うん。」

キノガツサはスピードを上げて走った。

ラグ「キノガツサ早いなあ。」
ポリズ「それだけ急いでいるんですよ。」
ラグ「そうだね。」
サンダース「ところでポリズ。」
ポリズ「ん、なんですか？」

呼ばれたポリズはサンダースの方を見ていった。

サンダース「なんでスイッチのことを知っていたんだ？」
ポリズ「ああそういうことですか？あれは昨日調査していたらたままそのこともあって、だから知ってるんですよ。ハスボーも手伝ってくれました。」
ハスボー「ポリズのパソコンは便利だよ。」
サンダース「そうか、ありがとな。ポリズ、ハスボー。」
ポリズ「どう致しまして。」
ハスボー「どう致しまして。」

この会話が終わりラグ達はいよいよ明かりが近くまで来た。キノガツサはもう入っているようだ。そしてラグ達は明かりを抜けた。

そこは発電機が沢山ある部屋だった。

サンダース「ここか？」

ポリズ「はい、ここが最深部です。」

サンダースが警戒し周りを見渡すと左からキノガツサが吹き飛ばされてきた。

キノガツサ「ぐっ……」

キノ「キノガツサ！！」

吹き飛ばされたキノガツサを心配しキノがキノガツサに近寄る。

キノガツサ「いてて……」

キノ「大丈夫？」

キノガツサ「ああ、なんとかな。それよりアイツ強いぜ。」

キノガツサの指を指した先には

???「ぐふふふ。」

ヨノワール「なんだよアイツ。」

エレブーの進化形態であり電気タイプのエレキブルがいた。

ヤミラミ「なんでエレキブルが・・・」

エレキブル「仲間がきたか・・・」

エレキブルはヤミラミを睨んだ。その瞳は黒に染まっており、あるものが感じられた。

ラゲ「闇・・・つまりダーク化してるね。」

サンダース「ああ、ここからでも分かるな。邪悪なオーラが。」

アクア「もしかしてあの人が街長さん？」

ヌケニン「違う。アイツは街長の補佐だ。」

ヨノワール「おい、エレキブルの後ろ!!」

ヨノワールに言われてメンバーは後ろを見た。そこには

ラゲ「デンリユウ!？」

ヤミラミ「アイツが街長だ!!」

ラゲ「ええ!？」

サンダース「デンリユウのデンさんか。」

アクア「知り合い？」

サンダース「昔住んでた頃の街長さんだ。まだ街長さんをやってたのか。」

ヤミラミ「それよりアイツがくるぞ。」

ヤミラミの言葉で前をみるとエレキブルが突っ込んできた。

ハスボー「は、早い!？」

エレキブル「かみなりパンチ」

エレキブルは走ってきたスピードを生かし威力を上げた“かみなりパンチ”をハスボーに使った。

ラグ「くっ、ウオーターカリバー」

ラグは“ウオーターカリバー”をハスボーの前に構えて“かみなりパンチ”を防いだ。

エレキブル「お前か、デンラージは。」

そう言われるとラグはデンラージへと変化した。

ラグ「そつだよ、それが何か？できればこんなことをした理由を・
」
エレキブル「かみなり」

ラグがそこまで言うとエレキブルは“かみなり”を放ってきた。

ラグ「くっ、”ハイドロステインガー”」

ラグは“かみなり”に“ハイドロステインガー”を打ち込み相殺させた。

ラグ「どうやら話しは聞いてくれそうにないね。それならいくよ！
」

こうしてバトルが始まった。

第四十五話 捕らわれた街長（後書き）

バトルスタートです。

ラグ「今回のバトルで新ワザは出てくるの？」

デンラージのがね。

ラグ「どんな技？」

詳しくは言えないけど一応強力な技だよ。

ラグ「楽しみ〜」

第四十六話 VSエレキブル 羽ばたけ！！雷光の翼（前書き）

さて今回は前回の予告通りラゲの新ワザが出ます。

ラゲ「わーい、新ワザ新ワザ。」

ではごきげん。

第四十六話 VSエレキブル 羽ばたけ！！雷光の翼

ついに地下へと突入したラグ達。

しかしそこで待っていたのは街長であるデンリュウ・・・デンさんを捕らえたエレキブルだった。いきなりの不意打ちにキノガッサがダメージをおったものの、気絶などはしていない様だ。

キノ「キノガッサ大丈夫？」

キノガッサ「あ、ああ、なんとかな。」

キノガッサはそういうものはかなりダメージを負っているようだ。

キノ「おとなしくしてて。“エンシエントサークル”」

キノは自身のオリジナル技である“エンシエントサークル”を使いキノガッサの治療を始めた。

キノ「今回の回復は能力アップはないけどその分回復できるから。」

キノガッサ「すまねえ・・・」

キノ「でも安静のためにバトルはしないでね。」

キノガッサ「なにい〜!？」

キノの意外な言葉にキノガツサは驚いた。

キノガツサ「俺は戦える。ほらもうこんなに・・・」
キノ「えい。」

キノは痛くないと主張するキノガツサに出来た傷を軽くつついた。

キノガツサ「いてゝ!!」

キノ「ほらね、まだ本調子じゃないんだからおとなしくしてて。私たちは一人じゃなくて仲間がいるのでしょ？仲間を頼りましようよ。」

キノは優しい笑顔でそう言った。そんなキノを見たキノガツサは少し赤くなった。

キノガツサ「わ、わかったよ。しゃーねえ、今回は活躍を諦める。」
キノ「うん。じゃあ始めるね。」そう言うとキノはキノガツサの治療を始めた。

サンダース「治療を始めたか。ハスボー、キノさんの近くにいてくれ。治療中は集中すると動けないからな。」

ハスボー「うん。」

サンダース「それからポリズとアクアもハスボーといってくれ。ハスボーのサポートだ。」

アクア「うん。」
ポリズ「了解しました。」
サンダース「それからゴースト3人は俺といっしょに部屋の発電機を守ってくれ。攻撃が当たって爆発でもしたら大変だからな。」
ヤミラミ「分かった。」
ヨノワール「おうよ。」
ヌケニン「了解。」

サンダースから指示を聞くとそれぞれのポジションに移動をした。
サンダースはラグの近くを通るときに

サンダース「アイツ、頼むぜラグ。」
ラグ「任せて、サンダースさん。」

2人はお互いの拳と前足を合わせて言った。

エレキブル「おいおい、作戦会議は終わったかい？」
ラグ「うん。」
エレキブル「そうかい、それじゃあ行くぜ。」

ラグがそういうとエレキブルは攻撃を仕掛けてきた。

エレキブル「“チャージビーム”」
ラグ「“ウォーターソリユーション”」

電気のビームと水のビームはぶつかり合い互いに相殺した。

エレキブル「やるな、デンラージ。」

ラグ「くっ、……。この人強い。キノガッサが苦戦するのもよく分かるよ……。）」

エレキブル「だが、ダーク化、そして俺はお前より強い。諦めて我が糧となれ。」

ラグ「糧？」

ラグは知らない言葉に首を傾げポリズに聞いた。

ポリズ「んまあ……。栄養みたいなものです。」

ラグ「えゝそんなのやだ。」

エレキブル「ならば力づくで奪うだけだ。“はかいこうせん”」

エレキブルはラグが拒否したことを確認すると“はかいこうせん”を出して攻撃した。しかし

ラグ「カリバー!!!」

ラグがカリバーを呼ぶとカリバーが出現し、光輝いた美しい剣と化する。その剣を使って”はかいこうせん“は切り裂かれた。

エレキブル「なるほど、それが切り札の一つ“プラズマカリバー”か。」

ラグ「そうだよ、僕が異世界から手に入れた力だ。」

エレキブルにそう言われたラグはカリバーをエレキブルに向けて言った。

エレキブル「異世界・・・そうか、デンラージになり異世界にも行った。面白い、面白いぞラグラージ。我らが糧にぴったりだ。」

ラグ「だ〜から、栄養になっちゃうのはぜ〜つたいイ・ヤ・だ！」

ラグはエレキブルに改めて確認させようとわざと言葉を区切って言った。

エレキブル「まあいい、お前を捕らえたあかつきにはそのプラズマカリバーとやらもいたたくとしよう。」

ラグ「え〜だめだよ。これはあげない。というか負けないうよ。」

エレキブル「威勢が良いな、嫌いじゃないぞ、その性格。」

ラグ「それはどうも。けど誉めたからってバトルはやめないよ。みんなに託されたんだから。」

エレキブル「みんな、か・・・」

エレキブルはニヤリと笑った。

エレキブル「お前の強さの根元は仲間らしいな。ならばソイツらを先にしとめてやるよ。確実にな。“かみなり”」

エレキブルは“かみなり”を使ってハスボー達を攻撃した。しかしその数はなんと10個程。並大抵の力ではない。

ハスボー「リーフリフレクトバリアー」

ハスボーは“リーフリフレクトバリアー”を展開しその“かみなり”を防いだ。しかしその数は多く、10程の“かみなり”がバリアーに直撃した。

ハスボー「ぐ・・・重い・・・」

本来なら“かみなり”一つを守るだけなので簡単はずだが、今回は10個程ということもあり、非常に大変そうだった。

ポリズ「助けますよ。“10まんボルト”」
アクア「そうだね、“れいとうビーム”」

ポリズとアクアは技を出してハスボートのサポートをした。そのおかげで“かみなり”は弾かれた。しかし

アクア「しまった！！」

ハスボ「弾かれた“かみなり”が・・・」

そう、弾かれた“かみなり”は消えずに弾かれた方向に飛んでいった。しかも周りは発電機。当たれば大爆発が起きてしまう。

ポリズ「大丈夫ですよ。」

アクア「え？」

ハスボ「なんで？」

ポリズの言葉に二人は疑問を持った。その瞬間“かみなり”の向かった先にある発電機の前に黒い影があった。

ポリズ「だってサンダースさん達がいるじゃないですか。」

そう、こういう時のために素早いサンダースが発電機を守る役目をしてきたのだ。

アクア「あれは・・・“かげぶんしん”？もしかして“かげぶんしん”でつくったお兄ちゃんもちくでんだからそれで吸収してるの？」

ハスボー「“かげぶんしん”の数が足りない他の発電機はヤミラミ達が守ってくれてるよ。」

ポリズ「そうです、エレキブルは電気タイプ、つまり電気技を使うと思っただけです。だから特性の“ちくでん”で吸収できるサンダーさんに守りをお願いしたんです。あと“まもる”を使えるゴーストの3人もいたので守りにしてもらいました。」

ヤミラミ「なに!？」

ヨノワール「俺たちが“まもる”を使えることを知ってたのか!？」

実際にヤミラミ達は“まもる”を使って“かみなり”を防いでいた。

ポリズ「僕のデータをなめてもらっちゃ困りますよ。」

ヌケニン「恐ろしいデータだ(汗)」

ヌケニンはポリズのデータの凄さに少々恐れを感じた。

なにはともあれ発電機の爆発は防げた、と安心したのもつかの間、エレキブルは攻撃の準備をしていた。

エレキブル「悪いな、“かみなり”はお取りだ。」

ラゲ「え?」

エレキブル「言っただろ、“確実に”って。」

ラゲ「そんな・・・」

エレキブル「ちょうどあのサンダー達もハスボー達を守ろうと立ちふさがっている。だが動きまわったせいでヘトヘトだ。もうお前らに俺の最強技を防ぐ手だてはない。さらばだ“ダークネススパイ

ク”」

エレキブルはそういうと右手に黒い電気を集めはじめた。

ハスボー「どうしよう、“リーフリフレクトバリアー”は連続は使えないよ。」

ポリZ「私とアクアの攻撃で・・・っ!？」

アクア「体が動かない!？」

ポリZとアクアはバリアーを使えないハスボーの代わりに迎え撃とうとしたが突然体が痺れて動けなくなってしまった。

エレキブル「残念だったな。この技は周りのポケモンを麻痺させる能力もあるんでな、お前らは動けない。」

サンダース「くっ・・・俺もかよ。」

“ダークネススパーク”の麻痺は電気タイプのサンダースですら麻痺させるほどの強力なものだった。

エレキブル「さらばだ、チーム絆の者達。」

その瞬間エレキブルの手からは黒い電気がビームとして放たれた。そのビームは真っ直ぐに、動けないメンバー達に向かって言った。

ラグ「くっ……こうなったら……。」

ビームは防がれることもなく直撃した。周りには黒い煙が立ち上り少し破壊された地面が見えた。

エレキブル「さあ、これでお前の力の根元は無くした。諦めて我らに……。」

エレキブルがメンバーを倒したと判断し、ラグに諦めることをすめようとした。しかし……

エレキブル「ヤツがいない？」

そう、さっきまでラグがいた場所には何もおらず、無論ラグもいなかった。

エレキブル「ヤツめ、いつたいどこに……。」

エレキブルがめんどくさがった次の瞬間、煙が一気に吹き飛んだ。

エレキブル「なに!？」

エレキブルが煙をみると中から金色に光る巨大な何かが見えた。

エレキブル「なんだあれ？」

エレキブルはわけの分からない現象に驚きを隠せなかった。
煙がはれるとそこには金色の羽があり、メンバー全員を包み込むようになっっていた。

そして羽が開き中の状態が分かるようになった。

エレキブル「な・・・」

エレキブルが見たもの、それは金色に電気を帯びた羽、自分の攻撃でダメージを受けたはずのチーム絆達、そして

エレキブル「ラグラージに・・・羽が生えただと!?!」

そう、その羽の持ち主のラグだった。

そしてラグはこう言った。

ラグ「僕の仲間達を狙うなんて・・・許さない!!僕のこの“ライトニングウイング”で君を倒すよ!!!」

デンライージと化し、光を放つラグの体、美しく光る「プラズマカリバー」、その二つと同じくらい輝く電気の翼はまさしく「雷光の翼」であった。

第四十六話 VSエレキブル 羽ばたけ！！雷光の翼（後書き）

ラグ「ライトニングウイング”かあ”」

そう、新ワザは光輝く雷光の翼“ライトニングウイング”です。

ラグ「この技なにできてるの？」

電気。

ラグ「ウイングっていうけど飛べるの？」

イエス。

ラグ「ええー！？じゃあ僕空中戦も出来るの？」

“ライトニングウイング”を上手く使えるようになればね。

ラグ「じゃあこれをみんなにも覚えてもらおうよ。」

それは無理。

ラグ「なんで？」

だって“デンインパクト”や“ライトニングウイング”は特別な技だからね。

ラグ「そうなの？」

うん。まあ詳しい話しはその内ある人がしてくれるよ。

ラグ「ある人？」

うん、ねえ？

???「・・・」

ラグ「誰？」

第四十七話 雷拳と雷翼（前書き）

さていよいよ“ライトニングウイング”の出番です。

ラグ「強いんだよね？」

そりゃね、チートではないけど。

第四十七話 雷拳と雷翼

体力の減った仲間達を攻撃したことに怒り、新ワザ“ライトニングウイング”を発動したラグ。その技はラグに翼を付ける技だった。

エレキブル「まさか・・・羽だと!？」

ラグ「驚いてる暇は・・・ないよ!!」

その瞬間ラグは消えた。

エレキブル「奴め、一体どこに・・・」

ラグ「ここ!!」

あまりの速さにエレキブルは同様し、なおかつラグのスピードが上がったのでエレキブルはラグを見失った。するとラグは空中からエレキブルに対して“プラスマカリバー”を振りかざしていた。

エレキブル「くっ、“まもる”!!」

エレキブルは怯みながらもなんとか反応し“まもる”を展開した。

エレキブル「危なかつ・・・」

ラグ「甘いよ!!!」

エレキブル「なに!?!」

エレキブルはなんとか防げたと思い安心したがその考えは甘かった。

エレキブル「“まもる”にひびだと!?!」

そう、あの絶対安全な“まもる”が今、破られようとしていた。

エレキブル「くう・・・」

ラグ「カリバー!!!」

ラグが叫ぶとカリバーは光を増し、“まもる”は一気に崩れカリバーはエレキブルに直撃した。

エレキブル「ぐわああああ!?!」

エレキブルはそのまま吹き飛ばされ壁にぶつかった。その姿は煙のせいで今は見えない。

ラグ「カリバー、大丈夫？」

ラグはカリバーに安否を聞いた。カリバーに意志はないので返事はない。しかしまるで「大丈夫」と言うようにカリバーは光った。

ラグ「そっか、なら良かった。それじゃあ次・・・行くよ。」

ラグはカリバーを構えてエレキブルのでかたをうかがった。すると

エレキブル「テメエよくも・・・羽ぐらいで調子に乗るんじゃない
！！」

エレキブルは叫ぶがそれにラグは冷静だった。

ラグ「カリバー、分かるね？」

ラグはカリバーに確認をとりカリバーを構えた。

エレキブル「くられ、ばくれつパンチ」

エレキブルは一発逆転を狙って“ばくれつパンチ”を仕掛けた。

ラグ「今だ!!」

その瞬間ラグもエレキブルに向かって突っ込む。しかしそのスピードは通常のラグラージをはるかに超えていた。

エレキブル「なんて速さ……」

ラグ「いくよ。」

エレキブルは驚き声を上げるがそれよりも速くラグはエレキブルの懐にいた。

ラグ「はあああああ!!」 プラズマクラッシュ」

ラグはカリバーを思いっきり振りエレキブルにぶつけた。その衝撃でエレキブルは宙へまった。

ラグ「とどめだ!!」

ラグは素早く動きあつというまにエレキブルの前にいた。

エレキブル「く、くそお・・・」
ラグ「デンインパクト」！！」

ラグは右手の“プラズマカリバー”の電気を変換して電気をためた。そして、そのままエレキブルにパンチした。するとエレキブルは凄い速さで地面に飛んでいき、地面に激突した。

ラグ「ハアハア・・・」

そのまま地面に降り立ったラグは、あまり動きすぎたためか息は正常をたもっておらず疲れているような息だった。そして激突した衝撃で発生した煙がなくなると・・・

ラグ「や、やった・・・」

エレキブルは倒れておりラグは勝利した。

その後ラグは疲れたためその場に倒れてしまい、エレキブルとラグはアクア達に運ばれた。

その日の夜

ラグ「うっ……」

アクア「気が付いた？」ラグ「あれ、ここは……？」

アクア「インルーラのリフレッシュセンター。ラグちゃんはエレキブルさんとの戦いの後倒れちゃって……」

ラグ「あ……ごめん。」

アクア「うっん、謝ることないよ。私たちはラグちゃんに助けられただし……」

アクアは微笑みながらラグに言った。

アクア「そういえばね、お客さんが来てるよ。」

ラグ「お客さん？」

アクア「うん。」

ラグはアクアに言われて部屋を出た。

ところ変わってここはリフレッシュセンターの庭

キノガッサ「はっ!!はっ!!はっ!!」

キノガッサはパンチを練習していた。

キノガッサ「（俺があの時戦えなかったのは俺の強さが足りなかったからだ……。だから俺は）強くなる！！」「リーフメガパニッシャー！！！」

キノガッサは“リーフメガパニッシャー”で目の前の岩を壊した。

キノガッサ「アースグラビティ」

キノガッサが技名を言うと飛び散った岩は宙へまっただにも関わらず一気に地面に落ちた。

キノガッサ「この“アースグラビティ”なら周りのやつを重力で縛ることができる。次は……。負けねえ！！！」

キノガッサは空を見上げて言った。

第四十七話 雷拳と雷翼（後書き）

ラグ「やっぱり強すぎない？」

最初はこんなもんだよ。

ラグ「ていうかカリバーがなんか怪しい。」

なんで？

ラグ「だって意志があるみたいだったよ？」

それは気のせいさ。

第四十八話 ある人の話し、そして新たな事件（前書き）

さて今回は色々てんこ盛りです。

ラグ「色々なことがあるね。」

まあその中でも大事なものはレジェンドコードかな？

ラグ「レジェンドコード？」

まあそれは見てのお楽しみ。あとここでちょっとしたお知らせですが、なにかしら感想を書いてはいただけませんか？

ラグ「読者のみんなの意見を知りたいんだって。」

励みにもなるんで。

お願いします。

第四十八話 ある人の話し、そして新たな事件

アクアからお客さんが来ていると言われて部屋を出てお客さんのいる部屋に来たラグ。ラグはそのままドアを開けた。

「????」それでさー・・・あ、ラグ。久しぶり。」

ラグ「ミ、ミュウ!？」

そう、お客さんとはミュウのことだった。いきならのことにラグは驚いたがミュウは普通に手を振っていた。

ラグ「ど、どうしたのミュウ?」

ミュウ「いやあ、たまたま近くを通ったんであいさつでもと思ってね。」

サンダース「じゃないだろ、ミュウ?」

サンダースはミュウが嘘を付いたと分かったらしく横目でミュウをみた。

ミュウ「勘が鋭いなあ・・・まあ外れじゃないけど。」

ミュウはすぐに見破られたので少しムスツとしていた。

ミュウツ「まあまあそう膨れるなよミュウ。サンダーズのは正論なんだし。」

そこについてきていたミュウツがミュウをなだめた。

ミュウツ「話しを始めよう。大事な話した。」

それからメンバーはイスに座った。

ミュウ「それじゃあ話すよ。話しはラグのデンライジについて。」

キノガッサ「なんだよ今更。もうある程度いるんな事は知ってるぜ。」

ミュウ「ラグと“ライトニングウイング”の関係も？」

キノガッサは知っていると言ったが関係については知らなかった。

キノガッサ「いや、それは知らないな。」

キノ「ラグさんのオリジナル技・・・じゃないんですか？」

ミュウ「当たってるけどハズレでもあるね。」

キノガッサ「どっちだよ・・・(汗)」

キノガッサはキノと同意見なためミュウのあいまいな言葉に呆れた。

ミュウ「あの技や“デンインパクト”は特別な技なんだ。」

サンダース「特別？なんでだよ？」

ミュウ「レジェンドコード」って知ってるかい？」

サンダース「レジェンドコード？」

キノガッサ「ポリZは知ってるか？」

ポリZ「いや、知らないですね。」

珍しすぎる単語に物知りなポリZですら首を傾けた。

ミュウ「レジェンドコードっていうのはデンラージの持つ伝説の電気技のシリーズのことだよ。」ポリZ「伝説の電気技シリーズ？」

ミュウ「そうさ。過去のデンラージ2人も持ってたんだよ。前に話した“プラズマバスター”がそうなんだ。」

ハスボー「確かに前に言ってたね。」

ミュウの言葉にハスボーは納得の意を表した。

ミュウ「そして今回の“ライトニングウイング”もね。」

アクア「えっ、あの技も？」

ミュウ「そうだよ。」

キノは気になることが1つあった。

キノ「ってことは昔のデンラージさんも“ライトニングウイング”を使ってたってことですか？」

ミュウ「うん。でもレジエンドコードを2つも使えたことは今まで
のデンラージ達も出来なかったんだ。」

キノ「つまりラグさんが初めてってことですか？」
ミュウ「そうなるね。」

つまりはレジエンドコードを1つ、つまり技を1つならみんな使えたが2つ使えるのは前例がない、ということ。

アクア「ラグちゃんすごい。」

ラグ「いやあ、別に意識してやった訳じゃないしたまたまだよ。」

ラグは照れながらも実際なにをしたわけでもないので微妙に喜んだ。

ミュウ「さてレジエンドコードについても分かってもらえたし、
ユウツ、帰ろうか・・・ってない!？」

キノ「キノガッサですよ。」

サンダース「あの二人がいない理由は・・・」

とあるバトルフィールド

キノガツサ「エナジーボール」
ミュウツ「あまいな、「サイケこうせん」

“エナジーボール”と“サイケこうせん”はぶつかり合い相殺した。
その衝撃で煙がまうとミュウツが突っ込んできた。

ミュウツ「サイコカッター」
キノガツサ「それなら「きあいパンチ」

ミュウツの“サイコカッター”に対してキノガツサは“きあいパンチ”で対抗。“きあいパンチ”の威力は凄まじく、効果が薄い“サイコカッター”を相殺した。

ミュウツ「行け！！「サイコスファイア」

ミュウツは相殺した勢いでキノガツサが離れ落下していきながら
エスパーの力で作った玉を5個程キノガツサに向かって撃った。

キノガツサ「それならこつちも、「エナジーシューター」

キノガツサも対抗すべく小さな“エナジーボール”を5個作りミュウツに放つ。

5個の玉はぶつかり、これまた相殺した。

二人は地面に着地すると同時に相手に向かって走り出した。

ミュウツ「サイコバーン」

キノガッサ「リーフメガパニッシャー」

互いに手にパワーをためて殴りかかろうとした。しかし

キノ「ウツドロック」

ミュウ「バインドリング」

突如樹木と光のリングが現れ、キノガッサの体は樹木に、ミュウツ
ーの手はリングによって縛られ、行動を封じられた。

ミュウ「ちよつと目を離すとこの二人は・・・」

キノ「バトル大好きなのは別に良いんですけどね・・・(汗)」

そう、キノとミュウの技によってキノガッサ達は縛られていた。そ
れから技を解除した。

キノガッサ「いやあ、せつかく時間があったから・・・」

ミュウツ「久しぶりに戦うかってことで戦ってたんだよ。(汗)」

二人は頭をかきながら申し訳なさそうに言った。

キノ「早くもどりましょう。」

ミュウ「そうだね。ラグ達も待ってるし。」

それからミュウ達はラグのいるリフレッシュセンターに戻った。

ミュウ「ただいま。」

ラグ「おかえり。」

サンダース「やっぱりバトルか？」

ミュウ「うん、思いつきりやってたよ。(汗)」

ミュウが横目で見ると二人は目をそらした。

キノガツサ「ところであのエレキブルとデンリュウの様子はどうか？」

ポリズ「それなら大丈夫ですよ。今色々お話しを伺っていたところ
です。ね、ハスボー？」

ハスボー「うん、みんな元気だよ。」

奥からポリズとハスボーが現れエレキブルとデンリュウの無事を報告した。するとエレキブルとデンリュウが出てきた。

エレキブル「俺が君たちに攻撃を・・・すまない。」

いきなりの登場だがエレキブルは傷つけてしまったことを悔やんでるようで深々と頭を下げた。

デンリユウ「僕からもすいません。」

デンリユウも秘書がやってしまったことに責任を感じたらしく、エレキブル同様頭を深々と下げた。

ラグ「そ、そんないいんですよ。ね、みんな。」

アクア「うん、エレキブルさんだって悪気があったわけじゃないし。」

サンダース「操られてただけだしな。」

キノガッサ「俺の傷も大丈夫だったぜ。」

キノ「傷も致命的ではなかったので回復もすぐできました。」

ポリズ「それにダーク化にとの戦闘経験も出来ましたし。」

ハスボー「ラグの“ライトニングウイング”も発動したしね。」

ラグ「案外貴重な経験だったよ。なによりエレキブルさんが普通に戻って良かったよ。」

メンバーは嫌な顔せずエレキブル達を許していた。

エレキブル「みんな・・・ありがとう。」

デンリュウ「ところで僕に用事できたんだよね？」

ラグ「あ、はい。」

サンダース「おい、ヤミラミ。」

サンダースがヤミラミ達を呼ぶと3人揃って出てきた。

ヤミラミ「お前らの用事はすんだか？」

サンダース「大体な。」

ヤミラミ「そうか・・・。」

そついつとヤミラミはデンリュウの目の前まで来て言った。

ヤミラミ「デンさん、俺達の村、ファルスまで電気がこないんだ。電気を流してくれないか？」

ヤミラミは少し暗い表現で言った。

ヨノワール「俺からも頼む！！みんな困ってるんだ。」

ヌケニン「・・・お願い。」

ヨノワールとヌケニンもお願いした。

ヤミラミ「ヨノワール、又ケニン・・・」
ヨノワール「仲間だからな。」
又ケニン「・・・頼む時は一緒。」
ヤミラミ「・・・なんていいやつらだ。なあ頼む！！このとおりだ
！！」

ヤミラミ達は頭を下げて頼んだ。

ラグ「僕からもお願い。」
アクア「私からも。」
サンダース「俺からもだ。」
キノガツサ「コイツら頑張ってたんだ。」
キノ「努力を認めてあげて下さい。」
ポリズ「お願いしますよ。」
ハスポー「お願い！！」

ラグ達も一緒になって頼んだ。

ヤミラミ「お前ら・・・」ラグ「困ってるんでしょ？それなら助け
合わないよ。」
ポリズ「村の人達のためにもですね。」
ハスポー「出来ることは協力するよ。」
ヤミラミ「みんなあ・・・」

ラグ達までお願いしてくれたことに思わず感激したヤミラミ。その時、デンリュウはというと

デンリュウ「あの・・・頭あげてよ。」
ヤミラミ「ん？」

デンリュウに言われてみんなが頭をあげるとデンリュウは話しを始めた。

デンリュウ「僕はファルスに電気を送らないつもりはないよ。」
ヤミラミ「へ？」

デンリュウ「だってただ捕まっけて送れなかっただけだからね。開放された今なら送れるから送るよ。」

ヤミラミ「な、なんだ・・・」

ヤミラミは安心してか地面に崩れた。

ヨノワール「良かった〜。」
又ケニン「・・・これでみんな大丈夫。」

ヨノワールと又ケニンも安心したようだ。

ラグ「良かったね。」

ヤミラミ「ああ、ここまでありがとうな、ラグ、みんな!!」

この時ヤミラミの胸は感謝でいっぱいだった。

その日の夜

今はエレキブルにダーク化について話しを聞いているところだった。

ラグ「ということはヒードランに会ってからダーク化したということですか？」

エレキブル「ああ、アイツと会ったのが夢のようだった。心地いいものではなかったがな。」

ポリズ「グレードンさんの時と同じですね。」

サンダース「ああ、記憶がなく夢のような感じ・・・謎だな。」

前回のグレードンの時と同じく記憶がなく、夢のようだったらしい。しかし他にも共通点があった。

サンダース「みんなヒードランに会ってんだな。」

キノ「そうみたいですね。ヒードランさんは普段火山にいるはずですから・・・」

キノガッサ「明らかにおかしいな。」

ハスボー「ヒードランさんが犯人なのかな？」

ポリズ「さあ？それは分かりませんがヒードランさんが何かを知っているのは確かなようですね。」

そんな重い空気の中ヤミラミ達がお知らせがあると聞いた。

ラグ「お知らせってなに？」

ヤミラミ「実は俺達ダーク化対策本部に呼ばれた。」

ラグ「え、ダーク化対策本部!？」

そうヤミラミ達はどついう訳か対策本部からお誘いがあったらしい。

ヤミラミ「お前らが俺達を保護してくれるように頼んでくれた時に俺達のことを知ったらしく呼ばれた。」

サンダース「どうするんだ？」

ヤミラミ「もちろん行く。コイツらと一緒にな。」

ヨノワール「任せとけ!！」

又ケニン「・・・頑張る。」

二人もやる気満々のようだ。

キノガッサ「ってことはギラティナがいるな。」

ハスボー「ギラティナって人にあつたらよろしく言っついてね。」

ヤミラミ「ああ。」

こうして報告会もすみ無事にその日が終わった。

次の日

ラグ「・・・くうくう・・・。」

ヤミラミ「おい起きろ〜」

ラグ「わぁ!？」

ラグはヤミラミに起こされた。

ラグ「ふぁああ・・・おはよヤミラミ。」

ヤミラミ「おはよ・・・じゃねえよ。これ見てくれよ。」

ヤミラミが見せたパソコンの項目を眠そうに目をこすりながらみるラグ。するとそこには・・・

「明日の午後9時にエルビストを獄炎を放ち街を灰とする。美しい自然は灰と化す。逃げる者は逃げるがいい。戦うものはかかってこい。お前も灰にしてやる〜」

by 獄炎の使い手

ラグ「なにこれ？」

ラグはなんだか分からず首を傾げた。

ヤミラミ「予告状だ。ダーク化対策本部にな。多分なめてるんだ。」

ラグ「でも街を燃やすって無理じゃない？」
キノガツサ「いやそれが出来るんだ。」
ラグ「キノガツサ！キノさん！」

そこにはキノガツサとキノが立っていた。

ラグ「一体どういうこと？」

キノガツサ「エルビストっていうのは俺たちの出身地だ。」

ラグ「そうだったの!？」

キノ「まあエルビスト自体は街と言っても草木ばっかりなのでどっちかっていうと村なんですけどね。」

ラグ「そうなんだ・・・って草木ばっかり!？」

ラグはこの「草木ばっかり」という部分に反応した。

ラグ「草や木ばかりってことは・・・」

キノガツサ「だから燃やせるんだ。」

キノガツサは悔しそうに顔で言った。

キノガツサ「でもあそこはとてもいいところなんだ。確かに都会じゃないが、それでも楽しかった。」

キノ「でもその獄炎の使い手はエルビストを燃やそうとしているん

「ですよね？」

「ヤミラミ」あ、ああ。」

ヤミラミも二人の話しを聞いて少し同様していた。

キノガツサ「それなら俺はチーム絆をしばらく離れてエルビストを救いに行く。」

キノ「私もです。」

ラグ「え、ちよつと……。」

キノガツサ「俺は……俺達はエルビストを……故郷を救いたいです。」

ラグ「だからちよつとまつてよ。なんで二人で行こうとするの？」

キノ「迷惑をかける訳には……。」

ラグは立ち上がり一生懸命言った。

ラグ「僕たちは仲間でしょ？チーム絆でしょ？仲間が困ったことがあったらみんなで助けるよ。だって仲間だもん。みんな協力してくれるよ。」

サンダース「そうだぜ。」

キノガツサ「サンダース……。」

ドアにはみんながいた。

サンダース「話しは聞いたがラグの言う通りだ。」

アクア「私達の絆は固いんだから。」
ポリズ「二人よりも七人いたほうがいいですよ。」
ハスボー「その悪い人をこらしめようよ。」
キノガッサ「みんな・・・」
キノ「ありがとうございます。」

メンバーの協力に感動したキノガッサとキノ。やっぱり心強い仲間だと改めて思った。

その日の昼

デンリュウ「もう行くのかい？」
ラグ「うん、早く行って状況を確かめないと。」
デンリュウ「そっかぁ・・・気をつけてね。」
ラグ「うん。」
サンダース「お前らも元気だな。」
デンリュウ「うん。」
エレキブル「ああ。」
ミュウ「できれば手伝いに行くからね。」
ミュウツ「もし行けたら助けてやるからね。」
ハスボー「ありがとうございます。」

ラグ「それじゃあね。」
ヤミラミ「ありがとな。」
デンリュウ「バイバイ。」

こうしてラグ達チーム絆は次の草の街「エルビスト」に向けて出発した。

第四十八話 ある人の話し、そして新たな事件（後書き）

ラグ「ねえ、エルビスト大丈夫？」

そこは君達を守るんだよ。

ラグ「あとレジエンドコードは・・・」

“デンインパクト”と“ライトニングウイング”は大事な技だからね。まだ増える・・・かも。

ラグ「さて次回も頑張ります。」

第四十九話 到着！！草の街？村？エルピスト（前書き）

さて、今回は草の街、エルピストです。

ラグ「ここで放火したら大変だよ？」

絶対に守らないとね。

第四十九話 到着！！草の街？村？エルビスト

エルビストに放火するという話しを聞きエルビストに向かったラゲ達チーム絆。インルーラとエルビストがそれ程遠くもないのもう着いていた。

サンダース「ここがエルビストか。」

アクア「きれいなとこだね。」

エルビストは以前キノガツサ達が言った通り草木が沢山ある街で空気も澄んでおり、小川の水の透明度高い。

キノガツサ「さて、村長は・・・」

ハスボー「街なのに村長さん？」

ハスボーの質問にキノが気づいた。

キノ「街は街ですが、村みたいな雰囲気なんでみんな村長さんって呼んでるんです。」

ハスボー「なるほどね。」

そう話していると1匹のポケモンが現れた。甲良に木の生えた亀のようなポケモン、ドダイトスだ。

ドダイトス「おー、キノガッサ、キノ。なんじゃ、里帰りか？」

キノガッサ「ん？ああドダイトスのじつちゃんじゃねえか。」

ハスポー「じつちゃん？」

サンダース「キノガッサのおじいさんか？」

突然のキノガッサの発言にサンダースが質問した。

キノ「いえ、ドダイトスさんはキノガッサのおじいさんではないのですが、雰囲気的にはそんな感じの関係なんでそう呼んでいるんですよ。」

サンダース「そうなのか。」

ドダイトス「ところでキノガッサ、その人達は誰じゃ？」

ドダイトスはラグ達を見て言った。

キノガッサ「あいつらは俺の仲間だ。今一緒に旅をしてるんだ。」

ドダイトス「旅じゃと？頑張っとるなあ。」

キノガッサ「まあな。」

ドダイトス「ところで仲間殿、エルビストは初めてかのか？」

ラグ「あ、はい。」

ドダイトス「それじゃあエルビストを案内しよう、まあ草木ばっかりの街じゃがな。」

それからメンバーはドダイトスの提案でエルビストの案内をしてもらった。キノガツサとキノはもちろん知っているが久々に訪れた故郷が懐かしいようだ。

そして一通りまわったあとはリフレッシュセンターに行った。

ラグ「ホント自然豊かな良い場所だね。」

アクア「街の人も優しいし。」

サンダース「草木ばかりといっても医療施設とかもちゃんとあるしな。」

ドダイトス「そりゃありがとな。」

キノガツサ「ところでじつちゃん。」

ドダイトス「ん？どうした？」

キノガツサのいきなりの呼びかけに首を傾けながらドダイトスは返事した。

キノガツサ「村長はどこだ？」

ドダイトス「ん、ん……。」

ドダイトスはせきばらいをするように言った。

キノガツサ「さっきから変だ。里帰りした者……そうじゃなくても他の街からの来客者がくれば村長が出てくるはずだ。なのにさっき

から全く現れない。」

キノ「それ私もおかしいと思いました。なにかあったんですか？」

キノガツサとキノの二人に言われまゆをひそめるドダイトス。しかし

ドダイトス「だ、大丈夫じゃ。今ちよつと出かけておつてな。それで・・・」

キノガツサ「じつちゃん!!」

キノガツサは机をドン!!と叩きながら言った。

キノガツサ「嘘はいい、一体何があったんだ？教えてくれ!!」

ドダイトス「ん、ん・・・」

ドダイトスは改めてまゆをひそめるがため息をついて話し始めた。

ドダイトス「やはりお前さん達には嘘はつけないの。」

キノガツサ「じつちゃん昔から嘘は苦手だったからな。」

キノ「嘘つくときには必ずまゆをひそめますし。」

ドダイトス「そうか。では話すぞ。」

ドダイトスがそう言うのと全員なぜか姿勢をよくした。

ドダイトス「村長、つまりパラさんじゃがな、あいつはいないんじや。」

キノガツサ「いない？それは一体・・・」

ドダイトス「ある日いきなり消えたんじや。奥さんのロゼリアさんと一緒にな。」

キノ「だれかそれを見た人は？」

ドダイトス「誰もおらん、恐らくは夜にでていったんじやろう。荷物も最低限のもの以外は置いていっとつた。」

ハスポー「どこかへいったのかな？」

サンダース「多分な。ドダイトスさん、村長さんが行きたいとか言つてた場所とかはないですか？」

ドダイトス「ないのお・・・。」

ドダイトスはそう言ったがそれから数秒して何かを思い出したように

ドダイトス「そうじゃ、ワシはあいつがでていく日の夕方にあいつにあつておつた。」

キノガツサ「なに!？」

キノ「なんて言つてました？」

ドダイトス「たしか・・・あれは一緒に街の会議の後の帰り道じゃ・・・。」

...

ドダイトス「今日の会議、疲れたのお。」

パラセクト「なにを言つとる。ずっと寝てたのに。」
ドダイトス「それはお前さんも・・・というかみんな寝とつたのお。」
「

ドダイトスとパラセクトは苦笑いした。
そして分かれ道。

ドダイトス「それじゃあワシはこっちじゃけん。」
パラセクト「ワシこっちじゃ。」

ドダイトス「じゃあな。また明日。」

パラセクト「・・・」

ドダイトス「パラセクト？」

ドダイトスはパラセクトがしゃべらないのを不思議に思いパラセクトの近くに行った。

ドダイトス「どうした？具合でも悪いか？」

ドダイトスはいきなりすることに少し同様していた。するとパラセクトは口を開いた。

パラセクト「ドダイトス。」

ドダイトス「なんじゃ？」

パラセクト「ワシは今のこの世界が嫌いではない。しかし、卑怯が

簡単に許される、そして卑怯が勝つという点は嫌いじゃ。」
ドダイトス「？」

ドダイトスはパラセクトの言う意味が分からず首を傾けた。

パラセクト「光と闇、一般的には光が正しいが実際は闇が強い。現実を見れば闇の方が楽に勝てる。」

ドダイトス「おいパラセクト、それは一体……」

パラセクト「ワシは今まで光じゃったが闇には勝てんようだ。そんな世界を変えるためには闇を手に入れるしかない。」

ドダイトス「パラセクト、お前さん何か間違いを……」

パラセクト「間違いではない、事実だ！！足元を見てみる。この夕日の光はワシらの影で簡単に消せてしまう。影……闇は強いんじゃない。ワシは世界を変える。光が闇に勝てる世界じゃ。」

パラセクトは怒鳴って言う。ドダイトスは訳が分からず少し焦った。

パラセクト「すまん、つまらんことを言ってしまった。じゃあな、ドダイトス。また明日……かもしれんな。」

それからパラセクトは何事もなかったように家へ向かった。

…

ドダイトス「という訳じゃ。」
キノガッサ「んゝゝゝ。」

正直ラグ達は分かった気がした。闇・・・それはダーク化、つまりパラセクトはダーク化の力で何かをしようとしている、と。しかしそれ以上に「光が闇に勝てる」のような言葉を聞いたことのあるポケモンがいた。

サンダース「実はな」

サンダースだ。

サンダース「俺の仲間もそんなことがあった。世界を変えるって、チームから出て行った。」
ドダイトス「そうか・・・」
ハスボー「同じ目的だね・・・」
ラグ「でも僕達はそれを止めなくちゃ、取り返しのつかない状態になる前に。」
アクア「うん。」
サンダース「そうだな。」
ドダイトス「さて、飯の時間じゃな。みんな、ついておいで。」

それからラグ達はリフレッシュセンターの食堂でご飯を食べた。そうしている間に夜になった。

次の日

みんなはリフレッシュセンターにいた。

ピ、ピ、ピ、ピ、ピ

ポリズ「ん、なんだろう?」

ポリズは自分のパソコンに通信が入ったので通信は開いてみた。すると

ギラティナ「よう、ポリズ。元気か?」

ポリズ「あ、ギラティナさん。」

そういうとメンバーは一斉に集まった。

ラグ「ホントギラティナさんだ〜。」

ハスボー「久しぶり〜」

ギラティナ「ああ、久しぶりだな。ところでお前ら、今どこにいる?」

ラグ「どこってエルビストだけど?」

キラティナ「やっぱりか・・・」

キラティナの表情が曇る。

キノガッサ「なんだよ、いちゃいけねえのかよ。」

キラティナ「いやそういう訳ではないが、予告状の話は聞いてるよな。」

ラグ「うん。ミュウから聞いたよ。」

キラティナ「なら話しは早い。ポリズ、お前のパソコンにあるプログラムを送っていいか？」

ポリズ「どんなプログラムですか？」

キラティナの発言にポリズは質問した。

キラティナ「高エネルギー発生サーチャーだ。」

ポリズ「ああ、なるほど。いいですよ。それで今回の犯人を見つけるんですね。」

キラティナ「そういうことだ。よろしくな。」

それからキラティナとの通信はきれた。

キノガッサ「なあその高エネルギー発生サーチャーってなんだ？」

キノガツサだけでなくみんな疑問に思ったらしく難しい顔をしていた。

ポリズ「その名の通り高いエネルギーの発生地点を探すプログラムですよ。これで今日くるやつが現れたら分かるんですよ。」

キノガツサ「なるほどな。」

それからメンバーはちよつとしたバトルをしたり寝たりした。犯人は夜に現れる。だから睡眠をとっておくのだ。

そして夜の9時前

ラグ「いよいよだね。」アクア「どんな人何だろう?」

キノガツサ「どんな野郎だってぶっ潰す。」

そんな感じしていると・・・

ピピピピピ

ポリズのパソコンが反応した。その瞬間キラティナから通信がくる。

キラティナ「きたぜ。」

ポリズ「はい、こちらにも反応ができました。」

ラグ「よし、みんな行くよ。」

メンバー「おう。(ああ、はい、うん。)

そしてメンバーはエネルギー発生地点へと向かった。

エネルギー発生地点周辺

ポリズ「こちら辺ですよ。」

サンダース「なるほど、芝生か・・・」

足元には芝生がある、そんな場所だ。

ラグ「どこに・・・アクア!？」

アクア「え!？」

アクアが呼ばれて驚くと“かえんほうしゃ”がアクアを襲った。

ラグ「カリバー!!!」

ラグは即座にカリバーをだしてアクアを守った。

アクア「ありがとう、ラグちゃん。」

ラグ「いいんだよ。それよりあの人がだよね？」

ラグ達の視線の先には・・・

ヒードラン「よう、デンラージとその一行さんよ。」

口から火を漏らしながら笑うヒードランがいた。

第四十九話 到着！！草の街？村？エルピスト（後書き）

ポリズ「ヒードランですか・・・」

そう獄炎の使い手はヒードランです。

ポリズ「典型的にはこちらが有利ですが油断は禁物ですね。」

その通り、この小説ではゲームとは違うからね。

ポリズ「ゲーム通りだったらハスボーは最弱になりますもんね。」

ハスボー「ヒドいよ」

大丈夫、ハスボーだってそこそこ強いから。

第五十話 エルピストを守れ！！ Vスピードラン（前書き）

さて今回はVスピードランです。

ラゲ「やっぱり強いんだよね？」

たあ？

第五十話 エルビストを守れ！！ VS ヒードラン

放火を防ぐために草の街エルビストに来たラグ達チーム絆。そこで村長であるパラセクトについて話しを聞き村長の意見を知る。一方予告状の主が現れたということとその主を倒しに行ったラグ達。その主は以前グラードン、エレキブルが会ったヒードランだった。

ラグ「ヒードラン・・・」

ポリズ「あなたが放火をすると予告した人ですか？」

ポリズは少し怒りながら言った。

ヒードラン「ああ、俺だ。お前らがくると思ってな。」

サンダース「誘ったのか!？」

ヒードラン「ああ、お前らのチームにはエルビストの出身者が2人いるからな。エルビストに何かあれば必ずくる、そう思ったからな。そしたら案の定来やがった。」

キノガッサ「それだけのために・・・」

キノガッサは拳を握りしめ、怒っていた。

ヒードラン「さて、それじゃあ俺を止めるんだろ？止めてみるよ、

お前ら全員でも無理だな。」

キノガツサ「はあ！？バカにしてるのか？」

ポリズ「落ち着いてください、キノガツサ。好都合です。みんなで攻めれば勝率も上がります。」

キノガツサ「あ、ああ確かにな。」

キノガツサは冷静になった。

ヒードラン「さて、どこからでもいい。」

ラグ「じゃあ遠慮なく“みずのはどう”」

ラグの“みずのはどう”がヒードランに襲いかかるが

ヒードラン「“ほのおのうず”」

“ほのおのうず”で防御した。

ヒードラン「なんだその程度か？」

キノガツサ「よそ見してんじゃねえ!!」

ヒードランが余裕にしているとキノガツサとサンダースがヒードランの背後にいた。

キノガッサ「くらえ“しんくうは”」
サンダース「10まんボルト」

キノガッサとサンダースはそれぞれ“しんくうは”と“10まんボルト”でヒードランに攻撃するが

ヒードラン「ほのおのうず」

ヒードランは今度は“ほのおのうず”を自分の周りに発生させ技を防いだ。

キノガッサとサンダースは地面に着地した。

キノガッサ「また“ほのおのうず”かよ。」
サンダース「厄介だな。ポリZ!!」

サンダースはポリZに合図を送った。

ポリZ「いきますよ、”デリートビーム”」

ポリZは”ほのおのうず”を消すために“デリートビーム”で攻撃。
“ほのおのうず”は簡単に消えた。

キノガツサ「よっしゃ、ハスボー、ラグー！」
ハスボー「うん。」

ラグ「OK!!」

今度はキノガツサが合図を送るとハスボーは10メートル程離れた場所から、ラグは5メートルぐらいの場所から攻撃した。

ラグ「ウォーターソリューション」

ハスボー「なみのり」

2つの水がヒードランを襲う。

ヒードラン「ちっ、「まもる」」

流石にマズいと思ったかヒードランは“まもる”で身を守った。

サンダース「今だ、「でんじは」」

サンダースは“まもる”の「連続で使えない」という弱点を見切つて“でんじは”を放った。“でんじは”はヒードランにヒット。ヒードランは麻痺をした。

キノガツサ「よしっ、キノ!!」
キノ「うん、“テイルステイン”」

キノが“テイルステイン”というときノガツサの足元に魔法陣のようなものが展開され少し赤い光がキノガツサを包み込んだ。

キノガツサ「よしっ、行くぜ“きあいパンチ”」

キノガツサの“きあいパンチ”がヒット、周りにはズトーンという音が響き相当な威力であることを表した。

サンダース「よし、直撃だ!!」

ポリズ「効果も抜群ですよ。」

キノ「私の攻撃アツプ技も入ってますし。」

ハスボー「ちよっとは有利に・・・」

メンバーは大ダメージを与えたと少し有利した。しかし

ラグ「!?!?みんな、何かくるよ!!」

メンバー「え・・・?」

ヒードラン「“マグマストーム”」

ラグがヒレで何かをキャッチ、メンバーに知らせた。
しかし次の瞬間ヒードランから波動状に炎が広がり周りを包み込んだ。

サンダース「くう・・・なんだこれ。」

ポリズ「相当な暑さですね。」

キノ「私すこしまズいです・・・」

ハスボー「僕も・・・」

その時キノがなにかに気づいた。

キノ「キ、キノガツサは!?!」

サンダース「そうか、キノガツサの“きあいパンチ”をくらって倒れてないってことは・・・」

ハスボー「ヒードランの近くで防がれたってこと!?!」

ポリズ「防がれたかくらってピンピンしてるのかは分かりませんがさっきの“マグマストーム”を近距離でくらってるってことですから・・・」

キノ「キノガツサー!?!」

キノは叫ぶがおそらくいるであろうヒードランの方からは返事が無い。

キノ「キノガツサ・・・」

キノは泣き崩れるが・・・

ハスボー「・・・みんな、キノガツサだよ!？」
メンバー「!？」

ハスボーが見た先それは体の半分以上が砂に埋まっているがまさしくキノガツサだった。

キノ「キノガツサー!!」

キノはキノガツサを助けようと走ろうとした。しかしキノガツサがいるのは敵であるヒードランがいる場所だ。簡単に言えばヒードランの方に向かって行くことになる。

サンダース「落ち着けキノさん、今行ってもヒードランにやられる。」

キノ「でもキノガツサを見捨てるわけには・・・」

キノがサンダースに止められているとヒードランは次の行動に出た。

ヒードラン「なんだ、こいつか?よっぽど大事なんだな。なら目の前でお陀仏だ。」

ヒードランはキノガツサの前まで行き口に“かえんほうしゃ”をためる。

サンダース「やめろー!?!」

キノ「止めてー!?!」

ヒードラン「あばよ。」

ヒードランが“かえんほうしゃ”を放とうとした瞬間何か大きな青いものがすごいスピードでヒードランに直撃しそれを防いだ。さらにヒードランは衝撃で吹き飛ばされ青いものはキノガツサをくわえて主の元に戻ってきた。

ラグ「アクア!?!」

そう、アクアだ。

サンダース「ナイスだアクア。」

キノ「ありがとうございます、アクアさん。」

アクア「いいんですよ、キノさん。頑張ってくれたのはこの子ですし。」

そついいながらアクアは自身の龍「龍ちゃん」をなでた。

ポリズ「でもいつから？」

アクア「“マグマストーム”が使われる少し前から。エネルギーを集めててさっきやっと完成したんだよ。」

ポリズ「なるほど。」

ハスボー「アクアさんすごい！！」

みんなは誉めたがアクアは龍ちゃんを見て言った。

アクア「まだ終わってないらしいよ。」

サンダース「よし、こっから反撃だ！！」

ヒードラン「よくもやったな。」

“ほのおのうず”で発生したほのおはだいぶ消えたものそこから現れるヒードランはまさしく「獄炎の使い手」だった。

ヒードラン「お前らに見せてやる。俺の闇の力を！！」

その瞬間ヒードランから黒いオーラが吹き出てきた。

ポリズ「これは・・・」

ラグ「ダーク化がきたね。」

サンダース「大丈夫だ。今までだってダーク化したやつとのバトル

経験はある。今回も・・・」

ヒードラン「同じにするなー!!」

ヒードランが叫ぶとさらにオーラは増し辺りが揺れた。

ヒードラン「俺を今までのヤツと一緒にしてたら痛い目見るぜ。」

サunders「なに!？」

ヒードラン「さあ、ここからが本番だ。獄炎を味わいやがれ!!」

その時のヒードランの表情は狂気に満ちていた。

第五十話 エルピストを守れ！！ VS ヒードラン（後書き）

キノガッサ「おい、俺フルボッコじゃねえか!？」

だね。

キノガッサ「おい、俺死ぬぞ。」

この世界で基本的には死はないよ。基本的にはね。

キノガッサ「よかつた〜」

でもあんまり死とかは言わないでよ。悲しい言葉なんだから。

キノガッサ「もちろんだ。」

第五十一話 VS ダークヒードラン (前書き)

さて今回はヒードランのダーク化した版です。

ラグ「か、勝てる?」

どうぞでしょう(笑)

第五十一話 VS ダークヒードラン

闇の力「ダーク化」を発動させて強化されたヒードラン。今ラグ達はそんなヒードランに挑んでいた。

ラグ「カリバー？」

ラグは自身の“ウォーターカリバー”を見ながら言った。

ラグ「カリバー、ダーク化したヒードランが怖い？」

もちろんカリバーはしゃべらないがなぜか返事をするように光った。

ラグ「そっか、これまでの人とは違うあの目と押しつぶされそうな威圧感・・・僕も怖いよ。でも頑張ろう、ここで倒さないとエルビストが燃やされちゃう。」

カリバーはYESと答えるようにまた光った。

ラグ「よし、それじゃあ行くよ。」

次の瞬間、ラグの周りに水が作られる。

ラグ「ハイドロステインガー」
ヒードラン「ダークフレイム」

ラグは無数の水の短剣を生成しヒードランに向けてとばすがヒードランの大きな炎の塊に全て消された。

ラグ「くっ、まもる」

仕方なくラグは“まもる”で炎の塊を防いだ。

アクア「みずのはどう」
サンダース「さらに“かみなり”」

二人は即座にヒードランの後ろに移動、アクアが“みずのはどう”を放ちサンダースは“かみなり”を使う。あまりの速さにヒードランは反応できず“みずのはどう”、“かみなり”ともにマトモにくらった。

アクア「やったあ!!」
サンダース「水は電気を通すからな少しはダメージを・・・」

ヒードラン「かえんほうしゃ」

ヒードランはすぐに“かえんほうしゃ”を放つが二人はなんとかよけた。

サンダース「これすらもきいてないのかよ。」

それからメンバーは出来る限り攻撃した。

ポリズは“ランダムビーム”で“ハイドロカノン”を撃つたり、ハスボーも“やどりぎのたね”で体力を奪ったりラグもデンラージになり“ライトニングウイング”を使ったりしたがヒードランにはあまりダメージを与えられなかった。

542

ラグ「ハアハア、まだやられないなんて・・・」

アクア「結構頑張ってるんだけどね・・・」ヒードラン「それじやあそろそろ終わりにするか。」

サンダース「なに!？」

そついうとヒードランは足を踏ん張った。さらにヒードランの口の前には炎の塊が発生した。

ポリズ「何か大技が来ますね。」

ハスポー「僕もバリアーの準備をしておくよ。」

ハスポーは警戒し“リーフリフレクトバリアー”の準備に入った。

ヒードラン「“ダークマグマストーム”」

ヒードランが技名をいうと炎の塊は黒いビームとして発射されラグ達を襲った。

ハスポー「リーフリフレクトバリアー」

ハスポーはすぐに“リーフリフレクトバリアー”を使って防ごうとしたが問題が起きた。

ハスポー「あのビーム・・・強すぎる・・・」
サンダース「なに!？」

次の瞬間バリアーは破壊されビームはメンバーを直撃、あたりを煙が舞った。しかし

ヒードラン「ほう、メンバーはなんとか守ったか。」

そう、ラグはエレキブルの時と同じように“ライティングウイング”でメンバーを守った。しかし羽は打ち抜かれ完璧には守れなかった。

ヒードラン「あのハスボアのバリアーが破壊された瞬間に羽を大きくし威力を抑えた。お前はやはり消さなければいかな。」

ヒードランは何に納得したのかうなずきながら言った。

ラグ「よくも・・・」

その瞬間“ライティングウイング”には新たな電気が送られ羽は復活した。

ラグ「よくもみんなをおおおおー!!」

ラグは凄まじいスピードでヒードランに向かっていった。手に持ったカリバーはすでにプラズマになっており、強い光りを放っていた。

ラグ「はああああー!!」

ラグはカリバーをヒードランに思いっきり振り下ろしてダークを与

えようとした。しかし

ヒードラン「その程度か？」

ヒードランにたいしたダメージは与えられなかった。

ラグ「くっ……、それなら……“プラズマスラッシャー”！！」

ラグは一度ヒードランから離れ、カリバーを振りかざす。すると電気の衝撃波が発生しヒードランに直撃した。

ヒードラン「その程度かと言っている。」

ラグ「くっ……」

それでもヒードランは余裕の表情だった。

ラグ「それなら……“カリバーコンビネーション”」

ラグはヒードランに向かっていくと手前で止まりカリバーでヒードランをなんとか上空に吹き飛ばした。

ラグ「ぐう……さらに……」

ラグは上空へ飛びヒードランの目の前に来た。
するとラグは凄まじいスピードでカリバーを振りヒードランを攻撃、
当たるたびに大きな音があった。

ラグ「そしてトドメだー!!」

ラグはカリバーを頭上にかかげると一気にパワーを送りカリバーは
バチバチという音をたてていた。

ラグ「はああああー!!!!!!!!」

ラグは凄まじい勢いでカリバーを振りかざしヒードランにぶつける。
その瞬間ヒードランはすごいスピードと飛んでいき地面に叩きつけ
られ煙が発生した。

ラグ「ハアハアハア……」

相当な体力を使ったようでラグはゆっくりと降りた。

ラグ「こ、これで……」

ヒードラン「い、今のは効いたぞ……」

ラグ「!？」

ラグが見たもの、それはボロボロになりながらも煙の中から現れた
ヒードランだった。

ラグ「そ……んな……。」

その瞬間ラグは倒れ、ウイングは消え、カリバーは「ガラン」と音をたてて落ちた。

ヒードラン「さて、それではとどめをさすか……。」

ヒードランはさっきの様に口の前に炎の塊を作りだした。目標はラグだ。

ヒードラン「今度こそ……ホントの別れだ。あばよ。“ダークマ
グマストーム”」

ヒードランは静かに“ダークマグマストーム”を発射しそれは一直線にラグに向かっていった。

そしてラグのいた場所には大きな炎柱が出来た。

ヒードラン「さて、それじゃあ他のヤツの始末も……。」

「????」 “はどうだん”
「ヒードラン」なに!?!」

ヒードランがアクア達の所へ向かおうとすると、突然、火柱から
“はどうだん” がとんできてヒードランに直撃した。

ヒードラン「ちっ……まだなのか……?」

ヒードランはさっきの一撃でもラグを倒せなかったのかと舌打ちを
した。

「????」べつにしとめきれなかったわけじゃないよ。」

「????」あの技が当たっていればラグは倒されていただろうな。」

ヒードラン「なに!?!」 “ダークマグマストーム” は完璧に当たって
なかったというのか!?!」

ヒードランは火柱の中の正体も分からないヤツの言葉に戸惑った。

ヒードラン「いや、だがあれを防げる者など……。」

「????」いたらどうするの?」

その瞬間火柱は一気に消えて話し手は正体を現した。

ヒードラン「お、お前は……」

ヒードランは汗を流しながら言った。

ヒードラン「ミ、ミュウ!？」

ミュウ「せいかくい」

そう、現れたのはミュウだった。ミュウを見たヒードランはマズいと思ったのか体が震えていた。

ヒードラン「な、なぜここに……」

????「それはな……」

ヒードランにはもう一人誰かが接近しており手で“はどつだん”を撃つ準備をしていた。

ヒードラン「お、お前はミュウツォー!？」

そう、もう一人はミュウツォーだった。

ミュウツォー「俺たちがギラティナと同じダーク化対策部であるし、

なにより・・・」

その瞬間ミュウは消えてヒードランの目の前に来て“はどうだん”の準備をしていた。

ミュウ・ミュウツー「ラグ達は僕（俺）たちの友達だからね（な）。

ヒードラン「や、ヤバい！！」

2人の強者にヒードランは恐怖した。

第五十一話 VS ダークヒードラン（後書き）

というわけで救世主登場です。

ミュウ「久しぶり〜」

ミュウツー「ホント久しぶりだな。」

ラムサールの頃だったからねえ、最後に出たの。

ミュウツー「というかなんでここで俺たちの登場なんだ？」

だってこの後色々あるからね。

ミュウ「色々かあ、楽しみだなあ・・・ネタバレダメ？」

ダメ！次回分かるかも知れないからそれまで我慢して。

ミュウ「はい。」

ミュウツー「でもかもだからなあ・・・（汗だく）」

第五十二話 再登場、2人の超強者（前書き）

ミュウ「僕達とくじょくだよ。」

ミュウツー「敵はヒードランか。」

ミュウ「ふむふむ“ダークマグマストーム”かぁ。ぼちぼち強そうだね。」

ミュウツー「前回を読み返してやがる……（汗）」

第五十二話 再登場、2人の超強者

エルビストを守るためにヒードランとのバトルすると決めたラグ達チーム絆。しかしヒードランのダーク化の力により絶体絶命の危機へと追い込まれた。

しかし、そこへラグ達の友達である超強者が2人現れた。

ミュウ「さてこの状況がマズいのは分かるよね？」

ミュウツ「お前には鋼タイプもはいつている。今のお前がこのまま“はどうだん”を二発も食らえばどうなるか・・・」

ミュウとミュウツの言葉にヒードラン汗が止まらなかった。

ヒードラン「(確かにこのまま“はどうだん”を食らえば俺は負ける・・・)。かと言ってこのまま引き下がり、ラグ達を倒す機会を失えば・・・)」

ヒードランはミュウとミュウツを見た。

ヒードラン「(コイツらがなんかしてラグ達が強化されちまう・・・。そもそも逃げる手段がない・・・)」「
ミュウ「さあ、どうするの？抵抗する？しない？」

ミュウは構えを解かずにとずねてくる。

ヒードラン「……答えは……こうだ!」

その瞬間にヒードランは地面に潜ってしまった。

ミュウツ「奴め、“あなをほる”を覚えていたか」

ミュウ「これは……少々追いつめないでダメだね」

ミュウツ「ああ、そうだな」

そういうと2人は目をつぶった。

ヒードラン「(バカめ、目をつぶって技を避けられるものか!」

“あなをほる”」

ヒードランはミュウ達の足元にくるとそのまま地上に突進してきた。
しかし

ヒードラン「なんだと?」

ミュウ「あなをほる”……使いどころは難しいけど強いね。でも僕たちには効かないよ。」

ミュウツ「目でみるんじゃない、波動を感じているだけだからな。」

「

そこにあっただのは“あなをほる”でミュウ達に突進しようとして頭を抑えられたヒードランだった。

そう、ミュウ達が目をつぶった理由、それは精神を集中させるため。そうすれば波動を感じることが出来るようになり、相手の動きが見えるようになるからだ。

そしてミュウは目を開けた。

ミュウ「つまり僕たちに“あなをほる”は無効。効かないよ。」

ミュウツ「まだやるか？」

ヒードラン「ぐ、ぐううう・・・」

ヒードランは悔しそうに歯を噛み締めたがまた“あなをほる”を使ってミュウ達と距離をとった。

ヒードラン「このまま引き下がるかあ！！“ダークマグマストーム

”……」

ヒードランは自身の最強技を繰り出しミュウ達に抵抗しようとした。

ミュウ「やっぱり簡単には負けてくれないよねえ。ミュウツ、どっちがバトルする？」

ミュウツ「俺はどっちでもいいぞ。」

ミュウ「うん、それじゃあじゃんけんで決めよ？」

ミュウツ「いいぞ、勝った方がバトルだ。」

ミュウ「最初はグー、じゃんけん……」

ミュウ達はのんきにどっちがバトルをするかを決めるためじゃんけんを始めた。しかしその直後、ミュウ達を激しい炎が包み込んだ。

ヒードラン「はあ、はあ、これでいくらアイツらでも……。」

ヒードランは微笑んだ。しかし……

ヒードラン「な、なに!？」

ヒードランが見たもの、それは目の前の炎が一瞬で消える、という不思議な現象だった。

ヒードラン「な、なぜ……」

ミュウ「あゝあ、僕かあ。君、運が悪かったね。」

炎が消えた場所からはゆっくりとミュウが出てきた。

ミュウ「僕がチョコキでミュウツがパーかあ。僕の勝ちだね。ミュウツ、みんなの事お願いね。」

ミュウツー「ああ、任せとけ。お前もやりすぎるなよ。」
ミュウ「大々丈夫！！」

ミュウはミュウツーにブイサインをだしながら答えた。
「すること」

ミュウ「あ、あとごめんね、炎は消しちゃった。暑かったから……」

ミュウは申し訳なさそうにいう。

ヒードラン「くそっ、どんだけすごいんだよ!？」

ヒードランはあまりのことにミュウに対して文句を言った。しかし

ミュウ「……これぐらいかなあ?？」

次の瞬間、ミュウはヒードランの目の前に瞬間移動していた。

ヒードラン「なっ……」

ミュウ「きあいだま」

ミュウはそのまま“きあいだま”を発射。攻撃はヒードランにクリティカルヒットし、ヒードランはふきとばされた。

ミュウ「まだ終わってないよね？まさかこれで終わるなんて・・・」
ヒードラン「そ、そんな訳・・・ないだろう！！」

ヒードランは威勢良くミュウに反抗するが攻撃がきつかったのか、体はボロボロだった。

ミュウ「そっかあ、それじゃあね・・・」

ミュウは手にエネルギーをためた。

ヒードラン「また“きあいだま”か!？」

ミュウ「違うよ。」

“きあいだま”と思って怯んだヒードランだったがミュウはそれを否定した。

ヒードラン「なんだと!?!では一体・・・」

ミュウ「これぞ。」

ミュウの手のエネルギーが強まり光を放った。次の瞬間信じられないことが起きた。

ヒードラン「ラグの持っていた剣が……ミュウの手にあるだと！？」

そう、ミュウの手にあったもの。それはラグが持っていたはずの力リバーだった。

ヒードラン「な、なぜミュウの手に……まさかお前も使えるのか！？」

ヒードランは驚きすぎて冷静さを忘れていた。

ミュウ「違うよ、僕がただ移動してもらっただけだよ。“トリック”でね。」
ヒードラン「“トリック”！？なんて芸の多いやつだ。」

ミュウの答えに文句をいうヒードラン。しかしミュウは無視した。

ミュウ「カリバー・・・だっけ？」

カリバーは返事をするように光った。

ミュウ「君はラグ専用の剣だ。でもこのまま主がやられたままじゃいやじゃない？」

またもやカリバーは光って答えた。

ミュウ「それじゃあさ、僕に使われるのは嫌かもしれないけど、使っ
つていい？」

そういつとカリバーはウォーターとなりミュウに握られた。

ミュウ「試したいことがあるんだ、ごめんね。」

カリバーはミュウの話しを了解したらしく、光った。

ミュウ「ありがとう、それじゃあ・・・いくよー!!」

そういつとミュウはまっすぐにヒードランに突っ込んで行った。

ヒードラン「こっちに来る!? “かえんほうしゃ”」

ヒードランは近づいてきたミュウを迎え撃とつと“かえんほうしゃ”を発射したが・・・

ミュウ「切り裂くよカリバー。」

ミュウは“かえんほうしゃ”をカリバーで切り裂いた。

ヒードラン「ぐ、 “まもる”」

ヒードランは切り裂かれたことで危ないと思い“まもる”を使った。

ヒードラン「これで・・・」

ミュウ「無駄だよ。」

ヒードラン「なに!?!」

しかしミュウは気にせずカリバーを“まもる”を当てた。すると

ヒードラン「 “まもる”に・・・ヒビ!?!」

ヒードランの“まもる”にはヒビが入っており、今にも壊れそうだった。

ミュウ「残念だったね、カリバーの力は強いんだ。君の“まもる”ぐらいじゃ防げない。」

ヒードラン「だがヤツの・・・ラグの時にはそんなパワーは・・・」
ミュウ「そりゃそうさ。ラグはカリバーを上手く使えてないし、カリバーも上手くラグの力を生かせてないからね。でも上手く使えるようになれば僕なんかが使っよりもっと力が出せるようになるよ。」
ヒードラン「嘘だろ・・・」

ヒードランはミュウの言葉が信じられないようで少し足が下がった。その瞬間“まもる”は破壊されヒードランは吹き飛ばされたがなんとか上手く着地した。

ヒードラン「やはりヤツらはここで・・・」
???「待ってください、ヒードラン。」

ヒードランがラグ達がパワーアップすると厄介だと思い技を使おうとした瞬間、どこからか声がした。

ミュウ「だれ!？」

???「ここで攻めても無駄です。」

ヒードラン「だがこのまま野放しにしておくとさらにパワーアップを……」

ヒードランは声の主に説得するが主の意見は変わらない。

???「今あなたがバトルしても負けるだけ、あなたが勝てるとは思えません。」

ヒードラン「……くそ。」

ミュウ「ちよつとちよつと、誰なの?」

ミュウは誰なのか分からず、腰に手をあてて言った。

???「あなたに名乗る必要はないです。さあヒードラン、戻って下さい。」

ヒードラン「あ、ああ。」

それと同時にヒードランの足元に魔法陣のようなものが現れ、ヒードランが光る。

ミュウ「逃げるの!?!」

ヒードラン「ああ、今はな。ミュウ、ミュウツー、今回はお前らってきたからこうなったが、ラグ達だけならどうなっていたらどうな? 次会うときは邪魔をしないでもらおう。」

ミュウ「ちよつと……」

そう言ってヒードランは一瞬で消えた。

ミュウ「逃げちゃったかぁ・・・」

ミュウツ「まあ最悪の事態はまぬがれた。とりあえずはラグ達を運ぶぞ。」

ミュウ「うん、今まで守ってくれてありがとうね、ミュウツ。カリバーも。」

そう言うとミュウはカリバーを戻した。それからミュウとミュウツは“サイコネシス”でメンバーを浮かせて歩き始めた。

ミュウツ「それにしてもついに「アイツら」が動くとはな。」

ミュウ「それは分かっていたことじゃん。仕方ないよ。それより・・・」

ミュウはミュウツとの会話の途中ながら止まって空を見て言った。

ミュウ「僕は「あの修行」をするのが早くなったのが気かりだけど・・・」

ミュウツ「仕方ない、臨時だ。それにラグ達なら乗り越えるはずだ。」

ミュウは気がかりということであまり元気がなかったがミュウツ

は平然としていた。

ミュウ「次は絶対「アイツら」に勝ってもらおうよ、ラグ。」

ミュウツ「あれでな。」

ミュウ「そう・・・」「異世界での「修行で。」

ミュウ達はまた歩き始めた。

第五十二話 再登場、2人の超強者（後書き）

ということで次回は修行の詳細です。

ミュウ「つまり少ないの？」

可能性大。

ミュウツ「作者はブラック&ホワイトの方も忙しいからな。」

そゆこと。

第五十三話 突然の襲来 伝説級のポケモン達（前書き）

ラグ「ねえ作者さんは？」

ポリZ「なんでも学校に行く途中らしいですよ。」

ラグ「だからいないんだ。」

ポリZ「はい。」

ラグ「それじゃあ僕とポリZ、二人で・・・」

ポリZ「第五十三話・・・」

ラグ&ポリZ「どうぞ。」

第五十三話 突然の襲来 伝説級のポケモン達

ヒードランとの戦いに敗北しミュウとミュウツーに救われたラグ達チーム絆。ダメージは大きかったが幸い致命傷は無かった。

ヒードランとの戦いから一週間後

ミュウ「おはよう、みんな。」

ラグ「おはよう、ミュウ。」

ここはエルビストのリフレッシュセンターで、只今朝でラグ達が起床した。

ミュウ「体の具合はどう？」

ラグ「もうばつちり!!」

サンダース「体のやけども治ったぜ。」

キノガッサ「俺は早く誰かとバトルしてえ。」

キノガッサは元気なサインに腕を前に出してパンチする。

キノ「もう、キノガッサったら・・・」

ミュウ「まあみんな元気で何よりだよ。さてそれじゃあ朝ご飯食べ

ようか。」

ハスボー「わーい、朝ご飯だあ。」

ポリズ「久しぶりにおかゆ以外のものが食べたいですね。」

そんな会話をしながらラグ達はミュウと共に食堂に行った。

ラグ「はあくおいしかったね。」

アクア「ホント。」

サンダース「ぐつぐつにたっぷり食べたな。」

キノガッサ「俺はまだ食べれるぜ。」

キノ「調子に乗らないの。」

ハスボー「あはは・・・。」

ラグ達は食事を終えて雑談をしていた。するとポリズが・・・

ポリズ「すいません、ミュウ。ちょっと聞きだいたいことが・・・。」

ミュウ「ん、なあに?。」

突然の問いにミュウは不思議そうに返事をした。

ポリズ「ヒードランさんのことですが、普通のダーク化なんですよ
うか?。」

ミュウ「どういう意味?。」

ポリズ「あの人はダーク化してから異常に強くなりました。今まで

とは比べものにならないくらい。だから何かあるんじゃないかなと思っ
思っています。」

ポリズの意見にミュウは頷いて納得した。

ミュウ「さすがポリズ。みる点がすごいね。」

ポリズ「いや、ちょっと気になったただけなんですが一応聞いておこ
うかと。」

ミュウ「それじゃあ単刀直入にいうけど当たりだよ。」

ミュウは真剣な顔でそう言った。

ミュウ「あのヒードランのダーク化は特別なんだよ。」

サンダース「特別？なんでだよ。」

ミュウ「それは・・・。」

ミュウが答えようとした瞬間にドコーンと爆発音が聞こえた。

ハスボー「な、なに!？」

アクア「なんか爆発音が・・・。」

ミュウ「なんだろう?ミュウツィ。」

メンバーが爆発音に同様する中ミュウはテレパシーミュウツィを呼
んだ。ちなみにミュウツィは今リフレックスセンターの周りを見回

りをしていた。

ミュウツィ「ああ、分かっている。今西の方と東の方で爆発があった。俺は東に行く。ミュウは西に頼む。」
ミュウ「オツケー。」

ミュウはミュウツィとのテレパシーを終えるとラグ達を見た。

ラグ「ねえミュウ、何があったの？」

ミュウ「今西と東で爆発があったんだ。だから僕はそれを調べに行ってくるよ。」

キノガッサ「俺達も……」

ミュウ「それはダメだよ。君達が狙われているのに行ってどうするの？」

キノガッサ「うっ……じゃあねえか。ミュウ、エルビストを頼むぜ。」

ミュウ「任せて」

それからミュウは西へ飛んで行った。

ラグ「それにしても爆発かあ。」

アクア「何事も無いといいんだけど……。」

ハスボー「工事のためとかじゃないよね？」

ポリズ「考えにくいですね。」

キノガッサ「あゝも〜嫌だ。俺も行く!!」

キノ「もう、ダメだつてば!!」

出て行くこうとするキノガツサをキノが一生懸命止めた。その時

ドコーン!!

部屋の壁が壊れた。

ラグ「こつちでも爆発!？」

ポリズ「最近爆発がおおいんですかね？」

アクア「それはないよ・・・(汗)」

ハスポー「・・・!? 誰かいるよ。」

サンダース「何!？」

ハスポーに言われてサンダースは振り返った。すると・・・

サンダース「なんだヤツは？」

サンダースの目の前に入ってきた後景、それは崩された壁から誰かが出てくる姿だ。

サンダース「おい、誰かいるぞ!」

ハスボー「えっ……」
ラグ「僕のリーダーにも反応があるよ。」

サンダースが目で存在を確認すると同時にラグのヒレもそれを確認していた。

キノガツサ「なんかいるのは分かったけどよ、サンダース、ラグ。ポリZ「なんかとつても大きくないですか？」

そう、誰かがいるのは確認出来たが壁が崩れた勢いで起きた煙ではつきりは見えなかった。しかし何か大きな影があるのは見えた。

ラグ「た、確かに……」
サンダース「デカいな……。」

二人も驚きを隠せないようだ。そして煙がなくなり姿が確認できるようになるとそこには巨大なポケモンがいた。

キノ「な、なんですか？」
ハスボー「なんか光ってるよ。」

ハスボーは巨大なポケモンを見ると何かが光っているのを確認した。

ポリズ「分かりました!!」

ハスボー「えっ、何が？」

ポリズ「あのポケモンですよ。レジギガスってポケモンです。かなりのパワーを持っています。さらにその巨体な割に素早いんですよ。」

サンダース「おいそれって強すぎじゃ・・・」

サンダースはポリズの話しを聞いて驚いた。

ポリズ「もちろん強いですよ、伝説ですし。ただし・・・」

ポリズが解説しようとした時、レジギガスは足を上げた。

キノ「こっちにきますよ。」

アクア「どうしよう。」

メンバーは焦った。しかし・・・

アクア「あ、あれ？」

キノ「なんだか・・・」

レジギガスのあることに啞然とした。

キノガツサ「アイツ遅くないか？」

そう、レジギガスのスピードは遅く、キノガツサが普通に歩いた方が早いのでは？と思うほどだ。

ポリズ「彼は「スロースタート」っていう特性があるんでしばらくは攻撃と素早さが半分になるんですよ。」
サンダース「だから遅いのか。」
ハスボー「良かった。」

メンバーはポリズの話しを聞きホッと安心する。だが……

ラグ「ね、ねえ？」

アクア「何、ラグちゃん？」

ラグ「あの人が動いてない？」

ポリズ「そりゃ動きますよ。ただ遅……」

ラグ「くないよ!？」

ポリズ「え!？」

ポリズはラグに言われて見てみるとレジギガスはすごいスピードで向かってきた。

ポリズ「な、なんで……」

ハスポー「くっ、「リーフリフレクトバリアー」」

戸惑うポリズだが攻撃を防ぐ方が優先と考えたハスポーはすぐにバリアーを展開し攻撃を防いだ。

サンダース「やつは戦うつもりか？」

キノ「そのようですね。」

キノガツサ「おいまた来るぞ。」

レジギガスは攻撃を弾かれても尚ラグ達に向かってきた。

キノガツサ「くそっ、「きあいパンチ」」

キノガツサはレジギガスを撃退すべく威力の高い「きあいパンチ」を繰り出した。その衝撃でレジギガスは吹き飛ばされた。

キノガツサは技を出し終えたのでラグ達の元に戻った。

ポリズ「うまいですよ、キノガツサ。レジギガスはノーマルタイプですから効果は抜群ですよ!!!」

キノガツサ「そうなのか？」

ポリズ「あれ？それは知らなかったんですか？」

キノガツサ「知らねえよ。とりあえず威力の高い技を出したただけだからな。」

ポリZはキノガツサを誉めたが当のキノガツサは何にも知らず、キヨトンとしていた。

ポリZ「……まあレジギガスを倒せたのでいいでしょう。とりあえず事情を……」

???「ドレインパンチ」

ポリZ「ぐっ……」

ラグ「ポリZ!？」

ポリZは突然“ドレインパンチ”をくらいかなりよろけた。

ラグ「大丈夫、ポリZ?」

ポリZ「な、なんとか大丈夫です。ただ……」

ポリZは“ドレインパンチ”を使った相手を見た。

ポリZ「なんで動けて、しかも一瞬で移動できたかが疑問ですね……」

そう今“ドレインパンチ”を使ったのは先程キノガツサが倒したはずのレジギガスだった。

キノガッサ「ヤツは俺が倒したのに……」

レジギガス「お前の攻撃ごときで倒れる我ではない。」

アクア「えっ、しゃべった!?!」

ハスボー「この人しゃべるんだね……。」

突然しゃべったことに驚いたアクアとハスボー。しかし他のことで驚いた者もいた。

キノガッサ「俺の“きあいパンチ”を受けたのに起きただど!?!」

ポリZ「効果は抜群なはず……しかもスロースタートで……」

????「そんな効果は消しました。」

サンダース「誰だ!?! “でんじは”」

サンダースがいち早く反応し突然の声にサンダースが反応し確認する。するとレジギガスのとなりから何者かが姿をあらわした。

ポリZ「あの人は……クレセリアっていう伝説級のポケモンです。」

ハスボー「伝説級!?!」

ハスボーは伝説級と聞いて驚いた。

クレセリア「なかなかの“でんじは”でしたが、私の“しんぴのまもり”には勝てませんね。」

少し砂埃のまっただ中でクレセリアは言う。

ポリズ「しんぴのまもり」・・・あれはしばらくの間異常状態を防ぐ技。“でんじは”を消しましたか・・・。」
クレセリア「その通り。では問題です。なぜレジギガスは「スロースタート」にも関わらず素早さと攻撃力が上がっているのでしょうか？」

クレセリアからのいきなりの問題にメンバーは戸惑う。

クレセリア「正解は・・・ダーク化の力です!!！」

そういうとクレセリアとレジギガスから黒いオーラが吹き出てきた。

サンダース「あれは・・・ダーク化!?!」

キノガッサ「ヤツらもダーク化するのによ!?!」

クレセリア「その通り。しかもただのダーク化ではありません。なにせ特別ですから。」

ポリズ「特別?」

ポリズはクレセリアの「特別」という点に疑問を持った。

クレセリア「ああ、あなた方には関係ないですよ。なにせ今から駆除しますから。」

キノガッサ「く、駆除だど!?!」

クレセリア「はい。何か?」

冷静に、というか冷酷に答えるクレセリアにキノガッサは少しどうしようした。

クレセリア「あなた方は邪魔です。故に駆除しなければなりません。」

キノガッサ「でも分かってんのかよ、こっちは7人、そっちは2人だ。単純に戦えばお前らは不利も不利、大不利だぜ。」

キノガッサは大きな声でそう言った。

クレセリア「ふふふ、人数は関係ありませんよ。」

しかしクレセリアは余裕の表情で言い返す。

ポリZ「（確かにこのまま戦えば向こうは不利ですね。）

キノ「（でもあれだけの自信で言っつてことは・・・）」

サンダース「（何かを企んでるか、それとも・・・）」

ポリZ&キノサンダース「（チーム絆を倒す実力を持っているか!」

！」

チーム絆の頭のいい3人は同じように考えた。

ラグ「駆除ってことはやっぱりバトル？」

クレセリア「もちろん、それ以外に何かありますか？」

ラグ「・・・いや、ないね。」

ラグは話し合いで済まそうと思ったが無理だった。ラグがなぜ話し合いで済まそうとしたのか。

それはラグが強者が放つ独特のオーラをレジギガスとクレセリアから感じたからだ。

だからラグは話し合いで済まそうとした。

ラグ「やっぱりバトルしかないかあ。」

クレセリア「そういうことです。いきますよレジギガス。」

レジギガス「了解した。」

クレセリアとレジギガスはラグ達に接近した。

ラグ「やるしかないか。いくよ、みんな！！」

メンバー「おうー！！」

こうしてバトルは始まった。

一方ミュウ達は

ミュウ「こ、これは・・・」

ミュウの目の前にはクレーターのよつに地面がへこみ、あたりの木がもえている様子だった。

ミュウ「ひ、酷い・・・」

ミュウツ「おい、ミュウ。」

ミュウ「ミュウツ！そっちは？」

ミュウツ「こっちは木が焼かれてる。今から消火をするところだ。そっちは？」

ミュウ「ほとんど一緒。僕も今から消火をするよ。」

ミュウツ「分かった。」

ミュウは手の平にエネルギーをためた。

ミュウ「なんかラグ達の方もマズい予感がするんだよね・・・。早めに終わらせなきゃ。“みずのはどう”！-！」

ミユウ手から“みずのはどろ”が出され火を消した。

「ミユウ」無事でいてね、みんな。」

第五十三話 突然の襲来 伝説級のポケモン達（後書き）

ラグラージの冒険 後書き
舞台裏バージョン

クレセリア「あの・・・なんで私悪キャラ？」

レジギガス「我もだ（涙）」

ごめんね、でもクレセリアの悪ぶりはすごかったよ。レジギガスの無口さも。

クレセリア「ホントですか？」

うん、女優さんだったよ。

クレセリア「・・・次回も頑張らなきゃ！！」

レジギガス「（とりあえず我は暴れるかな・・・）」

第五十四話 闇月の使者と破壊の巨人（前書き）

いよいよバトルです。

ラグ「この前はヒードランに負けたからもう負けたくないなあ。」

まあクレセリアとレジギガスはつよいけどね。

第五十四話 闇月の使者と破壊の巨人

ラグ「ハイドロステインガー」
クレセリア「ひかりのかべ」

突如出現したクレセリアとレジギガス。

「駆除する」という二人に対抗するためラグ達チーム絆はバトルをすることに。

そして今はそのバトル中。

ラグの放った無数の水の短剣はクレセリアに向かっていくがクレセリアは“ひかりのかべ”で防御。ノーダメージだ。

クレセリア「そんなものが私たちに効くともぞ？」

キノガッサ「だろうな、だからこれだー！！」

ノーダメージにしたことで鼻で笑ったクレセリアだがそんなクレセリアにキノガッサは急接近した。

キノガッサ「きあいパンチ」！！

キノガッサはクレセリアに“きあいパンチ”を当てようとした。し

かし

キノガツサ「なんだと!？」

レジギガス「お前のパワー、ダメ。」

クレセリアの目の前にレジギガスが現れてただのパンチで“きあいパンチ”を受け止めた。

キノガツサ「きあいパンチ”を普通に受け止めた!？」

レジギガス「お前・・・邪魔。」

レジギガスはそういうとそのままキノガツサにパンチ、キノガツサはすごい勢いで吹き飛ばされる。

キノ「キノガツサー!？」

サンダース「キノガツサが吹き飛ばされたと!？」

クレセリア「よそ見していいんですか？」

サンダース「なに!？」

キノガツサが吹き飛ばされたことにキノとサンダースが驚いているといきなり目の前にクレセリアが現れる。

クレセリア「サイコカッター」

キノ「まもる」

クレセリアはサンダースに“サイコカッター”を放ったがキノが“まもる”で防御、ノーダメージにおわる。

サンダース「ありがとう、キノさん。」

キノ「どういたしましてです。」

サンダース「クレセリアは!？」

サンダースはクレセリアがいないことをふしんに思いあたりを見渡す。しかしクレセリアの姿は見えない。

サンダース「アイツどこへ・・・」

キノ「あ、サンダースさん、あそこ!！」

キノに言われてサンダースが見るとすでにポリZ達の方に行っていた。

サンダース「アイツ動き速くないか？」

キノ「多分“テレポート”じゃないですか？」

サンダース「なるほどな。」

テレポートは瞬間移動できる技であり、この世界のエスパイタイプならほとんど使える。

サンダース「しかしなんとかしてクレセリアの防御を破らないと・
」
キノ「彼女にはほとんどダメージが通ってませんからね。」

実際にはダメージが通ってないわけではないが、少ししかダメージを与えていなかった。

サンダース「ごちゃごちゃ考えても仕方ないか、キノさん、早くポリZ達のところに・・・ぐっ!？」
キノ「サンダースさん・・・!？」

サンダースの案でポリZ達の所へ行こうとした二人を突然の苦しみが襲った。

サンダース「なんだ・・・めちゃくちゃ苦しい・・・、まさか・・・」
キノ「どくどく」みたいですね・・・。」

そう、さっきの“サイコカッター”の時にクレセリアは“サイコカッター”に“どくどく”を取り込ませた。それが“まもる”ではじかれて散らばったことで微妙にはあるがサンダース達に“どくどく”が付着。それが今になって効いてきたのだ。

サンダース「なるほどな・・・やつがポリズ達の方に行ったのは・・・これがあった・・・からか・・・」
キノ「やられ・・・ました・・・ね。」

二人は“どくどく”に耐えられず倒れた。それを見ていたクレセリアは微妙に笑った。
クレセリアと対戦していたポリズとハスポーはそれを見て不思議に思う。

ポリズ「何が楽しいんですか!？」
クレセリア「何って・・・アナタ達の仲間がたおれる姿ですよ。」
ポリズ「!? 一体何を・・・」
ハスポー「ポリズ、あれ!!」

ポリズがハスポーに言われて見た先には“どくどく”によって倒れたサンダースとキノがいた。

ポリズ「サンダースさん、キノさん!? アナタよくも・・・」
クレセリア「だからいったでしょう、駆除するって。」

その言葉にポリズは怒りポリズの表情が険しくなった。

ポリズ「いきますよハスポー。全開で“ソーラービーム”をお願いします

します。」
ハスボー「うん!!」

その瞬間にハスボーの葉には光が集められた。

クレセリア「ソーラービーム」ですか、そんなもので私を倒せる
と？」

ポリZ「僕だって技を使いますよ。アナタを・・・倒すために!!」

一方レジギガスの方はキノガッサが吹き飛ばされラグとアクアが助
けに行っていた。

今は岩の後ろに隠れておりレジギガスには見つかっていない。

ラグ「キノガッサ、大丈夫？」

キノガッサ「ああ、なんとかな。」

アクア「でもあのレジギガスのパワーって・・・」

キノガッサ「ああとてつもなかった。正直真つ正面から向かったら
負けるだろうな。」

キノガッサはさっき自身が体験したパワー改めて思い出した。

ラグ「もう一人の・・・クレセリアは・・・ポリZ達と戦ってる！
？」

キノガッサ「おい、キノとサンダースはどこだよ!？」

キノガツサは二人がきになり岩の隙間からあたりを見渡した。すると倒れた二人を見つけた。

ラグ「なんで二人共倒され・・・キノガツサ？」

ラグはキノガツサの方から何かを感じキノガツサを見る。するとキノガツサは非常に怒っており、その表情には恐怖さえ感じた。

ラグ「キノガツサ落ち着いて・・・」

キノガツサ「もう我慢できねえ。」

その瞬間に隠れていた岩は粉々に砕け散った。それを見たレジギガスはそこに向かって歩いてきた。

キノガツサ「てめえ仲間が・・・やっってくれるじゃねえか!!」

刹那キノガツサが猛スピードで出てきてレジギガスに向かって行った。

キノガツサ「リーフメガパニツシャー」

レジギガス「だからお前の攻撃、我に効かない。力がない。」

レジギガスは避ける必要がないと判断したらしくキノガツサの技を
まともにつけた。

その威力は予想外らしくレジギガスは驚きながらとばされた。

ラグ「やったー!!!」

アクア「すごいよ、キノガツサ……。キノガツサ？」

アクアは呼んでも返事をしないキノガツサを大丈夫かと思い近く
行った。すると

アクア「ラグちゃん……」

ラグ「何？」

アクア「キノガツサが倒されてる……」

ラグ「えっ!？」

ラグはあまりの衝撃に急いでキノガツサの元に行った。すると本当
に倒されていた。

ラグ「なんでキノガツサが……」

アクア「多分“カウンター”だよ。あれで威力を倍にしたんだよ……」

アクアがそういうとレジギガスが倒された場所から物音がし、見てみるとレジギガスは立った。

ラゲ「そんな・・・」

アクア「あれをくらってもダメなの・・・？」

レジギガス「なかなかだった。だけど我にはきかない。無駄。」

レジギガスは肩を回しながら言った。

一方VSクレセリアの方は・・・

ポリズ「いきますよ。“はかいこうせん”!!」
ハスボー「“ソーラービーム”!!」

二人は最大パワーで技を出した。それをみたクレセリアは・・・

クレセリア「確かに強いですね、しかし・・・」

突如クレセリアの前に壁が現れた。

クレセリア「私の壁はこえられませんよ。」

実際に2つね技は壁に防がれていた。

ポリZ「くっ……固い。」

ハスボー「破れないよ。」

苦戦するポリZ達に対しクレセリアは余裕の表情だった。

そしてクレセリアは壁を“ミラーコート”に変更。ビームを跳ね返されてポリZ達は倒れた。

クレセリア「私のただのエスパーの力を集めた壁も壊せないなんて……アナタ達の技は見た目だけ強くて本当は相当弱いんですね。」

ポリZ「く……“れいとうビーム”!!!」

ハスボー「え、“エナジーボール”!!!」

ポリZとハスボーは最後の力を振り絞りクレセリアに技をだす。

クレセリア「まあ往生際の悪いこと。“サイコカッター”」

クレセリアはビームに対して“サイコカッター”を発射、相殺した。

ポリZ「なっ……」

ハスボー「やつぱりダメ……!?!」

クレセリア「消えなさい。“ダークムーンサークル”」

クレセリアが技名を言うと二人の足元に中心に三日月のある黒い魔法陣が現れる。

ポリズ「これは・・・」

クレセリア「終わりです、消えなさい。」

そしてサークルの中は黒い膜で覆われて数秒経つとポリズ達が倒れていた。

クレセリア「無様ですね、力が無いというのは。」

一方レジギガスの方では・・・

アクア「みずのはどう」

ラグ「れいとうビーム」

アクアは“みずのはどう”で、ラグは“れいとうビーム”で攻撃するが・・・

レジギガス「ほのおのパンチ」

レジギガスの“ほのおのパンチ”で消されてしまう。

ラグ「これもだめか。」

アクア「ラグちゃん、来るよ!!」

レジギガス「れいとうパンチ」

レジギガスは手に冷気を帯びて攻撃してくるがラグとアクアは紙一重で避けた。

ラグ「ウォーターソリューション」

ラグはすかさず攻撃し、レジギガスにヒットするが・・・

レジギガス「ぬるいな。」

ラグ「そんなんっ!？」

アクア「これなら冷たい?“氷水凍化龍”」

アクアはラグが気を引いている内に“氷水凍化龍”を発動、アクアの後ろに龍ちゃんが現れる。

アクア「龍ちゃん、行って!」

アクアから指示を聞きレジギガスに向かっていく龍ちゃん。しかし・

レジギガス「無駄だ。“ストーンエッジ”」

レジギガスは“ストーンエッジ”で自分の周りに岩の壁を制作、龍ちゃんの突進を防いだ。

レジギガス「これで終わりだ。“ギガクラッシャー”」

レジギガスは右腕に力を込めて地面を殴る。すると凄まじい衝撃波が発生しラグ達を襲う。

アクア「きゃー!!」

ラグ「アクアー!!」

ラグはすぐにデンライジになり“ライトニングウイング”を発動、高速でアクアの所まで行きアクアを助けた。

ラグ「アクア・・・」

アクアは気絶しており返事はなかった。

ラグはキノガツサの近くにアクアを寝かせた。

そこはレジギガスから離れているので戦いの被害はおそらく受けない。

ラグ「よくも・・・アクアをー！！」

ラグがレジギガスを見るとラグが途端に光右手に電気を集める。

ラグ「デンインパクト」！！」

ラグは高速でレジギガスに向かっていきレジギガスに“デンインパクト”を炸裂させた。しかし

レジギガス「その程度か。」

ラグ「えっ・・・」

レジギガスには効いていなかった。

レジギガス「必殺技とはこういうものことをつづのだ。“ギガイ
ンパクト”！！」

レジギガスは右手でラグを殴るとそのまま吹き飛ばした。

レジギガス「あまりに弱いな。」

クレセリア「レジギガス。」

レジギガス「クレセリアか。」

クレセリアはポリズ達を倒しレジギガスと合流した。

クレセリア「こっちは終わりましたか。」

レジギガス「ああ、そっちは？」

クレセリア「もちろん終わってますよ。あまり強くありませんでした。」

レジギガス「こっちもだ。」

クレセリアは少し笑いながらそう言った。

レジギガス「それではトドメを・・・」

クレセリア「・・・は無理みたいです。時間が来ました。」

レジギガス「そうか・・・」

クレセリア「まあこの程度ならいつでも倒せますから。」

レジギガス「そうだな。」

そういうと二人の足元に魔法陣が展開される。

クレセリア「今回は様子見といった感じでしたが次は仕留めます。
覚悟してなさい。」

そういつとクレセリア達はそこから消えた。

ミュウ「やっと消火が終わったよ。」
ミュウツ「こっもだ。」

ミュウとミュウツは合流していた。

ミュウ「急いで戻ろう。みんなが心配だし。」
ミュウツ「そうだな。」

ミュウ達は急いでラグ達のもとへと向かった。

ミュウツ「こ、これは・・・」
ミュウ「ラ、ラグ!？」

ミュウ達は倒れたラグ達を見て急いで助ける。

ミュウ「テレポート」
ミュウツー「テレポート」

二人は“テレポート”でメンバーを安全な場所に移動した。

第五十四話 闇月の使者と破壊の巨人（後書き）

ラグ「なんか終わり方がヒードランの時みたいな気が・・・」

仕方ないでしょ、負けちゃったんだから。

ラグ「ていうかみんな強すぎだよ!?!?」

君達もこれから強くなるんだよ。

ラグ「どうやって?」

さあね?それは次回のお楽しみ。

第五十五話 絶望の中の一つの希望（前書き）

今回はミュウからの修行の話です。

ラグ「今かなり深刻な状況だよね？」

でも多分読者の皆さんは応援してくれてると思うよ？

ラグ「そうだよね、みんなの応援があれば・・・大丈夫！！僕達は頑張れる！！」

第五十五話 絶望の中の一つの希望

クレセリア達とのバトルから1週間、ラグ達の体を完全回復していたが精神はまだだった。

ラグ「ごめんね、みんな。僕の力がたりなかったから・・・」

キノガッサ「違う！俺だ。俺に力がないから。」

アクア「それなら私だって。」

キノ「私もです。」

サンダース「俺もだ。何も出来ずに倒れた。」

ポリズ「私の指示ミスでもありません。」

ハスボー「僕の威力不足だって・・・」

メンバーはみんな今回の敗北を「自分のせい」だと思い自身を責めていた。そこへ・・・

ガチャ

ドアが開いて相手二人のポケモンが現れる。

ミュウ「みんな・・・」

ラグ「ミュウ・・・」

ラグは泣いて泣いて目の腫れた顔でミュウをみた。

ミュウ「今回の負けは・・・悔しい？」

ラグ「・・・うん。」

アクア「とても悔しい。」

サンダース「俺達には力がなかったんだ。」

キノ「何も出来ずに倒れてしまいました。」

キノガッサ「自分の気持ちで押すことも・・・」

ポリズ「自分の意志を貫くことも出来ませんでした。」

ハスボー「全てクレセリアの方が上だった・・・。」

メンバーは顔を落として話した。

ミュウ「そっか・・・みんな、ちょっとリビングに集まって。」

ミュウに言われてメンバーは移動した。

ちなみに今はリフレッシュセンターは壊れてしまったので空き家を使っていた。

ミュウ「みんな集まったね。」

ラグ「うん。」

ミュウ「それじゃあ話すけど前にポリズが言ったよね？ヒードランのダーク化は何が違ってる。」

ポリズ「はい。」

ミュウ「今からそれを話すね。」

ミュウは一度深呼吸をして話し始めた。

ミュウ「ヒードラン・・・まあ恐らくクレセリアやレジガスもだ
るうけどアイツらは「ダーク」って組織の幹部なんだ。」

キノガッサ「ダーク?」

ミュウ「うん、ダーク化の力を使い様々な破壊を繰り返す闇の組織
ダーク。今までもいくつか目撃されていたけどこの頃になって急に
増えてきているんだ。」

サンダース「目的はなんだ?」

ミュウの説明にサンダースが質問する。

ミュウ「それは分かんないけど・・・」

ミュウツ「とりあえず言えることは「悪いヤツら」ってことだ。」

ミュウツ「腕組みをしながら答えた。

ミュウ「話しを戻すとね、幹部のダーク化は強化のレベルが違うん
だよ。」

キノ「どれくらい?」

ミュウ「まあ僕がヒードランをみた限りじゃ2倍ぐらいは上がるみ
たいだね。」

ハスボー「2倍!?!」

驚きの数値にメンバーは驚いた。

ミュウツ「まああくまで数値上だからな。」
ミュウ「うん、だから実際は分からない。でも確実に言えることは今のラグ達じゃ負けるってことだね。」

ミュウの言葉にメンバーはまた顔を下げてしまう。
自分達には力がなくアイツらには勝てない、そんな気持ちがあふれてくる。

ミュウ「でもね・・・」

ミュウが深刻な顔から少し明るい顔になる。

ミュウ「まだ手はあるんだよ。」
アクア「!？」
ポリズ「それは一体・・・」

メンバーはまた驚いた顔でミュウを見る。

ミュウ「君達を強化してもらうんだよ。」
キノガッサ「誰にだ？」
ミュウ「異世界の人にさ。」
キノガッサ「異世界?!？」
ポリズ「僕たちもいけるんですか？」

メンバーは目を光らせながら言った。

ミュウ「うん、でもラグみたいに分身じゃないよ。」

サンダース「どこへ行くんだ？」ミュウ「それは秘密だよ。」

キノガッサ「でも強くはなるんだよね？」

ミュウ「うん、多分。」

キノガッサ「よし！！俺は行く！！」

ミュウ「キノガッサ？」

ミュウはテーブルの上に立って宣言するキノガッサにキョトンとしていた。

キノガッサ「俺は異世界に行って強くなる。んであのレジギガスをぶつとばす！！」

キノガッサが宣言するとラグとハスボーもヨジヨジと登り宣言した。

ラグ「僕ももつと強くなる！！デンライジとカリバーをさらに強化する。」

ハスボー「僕ももつとみんなを守るようになる！！」

それに答えるように他のメンバーもテーブルに登った。

アクア「私ももつと強い龍ちゃんを作れるようになって、コントロールも出来るようにする!!」

キノ「私も回復をさらにパワーアップさせます。」

ポリズ「僕だってどんな攻撃だって対抗出来るようになりますよ!!」

サンダース「俺もめつと速く動けるようになる!!」

メンバーは全員登り堂々と宣言した。

ミュウ「わ、分かったからとりあえず下りようか。」

ミュウに言われてメンバーは慌てて降りた。

ミュウ「まあ意気込みはバツチりだし大丈夫だよね？」

ミュウツ「ああ、大丈夫だろ。」

ミュウ「よし、それじゃあ説明するよ。」

ミュウのかけ声メンバーはミュウに集まる。

ミュウ「異世界への修行はラグとキノガツサが行っているような修行になるよ。ただラグ達と違うのは分身じゃないこと。みんな本人が行かないといけないよ。」

サンダース「構わないさ。」

ミュウ「それからこの人数を送るならどこの世界に行くかは分からない。」

ハスポー「え・・・」

ポリズ「それじゃあ修行できる世界かは・・・」

ミュウ「分かんないよ。だからさっき多分って言ったでしょ。つまりかなりのギャンブルになる。」

ミュウの表情がもう一度険しくなる。

アクア「どうやったから帰ってこれるの？」

ミュウ「条件は「みんなが強くなる」だからみんなが強くなれば帰ってこれると思うよ。」

サンダース「じゃあもし修行が出来ない世界なら・・・」

ミュウ「帰って来れないし、修行が出来る世界でもかなり強くないと帰って来れない」

ポリズ「まさにギャンブルですね・・・」

メンバーの表情が曇る中ミュウは改めて聞いた。

ミュウ「異世界に行く？」

しかしミュウが言うとさっきと表情を変えて

メンバー「行くー!!」

みんなは行くと言った。

ミュウ「そう・・・それじゃあ準備をして。明日には行くよ。」
ラグ「分かったよ。」

それからメンバーは買い物などに行った。

ミュウツ「修行か・・・」ミュウ「したいって言ってたね。」

二人は窓から空を見て言った。

ミュウツ「しかしいくらでもあんな嘘をついていいのか？」

ミュウツ「は不思議そうな顔をしながら言う。」

ミュウツ「どこの世界に行くかも決められるし、帰ってこれるの
だっていつでもオーケーだろ？」

ミュウツ「の問いにミュウは静かにこたえた。」

ミュウ「試したかったんだ。みんなが本気で強くなりたいのか。」
ミュウツ「で、どうだ？」

ミュウツールの問いにミュウは少し笑顔になりながら言った。

ミュウ「もちろん合格。そんな条件の中聞いたらそれでも」行く！
！」っていうんだもん。合格だよ。」

ミュウツール「そうだか・・・アイツら、強くなるか？」
ミュウ「なるよ。きつと。」

そんな会話をミュウ達はした。

ミュウ「このままじゃ終わらない。みんな悔しいんだ。リベンジしたいんだ。でも力がない。それならその手伝いはしてあげる。」

ミュウツール「手伝い」は「か・・・」

ミュウツールはあえて「は」の部分を強調して言う。

ミュウ「だって強くなるかどうかはみんな次第だし。僕達はチャンスをおあげるだけ、だよ。」

そんなことを言いつつ嬉しそうに空を見るミュウを見てミュウツールは思う。

ミュウツール「（おあげるのはチャンスだけ・・・といいつつ強くなる

って言ってるやがる……。変わらないな。コイツの影で心配し、影で期待すりタイプというのは……。」「

そんなことを思いつつミュウツィーはパトロールに向かう。

ミュウ「さて、僕も送る準備をしようかな。」

そのままミュウは部屋を出た。

第五十五話 絶望の中の一つの希望（後書き）

ということでは修行の説明でした。

ラグ「フォックさんとことは別の修行だよね？」

うん、そこらへんはあんまり気にしなくていいよ。

ラグ「宝玉の方も探さないと!!！」

そうだね、ラグ・・・これから忙しいよ？

ラグ「でもダークを倒すために・・・頑張る!!！」

第五十六話 異世界への修行 前日 ラグ、アクア、サンダーズ編（前書き）

異世界に行く前です。

サンダーズ「なんか俺影がうすくないか？」

気にしない、気にしない。

第五十六話 異世界への修行 前日 ラグ、アクア、サンダーズ編

異世界への修行が決まった日の前日の夜、メンバーはそれぞれいろんな場所にいた。

ラグ「はぁ・・・」

ラグは泉の近くにいた。さっきからため息が止まらず体操座りで縮こまっていた。

ラグ「異世界かあ〜でも僕はどうすれば・・・」

アクア「あ、ラグちゃん！」

ラグ「あ、アクア・・・」

そこへアクアが現れる。

アクア「ラグちゃん・・・」

そう言ってアクアはラグの近くに行く。

アクア「となり・・・いい？」
ラグ「あ・・・うん。」

二人の間にしばらく沈黙が続く。
そんな空気を破ったのはアクアだった。

アクア「ラグちゃんは異世界にいったどんな修行があると思う？」
ラグ「・・・僕は・・・そうだなあ、走り込みとか？」
アクア「ふふ、だとしたら結構キツイね。」

ラグの返答にアクアは少し笑った。

ラグ「ア、アクア。なんで笑うの？」
アクア「だって修行に走り込みって・・・」
ラグ「でも大事だよ？」
アクア「うん、それはもちろん分かるよ。分かる分かる。」
ラグ「全く・・・」

少し受け流すように言ったアクアにラグはほっぺを膨らました。それからラグは少し間をおいていった。

ラグ「アクアはその・・・緊張とか怖いとか無いの、今回の修行？」

ラグの質問にアクアは少し迷いながら答えた。

アクア「うーん、怖くないって言ったら嘘になるし、緊張しないのか、って言われると緊張してるよ。だけど……」
ラグ「だけど？」

アクアはラグの質問にまた間をおいていった。

アクア「みんなが……ラグちゃんがいるから大丈夫だよ。」
ラグ「アクア……」

ちょうどその時、通りかかったサンダースが足を止めて二人に気づいた。

サンダース「ラグ？アクア？」

サンダースは何かと思い二人の会話を聞いた。

サンダース「今アクアが「ラグちゃんがいるから大丈夫」って……
、アクア、ついにか？」

サンダースはアクアが告白したかと思ったらしい。

アクア「だってラグちゃんだいぶ強くなっただしね。」
サンダース「あ、違うのか。」

しかしアクアが「ラグちゃんがいるから大丈夫」といった理由を聞いてサンダースは残念がた。

アクア「一人じゃ怖いけどみんなといっしょなら大丈夫、ラグちゃんといっしょなら大丈夫。だって私たちチーム「絆」でしょ？」

アクアは笑顔で言った。

その言葉はラグの胸に深く響いた。
怖さも緊張もある。でもみんながいる、だから大丈夫。そんな根拠もない理由だがしかし力強いその理由がアクアを支えている。

だからこそビビる訳にはいかない、逃げる訳にはいかない、ラグはそう思った。

ラグ「そうだね・・・そうだよ。ありがとう、アクア。」

アクア「私は何も。ラグちゃん、異世界で修行頑張ってクレセリア達を倒そう！今度は違う私達を見せてやろう！」
ラグ「うん。」

この時ラグの中の迷いは消えた。

守れなかったなら次守ればいい。せつかくチャンスがある。それな

らそれまでに成長し、次は絶対負けないようにする。
絶対だ。

サンダース「告白のほうは残念だったが、みんながいる・・・かあ。
よし、頑張ろうな、みんなだ。」

ラグとアクア、そしてサンダースは右手を拳にして夜の綺麗なそら
に向けていた。

第五十六話 異世界への修行 前日 ラグ、アクア、サンダーズ編（後書き）

ラグ「よし絶対クレセリア達をたおすぞー。」

アクア「ところで異世界での修行ってどんなことするの？」

うーん、どんなことでしょうか。

ラグ&アクア「まだ決めてないんだ・・・」

第五十七話 異世界への修行 前日 キノガツサ、キノ編（前書き）

キノガツサとキノ編です。

キノガツサ「意味あんのか、このかい。」

まあほら、大きなことする前には一応ね。

キノガツサ「よくわからん。」

第五十七話 異世界への修行 前日 キノガツサ、キノ編

ラグ達が泉で会話をしている時、エルビストの公園では・・・

キノガツサ「はぁ・・・」

こちらもラグと同じようにため息をつくポケモンが一人・・・キノガツサだ。

キノガツサはベンチに座り腕を後ろに組んでぼーっとしていた。

キノ「キノガツサ・・・」

キノガツサ「ん、キノか・・・」

キノガツサはキノと合った。

キノ「どうしたの？」

キノはアイコンタクトで横に座っていいかを聞き許可をもらいとなりに座った。

キノガツサ「いや、なんか急だなと思ってな。」

実際異世界に行くのが決まったのは今日の朝だ。キノガツサから見たらとてつもなくいきなりだ。

キノ「でもあの時一目散にテーブルの上に立って「行く!!」って言ったじゃない。」

キノガツサ「まあそれはそうなんだが・・・」

キノガツサは少し動揺しながら言った。

キノ「今から怖くなった？」

キノガツサ「ば、ばか！別にそんなんじゃない・・・」

キノの問いにキノガツサは少しむせながら答えた。

キノ「私は怖いけどなあ。」

キノガツサ「マジか？」

キノ「そりゃそうよ、朝起きて少し経ったら修行に行くことが決まったのよ？しかも明日。ビックリもするし怖くもなるよ。」

キノガツサ「キノ・・・」

キノガツサは正直に自分の気持ちを言うキノを少しカッコいいなと

思った。

キノ「でも行かなきゃ次も負ける。力の差は埋まらない。それならば、行ってがんばろう。後悔しないように。」

キノガッサ「キノ・・・」

あの時キノガッサは知った。無力さを、故に守りたいものを守れない悔しさえを。

だから強くなりたい、大切なものを守れる力がほしい。

そして、守りたい。今のキノガッサにはそんな思いがあった。

キノガッサはすくつと立ち上がり右拳を掲げて宣言する。

キノガッサ「そうだな。よし頑張るぜ!!!」

キノ「うん!!」

キノガッサは空の三日月に向かってパンチする。

キノガッサ「見てるよレジギガス、みちがえたキノガッサ様を見せてやる!!!」

第五十七話 異世界への修行 前日 キノガツサ、キノ編（後書き）

キノ「なんか短くないですか、今回。」

そ、そんなことはないよ・・・多分。

キノ「多分なんですネ・・・。」

第五十六話 異世界への修行 前日 ポリZ&ハスボー編（前書き）

今回はポリZ達編です。

ポリZ「僕たちで最後ですね。」

うん。

第五十六話 異世界への修行 前日 ポリZ&ハスボー編

ラグやキノガツサが話している頃、ポリZとハスボーはエルピストの展望台に来ていた。

ハスボー「わあ、星が綺麗だね。」

ポリZ「そうですね。」

ハスボーは光輝く星空を見て目をキラキラさせて感動していたが、ポリZはあまり楽しそうではなかった。

ハスボー「楽しくない、ポリZ？」

心配したハスボーがポリZのうつむいた顔を覗き込んだ。

ポリZ「あ、はい、大丈夫ですよ。元気です。」

ポリZはあえて笑顔で答えたがハスボーにはバレバレだった。

ハスボー「ポリズ、嘘はだめだよ。ちゃんとポリズの顔を見れば分かるんだから。」

ポリズ「うう……」

ポリズは見事に嘘を見破られてしまい、仕方なく話し始めた。

ポリズ「僕はクレセリア戦でハスボー、あなたに“ソーラービーム”を撃つように指示しましたよね？」

ハスボー「えっ、うん。」

ハスボーは頭の中であのバトルを思い出した。

ポリズ「あの時本来は“ソーラービーム”は撃つべきではありませんでした。」

ハスボー「どうして？」

ポリズ「あのバリアの強度はとてつもなかったです。いくら“ソーラービーム”といえど破れないくらいの強度でした。」

ハスボー「まあ確かにね……」

そのバリアの強度はハスボーも分かっていた。あの“ソーラービーム”を撃つて当たった時の重い感じ……それは少しも貫通していないことを意味していた。

ポリズ「それに僕自身の技を足してもダメだった・・・今回は僕の指示ミスであり力不足故の負・・・」

ハスボー「えいつ!!」

ポリズがつつむいて話しているとハスボーは背中に乗ってきた。

ポリズ「ハ、ハスボー!？」

ポリズはいきなりすぎて驚きを隠せなかった。

ハスボー「別にポリズの指示ミスでも力不足でもないよ。」

ハスボーはポリズの耳元で優しくつぶやいた。

ハスボー「僕達には力がなかった。だからポリズの力不足じゃない、みんなの力不足なんだよ。」

ポリズ「でも“ソーラービーム”の指示ミスは・・・」

ハスボー「もうっ!!」

ポリズが話し始めるとハスボーはポリズを叩いた。
しかし力は弱くあまり痛くはない。

ポリズ「ハ、ハスボー？」

ポリズはあまりのことにキョトンとしている。

ハスボー「ポリズは頭で考えすぎなんだよ。あの時ポリズは作戦じやなくて“ソーラービーム”って言ったんでしょ？」

ポリズ「はい……。」

ハスボー「それならそれでいいじゃん、気持ちに素直になっただけだよ。気持ちで動くポリズ……格好良かったよ？」

ポリズ「ハスボー……。」

ポリズはハスボーの話しを聞いてほほ笑んだ。
気持ちで動くこと、それは時に頭で考えて動くより大切だとポリズは思った。

第五十六話 異世界への修行 前日 ポリZ&ハスボー編（後書き）

ということで次回はいよいよ異世界へ・・・

ハスボー「わーい、いよいよなんだね。」

うん多分ね。まあ次回は他にもあるけど・・・

第五十九話 ちよいとバトル？ ラグの弟子？（前書き）

さていよいよ異世界に……の前にバトルです。

ラグ「誰と？」

君の弟子。

ラグ「！？僕に弟子なんていたっけ！？」

いるんだよ。

ラグ「誰？誰？」

それは今回のお話しのお楽しみ。

第五十九話　ちよいとバトル？　ラグの弟子？

異世界に行くことが決まってから1日後、ラグたちチーム絆のメンバーはミュウに呼ばれてエルビストの広場に来ていた。

サンダース「いよいよだな」

アクア「そうだね」

キノガッサ「どんなやつがいるのか楽しみだぜ。」

キノ「女の子ばかりでもナンパしないでよ」

キノガッサ「分かってらあ」

キノガッサはキノに注意を受けるが軽く返事どう見ても怪しい

キノ「ほんとに分かっているのかな・・・」

キノは苦笑いしながらキノガッサを見た。

ハスポー「そういえばなんでここに集まったんだっけ？」

ポリズ「なんでもラグに会いたって人がいるらしく会ったためにここに集まったらいいですよ」

ハスボー「なるほど・・・」

そう、ラグ達チーム絆が異世界に行く前にラグに会っておきたいという人がおり、会ってから異世界に行くことになっていた。

アクア「でもラグちゃん、思い当たる人いる？」

ラグ「うん・・・」

????「ししよ」

ラグが考えるとどこからかいきなり声が出た。

サンダース「なんだ今の？」

キノガッサ「いまししよーって聞こえたぞ？」

ラグ「もしかして・・・」

ラグ達が後ろを見ると・・・

????「ししよ」

あるポケモンが走ってきた。

ラグ「な、なるほど。会いたっていいのは君か……」

ラグは苦笑いしながらいった。

ラグ「ミジユ君」

ミジユ君「違いますよ、今は進化したからタチマルです!!ししよーご無沙汰です」

ラグにミジユ君と言われたポケモン……ミジユマル、ではなく二つの貝をもったポケモン、フタチマルだ。どうやらラグに会いたかったのはこのフタチマルらしい。

キノガッサ「おいラグ、ソイツ誰だ?」

ラグ「あ、この子?」

タチマル「オイラはフタチマルのタチマルです。ししよーの一番弟子です」

キノガッサ「あ、なるほど。弟子かぁ……って弟子!?!」

タチマル「はい!?!」

キノガツサに驚かれながらもタチマルは元気よく答えている。

キノ「ラグさん、お弟子さんなんていたんですか？」

ラグ「うーん、別に弟子では・・・」

当のラグは苦笑いをしていた。

タチマル「何を言っていらっしゃるんですか、ししよー。オイラはししよーの一番弟子です」

ラグが拒否しようとタチマルは弟子だと腰に手を当て主張した。

キノガツサ「ところでなんでラグがししよーなんだ？」

タチマル「え、だってそれは・・・」

タチマルは少し笑顔になりながら言った。

タチマル「ししよーは強さではなく優しさをもっていらっしゃるか
らです」

キノガツサ「はあ？」

サンダース「なあタチマル君・・・だっけ？それはどういう意味なんだ？」

キノガツサ、サンダースだけでなくラグを除いた他のメンバーも疑問そうだ。

タチマル「オイラは昔イジメにあっていました。あの頃はミジユマルだったんですが、ミジユマルのくせに貝がうまく使えずバカにされてました。あと暴力にもあいました。ミジユマルは本来貝を使って戦うのですが、オイラは貝が使えない、つまりどれだけ手を出しても仕返しはこないと5人ぐらいにイジメられました」

キノガツサ「そりゃひでーな。おい、ソイツ誰だ、俺が潰す」

キノ「まあ、まあキノガツサ、落ち着いて・・・」

タチマルの話しを聞き少し怒ったキノガツサだったがキノによって抑えられた。

タチマル「でもそんな時助けて下さったのがししょーなんです」

サンダース「だが小さい頃はリミッターがはずれかけもしてないから・・・」

ラグ「うん、ボロボロに負けちゃった……」

ラグが苦笑いしながら言うとまたアイツが出てきた。

キノガッサ「おい、ちょっとマジでソイツ誰だ？今から行って潰す」

キノ「だから落ち着いて……」

キノガッサをまたキノが止めた。

ポリズ「でもそれは助けたわけでは……」

タチマル「違います。ししょーは弱いオイラを体をはってまもってくださいました。それがオイラは嬉しかった。だから決めたんです。オイラも大切なものを守る勇気とその力を持つって」

ハスボー「いい人だね、タチマル君……。」

タチマル「あ、皆さんはタチマルって呼んで下さい」

キノガッサ「じゃあタチマル、さっそく聞くがラグに会ってどうするんだ？」

キノガッサがさっそくタチマルと呼んで質問をした。答えは即答だ

った。

タチマル「ししょーとバトルをしたいんです」

キノガツサ「ラグとバトル？」

タチマル「はい」

ラグ「え〜！？」

二人の会話を聞いて一番驚いたのはラグだった。

ラグ「僕、タチマル君とバトルするの？」

タチマル「はい」

ラグ「う〜ん」

ラグが考え込む。いきなりこのことで混乱しているのだろっ。と、そこへ……

ミュウ「みんな〜」

ハスボー「ミュウ！」

ポリズ「ミュウツーさんもですね

ミュウとミュウツーがラグ達のもとにやってきた。

ミュウ「なんだ、タチマル君もう着いてたんだ」

タチマル「はい!」

ラグ「ねえミュウ、タチマル君が僕とバトルしたいっていうんだけど……」

ミュウ「あ、うん、いいんじゃない?」

ラグ「ミュウまで!」

ミュウなら「早く行かないといけないから」みたいな理由でバトルをしなくて済むようにしてくれると思っていたラグは驚きしかなかった。

エルビストのバトルフィールド

ミュウ「じゃあ両者、準備はいい？」

タチマル「はい」

ラグ「うん……」

ミュウ「それじゃあれディ……ゴー……！」

始まりと同時にタチマルはラグに向かって走り出す。

タチマル「いきますよしよー、”みずのはどう”」

タチマルは走っていきながらラグに”みずのはどう”を放つ。

ラグ「それじゃあ僕も”みずのはどう”」

ラグも”みずのはどう”を出して対抗、互いの”みずのはどう”はぶつかり合い相殺した。

ラグ「”みずのはどう”がぶつかったことで視界が見えにくくなっているから多分……」

タチマル「必斬！”シェルブレード”」

タチマルは視界が悪くなったことを利用してラグに“シエルブレード”を当てようとした。しかし……

タチマル「そんな……」

ラグ「残念だったね」

タチマルが驚いた理由、それはラグが“シエルブレード”を止めたからだ。

タチマル「なんで……」

ラグ「だって視界が悪くなるなれば接近戦に持ち込むチャンスだからね。タチマル君は接近戦が好きで得意だし」

タチマル「さ、さすがししょー、そこまで……」

タチマルはラグの考えの深さに改めて尊敬していた。しかし尊敬しただけは足りない。これは「バトル」だ

タチマル「でもですね……」

そう言うとタチマルは右手を引き……

タチマル「きあいパンチ」

タチマルはラグに止められながらも“きあいパンチ”を発動する。
ラグはそれを受け止めたものの衝撃により結果、タチマルはラグからはなれた。

タチマル「なんとかなりましたね、はあ、はあ・・・」

タチマルは少し疲れたのか肩で息をしていた。

タチマル「結構体力を使いましたがダメージは通っているはず・・・」

ラグ「うん、なかなかのパンチだったよ」

タチマル「!？」

タチマルがラグをみるとラグは少しダメージをくらっていたようだが、普通に立っていた

タチマル「やっぱり強いですね、ししよー」

ラグ「タチマル君も強くなってるよ」

タチマル「ありがとうございます。ではししょー、そろそろ本気を見せてくださいよ」

ラグ「・・・分かってたんだ」

タチマル「もちろんです、どうせなら本気のししょーと戦いたいです」

タチマルの目は真剣そのもので一生懸命さがラグに伝わった。

ラグ「分かった、それじゃあ行くよ!」

タチマル「はい!」

ラグはそういつとデンラージになり・・・

ラグ「カリバー!」

カリバーをだして電気を流した。

サンダーズ「プラスマカリバーか」

アクア「ラグちゃん本気だね」

キノガツサ「当たり前だろ、強い相手だからこそ手加減抜きでやるんだ。じゃないと逆に相手に失礼だからな」

そして・・・

ラグ「いくよ、タチマル君!!」

タチマル「はい!!」

そういつとラグは勢いよくタチマルに接近した。

タチマル「は、速い!?!」

ラグ「はあああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

タチマルが目の前ラグを認識したところにラグは技の準備をしていた。

タチマル「（間に合え！！）“シエルブレード”！！」

タチマルがかるうじて“シエルブレード”を使いラグの攻撃を止めようとした。しかし・・・

ラグ「プラズマクラッシュ」

ラグはカリバーの電気をさらに強くしタチマルの“シエルブレード”にたたきつけた、すると“シエルブレード”は砕け散った。

タチマル「な・・・」

その勢いでタチマルは吹き飛ばされた。そんなタチマルをみて・・・

ミュウ「うん、試合終了、ラグの勝ちね」

こうしてラグは弟子（？）のタチマルとの勝負に勝利した。

それから数時間後タチマルは目を覚ましラグにお礼を言っていた。

タチマル「ししよー、ありがとうございました」

ラグ「いや、いいんだよ。それより怪我とかしなかった？」

タチマル「はい、大丈夫です。“シエルブレード”もすぐに生成できました。それとオイラ、ししよー達が修行に行ってる間ミュウさんに修行してもらえることになりました」

ラグ「あ、そうなのミュウ？」

ミュウ「うん、彼直々のお願いでね、だから君たちが帰ってきたころはもっと強くなってるよ」

ラグ「そっか、それは楽しみでもあり怖いなあ」

ラグは苦笑いしながら言った。

タチマル「ししよーに皆さん、異世界でもがんばってくださいね」

ラグ「うん、タチマル君も頑張ってね」

アクア「無理して体壊しちゃダメだよ」

タチマル「はい」

ミュウ「そろそろいいかい？」

ラグ「うん」

ラグが返事をする。ミュウは“テレポート”でラグたちを送り始めた。

ミュウ「気をつけてね」

ラグ「うん、いってきます」

ラグ達は“テレポート”の光に包まれた。こうしてラグたちチームは異世界へと旅立った。

第五十九話 ちよいとバトル？ ラグの弟子？（後書き）

ということでラグの弟子の登場です。

タチマル「オイラフタチマルのタチマルです。ししよーの一番弟子です。」

ラグ「ちょっとストップ！僕弱いのになんて持っていないの!？」

いいんです、はい。

ラグ「いいんだ・・・」

タチマル「ししよー、オイラししよー達が異世界に行ってる間頑張ります。」

ラグ「うん、僕達も頑張るよ。」

これぞ師弟だね（笑）

ラグ「さて次回は・・・」

そう、いよいよ異世界です。

タチマル「どこに行かれるんですか？」

それは秘密。でも他の作者さんとコラボってわけじゃないよ。

タチマル「つまり作者さんの作った独自の世界ってことですか？」

いやそれは違うよ。ちゃんとテレビにも出てきているよ。

ラグ「テレビに！？じゃあみんな知ってるよね？」

うーんどうだろう。まあ僕は今年の1月1日に知っただけ。

ラグ「まあ次回に期待しようっと。」

第六十話 ニジはどニジっそう 市(前書き)

さていよいよ異世界です。

ラゲ「どニジに行くの？」

さあ？それは本編で。

第六十話 ここはどこ？そう 市

ミュウに異世界に飛ばしてもらったラグ達チーム絆は無事にその世界にきていた。しかし・・・

ラグ「ねえねえ。」

サンダース「ん？」

ポリズ「どうかしましたか？」

急にラグがねえねえといったのでみんなラグの方をみた。

ラグ「あのさ、ここってさ、どこー！？」

そう、ラグ達は無事に着いたのは良かったがどこなのかがやはり分からなかった。

サンダース「どこーって言われてもなあ。ポリズ、分かるか？」

ポリズ「残念ですが分かりませんね。」

サンダース「うーん。」

頼みの綱のポリズすらここがどこか分からないと言う。

アクア「とりあえず広がってるのは……」
キノ「家がおおいですね。」

ハスポー「学校みたいな建物もあるよ。」
ポリズ「ん〜とりあえずここは町ですかね。」

ポリズはあたりの風景から大体の予想をした。

ラグ「とりあえず“ライトニングウイング”でとんでみようかな……」

ラグがそう言ったその時

キノガツサ「おい、誰か来るぞ！」
キノ「え……」

ラグ達の方に足音が聞こえた。

ポリズ「見つかったらマズいですね……ラグー!!」
ラグ「うん。」

ラグはそういうと“ライトニングウイング”を発動、羽ばたかせた。

そして・・・

「あれ、おかしいなあ。今なんか聞こえたんだけど・・・まあいいか。」

来た人が不思議に思ったようだが帰っていった。ラグ達は・・・

ポリズ「ふう、なんとかセーフでしたね。」

ハスボー「危なかったあ。」

アクア「でもまさか“ライトニングウイング”でみんな一緒に飛ぶなんてね。」

ラグ「まあ仕方ないよ。方法がこれしかなかったんだし。」

そう、今はラグが“ライトニングウイング”で飛んでみんなは手をつないで全員で上空にいる状態だった。

ラグ「でもこれからどうする？」

ポリズ「誰かこの世界で協力してくれる人を探さないといけませんねえ。」

その時何かが光った。

ハスボー「ねえみんな、今なんか光ったよ。」

アクア「え・・・どっち？」

キノ「私もみました。あつちの山のほうです。」

ポリズ「ラグ、お願いします。」

ラグ「うん。」

ラグ達はその山の方に飛んでいった。

ラグ「ここらへんでいい？」

ポリズ「はい、大丈夫です。」

ラグ達は山に着地した。

キノ「いい緑が広がってますね。」

キノガツサ「確かにな。エルビストをおもいだすぜ。」

ポリズ「それにしても光つたのは何だったんでしょうね。」

ハスボー「うん、なんかピンクの光だったけど・・・」

ラグ「あゝ!？」

サンダース「ん？」

ラグの突然のさげびにメンバーはラグのところに集まった。

サンダース「どうしたんだ、ラグ？」

ラグ「うん、ほらこれ。」

ラグがみせたのは緑色と茶色と炎とは違う赤色に光る玉だった。

ハスボー「なにそれ？」

キノガツサ「あゝ!？」

ポリズ「ど、どうしたんですか、キノガツサ？」

ポリズはキノガツサの突然のさげびに驚きながら言った。

キノガツサ「それあれだよな、ラッシュ達のとこで見つけたカリバ
ーのパワーアップアイテム。」

ラグ「そうだよ、これは草と地面と格闘かな。」

ポリズ「よかったですね、ラグ。」

ラグは宝玉をとりあえずカリバーに吸収した。
そこへ・・・

????「なんか音がしたけど誰かいるのかな？」

キノガツサ「ま、マズい。誰か来たぞ。」

ポリズ「もう隠れられませんか。」

ハスボー「どうしよう。」

なんとかならないかと慌てていると・・・

・・・

ポリズ「・・・というわけです。」

少女「なるほど・・・」

落ち着いた少女にポリズが自分たちのことを説明、少女は理解したようだ。

ラグ「ところでずっと聞きたかったんだけど・・・」

少女「ん？」

サンダース「何をだ、ラグ？」

ラグは深呼吸して聞いた。

ラグ「もしかして、なのはさん？」

少女「え、なんで私の名前を・・・」

ラグ「やっぱリーー!!」

ラグは嬉しそうに言った。

ラグ「他の世界でああなたのテレビがあってそれを見てたんでもしかしてとおもったんだ。やっぱりなのはさんだったんだ。ねえねえ、

レイジンググハート持ってる？」
なのは「え、うん。」

そういうとなのはは待機状態の丸い赤色の宝石となっているレイジンググハートを取り出し起動させる。
するとさっきまで丸い宝石だったレイジンググハートは光に包まれた杖となった。

ラグ「わく、すごい。」

ラグは本物のレイジンググハートをみて喜んでいた。

なのは「レイジンググハートのことも知ってるんだ。」

ラグ「うん、テレビであつたんでね。」

レイジンググハート「ありがとうございます。」

ちなみに説明を入れるとこのレイジンググハートというのはなのはのデバイスで、デバイスというのはのはのような魔力をもつ魔導師が使用する機械で使用者が魔法を使う上で手助けしてくれるもの。
分かりにくい場合は「魔法少女リリカルなのは」をみてみてください。
い。

なのは「っと、自己紹介がまだだったね。私「高町なのは」」
ラグ「えっと僕はラグラーズのラグっています。」

アクア「私はシャワーズのアクア。」

サンダース「俺はサンダース。」

キノガッサ「俺は世界一カッコいいキノガッサ様だ・・・ぐふっ！？」

キノ「キノガッサのキノです。」

ポリZ「ポリゴンZのポリZです。」

ハスボー「ハスボーだよ。」

なのはの自己紹介にラグ達も自己紹介をした。

なのは「でもラグ君達は修行っていつてもどうやってするの?」「こい海鳴市じゃみんながいるから修行できないよ?」

ラグ「そうなんだよねえ。」

キノガッサ「どっか場所があればいいんだがなあ。」

キノガッサの発言になのははピンときた。

なのは「それならアースラならどう?」

ラグ「あ、なるほど。アースラか。」

キノガッサ「なんだ、アースラって?」

アースラがなんなのか分からないキノガッサは質問した。

ラグ「アースラっていうのは戦艦っていったらいいかな。」
キノガッサ「なるほど。」

正確に言えばアースラは戦艦のようなもので移動基地と考えてもいいかもしれない。

ラグ「じゃあなのはさん、アースラに連れていってもらっていい？」
なのは「もちろん。アースラの人に連絡するからちよつとまっててね。」

こうしてラグ達はアースラという戦艦で修行することになった。

説明

世界観

なのは達の世界のお話では自分の魔力というエネルギーを^{チームなど}変換して魔法にかえています。ただし魔力を持っている人はあまりおらず、みんなが使えるわけではありません。

魔力を消費して発動される現象（wikiより）

デバイス

なのは達魔導師が一人でも魔法は使えますが時間がかかったりします。そこで「デバイス」という機械を使って魔法発動の手助けをしてもらっています。

レイジングハートはその「デバイス」の一種です。

このデバイスは魔法を使うたもの杖でもありますが、武器になるも

のもあります。
またしゃべることもできます

魔導師が魔法の使用の補助として用いる機械（wikiより）。

アースラ

説明しにくいですが簡単に言えば移動基地です。警察のような組織
「時空管理局」の基地の一つなのですが、簡単に言えば各県にある
警察署のようなものです。

イメージは戦艦をイメージしていただければいいです。

第六十話 ここはどこ？そう 市（後書き）

レイジングハートとかのしゃべりかたは日本語にしました。英語だと分かりにくいので。

キノガッサ「確かにな。にしても作者、なんでリリカルなのはなんだ？」

好きだから（笑）

キノガッサ「!？」

それになのは色んな人にしてほしいしね。

キノガッサ「なるほどな。」

分からないことはメッセージが感想に書いて下さい、できる限り説明します。

第六十一話 修行・・・の前のバトル（前書き）

さて修行・・・の前にバトルです。

ラグ「誰と？」

それは秘密

第六十一話 修行・・・前のバトル

異世界で出会ったなのはに頼んで戦艦「アースラ」に来たラグたち。今は艦長であるリンディに事情を話していた。

なのは「・・・らしいんですよ。」

リンディ「あら〜大変ね〜。いいわ、アースラで修行させてあげる。

「
ラグ「ありがとうございます。」

リンディはラグたちに事情に納得したらしくOKを出してくれた。

特訓場

ラグ「わあ、広いー!!」

キノガツサ「俺のジムよりデカイな・・・」

その大きさは広く、ラグたちの声が響くほどだった。

サンダース「ここで修行か・・・」

なのは「うん、ここでするんだけど・・・」

サンダーズの発言になのははレイジングハートを起動させてバリアジャケット（防具服）を装備した。

なのは「先に私たちとバトルしてもらおうかな。」

キノガッサ「バトルだと!？」

なのは「うん、ねえフェイトちゃん?」

なのはがそういつとどこからともなく一人の少女が現れた。

ポリズ「あなたは・・・」

ラグ「フェイトさん!？」

現れたのは金髪に黒い死神をイメージさせるバリアジャケットをきて、手にはなのはと同じようにデバイスをもった少女だった。

フェイト「うん、私の「バルディッシュ」もメンテしてもらったから調子を見るためにバトルしたかったんだ。それに・・・」

そういつとフェイトはラグ達の近くまで歩いてきた。

フェイト「君たちがここで修行するひとたちだね?」

ハスボー「うん、そうだよ。」

ハスボアの答えにフェイトはにっこり笑った。

フェイト「私はフェイト・テストロッサ・ハラウンっていいいます。フェイトって呼んでね。それでね、バトル・・・してもらえないかな？君たちがどれくらいのレベルかも知りたいし。」

フェイトの言葉にラグはメンバーに目を合わせてバトルしてもいいか問うとメンバーはコクリと頷いた。

ラグ「いいですよ、バトルしましょう。」

フェイト「じゃあ決まりだね。」

サンダース「でも誰がバトルするんだ？そっちは二人だし・・・」

サンダースの問いに二人は「うん」と考えた。がすぐに結論はでた。

なのは「ラグ君達の仲間の人から二人を選んで私達と戦うっていうのはどう？」

ラグ「さんせうい。」

なのはの提案にラグ達は賛成し誰が戦うかを話し合った結果・・・

ラグ「僕と・・・」

キノガッサ「俺だな。」

ラグとキノガッサに決まった。

なのは「じゃあキノガッサ君は私と、ラグ君はフェイトちゃんとバトルね。」

キノガッサ「おっしゃ、どんとこい!!」

それから二組はバトルする位置についた。

なのは「それじゃあいくよ!レディ・・・ゴォー!!」

なのはの合図でバトルは始まった。

なのはVSキノガッサ

キノガッサ「いくぜ“きあいパンチ”」

キノガッサは自身の拳を伸ばしてなぐりつけようとした。

なのは「それならレイジングハート！」
レイジングハート「プロテクションパワード！」

なのはのデバイス「レイジングハート」は主のためにバリアを生成、
攻撃はあっけなく防がれた。

キノガッサ「あのバリアかてえな。」
なのは「次いくよ、アクセルシューター」
レイジングハート「アクセルシューター」
なのは「シュート！」

なのはは反撃に出ようと自身の周りにピンクの魔力弾を作り出した。
すると魔力弾はなのはの指示でキノガッサに向かって飛んで行った。

キノガッサ「こんなもん・・・“エナジーボール”」

キノガッサはアクセルシューターを撃ち落とそうとシューターに“
エナジーボール”を放った。しかし魔力弾はそれをよけてキノガッ
サに向かってきた。

キノガッサ「コントロールだと!？」
なのは「残念だったね、アクセルシューターは私の意志で操れるん
だよ。」

そんなやりとりの中キノガツサにシューターが接近していた。

キノガツサ「それなら“アースグラビティ”」

キノガツサが自然の力を呼び出すと重量は強くなりシューターは地面にたたきけた。

なのは「ふえ……すごい。」

キノガツサ「だろ？どうだ、レベルはマックスくらい……」

なのは「でも……」

レイジングハート「シューティングモード」

なのはに誉められたキノガツサは嬉しそうに笑いながらしゃべった。その時なのはから何かを感じたレイジングハートが形を変えた。

なのは「久しぶりに撃っても大丈夫そうな人だね。」

レイジングハート「そうですね、マスター。わたしはいつでも撃てますよ。」

レイジングハートからいつでも撃てると聞いたなのははキノガツサに向けてレイジングハートを構えた。

なのは「キノガッサ君、いくよ。」
キノガッサ「おう、こい！」

なのははキノガッサの了解を得るとレイジングハートの先端にエネルギーを集めた。

キノガッサ「な、なんだありゃ……。」
レイジングハート「デイベイン……。」
なのは「バスター!!!」

キノガッサが集まるエネルギーに驚いているとなのははデイベインバスターというエネルギーのビームを発射した。

キノガッサ「な、なんだと〜!?!」

キノガッサはその巨大なビームに飲み込まれた。

プシュー

レイジングハートは機体の中に残った熱や魔力を逃がすため煙をだした。

そしてなのは達の目の前には……

キノガッサ「な、な、な・・・」

キノガッサが倒れていた。

なのは「ちょっとやりすぎちゃったね。」
レイジングハート「すいません、マスター。」

なのはVSキノガッサ
結果なのは>キノガッサ

ラグVSフェイト

こちらは非常に白熱した接近戦になっていた。

フェイト「はあああああ！！」
ラグ「ぐっ！？」

フェイトは斧の形をしたデバイスのバルディッシュを鎌型にした上でラグを切りつけようとする。

（この場合刃は魔力でつくったもので実際に切るわけではなくあくまでダメージを与えるだけです。）
しかしラグもカリバーでそれを防ぐ。

二人はお互いをはじめて一度離れた。

フェイト「バルディッシュ!!」

バルディッシュ「プラズマランサー」

フェイトの声にバルディッシュは答えてフェイトの周りに電気の球体を発生させる。

ラグ「!?」ハイドロステインガー”

ラグも対抗して”ハイドロステインガー”を発動、ラグの周りに水の短剣が複数現れた。

フェイト「ファイア!!」

ラグ「ゴー!!」

二人は同時にそれぞれの用意した技を発射。フェイトの電気の球体「プラズマランサー」は小型の槍となりラグを襲う。それに対してラグの「ハイドロステインガー」は短剣の形を保ったままフェイトに向かった。

しかし二つの技はぶつかり合い相殺してしまった。

フェイト「なるほど、強いね。」

ラグ「フェイトさんだつて・・・」

フェイト「それじゃあ私も本気でいくよ。バルディッシュ！」
バルディッシュ「ザンバーフォーム！」

バルディッシュはフェイトからの指示を受けるとカートリッジとよばれるエネルギーを詰めた弾丸をロードし、そのエネルギーで大剣へと変化した。

ラグ「あれが大剣バルディッシュザンバー・・・」
フェイト「さて、まだだよ。ソニックフォーム！」
バルディッシュ「ソニックドライブ！」

突然フェイトの体が光に包まれた。数秒後、フェイトはバリアジャケットをかえており、さっきのより若干薄くなっていた。

フェイト「バリアジャケットを薄くしたから今までより速く動けるよ。」
ラグ「僕だつて！」

次の瞬間ラグはデンライジへと変化した。

フェイト「へえ、ラグも姿を変えられるんだ。」
ラグ「まあね。」

ラグはそういいながらカリバーを構えた。

ラグ「（フェイトさんの強さはそのスピード……いつでも油断出
来ないなあ……）」

フェイト「（隙があまりない……いい構えをしてる……でもあ
くまで「あまりない」だからね……）」いくよ!」

その瞬間ラグの目の前からフェイトは消えた。

ラグ「えっ……一体どこに……。」

フェイト「そこっ!」

ラグ「!?!」

ラグは驚き、声のした場所にカリバーを振った。
しかしそこにフェイトはいなかった。

ラグ「くっ」フェイント”か

フェイト「ここだね」

ラグ「!?!」

ラグが”フェイント”と気付いた時にはすでにフェイトはラグの背
後におり、バルディッシュを構えていた。

ラグ「いくらなんでも速すぎ・・・」
フェイト「撃ち抜け雷神!!!」
バルディッシュ「ジエツトザンバー」

フェイトは叫ぶと同時にバルディッシュに魔力を注ぎ込みバルディッシュもカートリッジをロード、するとバルディッシュザンバーの剣は光を増して巨大化、そのままラグを切った。
(なんともいいいますがこれは魔力で切っただけなのでダメージしかありません。)

ラグ「うわああああああああああ」

ラグはそのまま倒れた。
バルディッシュは残った魔力と熱を出すため排出口を開け「プシューシュー」と音を立てて元の斧の姿に戻った。

フェイト「なかなか強かったよ。ねえバルディッシュ?」
バルディッシュ「イエスサー、見込みがありますね」

こうしてフェイトとラグとなった。

第六十一話 修行・・・の前のバトル（後書き）

ラグ「ちよつと、フェイトさん強すぎ!!」

キノガツサ「なのも問題だろ!？」

まあそれは仕方ない。

ラグ「そうなんだ・・・」

キノガツサ「ていうかフォックのここでの修行の成果は？」

それはまだだよ。せつかく考えてくれたのに・・・まだ保存しとか
なきやね。

キノガツサ「感謝はしてるみたいだな」

そりゃね。

第六十二話 修行開始（前書き）

さあいよいよ修行開始です。

ラグ「バトル？」

いや計画だけ。

ラグ「なあ〜んだ」

第六十二話 修行開始

なのはVSキノガッサ、ラグVSフェイトが終わり数時間後、今は夜だ。

なのは「それにしてもキノガッサ君って強いね〜。『きあいパンチ』を防いだとき私のプロテクションが揺れたし。」
フェイト「ラグも姿が変わっちゃって・・・ビックリしたよ。」

なのはとフェイトの魔導師ペアはラグ達と戦った感想を述べていた。笑顔ではあるものの二人の声のトーンから嘘ではなくホントに強いと感じたらしい。しかし

ラグ「なのはさん達の方が強いよ。僕フェイトさんのスピードに全くついていってなかったし。」
キノガッサ「俺もディバインバスターとかいうビームで一撃だったぜ。」

こちらの二人も本当にそう思ったらしく苦笑いしていた。

サンダース「そういえば二人のレベルはどうだったんだ？」
なのは「あ、レベル？今エイミーさんが結果を出してるころだと思っよ。」

なのはが笑顔で答えるとキノは不思議そうに

キノ「あの、すみません。そのエイミィさんって誰なんですか？」
フェイト「エイミィはこのアースラのコンピューターを扱う人なんだ。」

なのは「それと同時にクロノ君の補助する人でもあるんだよ。」

なのはの説明にメンバーは首を傾げた。

ポリズ「クロノ？」

ハスボー「それって誰？」

なのは「あ、クロノ君はね・・・」

なのはが説明しようとするどドアが開き青髪の少年が現れた。

なのは「あ、クロノ君、ちょうどいいところに来たね。」

クロノ「それはどういう・・・」

一人で混乱するクロノに横で聞いていたフェイトが説明をした。

フェイト「今クロノ君の説明をしようとしていたところだったんだ。」

クロノ「なるほどな。」

クロノは了解したらしく落ち着いた顔でラグ達に近づいた。

クロノ「僕はこの船の執務管という役職をやっているクロノ・ハラオウンだ。君たちのことは館長から聞いている。」

ハスボー「館長？」

フェイト「さっきのリンディ提督のことだよ。」

ハスボー「なるほど」

なのは「ちなみにクロノ君とリンディさんは親子ね。」

クロノ「・・・話を戻してもいいか？」

クロノの言葉になのは達は「あっ・・・」という顔をしながら頷いた。

クロノ「修行をしたいそうだが、どうやって修行するんだ？」

クロノの純粋な質問にメンバー達は困った表情をする。

クロノ「やっぱりな、そんなことだろうと思って応援を呼んでおい
た。」

キノ「応援・・・ですか？」

クロノ「ああ、そろそろ・・・」

その瞬間に何かのアラームのような音がした。

クロノ「来たみたいだな。」

クロノが改めてドアをあけるとそこには何人かの人がいた。

クロノ「やあ、案外早かったんだな、はやて。」

クロノにはやてと呼ばれたのは達と同じ年ぐらいかと思われる少女は少し頬を膨らましながら言った。

はやて「まったく、クロノ君が急いで来いゆうーからきたゆうーの……クロノ君はのんきやなあ。どんくさい!!」

はやてが文句を言うその後ろの大人達も文句を言った。

????「主ははやてのおっしやる通りだ。」

????「ご近所の皆さんとお話し中だったんですよ。」

????「あたしもじーちゃん達とゲートボールやってたんだぞ。」

????「……クロノ……。」

一人は「クロノ」としか言わなかったものの威圧感のある言い方だ

った。

クロノ「いやすまない。だが緊急だったんだ。許してくれ。」

はやて「緊急？何があったん？」

クロノ「実はな・・・」

クロノははやて達にラグ達のことを説明し、はやて達はじたいを理解した。

はやて「でもなんで私らなん？」

クロノ「君達が適任だと思ったんだよ。教える先生はレベルが高い方がいいだろ？」

クロノの言葉にははやて達は少し照れていた。

そして・・・

はやて「よ、よっしゃ。それなら協力しよか！」

クロノ「そうか、助かるよ。シグナムやヴィータにシャマル、ザフィーラは？」

クロノははやての後ろにいた大人達に聞いた。

シグナム、と呼ばれた身長が高くピンクの髪の毛の目するどい女性は

・
・

シグナム「もちろん協力しよう。主はやてがおっしゃるのだからな。」

と答え、ヴィータと呼ばれた赤髪のこれまた目のするどいはやてあまり歳の変わらなそうな子は……

ヴィータ「はやてがやるならあたしもやる!!」

と答え、シヤマルと呼ばれた金髪に優しげな瞳を持った女性は……

シヤマル「はやてちゃんだけに押しつけるわけないじゃないですか！私も協力します。」

クロノ「そうか、ありがとう。ザフィーラは……」
ザフィーラ「心得た。」

クロノが最後に青い狼に聞こうとすると言い終わる前に返事はかえってきた。

クロノ「……まあ頼もしい限りだ。」

シグナム「だがクロノ執務管、一体誰が誰に教えるのだ？」

シヤマル「そうですね。それを決めないと……」

クロノ「それなら安心してくれ、大丈夫だ。」

クロノの言葉に一回は静まった。
そして

ラグ「それってどういうこと？」

ラグの質問に答えるべくクロノは指をパチンとならす。するとモニターが現れたて女性がうっていた。

クロノ「エイミー、モニターにあれを。」
エイミー「はいな。」

クロノにエイミーと呼ばれた女性はカタカタとキーボードを打った。するとクロノの前にもう一つモニターが現れた。

クロノ「これはラグ達の戦闘からそれぞれの戦闘タイプを表したものだ。」
サンダース「おい、俺達のデータはいつ？ここでバトルはラグとキノガッサしかしていないはずだが・・・」
クロノ「ラグのもっている剣からデータをとったんだ。」
サンダース「カリバーからだと!？」

なんとただの技で出した剣からデータをとったと聞いて驚きを隠せないサンダース達。そんな中ポリズがさらに質問をする。

ポリズ「これはただの技で出した剣ですよ？ホントにそんなデータが？」

クロノ「だがあったぞ。」

クロノの平然とした答えにポリズは改めて驚いた。

ラグ「カリバー……」

ラグはカリバーを見つめながら名をよんだ。

クロノ「ま、まあとにかく話しを戻すぞ。そのカリバーからとったデータでそれぞれの情報をしっただんだ。」

キノ「そのデータを参考に誰と誰が修行をするかを決めるってことですか？」

エイミィ「そゆことー！」

クロノやエイミィの考えに納得したメンバー（数名はわからなかった。）は理解した。

キノガツサ「それで、相手はだれだ？」

クロノ「まあ、落ち着いてくれ。修行のメンバーは……」

クロノが読み上げる瞬間周りは落ち着きを取り戻した。

クロノ「まずシールドどうしということではファイラとハスボー。」

クロノ「次に回復ということでシャマルとキノ。」

クロノ「高速ということでサンダースとフェイト。」

クロノ「遠隔操作ということでアクアとなのは。」

クロノ「破壊でキノガツサとヴィータ。」

クロノ「ビーム系ということでポリズとはやて。」

クロノ「そして剣ということでラグとシグナムだ。」

クロノの長い説明だったがメンバーは了解した。

こうして修行が始まる。

第六十二話 修行開始（後書き）

ラグ「ちよつと僕シグナムさんと!？」

そっだよ。

シグナム「ラグだったな。しっかり鍛えるからな。」

ラグ「か、体もつかない・・・」

第六十三話 ラグの修行 VS 烈火の将 シグナム（前書き）

さて、まずはラグの修行です。

ラグ「シグナムさんと戦うの？」

イエス

ラグ「無事に帰ってこれるかな・・・（汗）」

第六十三話 ラグの修行 VS 烈火の将 シグナム

シグナムに鍛えてもらうことになったラグ。今は練習場にいた。

ラグ「シグナムさん・・・」

シグナム「ん？」

ラグ「あの・・・修行したいんですけど・・・」

シグナム「ふむ、私も修行をしたいのだが、あいにくそういうがらではないのでな、どうしたらいいかわからんだ」

ラグ「なるほど・・・」

もともと人にものを教えるというのが慣れてないシグナムはラグにどうすればいいか困っていた。

そこに・・・

エイミィ「おーい、ラグ君、シグナム」

ラグ「え、エイミィさん？」

エイミィが現れた。

シグナム「どうされたんですか？」エイミィ「いやね、ラグ君の力リバーがあんまり高性能だから見てみたくなってね。ラグ君力リバー貸してもらえないかな？」

ラグ「いいですよ、どうぞ」

ラグはカリバーをだしてエイミィに渡した。

エイミィ「ありがとね。」

ラグ「ところでエイミィさん？」

エイミィ「はいな？」

帰ろうとしたところを止められたエイミィは振り返って返事をした。

ラグ「修行つてどんなことやると思います？」

エイミィ「うん、そうだなあ・・・やっぱり戦うのが一番じゃない？」

ラグ「そうなりますかね？」

エイミィ「だって実演はいろんなことがわかるからねえ、特に剣闘士の戦いならね。」

ラグ「そうか・・・あ、ありがとうございました。」

エイミィ「うん、修行がんばってね」

そっぴいながらエイミィは外に出た。

ラグ「シグナムさん、バトルしましょう」

シグナム「確かに剣士の戦いは戦うことによってより高い完成度となるからな。いいだろう。」

こうして二人は互いに立ち位置に立った。

シグナム「先攻はラグからだ。」

ラグ「分かりました、それじゃあ・・・あ！」

シグナム「ん、どうした？」

突然のラグの言葉にシグナムは疑問を浮かべた。

ラグ「エイミイさんにカリバー・・・渡しちゃいました・・・。」

シグナム「ふむ、では仕方ない。何か変わりになるものを・・・ん、これでいい。」

シグナムはそこにあつた鉄パイプをラグに渡した。

ラグ「これですか・・・って重い!？」

シグナム「質量が50キロと書いてあるからな。」

ラグ「50キロ!？」

シグナムは平然と落ちていた紙を見て質量を言つが、50キロと聞いてラグは焦った。

ラグ「まさか・・・」

シグナム「まあそれぐらいでいいだろう。さあ試合を始めるぞ。」

ラグは渋々フィールドに入りバトルはスタートした。

ラグ「てやあああああ！！」

ラグは走ってシグナムの目の前まできてパイプを横に振った。しかしそれはシグナムのデバイスであり愛剣「レヴァンティン」に防がれた。

一度ラグはシグナムから離れた。

シグナム「さすが、パワーはあるな。」

ラグ「ラグラージですからね。」

シグナム「ふっ、では少しレベルをあげるか、レヴァンティン！！」
レヴァンティン「ヤー、シュランゲフォーム！」

シグナムがレヴァンティンと呼ぶとレヴァンティンは返事をした。その瞬間レヴァンティンの剣本体が分離した。しかしよくみると一本のワイヤーのようなもので繋がっていた。

ラグ「シュランゲ！？」

シグナム「そうだ、お前なら分かるだろう。」

ラグ「もちろん。自由に伸び縮みするシュランゲは近距離戦の範囲

を制圧が得意で、もちろん刃に当たればダメージをくらう。」
シグナム「まあそんなとこだ。」

つまり近距離戦のできる範囲でならシグナムの意思で自由に剣を伸ばせるので、その結果相手を制圧できる、というわけである。

シグナム「さあ、これをどう破る？」

ラグ「もちろん離れて戦うまでだよー！」

その瞬間ラグは後ろにジャンプし距離をとった。近距離戦なら得意なシュランゲだが刃の届かない場所までくれば問題ない。

ラグ「そして”ウォーターソリューション”」

ラグはある程度離れると攻撃これで完璧なはずだった。しかし

シグナム「あまいな。」

ラグ「!?!」

なんと”ウォーターソリューション”はシュランゲに触れてそのまま蒸発してしまった。

ラグ「そうか、「変換資質」……」
シグナム「そうだ」

変換資質、それは自身の魔力を電気や炎、氷に変えることができる能力だ。シグナムは魔力を炎に変える能力をもっているため、それを使ってシュランゲに炎をまとわせて、攻撃を防いだ。

シグナム「さあ、どうする？」

ラグ「仕方ないかな……デンラージ!!」

ラグはデンラージになり一気にパワーアップ、電気があふれんばかりにバチバチとおとをたてていた。

シグナム「それがデンラージか……」

ラグ「行くよ!!」

そついうとラグはシグナムに高速で接近した。

シグナム「無駄だ、レヴァンティン!!」

レヴァンティン「ヤー!!」

シグナムはシュランゲで動きを封じようとラグを攻撃した。

ラグ「ライトニングウイング」

しかしラグは”ライトニングウイング”を使い自分を防御、シユラ
ングをはじいた。

シグナム「なに!？」

ラグ「このまま一気に・・・」

シグナムに攻撃しようとしたが・・・

ラグ「まさか、あれは!？」

シグナム「ふっ、そろそろ終わりだ。」

レヴァンティン「ボーゲンフォーム!！」

ラグが目の前をみるとレヴァンティンはすでにシユラングではなく
なっていた。

レヴァンティンと鞘が合体した弓「ボーゲンフォーム」になっ
ていた。

シグナム「(まさか私がこれを使うとはな。ラグ・・・なかなか伸
びそうだ。)(このレヴァンティンの弓の姿ボーゲンフォームは知っ
ているだろう。)」

ラグ「はい、でもその攻撃は命中率が低いんじゃない……」

シグナムの問いにラグは一度止まり話した。

シグナム「確かにその通りだ、しかし一度動きを封じればあたる確率は増える。……いくぞ!!」

ラグ「なんだかよくわかんないけど……はい!!」
レヴァンティン「シユツルムファルケン!!」

刹那レヴァンティンからは矢が放たれラグのほうへきた。

ラグ「避ければいい!!」

ラグは勢いよく右に避けた。しかし

ラグ「う、うわあああ!?!」

矢が地面に命中し爆発、その衝撃でラグは吹きっ飛ばされた。そしてそのまま地面に転がった。

ラグ「いたたたた……って、えー！?!」

ラグが気付くと少し離れた場所でシグナムはまたファルケンを構えていた。

ラグ「そんな連続で・・・」

シグナム「連続？それは違うぞ。」

ラグ「え？」

シグナム「さっきのファルケンはおとりだ。だからパワーを抑えた。」

ラグ「抑えたってあれで!?!」

ラグがさっきファルケンのあたった場所をみると少しクレーターができていた。

シグナム「これが本物だ。」

ラグ「え、え、うそ!?!」

シグナム「駆けよ、隼!?!」

シグナムが言うとレヴァンティンがカートリッジをロードした。

レヴァンティン「シュツルムファルケン!?!」

レヴァンティンからは魔力で作られた矢が放たれラグに一直線で飛んで行った。

そしてすさまじい爆発音とともに爆煙が発生ししばらくあたりは見えなかった。

レヴァンティンは機体内に残った熱を出した。

シグナム「ごくろうだったな、レヴァンティン。」

そういつとシグナムなレヴァンティンと鞘を分離させ鞘にレヴァンティンを収めた。

煙が晴れるとラグは目を回して倒れていた。

シグナム「それにしてもパイプでここまで戦うとは・・・こいつならファルケンや私の剣術を教えられるかもしれんな。」

シグナムは独り言を言った。ラグには期待できる、まだまだ可能性がある、そんな思いを込めてだ。

煙が晴れるとラグは目を回して倒れていた。

第六十三話 ラグの修行 VS 烈火の将 シグナム（後書き）

シグナム「ふむ、ラグはなかなか強いな。」

そうですか？シグナムさん。

シグナム「ああ、剣ではなくパイプであそこまで……力はあるな。」

というかシグナムさんはポケモンしてますか？

シグナム「まあな、主はやてがされていたからな。私もやってみた。」

現役ですか？

シグナム「もちろんだ、 이슈ユになつてさらに数も増えたからな。特に”シエルブレード”が追加されたのは喜ばしいことだ。」

ブレード
剣だからか……。

第六十四話 アクアの修行 Withなのは(前書き)

さて次はアクアです

アクア「なのはさんとだよね？」

そうだよ

アクア「強くなるために頑張らなきゃ!!」

第六十四話 アクアの修行 Withなのは

クロノが修行相手を決めてから1時間後、アクアとなのはは暗い個室にいた。

アクア「なのはさん、ここで何をやるんですか？」

なのは「とりあえずなのはでいいよ、あと敬語もいらないよ。別に偉いわけでもないしね。」

アクア「あ、はい・・・じゃない、うん。」

するとなのはは嬉しそうに笑った。

なのは「さて、さっきの質問の答えだけど、遠隔操作には集中力が大事なの。だからここでそれを鍛えてもらうよ。」

アクア「でもどうやって・・・」

アクアがどうやってやるのかを聞こうとするとなのはの周りにピンクの魔力弾が現れた。

アクア「これってキノガッサ戦で使ってた・・・」

なのは「うん、アクセルシューターっていうんだよ。それで修行はね・・・」

その瞬間シューターは光った。

なのは「今からアクアちゃんに目をつぶってもらってシューターの数をあててもらうんだ。」

アクア「目をつぶって!?!」

なのは「そうだよ。」

なのは平然と言うが実際目をつぶってあてるといふことは特殊なポケモンを除いてとても難しい。

アクア「できるかな・・・」

なのは「とりあえずやってみようよ。」

そういつとなのは一度アクセルシューターを消した。

なのは「いくよ」

アクア「うん」

アクアが目をつぶるとなのはアクセルシューターをだした。

なのは「さて、何個?」

アクア「うん・・・これってコツとかない?」

アクアは目をつぶり、難しい顔でなのはに聞いた。

なのは「自分の周囲にまずエネルギーを感じて。意識を集中させるの。頭を真っ白にして。そしたら見えてくるはずだよ」
アクア「分かった!!」

アクアは一度深呼吸してリラックスし、意識を集中させた。頭の中は真っ白だ。
するとなにか光るものが見えた。

アクア「見えた!!1つ・・・2つ・・・3つ・・・3つ!!」

光が見えたアクアは目を開きなのはに数を報告した。
するとなのはは笑顔になった。

なのは「正解だよ、アクアちゃんやっぱりすごい!」
アクア「えへへへ」

アクアもやり遂げたようで非常ににこやかだった。

なのは「じゃあ次いくよ」

アクア「うん」

これでやる気がより高くなったアクアは元気に返事をした。

なのは「次は私のアクセルシューターを避けてもらうよ、目をつぶってね」

アクア「え、それはいくらなんでも・・・」

なのは「大丈夫、最初はとってもゆっくりするから」

驚きの表情で答えたアクアだったがなのはの修行ということでしょう。しづやりことになった。

なのは「いい、最初は数を1つにするから避けてね」

アクア「うん」

そういうとアクアは目を閉じ、なのははアクセルシューターを1つだした。

なのは「いくよ」

なのははゆっくりとアクセルシューターをアクアに近付けた。

アクア「シューターは・・・!?!」

アクアは何かを感じ取り、いきなり右へ移動した。

なのは「にやはは、できたね」

アクア「えっ・・・」

アクアはなにかと思い目を開けた。すると自分はシューターを避けていた。

アクア「避けれてる・・・?」

なのは「うん、できたんだよ」

笑顔で答えるなのはにアクアは少し戸惑っていた。

なのは「実はできると思ってたんだ、アクアちゃんなら」

アクア「なんで?」

なのは「だって目をつぶって数を当てるほうが難しいからね」

アクア「!?!」

まさかのなのはの発言にアクアは口をあけて驚いた。

なのは「だって自分の近くにきたシューターならまだもしくはも、自分から離れた場所にあるシューターまで探すって……ものすごい集中力だね」

アクア「あは、あはははは……」

ネタばらしをされたアクアは驚くしかなかった。

なのは「さてここまでできたら次は召喚のコントロールだよ」
アクア「うん」

こうしてアクアの修行は順調に進んだ。

第六十四話 アクアの修行 Withなのは(後書き)

ということであクアの修行はここまでです

アクア「こっからがコントロールの修行じゃないの!？」

まあそうなんだけど、それは秘密で

第六十五話 キノガツサの修行 カVSカ(前書き)

今回はキノガツサです。

キノガツサ「おい、ヴィータ殿しい・・・」

ヴィータ「なんてことねえ、ほら、いくぞ。」

キノガツサ「いきたくねえ」

キノガツサが押されてる・・・

第六十五話 キノガツサの修行 カVSカ

ヴィータ「アイゼン!!!」

アイゼン「ヤボー!!!ラケーテンフォルム」

ヴィータ「ラケーテン、うおおおおお」

ヴィータの呼びかけに彼女のハンマー型デバイス「グラーフアイゼン」は応答し形を変えた。

ハンマーの片方にジエツト、片方に鋭角のドリルのようなものがあらわれた。するとヴィータはそのジエツトで自身のスピードを加速させてあるポケモンに向かって行った。

ヴィータ「ハンマアアアアアア!!!」

キノガツサ「くっ」ストライクハンマー”だ”

対戦しているポケモン、キノガツサは自身の手に何らかのエネルギーで生成されたハンマーを振りヴィータに抵抗した。しかしヴィータのほうに威力が強く2、3秒で押し返されてしまった。

キノガツサ「くっ……ぐああああ」

キノガツサはその勢いでブツ飛ばされ後ろの壁に激突した。

キノガツサ「いてて・・・おいおいもつと痛くないようにしてくれよ」

キノガツサの言葉にヴィータはアイゼンを元のフォーム（小さいハンマー）にもどしながら言った。

ヴィータ「そんななんじゃ練習にならねえだろ？」

キノガツサ「で、でもこれ55回目だぜ？」

ヴィータの言葉にキノガツサは少し困っていた。しかし

ヴィータ「そんなことは分かってんだよ。問題はお前がいつになつたら耐えられるかってことだ。それまであたしはやるぞ。」

キノガツサ「ま、マジかよ・・・（汗）」

ヴィータ「ほら行くぞ！！」

キノガツサ「お、おお！！」

ヴィータはアイゼンをキノガツサに向けると攻撃の準備をした。するとキノガツサも立って構えた。

ヴィータ「ラケーテン・・・」

キノガツサ「くる！！」

ヴィータ「ハンマー！！」

キノガツサ「ごふっ!?!」

こんな感じでヴィータの特訓は続いた。

そして139回目

ヴィータ「ハンマー!!!」

キノガツサ「“ストライクハンマー”!!!」

二つのハンマーはすごい勢いでぶつかった。その場に凄まじい衝撃波が広がった。そして……

キノガツサ「や、やったー。ヴィータのハンマーを防いだぜー!!!」

そう、キノガツサはようやくヴィータのラケーテンハンマーを打ち消すことが出来たのだ。

ヴィータ「つたく、長いんだよ。ほらじゃあ今日の仕上げ行くぞ。」

キノガツサ「は!?!今日の仕上げ?」

ヴィータ「ああ、バトルだよ、バトル。」

キノガツサ「……はあー!?!」

ヴィータの発言にキノガツサはいったん間をおいて驚いた。

キノガツサ「な、なんでバトルなんだよ！？もうへ口へ口だぜ！？」
ヴィータ「だからこそだ、鍛えた技をその日のうちに完璧に習得するんだ。分かったら指定位置に行け！」
キノガツサ「はあ。」

キノガツサはしぶしぶ指定位置についた。

ヴィータ「そつちからだ。」
キノガツサ「ああ・・・！？」

やる気のないキノガツサがだったが指定位置について何かを感じた。

キノガツサ「（な、なんだ、この背筋の緊張感・・・それに体が浮く感じ・・・まさか・・・）」

そう思うとキノガツサはヴィータを見た。

キノガツサ「（そうか、この感じはヴィータから・・・アイツ、相当強いな。）」

そう思うとキノガツサは少しダルさが無くなった。

キノガツサ「（こんな強いやつと戦うなんてめっちゃ嬉しいことだからな。これはサボったらアウトだな。）」

そう思うとキノガツサは構えた。

ヴィータ「なんか練習するときより気合い入ったな。」

キノガツサ「そりゃな、強いやつと戦えるんなら力も出るぜ!」

ヴィータ「いい度胸してやがる・・・いくぞアイゼン!」

アイゼン「ヤボー!」

キノガツサ「きあいパンチ」

キノガツサは自身の伸びる腕を利用してヴィータに先制パンチした。しかしヴィータはアイゼンを振りかざし、キノガツサの手を思いっきり殴った。

キノガツサ「い、いつてー!?!」

ヴィータ「甘いんだよ。いくぞ!」

痛みがりながら腕をもどすキノガツサにヴィータは容赦なく攻撃しようとして突っ込んでくる。

キノガツサ「今度はこっちからつぶしてやる」ストライクハンマー
”!!”

キノガツサはヴィータに対抗するため”ストライクハンマー”を発動、2つのハンマーはぶつかり2人はいったん離れた。

ヴィータ「なかなかの威力だ、特訓の成果が出てるじゃねえか!!」
キノガツサ「相手はお前だからな、本気でいくぜ」

ハンマーを向けながら宣言するキノガツサに少しヴィータはほほ笑んだ。

ヴィータ「やつぱりお前はまだまだ伸びるな。」
キノガツサ「当たり前だ。伸びるため、強くなるために俺はこの世界にきたんだ。大切なものを守るようにな。」
ヴィータ「なるほどな。」

キノガツサの言葉にヴィータは少し前の自分を思い出した。

ヴィータ「あたしもはやてが魔道師になる前はそんなこと思ってたな・・・まあ今は一緒に戦う仲間だけど・・・」キノガツサ、ますます気に入った、もっと全力でこい!!」
キノガツサ「もちろんだ”つるぎのまい”」

キノガツサはその場で激しく踊り、自分の攻撃を上昇させる。

ヴィータ「強化技か・・・どれくらい強くなるんだ？」

そして”つるぎのまい”は終わった。

キノガッサ「いくぞ！」

ヴィータ「こい！」

キノガッサ「マッハパンチ」

キノガッサは高速でパンチするがヴィータはすべてシールドで受け流した。

ヴィータ「なんだよ、まだまだ甘いじゃねえか。」

キノガッサ「これからだ、これから！」

キノガッサは一度ヴィータから離れた。

ヴィータ「なんだよ、攻撃ラッシュも終わりか？」

キノガッサ「いや、まだ続いているぜ？」

ヴィータ「なに・・・！？」

ヴィータは自分の体の変化に気付いた。

ヴィータ「これは・・・」

キノガッサ「しびれごな」、ポケモンの技だ。お前らの魔法にはないだろ？」

ヴィータ「つまり・・・マヒか」

キノガッサ「な、なんで知ってたんだ!？」

ヴィータ「あたしははやくと一緒にはやて達と一緒にポケモンやってんだ、それぐらいは分かる。」

ヴィータの発言にキノガッサは驚きを隠せない、しかし自分の有利に変われないと判断した。

キノガッサ「でもこれでお前は動けないはずだ!」

ヴィータ「それも残念だったな。」

キノガッサ「なに!？」

キノガッサはまた驚いた。

キノガッサ「まさかだろ・・・」

ヴィータ「簡単だ、あたしが自分の周りに魔力を装備していればお前の”しびれごな”はそれについてあたしには当たらない。ただそれだけの話だ。」

キノガッサ「してやられたか・・・」

その時、ヴィータはアイゼンを構えてカートリッジをロードした。

ヴィータ「これがあたしのすべてだ。受けてみる!!」

キノガッサ「そいつはごめんだ、”リーフメガビックバン”!!」

キノガッサはジャンプしながら手にエネルギーをためた。

一方ヴィータはハンマーを巨大化させた。

ヴィータ「ギガントハンマー!!!」

大きくなったアイゼンをヴィータは振り回し、キノガッサにあてようとした。

キノガッサ「うおおおおおおお」

キノガッサも抵抗しようともっと勢いを強めた。が当たった瞬間にギガントの威力を感じた。

キノガッサ「さすが強いな、だけど・・・」はああああああ

キノガッサは頑張った、しかし少しずつ押された。

キノガツサ「くそ・・・」

ヴィータ「貫けー!!」

アイゼン「ヤボー!!」

ヴィータはアイゼンに命令した。するとアイゼンは返事をして、もつと大きくなった。

キノガツサ「いくらなんでもでか過ぎ・・・」

ヴィータ「ぶつつぶせー!!」

そのままおきなハンマーに飲み込まれ、キノガツサはぶっ飛んだ。

ヴィータ「なかなか強かった、あたしがもつと鍛えてやるよ。」

そのままヴィータはアイゼンに蒸気を出させ、通常のフォームに戻した。

第六十五話 キノガツサの修行 カVSカ（後書き）

今回はフォックさんのほうで覚えた技を使わせていただきました。

キノガツサ「ホントはあれはもっとつよいからな」

まあ今回はヴェータが強すぎってことですね。まあ先生なんで。

キノガツサ「あとはハンマーな。おれは好きだぜ」

PS（雑談所参照）で出した技です。

第六十六話 サンダーズの修行 最速と雷（前書き）

さて今回はサンダーズの修行です。

サンダーズ「もっと速く、もっと速く!!」

フエイト「いいよ、その調子!!」

またやってる・・・

第六十六話 サンダーズの修行 最速と雷

ここはある砂漠の広がる土地、ここでサンダーズは修行を始めようとしていた。

サンダーズ「ここでやるのか？」

フェイト「うん、そうだよ。」

サンダーズの問いにフェイトはやさしく頷いた。

フェイト「ここで走りまわれば体力もつくと思うよ。」

サンダーズ「ふーん……って走るだけか!？」

もっとバトルなどがあると思っていたサンダーズはフェイトの言葉に驚いていた。

フェイト「そうだよ?」

サンダーズ「そうだよって……走っても特訓には……」

フェイト「まあまあ、とりあえず走ってみなよ。私のいった意味がわかるから、ね!」

フェイトに勧められたこととということサンダーズはしぶしぶ走り

始めた。

サンダース「走るだけでホントに強くなるのか？まあとりあえずやってみるか！！」

サンダースは少しスピードを上げた。

それから20分後・・・

サンダース「はあ、はあ結構疲れるな・・・」

サンダースは走っていた。がかなり疲れていた。

フェイト「それじゃあそろそろ休憩しようか。」

サンダース「ああ。」

フェイト「はい、どうぞ。」

サンダース「お、ありがとう」

休憩にはいったサンダースはフェイトからもらった飲み物を一気に飲み干してすぐにおかわりした。

サンダース「フェイトはいつもこんな大変な練習してんのか？」

フェイト「うん、これは種明かししちゃうと地面が砂で動きにくいからその分足腰が鍛えられるんだよね、それに暑い中やるから体力も上がるし、こうやって動くのは基礎だからね。基礎ができてなきやいくら他のことをしてもマスターは難しいんだ。」

サンダースはフェイトの説にゆっくりと頷いた。確かに基礎ができてないとダメだな、そんな思いをもったからだ。

サンダース「これが「雷光」の速さの秘訣か。」
フェイト「？」

フェイトはサンダースの言葉の意味がわからず首をかしげた。

サンダース「ラグが言ってたんだ。「僕には」ライトニングウイング”っていう雷光の翼があるけどもつと速いのは真に速いフェイトさん・・・「雷光」なんだよね。」ってな。」
フェイト「ふふ。」

サンダースの言葉に急にはほ笑んだので今度はサンダースが首をかしげた。

サンダース「・・・なんか変なこといつたか？」
フェイト「あ、ごめんね。おかしいとかじゃないの。ただ・・・」
サンダース「ただ？」

その時、フェイトの表情が急に暗くなった。

フェイト「私の速さはリニスや母さん達がいてくれたから身につけることが出来たんだ。」

サンダース「そうか・・・」

サンダースはラグに一応フェイトの過去は聞いていた。

フェイトが「アリシア」という人物の死をきっかけに作られたクロインであること、「アリシア」を蘇らせたかった母からは酷い仕打ちを受けていたこと、そしてそんなフェイトに戦いを、勉強を、温もりを教えてくれたのがリニスであること、そんなフェイトのそばに今でもいて支えているアルフのことを。

サンダース「確かお母さんも魔道師・・・だったよな？」

フェイト「うん、母さんは偉大な魔道師だったよ。尊敬してた。」

サンダース「リニスって人は・・・」

フェイト「猫が素体の使い魔・・・つまりは猫を人間にしたような感じかな。アルフはオオカミだしね。」

サンダース「んで、アリシアは・・・」

フェイト「私のおねえさんだね。といっても私はアリシアの遺伝子から作られたけど・・・」

サンダース「そっか・・・つらかったんだな・・・」

サンダースは静かに悲しい顔をした。自分は違うが目の前にいる少女は今の話を経験してきたのだ。現実ではありえなさそうな、今の話を・・・
しかしとたんにフェイトは笑顔になった。

フェイト「でもね、なのはが・・・救ってくれたんだ。何度も、何度も、危険を覚悟で私を助けてくれた、名前を呼んでくれた。だから私、フェイトって名前が大好きなんだ。研究のプロジェクトの名前だけだね。」

サンダース「別にいいんじゃないか？」

フェイト「えっ？」

驚くフェイトにはほほ笑みサンダースは話を続けた。

サンダース「誰がなんて言おうとお前の名前はフェイト、フェイト・テストロツサ・ハラオウンなんだ。プロジェクトだろうがなんだろうが別に気にする必要ないさ。」

フェイト「サンダース・・・」

サンダース「さあて、フェイト、俺走るのいいと思うけどバトルしないか？」

フェイト「え？」

サンダース「いや、やっぱりバトルも大事だろ？それに「雷光」の速さも見たいんだ。頼む！！」

フェイト「・・・ふふ、いいやろっ。」

サンダース「ホントか？」

フェイト「うん、その代わり私も本気で行くよ。」

サンダース「もちろん、手なんて抜いたらダメだぜ！！」

そしてサンダースとフェイトはそれぞれの指定位置についた。

フェイト「そつちからどうぞ。」

サンダース「余裕だな、それじゃあお言葉に甘えて……”10まんボルト”!!」

サンダースは自身の体から電撃を発射、ビームとなりフェイトに向かって行く。

フェイト「なかなかの電撃、でも……はっ！」

フェイトは”10まんボルト”を紙一重で避ける。

サンダース「（あれを避けるとはさすがだな、だが……）」
「みがわり」

サンダースは自身の分身を2体作り出す。そして

サンダース「”でんじは”」

3体のサンダースはいっせきに”でんじは”を発動、微弱な電波がフエイトを襲った。

フエイト「確かあれは相手を麻痺にする技、それならくらうつわけにはいかないね。」

フエイトは手を前に出す、すると魔法陣（魔法を使う時に足元に展開するもの）が現れ”でんじは”を防いだ。

サンダース「あの魔法陣、盾にもできるのか!？」

フエイト「今度はこつちからだよ!」

バルディツシュ「プラズマランサー」

バルディツシュが技名をよぶとフエイトの周りに電気の塊が現れた。

サンダース「あれは、ラグとの戦いで使った技か。」

フエイト「ファイア!」

フエイトの掛け声で一気にサンダースに向かって行ったランサーたち。しかしサンダースは避けなかった。

サンダース「サンダーランチャー」

サンダースはランチャーを発射、しかもその数は3つ、さっきの”みがり”がここで役にたった。しかし

フェイト「バルディッシュ!!!」

バルディッシュ「ハーケンフォーム」

フェイトはバルディッシュに合図、バルディッシュは変形し鎌の「ハーケンフォーム」となる。

フェイト「ハーケン・・・セイバー!!!」

フェイトがバルディッシュを振るとそこから魔力でできた刃が出現、サンダースに飛んでくる。

サンダース「しまった。」まもる」

ランチャーを撃っていたサンダースはランチャーを中断し、急いで”まもる”を発動、ハーケンセイバーは”まもる”と激突し互いに消える。しかし消えたのは2つだけではなかった。

サンダース「みがり」もかよ・・・」

そう、フェイトのこのハーケンセイバーによって”みがわり”のサンダースは消えてしまった。

フェイト「まだだよ!!」

バルディッシュ「ハーケンスマッシュ!!」

フェイトは容赦なくバルディッシュで攻撃した。サンダースはそのまま吹き飛ばされた。

バルディッシュ「サー、どうしますか?」

フェイト「多分これくらいじゃ倒れない、起きあがったら」ザンバー「いくよ。」

バルディッシュ「イエス、サー」

フェイトはバルディッシュとの会話を終えてサンダースのほうを見た。

サンダース「ぐ・・・なかなかだぜ・・・」

サンダースはボロボロながら立っていた。

フェイト「バルディッシュユ!!」
バルディッシュユ「ザンバーフォーム」

バルディッシュユは自身の斧の部分を變形させて劍の形を生成そこにフェイトの魔力が加わり巨大な大劍「バルディッシュユザンバー」となる。

サンダース「それが「ザンバー」か・・・近くで見るとますます力リバー似だな。」

フェイト「どう?ザンバーの印象は?」

サンダース「とりあえず「デカイ」だな。さすが大劍だ。」

フェイト「じゃあ・・・いくよ!」

フェイトは地面を蹴ってサンダースに向かった。サンダースもそれに反応し、構えた。しかしすぐに背後でなにかを感じた。

サンダース「くっ」みがり」

サンダースはすぐに”みがり”を發動、それによって攻撃を避けた。

二人は一度お互いに離れた。

フェイト「さすがだね。」

サンダース「そりゃな、ラグに使った手は通用しないぜ。」

フェイト「そつか・・・」

サンダースの発言を聞いてフェイトは動きを止めた。

フェイト「それじゃあいくよ。」

サンダース「ああ、来い！！」

フェイト「バルディッシュュ！！」

バルディッシュュ「ロードカートリッジ！！」

バルディッシュュはカートリッジをロード、ザンバーは輝かしい光を放つ。

サンダース「こっちもいくぜ！！」

サンダースは技名を叫ぶ。するとサンダースの目の前に電気が集まり始める。

フェイト「それが君の「切り札」？」

サンダース「まだ分からないが相当な威力なのは確かだ。」

フェイト「なるほどね、じゃあいくよ。」

サンダース「俺もだ。」

フェイトのザンバーもサンダースの電気も最高潮まで輝きを増した。

フェイト「雷光一閃、「プラズマザンバー……」
サンダース「ライトニング……」
バルディッシュ「ブレイカー」
フェイト「ブレイカー……!!」
サンダース「ゲイボルグ……!!」

フェイトはザンバーを振るとそこから大きなビームが発射された。
その大きさは大きく、サンダースの数倍はあった。
一方サンダースのゲイボルグはサンダースとあまり変わらないくらい
の大きさだ。
しかし

フェイト「す、鋭い!？」
サンダース「壊せ!!」

その瞬間互いの技は消滅した。

サンダース「はあ、はあ、やっぱりまだきついな……」

サンダースはなれない技を使ったので相当な体力を使ったようだ。

サンダース「そういえばフェイトは・・・」
バルディッシュ「ロードカートリッジ」

どこからか、バルディッシュがカートリッジをロードする声が聞こえた。

サンダース「まさか・・・」
フェイト「プラズマ・・・」
サンダース「な・・・」

疲れ切ったサンダースは自分の後ろで声がしたのに気付いた。
そこには巨大な魔法陣が発生していた。

サンダース「ははは、すごいな・・・さすが「雷光」。速すぎるな・・・」
「まも・・・」
フェイト「スマツシャー!!」

フェイトが腕を前に出すと魔法陣から巨大なビームが発射、「プラズマザンバーブレイカー」よりは威力は低いものそれでも威力の高い攻撃だ。

サンダースは避けることも防ぐこともできず、それをくらった。

フェイト「な、なんとかなっただかな？」
バルディッシュ「はい、なんとか。」

するとフェイトは高速でサンダースの元へ移動した。その瞬間にバルディッシュも元のアサルト・・・斧の形に戻った。

フェイト「ごめんね、大丈夫？正直「ブレイカー」破られたときに焦っちゃった。」

サンダース「な、なに、大丈夫だ。ただ全力を出し過ぎただけだ。」

サンダースはフラフラになりながらもなんとか立った。

サンダース「やっぱり強いな、フェイトって。」

フェイト「そんなことないよ。」

サンダース「バルディッシュのカートリッジを使うタイミングも絶妙だったぜ。」

バルディッシュ「ありがとうございます。あなたの”まもる”もあと少しでしたよ。」

フェイト「”まもる”？」

サンダース「ああ実はな、最後のプラズマスマッシャーの直前に”まもる”を使ったんだ。まあ遅れちまったけどな。」

フェイト「だから威力が下がったんだ・・・。」

サンダース「まあ威力が下がってこれってのもすごいかな。」

サンダースは苦笑いしながら言った。

バルディツシユ「さて帰りましょう、もう遅いですし。」
フェイト「そうだね、歩ける？サンダース？」
サンダース「もちろん、大丈夫だ。」

こうしてサンダースのその日の修行は幕を閉じた。

第六十六話 サンダーズの修行 最速と雷（後書き）

今回はフォックさんからの技を使いました。

サンダーズ「あれ、かなり強いな。」

確かに。

フェイト「まさかブレイカーが壊されるなんて・・・」

一応破壊効果みたいなものもつけました。

サンダーズ「ありがとな、フォックさん。」

さてではまたミルクィの曲聴きながら小説書きますかね。

サンダーズ「公式のゲームのオープニング2か？」

うん、INFINITE CRISISって曲だよ。

サンダーズ「いい曲だからみんなもヒマだったら見てみてくれ、ム
ービーもあると最高だぜ。」

そしてミルクィ仲間になりましたよー！！

サンダーズ「まあ用はミルクィ見てたりするやつな。」

第六十七話 キノの修行 癒しと攻撃（前書き）

さて、次はキノさんです。

キノ「あの〜攻撃ってどじり〜どじり〜ですか？」

まあそれは本編でどじり〜どじり〜。

第六十七話 キノの修行 癒しと攻撃

ここはとある森林、ここでキノは修行していた。

キノ「あのシャマルさん、ここでなにを・・・」
シャマル「修行よ。なにか？」

キノの言葉にシャマルは平然と答えるがキノの不安な顔は変わらない。

キノ「どうやって修行するんですか？」

シャマル「いくつかの技を覚えてもらうわ。」

キノ「回復技ですか？」

シャマル「それもだけど・・・」

キノ「だけど・・・？」

急に声を潜めたシャマルが気になりキノもシャマルの話にますます興味を持つ。

シャマル「なにか攻撃を覚えてもらおうと思うの。」
キノ「こ、攻撃ですか〜!？」

まさかフォロ担当の自分が攻撃技を覚えるなんて思っていなかったキノはあせった。

キノ「あ、でも攻撃なら」タネマシガン」ありますよ。」

シャマル「だめ、私たちフォロ担当は基本はフォロ、たまに大きな一撃って感じなんだから。」

キノ「一撃!?!」

つまりは単なる攻撃ではなく相手に対して大きなダメージを与えられる必殺の一撃、それを覚えるというのだ。

キノ「でもシャマルさんは……」

シャマル「私もあるわよ。」

キノ「!?!」

シャマル「相手の体の魔法の根源、リンカーコアからエネルギーを抽出するって技が。」

キノ「そうだったんですか。」

キノはシャマルは補助だけと思っていたのでそのことにびっくりした。

キノ「でも私、どんな技がいいんでしょうか……」

シャマル「それがいい技があるのよ。」

キノ「?」

なにも思い当たらないキノは不思議そうな顔をしている。

シヤマル「あなた、エネルギーの扱いが得意よね？」

キノ「まあ攻撃に比べたら・・・」

シヤマル「それならなのはちゃんの「アクセルシューター」みたいな感じの誘導弾ができないかしら？」

キノ「誘導弾・・・ですか？」

シヤマル「そう、1つでもいいから作って相手に向かわせる、そうすれば攻撃しつつ補助の行えるわ。」

キノ「なるほど・・・」

つまりは戦いのときにキノはいままで補助しかできなかった。しかし誘導弾を覚えればそれをしつつ誘導弾で攻撃ができる。

743

キノ「でもそんな2つのことが私にできるのか・・・」

シヤマル「それは大丈夫、鍛えれば出来るようになるわ。じゃあやってみましょうか。」

キノ「はい。」

それからキノとシヤマルはいろいろな技を練習した。

地面に種をばら撒き、急速に成長させて誕生したつるで相手を捕縛する”シードローズ”、目の前に草のエネルギーを集めて盾とする”ナチュラルシールド”、そしていよいよ誘導弾だ。

シャマル「さて、いよいよ誘導弾だけど、どんなのにする？」
キノ「そうですねえ、エネルギーを集めるのが得意といっても・・・」

キノは目の前にエネルギーを集め、2、3秒すると直径50センチほどの緑色のエネルギー球体が現れた。

キノ「これぐらいですし・・・」

シャマル「あ・・・あ・・・あ・・・」

キノ「ん、どうしたんですか？シャマルさ・・・」

シャマル「スゴイ！！」

キノ「はい！？」

突然シャマルが叫んだのでキノは驚いた。

キノ「あの・・・なにが・・・」

シャマル「それよ、それ」

シャマルはキノの作り出した球体を指差しながら言った。

キノ「でもこれはそんなすごいことでは・・・」

シャマル「でもそれは今回の誘導弾にぴったりだね。」

キノ「でもこれは集めただけで動かすことなんて・・・」

シャマル「それを修行するのよ。この大きさをコントロールは、そうねえ・・・200メートルくらいの内でコントロールできればいいわね。」

キノ「200メートル・・・ですか・・・」

そんなことができるだろうかとキノは不安な表情を隠せなかった。しかし

シャマル「大丈夫、あなたはそれだけの力を持っている、努力ができるから。」

キノ「ありがとうございます。」

キノはなんとなく自信が持てたようで笑顔になった。

そして練習

シャマル「そう、そこで意識を誘導したいほうに!!」
キノ「はい!!」

シャマルに指導されて、誘導弾をなかなかのはやさで動かせるようになった。

シャマル「そこで破裂!!」
キノ「はい!!」

シャマルに指示され、キノは指をパチンと鳴らす。すると誘導弾は一度停止し、光って爆発した。

シャマル「うん上手ね。あとはもう少し速度を上げると爆発までの時間の短縮ね。」
キノ「はい。」

こんな感じで最初の修行は終了した。
キノの誘導弾はどんな形で完成するのだろうか。

第六十七話 キノの修行 癒しと攻撃（後書き）

キノ「いいんですか、あれそんなに威力なさそうな・・・」

いいんだよ、別に修行は一回だけじゃないから。

キノ「それも書くんですか？」

いや、それは書かないよ。

第六十八話 ポリZの修行 より遠く、より強く（前書き）

さて更新です。

ポリZ「次は僕の番ですね。」

はやて「よし、それじゃいってみよか。」

ポリZ「はい。」

第六十八話 ポリZの修行 より遠く、より強く

ここはポリZとはやてが修行をしている空間。

ポリZの修行は遠距離までとどくビームを撃つ修行なので管理局が特別に空間を用意してくれた。

ポリZ「さて、はやてさん、いったいどんな修行をするんですか？」

はやて「もちろん遠くまでビームがとどくようにするんですよ。」

ポリZの問いにはやては振り向き、笑顔で答える。

ポリZ「あの、具体的には・・・」

はやて「とにかくやるしかないね。ポリ君はいつもどおりビームを撃つてみてくれるか？」

ポリZ「はい。」

ポリZは指定された位置に移動した。

はやて「じゃあ撃つてみてくれるか？」

ポリZ「はい。」

ポリZはエネルギーを集め・・・

ポリZ「デリートビーム」

得意のオリジナル技”デリートビーム”を発射、しかしそれは途中で消えてしまった。

はやて「うーん、今ので100メートルくらいやね。」

ポリZ「100・・・大体どれくらいまでとどけばいいんですか？」

ポリZの問いに「うーん」と迷いながらはやては考えた。

はやて「やっぱり500メートルくらいはほしいね。」

ポリZ「500ですか・・・」

はやて「でもポリ君なら案外楽勝そうやね。」

ポリZ「いえ、とても難しいです。ビームは得意ですが遠くに飛ばすということがあまりないので・・・」

はやて「なるほどなあ。」

はやてはポリZの意見を理解したようだ。しかし

はやて「そやかて相手が接近戦を得意とせん場合は遠距離から攻撃せなあかん。それはわかるな？」

ポリZ「はい、そのための修行なんですよね？」

はやて「そや、だからここではあまり新しいことは覚えてもらわず、今までの技の強化といく、ええか？」
ポリズ「はい、もちろんです。」

こうして二人の修行は始まった。

はやて「まず、遠くにとどかせる方法やけど、まずはエネルギーを固めることや。」

ポリズ「エネルギーを固める・・・ですか？」

はやて「そや、固めたらそのエネルギーをどこまで維持できるかってことや。」

ポリズ「なるほど。近くで出来るエネルギーをそのまま維持できれば遠くにいつても威力が落ちませんもんね。」

はやて「そや。私が一回撃つから見えてな。」

ポリズ「はい。」

それからはやては魔法の詠唱を開始した。

はやて「響け終焉の笛・・・」

はやてが詠唱を始めるとはやての足元に魔方陣発生、目の前には三角の魔方陣が発生し、それぞれの鋭角（とがった部分）にエネルギーが集まる。

はやて「ラグナロク！」

はやてが発射の合図と共に3つのエネルギーは一気に発射されそのまま進んでいく。

あつというまにさっきのポリズの”デリートビーム”のとどいた場所を超え、その何倍も先に進んでいき、最終的に大きな音と共に爆発、その爆風はポリズまでとどいた。

ポリズ「すごい、これが・・・」

ポリズは驚き、ただただすごいといい続けた。

そして空にいたはやてがゆっくりと降りてきた。

はやて「まああんな感じやね。」

ポリズ「コツとかは・・・」

はやて「うん、コツがあゝ・・・まず自分の目の前にエネルギーをだして硬くする。」

そしてそれを徐々に遠くにいかせていく、まずはこれやね。」

ポリズ「はい。」

ポリズは急いで自身の前にエネルギーを作り出した。

そしてそれに意識を集中、するとエネルギーは輝きを増した。

はやて「そうそれや、そのまま発射や！」

ポリZ「はい！」

ポリZは言われるがままに発射、もちろん意識の集中は忘れない。エネルギーは勢いよく発射され、さっきよりは遠くまでとどいた。

はやて「やった、少しのびたやんか。」

ポリZ「でも少しです。それに威力もおちちやいました。もっと練習しないと・・・。」

はやて「むう、えい！」

ポリZ「痛っ!?!」

はやてはほを膨らませながらポリZに接近、デコピンをした。

753

ポリZ「あのはやてさん、一体・・・。」

はやて「ポリ君は頑張りすぎや、自分に敵しすぎや。」

ポリZ「でも・・・。」

はやて「でもやない!」

はやてが真剣な表情だけにポリZもまた真剣だった。

はやて「ポリ君はもつと自分を大切にせなあかん。」

ポリZ「でも今のは明らか威力は下がっていました。」

はやて「でもちゃんと遠くまでとどいたやないか!？」

ポリZ「それは確かに・・・。」

はやて「なら急ぎすぎたらあかん。」

はやてはそこから目線を落とした。

はやて「確かに時間はある。ポリ君達は負けたからはやく強くなりたい、そんな気持ちも分かる。でも今は時間があるんや。ポリ君達の世界の人達が作ってくれた時間が。」

ポリZ「あ……」

確かにミュウは自分たちをここに送って時間をくれた。ちゃんとダーク幹部を倒せるように、自分たちが希望を持てるように。

はやて「なのに急いだらあかん。時間がない人もおるんやで！」

ポリZ「あ……」

ポリZはラグから聞いていた。はやての過去を。しかしそれは簡単にだ。詳しくは知らない。

ポリZ「あの、はやてさん、教えてくれませんか？あなたの過去を。」

はやて「ええよ。」

それからはやては話し始めた。

はやて「まず私には小さい頃からある本が近くにあったんや。」
ポリズ「それが闇の書……」

はやて「そや、それがある日急に光ってな、急に守護騎士のみんなが現れたんや。」

ポリズ「シグナムさん達ですか……」

はやて「そしてみんな楽しく生活していた……はずやった。」

はやては悲しそうな目をしていた。

はやて「私は足が悪くてな、その原因が闇の書が完成してないからって守護騎士のみんなは知ってたらしくてな。あ、闇の書については知ってるか？」

ポリズ「はい、魔力を貯めてページを増やしていき、666ページになったら完成……ですよね？」

はやて「そうや、ただ集めるための魔力は奪ったりせなあかんから魔導師と戦って奪うことになる、せやから私はみんなに魔力は集めんでいいって言ったんやけど……」

ポリズ「守護騎士のみなさんは助けたいから集めたんですよね？」

はやてもポリズもお互いに自然と視線が落ちていた。

はやて「そしたらある日なのはちゃん達と戦ってな……まあ戦い自体は前からちよくちよくあったんやけど、その日の、12月24日にあった戦いは特別や。」

ポリズ「すいません、そこは詳しくは知らなくて……」

ポリZは申し訳なさそうにいった。

はやて「その日の戦いでみんな戦闘中に捕まってしまったな。まあその捕まえたのが管理局の人なんやけど・・・管理局は闇の書を完成させた状態で封印させたかったみたいでシグナム達の魔力で闇の書を完成させたんや。そこに呼ばれた私はみたんや、シグナム達の衣服だけが残った後景を・・・」

ポリZ「！？なんでシグナムさん達が消えてるんですか？魔力をとられてもきえたりはしないんじゃない・・・」

ポリZは消えたことに驚きはやてに聞いた。

はやて「シグナム達は魔力できとるようなもんなんよ。せやから魔力が無くなれば消えてしまっくんや。それから悲しみで私は闇の書の主として覚醒したんや。それから意識の中で闇の書の人格にあったんや。」

ポリZ「人格・・・ですか？」

はやて「そう、そして話したんや。暴走しとる覚醒した私を止めてっつてな。」

ポリZ「自分でコントロールは出来なかつたんですか？」

ポリZははやての話しを聞いてもっともな意見を言った。

はやて「私の体は闇の書に乗っ取られたようなもんだったから出来なかったんよ。」

ポリズ「なるほど。」

はやて「それから私は闇の書の人格を止めるために名前をあげたんや。闇の書なんて名前は嫌やからな。それに私は管理者やったから。」

ポリズ「その名前が・・・」

はやて「「リインフォース」やね、それから私はなのはちゃんやフエイトちゃんのおかげもあって乗っ取りから脱出、あとは闇の書の闇を倒したんや。」

ポリズ「それってとてもいい話ですね・・・」

はやて「でも事態はそんないい訳じゃなかったんや。」

はやてのその時の表情はこの話で一番悲しそうだった。

はやて「リインフォースは自分の消滅を望んだんや。」

ポリズ「なんで！？なんでですか？」

はやて「また暴走するかもしれん、その時は手をつけられんくらい強いかもしれんからや。」

ポリズ「でも消滅って・・・」

はやて「私も止めた、その時はちゃんと制御して暴走させんようにするって。あの子はずっと辛い思いをしてきた、だから幸せにしてあげなあかんかった。でも・・・あの子はなのはちゃんとフェイトちゃんに消滅を願って消滅したんや。あの子と過ごした時間は少なかった・・・。」

ポリズ「あ・・・」

ポリズはさっきはやてが言った言葉の意味が分かった。

はやて「確かに急がないかん時もある、でも今は・・・じっくりや
ってほしいんや。より確実に。」

そういうとはやてはポリズに近づいた。

はやて「心配せんでええ。絶対できるようになる。より遠く、より
強く、とどくようにな。」
ポリズ「・・・はい！」

その瞬間からポリズは今まで以上に頑張ろうと決心した。

第六十八話 ポリZの修行 より遠く、より強く（後書き）

ポリZ「なんか主にはやてさんの過去だった気が・・・」

まあ表はね。

ポリZ「表？」

この修行も他と同じで1回だけじゃないんだよ？

ポリZ「つまりは1日目を書いただけでまだ修行はしてると？」

そう、大体10日以上はね。

次回は・・・

ハスボー「僕です。」

ポリZ「ハスボーも頑張ってくださいよ。」

ハスボー「もっちろん!!」

第六十九話 ハスボー修行 みんなを守る盾（前書き）

さて、今回はハスボーです。

ハスボー「よし頑張るよ！行くよ、ザフィーラ！」

ザフィーラ（狼）「・・・（汗）」

ハスボーがザフィーラに乗って指示してる・・・（苦笑）

第六十九話 ハスボー修行 みんなを守る盾

ここはとある草原、そこには今から修行をしようとするハスボーとザフィーラの姿があった。しかし・・・

ハスボー「ザフィーラの背中っておつきくてあったかいね。」
ザフィーラ「うっ・・・」

ハスボーは狼の姿になれるザフィーラの狼バージョンに乗っていた。

ザフィーラ「修行は・・・しなくていいのか？」
ハスボー「えっ・・・一応してるよ。」
ザフィーラ「なに？」

ザフィーラは驚きあたりをキョロキョロと見る。しかしなにも変化はないようだ。

ザフィーラ「なにもないじゃないか。」
ハスボー「下、下」
ザフィーラ「ん？おっ！？」

ザフィーラが下をみると地面から少々浮いていた。

ザフィーラ「今浮遊してないはずだが・・・」
ハスボー「リフレクター”で足場を作ってるんだよ。」
ザフィーラ「なんと・・・」

そう、ザフィーラは浮いているわけではなく“リフレクター”で出来た足場をあるいているだけだった。

ザフィーラ「お前・・・いつから・・・」
ハスボー「ザフィーラに乗ってからだよ。」
ザフィーラ「!?!」

ザフィーラは驚いた。つまりは自分が歩き始めた頃から“リフレクター”の上を歩いているということ。しかし全然気づかなかった。

ザフィーラ「お前・・・なかなかやるな。」
ハスボー「えへへ・・・でもより強力な、広いバリアーがほしいんだ。」
ザフィーラ「なぜだ？」

ザフィーラの問いにハスボーは真面目な表情で答えた。

ハスボー「みんなを守りたいんだ。そのためにはより強力でより広いバリアーが必要なんだ。だから教えて、ザフィーラ。」

ハスボーの真剣な表情にザフィーラはなんだか嬉しくなった。

ザフィーラ「いいだろう、教えてやる。」

ハスボー「やったあ。」

ザフィーラ「その前に……」

ハスボー「ん？」

ザフィーラ「まずは降りろ。」

そして修行が始まった。

ザフィーラ「まずお前がもっているバリアーはどんなのだ？」

ハスボー「“リーフリフレクトバリアー”っていう跳ね返す技なんだけど……」

それを聞いたザフィーラは驚いた。

ザフィーラ「それなら簡単だ。」

ハスボー「え？」

ザフィーラ「受け止めて跳ね返す、盾において一番便利な能力だ。それを鍛えればいい。」

ハスボー「でも何回も破られちゃって……」

ザフィーラ「だから強化するんだ。」

それから二人は”リフレクター”から降りて、修行を始めた。

ザフィーラ「まあ強化といってもそればかりではだめだからな。新技もいくつか覚えてもらおうが・・・」

ハスボー「うん。」

ザフィーラ「すべてをその”リーフリフレクトバリアー”で防いでいては体力がもたないからな。簡単なバリアーを覚えてもらおう。」

ハスボー「うん。」

それから数時間後、バリアーはだいぶ完成してきた。

ハスボー「ハスノサークル」

ハスボーは目の前にハスの形のバリアーを展開、ハスボー自身もそこまで体力を消費してないようだ。

ザフィーラ「うむ、だいぶいいバリアーになったな。」

ハスボー「うん。」

ザフィーラ「次はバリアーの強化だ。」

ハスボー「うん。」

そしてハスボーはザフィーラから説明を受けた。

ザフィーラ「まずお前のリフレクトバリアーは跳ね返す方向が1つしかない。だからいくつも跳ね返すものも必要だ。」

ハスボー「うん。」

ザフィーラ「だからそんな技を覚えてもらおう。」

実はハスボーも以前ポリズに言われていた。

・・・

ハスボー「拡散型？」

ポリズ「はい、ハスボーのリフレクトバリアーは跳ね返せるという点は強いんですがその方向は1つ、よければ消費体力だけが高いバリアーとなっております。」

ハスボー「なるほどね、そのために拡散型も必要・・・ってわけかあ。」

ポリズ「そういうことです。」

・・・

ハスボー「よし、がんばって覚えようー!!」

そしてそのための修行が始まった。

ザフィーラ「いくぞ、はあ!!--」

ハスボーにザフィーラのエネルギー弾が迫った。

ハスボー「リーフリフレクションフォース」

ハスボーは”リーフリフレクトバリアー”の少し七色のようなバリアーのバリアーを展開、そのバリアーで攻撃を受け止めた。そして

ハスボー「リフレクション!!!」

ハスボーが合図すると攻撃は反射された。しかしその数はリフレクトと違い、3つだった。跳ね返された攻撃は地面にあたり爆発した。

ザフィーラ「うむ、だいぶできたな。」

ハスボー「うん、なんかリフレクトに似てたからやりやすかったよ。」
ザフィーラ「ただまだ数が3つだ。もっと増やせるようにしないとな。」

ハスボー「うん。」

こうして新技の”ハスノサークル”と”リーフリフレクションバリアー”の基礎は完成した。

第六十九話 ハスボー修行 みんなを守る盾（後書き）

ハスボー「ひかりのかべ”は自力で覚えたよ。”

らしいです。

ザフィーラ「お前は何気に優秀だな。」

ハスボー「でもバリアーの強度が足りないんだ・・・」

ザフィーラ「残りでやるぞ。」

ハスボー「うん！とりあえずザフィーラのお散歩ね。」

ザフィーラ「俺は犬では・・・」

ハスボー「レッツゴー！」

さすがのザフィーラもハスボーにはかなわないか・・・

第七十話 カリバー返還 驚きの変化(前書き)

今回はカリバーです。物凄い(?)変化をしていますよ。

ラグ「今回のバトルは・・・すごいよ(汗)」

なぜ汗なのかは本編で。

第七十話 カリバー返還 驚きの変化

それぞれの修行が順調に進むある日、ラグは管理局の訓練場に呼ばれていた。

ラグが呼ばれるなら・・・ということであくアやサンダースたちも一緒だ。

キノガツサ「なあラグ、何で呼ばれたんだ？」

ラグ「わかんないけど、たぶんカリバーを返してくれるんじゃないかな？結構時間も経ってるし。」

キノ「でもカリバーなくて不便じゃありませんでした？」

ラグ「うん、バトルもパイプだったしね。結構大変だったよ。」

ラグが思い出しながら苦笑いしていると「シャー」と音を立ててエイミィやクロノが現れた。

クロノ「久しぶりだな、ラグ。」

ラグ「うん、久しぶり〜。」

こんな感じで軽く挨拶を交わした。

ラグ「ところで今日は何でよんだの？やっぱりカリバーについて？」

エイミー「鋭いね、そのとおりだよ。」
クロノ「君のカリバーが完成・・・というかパワーアップしたから返そうとおもってな。」

そういいながらクロノは手の上に黄色の光を発生させてラグに渡した。

エイミー「発動させてみて。」

ラグ「うん。」

そう言いながらラグはカリバーを発動させた。

するとカリバーは剣の形になった。しかし、その姿には大きな違いがあった。

ラグ「な、なにこれ？」

そう、カリバーに何かがついていた。

剣を生成するためのエネルギーの出力部分の両端（バルディッシュという元斧の部分）に何かがついており、握るための部分の下にも何かがついていた

ラグ「これは・・・カートリッジ!？」

エイミー「せいかい、せっかくなんでつけてみたんだ。」

クロノ「得られるのは魔力ではなく君たちポケモンの力だ。」

するとまたドアが開いた。

なのは「あゝ遅くなっちゃった。」

フェイト「あれエイミーにクロノ、それに・・・あ、カリバー。もうパワーアップは見たんだね。」

はやて「私たちがおらんときに渡すなんて・・・ズルイ！」

クロノ「いや君たちがいなかったんで・・・」

文句をいうはやてにクロノは説得した。

フェイト「それじゃあバトルしようよ、カートリッジの使い方になれるためにも。」

はやて「確かに、それは大事だね。」

なのは「じゃあラグ君私とやろう。」

はやて「あ、なのはちゃんズルイで。ラグ君は私とやるんよ?」

フェイト「ここはやっぱり剣だから私が・・・」

3人は誰が対戦するかもめていた。守護騎士のメンバーも一応いるがシグナムでさえ戦おうとはしない。

シグナム「ここでわれらが出るのおかしいからな。」

ヴィータ「はやてが戦いたいって言うてるのにそれを横取りするのはちょっとな。」

シヤマル「私ができるのはおかしいですし……」
ザフィーラ「俺が出るのもな。」

といった具合だ。

なのは「じゃあみんなバトルしよう。」

はやて「あ、それええね。」

フェイト「え、でもラグ大丈夫？」

フェイトは心配してラグに聞いた。

ラグ「わかんないけどたぶんだいじょ……」

フェイト「じゃあやろう！」

フェイトもラグと戦いたかったらしく、大丈夫という直前で切り替えた。

そしてバトルフィールド

なのは「まずは私からね、ラグ君先攻どうぞ。」

ラグ「それじゃあ遠慮なく……」ハイドロスティンガー”」

ラグはスティングーをつくりなのはに向けて発射した。

なのは「それじゃあディバインバスター」

なのはは対抗してディバインバスターを発射、スティングーはあっという間に消され、ラグにディバインバスターが迫った。

ラグ「カリバー!!!」

するとラグはカリバーを使用、瞬時にカリバーが出現しディバインバスターにぶつけて消した。

なのは「きたね、ラグ君の剣。」

ラグ「よし、いくよカリバー!」

カリバー「オーケイ、ラグ。」

ラグ「しゃ、しゃべった!？」

カリバーがしゃべったことにラグだけでなくほかのメンバーも驚いた。

フェイト「カリバーがしゃべっちゃった。」

アクア「前はしゃべらなかったのに・・・」

クロノ「・・・エイミィ、何した?」

クロノは怪しそうな目でエイミィを見た。

エイミィ「いや〜せっかくなんでしゃべらせてみました（笑）」

そう、これはエイミィがカリバーに新しくしゃべる機能をプラスしていたかららしい。

ラグ「異世界の僕からカリバーがしゃべったって聞いたことあったけど・・・まさかこっちでもなんて・・・」

カリバー「元から意識はありましたがしゃべることは出来ませんでした。だからはじめましてですね、ラグ。」

ラグ「あ、えとはじめましてカリバー・・・でもなんかへんだなあ。」

ラグははじめましてというのに違和感があつたらしい。

なのは「あの〜ラグ君にカリバー、バトル再開してもいいかな？」

ラグ「あ、ごめんなさいなのはさん。」

なのは「あとさ、私のことはなのはでいいよ。そんなかしこまんなくても。」

ラグ「あ、はい・・・じゃないうん。」

なのは「うん、やっぱりそれがいいよ。」

なのは笑顔になる。そこになぜかフェイトとはやてが飛んできた。

なのは「あれ、フェイトちゃん、はやてちゃん、どうしたの？」

フェイト「それがやつぱり早くバトルしたくて……」

はやて「せやから今からラグ君には私たち三人を相手してもらおうで。

」

ラグ「え〜!？」

ラグは突然の事態に驚いた。

ラグ「む、むりだよ。一人でさえ強すぎなのに三人なんて……」

はやて「無理って言いよつたら出来ることもできなくなるで?」

フェイト「バトルはバトル……遠慮はしない……よっ!!」

フェイトは瞬時にプラズマランサーを生成即発射した。

ラグ「仕方ないかな〜、いくよカリバー」

カリバー「オーケイ」

ラグはカリバーを振った。するとランサーを切り裂いた。

なのは「まだまだよ、アクセルシューター!」

時間差なくなのははアクセルシューターを発射、しかしそれもカリバーで切り裂いた。

はやて「まだ甘いで！！灰白き雪の王、銀の翼以て、眼下の大地を白銀に染めよ。来よ、氷結の息吹・・・」

はやても容赦なく唱えた。はやての前には白いエネルギーが集まりクルクルと回り始めた。

はやて「アーテムデスアイセス！！」

はやてがトリガーとなる言葉を言うとエネルギーはラグのほうへ飛んでいった。

ラグ「なんかまずいなあ・・・カリバー！！」

カリバー「オーケイ、”ウォーターシュート”」

ラグはカリバーに指示、カリバーはすぐに対抗手段を考えその技をだした。

とんでいった水は途中でアイセスと衝突、爆発を起こし後から凍った水が粉々になってふってきた。

ラグ「ふう、何とか防げ・・・」
フェイト「ここー!!」
ラグ「!?!」

ラグが安心したところにフェイトが追加攻撃、ラグは反応しきれなかった。しかし

カリバー「」ハイドロステインガー」」

カリバーがステインガーを発動、フェイトは避けるためラグから一度離れた。

ラグ「ありがとう、カリバー。」
カリバー「なんてことありませんよ、それよりそろそろこちらからも攻撃を。」
ラグ「もちろん。」

ラグはデンラージとなり、カリバーもウォーターからプラズマに変化した。

ラグ「じゃあいくよカリバー、カートリッジロード!!」
カリバー「ロードカートリッジ!!」

カリバーのエネルギー出力部分の両端のカートリッジが上に動いた、すると中の弾丸が押し上げられカートリッジが下の元の位置に戻った。そのことにより内部で弾丸と接続部分が接合されエネルギーが送られた。しかし・・・

はやて「うそやん、カリバーってのカートリッジって両端にあるからカートリッジ2つ!？」

フェイト「つまり1回のロードで私たちのカートリッジ2つ分!？」

なのは「しかも初めてにロードで2つ・・・その分のエネルギーをうまく使えるのかな・・・？」

なのはは心配していたがその心配はいらす、すさまじい風が吹いてきた。

なのは「な、なにこれ？」

はやて「び、微妙に何かの力が・・・」「フェイト「これ・・・電気だよ。」

はやて「で、電気なんで？」

なのは「フェイトちゃん、はやてちゃん・・・」

フェイト「なのは？」

はやて「どうしたん？」

なのはが少し驚いたような顔をしていたので2人はどうかしたのかと思い、返事した。

なのは「あ、あれ・・・」
フェイト「ん・・・えっ!？」
はやて「なんでラグ君に羽があんねん!？」

そうラグはレジェンドコードのひとつ”ライトニングウイング”を
発動させていた。そのため風が発生したのだ。

ラグ「すごい、いつもより体が軽いしなんか力が溢れてくる・・・」

ラグは初のカートリッジロードをおえて、自身の体に溢れるエネルギーを実感していた。

カリバー「どうですか？カートリッジは？」

ラグ「すごいよ、これなら戦いやすいよ。」

カリバー「ただこれに関しては彼女たちのほうが上。油断は禁物ですよ。」

ラグ「大丈夫、油断なんて・・・しない!！」

そのままラグはなのは達に突進、カリバーを構えて・・・

ラグ「いくよ!！」

カリバー「”プラズマクラッシュャー”」

振りかざす。それに対してフェイトが反応し、バルディッシュで受け止めた。しかしその瞬間バルディッシュからパキっという音がした。

フェイトはまずいと思ったのか一度離れた。

なのは「フェイトちゃん大丈夫？」

フェイト「うん、なんとかね。でも・・・」

フェイトがバルディッシュをみせると

なのは「うそ、ヒビ!？」

フェイト「うん、いくらアサルトフォームといっても強化はしてるのに・・・」

はやて「それだけ、カリバーもラグ君も強くなったってことやね。」

フェイト「だね。」

なのは「それじゃあこっちも全力全回でいくよ!!」

フェイト「もちろん」

はやて「もちろんや」

そしてなのはとフェイトはレイジングハートとバルディッシュを前に出した。二機は即座に変形、光に包まれた。

レイジングハート「エクセリオンモード、ドライブイグニッション
!!!」

バルディッシュ「ザンバーフォーム、ドライブイグニッション!!!」

そして光がなくなるとレイジングハートは槍のような、バルディッシュはまんま大剣になっていた。

ラグ「エクセリオンとザンバー……なのはもフェイトも本気らしいね。」

カリバー「それにはやてさんも魔力が上がっています。どうしますか、ラグ？」

ラグ「もちろん、真正面からいくよ。」

カリバー「さすが……その無謀さ、私はいいと思いますよ。」

ラグ「ありがと、さてそれじゃあいこうか!!」

ラグはまた接近していった。

フェイト「私がいくよ、前線でラグの体力を減らす。」

はやて「じゃあ私はここで準備しとくよ。」

なのは「私は遠距離から攻撃する。」

フェイト「それじゃあ……いくよ。」

フェイトの合図でフェイトはラグに向かい、はやては詠唱を開始、なのははラグに少し近い位置に移動した。

ラグ「最初の相手はフェイトか。」

フェイト「そういうことだよ。バルディッシュ!!」

バルディッシュ「ロードカートリッジ」

バルディッシュはカートリッジをロード、ザンバーのエネルギー部分がさらに輝く。

フェイト「はあああああああー！」

そのままフェイトはバルディッシュを振り下ろす。

ラグ「くっ……」

ラグはカリバーでなんとか受け止めた。

ラグ「今度はこっちからー!!」

カリバー「プラズマクラッシャー」

ラグはもう一度クラッシャーを使った。しかしフェイトは冷静にバルディッシュで受け止めた。

フェイト「さすがにパワーはあるね。だけど……」

フェイトが少し離れた。するとフェイトの後ろからピンクの球体が4つ来た。

フェイト「これが私達のコンビアタックだよ。
なのは「アクセルシューター」

なのはは少し離れた位置でシューターを操作ラグに向かわせた。

ラグ「シューター・・・カリバー!!!」
カリバー「オーケイ、ソードフォルム」

突如カリバーが変形、先ほどの大剣から大きくかわってソードというべき剣になった。太刀のようなかんじだ。

ラグ「なるほど、これなら速く動かせる!!!」

ラグは軽く、コンパクトになったかカリバーでシューターを全弾切り裂いた。

ラグ「このまま突進!!!」

ラグはなのはとフェイトにつっこんでいった。しかし

はやて「私を忘れてもらったらこまる、詠唱完了、発動フリースヴ
エルグ！！」

突如はやてから大きなビームが放たれた。防がないとマズイと感じ
たラグは一度止まった。

カリバー「あれは追跡タイプの攻撃ですね、撃墜しておかないと。」
ラグ「だね。カリバー、新技いくよ。」
カリバー「なにか練習されていたんですか？」
ラグ「いいや、だから今から僕が想像するからそれを具体化して。」
カリバー「なんとという無茶を・・・まあもちろんしますがね。」
ラグ「ありがと。」

それから数秒、ラグは考えた。そしてヴェルグがかなり接近したと
ころで

ラグ「できた、カリバーお願い！！」
カリバー「オーケイ、”ソニックスラッシュ”」

ラグはカリバーを振った。すると薄い黄色の三日月の形状の衝撃波
が飛んでいき、ヴェルグを切り裂いた。

はやて「な・・・」

フェイト「フリースヴェルグが切られた!？」

なのは「あの技、かなり切断能力が強いね。こうなったらやっぱりあれしかないかな?」

なのはは切り裂いて遠くに飛んでいく”ソニックスラッシュ”を見ながら苦笑いした。

フェイト「うゝん、確かにあれしかないかも。」

はやて「ほな準備といこうか。」

なのはの意見を聞いて、二人も納得したようだ。

カリバー「何かを仕掛けてきそうですね。」

ラグ「確かに。一気に勝負を決めようか。」

ラグもカリバーをソードから大剣に変えてカートリッジをロードした。

カリバー「あ、そうだ。ラグ、属性変更しますか?」

ラグ「属性変更?なにそれ?」

カリバー「私には属性を変化するシステムが搭載されています。」

ラグ「つまりプラスマ(電気)からほかのに変更できるってこと?」

カリバー「そういうことです。」

ラグは少し迷ったが

ラグ「うん、変更するよ。」

カリバー「オーケー、ロードエレメンタルカートリッジ！」

カリバーが言うどと持つところの下にあるカートリッジが下に動いた。するとカートリッジの下にあたりボルバーが回りカートリッジが元に戻る。

するとリボルバーとカートリッジが接続されカリバーが光り、カリバーの電氣の部分が变化した。

その色は巨大な大地を表したような茶色になった。

カリバー「グランドカリバー」、コンプリート！」

ラグ「これがエレメンタルカートリッジかあ。」

カリバー「これは大地の力を得た「グランド」です。ラグのタイプ
の地面と同じですから威力が上がってますよ。」

ラグ「オッケー。」

ラグは了解するとカリバーを構えた。

カリバー「早く戦いに行きましょう。」

ラグ「だめだよ。みて、なのはたちを。」

そう、なのは達はそれぞれの必殺技である「スターライトブレイカー」「プラズマザンバーブレイカー」「ラグナロク」をあわせた通称「トリプルブレイカー」を放つ準備をしていた。

ラグ「突っ込んで逆にもやられる。それなら・・・」

カリバー「こっちから大技を仕掛けて、真正面から戦うということですか？」

ラグ「そういうこと!!」

その瞬間カリバーにエネルギーが送られ、輝いた。

カリバー「まさかまた新技ですか？」

ラグ「とうぜん!!」

カリバー「ふう、了解です。」

カリバーは苦笑いした声でラグに伝えた。

なのは「むこうも何か考えたらしいよ。」

フェイト「でもこっちもそれなりに強力だからね。はやて、準備は？」

はやて「うん・・・今出来たで!もういけるよ。」

なのは「よしそれじゃあいくよ。」

なのはの合図で三人は最後にトリガーとなることばをいった。

はやて「響け終焉の笛、ラグナロク・・・」

フェイト「雷光一闪、プラズマザンバー・・・」

なのは「全力、全開、スターライト・・・」

なのは&フェイト&はやて「ブレイカーーーーーー!!!!!!
!!!」

その瞬間なのはは目の前にあった巨大な魔力の球体から、フェイトはザンバーにチャージした電気を、はやては目の前に展開した三角の魔方陣の鋭角に集めた魔力を、一斉に発射しそれは巨大な光線となってラグを襲った。

789

ラグ「いくよ、カリバー。」

カリバー「オーケイ、ロードカートリッジ。」

カリバーはカートリッジを全弾ロード、ラグの力が爆発的に上昇した。

ラグ「はあああああああ!!!」

カリバー「グランドエクスクラッシュャー」

ラグはカリバーを横に思いっきり振った。そして二つの技は衝突、

すさまじい衝撃がその場にいたメンバーを襲った。
しかし

なのは&フェイト&はやて

「せ〜の〜!!」

三人は息を合わせて攻撃、威力が高まりその大きなエネルギーはラ
グを飲み込んだ。
そして

ブシュー

二機は機内にたまった熱を放出した。

なのは「勝てた・・・のかな?」

レイジングハート「そのようです。」

フェイト「なんとかなったね。」

バルディッシュ「イエス、サー。」

はやて「ほんま危なかったわ〜」

三人と二機もようやく一安心のようだ。

なのは「あれ、そういえば・・・ラグく〜ん。」

フェイト「大丈夫かな、ラグ。」

はやて「結構本気やったからなあ。」

そういつつ三人はラグの元へと向かった。すると

なのは「あゝ寝てる・・・」

フェイト「疲れちゃったんだね、きつと。」

はやて「まあなにはともあれお疲れ様や。」

こうしてラグVSなのは&フェイト&はやてのバトルは終了した。

第七十話 カリバー返還 驚きの変化（後書き）

ラグ「やっぱりヒドくない？」

いやいや、まともに戦ってたじゃん。

ラグ「そりゃそうだけど・・・」

そして追加、カートリッジとエレメンタルカートリッジです。

ラグ「ちなみにカートリッジはレイジングハートのカートリッジ（マガジンはなし）でエレメンタルカートリッジはバルディッシュのリボルバーと一緒にだよ。」

まあ分かんない人は「あ、なんかパワーアップしたんだ。」

「カートリッジがパワーアップでエレメンタルカートリッジが属性変化か。」

と思っただけならば幸いです。

カリバー「では2010年も残りわずか、残りも頑張っていきましょー!」

作者&ラグ「カリバーがしめた・・・（汗）」

第七十一話 ダークの幹部達の動き（前書き）

今回はダークです。

クレセリア「久々の登場ですね。」

ヒードラン「このまま「ラグラージの冒険」から「ヒードランの冒険」に……」

レジギガス「それは……無理だ。」

レジギガスのいう通り。

第七十一話 ダークの幹部達の動き

ここはなのは達の世界ではなく、ラグ達の世界のある場所。ここではダーク化の力を使い世界を変えようとするものがいた。

???「おい、ダーク幹部3人。」

ヒードラン「はい。」

クレセリア「どうかされましたか？」

レジギガス「……。」

謎の影が呼ぶと幹部の3人は集まった。

謎の影「私達「ダーク」の目的、「世界を変える」ための準備は順調か？」

影の言葉にクレセリアが不適な微笑みを見せた。

クレセリア「はい、実に順調です。驚異となるかと見られたミュウやその他の対策本部の連中もそこまで大きな動きを見せてません。ミュウの期待のチーム絆も異世界で修行中のようですがそこまでのパワーアップもないかと。」

影「そうか……。」

クレセリアの言葉に影も微笑みを浮かべた。

ヒードラン「しかし奴ら一体どこに修行にいったのか・・・」

少し表情を暗くしたヒードランにクレセリアはまゆをひそめた。

クレセリア「どこに行こうと私達の勝利に間違いはありません。なにせ私達はダークの幹部ですよ？負けるわけがないじゃないですか。」

ヒードラン「だが奴らがさらなる力を手にすれば・・・」

クレセリア「私達にはダーク化がある、そう簡単に負けません。なにより・・・」

クレセリアは奥の部屋を見た。

クレセリア「奴ら専用の対策もあります。」

ヒードラン「・・・だったな。」

微笑むクレセリアに納得の意を見せるヒードラン。その時レジギガスはつぶやいた。

レジギガス「奴ら専用の・・・対策。」

奥には青い光があり、いかにも怪しい。さらに光を発しているのはカプセル、その中では水に浸かった何かがいた。

クレセリアは奥の部屋を見た。

クレセリア「奴ら専用の対策もあります。」

ヒードラン「・・・だったな。」

微笑むクレセリアに納得の意を見せるヒードラン。その時レジギガスはつぶやいた。

レジギガス「奴ら専用の・・・対策。」

奥には青い光があり、いかにも怪しい。さらに光を発しているのはカプセル、その中では水に浸かった何かがいた。

影「そういえばその「対策」の方はどうだ？」

クレセリア「もちろん順調です。まあ使いませんがね。」

影「そうか。あとは・・・」

ヒードラン「例のプランですね？」

影「ああ、確か今日決行予定なはずだが？」

ヒードラン「只今進行中です。」
影「ふふふ、手にしておきたいからな。」影の世の王「は。」
ヒードラン「はい、やつのは力はなかなかのもの。是非我らが手に・
・ククク」

ヒードランの微笑みはその部屋中に響いた。

同時刻

ある世界

???「くそつ、止める！俺を一体どうする気だ!？」

一匹の大きなポケモンに100匹近いポケモンが個々の技を出して
攻撃していた。

「ただ一緒に来てもらうだけだ!!そこからは知らんがな。」

100匹いるため誰が言ったかは分からないが誰かがそういった。
その瞬間に100匹いたはずのポケモン達は黒い影となり大きなポ
ケモンに入ってしまった。

「????」「ぐっ、止める!ーうっ……ぐあゝ。」

????の言葉もむなしく、一気に体力を削られた????は倒れてしまった。

「よし、急いでヒードラン様の元へ運ぶぞ!」

????はヒードランの世界に送られた。

「ヒードラン様、只今もどりました。」

ヒードランが黒い影との話し合いの途中で現れた隊は深々と頭を下げて宣言した。

ヒードラン「ご苦労だった、戻っていいぞ。」

「はっ!」

そのまま隊は別の部屋へと移動した。

影「コイツか、影の王……」

ヒードラン「はい、異世界にいたので捉えました。」

影「くっくっくっ、存分に利用してやらんばな。コードネーム「0

影の笑みは暗い闇の中へと消えていった・・・

・・・

「え〜昨夜、ルマーテの一部で破壊活動が行われていた事件がありました。犯人は未だに特定できず、損失の具合から犯人は相当な強者と予測されています。」

ミュウ「へえ〜ルマーテも大変だね〜。」

ミュウツ「少し前にはラムサーも被害があったらしな。」

リビングでミュウはコーヒー牛乳、ミュウツはコーヒーを飲みながらテレビの事件についてコメントをした。

タチマル「一体誰がしたんでしょうね、こんな事？」

二人と自分の食事を持ったタチマルが二人に問う。

ミュウツ「さあな？だが分かることはコイツが悪人ということだ。」

「

ミュウ「うん、あとは数力所がやられてるから集団の確率が高いってことね。」

二人の冷静な判断にタチマルは「なるほど」という顔をして席にいた。

ミュウ「さて、それじゃあ頂こうか。」

ミュウツ「ああ。」

タチマル「はい。」

ミュウ「いただきます。」

ミュウツ「&タチマル「いただきます。」

ミュウはそういつて卵焼きを食べた。

ミュウ「ん〜これおいしいね さすがタチマル君だ」

ミュウツ「ああ、お前料理の才能ありな。」

ミュウに続いて食べたミュウツにも好評だ。

タチマル「あ、ありがとうございます。嬉しいです。」

タチマルは素晴らしい微笑みで喜んだ。

ミュウ「(それにしてもあの破損状況・・・並みのポケモンじゃあんなことは出来ない。)」

ミュウツー「(いるようだな、この世界のどこかにその原因が・・・)」

ミュウ「(ラグ達・・・早く戻ってきて。もしかしたら奴らかもしれないよ・・・。)」

ミュウとミュウツーは食事をしながらそんなことを考えていた。

黒い闇は徐々に近づき始めていた。

ミュウとミュウツーは食事をしながらそんなことを考えていた。

第七十一話 ダークの幹部達の動き（後書き）

ミュウ「この事件はダークと関係あるのかな？」

ミュウツー「他の組織の確率もあるな。」

タチマル「ミュウさん、ミュウツーさん、修行しましょう。」

実はタチマルはかなり修行が好きなようです。

ミュウ「だいぶ強くなったよ。」

ミュウツー「どれぐらいかは近い内にな。」

第七十二話 ラグの修行2 3人の思い 受け継がれる力(前書き)

ラグ「僕の修行2？」

うん、まあ2がありますよってただけけど。

ラグ「どんな修行かは？」

それは書いてないよ。ネタバレになるし。

第七十二話 ラグの修行2 3人の思い 受け継がれる力

カリバーの進化の翌日の夜、ラグはなのは、フェイト、はやての3人に呼ばれて練習場に来ていた。

なのは「あ、ラグ君！」

ラグ「なのは・・・どうしたの？こんな夜に・・・」

フェイト「うん、実はね・・・」

なのは「私達の特別指導を受けて欲しいの。」

ラグ「えっ、ええええええ〜！？」

突然のなのはの言葉にラグは驚き、その声は練習場全体に響いた。

はやて「そんな驚かんでもええやん。」

ラグ「だって3人は他の人の練習もしてるから・・・」

フェイト「まあそうなんだね。」

なのは「でもラグ君は私達の技を習得出来そうなんだよ。」

ラグ「技？」

ラグは首を傾げた。

なのは「そっだよ、技！」

はやて「私の「ディアボリックエミッション」と……」
フェイト「私の「ジェットザンバー」……」
なのは「そして私の「スターライトブレイカー」がね。」
ラグ「す、スターライトブレイカー!？」

ラグは驚いたが無理もない。

ディアボリックエミッションはある一点から円状のエネルギーを発生させて、膨張させる技でそのエネルギー空間に入った敵にダメージを与えるいわば「空間型のエネルギー攻撃」

ジェットザンバーはフェイトの持つデバイス「バルディッシュ」をザンバー（大剣）にして相手を切る技。普通に切る訳ではないので「相手のバリアーなどを打ち砕く」効果がついてある。

そしてスターライトブレイカーは周りにある魔力を一点に集束させて放つ砲撃。もちろん自身の魔力も使うがいざとなれば集めるエネルギーだけで超高攻撃の技となる「切り札」だ。

ラグ「でも僕に使えとは……」

はやて「そこは大丈夫なんよ。」

フェイト「私のジェットザンバーもラグのカリバー版に変えるし……」

なのは「私のスターライトブレイカーもラグオリジナルにするよ。」
ラグ「でもなんでそこまで……」

なのは「だってほつとけないでしょ。」

ラグの言葉になのはは優しく答えた。

なのは「強くなりたいって子がいるのに協力しないなんて・・・そんなのダメだよ。」

フェイト「私達の協力でラグ達がどれくらい強くなるかは分からないよ、でも出来るだけ強くしたいんだ。」

はやて「大切な人を失うのは辛いからなあ・・・そんな思いはもう誰にもさせたくないよ。」

ラグは3人の言葉に涙を浮かべた。

なのは「それにね・・・」

はやて「私のディアボリックエミッションでどんな闇も包み込んで・・・」

フェイト「私のジェットザンバーでどんな闇も切り裂いて・・・」
なのは「私のスターライトブレイカーでみんなの思いを一つにして
撃ち抜いて欲しいんだ、どんな闇も。」

ラグはこの言葉が嬉しくて涙がこぼれた。

ラゲ「ありがとう、なのは、フェイト、はやて・・・」
なのは「うん、それじゃあ頑張ろう!」

こうしてなのは、フェイト、はやての修行も始まった。

第七十二話 ラグの修行2 3人の思い 受け継がれる力(後書き)

ラグ「僕がスターライト!？」

うん、前から考えてはいたんだ。

ラグ「ちゃんと使えるかな・・・」

でもちゃんと使えないと幹部を倒せないよ。

ラグ「そっだよね、頑張るよ!！」

まあ、それらの登場はまだまだなんで「そうなんだ」ぐらいで覚えておいてください。

第七十三話 いざ帰還 みんなのもとへ（前書き）

さて、いよいよ帰ります。

ラグ「いっぱい大事なことを教えてくれてありがとうございます！」

そんな気持ちでスタートです。

第七十三話 いざ帰還 みんなのもとへ

この世界にきて、それぞれの修行をして数日後。ラグ達はいよいよ帰ることになった。

なのは「もう帰るんだね。」

ラグ「うん、ミュウから「そろそろ戻ってもらっていい?」って通信がきたしね。」

少し寂しそうななのはの表情を見ながらラグはミュウに帰ってくるよう言われたことを伝えた。

810

フェイト「もうこっちの世界には来れないの?」

サンダース「分からないけど、来れるなら来ないと。フェイトにはリベンジもしないといけないしな。」

フェイト「あはは・・・」

サンダースの言葉にフェイトは苦笑いしながら答えた。

キノガッサ「俺もヴィータにリベンジしねえと!!・・・痛えっ!」

ヴィータ「そんなことは「ストライクハンマー」を完璧に扱えるようになってから言え!!!」

キノガッサもリベンジをしたいと言ったがヴィータにたたかれてしまった。

キノ「シャマル先生、お世話になりました。」

シャマル「いいのよ、頑張ってみんなの「癒やし」になってね。」

キノ「はい、頑張ります。」

シャマル「特にキノガッサ君の・・・ね!」

キノ「あ、は、はい(苦笑)」

キノはシャマルに弱点をつかれ苦笑いしかないようだ。

ポリズ「はやてさんもありがとうございました。」

はやて「ええんよ、ポリ君はひとりでたたかっているわけやない。それはよく心に刻んどいてな。」

ポリズ「はい。」

ポリズもはやてから学んだ「ひとりでたたかっているわけではない」ということを胸にお礼を言った。

ザフィーラ「お前も頑張れよ、守護するんだぞ。」

ハスボー「もちろんだよ。ザッフィーは守護獣、僕は守護ポケだか

らね。」

ザファイラ「生意気な……ってザツフィーと呼ぶな!」
ハスボー「え、いいじゃん。ザツフィー、ザツフィー」

ザファイラはハスボーを応援したが逆にいじられてしまった。

シグナム「ラグ、お前も元気だな。」

ラグ「はい、シグナムさんもお元気で。」

シグナム「聞くとお前らの敵「ダーク」は強いらしい。しかしお前にはそいつらにない「心の強さ」がある。自分の意志を宿した剣、カリバーと共に闇を切り裂け! いいな?」

ラグ「はい、もちろんです。」

シグナムの言葉にラグは大きく頷いた。

なのは「アクアちゃんは鍛えたコントロールと増えた仲間達で頑張っ
てね。」

アクア「うん、召喚と一緒に頑張る」

なのは「アクアちゃんにはラグ君やみんながいるんだからね、特にラグ君が。」

アクア「う、うん。」

なのはもアクアに意志を伝えた。

アクアは少し苦笑いだったが……。

それから数分後・・・

エイミィ「転送準備出来たよ。」

ラグ達はラグ達の世界に行くため転送場所に来た。

エイミィ「いや〜でもキノガツサ君のストライクハンマーも改造が早く出来て良かったよ。」

キノガツサ「ああ、ありがとな。エイミィ。」

エイミィ「どうたしまして。」

ストライクハンマーにカートリッジを積んでもらったキノガツサはエイミィにお礼をいった。

エイミィ「さて、それじゃあゲート開くよ。」

そう言ってエイミィはゲートを開いた。

ラグ「じゃあみんな・・・いってきます。」

アクア「頑張ってくるね。」

サンダース「ホントありがとな。」

キノガツサ「ぶっ飛ばしてくるぜ!。」

キノ「ありがとうございます。」
ポリズ「皆さんに教えて頂いた事を胸にがんばります。」
ハスボー「行ってきまーす。」

そういつてラグ達「チーム絆」はゲートをくぐった。

いよいよ、ダークとの戦いが近くなってきた。

第七十三話 いざ帰還 みんなのもとへ（後書き）

なのは「ラグ君達帰っちゃたね・・・」

フェイト「寂しけれどちゃんと私達の技はもらってくれたし・・・」

はやて「これからダーク倒さないかんからな。」

いや〜ホントお世話になりました。

なのは「いいんですよ、作者さん。」

フェイト「私達も協力したかったしね。」

はやて「そゆことや。」

さて、次回からいよいよダークについて明らかに！？
作者も更新スピード上げて頑張ろうと思います！！

第七十四話 帰還！ 再会 そして・・・（前書き）

さて、帰還です。

キノガッサ「久しぶりだな。」

ミュウ「みんなおかえりー」

まだ帰ってきてないよ（汗）
帰ってくるのは本編で。

第七十四話 帰還！ 再会 そして・・・

修行が終わり、元の世界へのゲートを抜けたラグ達は今まさに元の世界に戻ってこようとしていた。

タチマル「ミュウさん、ししょーはまだですかね？」

ミュウ「今来てるよ、もう少しだよ。」

タチマル「そうですか。あゝ早く戻ってきてくれないかな。」

タチマルはラグ達の帰りを相当楽しみにしているらしく微笑みが絶えない。

ミュウツー「しかし、まさかお前が送ったのがなのは達の世界とはな・・・正直驚いたぞ。」

ミュウツーが苦笑いしながらミュウに言った。

ミュウ「まあ彼女達ならラグ達を鍛えられるだろうし、気も合いそうだったからね。」

ミュウは笑顔でいうが本来はポケモンと魔法は別のもの、その境界線を超えさせるのは並みの覚悟ではない。

ミュウツー「あの世界は合わない奴は行った瞬間から体調が異常に悪くなるからな、地球以外は。」

タチマル「え、なんでですか？」

ミュウ「魔力」って力があつてね、それが合わない人はその影響で具合が悪くなっちゃうんだよ。」

タチマル「へえ〜」

ミュウツー「まあ少しづつ慣れていけば大丈夫なんだがな。」

ミュウとミュウツーが解説すると空气中に光が発生し、徐々に大きくなってきた。

タチマル「もしかしてもうすぐ・・・」

ミュウ「うん、くるね。」

その瞬間光からラグ達が飛び出してきた。

タチマル「し、ししよー!」

ラグ「あ、タチマル!」

タチマル「お帰りなさいです、ししよー!」

ラグ「うん、ただいま。」

ラグの笑顔を久々に見たタチマルは嬉しさのあまりラグに抱きついた。

タチマル「良かったです、ししょー達が無事に帰ってきてくれて。」
ラグ「あはは、大げさだなあ。」

ラグに続いてアクア達も戻ってきた。

ミュウ「みんな、お帰り。」

アクア「うん、ただいま！」

サンダース「久しぶりだな、この世界。」

キノガツサ「ん〜なんか体が軽いぜ！」

ミュウツ「それはお前らが向こうで魔力ばかり浴びてたからだ。」

キノ「そうなんですか？ちっとも気づかなかった・・・」

ポリズ「こっちもいい天気ですね。」

ハスポー「太陽が気持ちい。」

それぞれが世界の違いを実感したようだ。

ミュウ「さて、それじゃあ家に行こうか。話があるんだ。」

そういつてメンバーはエルビストの家へと向かった。

エルビスト

サンダース「それで話してなんだ？」

サンダースの言葉にミュウは少し暗い表情をした。

ミュウ「実はみんなが行ってる間に色々事件があったんだ。建物の破壊とか……」

ポリZ「とか……なんですか？」

ミュウ「誘拐……とか……」

キノガッサ「誘拐だとっ！？一体誰が！？」

驚いたキノガッサがミュウに勢いよく質問した。

ミュウ「ギラ……ティナが……ね。」

ラグ「ギラティナが……」

ギラティナは以前ラグ達をグレードンから守ってくれたポケモン、そのためチーム絆のメンバーは全員面識がある。

サンダース「でもアイツも相当な実力のはず、なぜ……」

ミュウツ「どうも建物の破壊などが他の地域に広まらんようにしていたらしい。そして疲労しているところをやられたようだ。」

キノ「それをやったのは……やっぱり……」

ミュウ「うん、恐らくは「ダーク」だね。」

あたりがしばらく沈黙に包まれた。
そんな中ラグが口を開いた。

ラグ「助けに行こう・・・」

アクア「ラグちゃん・・・」

ラグ「ギラティナも捕まっちゃったけど僕達はそもそもダークを倒すために修行に行ったんだよ？それならギラティナを助けるために頑張ろうよ！」

アクア「・・・そうだね、ラグちゃんの言う通りだよ。ダークを倒すって目的は変わらない、ギラティナがさらわれたならなおさら頑張ろうよ！」

サンダース「そうだな、そのために力を手にしたんだもんな。」

キノガッサ「俺だって力はつけたぜ！なあ、ストライクハンマー！」
ストライクハンマー「イエス」

キノ「私の補助だって強化されましたし、攻撃だって出来ます！」

ポリズ「私もクールなハートに熱いハートをプラスしましたからね、もう気持ちで負けません！」

ハスボー「僕だってみんなを守るために頑張ったんだ、ダークなんかに負けない！」

ラグから続いてメンバーは全員戦う意志を見せた。

ミュウツー「やはり強くなったな、コイツら。」

ミュウ「うん、この精神の強さは戦いにおいて大切だからね。それ

にしても・・・キノガツサ、そのハンマー何？
キノガツサ「あ、これか？コイツは・・・」

それからミュウはキノガツサの話を聞いた。

ミュウ「なるほどね、新たなキノガツサの相棒か。
キノガツサ「そういうことだ。」

ストライクハンマー「よろしくお願いいたします。」

ミュウ「こちらこそ、よろしくね。んでラグ、君のカーリバーは・・・」

ラグ「あ、うん。」

ミュウに言われてラグはカーリバーを出した。

ミュウ「そっか、カートリッジをもらったんだ。」

ラグ「うん。」

カーリバー「こんにちは、ミュウ。」

ミュウ「あ、こんにちは、カーリバー。やっとしゃべれるようになったんだね。」

ラグ「ミュウ・・・驚かないの!？」

カーリバーがしゃべったことに対してミュウがあまりにも冷静なのでラグは驚いた。

ミュウ「だって以前から意志があるのは分かってたからね、今回の修行もカリバーのパワーアップもプランに入ってたんだよ？」
ラグ「す、すごい……」

ミュウの凄さにラグは冷や汗すら出てきた。

ミュウ「さて、あと一つお知らせがあつてね。」
サンダース「ん、なんだ？」

ミュウ「ダーク幹部の居場所がわかったんだ。」

キノガッサ「はあ、それマジかよ!？」

ミュウ「うん、ホントだよ。」

ミュウの発言にキノガッサだけでなく、チーム全員がビククリしていた。

ミュウ「だからそろそろ戦いに挑もうと思っただけど、僕たちダイク化対策のメンバーは各地の復旧の手伝いとかがないといけないだよ。だから……」
キノガッサ「なるほど、つまりは俺たちが戦いにいけば済むってことだろ?」

ミュウ「そうなんだけど……いける?」

ミュウの質問にラグが口を開いた。

ラグ「僕たちは戦うために修行したんだよ？大丈夫！！」

ラグの言葉にミュウはほほ笑んだ。

ミュウ「それでこそチーム絆だよ。それじゃあ明日、準備ができしだい行こうか。」

ラグ「うん。」

タチマル「あ、あの〜」

行くことが決定したのでタチマルはラグに話しかけた。

ラグ「ん、なに？」

タチマル「オイラも行っちゃダメでしょうか？」

ラグ「え〜！？」

タチマルの発言にラグは驚いた。

ラグ「そんな・・・タチマル、危ないよ？」

ラグが忠告するがタチマルは引き下がらなかった。

タチマル「でもオイラ、ししよー達が修行に行ってる間ずっとミュウ

ウさん達に鍛えてもらっていました。」

ラグ「でも……」

ミュウ「大丈夫だよ、ラグ。タチマルはホントに強くなった。だから連れて行ってあげて。」

ラグ「うくん……」

ラグは少し考えた。そして

ラグ「仕方ない、一緒に頑張ろう!!」

タチマル「は、はい!!」

こうしてダーク幹部と戦うのは「チーム絆+タチマル」になった。

決戦の日は……いよいよ明日だ。

第七十四話 帰還！ 再会 そして・・・（後書き）

キノガッサ「よっしゃー、いざ決戦だ〜!!」

ミュウ「ようやく居場所がわかったんだだよ。」

キノガッサ「俺がぶっ飛ばしてやらあー!!」

ミュウ「次回もよろしくね。」

第七十五話 決戦！それぞれの戦いへ（前書き）

さあついに・・・

キノガツサ「ボッコボコにしてやるぜー！」

キノガツサ、テンション高いよ・・・（汗）

第七十五話 決戦！それぞれの戦いへ

ミュウ達によつて突き止められたダーク幹部の居場所。
ラグ達は今その場所の入り口にきていた。

ラグ「ここが・・・ダークのアジト？」

ミュウ「そうだよ」

アクア「それにしても・・・大きい・・・」

そう、その場所とは塔だ。エルビストから近いものの周りが暗いので誰も寄り付かない、アジトには最適だ。

キノガッサ「よっしゃ、それじゃあ早速入ろうぜ」

ミュウ「うん、みんなしつかり注意してね」

そうしてラグ達は塔へと入った。しばらくすると広い部屋にでた。

ラグ「なにここ・・・」

キノ「お、大きいですね・・・」

広場のような場所に出たのはよかったが、広すぎてここが塔の内部かどうかが怪しいくらい広かった。

ミュウ「・・・何かくる!?!」

ラグ「カリバー!?!」

カリバー「オーケー」

ラグがカリバーを呼ぶとカリバーが出現、ラグの手に握られ

ラグ「はあああああ!?!」

ラグが飛んできた物体をはじく

ラグ「誰!?!」

ラグがカリバーを向けながら言うと奥から誰かが現れた。

クレセリア「誰ってことではないでしょ??!ここは我々のマジトですよ??!」

ヒードラン「にしても俺の“げんしのちから”をはじくとは、結構強くなったな。」

レジギガス「まあ我らにはおよばんな。」

現れたのはダーク幹部「クレセリア」、「ヒードラン」、「レジギガス」だった。

キノガッサ「お前ら・・・バトルしやがれ、今決着をつけてやる！」

クレセリア「そっけいのは困るんですね、勝手にルールを決めてもらっては。」

ポリズ「じゃあなんですか、なにかルールが存在するんですか？」

ポリズの少し怒った口調に対してとても冷静にクレセリアは話した。

クレセリア「私達と戦いたいのでしょう？私達は自分達の部屋にいますから来たいなら勝手にどうぞ」

ヒードラン「帰るならさっさと帰れ」

そう言って3人はそれぞれの部屋へ向かった。

ハスボー「あ、どっか行っちゃっよ!？」

ポリズ「仕方ないですね、僕とハスボーはクレセリアを、サンダースさんとアクアはヒードランを、キノガッサとキノさんはレジギガスを追って下さい。」

ラグ「ポリズ、僕は？」

ラグの質問にポリズ・・・ではなくミュウが答えた。

ミュウ「ラグは・・・この塔の最上階に行つて!！」

ラグ「えっ、なんで？」

ラグが質問するとミュウの表情が暗くなる。

ミュウ「・・・分かんないけど何か強大な力があるんだ。だから・・・」

タチマル「分かりました、ししよー、オイラ達でいきましょう」

ラグ「流石タチマル君、よく分かってるよ」

張り切るタチマルにラグもやる気がでる。良い師弟コンビだろう

ミュウ「それじゃあいい？ここからは別れての戦いだし、僕達も助けに行けない。だけどみんなの「絆」はいつだって繋がってるからね。」

ラグ「もちろん！！」

アクア「分かってるよ」

サンダース「俺達の絆は固いからな！！」

キノガッサ「さっさと倒してやるぜ！！」

キノ「みんなで頑張りましょう！！」

ポリズ「みんな繋がってますからね！！」

ハスボー「絆、絆」

タチマル「いつでも一緒にです！！」

そんな「絆」をみてミュウ達は微笑んだ。

ミュウ「それじゃあみんな頑張ってね！！」

ミュウツー「お前らならできるからな！！」

そしてミュウ達と別れた。

ラグ「よし、それじゃあここで」

キノガッサ「お前ら負けんじゃねえぞ!!」

サンダース「お前こそな」

アクア「みんな強いから大丈夫だよ」

キノ「ですよね!」

ポリズ「修行の成果、しっかり見せてやりましょう」

ハスボー「もちろん!! タチマル君もね!」

タチマル「はい!」

そしてそれぞれがそれぞれの場所へと向かった。

「灼熱の部屋」

ヒードラン「よあ、よくきたな。ってブイズ兄妹か。」

サンダース「ああ、きたぜ」

アクア「あなたを倒しにね」

ヒードラン「ははは、お前が俺を？ははは、こりゃ傑作だ！」

ヒードランは大笑いするがサンダース達は鼻で笑った。

サンダース「ふっ、無理かどうか試すといいさ」

アクア「私達の成長にビックリしないでよ！」

「暗黒の月」

クレセリア「・・・私の中にはお馬鹿なポリゴンと浮き草ですか
・・・」

ハスボー「むっ・・・」

クレセリアに言われてハスボーはイラつときたがポリズが抑えた。

ポリズ「あなたにはリベンジがありますからね。」

クレセリア「リベンジ？無駄ですよ、あなたはバトルは愚かここで
も私に勝てません」

クレセリアは頭を見せながらそう言った。

ポリズ「どうでしょうね？自慢……ですが僕は前のテストは結構
高得点と自負してるんですよ？」

クレセリア「テスト？学校のお勉強で……」

ポリズ「人生のテストです。修行先ですよ。学校のお勉強なわけ
がないじゃないですか……私、あなたに負ける気がなくなりまし
た」

クレセリア「ふん、それなら私のバリアーを打ち抜いてみなさい！」

ポリズ「ご期待にこたえますよ、僕とハスボーがね！！」

「力の部屋」

キノガッサ「よぉ、じゃまするぜ！！」

レジギガス「きたか……やはりお前か」

キノガツサ「ああ、この前の決着をつけにきた」

レジギガス「ふん、惨敗のくせに・・・」

キノガツサ「俺の、そして俺のパートナーの成長なめんなよ。」

レジギガス「パートナー・・・そのキノガツサか。」

キノ「キノです!!」

レジギガス「そんなものどちらでもいいだろう」

キノ「キノガツサ、この人ぶっ飛ばしましょう!!」

キノガツサ「ああ、もちろんだ!!」

その頃ラグとタチマルは階段を登り、ある部屋へたどり着いた。

ラグ「ここは・・・」

タチマル「影の部屋」?

ミュウツー「しかしミュウ、ラグ達の行った場所、あそこから感じられるエネルギーは……」

ミュウ「うん、そうなんだよね。だからラグを行かせたんだ。」

ラグ「開けてみようか」

ラグは扉を開けた。そこには……

ラグ「そ、そんな……」

ミュウ「倒せるのは……ラグしかいないと思うんだ。」

????「よお、ラグ。元気か？俺がダーク幹部最強だ。この「ギラテイナ」がな。」

ミュウ「悪夢は今……始まったんだ。」

第七十五話 決戦！それぞれの戦いへ（後書き）

サンダース「ついにきたな」

アクア「絶対倒そうね」

ここは真面目だけど・・・

クレセリア「私の方が頭いいんですよ！」

ポリズ「私はあなたに負ける気がしませんね！」

キノ「私はキノガツサじゃないのに・・・キノって名前があるのに・・・キノガツサ、絶対ぶっ飛ばすよ！！」

キノガツサ「お、おう」

・・・はあ。

ラグ「僕達の相手は・・・」

タチマル「ギラティナさんですか・・・」

まあよくある展開だよな。

ラグ「運命って残酷だよ。」

第七十六話 再戦！VS獄炎の使い手（前書き）

さて、今回はヒードランです。

サンダーズ「じゃなくてヒードランVSアクア&サンダーズな！」

アクア「作者さん説明下手だなあ」（汗）

第七十六話 再戦！VS 獄炎の使い手

ダーク幹部を止めるために異世界での修行を成し遂げてきたチーム「絆」。そのメンバーであるサンダースとその妹のアクアは自身の目の前にいる相手「ヒードラン」を倒すため、すでにバトルを始めていた

サンダース「10まんボルトだ！」

ヒードラン「かえんほうしゃ」

サンダースは強力な電撃、ヒードランは強力な炎を放ち互いに攻撃する。しかし威力が同等だったためか2つの技は相殺されてしまった

842

ヒードラン「ふん、この程度の技で俺を倒すつもりか？俺はまだ大した力を発揮してないぞ」

サンダース「隙ありだぁー！！」

ヒードラン「!?!」

ヒードランの少々の隙を見てサンダースは即座に判断、すぐに彼の後ろに回り込んだ

サンダース「くらえ！ “ライティングゲイボルグ”」

サンダースはゲイボルグを発動、サンダースの前に槍の形をとった電撃「ゲイボルグ」が出現しヒードランへと飛んでいく。しかしヒードランも実力者、そんな技の直撃を簡単に許すわけもなかった

ヒードラン「 “ほのおのうず”」

ヒードランは自身の周りを”ほのおのうず”で囲み、炎の壁を作る。一方ゲイボルグはそのまま直進、壁と衝突してしまった

ヒードラン「これでお前のゲイボルグは通らない！」

サンダース「フツ、それはどうかな？」

ヒードラン「何だと!?!」

サンダース「貫け!?!」

サンダースの一言、これによってゲイボルグは光を強める。気付くとゲイボルグは”ほのおのうず”を超え、貫通していた

ヒードラン「なにっ!?!」

予想外の事に驚き、ヒードランは一瞬頭がからっぽになる。そして
ゲイボルグはヒードランに直撃、大爆発を起こした

サンダース「どうだ!!」

サンダースが爆発により発生した煙に包まれるヒードランの方を見
ながら言う。手ごたえは感じているようだ。しかしこれで終わるほ
どダークの幹部は甘くはなかった

ヒードラン「な、なめるなああああ!!」

周りの煙を吹き飛ばし、ヒードランが叫ぶ。その大きな叫びに優勢
だったサンダースも思わず身震いしてしまう、それぐらい威圧のあ
る叫びだ

サンダース「これはヤバイスイッチでも入れちまったかな・・・」

ヒードラン「調子によるなよ!!」かえんほうしゃ”!!」

ヒードランが怒りの”かえんほうしゃ”を放つ。しかしその対象は
サンダースではない。彼の周りだ

サンダース「これは・・・、まさか!？」

ヒードラン「そうだ、これなら逃げ場はないよなあ？だから選べよ、俺の炎をくろうか、それとも周囲の”かえんほうしゃ”をくろうか・・・どっちかしか道はねえぜ？」

サンダース「しまった!？」

サンダースが気付く。周りに炎があつては彼の自慢のスピードは行動範囲が制限されたことで活かせない。つまりは彼の言うとおり2つの道しかないのだ

ヒードラン「さあ、くらえ!! “だいもん・・・”!？」

ニヤリとほほ笑み、ヒードランが攻撃しようとしたその瞬間、何かヒードランにぶつかり、ヒードランは”だいもんじ”の発動を中止する。そしてぶつかった部分を見ようとすると凄まじい衝撃に襲われ、気付いた時には壁に激突した。その瞬間にサンダースの周りの炎も消滅してしまった

ヒードラン「一体何が・・・」

サンダース「アクア!！」

アクア「私の龍ちゃんも忘れないでよね」

龍ちゃん「ぎゅるる」

傷ついたヒードランが痛みを感じながら前をみる。そこにはサンダースの妹であり、召喚の使い手であるアクアが彼女の召喚体である”氷水凍化龍”と共に立っていた

サンダース「ありがとな、助かったぜ。．．．にしてもおまえ、なかなか大胆だな」

アクア「そう？」

龍ちゃん「きゅるる？」

サンダース「自覚なしってか。まあいいか。それがお前らしさだしな。．．．奴はこれぐらいじゃ倒れない油断するなよ？」

アクア「分かってるよ、油断なんてしない！」

サンダースとアクアが改めて気合いを入れ直す。そんな中、ガラガラと瓦礫をどかす音と共にヒードランがゆっくりと現れた。ゆっくり移動していることからどうやらダメージは負っているらしい

ヒードラン「んにゃる．．．俺をブツ飛ばしたのはその氷龍か．．．」

アクア「そつだよ。私の龍ちゃんはパワーアップした、あなたなんかに負けない！」

ヒードラン「ふっ……パワーアップねえ……それはどうかかな？
“かえんほうしゃ”」

ヒードランは“かえんほうしゃ”を発射、彼の口から高温度の炎が放たれ、それは龍ちゃんに向けられている。アクアでもなくサンダースでもなく、「氷の龍」である龍ちゃんにだ

ヒードラン「（そいつは所詮氷。溶かしてしまえば問題はない）」

ヒードランが狙い通りに進むことにほほ笑む。しかしそれもつかの間、すぐに打ち消されることとなった

アクア「龍ちゃん“ハイドロポンプ”」

龍ちゃん「きゅるうううう！」

ヒードラン「なに!?!」

アクアの指示で龍ちゃんの口から高圧の水が発射される。“かえんほうしゃ”は龍ちゃんへと向かうものの“ハイドロポンプ”に打ち消されてしまい、無効となる。そしてそのまま“ハイドロポンプ”がヒードランを襲った

ヒードラン「くっ “まもる”」

ヒードランは“まもる”でガード、彼の目の前に緑色の壁が現れ防御、なんとかダメージは逃れた。しかしヒードランに1つの疑問が残る

ヒードラン「なぜ龍が技を……。召喚体が技を使うなど……」

アクア「簡単だよ、コントロール力が高くなれば龍ちゃん本来の力も引き出しやすくなる。これは龍ちゃんの元々の力。ねえ、龍ちゃん？」

龍ちゃん「きゆるー！」

アクアの問いに龍ちゃんが元気に返事をする。そんな彼女らを見てヒードランが「フフ……フフフ……」と少々狂ったように笑いだした

ヒードラン「ふふふ、ハハハハハハ、面白い。その力、どこまで効くか試すがいい！この俺の……力に勝るかな？」

ヒードランが高笑いをしたその瞬間、ヒードランから凄まじい闇の力が解き放たれる。それはアクア達から見ても分かる変化だった

アクア「これってもしかして・・・」

サンダース「ああ、ダーク化だな」

サンダース達が汗を垂らしながら話をする。ヒードランはダーク化をしたようだ。目つきは睨むような目つきになり、黒い邪悪なオーラが見える

ヒードラン「さあ、まずはこれだ!“かえんほうしゃ”」

アクア「龍ちゃん、もう一度“ハイドロポンプ”」

龍ちゃん「きゆる!!」

ヒードランが先ほど打ち消された“かえんほうしゃ”を発射、それに対してまた打ち消そうとアクアは“ハイドロポンプ”を指示する。そして2つの技はぶつかった。しかし

アクア「“ハイドロポンプ”が押されてる!?”

ヒードラン「はあああああ!!」

ヒードランが力を入れると“ハイドロポンプ”は勢いで負けてしま

い水蒸気となり、”かえんほうしゃ”が龍ちゃんに襲いかかる

アクア「くっ、戻って、龍ちゃん。」

アクアは断念し龍の召喚を解除、”氷水凍化龍”は龍の形を崩し、ただの水と氷へと変化することで”かえんほうしゃ”を回避した

ヒードラン「ふん、さっきまでの威勢のよさはどうした?」

アクア「まだだよ!」

アクアは自分の目の前に魔法陣のようなものを出現させる。しかしその隙をヒードランが見逃してくれるわけもない

ヒードラン「隙ありだ!“かえんほう・・・”」

サンダース「させない!“サンダーランチャー”」

ヒードランがアクアに攻撃しようとしたその時、サンダースの“サンダーランチャー”が命中、その衝撃でヒードランは技の発動を中止した。

ヒードラン「てめえ、邪魔しやがって・・・“おにび”」

ヒードランは“おにび”を発射、サンダースを火の玉が襲った。

サンダース「くらうかよ！ “10まんボルト”」

サンダースは“10まんボルト”で“おにび”を爆発させて相殺、吹き飛ばされない程度の爆風が2人を襲った

サンダース「ヒードランは引きつけるから次の召喚頼むぜ、アクア。」

サンダースとヒードランが激闘を繰り返している間、アクアは少々離れたところで召喚準備をしていた

アクア「氷結と清水よ、我が元に氷水の獣を呼べ、召喚！！ “氷水凍化獣”」

アクアが言い終わると魔法陣に氷と水が集結、その姿はライオンのような姿となり、アクアの前に姿を現した

アクア「よし、召喚獣「ガウ君」完成！ よろしくね、ガウ君」

ガウ君「ギャウギャウ！」

アクア「よし、ガウ君、レッツゴー！」

ガウ君と共にアクアはヒードランに向かって走って行った

一方サンダースは・・・

ヒードラン「ラスターカノン」

サンダース「あたるかよ！」

ヒードランは“ラスターカノン”を放つがサンダースはそれを軽々と避ける。

ヒードラン「ええい、ちょこまかと・・・ん？」

攻撃があたらないことにイライラし始めるヒードラン。そんな彼の目に何かが映った

ヒードラン「あれは・・・アクアの召喚か、めんどくせえな」
“かえんほうしゃ”

ヒードランはガウ君に“かえんほうしゃ”を放つがまたもや軽々と避けられてしまう。

ヒードラン「なに！？（アイツ、速い！）」

ガウ君「ぎゃうー！！」

そのままガウ君はヒードランに接近し“かわらわり”を決める。くらったヒードランにとっては弱点である格闘技、効果抜群によりダメージは予想以上に大きいようだ

ヒードラン「ぐっ、こしゃくなことを。今消して……」

サンダース「悪いな、“かみなり”」

ヒードランがガウに気を取られている隙にサンダースが“かみなり”を発射、ヒードランにその電撃が直撃する

ヒードラン「くそっ！お前ら……邪魔だ！“マグマタイフーン”」

サンダース「なっ……！」

怒ったヒードランから“ほのおのつず”が発生、一瞬で巨大化し周りのサンダースとガウを飲み込んだ

アクア「お兄ちゃん！？ガウ君は戻って！」

アクアは龍ちゃんと同じようにガウも戻す。しかし”マグマタイプーン”は止まず、サンダースを飲み込み続けた

アクア「お兄ちゃん、お兄ちゃん！！！」

アクアはサンダースの無事を確認しようとは何度も名前を呼んだ。しかし返事はない。そして“マグマタイプーン”が収まると……

アクア「お兄ちゃん！？」

サンダースは火傷状態で倒れていた。

ヒードラン「ははは、どうしたサンダース、もう攻撃はないのか？」

動けないサンダースに向かってヒードランは高笑いしながら言う。
しかしサンダースは反応しない、気絶してるのか、それとも……

ヒードラン「さて次はお前の番だ、アクア」

アクア「くっ……」

警戒するアクアにヒードランが言う。そしてヒードランが1歩近づいた。その時だった

「サンダーブレード」

ヒードランの背に電気の剣が突き刺さった。電気な為傷はない、しかし彼の体に電気独特の痺れが流れる

ヒードラン「な、なんだ!？」

「……ブレイク!」

その瞬間、剣は爆発。複数個あったためヒードランはいくつももの爆発に襲われた。その衝撃でアクアから離れることを余儀なくされる

ヒードラン「チクショウ、今度は誰……」

「今度、じゃないんだぜ?」

ヒードラン「なに!？」

爆煙が解け、見えるようになったヒードランの目にある人物の立った姿が映る。しっかり4本の足で大地に立つそのポケモン、そんな彼にヒードランは驚くしかなかった

ヒードラン「お、お前は……なんで……」

アクア「お兄ちゃん！」

ヒードラン「バカな！お前はさっき俺の”マグマタイフーン”で仕留めたはず……。なぜ……」

サンダース「悪いな、お前が倒したと思ってるサンダース、そいつは“みがわり”だ」

ヒードラン「みがわり」……だと!？」

サンダース「そうさ」

サンダースがそう言いながら倒れているサンダースを見る。するとそれは光の粒子となって消え、後には何も残らなかった

ヒードラン「バカな!？一体いつ……」

サンダース「お前が“マグマタイフーン”を使った時に“みがわり

”を発動、そのまま避けたんだ。簡単なことだろ？”

ヒードラン「バカな、あの発動速度は遅くはないはず。反射的に避けることなど・・・」

サンダース「なめんなよ、こっちは砂漠で瞬発力鍛えられたんだぜ？」

そう、サンダースはなのはの世界ですつと砂漠で走ったりしていたのだ。そのため自動的に瞬発力が身につく、それが今ここで活きたのだ

アクア「お兄ちゃんナイスだよ。私も騙されちゃった」

サンダース「悪いな、言う暇はなくなつてよ」

アクア「でも“サンダーブレイド”って・・・？」

サンダース「向こうでフェイトに教えてもらったんだ。ただ正直、使う分にはポケモンだから少々キツイがな」

苦笑いしながらサンダースが言う。確かにサンダースは肩で息をしており苦しそうだった。“みがわり”自体体力を消費する技、それに加えて慣れない技を使ったのだ。それなりの負担がかかったのだろ

アクア「でもここからどうしようか。私の召喚も「龍ちゃん進化型」と「アストラス」はまだ使えないし・・・」

サンダース「・・・まあごちゃごちゃ考えても仕方ない。俺たちは俺達に出来ることをするだけさ。ここからが大事だぞ」

アクア「・・・うん！」

サンダースの言葉にアクアが元気に答える。そんな2人の目に油断はない。あるのは覚悟だった

「もう、嫌だ・・・戦いたくない・・・よ・・・。」

第七十六話 再戦！VS獄炎の使い手（後書き）

サンダース「かなり互角だな」

今お互いに体力は同じ位減ってるからね。アクアも召喚に体力使うし

アクア「私の「龍ちゃん」の進化型」と「アストラス」って・・・」

アストラスは前に予告でだしたよね？龍ちゃんは進化っていうかパワーアップかな？

サンダース「俺にもあるよな？」

うん・・・

サンダース「ない・・・のか？」

あるよ。

サンダース「早く言えよ！！」

アクア「（この二人・・・コンビ？）」

第七十七話 激突！VS破壊の巨人（前書き）

今回はキノガッサ&キノです。

キノガッサ「きたぜ、俺の順番！！」

キノ「もう、キノガッサ静かに！！」

キノガッサ「へ、へい。」

キノの言うことは聞くんだ・・・（汗）

第七十七話 激突！VS破壊の巨人

ここは「力の部屋」。そこには二匹のキノガツサと一匹のレジギガスがいた。

キノガツサ「それじゃあ・・・行くぜ!!」

キノガツサは勢いよく走り出した。

キノガツサ「きあいパンチ」

レジギガス「ふん、効かん!“ほのおのパンチ”」

レジギガスも勢いよく“ほのおのパンチ”を繰り出した。すると“ほのおのパンチ”に直撃したキノガツサは燃えた。

レジギガス「ふっ、口ほどにも・・・」

キノガツサ「そこだ!!」

レジギガス「!?!」

倒したはずのキノガツサの聲がしたのでレジギガスは急いで上を見た。

キノガツサ「もあ・・・おせえよ!!! “ウッドハンマー”」

キノガツサは腕を伸ばし、レジギガスに叩きつけた。その衝撃は凄まじく、まさに「ハンマー」だ。

キノガツサは一度キノの方へ引き下がった。

キノ「ナイス、キノガツサ！」

キノガツサ「ああ、“みがわり”・・・覚えといて正解だったぜ。」

そう、実はあの時走り出すと共に“みがわり”を生成、みがわりのキノガツサを向かわせたのだ。

キノガツサ「まあそれはいいとして・・・ただだぜ。」

キノ「もちろん、これくらいで倒れるなんて思っていないよ。」

その宣告通りレジギガスは起き上がった。

レジギガス「・・・」

キノガツサ「なんだよ、あんまりくらってねえな。」

キノ「多分ガードが入ったんだと思うよ。」

キノガツサ「それなら今度はガードさせねえ！」

キノガツサは走ってレジギガスに向かうが・・・

レジギガス「ダーク化。」

その瞬間、レジギガスから禍々しい黒いオーラと共に風が発生、キノガツサはキノの元へと戻った。

キノガツサ「きたな・・・」

キノ「うん、ダーク化だね。」

レジギガス「さあ、ここからが本番。」

フィールドは数秒間沈黙した。そして・・・

キノガツサ「きあいパンチ」

レジギガス「メガトンパンチ」

二人は同時にパンチ、しかしダーク化したレジギガスの力の方がパワーが高くキノガツサは少々とばされた。

キノガツサ「へっ、やるじゃねえか！」

レジギガス「当たり前だ、お前の全力は弱い。」

キノガツサ「そうか？」

レジギガス「・・・!?」

レジギガスに「弱い」と言われたキノガツサだったがなぜかその瞬間少し笑った。

不信に思ったレジギガスはいったん喋るのを止めたが、次にキノガツサを見たのはキノガツサが自分の目の前にいるときだった。しかも

レジギガス「お前それは・・・」

ストライクハンマーに少し驚くレジギガスを無視してキノガツサは攻撃した。

キノガツサ「油断しまくったな!!」

ストライクハンマー「エナジーハンマー」

キノガツサは自然の力を得たストライクハンマーを思いっきりレジギガスにぶつけた。

その凄まじい衝撃に耐えられずレジギガスはぶっ飛び、壁に激突した。

キノガツサ「キノ!!」

キノ「いきます、ナチュラルキュア」

キノは誘導弾の“ナチュラルキユア”を発動、するとキノの周りに直径50センチほどの緑のエネルギー弾が5つつまれた。

キノ「ゴー!!」

キノの合図で誘導弾は発射、レジギガスへと向かっていった。

レジギガス「そんな誘導弾が効くとも思ってたか？」

レジギガスは余裕のある声でバカにした。しかし

キノガツサ「バカはどっちだろうな？」

レジギガス「なに!？」

キノガツサ「キノ!!」

キノ「オープン!!」

キノがオープンと言いながら指をならすと誘導弾は爆発した。

レジギガス「爆発だと!？」

余裕をぶっこいていたレジギガスは吹き飛ばされ、壁に激突させられた。

キノガツサ「やったぜ、キノー!!」

キノ「うん、でもまだだよ。」

キノガツサ「もちろんだ!」

キノガツサが片手を上げて言った瞬間レジギガスの方向から何か巨大なビームがとんできた。

キノ「キノガツサ、危ない!!」

キノガツサ「くそっ “ストーンエッジ”!」

キノガツサは“ストーンエッジ”を使いビームの威力を削った。しかしビームの威力が強すぎたため後方に飛ばされた。

キノ「キノガツサ!?!?!? レジギガス……。」

さっきまで倒れていたはずのレジギガスが起き上がった。

レジギガス「やはり弱いな。」

そう言ってレジギガスはキノに近づいた。

キノ「“ エナジーボール”」

キノはレジギガスに“ エナジーボール”を発動、しかしその攻撃の瞬間レジギガスは消えた。

キノ「!? 一体どこに……」

レジギガス「やはり……」

キノ「!?」

キノは自分の後ろをみた。そこには巨大なレジギガスがいた。

キノ「しまっ……」

レジギガス「二人目…… “メガトンパンチ”」

レジギガスは“メガトンパンチ”でキノを攻撃した。

はずだった。

レジギガス「なん……だと!?!」

今現在、レジギガスの右腕は何かにつかまれており、レジギガスが驚くのも無理ない状況だった。

レジギガス「お前は・・・キノガツサ!？」

キノガツサ「キノに手えだすなよ。」

レジギガス「・・・!？」

キノガツサは握ったレジギガスの腕を強くしめた。その力にレジギガスはただ驚いていた。

キノガツサ「俺のパートナーに・・・手え出すなっつてんだよ!!」
レジギガス「こ、コイツ・・・」

キノガツサ「ストライクハンマー!!」

ストライクハンマー「ギガンティックハンマー」

キノガツサは右手でストライクハンマーを握り、左手でレジギガスの腕を握りしめたままストライクハンマーを振る。

ストライクハンマーは自身に力を蓄え、それを放ちなった。

そしてキノガツサはその力でレジギガスを吹き飛ばした。

レジギガス「くっ、・・・こんな隠し玉を・・・」

キノガツサ「隠し玉あ?ちげえよ、それ。」

レジギガス「!？」

キノガツサは倒れたキノに手をさしのべた。

キノガツサ「まだ・・・いけるよな？」

キノ「・・・ふふ、もちろん。まだ力の半分も出してないよ。」

キノはキノガツサの手を握り、微笑みながら今の状態を伝えた。

それが本当か否かは分からない。ただ分かるのはキノは今、キノガツサに救われ、キノガツサもキノの存在に救われている、ということだった。

レジギガス「今のがお前の隠し玉・・・切り札じゃないのか!？」

キノガツサ「だからちげえつつてんだろ。みんなで協力して放つ技・・・それが切り札だ!だろ、キノ?ストライクハンマー?」

キノガツサの問いにキノもストライクハンマーも嬉しそうな雰囲気

キノ「うん!」

ストライクハンマー「その通りです!」

と答えた。

レジギガス「いいだろう、お前らのその友情、試してやる!」

キノガツサ「友情じゃねえ、「絆」だ！堅い、固い、「絆」だ！」

第七十七話 激突！VS破壊の巨人（後書き）

キノガツサ「俺結構強くな？」

おいおい、レジギガスのビームの影響を忘れてない？

キノガツサ「あ……」

キノ「あれなんかあるんですか？」

さあ、分かんない。

キノガツサ「なんでだよ!？」

気分次第だから

キノガツサ「……（コイツ殴りてえ……）」

さて今回は……きつと分かりますね。

キノガツサ「もちろん俺……」

じゃない!!

キノガツサ「ガン!？」

そんなりアクションはいらんよ……

キノ「はあ・・・」
(困)
「

第七十八話 激戦！VS暗黒の月（前書き）

今回はクレセリアです。

ハスボー「ねえクレセリア達の目的って何？」

それはひみつだよ。

第七十八話 激戦！VS暗黒の月

クレセリア「サイコカッター」！

ポリズ「ハスボー！」

ハスボー「エナジーボール」！

クレセリアの頭の三日月から放たれた“サイコカッター”は真つすぐハスボーにとんでいった・・・がハスボーに“エナジーボール”で相殺されてしまった。

クレセリア「やりますね・・・“れいとうビーム”！」

ポリズ「10まんボルト」！

クレセリアの“れいとうビーム”はポリズの“10まんボルト”にまた相殺された。

その衝撃でクレセリアとポリズ&ハスボーは離れた。

ハスボー「クレセリアの攻撃・・・威力がないね。」

ポリズ「恐らくは守りの方に力を入れているのでしよう。あれだけバリアーが自慢でしたから。」

ハスボー「なるほどね・・・」

ポリズの解析にハスボーは納得、それと同時に苦笑いする。

ハスボー「バリアー・・・破らないといけないね。」

ポリズ「大丈夫です、私達は異世界で修行してきました。「切り札」もあります。」

ハスボー「僕もあるよ。」

ポリズ「なら大丈夫です。」

ポリズが笑顔でいうとハスボーも笑顔になりポリズは安心した。しかし

ポリズ「（ハスボーにはあぁいったものの相手はクレセリア・・・どんな手を隠しているか分からない・・・やっぱり油断できませんね。）」

心の中ではやはり油断できない。相手はクレセリア、何をしてくるか全く見当がつかない。

ポリズ「（でもだからってこちら何もしかけないのに相手がボロを出すわけがない・・・やはり攻めるしかない！！）ハスボー！！」
ハスボー「OK！」バブルこうせん”」

ポリズの指示でハスボーは”バブルこうせん”を発射、まっすぐクレセリアに飛んでいくが・・・

クレセリア「サイコカッター」

クレセリアの”サイコカッター”に切られてしまい、届かなかった。

ハスボー「くっ。」

クレセリア「やはりよわいですね、あなたたちは。」

ハスボー「なんだとー！？」

ハスボーは怒るがポリZは冷静に返答した。

ポリZ「なぜそう思うんですか？」

クレセリア「簡単です、大した能力もないのにこの私に向かってくるし、そもそもハスボーという種族はステータスが高くありません。なのにこの戦いに参加している・・・メンバー不足ですか？」

クレセリアは少し笑っていうがどう考えても挑発だった。

クレセリア「さあ、仲間が侮辱されて悔しいはず。さっさと攻撃してくればバリアーでももり、さらなるバリアーの強度を教えてください。どうしました？あまりに絶望的で希望を失いましたか？」

クレセリアの問いにポリズはずっと黙っていた。

クレセリア「まあ私としてはどちらでもいいですがね。さて、バトルの続きを・・・」

ポリズ「はかいこうせん」

クレセリアが言い終わる前にポリズは”はかいこうせん”を発射、それをクレセリアはバリアーで防いだ。

クレセリア「ふう、何かと思えば油断させる作戦でしたか・・・。」

ポリズ「違いますよ。」

クレセリア「えっ!？」

ポリズ「ハスボー!!」

ハスボー「しねんのずつき”!」

クレセリアの油断していた瞬間クレセリアの後ろから何か飛び出してきた。

そしてそれが使った”しねんのずつき”はヒット、クレセリアを飛ばした。

ハスボー「僕もいるよ。」

ポリズ「やはりでしたね。」

二人はハイタッチ、クレセリアは悔しそうな表情で二人を見た。

クレセリア「く……なぜ……」
ポリズ「簡単なことです、あなたはいつでも私たちの攻撃を防いでいた。つまりはなにかで守っていたということ。となれば”ひかりのかべ”か”リフレクター”の両方を使い分けているはず。ですから先におとりの”はかいこうせん”のあとに物理的ダメージを与えると”ひかりのかべ”が発動したままだから”リフレクター”は使えずダメージを受けたんですよ。」

ポリズの説明自体は頭で理解したクレセリア。しかしそのことを読まれていたことに対しての怒りが彼女の頭を巡った。

クレセリア「そこまでの分析力……さすがです。しかし、私はそれを超える!!」

ポリズ「僕だって守りたいものがあります。負けません!」
ハスボー「僕だって!!」

それぞれの気持ちはより高まった。

第七十八話 激戦！VS暗黒の月（後書き）

ポリ「今のところこちらが優勢ですね。」

でもまだダーク化があるんだよ？

ポリ「分かってますよ、でも負けるわけにはいきません！！」

その調子だ！！

第七十九話 発動！第二の闇々闇の炎々（前書き）

さて今回はヒードラン戦の続きです。

アクア「私の「アストラス」も登場！！」

サンダース「ヒードランに異変！？」

色々てんこ盛りです。

第七十九話 発動！第二の闇の闇の炎

ヒードランとの戦いが始まって数分、しかしお互いにかなりの体力を消費していた。

サンダース「はあ、はあ、くそっ！」

サンダースはヒードランを攪乱するため結構なスピードで翻弄していた。しかしヒードランの強力な攻撃の威力はいつこうに落ちる気配を見せない。

サンダース「（コイツ・・・ダーク化してからの技が強力すぎる・・・こつちからもちよくちよく攻撃しないとダメだな・・・）“チャージビーム”！」

サンダースは電気のビームを発射、一直線にヒードランに向かっていくが

ヒードラン「“ダークメタルクロー”！」

ヒードランの闇を帯びた“メタルクロー”・・・“ダークメタルクロー”に切り裂かれてしまう。

サンダース「くそっ！」

ヒードラン「そんなレベルか？ならば“闇鬼火”」

その瞬間ヒードランの周りに闇をまとった“おにび”が発生、その数は5個ぐらいだろう。

サンダース「なんだ・・・それは・・・」

ヒードラン「なに、“おにび”に闇をまとわせただけだ。しかし・・・」

いきなり“闇鬼火”はクルクルと回り始めた。そして

ヒードラン「なかなか厄介だぜ！」

ヒードランは“闇鬼火”を発射、それは誘導弾となりサンダースを襲った。

サンダース「そんなもの、撃ち落とすまでだ！“10まんボルト”」

サンダースも“10まんボルト”を発射、“闇鬼火”に対抗したが・

“闇鬼火”と“10まんボルト”は衝突するなり爆発、しかし“闇鬼火”は砕けた小さな“闇鬼火”として改めてサンダースを襲った。

サンダース「なっ・・・!?」

ヒードラン「すげえだろ?“闇鬼火”は攻撃で散らばってもまた小さな“闇鬼火”として対象を襲いダメージを与える。完全に消滅させないとソイツから逃げ切るのは無理だぜ？」

ヒードランは嬉しそうに話す。が実際の所“闇鬼火”の強力さは半端ではない。

なにせ完全に消滅させない限り対象を狙う“おにび”、しかも闇をまとっているので普通の“おにび”にはなかったダメージも“闇鬼火”ならばなかなかの威力を持っているのだ。

サンダース「なんて追加効果だ・・・俺の技じゃ「アレ」意外に対抗出来ない、ならば・・・アクア!!」

サンダースは走って逃げながら大きな声でアクアを呼んだ。

アクア「はい、何？」

今まで召喚の準備をしていたアクアは何事かと頭を出した。

サンダース「出番だ！行けるよな！」

アクア「もちろん！龍ちゃん！」

アクアの背後に召喚陣が発生、そこから龍ちゃんが登場した。

サンダース「アクア、この“闇鬼火”ってヤツを消してくれ。完全にだ！」

アクア「オツケー、龍ちゃん！」

龍ちゃん「キュルル！」

龍ちゃんは口にエネルギーを溜めた、そして

アクア「龍ちゃん“ドラゴンポンプ”！」

龍ちゃん「キュルルー！！！」

龍ちゃんの口から水が発射、それはまるで龍の“ごとくなめらかに”

闇鬼火”に向かった。そして衝突、見事に“闇鬼火”を完全消滅させた。

アクア「やったあ！偉いよ、龍ちゃん！」

龍ちゃん「キュルー」

サンダース「さすがだな、威力が凄い・・・」

サンダースは威力の高さに驚いていたがもちろんヒードランのことも忘れていない。

ヒードラン「“闇鬼火”を破ったぐらいで調子のるんじゃねえぞ！」

“闇鬼火”を破られてくやしいのかヒードランは怒鳴った。

サンダース「うるさいな、わかったよ。」

その瞬間サンダースの足から何かが落ちた。それは地面に落ちるなり「ポトツ」と音をたてた。

ヒードラン「・・・なんだよ、それ？」

サンダース「重り……「パワーアングル」だ。」

ヒードラン「まさか……今までそれをつけてバトルを……」

サンダース「もちろんだ。だがそろそろ危ないんでな、外したんだ。」

アクア「あ、お兄ちゃんやつと外したんだ。」

サンダース「まあな。」

ヒードランは思った。このサンダース……いや、あの召喚のアクアも……強い……と。

だからこそヒードランの中で何かが動こうとした。しかしそれは外見では分からなかった。

サンダース「さて、それじゃあ行くぜ……っとアクアはまだ時間かかるか？」

アクア「うん、あと「進化型」と「アストラス」が……」

サンダース「分かった、なるべく急いでくれよ！」

アクア「オツケー！」

それからサンダースはヒードランを見た。

サンダース「行くぜ、“チャージビーム”！」

サンダースはもう一度“チャージビーム”を発射、しかし

ヒードラン「無駄だ!“ダークメタルクロー”」

ヒードランはまた“ダークメタルクロー”で切り裂いた。

ヒードラン「ふん、最初と同じ・・・」

サンダース「それはどうかな？」

ヒードラン「何!?!」

ヒードランは声が出たその方向に驚いた。なんと後ろからだったのだ。

ヒードラン「は、はや・・・」

サンダース「“サンダーテール”！」

サンダースは自身の尾に電気を溜めて攻撃、その威力でヒードランを少しとばした。

ヒードラン「はあ、はあ……」

ヒードランは確かにその威力にも驚いた。しかし一番驚いたのは……

ヒードラン「なんだ……ヤツのスピード……」

そう、サンダースの最大の武器「スピード」だった。

ヒードラン「(“ダークメタルクロー”でヤツの“チャージビーム”を消した瞬間ヤツは消え、気づけば後ろにいた……速すぎる。だが……)こちらにはまだ“ダークマグマストーム”が残っている、勝負はこちらが優勢だ！」

サンダース「それはどうかな？」

ヒードラン「なに!?!」

ヒードランはサンダースの言葉に驚いたがサンダースは話しを続けた。

サンダース「確かに以前、お前の“ダークマグマストーム”に俺達は苦戦・・・敗北した。しかしそれは過去の話だ。今それが通用するとは限らない。」

ヒードラン「うるさい！よほど倒されたいらしいな。」

ヒードランは構えた。その構えは“ダークマグマストーム”を放つ時のものだ。

ヒードラン「また地獄の炎を見せてやる！！」

ヒードランは口に炎を溜めて

ヒードラン「ダークマグマストーム」！

“ダークマグマストーム”を発射した。

しかしサンダースは逃げるどころかその場で静かに“ダークマグマストーム”を見ていた。

ヒードラン「どうした、直前になって怖くなったか？」

サンダース「おいおい、そんなわけ無いだろ。」

ヒードラン「じゃあなぜ……」

サンダース「俺は「一人」で戦ってる訳じゃないんだぜ？」

ヒードラン「まさか……!?!」

ヒードランは先ほどアクアのいた場所を見た。するとアクアはいなかった。

ヒードラン「まさかもう召喚が!?!」

サンダース「行け、アクア! 召喚の力を見せてやれ!」

その瞬間、“ダークマグマストーム”に強烈な水流がぶつかり消した。さらにヒードランに向かっていく。

ヒードラン「くっ、 “まもる”」

ヒードランは“まもる”を発動、なんとか攻撃は防いだが大きく吹き飛ばされた。

ヒードラン「あれは……フェニックス!?!」

アクア「そうだよ、今の私の召喚の中で2番目の強さをもつ子……」

「アストラス」！！」

アストラス「キャルー！！」

アクアの背後には巨大なフェニックス・・・アストラスがいた。

サンダース「それが・・・アストラス・・・」

ヒードラン「ぐああああ・・・」

サンダース「ヒードラン！？」

アストラスに見とれそうになったサンダースだったがヒードランの悲鳴にヒードランを見た。

サンダース「一体どうしたんだ、ヒードラン！？」

ヒードラン「・・・僕はヒードランだよ。闇に支配されていないヒードランだ。」

サンダース「な・・・」

アクア「どづいうこと・・・？」

驚く二人だったがヒードランは泣いていた。

ヒードラン「話すよ、僕がダーク化してしまった原因・・・僕の過去を・・・。」

その時フィールドには静かに冷たい風邪が吹いた。

第七十九話 発動！第二の闇／闇の炎（後書き）

サンダース「ヒードランの過去？」

そう、ダーク化の原因は彼の過去にありました。

サンダース「それも気になるが・・・やっぱりアストラスってカッコいいな。」

イメージとしてはやっぱりフェニックスだね。

アクア「アストラス」

アストラス「キャー」

コアラ&サンダース「・・・ペット!？」

第八十話 発動！第二の闇々闇の巨人々（前書き）

今回はレジギガス戦です。

キノガッサ「きたあああああああ！！」

キノ「私たちの出番ですね。」

キノガッサ「俺の活躍を見逃すな！」

第八十話 発動！第二の闇の巨人

レジギガスをぶっ飛ばしてから数分、戦いは激化していた。

キノガツサ「ストライクハンマー!!!」

ストライクハンマー「ギガンティックハンマー」

キノガツサはストライクハンマーを大きく振り、ストライクハンマーは自身にパワーをまとわせる。

そんなコンビネーションが生み出した攻撃はレジギガスを襲った。

レジギガス「もうくらわん“ロックウォール”」

レジギガスが地面を殴ると岩の壁が出現、“ギガンティックハンマー”を防いだ。

キノガツサ「ちくしょう!」

ストライクハンマー「ひとまず離れましょう。」

ストライクハンマーの指示でキノガツサはひとまずレジギガスから離れ、キノのもとにきた。

キノガツサ「アイツ、何気に防御技まで使いやがって……」

キノ「強力な壁……ストライクハンマー、あの壁の弱点分かりますか？」

ストライクハンマー「分かりません、現段階ではあの壁が三重構造でできているということぐらいしか……」

キノ「そうですか……」

キノガツサ「まかせろよ」

キノ「えっ？」

キノガツサがいたのでキノはキノガツサの方を向いた。

キノ「まかせろって……何か手はあるの？」

キノガツサ「俺には分かんないけど……あるよな、ストライクハンマー？」

ストライクハンマー「ありますが……もう使っちゃいますか？」

キノガツサ「今使わねえでいつ使うんだよ!？」

ストライクハンマー「それもそうですね、ではいきますよ？」

キノガツサ「おう!!」

ストライクハンマー「ロードカートリッジ、「ギガンテストフォー
ム」!!」

ストライクハンマーはカートリッジをロード、するとストライクハンマーは一度小さな光の球体となり、次の瞬間大きなストライクハンマーになった。その大きさは通常の2、3倍はあるだろう。

キノ「これは・・・」

キノガツサ「おお、すごいなこれ」

ストライクハンマー「これが物体破壊専用フォルム「ギガンテスト」です。見た目は通常のフォルムの大きいだけです、機能的には先端に付いている「クリスタルハンマー」で物体破壊能力の向上、さらにもう片方についている「プレスハンマー」での広範囲敵制圧能力の向上などがプラスされています。」

キノ「なるほど・・・」

キノガツサ「破壊か・・・今一番いる能力だな」

ストライクハンマー「ですがこれを長時間使用すればするだけあなたにかかる負担も増加します。ですから・・・」

キノガツサ「分かってる、このギガンテスト・・・どれくらい持つ

？」

ストライクハンマー「今のあなたの体力でいえば30分といったところでしょう」

キノガッサ「30分・・・十分だ！！行くぞ！！キノ、サポート頼む！」

キノ「了解！」

キノガッサはレジギガスに向かって走り出す。するとレジギガスも構えた。

レジギガス「武器の強化・・・だが我には勝てない。それを教えてやる、”きあいパンチ”！」

レジギガスも負けじと技を発動、レジギガスの拳にエネルギーが溜まった。

キノガッサ「ストライクハンマー！！」

ストライクハンマー「”ギガンティックハンマー”！！」

キノガッサはストライクハンマーにエネルギーをチャージ、その勢いをレジギガスの”きあいパンチ”にぶつけた。

レジギガス「その技はさっき見た！もう効かな・・・！？」

レジギガスは”ギガンティックハンマー”を効かないと判断した。しかしその威力はレジギガスの判断を超えていた。

レジギガス「ぐっ・・・ぐあああああ！？」

キノガツサ「行っけー！！！」

”ギガンティックハンマー”の威力に負けたレジギガスはその勢いで後方へ飛ばされた。

キノガツサ「ストライクハンマー！！！」

ストライクハンマー”シードレスファイア”

キノガツサがハンマーをレジギガスに向けた。するとハンマーの先端からエネルギー弾が複数個発射され、レジギガスの元で爆発した。

レジギガス「おのれ・・・」

キノガツサ「まだだ！」

ストライクハンマー「バニッシュシード」

キノガツサの手にエネルギーが集まりそれをキノガツサが投げる、
投げたそれはレジギガスの足元に浸透し姿を消した。

レジギガス「（ミスか・・・）残念だった・・・な!？」

余裕に話すレジギガスだったが自身に起きた出来事に驚いた。

レジギガス「これは・・・蔓!？」

キノガツサ「さらに・・・」

ストライクハンマー「クラッシュ!！」

ストライクハンマーのコマンドにより爆発、レジギガスは完璧に防
げずもろにくらった。

その衝撃で蔓は切れた。

キノガツサ「オッシャー・・・うっ!？」

キノ「キノガツサ!？」

ストライクハンマー「マズイ・・・あまりにも力を使いすぎましたね・・・」

レジギガス「隙ありだ!!」

キノガツサ「!?!」

レジギガス「はかいこうせん!!」

レジギガスはキノガツサのピンチに気付き、「はかいこうせん」を発射、それはキノガツサにまっすぐ向かっていく。

レジギガス「どうだ!」

キノ「残念です、”ナチュラルキュア”」

レジギガス「!?!」

これはいけたと判断するレジギガスだったがキノが”ナチュラルキュア”を発動、発生したコアにぶつかり”はかいこうせん”はキノガツサにとどかなかった。

レジギガス「くっ・・・」

キノ「私が何のためにいると思ってたんですか?」

キノガツサを回復させながらキノはレジギガスに問う。

レジギガス「……」

キノ「私はキノガツサの邪魔をしに来たものではありません。サポートをしにきたんです」

レジギガス「……無駄だ」

キノ「えっ……」

レジギガス「この世にはできることとできないことが必ず存在するのだ。お前がサポートしたくらいでそのキノガツサは我に勝てな……」

キノガツサ「だまれ!!」

レジギガス「!?!」

ずっと回復されていたため黙っていたキノガツサだったがついに口を開いた。

キノガツサ「できるかできないか、そんなのみんなが勝手に決めたことだ。本当に判断するのは自分だ、自分ができると思えばできるんだ。」

レジギガス「違う！」

レジギガスはキノガツサの言葉に反応しムキになった。

レジギガス「そんなものは自分では決められない、そんなもの……」

キノガツサ「そんなの……逃げてるだけじゃねえか、本当になんとかしたいこととかあるんならそれができるように頑張るんだよ。」

キノ「そうです、私はキノガツサのサポートを本気でしたい、だからそれができるって信じてます！！」

キノガツサ「俺だってお前を倒せるって信じてる、だから……がんばる！！」

キノ「”パワーキュラー”、”スピーディングリース”」

キノはキノガツサの攻撃とスピードを強化、キノガツサはそれを受け取った。

キノガツサ「サンキュー」

キノ「頑張って！！」

キノガツサ「いくぜ、ストライクハンマー！」

ストライクハンマー「アースプラッシャー」

キノガツサがストライクハンマーで思いっきり地面を叩く、するとレジギガスの足元から岩が突き出てレジギガスを襲った。

レジギガス「くっ……」じしん」

レジギガスは”じしん”を使用、それによって岩は崩れ、結果攻撃はとどかなかった。

レジギガス「ふう……」

キノガツサ「油断か？」

レジギガス「な……!？」

レジギガスが気付いた時、キノガツサはすでにレジギガスの目の前に来ていた。

レジギガス「速い……」

ストライクハンマー「ロードカートリッジ」

ガシャン！！ストライクハンマーは自己で判断しカートリッジを口
ードした。

キノガツサ「（ナイスだ、ストライクハンマー）くらえ、”リーフ
メガハンマー”！」

キノガツサはストライクハンマーに草エネルギーをまとわせて攻撃
した。この”リーフメガハンマー”は重くて扱いにく分当たった時
の威力はすさまじく単衝撃型超高攻撃、レジギガスも相当なダメー
ジのはずだった・・・しかし

レジギガス「甘かったな。」

キノガツサ「なに!？」

キノ「しまった、”カウンター”!？」

レジギガス「そうだ、どんなに強力でもこの技で跳ね返す、くらえ
！」

キノ「キノガツサ!？」

前回の敗因であるこの”カウンター”、これを隠し技に持っていた
レジギガスは勝利の確信を得た。しかしキノガツサにピンチの表情
はなかった。

レジギガス「はあああああああ!!」

レジギガスの”カウンター”がヒットし、キノガツサに大ダメージ・
・は、しかしなかった。

レジギガス「な・・・に・・・?」

なにが起ったのかレジギガスの方が吹き飛ばされ、キノガツサはキノ元に来た。

キノ「キノガツサ・・・どうやって・・・」

キノガツサ「バイツーカーンター”・・・ってやつだ」

キノ「バイツーカーンター”?」

ストライクハンマー「説明すれば相手の”カウンター”をさらに跳ね返せる技です。これでレジギガスの”カウンター”を跳ね返したんですよ。」

キノ「なるほど・・・」

レジギガス「ゴホ、ゴホ。や、やるな・・・キノガツサ・・・」

キノガツサ達の説明の途中ながらレジギガスは起き上った。

キノガツサ「あいつ・・・まだ立つのかよ・・・」

レジギガス「お前たち・・・早く逃げろ。」

キノガツサ「は？」

キノ「それは一体・・・」

レジギガス「ようやく戻ったのだ、私の意識が。一時的にだがな。」

キノガツサ「な・・・意識だと!？」

キノ「どういうこと・・・?」

レジギガスの言葉に二人は疑問の表情だ。

レジギガス「話そう、私の暴走が始まる前に、私の・・・過去を。」

第八十話 発動！第二の闇々闇の巨人（後書き）

キノガツサ「あいつにもなんかあるんだな」

YES！

キノガツサ「なんで英語？」

なんとなくだよ。

キノガツサ「・・・（汗）」

第八十一話 発動！第二の闇の闇の月（前書き）

今回はクレセリアです。

ポリズ「作者さん、2010年に何とか間に合いましたね。」

うん、ミルキイとこれの両方を12月31日に更新したかったからね。

シャロ「間に合ってよかったですね」

うん・・・ってシャロ!?

シャロ「はい、来ちゃいました!」

まあいいか。

ポリズ「では第八十話スタートです!!」

第八十一話 発動！第二の闇の闇の月

クレセリアとの戦闘に先に作戦が的中し、精神的にリードしたポリズとハスボー。

しかしクレセリアもダーク化し戦いは同等となった。

ポリズ「シグナルビーム」

クレセリア「ひかりのかべ」

ポリズの”シグナルビーム”はクレセリアに向かっていくがあと少しの所でクレセリアに防がれてしまった。

クレセリア「私にそんな攻撃が通用するとも?」

ポリズ「まだです!」

ハスボー「れいとうビーム」

ハスボーは“れいとうビーム”を発射、低温の冷気がクレセリアに迫った。

クレセリア「あまいですね“ダークミラーフォース”、あなたがく

「らいなさい」

クレセリアはダーク化したことダーク技“ダークミラーフォース”を発動、“れいとうビーム”は弾かれハスボーへと向かった。

クレセリア「これで・・・」

ポリズ「「終わり」・・・とても思いましたか？」

クレセリア「!?!」

ポリズ「ハスボー!!」

ハスボー「うん、大丈夫!!」

クレセリア「そ、そんなバカな・・・」

ポリズが呼ぶとハスボーは返事をしたということはまだ無事ということだ。

クレセリア「（バカな・・・）ダークミラーフォース”は私のバリア系の技の中でも2、3番を争う技・・・そう簡単に耐えられるわけが・・・!?!）な、なにあれ・・・」

自身の技に自信を持つとするクレセリアだったが目の前の出来事

に目を疑った。

クレセリア「そ、そんな・・・」

ハスボー「ミストラルウォール・・・攻撃を跳ね返すバリアだよ」

クレセリア「そんな、”ダークミラーフォース”だって反射型のバリア、それを跳ね返すなんて・・・」

ポリズ「これがあなたのなめていたハスボーの実力ですよ」

ハスボー「それじゃあ・・・えいっ!」

ハスボーが力をいれると”れいとうビーム”は反射、クレセリアの元へ向かった。

それに反応できなかったクレセリアはそのまま攻撃をくらった。

クレセリア「くっ・・・(まさかここまで・・・)」

ポリズ「どうですか、彼の成長は?」

ハスボー「強くなったでしょ?」

得意げに言うハスボーに「やった」と笑むポリズ。そんな二人のほほ笑みがクレセリアの憎悪を上げた。

クレセリア「くっ……まだまだあああああ!」

クレセリアからさらに黒い闇があふれた。さっきの比ではない、巨大な闇だ。

ポリズ「ちよつと挑発しすぎましたかね……?」

ハスボー「あはは……」

そしてクレセリアが発生した闇を完璧に取り込むとその目は暗すぎる闇の色に染まっていた。

クレセリア「では準備ができるまで、少しの間、楽しみましょうか?」

ハスボー「楽しむ?」

ポリズ「(準備……? 一体何の……? いやそれよりも楽しむって……)……ハスボー、何をしかけてくるかわかりません。注意しま……」

クレセリア「"ダークサイコビーム"」

ポリズ「"れいとうビーム"」

クレセリアは闇のビームを発射、しかしポリズが冷静に判断する。そのおかげで”ダークサイコビーム”は凍りつき、攻撃は無効になった。

ポリズ「そんな攻撃が通用するとも……」

クレセリア「”ダークサイコビーム”」

ポリズは挑発をかけるがクレセリアはそれを無視、さっき防がれた攻撃を再び繰り出す。

ポリズ「!?!”れいとうビーム”」

ポリズは同じように”れいとうビーム”を発射、”ダークサイコビーム”がまた凍りついた。

ハスボー「同じことしたって無駄だよ!」

クレセリア「ふふふ……」

ハスボーの言うとおり”ダークサイコビーム”はまた「ボトツ」と音を立てて落ちた。しかしクレセリアは笑った。

ポリズ「（攻撃を防がれたのに笑ってる・・・？なぜ・・・！？）ま、まさか！？」

クレセリア「ダークサイキックスマツシャー」

クレセリアはさっきよりも大きなビームを発射した。

ハスボー「少くらしい威力があがっても・・・」

ポリズ「ハスボー、気をつけて下さい！！あれは・・・」

ポリズはクレセリアの作戦に気付いて攻撃を構えつつハスボーに注意、ハスボーも一応警戒し”ミストラルウォール”は構えた。

ポリズ「はかいこうせん”！！”」

ポリズは”はかいこうせん”を発射、それは”ダークサイキックスマツシャー”と衝突し同威力に思えたがしばらくして”ダークサイキックスマツシャー”が勝った。

ハスボー「えっ・・・？」

ポリズ「ハスボー、バリアを・・・早く！！」

ハスボー「う、うん。”ミストラルウォール”」

ハスボーはポリズの指示で”ミストラルウォール”を発動、”はいこうせん”で威力の弱まった”ダークサイキックスマツシャー”と激突した。

ハスボー「くっ、お、重い・・・!？」

ハスボーは攻撃を防ぎつつ「重い」、つまりは高い攻撃力を持った攻撃だと実感、しかしそれを跳ね返した。

ハスボー「これでこの攻撃はクレセリアに・・・えっ!？」

反射に成功と思ったハスボーだったが目の前の現実とは違っていた。

ハスボー「なんで・・・？」

そう、跳ね返したはずの攻撃は丸い塊となり地面に転がっていた。

ハスボー「あれは確かにビームの攻撃だったのに・・・」

ポリズ「分解……ですよね？」

クレセリア「ふふふ……」

ハスボーは焦るがポリズは当たり前のごとくクレセリアに質問、クレセリアもほほ笑んで帰した。

ハスボー「どういこと？」

ポリズ「つまりあの攻撃をはじめたときに分解してあの塊にしたんですよ」

ハスボー「ええ〜！？そんなことできるの？」

ポリズ「あの攻撃……おそらくは”ダークサイコビーム”も含まれているんですよ」

ハスボー「”ダークサイコビーム”？でもクレセリアはそんな技……」

ポリズ「”ダークサイコビーム”はおそらく他強化技なんですよ。つまりは単体での攻撃もOK、あとから出す技のパワーアップにも使用可能といったところでしょう。その証拠に凍らせた問わ言え技が残っていましたから……」

ハスボー「何それ!？」

クレセリア「ふふふ、その通り。この技は他強化技です。残ったエ

ネルギーが”ダークサイキックスマツシャー”の糧となる。それが二個もプラスされていたんです、そこのお馬鹿なポリゴンが気付かなければ今頃は・・・浮草さんはセーフでしたね〜?」

ハスボー「んん〜!?」

ポリZ「そんなことはありません、私だってハスボーに助けられています。お互いさまです!」

ハスボー「ポリZ・・・」

馬鹿にされて怒るハスボーだったがすぐにポリZがフォローに入る。

ポリZ「事実ですから」

クレセリア「わけのわからないことを・・・結局強くなる時は1人なんですよ?頼れるのも自分ただ1人・・・」

ポリZ「違いますよ、それは個々で強くなってチーム全体の強さをあげるためなんです。1人で強くなって仲間を守るように・・・。そんな志を持った人がいるチーム・・・頼れないわけがありません。

┌

クレセリア「分からない、分からない、あなたの言葉の意味が・・・
うわああああ!?!」

ポリZ「クレセリア!?!」

突如クレセリアに変化、闇が溢れクレセリアはもがき苦しみ始めた。

ハスボー「ポリズ、クレセリアが……」

ポリズ「なんかマズイですね……（これはおそらくさっき言っていた「準備」……それが完成した……と考えるべきですね。この闇の増加……つまり準備は……ダーク化による更なる能力の向上……!?)」

クレセリア「あ……」

ハスボー「クレセリアが……」

クレセリア「い、今だけですか……」

ポリズ「な、なにがですか!？」

クレセリア「……」

ポリズは一瞬怯んだがすぐクレセリアに強い口調で言葉を発した。しかしクレセリアから強い口調はかえってこない。

ハスボー「ねえ、なんか様子が変わだよ？」

ポリズ「確かに……でも警戒しちゃうだけですよ」

ハスボー「う、うん」

クレセリア「わ・・・」

その瞬間ずっと口を閉じていたクレセリアが口を開いた。

クレセリア「私はクレセリア、支配されていないクレセリアです。」

ポリズ「支配!?!」

クレセリア「はい。今は支配からとかわれています。お話を聞いて・・・ください」

ハスボー「どうする?」

ポリズ「聞きましょう、今の彼女は本物です。」

ハスボー「だよね。」

ハスボーはポリズの答えに少し嬉しそうにした。

クレセリア「ではお話しします。私のダーク化・・・過去のことを・・・」

第八十一話 発動！第二の闇の月（後書き）

ついにクレセリアにも異変！！

ポリズ「次回は過去ですね！！」

シャロ「作者さん、できればまた二作品とも1月1日に・・・」

今、白紙の状態から！？それはさすがに厳しいな・・・

第八十二話 ヒードランの過去（前書き）

今回はヒードランの過去です。

サンダース「何があったんだ？」

それは本編で！！

第八十二話 ヒードランの過去

時は今から数年前、フォルターナーに一人のヒードランがいた。

ヒードラン「いつてきまーす!」

彼はヒードラン、後にサンダース&アクアと戦うことになるヒードランだ。

彼は元気よく家を飛び出した。そして学校へと向かう。しかし悲劇はこれからだった・・・

ヒードラン「おはよー!」

ヒードランは教室に入り元気にあいさつするが誰も返事をしてくれない。そんな中一匹のカメールが来た。

ヒードラン「おはよ、カメール君!」

カメール「てめえ、誰に口きいてんだ!」

ヒードラン「いたっ!?!」

ヒードランがあいさつするとカメールは即座にヒードランにビンタ、体格の差からヒードランは飛ばされないがやっぱり痛かった。

ヒードラン「な、なんでそんなことするの？」

カメール「なんで？決まってるだろ、お前がむかつくからだよ！」

ヒードラン「な、なんでムカつくの!？」

カメール「それはな……」

カメールが話そうとすると扉がガラガラと開き先生がきた。

カメール「ちっ、放課後体育館の裏に來い、話してやるよ。」

ヒードラン「う、うん」

それからカメールもヒードランも席に戻った。するととなりのワカシャモが……

ワカシャモ「ヒードラン君、大丈夫？」

ヒードラン「何が？」

ワカシャモ「だって呼び出されたでしょ？私心配で……」

ヒードラン「大丈夫だよ、カメール君は友達だし」

ワカシャモ「と、友達!？」

ワカシャモは心配するがヒードランは心配を大丈夫とかえし、友達とまで言った。これにはワカシャモもビックリだ。

ワカシャモ「さっきそこで叩かれたのは？」

ヒードラン「まあそんな時もあるよ」

こんな感じでヒードランは今回のことを軽くすませていた。このヒードランへのいじめは結構前から始まっていた。しかし誰も文句を言えず、なによりヒードラン自信がこんな感じであったため誰も止めることができずにいた。

そして放課後……

ヒードラン「来たよ、カメール君」

カメール「よお、よく逃げずに来たな」

ヒードラン「だって教えてほしいんだもん、なんでムカつくのか」

カメール「だから……そういうのがむかつくんだよ!!!」

カメールはいきなり飛びかかりヒードランを叩いた。

ヒードラン「い、いきなり暴力なんて……」

カメール「おい、お前らも出てこい!!」

カメールがそういうとあちこちからいろんなポケモンが集まってきた。

ヒードラン「な、なにこれ……」

カメール「お前をいじめるって言ったら集まってきた連中だ。やっ
ちまえ!!」

一気にポケモンたちが飛びかかるがヒードランももう我慢できな
かった。

ヒードラン「そっちがその気なら……」おにび”

ヒードランは”おにび”を発生させた。この”おにび”は触れれば
やけど状態になる技、なのでポケモン達は一斉に襲うのを止めた。

カメール「さすがだな、この学校のトップ10に入るだけの実力者だ」

ヒードラン「やめて、今なら今回のことはなかったことにしてあげる」

カメール「ふん、そいつはごめんだ。おい！」

ポケモン「ああ。」

集団の一人にカメールが指示するとポケモンは構えて・・・

ポケモン「マッドショット」

”マッドショット”を発動、ヒードランは炎・鋼タイプのため4倍のダメージをくらった。

カメール「いまだ!!」

全員で一斉にヒードランに飛んだ。ヒードランは全員の下敷きになり技を出せなかった。

ヒードラン「こ、これじゃ・・・」

カメール「やっちまえ!!」

それからカメール達はヒードランを叩いたりした。攻撃した。しかしヒードランは攻撃技を出せばだれかが傷つくと思いき技を使わなかった。

それから数十分、ヒードランは解放されたがボロボロだった。

カメール「はあ、満足だ。」

そうしてカメール達は帰っていった。だがヒードランは傷つけられ地面にひれ伏していた。

ヒードラン「僕が・・・僕が弱いから・・・ぐう・・・強く・・・なりたい・・・」

ヒードラン「強くなりたいーーーーー!!!!!!」

ヒードランの涙も入った悲しみの叫びがあたりに響いた。するとヒードランの前に黒い塊が来た。

黒い塊「強くなりたいか？」

ヒードラン「・・・うん」

黒い塊「どれくらいだ？」

ヒードラン「僕は……」

その瞬間ヒードランの目に変化、黒き闇に染まった。

ヒードラン「いや、俺はあいつらを……この腐った世の中を変えるくらい力がほしい……」

黒い塊「そうか、ならばちょうどいいな」

ヒードラン「ちょうどいい？」

黒い塊「ああ、ちょうど探していたんだ。この世を変えたいという強き思いをもったポケモンを……」

ヒードラン「それは……まさしく俺だ」

黒い塊「ああ、一緒に変えようぜ、世界を」

ヒードラン「ああ」

黒い塊「そのためにこれを取りこんでくれるか？」

黒い塊は自分から黒い影のようなものを取り、ヒードランに渡した。

ヒードラン「これは？」

黒い塊「強くなる薬のようなもんだ、それを体に取り込むイメージをしろ」

ヒードラン「分かった」

そしてヒードランは目をつぶりイメージした。自分がこれをまとうその姿を、そしてこの世界を変える姿を・・・するとヒードランの体に変化が起きた。

ヒードラン「な、なんだこれは!？」

黒い塊「闇がお前の心を把握したようだ。」

ヒードラン「えっ・・・?」

黒い塊「お前の体も心も・・・もう闇のものだ」

ヒードラン「うわあああああ!?!」

ヒードラン「これが・・・僕のダーク化の原因だよ・・・」

アクア「ヒドイ・・・」

サンダース「あ、ああ・・・」

ヒードラン「ぐあああああ!!」

サンダース「ヒードラン!？」

ヒードラン「この・・・自己の意識が・・・戻るのは・・・ダーク化2ndの前触れなんだ・・・。多分・・・マズイ・・・。かなり・・・強化される・・・」

アクア「大丈夫、ちゃんとたすけるよ!!」

サンダース「ああ、途中で見捨てたりしない!!」

ヒードラン「ありがとう、でも・・・これは・・・ホントに危険だと・・・思うんだ。僕の体が・・・そう言ってる。だから・・・逃げて・・・いい人を最後に見れて良かった。もう・・・誰も・・・傷つけたくないんだ・・・。だからお願い・・・約束して・・・逃げらって・・・うわああああ!!」

サンダース「ヒードラン!？」

アクア「いやだああ!!」

ヒードラン「最後まで・・・あり・・・がとう・・・」

涙するヒードランを闇が覆った。そして本当に闇と化したヒードランが現れた。

ヒードラン「さあ、ここからがホントの勝負だぜ……」

サンダース「許さない……」

ヒードラン「は？」

サンダース「お前は……闇は絶対に許さない!!」

ヒードラン「なんだ!？」

サンダース「悪いがヒードラン、お前とのにげるって約束は守れない!!」

その瞬間サンダースから凄まじいオーラが発生、同様にアクアからもエネルギーが溢れていた。

サンダース「今、俺たちが救ってやる!!」

ヒードラン「な、なんだこの力は……」

サンダース「お前も行けるよな? アクア？」

アクア「もちろん……いけるよ」

ヒードラン「お前ら……まさか……」

ヒードランが怯む理由それはすぐに分かった。

サンダース「見せやるよ、俺たちの本気を」

アクア「私たちの・・・リミットバースト」をね・・・」

第八十二話 ヒードランの過去（後書き）

サンダース「ひどいな・・・」

アクア「ヒードランもつらかったんだ・・・」

そういうこと、だから絶対救ってあげて！

サンダース「もちろんだ！！」

アクア「任せて！！」

第八十三話 レジギガスの過去（前書き）

レジギガスの過去です。

キノガッサ「こりゃヒデーな」

キノ「こんなことあるんですね・・・」

なぜみんながこんなコメントなのかは本編で。

第八十三話 レジギガスの過去

あるところに一人のレジギガスがいた。このレジギガスはまだ学生、しかしその学校も今年で卒業のため仕事を探していた。仕事を探す以前のかれは・・・

先生「学年1位は・・・レジギガスだ！」

生徒「わあああ!!！」

レジギガス「ほ、ホントですか？先生？」

先生「ああ、本当だ！」

生徒「スゲーなレジギガス！」

生徒「もうこれで1年連続じゃん！」

レジギガス「ああ・・・」

生徒「やったな、レジギガス！」

彼は成績優秀だった。今回はついに学年で1位を1年間ずっととってきたらしい。そんなレジギガスをクラスメイトも温かく喜んだ。他にも・・・

生徒「レジギガス!!」

レジギガス「任せろ!!」

レジギガスはシュート、そのボールは見事にゴールに決まった。

生徒「やったぜ! ナイスレジギガス!」

レジギガス「・・・ああ!!」

ほめられて少し嬉しそうなレジギガス、彼はスポーツ面で見ても優秀なためクラスの人気者だった。ただししゃべり口調と一人称が「我」というのも当初は「えっ?」といった感じだったが今では気にならない。みんな彼の個性として受け止めてくれたようだ。

そんな一見充実していたレジギガス、しかし彼の家庭は少々お金に困っていた。

レジギガス「ただいま・・・」

お母さん「お帰り、レジギガス」

帰宅したレジギガスをお母さんのレジギガスは優しく迎えた。しかしあまり顔色は良くないようだ。

レジギガス「母上、大丈夫か？」

お母さん「大丈夫よ・・・ゴホゴホ・・・」

レジギガス「無理は・・・いけない・・・」

大丈夫と告げるお母さんだったが体はそうではないらしい、レジギガスはお母さんを気遣いイスに座らせた。

お母さん「ごめんね・・・こんなで・・・」

レジギガス「大丈夫・・・」

レジギガスは優しくそう言った。

レジギガスの家庭は父が入院、母も体調が悪く生活は補助金だけという苦しい生活だった。

お母さん「ごめんね、もつといい家なら・・・」

レジギガス「我は・・・この家が好きだ」

またレジギガスというポケモンは知っての通り結構大きい。そのため家も大きく、それにかかるお金も大変だった。

レジギガス「それに我も今年から仕事する、そしておかねを稼いでくる」

レジギガスはこの就職をやつと両親に恩返しできると喜んでいたら、だから勉強も頑張り、いい会社に行けるようにスポーツも頑張った。そして就職する会社を多めに数十個決め、面接へと向かった。

レジギガス「失礼します」

礼儀正しく1つ目の会社の面接室に入るレジギガス、しかし大きいため少し苦労してなんとか入った。

レジギガス「番号1番レジギガスです」

試験管「はい、分かりました」

そしてレジギガスが「頑張ろう」と思った瞬間、予想外の言葉が試験管から発せられた。

試験管「君、失格ね」

レジギガス「!?!」

レジギガスは目を疑った、耳も疑った。

レジギガス「あの・・・今なんて・・・」

試験管「だから失格だよ、失・格」

あまりのことにレジギガスはもう一度聞き返す。しかし返事は変わらない。

レジギガス「な、なぜですか?まだ質問もなにもないのに・・・」

試験管「君のその体だよ」

レジギガス「!?!」

試験管「君は大きい、だから会社のスペースをとっちゃうんだよ」

レジギガス「!?!」

試験管「分かった?はい、次・・・」

レジギガスはトボトボ部屋を出た。

レジギガス「でもまだある！」

レジギガスは気を取り直して次の試験会場に向かった。しかし次の試験でも・・・

試験管「失格」

次でも・・・

試験管「失格」

結局8つの会社は「大きいから」という理由で即失格になった。ちなみに今受けたのは8社、つまりすべてそれで失格になったのだ。

そして9社目・・・

試験管「失格」

ここでも失格だったが今回のレジギガスはちゃんと抗議した。

レジギガス「そ、そんなの卑怯じゃないか！ちゃんと試験していた
だきたい！！」

一生懸命言うレジギガス、しかし試験管は笑った。

試験管「ちゃんとしたって無駄ですよ？そんなの時間の無駄だ。大
体何が・・・うぐっ！？」

試験管はその瞬間宙に浮いた。レジギガスが殴ったのだ。

試験管「お前そんなことして・・・」

レジギガス「ふざけるな！こっちは生活がかかっているんだ！」

試験管「そんなの知ったことか！」

レジギガス「！？」

それからレジギガスは何発も殴った。しかしそれが原因で他の会社
も受けられなくなった。

レジギガス「ヒド・・・過ぎる・・・」

レジギガスはひとり公園いた。そしてレジギガスの顔から何か落ちてきた、涙だ。

レジギガス「もう・・・父上にも・・・母上にも・・・なんて言うていいんだ・・・」

レジギガスは悲しみに暮れていた。そこへ黒い塊が現れた。

黒い塊「力が・・・ほしいか？」

レジギガス「・・・ああ、ほしい」

レジギガスは一瞬何かと思ったがそれもどうでもよくなり素直に答えた。

黒い塊「ならばこれを・・・」

黒い塊が出したものはこれまた黒い塊だった。

レジギガス「これは・・・？」

黒い塊「力を得ることのできるものだ。これを取り込めば力が手に入る」

レジギガス「これで・・・」

レジギガスは黒い塊を見た。その色は黒の闇そのものだったが今のレジギガスには輝かしいものに見えた。

レジギガス「どうすればいい？」

黒い塊「それを体に取り込むイメージをするのだ」

レジギガス「分かった」

レジギガスはイメージした。この闇を取り込む自分を、すると変化が起きた。

レジギガス「な、なんだ!？」

黒い塊「闇がお前を支配するのだ」

レジギガス「なに!？」

黒い塊「もうお前は闇のものだ!！」

レジギガス「ぐあああああ・・・」

レジギガス「というわけだ」

キノガツサ「……」

キノ「……」

キノガツサもキノも黙っていた。

レジギガス「さあ、話は終わりだ。じきに我は暴走する、ダーク化2nd……ダーク化の更なる強化が始まる。早く逃げろ」

キノガツサ「だれが……だれがにげるか！お前は何も悪くない、なのに苦しいんだろ？なら俺たちが助けてやる！！」

キノ「そうです、困った人を助ける……これもチーム「絆」の仕事です」

レジギガス「馬鹿をいうな！この強化は凄まじいんだぞ！」

キノガツサ「ああ、なら余計に助けたくなる」

レジギガス「何を……はや……く……にげる……。もう……これ以上……他人に……迷惑をかけたく……ない……」

キノガツサ「他人？そりゃちげーな。俺たちはもうダチだ！一度拳

を交えてるんだからな」

キノ「そうですね、キノガツサのお友達なら私にとってもお友達です」

この言葉にレジギガスは泣いた。

レジギガス「うぐ、うぐ……お前らは……いいやつだ……だからこそ……逃げてくれ……頼む……から……うわあああああ!?!」

キノガツサ「レジギガス!?!」

泣いたままレジギガスは闇包まれ、中から闇のレジギガスが現れた。

レジギガス「話は終わったか?」

キノガツサ「ああ、お前……ぶっ倒す!?!」

キノ「絶対にです!?!」

レジギガス「ふん、やれるもんならやってみろ、どうせ無理だ。このレジギガスのようにな!?!なに?」

レジギガスが余裕な中、キノガツサとキノに変化があった。

レジギガス「これは・・・」

キノガツサ「無理なんかじゃねえ。言っただろ、絶対倒すって・・・」

キノ「守りたい、力になりたい、そんな気持ちは時にありえない力を生むんです！！だから発動したんです・・・」

キノガツサ&キノ「リミットバースト」が！！」

レジギガス「なに！？」

ストライクハンマー「さすが私のマスターとその愛人ですね」

キノガツサ「ストライクハンマー、お前も本気になれよ」

ストライクハンマー「そうですね、さすがにさっきの話にはイラッとききましたから」

その瞬間ストライクハンマーはカートリッジをロード、ストライクハンマーにエネルギーが溜められた。

キノガツサ「行くぜ、絶対にアイツを助ける！！いいな！！」
キノ「もちろん！！」

ストライクハンマー「了解です！！」

第八十三話 レジギガスの過去（後書き）

キノガツサ「俺絶対アイツをたすける！！」

キノ「もちろん！！」

ストライクハンマー「でないところ両親も悲しまれます」

そうだね、みんな頑張って！！

第八十四話 クレセリアの過去（前書き）

今回はクレセリアの過去です。

ハスボー「クレセリア・・・」

なんでこんなコメントかは本編で。

第八十四話 クレセリアの過去

そこにはクレセリアがいた。只今授業を受け中。

先生「それじゃあここを・・・クレセリア、できるか？」

クレセリア「はい」

クレセリアは黒板に向かいスラスラと計算してく、そして答えが出た。

クレセリア「答えはこれでどうでしょう？」

先生「よし、正解だ」

このようにこのクレセリア、非常に頭がよかった。なのでクラスでも一目置かれておりいた。

生徒「クレセリア、ノート見してくれないか、たのむ!」

クレセリア「いいですよ、はい」

生徒「ありがとうよ!」

生徒「お前またクレセリアにノート借りてるのかよ」

生徒「だってクレセリアのノートみやすいんだぜ！」

クレセリア「ふふふ」

こんな会話を聞いてクレセリアは微笑む。自分が頑張ったこと（勉強）がみんなの為に役立つている、それがうれしいのだ。そんな一見いい生徒ばかりのクラスのようにすがそうではなかった。

ある日の授業でのこと

生徒「おい！」

生徒「な、なに！？」

生徒「お前がこの前俺に言ったやり方と正解、ちげーじゃねえかよ」

生徒「え、でも僕あの時分からないうって言ったのに君が無理やり迫ってきたから……」

生徒「なんだと、テーマいいわけすんのかよ！」

先生「こら、止めなさい！」

二人の生徒がケンカした・・・と言っても片方が無理にケンカを売っただけ。しかしそのケンカを売った彼こそがクラスのヤンキーだった。

原因は以前の授業が分からず他の生徒に聞いて、その生徒は「分からない」と言ったものの無理やりに教えると言われ自分の考えを教えた。

すると今日の授業でのやり方と違ったので怒った・・・というもの。

クレセリア「もうすぐ卒業・・・彼ともやっと離れられる・・・」

┌

クレセリアはそう思った。このクレセリアは今年で卒業らしい。だからやっとヤンキーと離れられるのだ。

もちろんクレセリアはヤンキーが嫌いだった。

毎回授業でみんなを困らせる、それがクレセリアの思うヤンキーだった。

そして卒業前、最後のテスト。

この学校ではちよくちよく中間テスト、期末テストはあるが結局はこの最後のテスト、通称「ラストテスト」で全てが決まる。

つまりは中間も期末も単なる実力試しというわけだ。

そんな日をこのクラスも迎えていた。

先生「それじゃあ・・・始め!!」

先生の合図でテストが始まった。
これで全てが決まるというだけあって難しい、クレセリアも悩んでいた。

クレセリア「（ここはここでございだから・・・ん？」

クレセリアは考えている途中あるものが目に見えた。

クレセリア「あれは・・・紙？」

そう、紙だ。おそらくはカンニングペーパーだろう。そしてそれを持っていたのは・・・

クレセリア「（彼は・・・）」

ヤンキーだった。先生に見つからないようにコッソリ紙を見て答えを書いていた。他にも彼から紫の何かが出た。

クレセリア「（なんて人かしら・・・）」

クレセリアは少し出てくる怒りを抑えてテストに取り組んだ。しかし次の瞬間、信じられないことが起きた。

クレセリア「あ、あれ？」

クレセリアに変化が起きた。

クレセリア「く、く、“苦しい”・・・」

クレセリアは“どくどく”をくらっていた。その発動者は・・・

クレセリア「あの・・・ヤンキー」

そう、さっきの紫の何かこそ“どくどく”だった。

クレセリア「苦しい・・・だけど・・・」

クレセリアは必死に答えを書いた。

そしてテスト終了と同時にクレセリアは倒れて保健室に運ばれた。

次の日、すっかり良くなったクレセリアは先生の元に来ていた。

クレセリア「先生、昨日彼はカンニングをしていました。それに私

に“どくどく”を使ってきました。」

クレセリアは昨日のカンニングと“どくどく”について話した。
しかし

先生「ありがとう、でも処罰はねえ・・・」

クレセリア「な、なんですか？彼は悪いことをしたんですよ!？」

なんと先生は彼を処罰しないと云った。これは正義感の強いクレセリアにとっては有り得ない話だった。

先生「しかしもう卒業だし・・・仕方がないんじゃない・・・」

クレセリア「卒業するからこそきちんと処罰して、正しき心を持って社会にだして行くんじゃないんですか!？」

怒るクレセリア。しかし次の言葉にクレセリアは失望した。

先生「でもね、正しいことばかりで世の中生きていけるわけじゃ・・・」

その瞬間クレセリアは職員室を飛び出した。

クレセリア「何が仕方ないよ！みんな頑張って勉強したのに・・・
これじゃあ勉強した人がバカみたいじゃない！」

そして帰る時間クレセリアは帰りも怒っていた。

クレセリア「正しいことばかりで世の中生きていけるわけじゃない・・・じゃあそれは正しくないじゃない！」

クレセリアは許せなかった。生徒の行動、先生の態度、でも一番は「正しいことばかりで生きていけるわけじゃない」という言葉が。

958

クレセリア「正しい」っていうのは「合っている」「正解している」から正しいのだ。それでは生きていけない・・・じゃあ正しいことなんかじゃないじゃない！！」

クレセリアは立ち止まり空を見た。

クレセリア「もう何が正しくて何が間違いか・・・分からないわ・・・」

そんな時クレセリアの目の前に黒い塊が現れた。

クレセリア「あ、あなた何!？」

黒い塊「俺はただの黒い塊だ。お前は何が正しいのか分からないらしいな」

クレセリア「ええ、もうなにがなんだか・・・」

クレセリアの表情が暗くなる。するとどこか黒い塊は微笑むような感じがした。

黒い塊「ならば・・・俺が教えてやる」

クレセリア「えっ?」

黒い塊「力をもつもの」それが正しいのだ」

クレセリア「力・・・」

黒い塊「そうだ。いつだってこの世界は力を持つ者によって続けられる。つまりは力を持つ者が正しいのだ」

クレセリア「力・・・」

黒い塊「これを」

黒い塊はクレセリアに小さな黒い塊を渡した。

クレセリア「……これは？」

黒い塊「力を得るための物だ。それを取り込むイメージをしる。そうすれば力を得ることができる」

クレセリア「……」

クレセリアはイメージした。

クレセリア「この塊を……取り込む……」

すると黒い塊はクレセリアに吸収された。しかし異変が起きた。

クレセリア「な、なにこれ!？」

黒い塊「安心しろ、闇がお前を受け入れたということだ」

クレセリア「闇が!？」

黒い塊「さあ闇に支配されるがいい!！」

クレセリア「きゃああああ!！」

――

クレセリア「という訳です」

ポリズ「そう・・・だったんですか・・・」

ハスボー「クレセリア・・・」

クレセリア「さあ、私は過去を話しました。ですからもう行って下さい。これから始まる強化は凄まじいですが自我を保てない、また闇の私が出てきます。だから・・・」

ポリズ「逃げろ」といいたいんですか？」

クレセリア「もちろんです！！はやく！」

ポリズ「お断りします」

クレセリア「!？」

クレセリアはポリズの発言に驚いたが横を見るとハスボーも「うんと頷いた。つまり逃げないということだ。

クレセリア「どうして!?!早く逃げて下さい!私はもう誰も・・・」

傷つけたく・・・ない・・・」

ポリズ「つまりは私達には「不可能」といいたい訳ですか？」

クレセリア「・・・」

ポリズ「大丈夫です、ちゃんと助けますから!!」

ハスボー「そうだよ、ちゃんと助けるよ!!」

笑顔で言う二人にクレセリアは自然と涙が出てきた。

クレセリア「やはり・・・あなた方は・・・いい人です。・・・だからこそ・・・傷つけたく・・・ない・・・ぐっ!!」

ポリズ「クレセリア!？」

ハスボー「クレセリア!!」

「

クレセリアが泣きながら一生懸命伝えたその言葉を最後にクレセリアは苦しみ始めた。

クレセリア「皆さん・・・どうか・・・元気で・・・」

ポリズ「クレセリアー!!」

クレセリア「さよう・・・なら・・・」

ハスボー「クレセリアー！！！！」

クレセリアは泣いたまま闇に包まれた。そして中からは闇のクレセリアが現れる。

クレセリア「さて、最終決戦といきましょうか？」

ポリズ「そうですね、早くあなたを倒して元の優しいクレセリアに教えてあげないといけません」

クレセリア「何を・・・？」

ポリズ「僕は教えられました。計算がすべてではない、不可能も気持ちで可能にできると！！だからそれをクレセリアにも教えてあげるんです」

クレセリア「そんなこと・・・」

ポリズ「そんなこと？これは僕の相棒が教えてくれた大切なことですが？」

ポリズは優しくハスボーを見る。その表情にハスボーは笑顔で返す。

クレセリア「バカバカしい、そんなもの私が潰しましょう！！」

ポリZ「いきますよ、ハスボー！」

ハスボー「うん、発動……」

ポリZ&ハスボー「リミットバースト」！！」

その瞬間ポリZとハスボーから凄まじいパワーが溢れ出す。

クレセリア「こ、こにきてリミットバースト！？どうやって……」

ポリZ「簡単ですよ、さっき言った「気持ち」でこつなつたんですよ」

クレセリア「不可能」も……「可能」に……」

ハスボー「その通り」

ポリZ「では……いきますよー！！」

第八十四話 クレセリアの過去（後書き）

ポリズ「絶対に助けないといいけません！！」

うん、これで全員の過去が分かったね。

サンダース「絶対に助けるよ！！」

キノガッサ「俺に任しとけ！！」

ポリズ「戻してあげましょう！！」

みんな頑張って！！

第八十五話 雷光の光線と2龍1鳥（前書き）

さて、今回はいよいよVSヒードランに決着です。

サンダース「ちなみに今回のこのバトルでは挿入歌があるぜ」

イメージだけだね。

アクア「曲は「ミュステリオン」（<http://www.nicovideo.jp/watch/sm11432237>）だよ」

サンダース「ちょっと早めのテンポにサビの力強さ・・・このバトルシーンにはもってこいだな」

アクア「この曲を聴きながら見てくれるとより楽しく見れる（？）かもね」

ちなみに<http://www.nicovideo.jp/watch/sm11432237>は後からの方がいいですよ。では・・・

サンダース&アクア「どうぞー!!」

第八十五話 雷光の光線と2龍1鳥

ヒードランの過去を知り、ヒードランへの「怒り」ではなく「助けたい」という思いが生まれ発動したサンダースとアクアの「リミットバースト」。

そして今、その力を使いヒードランと互角に戦っていたしていた。

サンダース「サンダーテール」

ヒードラン「ダークメタルクロー」

サンダースの電気をまとった尾とヒードランの闇をまとった爪が激突、その場に風が吹き荒れて二人は瞬時に離れる。

ヒードラン「くそっ、表のヒードランが奴らに何を言ったかは知らんがあいつらのリミットバーストが発動、しかもここまで強いとは・・・」だが闇の力はこんなものではない!!」

ヒードランはさらに闇のオーラを出し力を上昇させた。

ヒードラン「くらえ「ダークヒート」」

ヒードランは「かえんほうしゃ」のダーク版を発射、威力も格段に

上がっておりヒードランにはかなりの自信があった。しかし

アクア「アストラス“セイントウォーター”」

アストラス「キュルルーー!!」

アストラスが光の水“セイントウォーター”を発射、“ダークヒート”を打ち消した。

ヒードラン「な・・・くそっ!!」

サンダース「油断すんなよ」

ヒードラン「なに!?!」

ヒードランがサンダースの声に気付くとサンダースは上にいた。

サンダース「ライトニングボルト」

サンダースはまるで落雷のような電撃を発射、ヒードランはもろにくらった。しかし

ヒードラン「くっ、”ダークフレアホール”」

ヒードランはサンダースの着地点に炎の域を発生させた。

アクア「お兄ちゃん!？」

サンダース「なんだこれ!？」

ヒードラン「それは対象者を炎の膜で包む技、炎タイプ以外はつとダメージをくらう技だ、そこでおとなしくしてる!」

サンダース「それは断る!!」

ヒードラン「なに!？」

ヒードランが驚いた瞬間サンダースは着地、そしてサンダースを包んでいたはずの炎の膜は散ってちまつた。

ヒードラン「な・・・今完璧にホールに着地したはずなのに・・・どうやって・・・」

サンダース「“ライトニングバースト”・・・ってしってるか？」

ヒードラン「？」

サンダース「以前ラグがサンダーと戦ったときにサンダーが使った“チャージビーム”の強化版だ。それを俺が応用し俺の周囲に向か

って使った、ただそれだけだ」

ヒードラン「まさか・・・そんな前のことを・・・」

サンダース「思いついたんでな、オリジナルで使ってみたらうまくいったんだ」

ヒードランは驚いた。まさか自信の拘束技が破られるなんておもってもみなかったからだ。

一直線に進むはずの技を自分の周囲全域に解き放つ、普通は考えられない。

ヒードラン「お前・・・ホントに強いな・・・」

サンダース「どうも。でもおれだけじゃないぜ？」

ヒードラン「なに!？」

アクア「シャイニングウインド」

アクアの指示でアストラスははばたき、それによって発生した風でヒードランを攻撃した。ヒードランの周りには暴風が吹き荒れた。

ヒードラン「くう・・・これでは技がだせん・・・“あなをほる”」

ヒードランは一度攻撃から逃げるために地面にもぐった。しかしそれすらもサンダースとアクアには大した問題ではなかった。

アクア「アストラス、 “フェニックスポンプ”」

サンダース「 “サンダーバズーカ”」

アクアの指示でアストラスは穴にフェニックスをかたどった水を発射、それに電流を流すためサンダースも “サンダーバズーカ” を放つ。

その二つは混ざり、ヒードランを襲った。

ヒードラン「 なっ、 “まもる” ぐわあああああ！！」

中にいたヒードランは回避はできなかったが “まもる” で防御、しかしそのダメージは大きかった。それからヒードランは気合いでなんとか穴から出てきた。

ヒードラン「 ぐう・・・ 奴らにここまでの力が・・・ なんだ!？」

ヒードランの瞳の先には少し離れたところにサンダースとアクアがいた。

ヒードラン「く、俺はやつとこの体を手に入れたんだ！こんなところでああ、負けるかあああああ！！！！」

ヒードランは負けたくないという気持ちだけで技を発動、それはヒードランの最高の技だった。

ヒードラン「もう一度、この“ダークマグマストーム”でお前らを地獄の送ってやる！！」

ヒードランは“ダークマグマストーム”をチャージ、完了し打つ体制に入った。

ヒードラン「これで・・・、なんだ！？」

撃とうとしたその時、ヒードランに異変が起きた。それは・・・

ヒードラン「体が・・・拘束されている！？」

サンダース「“エレクトリックバインド”・・・お前の周囲の電気を固めて拘束する電気技だ」

ヒードラン「ふ・・・ふははは・・・だが残念だったな！たとえ俺を拘束しても“ダークマグマストーム”の発射は止められん！！」

サンダース「それは止めるためのバインドじゃない」

ヒードラン「なに？」

自分の予想と違った使い方はなんなのか、ヒードランは考える。するとサンダースが口を開いた。

サンダース「お前の拘束は「技をとめるため」ではない。「技を確実に当てるため」のものだ!!」

サンダースの発言にヒードランは驚いた。攻撃するということとはよほどの高速で発動できる技以外動きを止めるということ。つまりは・

ヒードラン「まさか・・・“ダークマグマストーム”を耐えきる気か!？」

サンダース「それも違うな・・・」

ヒードラン「じゃあ・・・」

避けもしない、耐えもしない、そんな状況で技をヒードランにあてるためには・・・

ヒードラン「まさか・・・“ダークマグマストーム”を消す!?!?”

サンダース「正解だ!?!?”

ヒードラン「ば、馬鹿な!あれはかなりの大技、技で消すことなど・・・」

サンダース「できるんだぜ!いや、する!?!?”

その瞬間サンダースの周りに電気が集まった。

ヒードラン「それは・・・」

サンダース「ビックリか?見せてやるよ、リミットバーストしたときの俺たちの実力を!?!?”

ヒードラン「俺「達」・・・?しまった!!”

サンダース「そうだ、アクアもいる。アクア!?!?”

アクア「できたよ、「龍ちゃんの進化型」が!?!?”

サンダース「よっしゃ、行くぜ!?!?”

アクア「発動!“氷水凍化龍 双龍”!?!?!?”

アクアの宣言に答えるようにアクアの前に青の魔法陣が発生、徐々

に龍が姿を見せる。

アクア「氷水に眠る二匹のわが龍よ、今ここに姿を現し、わが力となり、闇を氷水とせよ！」

龍の姿が半分くらい見えるとヒードランの表情が変わった。

ヒードラン「な・・・二匹・・・だと!？」

そう、現れたのは二匹の龍だった。

ヒードラン「そんなバカな!!今までは一匹だったのに・・・」

アクア「現れよ!!」

そうアクアが言うと龍は完璧に姿を現す。

サンダース「これが・・・進化型・・・」

アクア「うん、二匹の龍。名前は「ヒョウちゃん」と「スイちゃん」!!」

サンダース「またそういう名前を・・・なんて言ってる場合じゃな

いな！」

アクア「うん、早く倒そう！！」

二人はヒードランを見た。一方ヒードランは恐怖で体が動かなかった。

ヒードラン「ど、どういうことだ。龍が二匹にフェニックス一体、さらにサンダース・・・これでどうやって勝っていうんだ！！」

ヒードランは戸惑うが彼ができることは一つだけだった。

ヒードラン「いいだろう、そいつら全部俺が燃やしてやる！！」

半ばやけくそになるヒードランだったが、サンダースもアクアも遠慮はしない。そして最後の攻撃が始まった。

アクア「アストラス“フェニックスカノン”、ヒョウちゃんは“ブリザードポンプ”、スイちゃんは“ウォーターカレント”！！」

サンダース「サンダーランチャーインバクトクラスターIC”！！」

アクアのアストラスは“フェニックスポンプ”より強力な水を、ヒ

ヨウちゃんは吹雪の混じった水を、スイちゃんは超高压の水流を、そしてサンダースは周囲の微電流を集めた“サンダーランチャー”を発射、その全てがヒードランを襲った。

ヒードラン「そ、それがどうした。“ダークマグマストーム”!!」

ヒードランは少々押されながら切り札“ダークマグマストーム”を放つ。そして互いにぶつかった。しかし結果が見えるのは早かった。

ヒードラン「俺の“ダークマグマストーム”が押されている!?!」

そう、ヒードランの“ダークマグマストーム”は押されて消されてしまった。

サンダース「当然だ、これには俺たちと・・・」

アクア「ヒードランの思いもこもっているんだから!!」

ヒードラン「ヒードランだと!?!」

サンダース「そうさ、表の・・・優しいヒードランのだ!!」

二人の感情が高まり最高潮に達した時、それぞれの技は最高に輝いた。

サンダース&アクア「いっけー（いってー）！……！！！」

ヒードラン「これが……光……か……」

その全てがヒードランを包み込み、ヒードランにダメージを与えた。
これがサンダース&アクアVSヒードラン（ダーク）の結果だった。

サンダース「ちゃんと救ってやったからな、ヒードラン……」

第八十五話 雷光の光線と2龍1鳥（後書き）

サンダース「や、やったー!!!」

アクア「勝ったんだ、勝ったんだね!」

うん、サンダースとアクア、なんとかヒードランを倒しました。

サンダース「これでアイツの闇はなくなるよな?」

うん、これから改心させていかないかね!

さて次回は・・・

キノガッサ「俺らだー!!!」

キノ「頑張りますよ!!!」

第八十六話 破壊の一撃と3つの補助技(前書き)

さて・・・

キノガツサ「いよいよ俺達だー！ー！」

キノ「頑張りますよ！ー！」

ちなみに今回の挿入歌は・・・

キノガツサ「本能のDOUBT」(<http://www.nicovideo.jp/watch/sm13202218>)
曲だー！

キノ「知ってる人は知ってますよね？」

ちなみにこれの映像はボクシングですが曲はこれです。もう一つ言えばこの試合は自演乙選手がミルキイのコスプレをして登場された試合かと思われます。ミルキアンの皆さんは衆目です。

というわけで・・・

キノ「第八十六話・・・」

キノガツサ「スタートだー！」

第八十六話 破壊の一撃と3つの補助技

レジギガスの過去・・・ダーク化の理由を知り、必ず救うと決めたキノガツサ、キノそしてストライクハンマー。一時戦闘は中断されたが戦いは更なる激化をしていた。

キノガツサ「オラオラオラー!!!」

ストライクハンマー「“プラッシュハンマー”」

キノガツサはレジギガスに向かってハンマーを振り上げ下ろす。するとハンマーのプレスハンマー・・・つまり「壊す」のではなく、「叩く」というハンマーの本来の役目を果たす部が巨大化、しかしレジギガスは両腕でそれを抑えた。

レジギガス「ふ、甘かったな」

キノガツサ「お前がな!!!」

レジギガス「なに!?!」

キノガツサ「はああああああ!!!」

キノガツサがさらに力を込める、するとレジギガスが少しずつ押され最終的にはレジギガスの足元の地面がへこんだ。

レジギガス「こんなことが・・・ぐっ!？」

それと同時に衝撃に耐えられなくなったレジギガスも地面にたたきつけられた。キノガツサは一度離れキノの元に戻る。

キノガツサ「さすがの制圧能力、かなりいいぜ！」

ストライクハンマー「そうですね?こちらとしてもちゃんと使っていたいてありがたいですよ」

レジギガス「な、なめるな!はっ!」

そんな会話の途中、不意にレジギガスからビームが放たれるが・・・

キノ「!?!?・・・“ナチュラルキュア”」

キノが“ナチュラルキュア”を生成、それによって攻撃を防ぎ結果、キノガツサ達はノーダメージとなる

キノ「まったく、ここまでやってもまだ攻撃なんて・・・さすがの

体力ですね。キノガツサ、ストライクハンマー、油断はだめですよ！」

キノガツサ「いや、ははは、すまねえ」

ストライクハンマー「助かりましたよ」

キノ「まったく・・・」

二人の行動に少々あきれられるキノ。そんな彼女にキノガツサが真剣な表情で聞いた

キノガツサ「ところでキノ・・・」

キノ「何？」

キノガツサ「お前にまだあるか？何か「切り札」が」

キノガツサの質問にキノは少し驚いたがそのあとすぐに答えた。

キノ「うん、あるよ。もう少し準備がいるけど」

キノガツサ「それじゃあさ、それ溜めててくれねえか？」

キノ「なんで？今のままじゃダメ？」

キノガツサ「そういうわけじゃねえけど、やっぱりあいつには全力で挑みてえんだ」

キノはキノガツサのこの答えに少しほほ笑む。そして

キノ「分かったわ、その代わりさっき言った通りしばらく時間をあけてね」

キノガツサ「おう！よし、ストライクハンマー、行くぞ！！」

ストライクハンマー「了解！」

キノガツサは勢いよくレジギガスに向かって行った。この時キノは思った。

キノ「（キノガツサって普段はおバカキャラだけどこんな大事な時には素直にカツコイイって思える・・・あの一生懸命さがこんな感情にしているのかな？・・・とにかく今はキノガツサのために全力でサポートしなきゃ！！）」

キノはそんなことを思って技の準備にかかった。

キノガツサ「くられえ“ エナジーシューター”」

レジギガス「“ ハンドバリア”」

キノガツサは複数の“ エナジーボール”を放つがレジギガスは手にエネルギーを溜めてそれで防御、しかし今のキノガツサはそんなことでは止まらない。

キノガツサ「ストライクハンマー!!」

ストライクハンマー「了解、あのバリアを破ります」

キノガツサはハンマーのプレスと反対、「壊す」ためのクリスタルハンマーをバリアに振る。すると当たった瞬間バリアは粉々に砕け、手に溜めていたエネルギーはなくなってしまう。

レジギガス「な・・・」

キノガツサ「そこに“ きあいパンチ”」

キノガツサは“ きあいパンチ”を発動、レジギガスは腹部に激しいダメージをくらい、吹き飛ばされた。

キノガツサ「今のはどうだ？ストライクハンマー」

ストライクハンマー「なかなか効いたと思いますがああなたの体は大丈夫ですか？」

キノガツサ「なんでだよ？」

ストライクハンマー「確かに私は「あと30分くらい」と言いましたがそれは目安です。しかもこんなにフルで使って・・・さっきからずっとギガンテスのままですよ？」

そうストライクハンマーの言うとおりキノガツサはずっとギガンテスを発動したまま戦闘している。これでは彼への負担は半端ではない。

キノガツサ「大丈夫だ、このリミットバーストのおかげで負担は少ないからな」

ストライクハンマー「でもそれはあくまで「少ない」です。けしてゼロではないんですよ」

キノガツサ「分かってる、でも・・・コイツとは全力で戦わなきゃいけないんだ」

ストライクハンマー「・・・まあそれはあなたの自由です。ですが私はあなたと共に闘う「二人目の相棒」ですから心配もしますよ」

キノガツサ「二人目……か……」

ストライクハンマー「もちろんです。だって一人目はほら、いるでしょう？昔からあなたを支えてきた人が」

キノガツサ「……ああ……」

ストライクハンマー「その人を悲しませない程度で……頑張ってくださいよ！」

キノガツサ「おお!!」

キノガツサはまた走り始めた。対するレジギガスは戸惑っていた。

レジギガス「（ここで……奴のパワーが数段上がっている……。リミットバーストの影響もあるだろうが……。）なぜ、なぜ無理なのにそこまで頑張れる?」

レジギガスはキノガツサに聞いた。するとキノガツサは立ち止り、真剣な表情で口を開く。

キノガツサ「大切なものがたくさんあるからだ」

レジギガス「大切な……もの?」

キノガツサ「そうだ、まあものっていうのは少し変だけどチーム絆

のメンバーみんな、俺の手にあるストライクハンマー、それにここに
いるキノ・・・みんな大切だ、守りたい！」

レジギガス「!?!」

キノガツサ「いやまあストライクハンマーもキノも絆のメンバーだ
から同じことだが・・・とにかく大切なんだ。もちろんお前も」

レジギガス「なに!?!」

キノガツサ「俺たちはもう友達なんだ」

レジギガス「ふん、そんなものでは強くなれん。聞いて損した・・・
“クラッシュウェーブ”」

レジギガスはまた不意に技を発動、レジギガスが地面を叩きそこから
発生した衝撃波でキノガツサを攻撃する。そんな彼の技を見てキ
ノガツサは残念そうな顔をした

キノガツサ「やっぱり今のお前に言ってもダメみたいだな！」

ストライクハンマー「そのようです“インパクトジャンプ”」

キノガツサは地面をストライクハンマーで叩く、するとその衝撃で
キノガツサは飛び“クラッシュウェーブ”を回避した。

レジギガス「逃がさん!“ストーンショット”」

レジギガスは目の前の岩を持ち上げ数回回転させて、キノガツサに岩を投げた。

キノガツサ「そんなもん効くかよ!!!“かわらわり”!」

しかしキノガツサは“かわらわり”で岩を破壊、結果として意味はなかった。

レジギガス「くそっ!?!」

キノガツサ「これでもくらえ!“バニツシュシード”」

レジギガス「ぐっ!」

着地したキノガツサはもう一度“バニツシュシード”を発動、投げられたそれは今度は爆発しない代わりにレジギガスを完璧に封じた。そしてキノガツサはキノの元へ戻る。

キノガツサ「おいキノ、準備できたか?」

キノ「うん、できてる。いくよ?」

キノガツサ「ああ！！」

キノ「ストライクリース” パニツシュリース”そして“ソニツクリース”」

その瞬間キノガツサを赤、黄、青の光が包み込む。力を与えている証拠だ

キノ「トリプルリース”！！」

キノガツサ「す．．．すげえ．．．」

キノガツサが自分の手を見てつぶやく。今彼の体には溢れんばかりのエネルギーがあるのだろう。それを確かめているようだ

キノ「リミットバーストしてるから同時発動できるんだけどね。それじゃあ、あとは．．．」

キノガツサ「おう、任せろ！！一撃で決めてやるぜ！」

ストライクハンマー「行ってきます！」

そしてキノガツサはレジギガスに向かって行った。

キノ「頼むよ……キノガツサ……」

キノはその優しい瞳でキノガツサを応援していた。

レジギガス「来たか、我にチャージの時間を与えたこと、後悔させてやる!」

向かってきたキノガツサを迎え撃とうとレジギガスは技の準備に入った。どうやら今の時間で縛られながら力を溜めていたらしい。そんな縛りだがレジギガスによって破壊されており、彼を拘束していなかった

ストライクハンマー「すごいですね、「破壊」「潰す」「速度」が強化されてますよ」

キノガツサ「アイツだって異世界で……なのは達の世界で努力してたんだ。その成果だ!」

ストライクハンマー「ですね!さて、こちらも……」

キノガツサ「ああ、いくぜ!」

キノガツサはさらに速度を上げて走り、レジギガスに飛びかかる。

レジギガス「くらえ“インパクトクラッシャー”」

レジギガスは溜めたエネルギーを一気に解放し、それを腕にまとわせて攻撃した。

その勢いは激しく、なにより威圧感が凄かった。

ストライクハンマー「凄いですね・・・勢いが伝わってくる・・・」

キノガツサ「だが！俺たちはその上だ！！」

ストライクハンマー「ロードカートリッジ！！」

ストライクハンマーはカートリッジを全弾ロード、キノガツサに溢れんばかりのエネルギーが溜まる。そして

キノガツサ「くらえ！！」

ストライクハンマー「ギガメテオ・・・」

キノガツサ「ストライクーーーーー！！！！」

キノガツサはストライクハンマーのプレスハンマーに全エネルギーを集中、振りかざす。その勢いはまるで隕石が落ちるような・・・そんな勢いだ。そして二つは激しくぶつかりあった。しかし

レジギガス「なに!？」

“インパクトクラッシュャー”は徐々に“メテオギガストライク”に押され最終的にけされてしまった。

レジギガス「くそっ!!!”ハンドバリア”全開だ!!!”

レジギガスはなんとか耐えようと”ハンドバリア”を全開で展開した。レジギガスの残りの力を全てそそいだそれは通常のポケモンの通常の技ではなかなか破れない強度のバリア・・・のはずだった。

キノガツサ「うおおおおおおお!!!”

レジギガス「ま、まさかこれも・・・”

「破られる」・・・そう確信したのはレジギガスだった。

キノガツサ「こんなバリアが俺に通用すると思ったか!？」

レジギガス「くっ……お前は「通常のポケモン」じゃないな……？」

キノガッサ「いや、俺は普通だ。ただ……」

キノガッサはバリアを破るために力を入れながら答えた。

キノガッサ「最高の仲間たちを持つてる、ただそれだけだ!!」

レジギガス「コイツは……表の俺は……いい仲間を持てるか？」

キノガッサ「安心しろよ……もう俺達は……仲間だ!」

レジギガス「それは……よかつた……」

キノガッサ「これで……最後だああああ!!」

“ギガメテオストライク”はレジギガスに直撃、レジギガスは吹き飛ばされた。そのままレジギガスは倒れ起きる気配はない。

キノガッサ「やったぜ!!」

ストライクハンマー「やりましたね」

キノ「これで……」

キノガッサ「ああ、やっと終わったんだ・・・」

こうしてキノガッサ達はレジギガスとの戦いを勝利で終わらせた。
キノガッサは倒れたレジギガスを見ながらつぶやいた。

キノガッサ「これが仲間の・・・「絆」の強さだ、レジギガス」

第八十六話 破壊の一撃と3つの補助技（後書き）

キノガツサ「勝ったぜー!!」

キノ「やりましたー!!」

うん、お疲れ様でした。

キノガツサ「でもレジギガスもかなり強かったな」

まあダーク化2ndが発動してたからね。でもここだけの話しダーク化2ndの本来の力はこんなもんじゃないよ。

キノ「そうなんですか？」

うん、実は幹部達はまだこの力を使いこなせてないんだよ。

キノガツサ「ふっ、どんなに強くても俺たちがいれば大丈夫だー!!」

お、頼もしいね。

キノ「しかも今俺「達」って・・・」

キノガツサ「特に俺なー!!」

キノ&コアラ「・・・」

キノ「やっぱりキノガツサはキノガツサですね・・・（汗）」

ま、まあね。

さて次回は・・・

ポリズ「僕たちですね！」

ハスボー「頑張るよ!!！」

はい、まだ「全然」執筆していないこのコンビです。

ポリズ「全然って・・・一文字もですか!?!？」

それどころかどんなバトルにするかすら頭にないね

ポリズ「そこは喜ぶところじゃありません!!！」

第八十七話 バリア&キャノン（前書き）

さて今回はポリZとハスボーです!!

ポリZ「挿入歌は？」

ハスボー「PHANTOM MINDS」(<http://www.nicovideo.jp/watch/sm9083198>)
だよ!!」

紅白で水樹奈々さんが歌ったから知ってる人も多いと思います。

では

ポリZ&ハスボー「どうぞ!!」

第八十七話 バリア&キャノン

クレセリアの過去、それを知ったポリズとハスポーはクレセリアを助けようと奮闘していた。

ポリズ「れいとうビーム」

ポリズは“れいとうビーム”を発射、冷気に包まれた低温のビームがまっすぐにクレセリアに向かっていく。上手くいけば凍らせることも可能だ。しかしその技をクレセリアもまともに受けるわけがない

クレセリア「ダークシールド」

クレセリアは自身の目の前に闇の盾を発動、それは“れいとうビーム”を防いだ。そしてそして「くっ」と言っただけで悔しがるポリズに次なる手を下す

クレセリア「さらに“ダークサントラスト”」

クレセリアはポリズの足元に闇の魔法陣を発生させた。

ポリズ「これは・・・」

クレセリア「はー!!」

クレセリアが力を込める、すると足元の魔法陣は膜を作りポリズを閉じ込めた。

ポリズ「まさか・・・!?!」

クレセリア「うがて、雷撃!!」

ポリズが気付いたところには時は遅く、膜の中で黒い電撃が飛び交いポリズを攻撃する。しかも膜のせいで避けられない。

しかし

ハスボー「リーフリフレクションフォース」

ハスボーがバリアを発動、ポリズを包むように発生したそのバリアは電撃を跳ね返し、その威力から膜自体が破壊された。

クレセリア「フィールド攻撃を防いだ!?!」

ハスボー「このバリアは強いよ」

ポリズ「ありがとうハスボー、助かりましたよ」

ハスボー「どういたしまして」

二人は喜ぶ一方、クレセリアは驚いた。このフィールド攻撃は相手の前後関係なく攻撃することのできる攻撃のことをさす。つまり一定の方向からの攻撃よりもダメージを与えられる確率の増える攻撃なのだ。それは通常防がれることは少ないのだが今、ハスボーは防いだ。そのことに驚いたのだ。

クレセリア「まさか・・・しかも膜・・・フィールドを壊したということとは弾いたあと電撃自体も威力が上がっているということ・・・」
「ならば・・・どくどく」！！

本来サントラストの電撃ではあの膜は破壊できないらしい。それなのに破壊できたということはハスボーのあのバリアに「はじいた攻撃の威力を上げる」効果が付属されている、そうクレセリアは判断したようだ。それならばまだ対策はあるとクレセリアは紫の煙を発射、ポリズ達に向かって行った。

ポリズ「ハスボー、対処できますか？」

ハスボー「もちろん！“ハスノサークル”」

ハスポーは目の前にハス型のバリアを生成、バリアに“どくどく”があたると”どくどく”は一瞬で光となり消え、結果的に防いだ。

クレセリア「な、これは攻撃ではなく特殊技なのに・・・」

ハスポー「残念だったね、これはそういうのも防ぐんだよ!!」

クレセリア「なんとという鉄壁・・・」

ポリZ「ハスポーやりますね・・・では私も“Pシグナル”」

ポリZは上空に「P」と書かれたビームを発射、するとそこからポリZより一回り小さいポリZが複数生まれた。

クレセリア「あれは!?!」

ポリZ「行きますよ、ポリークンズ」

ポリークンズ「はい!!! “シグナルビーム”」

合計4体のポリゴンZトークン（通称ポリークンズ）は“シグナルビーム”を同時に発射し、クレセリアに攻撃する

クレセリア「トークン・・・そんなものの攻撃は通しません“ダークシールド”」

クレセリアは“ダークシールド”で防御する。当たれば効果抜群なので当然の判断だろう。しかしこれもポリズの計算のうちだった。

ポリズ「トライデントビーム”!!!”」

クレセリアが“ダークシールド”を残しているにも関わらず、今度は本物のポリズが“トライデントビーム”を発射、3つの属性を持ったその光線はクレセリアに接近した。

クレセリア「だから無駄です“ダークシールド”」

クレセリアは防ごうとしたが攻撃があたった瞬間、盾に異変が起きた。

「・・・ピキッ!・・・」

“ダークシールド”にヒビが入ったのだ。

クレセリア「まさか・・・」

クレセリアが驚いたところには“ダークシールド”は破られてクレセリアはダメージを負っていた。

クレセリア「はあ、はあ、なぜ……」

ポリズ「この“トライデントビーム”は元々の威力が高いんですよ。さらにあなたはさつきから“ダークシールド”でしか攻撃を防いでいない。それじゃあさすがのシールドももちませんよ」

このポリズの意見、クレセリアも納得だ。同じ盾による防御、それには限界がある、とポリズは踏んでおり、その予測は的中した。しかしクレセリアはさつき冷静さを失っていたためかそれが判断ができなかったのだ

クレセリア「ふふふ、私としたことが。あなたたちのペースに乗せられて判断力を失っていましたよ」

ポリズ「そうですね、それなら私の作戦は成功ですね」

クレセリア「……?」

ポリズ「気付かなかったんですか？あなたは最初から私たちに乗せられていましたよ?」

クレセリア「そ、そんなバカな。私は今まで完璧に、冷静にその状

況を判断して……」

ポリZ「冷静さ……それも必要ですがバトルにおいて、それ以上に必要なもの、分かりますか？」

クレセリア「……うるさいですね、私に質問など……」「ダークサイキックスマツシャー」

ポリZの言葉にクレセリアは苛立ちを感じ闇を込めたサイコ攻撃“ダークサイキックスマツシャー”を撃つ。漆黒に染まったそれはクレセリアの持つ技の中でも上位に入るレベルだ。しかしポリZは笑った。

ポリZ「ひっかかりましたね、ハスボー!!!」

ハスボー「ミストラルウォール」

ハスボーは“ミストラルウォール”を発動、その盾に“ダークサイキックスマツシャー”は弾かれクレセリアに向かっていくものの彼女はそれを避け後ろの床にあたる。するとその床は見事に砕けた。威力の高さを証明している

クレセリア「まだまだ!!!」「サイコカッター」

ハスボー「行くよ、ポリZ?」

ポリズ「お願いします！」

ハスボーはポリズに許可をとり“サイコカッター”に向かって走っていく。

クレセリア「やはり馬鹿ですね、技に自分から向かっていくとは……」

ハスボー「行くよ！ポリークンズ！」

ポリークンズ「はい！“トライアタック”」

ポリークンズは“トライアタック”を発射、4体分の威力のそれは“サイコカッター”を消し、奥にいるクレセリアにダメージを与えた。

クレセリア「くっ……！」

ハスボー「さらに“エナジーボール”」

クレセリア「ダ、“ダークシールド”」

攻撃をくらい少々苦しそうにするクレセリアだったがハスボーの“エナジーボール”に反応して“ダークシールド”で防御、“エナジーボール”はむなしく消されてしまった。

クレセリア「ふんっ、どうあがこうと所詮はハスボー、私と対等に戦うなど無……」

ハスボー「からげんき」

クレセリア「!?!」

クレセリアはハスボーの声のした方を見た。それは自分の後ろ。そこには裏拳を構えたハスボーがいた。

クレセリア「そ、そんな!?!」

ハスボー「はああああ!!」

クレセリア「うぐっ!?!」

あまりのことに驚きクレセリアは硬直、対策を立てられないままハスボーの裏拳は見事に決まった。

クレセリア「ハスボーごときが……」

ハスボー「さらに“ソーラービーム”!」

クレセリア「ひ、“ひかりのかげ”」

ハスボーの”ソーラービーム”に、クレセリアはなんとか“ひかりのかべ”を発動。しかし全ての威力は防げず少々ダメージをくらってしまった。ハスボーは“ソーラービーム”の勢いで一度ポリズの元に戻った。

ポリズ「ナイスです、ハスボー」

ハスボー「ありがとう」

クレセリア「ハア、ハア、ハア・・・くっ、ハスボーごときに大技をくらうなんて・・・」

ポリズ「それがあなたの油断ですよ」

ハスボー「これでもまだやる？」

ハスボーのこの挑発にクレセリアは苛立つ。ハスボーという自分の中の弱者にダーク幹部である自分がけなされる、それが嫌だったのだ

クレセリア「私が・・・私があなたたちごときに降参などあり得ない！！」

ポリズ「・・・そうですか、では最後の作戦いきましょうか、ハスボー？」

ハスボー「うん」

クレセリア「最後の・・・作戦？」

ポリズの言葉にクレセリアが疑問を感じていた時にはすでにポリズ達は動き始めた

ポリズ「 Pシグナル”！」

ポリズは再び“ Pシグナル”を発動、またポリークンが複数生まれる。さらに

ポリズ「 Pシグナル”、 “ Pシグナル”」

さらに二回“ Pシグナル”を発動、ポリークンはその数なんと16となった。

ポリズ「いきますよ、ライトは“トライアタック”レフト“れいとうビーム”！」

ポリズの指示でポリークンは右から8、左から8匹でクレセリアに攻めて両方から違う攻撃を仕掛ける。

クレセリア「一気に!? くっ、 “まもる” から “サイコカッター”
！」

クレセリアは “まもる” を使って攻撃を防ぎ、 “サイコカッター” で全員を攻撃、攻撃を受けたポリークンは全員消えてしまった。
「フツ」と得意げにクレセリアはほほ笑む。しかし彼女の視線の先には何かのチャージ中と思われるポリズがいた。

クレセリア「そういうことですか」

ポリズ「しまっ・・・」

クレセリア「 “ダークサイキックスマッシュャー” ！」

ポリズ「ぐわあああ!!」

チャンスだと思い、すかさずクレセリアは大技で攻撃、その攻撃はポリズに見事命中してしまった。

クレセリア「ふはは、どうせトークンをおとり大技を出そうとしていたようですが残念、そんなのが最後の作戦だなんてやはりいたことありませんね」

クレセリアは攻撃を受けて黒くなったポリズを見ながら言う。一撃

でポリZを倒す威力、これがクレセリアの”ダークサイキックスマッシャー”なのだ。

クレセリア「さて、あとのハスボーは・・・」

クレセリアがポリZから視線を外し、ハスボーを探そうとする。すると

シュン！

クレセリア「えっ・・・？」

その瞬間予想外のことが起きた。なんと倒れたポリZが消えたのだ。

クレセリア「なっ、どういうこと!?!？」

ポリZ「こっちですよ」

クレセリア「!?!？」

クレセリアの見た方向、それはポリZが倒れていたはずの方向、少し離れた場所だった。

クレセリア「一体・・・あなたは私の技をくらって・・・」

ポリズ「くらってません。その私は“みがわり”なんですよ、残念でしたね」

クレセリア「み、“みがわり”!?くっ・・・」

ポリズ「ではチャージも完了しました。いきますよ、ハスボー!!」

ハスボー「オツケー!!」

今までポリズの後ろに隠れていたハスボーがひょこつと顔を出した。

クレセリア「(チャージする作戦は二段構造だったということ!?)」

ポリズ「“メガインパクトキャノン”!」

クレセリア「だ、“ダークミラーフォース”」

クレセリアはとっておいた切り札「“ダークミラーフォース”」で防御、もちろんポリズの“メガインパクトキャノン”は強かった。故に打ち消すことまでは出来ず軌道をずらすことしかできない。それでもクレセリアにとっては十分だ

クレセリア「なんとか・・・」

ポリズ「まだです、ハスボー!!!」

ハスボー「ミストラルウォール」!

ハスボーはクレセリアを対象に“ミストラルウォール”を発生させ彼女をバリアが膜上に覆った。すると外れたはずの攻撃は“ミストラルウォール”によって跳ね返されクレセリアを襲った。

クレセリア「くっ・・・ハッ!？」

クレセリアはこれをなんとか避ける。そこで気付いた。これが「彼らの作戦」だと

クレセリア「これは・・・」

ポリズ「これが、私とハスボーの長所を掛け合わせた・・・」

ハスボー「“ミストラルリフレクションキャノン”だよ!!!・・・はっ!!!」

ハスボーが力を込める。するとバリアは“リーフリフレクションフオース”へと変わった。

クレセリア「!?!」

ポリズ「“ミストラルウォール”は反射するたびに威力を上げる。そしてそれ以上に威力を上げるのが“リーフリフレクションフォー”です」

ハスボー「つまり、これで最後だよ!」

クレセリア「くっ、こんなところで……終わるなんて……」

ハスボー「安心してクレセリア」

ポリズ「元に戻ったら私達が教えてあげますよ、この世界にはいい人もいるってこと……教科書には載っていませんが大事なことを!」

ハスボー「リフレクション!!」

その瞬間バリア内ではビームがクレセリアに直撃、ハスボーがバリアを解除するとそこにはクレセリアがいた。そう、闇から解放され微笑むクレセリアが。

ポリズ「冷静さも大切ですが一番大切なのは「勝ちたい」っていう気持ち……なんですよ、クレセリア」

第八十七話 バリア&キャノン（後書き）

ハスポー「かったー！！」

ポリズ「やりましたね」

やっぱりこのコンビは強いね。

ポリズ「ある意味合体技でしたね」

うん。技の説明としてはクレセリアが攻撃をはじいてその攻撃が”ミストラルバリア”によって反射、バリアは膜上で”メガインパクトキャノン”はそのバリアの中で反射し続けられた。最終的にそれがクレセリアにヒットしてクレセリアが負けた、ということですね
ハスポー「”ミストラルバリア”は中での攻撃も反射するし、相手を対象にすることもできるんだよ」

ポリズ「だから今回の作戦が出来たわけです」

そして次回はラグ&タチマルです

タチマル「やっと出番ですね！！」

ラグ「頑張らなきゃ！！」

第八十八話 戸惑いと新たな力（前書き）

いよいよラグとタチマルです。

ラグ「出番だ〜!!」

タチマル「頑張ります!!」

第八十八話 戸惑いと新たな力

ラグ「ギラ・・・ティナ？」

いよいよ決戦と思い「影の部屋」の扉を開いたラグたち。しかしそこにいたのはかつてグラードン戦でラグたちを助けた「ギラティナ」だった。

ラグ「な、なんでギラティナが・・・？」

ギラティナ「さっき言っただろ、俺が「ダーク幹部最強」だ」

ギラティナの言葉がまるで耳に入ってこないラグ。いや、入ってこないのではない。入ってはいるがそれを信じたくないのだ。

ラグ「ギラティナが・・・ダークの・・・」

ギラティナ「そうだ、俺はこの世に飽きた。だから一度ぶっ壊すのさ」

タチマル「そんなこと・・・させません!」

ラグはやはりこのことを信じられない。すると隣にいたタチマルが

動いた。

ラグ「タチマル君!？」

タチマル「“シエルブレード”」

ギラティナ「ふん“シャドークロー”」

お互いの攻撃はぶつかり合い相殺、互いに元の位置に戻った。

タチマル「ししよー、早く倒しましょう!」

ラグ「でも……」

ギラティナ「“シャドーボール”!」

タチマル「!?! “みずのはどう”!」

ギラティナは不意に“シャドーボール”を発射、それをタチマルは“みずのはどう”で攻撃相殺させる。

タチマル「ししよー、一体……?」

ラグ「いやなんでもないよ、行くっつ」

タチマル「はいー!!」

タチマルは走ってギラティナに向かって行くがラグは考えた。

ラグ「（ギラティナがなんで闇に・・・まさか自分から・・・? いやでもそんなことはない!! だったら・・・なんで・・・）」

ギラティナ「“シャドーボール”!」

ラグ「!?!」

ラグは自身に“シャドーボール”が向かってきたのでジャンプして避けた。

ラグ「（今はとりあえず守って様子を見なきゃ!）!」

ギラティナ「“シャドークロー”!」

タチマル「“シエルブレード”!」

ギラティナとタチマルは接近戦を行っていた。ギラティナはオリジナルフォームのため自身の背中中の羽（?）の先のトゲをとがらせて攻撃、しかしタチマルも貝を出現させてそれを剣として弾いた。

キン！キン！

あたりには二つ技がぶつかる音が響いた。

ギラティナ「あやしいかぜ”！”

途中でギラティナは“あやしいかぜ”を発動、かぜはタチマルに向かって行くが・・・

タチマル「水風斬”！”

タチマルも剣を振り風を発生させて相殺させた。

タチマル「さらに“こおりのはどろ”””

ギラティナ「まもる”””

タチマルは“みずのはどろ”を凍らせた“こおりのはどろ”を発動、しかしギラティナの“まもる”に防がれた。

ギラティナ「ダークパンプニクス”””

タチマル「アイスウインドスラッシュ”””

ギラティナは闇のエネルギーを集めた光線を、タチマルは小さな氷の混ざった風を衝撃波として向かわせて相殺、お互いにやはり一度離れた。

ギラティナ「お前・・・風使いか!？」

タチマル「オイラは正確には「水」「氷」「風」を使える。そういつぶつにミュウさん、ミュウツーさんに修行してもらったんだ!」

ギラティナ「なるほど、あいつらの弟子か・・・」

タチマル「さらにオイラはししょー、「ラグししょー」の一番弟子でもある!」

ギラティナ「ラグのか、おもしろい・・・“シャドーボール”」

ギラティナは“シャドーボール”を発射、しかし今までとは少し違っていた。

タチマル「な、何発あるの!？」

そう、ギラティナは“シャドーボール”を撃たずに自身の周りにセツトした。すると数が徐々に増えていった。

ギラティナ「これが“シャドーボール”の拡散型バリエーション、
デファイション」だ！」

そういつとギラティナは一斉に発射した。

タチマル「はっ！やっ！えいつ！」

ラグ「くっ、カリバー！！！」

タチマルは自身の“シエルブレード”で、ラグはカリバーで切り裂き攻撃を回避した。

ギラティナ「ならば“シャドーアルター”」

ギラティナが技名を言った。するとギラティナの横に黒い影が発生し形を変えた。それは……

タチマル「ギラティナ！？」

ギラティナ「そうだ、これは俺の分身だ。行け！！！」

ギラティナ（分身）「“シャドークロー”」

タチマル「はあ!?!」

ラグ「タチマル君!?!」

ギラティナの分身はタチマルを襲ったがタチマルは“シエルブレード”で受け止めた。

タチマル「ししょー、こっちは大丈夫です。それより本物を!?!」

ラグ「う、うん!」

ラグはそう言いながらギラティナを見た。確かに自分の知ってる・
・以前助けてくれたギラティナだった。

1023

ラグ「ギラティナ……」

ギラティナ「“シャドークロー”」

ラグ「くっ……わあ!?!」

ギラティナは“シャドークロー”で攻撃、六個の羽がラグを襲った。
最初の数発は防げたがあとが避けれず一発くらい飛ばされた。

ラグ「う……」

カリバー「大丈夫ですか？」

ラグ「うん、大丈夫。カリバー、なにかギラティナの攻撃を防ぐことはできない？」

カリバー「一応属性を鋼か氷にできればできますが宝玉がありません。さらに氷の場合は少々扱いに慣れる必要がありますので……」

ラグ「鋼」しかないってことだよな？」

カリバー「ですね」

ラグが苦笑いしたその時、ギラティナはまた“シャドークロー”で攻撃してきた。

ラグ「はっ！ “ライトニングウイング”」

ラグはデンラージになり“ライトニングウイング”を発動、それによって空中に避難し攻撃をかわした。

ラグ「それならさ、なにか「スピード」を上げることはいできない？」

カリバー「……ありました！ “フレイムカリバー” にならそういう能力が！ しかしちょっと特殊ですよ？」

ラグ「いいよ、行こう！」

カリバー「オーケイ、ロードエレメントカートリッジ！」

その瞬間カリバーの持つところのしたのカートリッジが動き属性のカートリッジを読む込む。読み込んだカートリッジ、それは夕日のような色をした「フレイムカリバー」のカートリッジだった。そしてカリバーの電気できた剣の部分は夕日の色になり少し温度も上がる。そして炎をまとった。

カリバー「フレイムカリバーコンプリート！」

ラグ「うん！それで特殊っていうのは？」

ラグは“ライトニングウイング”でギラティナの攻撃をよけながらカリバーに問う。

カリバー「私、カリバーのレベルアップ「リペルト」です」

ラグ「リペルト？」

カリバー「リペルトは私の各属性ごとに色々な能力を持つことです。たとえばこのフレイムカリバーならば「スピード」を上げるシステムを追加します」

ラグ「なるほど」

カリバー「使用しますか？」

ラグ「もちろん！」

カリバー「オーケー、リペルティングー！」

カリバーが宣言するとカリバーはさらに大きな炎をまとった。しかしすぐに炎は弾け中からカリバーが現れた。その姿には大きな変化があった。

カリバー「コンプリート、フレイムカリバー「ジェットモード」！
！」

ラグ「な、何これ！？」

カリバーが二刀流になり、剣先には炎の丸いコアが生成されていた。

カリバー「フレイムでの加速はこのコアを使います。さらに・・・」

ラグ「うわ！？ “ライトニングウイング” に・・・炎？」

ラグの背中には四角い炎の塊があり装備されていた。

カリバー「それは「フレイムジェット」と呼ばれるもので二つの口からエネルギーを出して加速します。剣先のコアも同じ原理です」

ラグ「なるほどね」

ギラティナ「さっきからちよこまかちよこまかと・・・“シャドーボール”集中攻撃「コンストライション」!!!」

さっきから攻撃の当たらないギラティナはイライラしさつきと同じように“シャドーボール”を複数生成、その数は百を超えているであろう。そこからラグに向かって一斉に放った。

ギラティナ「このコンストライションは一点集中型攻撃、避けられるわけが・・・なに!?!」

ギラティナは煙が晴れるのを見ていた。しかしラグはいない。

ギラティナ「一体どこに!?!」

ラグ「これ凄く速いね!」

カリバー「もちろんですよ!」

ギラティナ「くそっ!」

なんとラグはあの“シャドーボール”を全て避けていた。

タチマル「さすがししよーですー！」

向こうで分身と戦っているタチマルもラグの凄さに喜んだ。
しかしラグはとまどっていた。

ラグ「（相手はギラティナ・・・攻撃・・・できないよ・・・）」

そうこのリペルトも「ギラティナを攻撃するもの」ではなく「攻撃を避けるため」のものだった。

この瞬間まさかこれが「甘さ」とはラグは気付かなかった。

第八十八話 戸惑いと新たな力（後書き）

ということでは新能力の「リペルト」登場です。

ラグ「このリペルトってフレームだけ？」

いや、特定の属性についてるよ。

ラグ「それにしても「加速」なんて・・・よく考えたね？」

実はリペルトで強化される能力はミルキィホームズの12話を参考にしているんだ。

ラグ「なるほどね」

タチマル「さすがししょー、ここで新能力なんて・・・格好良い！」

でもちょっとギラティナとのバトルが・・・

ラグ「うん、出来れば戦いたくないんだけど・・・」

この「戦いたくない」って意志がどうバトルに影響するのかなあ〜

第八十九話 貝VS影（前書き）

さて、ギラティナ戦二話目です。

タチマル「今回はタイトルから分かるとおりオイラがバトルしますよ！」

まさかタチマルだけでギラティナを倒しちゃう!?

タチマル「そうなんですか!?!」

・・・では本編どうぞ！

第八十九話 貝VS影

新能力「リペルト」を使い自身の速度を上げたラグ。しかしその速度は「攻撃」のためではなく「回避」のためのものだった。今ラグはずっと攻撃を避けていた。

ギラティナ「シャドークロー」

ラグ「ブースト!!!」

ギラティナは攻撃してくるがラグはフレイムカリバーのリペルト能力「ジェット」を使い軽く避ける。

ギラティナ「くそ、ちょこまかと・・・」

攻撃が当たらずイラつくギラティナ、しかし実際はラグの方が追い詰められていた。

カリバー「ラグ、攻撃しないと!このままじゃ無駄にジェットの時間が過ぎていくだけです!」

ラグ「分かってるよ!頭では分かってる。でも仲間を攻撃するなんて・・・」

そう、ラグはこれまで「仲間をまもるため」に戦ってきた。だから今までの相手には全力で戦えた。しかし今回は違う。自分の仲間で恩人だ。なによりもう彼の優しさを知ってしまったている。それがラグを悩ませていた。

一方タチマル側では・・・

タチマル「シエルスラッシュ」

ギラティナ「シャドークロー」

二つの技は相殺、かなりの接戦となっていた。しかしタチマルはこれでは終わらない。

タチマル「きあいパンチ」

追加で“きあいパンチ”を発動、ギラティナに襲いかかるが・・・

ギラティナ「俺はゴーストタイプだ。そんな攻撃は・・・」

タチマル「何も「あなた」を狙うなんて言ってますんよ」

キラティナ「なに!？」

タチマル「はああああ!！」

タチマルが殴ったのはキラティナではなく地面だった。その衝撃で地面は砕け破片がキラティナを襲った。

キラティナ「くっ……!」

タチマル「そして“ビックシエルブレード”」

タチマルはさらに大きくした“シエルブレード”で攻撃、それは見事にキラティナにヒット、キラティナは地面にのめりこんだ、それぐらいの威力なのだ。

タチマル「どうですか!！」

タチマルは今の攻撃に自信があつたらしく少し誇らしげに言う。するとガラガラと瓦礫をどかしてキラティナが起きた。

キラティナ「この野郎……だがまだまだだぜ」

タチマル「やはり強い……これは戦いがありますね……」

その瞬間お互いに足を走らせた。

ギラティナ「ダークニードル」

ギラティナは自身の羽のトゲを少しとがらせて攻撃、しかしタチマルはそれを受け流しギラティナに向かった。(ちなみにこういう攻撃はヒットしても死んだりはずせず大ダメージを受けるだけです)

ギラティナ「なに!？」

タチマル「れいとうビーム」・・・!

ギラティナ「!?!」 “まもる”

タチマルが“れいとうビーム”と言って、ギラティナは急いで“まもる”を展開したが・・・

タチマル「・・・をまとわせて“きあいパンチ”!!」

ギラティナ「なに!?!」

ギラティナの“まもる”は発動タイミングがずれたので不成功、よってギラティナに氷をまとった“きあいパンチ”がヒットした。

タチマル「これなら“きあいパンチ”でも効くようですね」

タチマルはいったん離れた。

ギラティナ「ぐう……キサマ……」

タチマル「これも修行の成果です。あなたのように“まもる”を使うドラゴンタイプの方に効果抜群の攻撃をくらわせる……あいてのタイミングをずらして攻撃する“アイススタッグラーパンチ”ですな」

タチマルはなかなか余裕で言うがギラティナは焦っていた。

ギラティナ「まさかこのフタチマルがこんなに強いとは……正直予想外だな……」

タチマル「“かげぶんしん”！」

ギラティナ「？」

タチマルは“かげぶんしん”を発動タチマルが三人に増えた。

ギラティナ「増加・・・」

タチマル「ではみんな、行くよ!!」

タチマルA、B「オツケー！」

三体のタチマルは一斉にギラティナに向かっていくがギラティナはひるまない。

ギラティナ「三人か、そろそろいいかもな。発動、ダーク化！」

その瞬間闇がギラティナを被い中からダーク化したギラティナが現れた。

タチマル「Aは“シエルブレード”、Bは“アイススタッゲラーパ
ンチ”!!」

タチマルA、B「了解！」

AとBは指示通り技を発動、ギラティナにヒットするが・・・

ギラティナ「それがどうかしたか？」

タチマルA「えっ!?!」

タチマルB「効いてない!？」

キラティナ「残念だったな」

そう、ダーク化したキラティナにこの攻撃は効いていなかった。

タチマル「(マズイ!)二人とも早く戻って・・・」

キラティナ「もう遅い!“あくのはどう”」

キラティナは“あくのはどう”を発動、それによって二人のタチマルは消えてしまった。

タチマル「まさか一発で・・・!？」

キラティナ「甘いな!今の・・・ダーク化した俺には「闇の衣」というバリアが常時展開されている。中途半端な攻撃はムタだ。まあ俺の場合は分身だから本物より劣るかな」

タチマル「つまりはいつでも体に闇のバリアがあるということ・・・」

キラティナ「そういうことだ。“はいこうせん”」

タチマル「くっ!」

ギラティナは“はかいこうせん”を発射、タチマルはそれを“シエルブレード”で防ぐが……

タチマル「この威力……マズイ！」

ギラティナ「そういうことだ！」

その瞬間“シエルブレード”は破壊され“はかいこうせん”はタチマルを打ち抜いた。その衝撃でタチマルは大きく飛ばされる。

タチマル「くっ……暗黒化がここまで強いなんて……」

ギラティナ「“シャドークロー”だ」

タチマル「速い!?!」

タチマルが起きる前にギラティナはタチマルに接近、“シャドークロー”を構えていた。

ギラティナ「は!?!」

タチマル「“まもる”!?!」

タチマルはギリギリで“まもる”の発動に成功、なんとか攻撃をしのいだ。

タチマル「（なんとか離れなきゃ）“きあいパンチ”！」

タチマルは“きあいパンチ”で地面を攻撃、その衝撃でタチマルはギラティナと距離を置くことに成功した。

タチマル「（問題はここからどうするか・・・）」

ギラティナ「ダーク化2nd!」

タチマル「!?!」

その瞬間ギラティナの体からさらに闇が発生、ギラティナの力となる。

タチマル「せ、2nd!?!」

ギラティナ「そして“ダークニードル”」

ギラティナはさっきと同じように“ダークニードル”で攻撃、しかしそのスピードは更に速い。

タチマル「シエルブレード」!

タチマルは“シエルブレード”で対抗するが防ぎきれない。攻撃をくらい大きく吹き飛ばされた。

ギラティナ「これを使うとはな・・・」

タチマル「こ、これは・・・なかなかの力です・・・」

タチマルは瓦礫にまみれたその小さな体を起こしながらギラティナを見た。

ギラティナ「さあ、どうする?この状況、どう考えても・・・奇跡でも起こらないと・・・」

タチマル「起こします!!」

その瞬間タチマルから強大な力が発生、風が吹き荒れた。

タチマル「できた、これが・・・」リミットバースト」・・・」

ギラティナ「リミットバースト」・・・だと・・・!?!?」

ここで発動したのが「リミットバースト」。それはタチマルに大きな力を与えていた。

タチマル「これなら・・・戦える!!」

タチマルは「タンっ」と地面を蹴り走った。さっきより断然速い。

ギラティナ「(マズいな、「リミットバースト」・・・分身である俺には倒せないほどの力を感じる。ならば・・・)せめてダメージは与えてやる!!“ダーククロウ”!!」

ギラティナは羽に闇をまとわせ攻撃、六個の攻撃がタチマルを襲うが

タチマル「ほっ!はっ!!」

タチマルは全てを見切った。

ギラティナ「なんだと!?!」

タチマル「いきます!奥義・・・」

タチマルは避けてジャンプしギラティナの体長を越した。

タチマル「シエルブレード バージョン極水氷風斬」

タチマルは“シエルブレード”を出して自身の得意とする「水」「氷」「風」のエネルギーをまとわせる。すると“シエルブレード”は巨大な剣となり光る。

ギラティナ「ま、まもる”!”」

ギラティナは瞬時に“まもる”を展開、攻撃を防ごうとしたが・・・

「パキッ」

“まもる”に攻撃が当たった瞬間“まもる”は破れた。

ギラティナ「な・・・!?!」

タチマル「オイラの“シエルブレード”系は“まもる”系に強いんです、だから無駄です」

ギラティナ「こんなヤツに・・・俺が・・・」

タチマル「はああああ!!」

タチマルの剣がギラティナに当たった。その瞬間分身であるギラテ

イナは消えた。

タチマル「はあ、はあ、早く……ししよーの……お手伝いに……
行かなくちゃ！」

タチマルは体力を消費しながらもギラティナを倒すことに成功、本物のギラティナを倒すためラグの元へと向かった。

第八十九話 貝VS影（後書き）

タチマル「分身だけど倒しましたよ!」

うん、今回はダーク化に2ndにリミットバースト・・・色んな能力が一気に・・・

タチマル「でもギラティナさんのダーク化は2ndでも弱くないですか?」

あれは分身だしね、でも「闇の衣」は本物はなかなかの強度だよ。
ダーク化じゃあまり分かんないかも知れないけど2ndでの強度は・
・

タチマル「オイラ破れますか?」

無理、絶対無理!!

タチマル「え」

第九十話 集合！そして起こってしまった悲劇（前書き）

久しぶりの更新です。

タチマル「作者さん、遅いです！！」

ごめんごめん、色々忙しいんだよ。学生はさ。

第九十話 集合！そして起こってしまった悲劇

タチマルがなんとか分身のギラティナを倒した頃、未だにラグは避け続けていた。

ギラティナ「いつまで避けるつもりだ！」

ギラティナはラグが攻撃してこないのをいいことにドンドン攻撃を仕掛ける。

いくらスピードが上がったと言ってももちろん体力に限界があるためラグは段々と肩で息をし始めた。

カリバー「ラグ、マズいです！そろそろジェットモードの時間が……」

ラグ「あ！？」

その瞬間ジェットモードは解除、普通のフレイムカリバーになってしまった。

ラグ「しまった！早くジェットに……」

カリバー「無理です、あれはしばらくしないと発動できません！」

ラグ「そんな・・・」

キラティナ「隙ありだー!!」

ジェットが解除されたのをいいことにキラティナは攻撃、それを避けきれずラグは大ダメージ、かなり飛ばされた。

カリバー「ラグ、大丈夫ですか!？」

ラグ「う・・・うん」

ラグは倒れた体をなんとか起こす。

カリバー「やはり攻撃しないと・・・」

ラグ「だ、ダメだよ。そんなことしたらキラティナが・・・」

カリバー「しかし・・・」

ラグ「僕はまだ大丈夫、だからもう少し頑張ろう」

カリバー「・・・」

カリバーはあくまでラグの武器、故に主の作戦には文句は言えない。しかしカリバー自身ラグからのエネルギーがかなり減っているのは

わかっていた。

カリバー「早く倒さないとこのままではラグの体が・・・」

ラグ「うっ!？」

カリバー「ラ、ラグ!？」

「ドサツ」と音を立ててラグは倒れた。

カリバー「ラグ!ラグ!」

一方タチマルは分身との戦いを終えて本物のギラティナと戦っていた。

タチマル「(ししょーは遠くからエネルギーを溜めているに違いない。だったらオイラが時間を稼がなくちゃ!) “シエルブレード”」

タチマルはラグが飛ばされたのを利用してエネルギーチャージをしていると判断、時間を稼ぐために“シエルブレード”で攻撃、しかしギラティナには殆ど効いていない。

タチマル「なんで・・・まさか!？」

タチマルがギラティナを見るといつの間にか闇がギラティナを覆っていた。

タチマル「ダーク化・・・闇の衣か!？」

ギラティナ「ふっ、正解だ。“だいちのちから”!」

タチマル「くっ、“きあいパンチ”」

ギラティナは“だいちのちから”を発動、タチマルはそれを回避するために地面を殴り、自身の体を宙に浮かせた。しかしそれもギラティナの予想通りだった。

ギラティナ「“シャドーブレード”!」

ギラティナは自身の羽の先をまるで剣のように尖らせる。そして同時に振り落とし攻撃する。

タチマル「シエ、“シエルブレード”!」

タチマルは戸惑いながらも反射的に“シエルブレード”を発動、貝の剣を自己の前に構えて防御するが1本、2本あたると碎け、3本目でタチマルは攻撃をくらい地面に衝突した。地上では細かく動けても空中になれば避けられないだろう、そんなギラティナの作戦は的中したのだ。さらに

ギラティナ「あくのはどう”、“ダークカッター”」

ギラティナはおいうちに“あくのはどう”と闇で作った刃で攻撃する“ダークカッター”を使った。

タチマルのいる場所はこの強力な技を受けて地面には小さなクレーターが出来、あたりは砂埃が充満した。

ギラティナ「どうだ！一瞬の油断が敗北へとつながる戦いは！！」

タチマル「なかなか大変……ですが修行しがいがありますね……」

ギラティナ「！？」

ギラティナは今声のした方を見た。

そこにはボロボロながら微笑むタチマルがいた。

ギラティナ「お前……さっき……」

タチマル「ソニックウインド”・・・”
ギラティナ”?”」

タチマル「自分の足に風をまとわせて一時的に速度を上げる技です。
これで避けさせてもらいました」

ギラティナ「くう・・・」

タチマルの回避方法に齒を食いしぱり悔しがるギラティナ。しかし
実際はタチマルの方が追いつめられている。

タチマル「今回はなんとか避けられた・・・でもそれはまぐれ、
次が上手くいくか・・・」

そう、この“ソニックウインド”、実はまだ完全な技ではないのだ。
つまり今のはまぐれで発動しただけで次成功するかは分からない。

タチマル「まずはあの闇の衣をなんとかしなきゃ!」 “ビッグシ
エルブレード”!」

タチマルはギラティナの「闇の衣」を無くすため“ビッグシエルブ
レード”で攻撃、巨大な貝剣はギラティナを襲うが・・・

ギラティナ「無駄だ」

なんと攻撃はギラティナに直撃、しかし闇の衣でダメージはないようだ。

ギラティナ「そんな攻撃が効くとも思ってたか？」

タチマル「くっ！！」

“ビッグシエルブレード”の威力を少しでも上げるためにジャンプしていたため、地面に着地しようとする。しかしギラティナはその瞬間の隙を見逃さなかった。

ギラティナ「“ダークロックチェーン”！」

タチマル「うっ！！」

ギラティナはタチマルの着地点から闇の鎖を出現させてタチマルを縛った。

ギラティナ「さて、これでお前のちょこまかさは消えたな」

タチマル「は、離せ！！」

タチマルはもがくがチェーンは頑丈で撮れる気配は全くない。

キラティナ「これで・・・」

キラティナが自身の“シャドーブレード”でタチマルにダメージを与えようとした時

ドコーンー!!

凄まじい轟音と共に急に扉が壊れた。

キラティナ「・・・一体なんなんだ？」

そこには元のキラティナなら知っているであろうポケモン達がいた。

サンダース「ラグ、タチマル大丈夫か!？」

キノガッサ「どうだ、俺のストライクハンマーの威力は!！」

タチマル「皆さん!!--ここに居るといふことは・・・」

アクア「うん、勝ったよ。ってキラティナ!？」

キノ「なんでキラティナさんが!？」

タチマル「ギラティナさんがダーク幹部最強だったんです！」

ポリ「そんな・・・」

ハスポー「ダーク幹部・・・最強!？」

ギラティナ「なめるなよ!!」

この会話の間にもギラティナは攻めるがタチマルは何とか避けていた。しかしそのスピードもだんだん落ちてきた。そして

ギラティナ「シャドーブレード」!!」

タチマル「ぐっ、ぐあ!？」

ギラティナは技を発動、攻撃はタチマルを襲いタチマルは飛ばされた。

アクア「タチマル君!？」

キノガッサ「やべえな、ギラティナのやつタチマルの体力減少を見抜いてやがる・・・」

サンダース「ああ、このままじゃタチマルが圧倒的不利だ」

ポリズ「あれ、そう言えばラグは・・・?」

キノ「そうですね、見てませんね」

ハスボー「あ、あそこー!!」

メンバーはハスボーの見た方向を見た。そこには……

アクア「ラグちゃんが倒れてる!?!」

そう、さっき意識を失ったラグが倒れていた。

アクア「なんでラグちゃんが!?!」

サンダース「落ち着け、アクア!!」

アクア「でも……」

アクアは悲しそうな視線をラグにおくる。

キノガッサ「しかし、なんでラグが……」

ポリズ「おそらくはギラティナに……」

キノ「回復に行った方がいいですか?」

ポリズ「いえ、これはラグとタチマル君の戦い・・・手を加えるわけにはいけません」

ポリズは悔しそうな顔をしながらも答えた。

これはあくまでラグ&タチマルの戦い、そこに他の人が手を出せばそれは2人を信頼していないことになり、失礼だからだ。

そうこうしている間にもギラティナとタチマルのバトルは続いた。しかし押しているのはやはりギラティナ、タチマルは技を受け流すか避けるので精一杯だ。

タチマル「(このままじゃ・・・仕方ないです)」

タチマルはギラティナとの接近戦から抜けるため少し離れた。

ギラティナ「どうした、もう終わりか？」

タチマル「まさか、これから必殺技を出すんですよ！」

ギラティナ「必殺技？」

タチマルの言葉に少し警戒するギラティナ、一方タチマルは目を閉じた。

タチマル「我に眠りし「水」「氷」「風」の力よ、今こそその力を解き放ち我に与えよ!!」

タチマルが呪文を言うとタチマルの背後に水と氷が風によってあつまり、巨大な塊となった。

タチマル「発動!“ アクアイスウインドゴーレム(水と氷の風巨人)”

タチマルが言うと塊は形を変え、右手に剣を持った巨人の上半身になった。

ギラティナ「こ、これは・・・」

タチマル「僕の操る「水」「氷」「風」の力の合体技です」

ギラティナ「なるほど・・・で、どうするんだ?」

タチマル「もちろん攻撃しますよ、こっちは・・・!!」

タチマルは右手を振った。するとゴーレムも右手、つまり剣を振った。

ギラティナ「コイツ!？」

ギラティナは羽ばたいて何とか避けた。しかし地面のあたった部分にはクレーターが出来ていた。

ギラティナ「まさか操作型か!？」

タチマル「その通り、この技はオイラと同じように動きます。さらに・・・」

タチマルは右手を空にかざし振り落とす、巨人も剣を振り落とすがそのスピードはかなりのものだった。

ギラティナ「ならば“まもる”」

ギラティナは回避不能と判断、“まもる”で防御するが

ギラティナ「なんだと!？」

攻撃はとめたもののそこから氷が発生、膜となりギラティナを閉じ込めた。

ギラティナ「これは・・・!?」

タチマル「“アイスポリソン”・・・氷の牢獄です。これであな
たはこれからの攻撃を避けられない！」

ギラティナ「しまった!？」

その瞬間巨人の剣が光った。

タチマル「いきます!!烈風”シエルクラッシャー”」

タチマルは思いっきり貝剣を振り落とす、すると巨人も剣を振りお
ろした・・・がその威力は凄まじく、さっきの通常攻撃とは比べ物
にならない。
そして

ドコーン!!!!!!

その衝撃はタチマルが自身で作った”アイスポリソン”すら破壊し、
ギラティナにダメージを与えた。

サンダース「すげ・・・」

キノガッサ「あいつこんな切り札もってやがったのか・・・」

キノ「この威力だと・・・」

アクア「さすがのグラティナも・・・」

ポリズ「はい、相当なダメージを負っているでしょう」

ハスボー「もしかして倒せてたり？」

メンバーも今の技の威力にとっても驚いた。

タチマル「はあ、はあ、これでなんとか・・・」

タチマルが息を切らしほつと安心した。

しかしそれが油断だった

タチマル「!？」

グラティナ「なにを勝手に終わらせてるんだ？」

タチマル「ま・・・まさか・・・」

なにが起つたのか分からずタチマルはその場に倒れた。勝利したと思っていたメンバーも驚きを隠せない。

キノガツサ「おいなんで倒れたんだよ!？」

サンダース「落ち着けキノガツサ!！」

キノ「体力の消費・・・ではないですね」

アクア「うん、倒れ方がおかしかった・・・」

ポリズ「でもなんでタチマル君が・・・」

ハスボー「みんな、あれ!！」

メンバーは一斉にハスボーの指差した場所を見る。そこには

ポリズ「キラティナ!？」

キノ「なんで・・・さっきのタチマル君の攻撃で・・・」

キラティナ「残念だったな、そのフタチマルは俺を倒せなかった。俺の”シャドーファントム”でな。そしてとどめはニードルだ」

キラティナが少し嫌味っぽく言った頃、ラグは目を覚ました。

ラグ「う、うう……」

カリバー「ラグ！大丈夫ですか!？」

ラグ「うん、僕は大丈夫。それより早くギラティナのところに……」

ラグはギラティナを見た瞬間驚いた。

ラグ「え……なんで……」

ギラティナの足元にはさっき一緒に戦っていた仲間「タチマル」が倒れていた。

ラグ「タチマル……君……?」

第九十話 集合！そして起こってしまった悲劇（後書き）

ついにタチマルが！？

キノガッサ「やられちゃったのか！？」

それと同時にラグも復活だよ。

キノガッサ「ラグ・・・いつちゃんとバトルするんだよ！！」

それは君たちの「絆」の役目・・・でしょ？

キノガッサ「俺達の・・・「絆」？」

第九十一話 仲間達からの言葉 託された思い(前書き)

さて、タチマル君も倒されラグは避けるだけというバトルにならないバトルの続きです。

ラグ「う・・・」

第九十一話 仲間達からの言葉 託された思い

ラグ「タチマル・・・君・・・？」

ダメージを受けて一度は気を失ったものの起きたラグ。そんな彼の目の前には信じられない後景があった。

ラグ「な、なんでタチマル君が・・・」

アクア「ラグちゃん!!」

ラグ「アクア!?!」

ラグが起きたのに気づいたアクアはラグの名前を呼び、ラグはアクア達に気づく。

キノガッサ「ラグ!!」

サンダース「起きたか!!」

キノ「よかったです」

ラグ「みんな・・・もしかして・・・」

ポリズ「もちろんです!!」

ハスボー「勝ったよ!!」

仲間からの報告に笑顔になるラグ、しかしその顔はすぐに変わった。

ラグ「そうだ、喜んでる場合じゃない!なんでタチマル君が倒れて
いるの!？」

ラグの質問にメンバーは顔を背け辛い表情を浮かべる。
そんな中アクアが口を開いた。

アクア「ギリティナに・・・倒されちゃったんだよ・・・」

ラグ「え・・・」

アクア「さっきギリティナがニードルでタチマル君を・・・」

ラグ「そんな・・・」

ラグはショックのあまり膝をついた。

この世界にバトルでの「死」はない。

しかし大怪我ならあるし、「死」に近い状態はある。

ラグ「タチマル君が・・・」

ラグはあまりのことに放心状態となってしまう。

ギラティナ「隙ありなんだよ！“シャドーブレード”！」

ラグ「うっ!？」

ギラティナは“シャドーブレード”で攻撃、ラグにモロに当たりラグは飛ばされた。

ラグ「うう・・・もう・・・もう、嫌だよ・・・。ただでさえギラティナとバトルしなきゃいけないのに、タチマル君まで・・・。こんな・・・嫌だよ・・・。」

ラグは泣いた。

自分の大切な仲間が2人も傷つく、それがラグにとってとても苦しかった。

ラグ「もうこんなバトル意味がないよ・・・あとは、みんながバトルを・・・。」

アクア「ラグちゃん!！」

ラグ「!?!」

いきなりのアクアの大声に驚くラグ。アクアを見るとアクアは泣いていた。

アクア「ダメだよ逃げちゃ。」

ラグ「僕は……」

アクア「逃げてるんだよ!!」

ラグ「……」

アクア「戦うのが辛いのは分かるよ。確かにギラティナは前に私達を助けてくれた……ギラティナがいい人って事も知ってる。でもだから戦わない、戦えないのはおかしいよ」

ラグ「なんで? いい人だから攻撃できないんだよ!?!」

アクア「でもそのいい人……ギラティナは苦しんでるよ!」

ラグ「!?!?……」

アクア「ラグちゃんだって気づいてるでしょ? 逃げてるって」

ラグ「……」

アクア「別に逃げるのが悪いことってわけじゃないよ、逃げてもいい時はあると思う。でも今は違う、今を逃げちゃだめなんだよ！」

ラグ「!？」

アクアの言葉にハッとするラグ。アクアの言葉に目が覚めたようだ。

サンダース「ラグ、安心しろ。お前には俺たちがいるだろ？」

キノガッサ「そうだが、このキノガッサの仲間なんだ、このままは終わらねえよな！」

キノ「私たちラグさんを信じてます」

ポリズ「今こそ君の本気を見せて下さいよ」

ハスポー「ラグ、頑張って!!！」

ラグ「みんな……」

ラグはみんなの方を見た。そこには自分を信じ、待っていてくれる仲間がいた。

ラグ「そうだよね……」

サンダース「ラグ!!」

ラグ「僕は弱い、けど……」

キノガッサ「ラグ!!」

ラグ「そんな僕を待つてくれる人たちがいる……」

キノ「ラグさん!!」

ラグ「こんな僕でも頼りにしてくれてる……」

ポリZ「ラグ!!」

ラグ「信じて……」

ハスボー「ラグ!!」

ラグ「くれてる……」

アクア「ラグちゃん!!」

ラグ「カリバー!!」

カリバー「ロードカートリッジ!リペルティング!フレイムカリバー
ージェットモード!」

カリバーはカートリッジのエネルギーでもう一度ジェットを発動、
タチマルの元へ向かった。

キラティナ「させるか! “シャドーブレード”!」

ラグ「はあ!」

キラティナ「くっ!」

途中で攻撃されるがラグはカリバーで弾き、それを許さない。

ラグ「タチマル君・・・」

ラグはタチマルを抱きかかえるとみんなの元へ向かった。

ラグ「タチマル君をお願い・・・できる?」

アクア「うん、任せて!あとね・・・」

アクアは何かをとりだした。

ラグ「これって・・・!」?

アクア「うん、ヒードラン・・・さんが持ってたんだ」

アクアがとりだしたものの、それは・・・

ラグ「カリバーの宝玉・・・」

そう、アクアが差し出したのは白銀の色をした「宝玉」だった。

アクア「これからの戦いに・・・役立ててほしいんだ」

ラグ「アクア・・・うん！ありがとう！」

ラグはお礼を言うとアクアから宝玉を受けとった。

キノガッサ「あ、それならおれも・・・」

ポリズ「私もです」

するとキノガッサとポリズによってきて宝玉をとりだした。

ラグ「これは・・・水色の宝玉と桃色の宝玉・・・」

キノガッサ「レジギガスを倒した時に手に入れたんだ」

ポリズ「私もクレセリアを倒した時に・・・です」

ラグ「みんな・・・ありがとう！カリバー！」

カリバー「オーケイ、アブソロプション！！！」

そういつてラグはカリバーに指示、カリバーはこれらの宝玉を取り入れた。

カリバー「どうやらこの宝玉は「鋼」「氷」「エスパー」の力のようです。実戦にすぐ使えるのは「鋼」のみですがラグ自身のエネルギーはこれらのエネルギーのおかげでだいぶ回復したはずですよ」

ラグ「うん、そんな感じがするよ」

アクア「ラグちゃん・・・」

アクアがラグに近くに来てきれいな瞳で、笑顔で言った。

アクア「頑張つてね！！！」

ラグ「うん！」

そういつてラグはギラティナの方を向いた。それと同時に恐らくカートリッジのエネルギーも切れたのだらう、カリバーのジェットモーターも解除された。

ラグ「僕は今まで迷ってた。どうやったら君を救えるか、ずっと考えてた。そして答えが出たよ」

キラティナ「それは？」

ラグ「・・・君を倒すこと」・・・だよ」

キラティナ「ろくに攻撃もできない甘ちゃんが何を・・・」

キノガッサ「甘ちゃんていいんだよ!」

キラティナ「!?!」

突然のキノガッサの発言に驚くキラティナ、メンバーはそれぞれキノガッサに続いて言葉を発した。

サンダース「そうだが、甘さはラグの長所だ!」

キノ「けして短所や弱点ではありません!」

ポリズ「その優しさこそが彼の力です!」

ハスボ「僕たちだって何回も何回もその優しさに救ってもらったよ!」

ラグ「みんな・・・」

アクア「優しさ」・・・それがラグちゃんの最大の「強さ」なんだよ!」

ラグ「みんな・・・あり・・・がとう・・・」

必死に訴えるメンバー、その言葉にいつの間にかラグは涙を流していた。

そしてその涙をぬぐい、ギラティナを見た。その瞳には迷いはなく、ただまっすぐにギラティナを見つめていた。

ギラティナ「な、なんだ・・・」

ラグ「確かに・・・」

ギラティナの言葉にラグは口を開いた。

ラグ「僕は・・・僕は甘かったのかもしいない・・・」

ギラティナ「そうだ、お前は甘い。その甘さはお前の弱さだ。所詮はお前の力はそんなものだ！それに・・・」

ラグは言葉を発し、うつむいた。そこにギラティナがさらに侮辱の言葉をかける。

さらに・・・

ギラティナ「俺の”シャドーフロントム”は一定の空間に複数の「俺」を作り出す。攻略するためには・・・」

ラグ「全ての分身をほぼ同時に消すこと」・・・でしょ？」

ギラティナ「・・・！？なぜそれを・・・」

ラグ「カリバーを見てごらんよ」

ギラティナ「！？？」

ギラティナはラグに言われた通りカリバーを見た。するとフレイムからウオーターになっていたはずのカリバーは見たことのない形になっていた。

ギラティナ「それは・・・」

剣の割に剣先は丸くなっており、片手剣の太刀になっていた。

カリバー「メタルカリバー」コンプリート！！」

ギラティナ「メタルカリバー！？」

ラグ「カリバーの新しいフォームだよ。このメタルで君の技”シャドーファントム”を分析したんだ」

ギラティナ「！？？」

ラグ「僕は君の言うとおり弱いよ……」

ラグ「でも僕には……仲間がいる」

ラグ「こんなに弱くて情けないのにそれでも応援してくれる人がいるんだ……。こんな僕のために体をはって戦ってくれた人だっている……」

ラグ「今ごろ改めて気付いたよ、僕は一人で戦っているんじゃない。僕たちはチーム「絆」で戦っているんだ、異世界のラッシュ達バトル部……カゲっち君達あさポケナインのみんな……ヒイロ君やアカリちゃん達……みんなで戦っているんだ……」

ラグ「だから……」

その瞬間ラグはうつむいていた顔を上げ、ギラティナを見た。その視線はギラティナにはまぶしすぎるくらい明るい、まるで希望を取り戻したような顔だった。

ラグ「もう迷わない、もう逃げない、真正面から戦う！」

ラグ「大切な仲間……全員、一人残らず、誰も見捨てず、みんなを……みんなを必ず守る!!!」

ラグ「もちろん……君も!!!」

ラグはカリバーを向けてギラティナに宣誓した。

ギリティナ「ふん、お前にそんな力が・・・」

その瞬間ラグから一気に風が来た。

ギリティナ「な、なんだ!？」

カリバー「エレメントチェンジ、プラズマカリバー!!!」

精一杯踏ん張るギリティナはラグを見た。そこには金色に輝く剣、翼、そしてポケモンがいた。

ギリティナ「デンライジ・・・」

ラグ「リミット・・・バースト!!!!!!」

刹那、ラグから更なる力が発生、あたりに金色の突風が吹いた。

ギリティナ「な、なんだこの強力な力は・・・まさか!？」

ギリティナがラグを見るとラグはタッチマルの倒れていた場所に行っ

た。そして何かを拾った。

ラグ「タチマル君、君の武器、借りるね」

そういうとラグは手に持っていた貝を光らせた。数秒後、そこには水とは違う色のカートリッジがあった。

ラグ「カリバー！」

カリバー「オープン、エレメンタルセカンドカートリッジ！」

カリバーの下のエレメンタルカートリッジの部分が開かれ、普段のエレメンタルカートリッジを入れるリボルバーの奥に別のリボルバーが出てきた。

ラグはそこに貝のカートリッジを入れた。

カリバー「ロードエレメンタルセカンドカートリッジ！」

カリバーがそのカートリッジをロード、カリバーの剣部分が特に青くなり、一瞬風をまとった。

ギラティナ「仲間の武器を変化させただど！？」シャドーボール”

「!!」

ギラティナは警戒して”シャドーボール”を発射、しかし

ラグ「デンミラージュ」!!」

ラグはその場から消えた。

ギラティナ「な・・・」

ギラティナが驚くと目の前にあったはずの”シャドーボール”は全て消えていた。

そして自分の体に何かが衝突したのを感じた。

ギラティナ「・・・!?!」

ただただギラティナは驚いたまま飛ばされた。

ラグ「さていくよ、ギラティナ・・・ここからが・・・」

ラグ「本番だよ!!」

ラグの瞳からは迷いはなくなり、輝かしい希望の瞳となっていた。

第九十一話 仲間達からの言葉 託された思い（後書き）

ラグきたアアアアアアアアアアアア！！！！！

ラグ「作者さん、落ちついて！！」

もう、ラグじれったいな。早く覚醒すればよかったのに！

ラグ「ずっと迷ってたから・・・でもみんなのおかげで戦う勇気が出たよ。これからは本気で戦うよ！」

次回はいよいよVS幹部のラストスパートです。

第九十二話 覚醒！目覚めた力とみんなとの「絆」（前書き）

さあいよいよ決着です！！

ラグ「今回物凄く長くなっちゃったね」

まあそれだけすごいバトルだったってことだよ。
ダーク幹部最強のギラティナを倒せるのか！？
ラグに力を与えてくれるのは！？

ラグ「本編でのお楽しみ！」

そして「あの技」達も登場！

ラグ「なのはの世界で・・・」

ネタバレ禁止！

挿入歌は皆さんご存知「Prav」（<http://www.nicovideo.jp/watch/sm7265182>）です。

ラグ「なのはストライカーズの挿入歌だね」

では・・・

ラグ「どうぞー！！」

第九十二話 覚醒！目覚めた力とみんなとの「絆」

自身がみんなの思いを乗せて戦っていることを確認しついにバトルをする気になったラグ。

そんなラグをダーク幹部最強として倒そうとするギラティナ、二人の戦いは激化していた。

ギラティナ「シャドーボール”デイフィッション！！いけ！！」

ギラティナは”シャドーボール”の拡散型「デイフィッション」を発動、一斉にラグに襲い掛かるが・・・

ラグ「カリバー！！」

カリバー「ロードエレメンタルカートリッジ！！」

ガシャン！！

カリバーは瞬時にエレメンタルカートリッジをロード、カリバーはもう一度メタルカリバーとなった。

ギラティナ「また「分析」か！？」

ラグ「まだまだよ！！」

カリバー「リペルト!!」「クリエイトモード」!

さらにカリバーはリペルトで「クリエイトモード」になって。そしてラグはリペルト後地面にあった石を持ち、軽く上に投げた。

ギラティナ「一体何を・・・」

ラグ「はっ!」

落ちてきた石にメタルカリバーをさす、すると石はバラバラに分離し地面に解けた。

カリバー「リソーヴ!!」

ギラティナ「何の意味が・・・!?!」

カリバー「クリエイト!!」

一瞬疑問に思ったギラティナだったが次の瞬間目の前の光景に驚いた。

バンバンバンバン!!!

”シャドーボール”は確かにラグに向かった。しかし途中で出現したあるものにその行く手を阻まれた。

ギラティナ「土の・・・壁!？」

そう、現れたのは土の壁、それによってギラティナの攻撃は全て防がれた。

ギラティナ「どうやって・・・」

ラグ「ギラティナは勘違いしているみたいだけど・・・」

防ぎ終わったことで役目を終えた土は崩れ地面に帰る。すると奥にはラグがいた。

ラグ「このメタルカリバーの能力は違うよ」

ギラティナ「なに!？」

ラグ「分析・・・正確には分解・・・なんだよね」

ギラティナ「分解!？」

ラグ「うん、このメタルカリバーで触れることで対象のものを分解

できるんだ。あとは・・・」

カリバー「リソープ&クリエイト!」

ラグはカリバーを地面にさす。その瞬間ラグの背後から土で出来た大砲が現れた。

ギラティナ「な・・・!？」

カリバー「3、2、1、発射!」

ギラティナ「くっ、 “シャドーブレード”!」

カリバーの合図で大砲は発射、ギラティナは“シャドーブレード”でなんとかそれを防いだ。

ラグ「これが「クリエイト」、分解したものを形を変えて再構成するんだ。今のは石を分解して再構成の時に周りの土も吸収したから質量が増えたんだよ」

ギラティナ「コイツ・・・」

ギラティナは驚きを隠せなかった。

このカリバーの「クリエイト」らはギラティナが事前に調べたラグのデータに載っていなかったからだ。

ギラティナ「(コイツのデータにこんなのは無かった。・・・まさか・・・バトルの間に新たな力を!?)」

ラグ「今度はこっちから行くよ!」

ギラティナ「!?!」

カリバー「エレメンタルチェンジ、ウォーターカリバー!」

ラグ「そして“ウォータールーム”」

ギラティナが考えているとラグは遠慮なく攻撃宣言、カリバーを振ると暴風が発生しギラティナに襲いかかった。

ギラティナ「マジカルウインド」

それに対してギラティナも風を発生させて向かわせた。2つの技は相殺・・・しなかった。

ギラティナ「な・・・」

なんと“ウォータールーム”は“マジカルウイング”に衝突すると“マジカルウイング”を消し、ギラティナを襲った。

ギラティナ「まもる」!

ギラティナはギリギリで“まもる”に成功、なんとか攻撃をしのいだ。

ギラティナ「一体なぜ・・・」

ラグ「簡単だよ。“ウォータルストリーム”に“プラズマストリーム”をプラスした、それだけだよ」

ギラティナ「つまり技を追加で出していたわけか・・・」

ラグの手にはプラズマとなったカリバーがあった。そのことで納得したギラティナはまだ余裕そうな表情を浮かべている。がしかし内心は非常に焦っていた。

ギラティナ「(俺の“マジカルウイング”を・・・あの技の威力、桁違いだ。)これは・・・しかたない、いくか!」

そういつとギラティナはまどついていた闇の量を増加させた。

ラグ「それが・・・」

ギラティナ「そうだ、ダーク化2ndだ」

ラグ「カリバーお願い！」

カリバー「はい！」

ラグの指示を受けてカリバーはまたチェンジ、今度はメタルカリバーだ。さらにリペルトして分解能力をもった。

カリバー「ダーク化2nd、どうやら体内のダークエネルギーを一時的に増加させる能力のようです。さらにギラティナの2ndには「闇の衣」という自動の闇バリアが常時装備されるようです。まあ一種の防御力の上昇ですね」

ラグ「なるほど・・・つまりはその「闇の衣」を破らないとギラティナに大きなダメージは与えられないってことか・・・」

カリバー「そのようです、まあ「闇の衣」自体は普通のダーク化でも発動していたかと」

ラグ「つまり・・・」

カリバー「ええ、今まで与えてきたと思われるダメージは低い・・・もしくは無しと考えるべきですね」

カリバーの答えにラグは苦笑いで答える。これまでギラティナを数

回飛ばしたりしたがそのダメージは「闇の衣」で最小限に抑えられている、そんな事実困ったからだ。

ラグ「僕の技でそれを壊す技はある？」

カリバー「現段階ではやはり「JSK」しかないかと・・・」

ラグ「そう・・・」

カリバー「ですがあれにはまだ足りないパーツが・・・」

ギラティナ「話している場合か!？」

ラグ「!？」

ラグは自身の背後からした声に反応し後ろを向いた。

ギラティナ「ドラゴンクロー」!!!」

ラグ「（これは速い・・・技じゃ間に合わないね）カリバー!」

カリバー「リソヴ&クリエイト!!!」

カリバーはリソヴしたあとクリエイトを発動、地面から瞬時に土の球体が出現、ギラティナの攻撃はそれにあたりラグは”ライトニングウイング”でギラティナから離れた。

ラグ「ふう、危なかった」

カリバー「よく判断されましたね？」

ラグ「だって僕が技出すより君のクリエイトの方が速いと思ったんだもん。それより・・・」「SLEI」の威力は？」

カリバー「現在の状態ではちょっと・・・。相手はギラティナですからあともう少しくらいはほしいですね」

ラグ「うーん・・・」

「ラグーー!!」

ラグが難しい顔をしたその時、入口の方でラグを呼ぶ声がした。その人物は・・・

ラグ「ミュウー!!」

ミュウ「ちょっといいかい？」

ラグはミュウに呼ばれミュウの元へと飛んだ。

ラグ「どうしたの？」

ミュウ「実は君に渡したいものがあってね」

ラグ「？」

ミュウは自身の手に握られたものをラグに渡す。それをみてラグは驚いた。

ラグ「なにこれ・・・」

ミュウ「セントカートリッジ、バトル部からだよ。みんながラグのために力を貸してくれたんだ」

ラグ「みんな・・・」

ラグは感動し少し涙した。

ギラティナ「隙ありだ！」シャドーブレード”！！！！」

ミュウ「さあラグ、それで頑張つてギラティナを救つて！」

ラグ「うん！！」

ギラティナ「くらえ！！！！」

ギラティナの攻撃が当たる・・・かと思われたその時、その攻撃は

通らなかった。

ギラティナ「な・・・!？」

ラグ「今の僕にそんなの・・・効かないよ?」

なんとラグは顔はミュウに向けたまま複数の水の剣でブレードを止めていた。

ラグ「サークルレディアソード”・・・これで君のブレードは止めたよ」

ギラティナ「くっ!」

ラグ「さらに」

カリバー「リソヴ!!」

ラグはカリバーを地面にさしたままりソヴを発動、そして・・・

カリバー「クリエイト!!」

その瞬間ギラティナの周りに土の柱が複数出現しギラティナを閉じ込めた。

キラティナ「くっ、”ダークパンプニクス”!!」

キラティナは”ダークパンプニクス”で柱を攻撃、破壊した。

キラティナ「やつは・・・」

キラティナはすぐにラグを探したが見当たらない、すると上から声がした。

カリバー「さあ準備はできましたよ」

ラグ「うん」

キラティナ「準備だと!?!」

ラグ「うん、君を倒すためのね」

キラティナ「ふっ、笑わせるな!!」

キラティナは瞬時にある技を発動、自身に満ちた顔をしていた。

キラティナ「”シャドーファントム”、こいつは確かに”全ての分

身を消す」のが攻略法だがまだ条件がある。「一度に」だ」

20体近くの自分を作り条件を明かすギラティナ。

ラグ「・・・」

ギラティナ「一度に全ての分身を消さないといけない」それが条件だ。これがお前に・・・うつ・・・」

ラグ「ギラティナ？」

会話の途中で苦しむギラティナ、ラグは驚いたが数秒後、他のことで驚いた。

ギラティナ「ラ・・・グ・・・」

ラグ「ギラティナ！戻ったの？」

ギラティナ「いや、今だけだ」

ギラティナの言葉にラグは残念そうな表情を浮かべた。しかし次の言葉がラグの心に響いた。

ギラティナ「ラグ、頼むから俺を倒して俺を助けてくれ」

ラグ「・・・!?!」

ギラティナ「できる・・・よな？俺たちは「仲間」だから」

ギラティナの言葉にラグは少し涙を流しながら、しかしすぐにそれを拭って笑顔で答えた。

ラグ「もちろん!」

ギラティナ「ふ、そうか」

そんなラグの返事を聞いて微笑むギラティナは嬉しそうだった。

ギラティナ「それじゃあ頼むぞ、みんな!」

ラグ「うん!」

そしてギラティナはまたダークギラティナとなった。

ギラティナ「ぐう、やつが何をいったかは知らんがお前らに条件をクリアーでき・・・」

ラグ「できるよ」

キラティナ「・・・なに？」

ラグ「一度に」・・・でしょ？できるよ、というよりやるよ？」

カリバー「それに待っていました。あなたがそれを使うのを」

キラティナ「なに？・・・今更強がっても・・・」

カリバー「ラグー！！」

ラグ「うん」

カリバー「ロードカートリッジ！！」

刹那、ラグから金色の風が吹き荒れた。

キラティナ「くそっ！！」

パチパチ！！！！

その圧倒的な力を感じさせる風の中にキラティナは微電流を感じていた。

キラティナ「これは・・・一体どういう原理で・・・」

ラグ「原理なんかじゃないよ・・・」

ギラティナ「・・・？」

ラグ「僕は君を救いたい、みんなを守りたい、だから力が溢れるんだ！！！！」

ギラティナ「分からんな。いや、そんなこと・・・分かりたくもない！！！！」
「ダークパンプニクス」！！！！

ギラティナはラグに一気に攻撃しようと分身とともに同時攻撃、凄まじい闇の光線はラグに向かった。しかしラグは目をつぶり、右手を前に出し、静かに何かを唱え始めた。

ラグ「輝くは雷光、今わが手に集いて、悪しき闇を、広く、大きく包みこめ！！！！」

ラグが唱えると右手の前に小さな金色の電気の球体が出現、少しずつ大きくなり、ラグの体長ほどとなった。
そしてギラティナの攻撃が当たる直前・・・

ラグ「雷空球封！！」
「ライトニングエミッション」！！！！

カリバー「Lightning Emission！！！！」
ライトニングエミッション

その瞬間球体は一気に巨大化し分身達を包み込む、すると分身の動きは同時に止まりラグに攻撃できなかつた。

キラティナ「なんだと!？」

自身も止められたキラティナの本体も驚いた。

キラティナ「体がしびれて・・・動けない!？」

さらに次の瞬間キラティナにとって思いがけないことが起きた。

シュン、シュン!!

キラティナ「な・・・分身が・・・消えた!？」

そう、あんなに沢山いたキラティナが一度に、一瞬で、本物のキラティナのみを残して消えてしまったのだ。

キラティナ「(どういうことだ!?)」

キラティナは驚くが痺れて動けず表情だけが悔しそうになる。

ラグ「まだまだよ」

キラティナ「!?!」

ラグ「セイントカートリッジセット!」

カリバー「カートリッジセット!」

キラティナが気付くとラグは目の前にいた。そしてバトル部からの聖なるカートリッジをセットした。そして

ラグ「カリバー!」

カリバー「ロードシエルカートリッジ、セイントカートリッジ!」

キラティナ「2つだと!?!」

そう、カリバーはシエルとセイントの2つのカートリッジをロード、その瞬間カリバーは青い風、金色の雷撃がまとった剣となった。

キラティナ「なんだこの剣は・・・今までと・・・違う!?!」

カリバー「このカリバーはプラズマカリバーを主軸にシエルとセイントの力を加えたものです」

ギラティナ「・・・合成か!？」

ラグ「そういうこと!！」

カリバー「これでいけますよ!！」

ギラティナ「？」

カリバーの言葉にギラティナは疑問をもつ。するとカリバーに電気が集中した。

カリバー「ロードカートリッジ!！」

さらにカリバーはカートリッジをロード、更にカリバーに電気が集まった。

ギラティナ「(一体どれだけの電気を溜めるつもりだ!?)」

ラグ「いくよ!！」

ギラティナ「!？」

ラグはカリバーを振り上げ、ギラティナを見た。ギラティナは感じた。「何か強大なものがある」と。

ラグ「打ち切れエエエエツ!!!!!!」

カリバー「Jet thunder ジェットサンダー karriber!!!!!!」

ラグはカリバーを振り落とす。そしてキラティナの闇の衣に激突、しかし

キラティナ「や、闇の衣が・・・」

少しずつ闇の衣にヒビが入り・・・

カリバー「ブレイク!!!!」

パリンッ!!

闇の衣はガラスのように割れてしまった。

キラティナ「なぜだああッ!!!!!!は!?!」

その時キラティナはタチマルの言葉を思い出した。

・・・

タチマル「オイラの“シエルブレード”系は“まもる”系に強いんです」

・・・

ギラティナ「（タチマル・・・確かやつがそんなことを・・・）あれは「シエル」もロードしている・・・だからかつ!!」

闇の衣を破られたギラティナは更に苦い顔をした。

カリバー「これで攻撃は通ります！」

ラグ「雷拳撃衝!! “デンインパクト”!!!!!!」

闇の衣を破りラグはカリバーを左手に持ち替えて右に電気を集めた。そしてそれをギラティナに思いっきりぶつける。

ギラティナ「ぐああああああッ!?!」

ギラティナには超高高威力の技が防御なしにヒット、その衝撃でギ

ラティナはぶっ飛ばされ壁に激突、そのまま床に落ちた。しかし

ギラティナ「ぐ……くそが……」

ギラティナにはまだ体力がのこっておりまだ倒れてはいない。

ポリ「ギラティナ体力残り約60%!!」

サンダース「ラグ!!」

ラグ「もちろん!!まだ終わりじゃないよ!!」

そう言ってラグは空中でカリバーを片手で天にかざした。するとラグの目の前に少しずつ光が集まっていった。

キノガッサ「な、なんだよあれ!?!」

アクア「光……?」

ハスボー「すごく大きいよ!」

確かにその光は周囲の光を取り込んで大きくなり、その大きさはラグの1、5倍程になった。

ラグ「これがバトル部からの送られた技だよ!!」

ギラティナ「この・・・聖なる光が・・・」

カリバー「そうです。「セイントカートリッジ」によって完成したラグの変則型の集束砲撃!」

ラグ「周りのエネルギーをだいたい集めるから威力は必ず高威力・・・とは言えない。でもこれだけ周りにエネルギーがあれば!!」

その瞬間集まった光は綺麗な球体になり、大きさはラグの2倍程になっっていた。

ラグ「十分な威力になるよ!!」

ギラティナ「ば、ばかな!?!」

ギラティナは焦った。今このフィールドはタチマルと戦った時のエネルギーと今のラグとのバトルで溜まったエネルギーがあり、充満している。そのエネルギーが全部集束した攻撃・・・ギラティナには受けて耐える自信はなかった。

ギラティナ「まさかこの終盤でそんな大技を・・・それをモロにくらったら・・・」

キラティナは苦い顔しか出来なくなる。しかしキラティナはラグのある言葉を思い出した。

・・・

ラグ「周りのエネルギーを「だいたい」集めるから・・・」

・・・

キラティナ「「だいたい」・・・、そうか!」

キラティナは何かを思いついたようで笑った。

キラティナ「ふふふ・・・、ここで倒せるものならやってみろ!」

アクア「えっ!?!」

サンダース「なんだと!?!」

キラティナ「だから出来るのなら倒してみろ、といったんだ」

キノガッサ「コイツ・・・自分から・・・」

キノ「負けを認めたんでしょうか？」

ポリズ「きつと・・・何か罠が！」

ハスボー「ラグ気をつけて！」

ラグ「もちろん！それじゃあいくよー！！」

ラグの準備が整うと光の球体は今にも爆発しそうな状態だった。

ラグ「雷聖集砲！“スターセイント・・・ブレイカアアアアーツ”！！！」

カリバー「Saint of Breaker（セイント・オブ・ブレイカー！！！！）」

ラグがカリバーを勢い良くギラティナに向けて振りかざす。すると集まった光の球体からは真っ直ぐな金の光線が放たれた。

ギラティナ「ま、 “まもる” ！！！」

ギラティナは“まもる”を発動、それは“セイント・オブ・ブレイカー”を防ぐが1、2秒で破壊されギラティナに直撃した。

ギラティナ「ぐあああああ！こ、こらえる”！”

ギラティナは攻撃を受けながら“こらえる”を発動、そしてあたりには“セイント・オブ・ブレイカー”の威力で煙がまった。

アクア「や、やったあ！」

サンダース「これだけ威力があればいくらギラティナでも・・・！」

ギラティナ「ゴホゴホ、い、今は効いたぞ・・・」

アクア「ギラティナ！？」

サンダース「なに！？」

なんと煙の中からはギラティナが現れた。大ダメージを負ってるよ
うでボロボロだった。

キノガッサ「あれでも倒れないのか！？」

キノ「違う、今”こらえる”を使っていました！」

キノガッサ「こらえる”だと！？」

ギラティナ「ふふふ、よくわかったな。確かに俺は”まもる”で攻撃を弱めた後”こらえる”でその攻撃を耐えきった。ラグの残りの体力を削れるだけの力は残っているがな！」

ギリティナの言葉にメンバーは悔しそうな表情をする。

「もうだめなのか・・・」「勝てないのか・・・」
そんな思いばかりが、みんなの頭をよぎった。

しかしラグはまだ終わっていないかった。

ポリズ「ラグの方から凄まじいエネルギー反応確認！」

アクア「まだラグちゃんは無事ってこと？」

ポリズ「はい！」

そして煙が晴れるとそこには意外な光景があった。

ラグ「ハア、ハア・・・」

ギリティナ「な、あれだけの力を使っていたのにまだ立てるだど！
？」

立っているラグに驚くギリティナ、しかし驚きはそれだけではなかった。

パチパチ・・・

ギラティナ「この音は・・・電気!？」

ラグ「そう・・・だよ・・・」

なんとラグはあれだけの力を使ったにも関わらずラグの周りで電気がパチパチといつていた。さらにラグの体制は腰を低くし、右手を地面に向けて左手で右手首を抑えていた。

ギラティナ「まさか・・・技!？」

ラグ「いくよ!これが真の切り札だ!!」

カリバー「Ster Right Impact!!」
スターライトインパクト

その瞬間ラグの右手に周りの光が集まる。しかも「だいたい」ではなく「全て」だ。

ギラティナ「ま・・・まだまだアアア!! “ダークシャドーブレード”!!」

ギラティナは最後の力を使って“シャドーブレード”より巨大なブレードをだした。

その間にもラグにエネルギーが集中、さらに

ギラティナ「あちこちからエネルギーが!?!」

ラグに遠くからもエネルギーが集まっていった。

ラグ「これは・・・これはみんなの思いを集める技、みんながエネルギーをくれるんだ!?!」

ラグ「だから負けない、僕一人じゃないから。みんなが・・・いてくれるから!?!」

・・・

アクア「・・・あ!」

その瞬間ラグの右手のエネルギーは更に集まり様々な色が輝くものとなった。

それと同時にアクアはあることを思い出した。

アクア「そういえば……」

・・・

ラグ「アクア……」

アクア「何、ラグちゃん？」

ラグ「明日の戦いで僕はある技を使うかも知れない」

アクア「ある技？」

ラグ「うん、でもその技は威力がすごいからみんなに迷惑をかけるかも知れないんだ。だからアクアやハスボー達にバリアーを張ってほしいんだ」

アクア「いいけど……ムチャはダメだよ？」

ラグ「うん！」

・・・

アクア「（そうだ、バリアー！）ハボちゃん！」

ハスボー「ん？」

急に呼ばれたハスボーは不思議そうな表情で返事をした。

アクア「急いでバリアーを張って！」

ハスボー「なんで？」

アクア「ラグちゃんに頼まれてたの。威力の高い技を使うからバリアーを張ってって！」

ハスボー「オツケー、”リーフハイメンブラム”!!!」

ハスボーは草の力を集めた膜状のバリアーを展開、その場にいる全員を包み込んだ。

アクア「さらに、”氷水凍化龍 双龍”、”氷水凍化鳥 アストラス”!!!そして”アリストリングシールド”と”ウオーターキャッチバリアー”、”ハイルザカーテン”!!!」

アクアも二匹の龍と一匹の不死鳥を召喚、さらにアクアの指示で氷の輪の盾、”リーフハイメンブラム”の上に衝撃を和らげるバリアー、さらに耐電能力を持つ氷のカーテンを発動した。

アクア「これでよしと……（ラグちゃん、後は思いっきりやっちゃって!!!）」

・・・

カリバー「バリアーの展開を確認しました」

ラグ「うん、それじゃあ・・・」

ラグはさらにパワーを集める、するとラグの足元の地面がへこんだ。さらにあちこちの地面もへこんでいく。

ギラティナ「（ラグのエネルギーで周りの地面が押されている！？）

」

”ダークシャドーブレード”を強化しようとエネルギーを溜めるギラティナは驚いた。まさか技の発動前に発動者の周りであんな現象が起きるなんて思っていなかったからだ。

ギラティナ「（だが俺も・・・負けられない！！！！）」

ギラティナも負けじとパワーアップ、”ダークシャドーブレード”は闇の力を得てさらに巨大になった。

ラグ「カリバー！！」

カリバー「ロードカートリッジ!!!!!!」

カリバーはカートリッジを全弾ロード、その瞬間ラグから円形の波動が発射された。

そしてその波動にギラティナは当たった。

ギラティナ「な、何という電気だ・・・」

その電気の力はアクア達にも伝わっていた。

・・・

アクア「なにこの痺れる感じ!?!」

サンダース「これは・・・電気だ!」

キノガッサ「電気って・・・まさか!?!」

キノ「ラグさんからのものですか!?!」

ポリZ「そのようです、ラグから凄まじい電気エネルギーが来てます」

ハスボー「あ、タチマル君が起きたよ!?!」

ハスボーの声に気付きみんなタチマルの方を見た。すると確かにタチマルは起きていた。

タチマル「ここは・・・あ！早くししょーをサポートしなくちゃ・・・」

キノ「あ、もう少し安静にしてください！」

タチマルが動こうとするとキノが慌てて止めた。

キノガツサ「よく見とけよタチマル、ラグをさ！」

タチマル「ししょー！？ついに本気を！？」

キノガツサ「ああ」

サンダース「みんなの思いに気付いたらしいよ。もちろんお前の思いにもな」

タチマル「う、嬉しいです！」

アクア「だからタチマル君も応援しよう！」

タチマル「はい！」

こうしてタチマルもラグを応援することになった。

・・・

カリバー「チャージ完了！いつでもいけます！！」

ラグ「よし、それじゃあいくよ！！！！」

ラグは”ライトニングウイング”を発動、そしてギラティナに向かってはばたき進んだ。その勢いは凄まじく羽ばたいた場所の地面がへこんだ。

ギラティナ「返り討ちにしてやる！！はあああああ！！！！」

ギラティナも負けじとブレードを思いっきり振りかざした。

ラグ「僕だつてなのはやラッシュ、カゲつち君、ヒイロ君、絆のみんなやタチマル君達・・・みんなの思いを乗せてる・・・負けるわけにはいかないんだあああああ！！！！」

パリンッ！！

ラグは右手に溜めたエネルギーをブレードにぶつけた。するとブレードの方が割れてしまった。

ギラティナ「バ、バカな!？」

ラグ「最後だ!?!?!?!」

ギラティナ「!?!」

急なことで反応できなかったギラティナは防御も忘れてしまった。そんなギラティナの前には光り輝く「金色」があった。暖かく光輝く……そんな金色が。

ギラティナ「光……」

サンダース「ラグー!?!」

キノガッサ「ラグー!?!」

キノ「ラグさんー!?!」ポリズ「ラグー!?!」

ハスボー「ラグー!?!」

タチマル「ししよー!?!」

ラグ「これが僕の仲間・・・みんなの思い!!!雷星撃衝!!!」
“スターライトインパクトオオオオ”!!!!!!」

ラグの右拳がギラティナに直撃、ギラティナにラグ最大の技が防御なし、モロに入ったようだ。

ギラティナ「ぐあああああああああああ!!!???」

そのままギラティナはくらうつとかなり吹き飛ばされて壁に激突、絶死していた。

ラグ「これが・・・みんなの力・・・だよ・・・」

第九十二話 覚醒！目覚めた力とみんなとの「絆」（後書き）

ラグ「や・・・やったー！！勝ったよ！！」

みんなの思いが“スターライトインパクト”に力をくれました。

ラグ「“セイントオブブレイカー”にもだよ！でも“ライトニングエミッシヨン”に“ジェットサンダーカリバー”・・・すごいね」

ちなみに“ジェットサンダーカリバー”は「闇の衣」を切っただけなのでギリティナ本体へのダメージはありませんよ。

ラグ「それにメタルカリバーのリソースとかも何気に強いね？」

まあ“スターライトインパクト”達におされて目立たなかったけど凄く強いのは確かだね。

第九十三話 幹部戦終了！そして・・・？（前書き）

久々の投稿です！！

キノガツサ「さて、今回の言い訳は？」

ん？言い訳？何の・・・

キノガツサ「更新が遅れたわけだああ」 ストライクハンマーでぶっ飛ばす

ぐへ！？

キノガツサ「さて、気もすんだし第九十三話、いつてみつか」

第九十三話 幹部戦終了！そして・・・？

ラグの“スターライトインパクト”によりギラティナを倒すことのできた「チーム絆」、それにより戦いは終了した。

ポリズ「これで幹部は全員倒しましたね」

サンダース「ああ、今はとりあえず脱出だ」

今ラグ達はまだ塔の中におり、脱出しないといけない状況だった。

アクア「でも・・・凄い・・・」

サンダース「・・・ああ、相当な威力だったんだな」

あたりを見て感想を述べたアクアにサンダースは答えた。なぜアクアがこのような感想を言ったか、それは周りを見れば分かることだった。

壁はなく全て消し飛んでおり、足場もところどころ残っているだけでほとんどは崩れてしまった。この時アクアはバリアーを張っておいてよかったと心から安心した。

ポリズ「では脱出・・・」

アクア「ラグちゃん!？」

タチマル「ししよー!？」

ポリズが脱出しようとするルートを言おうとしたとき、アクアの声が響いた。

サンダース「どうしたアクア!？」

アクア「ラグちゃん・・・ラグちゃんが・・・」

サンダースはアクアに言われラグを見た。するとラグはアクアの前で倒れていた。

サンダース「ラグ!？」

サンダースが慌てて駆けつけるとともに他のメンバーも駆けつけた。

キノガッサ「おい、大丈夫かよラグ!」

ハスボー「どうしちゃったの!？」

キノ「皆さんちょっといいですか?」

メンバーが心配する中、キノがラグに近づいて様子を見た。

キノガツサ「どうなんだよキノ？」

キノガツサの言葉は真剣で周りのみんなも真剣だった。しかしキノは困ったような顔をして

キノ「大丈夫です、疲れて眠っているようです」

キノガツサ「・・・は？」

ハスボー「なあ〜んだ、ビックリした〜」

タチマル「でもししょーが無事で良かったです！」

サンダース「まあ無事・・・ではないが一応元気だからな。良かったな、アクア」

アクア「うん・・・ごめんね」

アクアは自分のせいでみんなを焦らせたので謝った。しかしアクア自身、ラグに何かあったらどうしようという焦りがあつたようだ。

ポリズ「さて……それで脱出ですが……」

ミュウ「あ、道なら塞がれたよ」

ポリズ「……ええー!?」

ポリズは驚いて出口を見た。するとすでに岩で塞がれていた。

ポリズ「な……どういう……」

ミュウ「それだけじゃ……ないみたいだよ」

ポリズ「？」

ミュウの言葉に疑問を持つポリズ。しかしその言葉の意味はすぐに分かった。

ポリズ「力が……でない？」

ミュウ「どうやらここに「技の発動をなくす」効果の何かが発動しているらしいね」

ポリズ「そんな……」

「技が使えない」それはポケモンたちの能力を封じると言っても過言ではない事態だった。
しかも……

ハスボー「ねえ、この足場段々崩れてるよ!？」

ポリZ「え!？」

そう、技の威力の影響で足場は残ったものも耐久はなくなっていた。
つまり……

ミュウ「……もうすぐ崩れるね」

メンバー「……ええええええええええええ!？」

ミュウの冷静な一言に驚くメンバー、しかしミュウは表情を変えない。
い。

キノガッサ「どうすんだよ、このままじゃ床が崩れて全員お陀仏だぜ!？」

ポリZ「分かってますよ!でもどうすれば……」

焦るメンバー達、しかしアクアがあることに気付いた。

アクア「なんでミュウはそんなに余裕なの？」

ミュウ「ん？」

そう、この一大事にミュウは冷静すぎるくらい落ち着いていた。

アクア「ミュウも技とか使えないのに……」

キノガッサ「確かにそうだな」

キノ「何か秘策とかがあるんですか？」

ミュウ「秘策……はないけどなんとかなるよ」

ポリZ「なにを根拠に……」

ミュウに言葉に疑問を浮かべるポリZ。その時だった。

ガタツ！

ポリZ「!？」

ハスボー「床が……」

キノガツサ「崩れたああああ」

メンバーの乗っていた床が崩れしまった。

サンダース「くそっ・・・」

タチマル「お、落ちてます〜!?!」

アクア「さすがにこれは・・・」

????「諦めるのか?」

アクア「!?!」

落下途中、ある人物の音が聞こえた。その人物は・・・

アクア「かめさん!?!」

かめさん「そっじゃよ」

現れたのはルマーテの街長カメックスのかめさんだった。

サンダース「かめさんが来ただと!?!」

???「おいおい、お前には一人しか見えていないのか？」

サンダース「!?!」

サンダースは声のした方を見た。そこには・・・

サンダース「ギャロップ!?!」

ギャロップ「久しぶりだな」

なんと昔サンダースと同じチームだったギャロップがいた。

ギャロップ「そのハスポーとポリゴンズ、サンダースとフタチマルは俺が引き受ける、かめさんは他を頼むぜ」

かめさん「了解じゃ」

ギャロップ「はっ!」

ギャロップはかめさんに作戦を伝えると崩れる足場を飛んでハスポー、ポリズ、サンダース、そしてタチマルを助け、そのまま地面に降りた。

かめさん「さて、それじゃあ残りをやるかのオ・・・」

かめさんはその大きな腕を振り上げ

かめさん「ほいや！」

地面に叩きつけた。すると地面が崩れて奥から水が大量に出てきた。

かめさん「アクア達ここに飛び込め！」

アクア「う、うん」

アクア達は水に飛び込んだ。これなら確かに落ちても大丈夫だ。

アクア「ふう〜危なかつ・・・」

サンダース「アクア！？」

アクア「？」

アクアはサンダースに突然、しかも怒鳴られるように呼ばれたので反射的にあたりを見回した。すると

アクア「が、瓦礫!？」

そう、崩れる瓦礫がアクア達の上から降ってきた。

アクア「きゃー!！」

ドン!！」

アクア「・・・あれ？」

落ちてくると思われた瓦礫は、しかしアクア達に落ちてくることはなかった。

グライドン「俺様を忘れてもらっちゃ困るぜ?。」

アクア「グライドン!？」

グライドン「よっ!！」

そう、グライドンが自身のパンチで瓦礫を壊していた。

グライドン「他のやつらは・・・気絶してるらしいな」

アクア「えっ？」

アクアがポリZ達を見ると確かに気絶していた。

アクア「大丈夫・・・かな？」

グライドン「一応水に浸かってるからな、それで体力消耗したんだろっよ」

アクア「なるほど・・・」

????「みなさ〜ん」

アクア「？」

アクアは声のした方を見た。そこには

デンさん「みなさ〜ん」

アクア「デンさん!？」

エレキブル「久しぶりだな」

アクア「エレキブルさん!？」

現れたのは少し大きめのへりに乗って現れたインルーラの街長と元街長だった。

デンさん「みなさうん、早くのつてくださーい」

アクア「え、え？」

状況が全く分からないアクア。するとグライドンがギラティナ以外をつかみ・・・

グライドン「おりゃああああ!！」

投げ飛ばした。

アクア「わあああ!？」

もちろんアクアは驚いたが、しかしちょうどへりに乗り込むことができた。

ギャロップ「コイツらも頼むぜ！」

グラードン「おう！」

サンダース「お、おい。まさか」

グラードン「おりゃああああ！！！」

サンダース「げええ！？」

また投げ飛ばしたグラードン。しかしこれも乗り込むことに成功した。

デンスン「よし！エレキブルさん！！！」

エレキブル「任せろ！」

デンスンがメンバーが乗り込んだことを確認するとエレキブルが思いつきりレバーを動かす。するとへりはUターンしてそれから加速した。

アクア「ねえデンスン、グラードンやギラティナ達は？見捨てるの！？」

デンスン「そんなことしませんよ。グラードンさん達を見て下さい」

アクア「？」

アクアがグラードン達を見た。するとグラードン達はギラティナ達に何かを付けていた。しかし遠くからで何を付けているかは分からない。

アクア「何を付けてるの？」

デンさん「サイコペンダント」というサイコパワーの結晶を埋め込んだペンダントです。あれではあくまで「技」ではないので使えるはずです」

サンダース「つまり・・・」

デンさん「はい、大型の皆さんはヘリには乗れないのであれで瞬間移動して頂きます」

デンさんの笑顔の答えに安心するアクアとサンダース。こうしてチーム「絆」はなんとか脱出することが出来た。

第九十三話 幹部戦終了！そして・・・？（後書き）

アクア「みんな勢ぞろいだね、作者さん」

うん。君達を助けるためにきてくれたんだよ

アクア「誰が連絡したの？」

それは次回で・・・

アクア「というかどうするの？もうダーク化事件はこれで・・・」

まだ終わってないよ？

アクア「え？」

だってまだ「幹部」を倒しただけじゃん

アクア「じゃあ次回からラスボス戦？」

いや、今回はとりあえず色々あったんで落ち着こうかと

アクア「？」

まあたまには平和にね

第九十四話 これまでの思い出、そしてラグとアクア（前書き）

今回は平和です

ラグ「たまにはあっていいよね、」
「じいじのもの」

第九十四話 これまでの思い出、そしてラグとアクア

あの脱出から数日後、ラグ達チーム「絆」はエルビストのリフレッシュセンターで休息していた。

アクア「うーん、今日もいい天気」

アクアが外に出て日光を浴びた。今まではあまり日光を楽しむことはなかった。余計に気持ち良く思えるのだろう。

ヒードランとの戦いで敗北し、クレセリアやレジギガスとの戦いでも敗北、自分たちの力の無さを思い知らされた。

そしてミュウの修行の考察。異世界に旅立つという本来なら不安しかないはずのそれはメンバー全員にとっての希望だった。

それからタチマルとバトルし異世界へと旅立ったのだ。

異世界ではなのは達に会った。自分たちとは違う「魔法」というものを使う彼女たちはいい手本となりまた「切り札」へと導いた。

そして帰還して間もなくダーク幹部との戦いが始まったのだ。

修行によって鍛えた己の力を信じて戦い、前回とは違い対等に戦っていた。

そんな中で明かされたそれぞれの過去。

「いじめ」「差別」「理不尽な社会」

それぞれのダーク化の理由はとても辛くかわいそうなものだった。そんな中でそれぞれが言った言葉、それはいずれも

「ここから逃げて」

ということだった。ダーク化2ndの威力を知っているからか発せられたその言葉。しかしチーム絆のメンバーに逃げたものは一人もいなかった。

それどころか本心を聞き発動した更なる力

「リミットバースト」

そしてそれを行使して放たれたそれぞれの切り札達

- ・氷水凍化龍 双龍
- ・サンダーランチャーIEC
- ・ギガメテオストライク
- ・トリプルリース
- ・メガインパクトキャノン

- ・ミストラルリフレクションキャノン
- ・アクアイスウインドゴレム

それらの技により決着をつけることができた。

しかしそこから進んだ道に広がっていたのは……

ラグとタチマルがギラティナと戦っているところだった。

しかもタチマルは戦闘不能となりラグだけで戦う状態に。しかしラグは戦えなかった。

優しさゆえの縛り、その呪縛を破ったのはアクアだった。

アクアの言葉に、メンバーの……みんなの言葉に目覚めたラグはようやく本気になり「リミットバースト」はもちろんカリバーの変形「リペルト」を見せ「メタル」の能力を存分に発揮した。さらに勝利に貢献したのは……異世界での技だった。

なのは達に教わった「ライトニングエミッション」「ジエツトサンダーカリバー」、バトル部での習得技「セイントオブブレイカー」、そして全てをかけた最後の一撃「スターライトインパクト」……その全てがラグの、チーム絆の完全勝利へのかけ橋だった。

アクア「あの時の技……凄かったなあ」

ラグ「お〜い、アクア〜」

アクア「あ、ラグちゃん」

ラグの技を思い出して思わず声に出してしまうアクア。弱かったラグがこんなに成長していたのだ、無理もない。そこにラグが来た。

ラグ「ミュウがお昼ご飯だって」

アクア「そう、ありがとう」

ラグ「どういたしまして、さあ、行こう!」

アクア「・・・ラグちゃん?」

ラグ「ん?」

昼食のため食堂へと向かおうとするラグにアクアは声をかけた。

ラグ「なに?」

アクア「ラグちゃんは・・・これからどうするの?」

ラグ「え?」

アクア「ラグちゃんはもうかなり強くなった。カリバーにデンライジ、もう弱くないよ」

ラグ「……」

アクア「だからもう私たちの手助けも……いらない……」

ラグ「そんなことないよ！」

アクア「!？」

静かに、つぶやくように話すアクアにラグは大きな声で言った。あまりにも突然すぎたのかアクアは驚いていた。

アクア「ラグ……ちゃん？」

ラグ「僕は強くないよ。あの時はみんなが力を貸してくれたから勝てたんだ。だからアクア達にはいてほしい」

アクア「!？」

ラグ「僕は未熟だからさ。あ、もちろんみんなに何か理由があるんなら仕方ないよ!？それは僕が縛っていいことじゃないし……でもできれば一緒に旅をしたいな」

アクア「……くすっ」

ラグ「アクア？」

急に笑うアクアにラグはどうしたのかと声をかけた。するとアクアは何事もなかったように

アクア「ううん、何でもないよ さぁお昼ご飯食べに行こ！」

ラグ「あ、うん」

先を進むアクアについていくラグ。アクアの目には喜びの涙がこぼれていた。

第九十四話 これまでの思い出、そしてラグとアクア（後書き）

アクア「ちょ作者さんこれは・・・」

うれしそうだねアクア

アクア「・・・（照）でもラグちゃんが必要って言うてくねてうれ
しいな
」

第九十五話 勢揃い、お助けキャラ！（前書き）

さあ、まだまだ平和だよ！

ラグ「今回はお助けキャラの話し？」

ん〜どっちかっていうと重要ポイントは他にあるかな。

ラグ「それじゃあ第九十五話、行ってみよー！！」

第九十五話 勢揃い、お助けキャラ！

全員「いただきますー！」

ミュウ「どうぞ」

ミュウツ「たくさんあるからな」

現在昼食中、メンバー＋タチマル＋お助けメンバーで料理を食べていた。

ラグ「うーん、おいしい」

ミュウ「ほんと？今回はサーナイト達も手伝ってくれたんだよ」

キノ「ありがとうございます」

サーナイト「いえいえ、好きですから」

キノのお礼にサーナイトは笑顔で答えた。本当に料理が好きなのだらう。

アクア「こんなおいしいご飯久しぶり」

サンダース「だな、でもまあ……」

サンダースは横目でキノガッサを見た。そこには

キノガッサ「……おかわり!」

グラードン「俺もだ!」

キノガッサ「なんだよ、マネすんな」

グラードン「俺様も今ちようどなくなっただ。どうだキノガッサ、勝負……するか?」

キノガッサ「へっ、売られたケンカは買うぜ!」

グラードン「決まりだな、よゝい……スタート!」

キノガッサ「……」

グラードン「……」

合図とともに二人は喋らずに食べ始めた。食す、そのことしか頭にないようだ。

サンダース「あれは行き過ぎだと思っがな」

アクア「あはは・・・」

ギャロップ「まあいいじゃないか？たまにだしよ」

サンダース「ギャロップ!？」

ギャロップ「なんだよその幽霊でも出たような反応は？」

サンダース「悪いな、驚いたんだ。お前・・・体、もう大丈夫なのか？」

ギャロップ「体？体は元から大丈夫だぜ？問題があつたのは精神だ」

サンダース「精神？」

ギャロップ「ああ、精神崩壊しててな、まあ安心しろよもう大丈夫だ」

サンダース「それならいいが・・・」

本音を言うところの時サンダースはダーク化について聞いたかった。ダーク化したものしかわからないことがあるかもしれないからだ。しかしサンダースは聞かなかつた。理由は簡単。「ギャロップが傷つくかもしれない」からだつた。

ポリズ「しかし、よく私たちの居場所が分かりましたね？」

かめさん「なあに、簡単じゃよ。ダーク化対策本部から連絡があったんじゃ、助っ人として行ってってくれってのオ」

ポリズ「誰に……ですか？」

かめさん「ヤミラミ達じゃよ」

ポリズ「あ……」

ハスボー「ゴーストの三人だね」

どうやら連絡は三人がしてくれたらしい。

かめさん「だから助けに行けたんじゃ」

ポリズ「なるほど……」

ミュウ「ええっと……コホンッ！みんな、ちょっといい？」

それぞれが会話する中、ミュウがそれを止めた。大食いをしていたキノガッサやグラードンも箸を止めた。

ラゲ「どうしたのミュウ？」

ミュウ「実はみんなにお願いがあるんだ」

アクア「お願い？」

ミュウ「うん」

ポリズ「なんですか？」

ミュウ「デンさん……」

デンさん「あ、はい」

ミュウが引つ込むと今度はインルーラの街長のデンリュウ「デンさん」が前に出た。

デンさん「実は皆さんにある仕事を依頼したいのです」

サンダース「どんな仕事だよ？」

デンさん「警備……です」

キノ「警備……ですか？」

デンさん「はい」

デンさんは頷いた。警備……つまりは何かを守るといことだ。

キノガツサ「何を警備するんだ？」

デンさん「アダムの涙」という宝石です」

ハスボー「アダムの涙・・・？」

デンさん「はい」

タチマル「それって・・・何？」

デンさん「石です」

ラグ「石？」

エレキブル「正確には超高エネルギーのな」

エレキブルがデンさんの説明を補足した。

ポリZ「聞いたことがあります。アダムの涙っていうエネルギーの塊がある、そのエネルギーはかなり高く半永久的にエネルギーを供給できるのではないか・・・という説も」

エレキブル「その通りだ」

ポリZ「でもあれは異世界のもの・・・この世界には無いはずですよね？」

デンさん「はい、実は異世界から来たようなんです」

ハスボー「異世界から？」

デンスン「はい」

エレキブル「今インルーラでは次元の研究をしてな、それで迷い込んだらしい」

キノガッサ「なるほどな・・・」

サンダース「それを・・・取ろうとする奴がいるのか？」

デンスン「はい、予告状も・・・」

そういうとデンスンは予告状を出した。

サンダース「確かに予告状だ・・・」

エレキブル「あれはなんとしても守らないといかん。だからお前達に力をかして欲しいんだ、頼む」

ラグ「・・・どうする？僕はいいけど・・・」

アクア「ラグちゃんが言うなら私も！」

サンダース「俺もいいぜ」

キノガッサ「まあバトル出来るんなら行くか」

キノ「もちろん行かせて頂きますよ!」

ポリズ「アダムの涙」にも興味がありますしね」

ハスボー「決定だね」

ラグ「それじゃあデンさん、そのお仕事させて下さい!」

デンさん「あ、ありがとうございます!」

ラグとデンさんが握手を交わした。その時

タチマル「し、ししよー?」

ラグ「どうしたの、タチマル君?」

タチマルがラグに話しかけた。

タチマル「あの・・・オイラもチームに入れてくれませんか?」

ラグ「え?」

驚くラグ、しかしタチマルの表情は真剣だった。

タチマル「オイラ思ったんです。オイラも・・・誰かを助けたいって」

タチマル「苦しんでいる人を自分の力で助けたいって」

タチマル「だからお願いします、オイラを連れて行って下さい！」

深々と頭を下げるタチマルをラグは静かな瞳で見た。

ラグ「多分ギラティナ戦で分かったと思うけど危ないよ？」

タチマル「承知の上です。オイラは強くなりたいんです。そのため
の危険は構いません」

ラグ「・・・」

ラグはしばらく口を閉じて腕組をして考えた。この答えに興味があるらしくメンバーも全員が静かにラグの答えを待った。そしてついにラグの口が開かれた。

ラグ「いいよ、これから一緒に頑張ろう」

タチマル「あ・・・はい！」

タチマルは笑顔で言った。こうして絆に新しくフタチマルの「タチ

マル」が入った。

デンさん「警備の日は後数日後ですので」

デンさんは優しく微笑み言った。

第九十五話 勢揃い、お助けキャラ！（後書き）

タチマル「ついに絆に入れました！」

よかったね、タチマル

タチマル「はい！」

でも当初の計画では・・・

タチマル「違つたんですか!？」

うん、まあその内雑談会かなんかで話すよ

タチマル「そして警備ですか・・・」

これは考えてたんだ。

タチマル「いつからですか？」

ギリティナ戦の決着時ぐらい

タチマル「わりと最近ですね・・・」

この小説は計画はほんと大まかにしかしてないからねえ

第九十六話 警備！戦いは夜！絆+???（前書き）

さていよいよ警備です。

ラグ「でも絆+???って?」

大体予想つかない?

ラグ「あんまり・・・」

じゃあ????が何なのか！行ってみよう!!

第九十六話 警備！戦いは夜！絆+????

デンさんから「アダムの涙」の警備を頼まれたラグたちチーム「絆」。
。タチマルを新メンバーに加えての仕事だ。そして数日後、その日は来た。

デンさん「ここです」

デンさんが指をさした。それは大きな博物館だった。

キノガツサ「デケえな！」

ポリズ「こんな建物がインルーラにありましたっけ？」

そう、ここはインルーラ。以前来たことのある街だ。

サンダース「何年前から博物館の建設があつてな、たぶんそれが
かんせいしたんだろう」

ポリ「なるほど・・・」

デンさん「さて、皆さんこちらに・・・」

デンさんは手を振りながら呼んだ。そこは机のあるリビングのよう
な場所だった。
そこに座ると話が始まった。

デンさん「今回守っていただくのはあれです」

アクア「あれが「アダムの涙」？」

デンさん「はい」

キノ「きれい……」

デンさんが指をさした方にはケースに入った「アダムの涙」があり
女の子メンバーは反応した。

サンダース「……で、あれを守ればいいのか？」

デンさん「あ、はい。ただ助っ人をこちらで用意しました。

サンダース「助っ人？」

キノガッサ「いらねえよ？」

デンさん「でもこの「アダムの涙」の世界の方なので……」

そう言っただけでデンさんの後ろから出てきたのは意外なことに人間だっ

た。

キノガツサ「おい、人間かよ」

デンさん「はい、ですが悪い方ではありませんよ。自己紹介をお願いしても?」

???「あ、はい」

そういつて少女たちは前にでた。

シャロ「あたしはシャーロック・シェリンフォードです。シャロって呼んでくださいね」

ネロ「僕は譲崎　ネロ、よろしく」

エリー「私はエルキュール・・・バートンです。エリーって・・・呼んでください」

コーデリア「私はコーデリア・グラウカと申します。コーデリアって呼んでください」

シャロ「あたし達はミルクィホームズっていう探偵チームです!」

ラグ「僕はラグ、よろしくね」

アクア「アクアです」

サンダース「サンダースだ」

キノガッサ「俺はキノガッサっていうイケメンだ！」

キノ「キノです」

ポリズ「ポリゴンズです、ポリズって呼んでください」

ハスボー「ハスボーだよ」

タチマル「タチマルです、よろしくお願いします」

ラグ「僕達は絆っていうチームだよ」

こうしてとりあえずお互いに顔を交えた。

ポリズ「この人達がその世界の人ですか・・・」

デンさん「はい」

コーデリア「どうやらアダムの涙のかけらがこちらの世界に来てしまったようですね・・・」

ネロ「それを僕達が回収しに来たってわけ」

ポリズ「なるほど・・・」

ネロという少女の言葉に納得したポリズ。どうやらこの子は自分のことを僕と呼ぶらしい。

キノガツサ「でもお前ら戦えんのか？」

デンさん「あ、そこは大丈夫です。彼女達には特殊能力があります」

キノガツサ「特殊能力？」

デンさん「はい、皆さん？」

デンさんに言われると彼女達の目が変わった。

シャロ「あたしはこれです」

シャロが机の上に置いてあった鉛筆に腕を向けた。すると鉛筆は浮かび上がった。

キノガツサ「は！？」

キノガツサは何も出来ないと思っていたためビククリだ。

ネロ「次は僕だね、えい！」

ネロは腕に巻いた金属のヘラを取り出し電気のスイッチに触れた。
すると電気が消えた。

キノガツサ「それは電源を消しただけじゃ・・・」

ネロ「じゃあこれならどう?」

ネロは外に出てヘリにヘラを差した。すると

ブロロロ・・・

ヘリのエンジンがかかった。

ネロ「鍵は使ってないよ」

キノガツサ「はあ!?!」

エリー「次は私ですね・・・。恥ずかしいけど・・・えい!」

エリーは博物館内の重そうな箱に手を添えた。そして力を入れる。
すると重そうな箱は一瞬で持ち上がった。

キノガツサ「はああ!?!」

コーデリア「次は私ですね．．．キノガッサさん、昨日チョコレートを食べましたよね？」

キノガッサ「え、い、いや食べてない．．．」

コーデリア「うそです、あなたからチョコレート匂いがします。それに．．．」

コーデリアはキノガッサの口を指差した。

コーデリア「チョコレートがついています」

キノガッサ「げ!？」

ポリズ「ちょっと失礼します」

ポリズがルーペを持ってキノガッサの口を見た。そこには確かにあとがあった。

ポリズ「確かにありますね．．．昨日私たちはチョコレートなんて食べていないはずですが．．．」

キノ「昨日私のチョコレートが無くなりました。犯人はキノガッサだったんですね！」

キノガッサ「あ．．．は、はい。」「ごめんなさい」

まさかの展開にしぶしぶ謝るキノガッサ。そんなキノガッサを見て
デンは苦笑いだっただ。

デンスン「あはは・・・とにかく、彼女達に特殊能力があるのはわ
かりましたよね？」

ポリズ「ええ「念動力」、「機器操作」、「力量上昇」、「五感強
化」って感じですか？」

デンスン「はい、彼女達の中ではこの能力を「トイズ」と呼んでい
るそうです」

ラグ「トイズ・・・」

キノガッサ「んで、そのトイズで戦う・・・と」

デンスン「というか皆さんのサポートに回って頂くとうかと思ひます」

キノガッサ「サポート？」

デンスン「はい、先ほどお話ししたとおり彼女達には特殊能力があり
ます。ですからそれを使ってもらい、サポートをして頂くとうか」と

キノガッサ「なるほどな」

サンダース「それならサポート出来るってわけか」

デンスン「はい」

そういつつデンスンは近くのホワイトボードの黒いマジックを手にとり、何やら書き始めた。

デンスン「では配置ですが、まずこの博物館に来るためには3つの道があります。1つは正面、後は西口と東口です。」

エレキブル「で、正面が一番広いからここに絆から2人、ミルキイから2人ほどを配置する」

デンスン「あとの西口、東口には絆から一人、ミルキイから一人ずつです」

デンスンがホワイトボードに図を書いていった。ここでラグが不思議そうな顔をした。

ラグ「あれ？それだと人数が・・・合わないよね？」

デンスン「はい、だからポリズさんには司令塔になって頂きますよ」

デンスンの話しを聞いてキノガッサがさっそくしゃべる。

キノガツサ「じゃあ俺が正面だな」

サンダース「ちよつと不安だけど・・・大丈夫か？」

キノ「あ、私も行きますよ」

サンダース「じゃあ安心だな、それじゃあ俺は西口に行くか」

アクア「あ、じゃあ私も！」

タチマル「じゃあオイラは東口で！」

ハスボー「僕も東口」

ラグ「じゃあ僕は・・・ってない!？」

そう、メンバー配置はデンさんの話通りだと一人余ってしまう。

ラグ「デンさん僕は・・・？」

デンさん「あ、ラグさんには特別に守って頂きたい場所があります」

ラグ「そうなの？」

デンさん「はい、絆では「ラグにしか」出来ない場所ですよ！」

果たしてデンさんのいうラグ限定の場所とは!？

第九十六話 警備！戦いは夜！絆+????（後書き）

というわけでコラボです。

シャロ「作者さんは同じですけどね。こんばんは、ミルクイホームズではおなじみのシャロです」

ネロ「ネロだよ〜いや〜夜食べるお菓子も美味しいね〜」 お菓子食べ中

エリー「あの・・・私は・・・エルキュールです。あの、エリーって・・・呼んで下さい・・・」

コーデリア「コーデリアです。ついにラグ冒に参加よ〜」

ラグ「なのはに続いてミルクィ・・・コラボが完璧作者さんの趣味になってる・・・」

まあそれは置いて・・・今回彼女達の性格や能力が分かりにくかったら「探偵オペラミルクィホームズ」を見て下さい。ちょうど僕の所の小説あるんで。

ラグ「次回は？」

いよいよ戦い直前か、戦いに入るかそこらへんかと。

ラグ「四人の活躍にも注目してね！」

実は大切な役目の四人ですよ

第九十七話 共闘！チーム絆と探偵の卵達（前書き）

さてバトル直前です！

ラグ「そつえばデンさんの言ってた場所ってどこ？」

それは本編でのお楽しみだよ

第九十七話 共闘！チーム絆と探偵の卵達

「アダムの涙」を守るため、探偵チーム「ミルキイホームズ」と共闘することになったラグ達チーム「絆」。そしていよいよ警備の日が来た。

～夜～

ラグ「いよいよだね」

アクア「うん、誰もきそうにない雰囲気だけど・・・」

ラグとアクアは今西口にいた。アクアがここの警備なのでいるようだ。

ラグ「もうすぐサンダーズさんが来るはずだよね？」

アクア「うん、あともう少しかな・・・？」

ラグはアクアが一人だとマズいと考えて今ここにいるようだ。

アクア「ねえ・・・ラグちゃん？」

ラグ「ん？」

アクア「ラグちゃんはこれから・・・どうなると思うっ？」

ラグ「何が？」

アクア「私達、ダークの幹部を倒した・・・確かに倒したけど・・・
「幹部」だよな？」

ラグ「そう・・・だね」

ラグもアクアも暗い表情となる。そう、まだ「幹部」を倒しただけであって原因は叩いてない。つまりまだまだ終わらないのだ。

アクア「これからまだ戦いが続く・・・ラグちゃんはずっと戦うっ？」

ラグ「・・・」

アクア「私さ、正直怖いんだ。これから戦っていく中で誰かが傷つくから」

ラグ「アクア・・・」

アクア「できれば・・・できれば傷つけたくないんだ。誰も・・・
みんな・・・」

ラグ「・・・じゃあさ」「本当に傷つく」「ことからみんなを守ろう」

「よ」

アクア「本当に傷つくこと・・・?」「」

アクアは訳が分からないらしく首をかたむける。そんなアクアにラグは優しく答えた。

ラグ「うん。「闇に完全に支配される」「っていつことからみんなを守るっ!」「」

アクア「ラグちゃん・・・」

ラグ「そのためのチーム「絆」なんだしさ!」「」

ラグの笑顔にアクアは笑った。

アクア「・・・そうだよね、守りたいもんね!」「」

ラグ「うん!」「」

アクア「ありがとうラグちゃん」

ラグ「元気になってくれて良かったよ」「」

サンダース「お〜い、ラ〜グ、ア〜クア〜!」「」

その時、少し遠くからサンダースの声がした。

アクア「あ、お兄ちゃんだ」

ラグ「じゃあ、行くね」

アクア「うん、ありがと」

ラグはデンラージになり“ライトニングウイング”を広げると飛んでいった。

サンダース「待たせてごめんな」

アクア「ううん、気にしないで」

サンダース「やっぱ・・・楽しかったか？」

アクア「も、もう！からかわないですよ！」

少しニヤニヤしながら言うサンダースの言葉の意図が分かったらしくアクアは少し赤くなる。それはともかくアクアはサンダースの頭に何かが付いていることに気付いた。

アクア「ところでお兄ちゃん、その頭の・・・」

サンダース「あ、これか？これは・・・」

ピピピピ・・・

アクア「な、なに！？」

サンダース「きたな」

サンダースが説明しようとした瞬間に発せられるアラームのような音にビックリするアクア。それに対してサンダースは冷静だった。

サンダース「これだな」

サンダースが頭につけた物・・・ウインカムに付いているボタンを押した。

デンさん「あ、通じましたね」

アクア「デンさん！？」

デンさん「はい、そうですが・・・何かありました？」

サンダース「これはな、通信のための機器なんだ。だからデンさんの声が聞こえる・・・ってわけだ。ちなみにこれは各場所の一人が持つてるはずだ」

アクア「なるほど・・・」

サンダース「んで話しを戻すとどうしたんだデンスン？」

デンスン「いえ、そちらは準備オーケーかなと思ひまして」

サンダース「それなら・・・」

アクア「あ、ミルキイの人も来たよ」

アクアが確認すると確かに誰かがこちらにきていた。

アクア「ネロ・・・って子だね」

サンダース「そうみたいだな。西エリアサンダース、アクア、ネロ、オーケーだ！」

デンスン「分かりました、では・・・東エリア！」

タチマル「はい、東エリアです」

ハスボー「こつちもハスボー、タチマルくん、エリーさんでそろつてるよ」

デンスンが聞くと通信機からはハスボー達の声が聞こえた。揃っているそうだ。

デンスン「分かりました。では正面^{メイン}エリアはどうですか？」

デンスンは正面口のメンバーに通信を回して聞いた。

キノガツサ「こちらメインエリア。キノガツサ、キノ、シャロ、コーデリア、全員揃ってるぜ」

キノ「いつでもいけますよ」

キノガツサ達・・・メインエリアも大丈夫なようだ。

デンスン「皆さん準備オーケーですね。あとは・・・ラグさん！」

ラグ「あ、はい」

デンスン「ラグさんも準備オーケーですか？」

ラグ「あ、はい大丈夫ですよ。でもここっついていきますか？」

苦笑いしながら問うラグにデンスンは笑顔で答えた。

デンスン「はい、大切なポジションですよ。だってラグさんしかないんですよ？」「空」を守るのは――！」

そう、ラグの守る場所、それは博物館の上空だった。

デンさん「では皆さん、よろしく願いしますね！」

デンさんは通信を切った。

その瞬間、サンダース達の目の前に複数のポケモンが現れた。

ネロ「来たみたいだよ……」

サンダース「ちょうどか……」

アクア「結構いる……」

デンさん「すいません！ちょうど反応がありました！」

瞬時にデンさんから連絡が入った。緊急らしくサンダースがボタンを押してなくてもその声は聞こえた。

サンダース「ああ、今日の前にきてる。他もか？」

デンさん「はい、各エリア一斉に……」

――

東エリア

タチマル「！？来ましたね！」

エリー「結構多い・・・ですね・・・」

ハスボー「大丈夫！なにがあってもバリアーで守るから！」

メインエリア

コーデリア「正体不明の者が接近中！」

シャロ「もしかして・・・敵ですか！？」

コーデリア「ええ！」

キノガツサ「安心しろ！俺がしっかり守ってやる！！」

キノ「あんまり調子に乗らないでよ」

空中

ラグ「あれ・・・来ちゃったかぁ・・・。ここは来ないと思ったんだけど・・・。」

カリバー「あちこちから来てますね。結構な集団のようです」

ラグ「あはは・・・。」

ラグが発動したカリバーと話しながら苦笑いした。デンライジになっ
っているためプラズマだ。

ラグ「でも・・・負けるわけにはいかないよね？」

カリバー「もちろんです」

ラグ「さて、それじゃあ行こうか」

カリバー「はい」

ラグはカリバーを構えた。

デンさん「では皆さん、お願いしますよ」

全員「はい!!」

第九十七話 共闘！チーム絆と探偵の卵達（後書き）

ということではバトルスタートです！！

ラグ「今回のバトル・・・何かあるの？」

うん・・・一応ね

第九十八話 戦闘！そして新たな黒い影（前書き）

さて更新ですよ!!!

ラグ「ごめんね、作者さん今テンションが上がって・・・（汗）」

キノガツサ「まあなんでかは活動報告でな」

ラグ「ちなみに今回はみんなカツコよく書いた・・・らしいよ」

キノガツサ「特に俺はホントにカツコよく書いたらしいぜ！頭の中でアニメ化して見てくれ!!!」

「イイイイイヤアアアアアホウウウウウウ!!! シャロオオオオオオオ!!!」

ラグ「作者さんはおかしくなってるけど」

キノガツサ「第九十八話・・・」

ラグ&キノガツサ「スタート!!!（だぜ!!!）」

第九十八話 戦闘！そして新たな黒い影

「アダムの涙」という宝石の警備をすることになった「絆」は臨時のサポート役ミルキイホームズと協力して警備していた。今は戦闘中だ。

上空

ラグ「カリバー！！」

カリバー「ロードカートリッジ！！」

ラグ「”ハイドロステインガー”　ゴー！！」

ラグはカートリッジをロードした後”ハイドロステインガー”を放つ。その数はカートリッジのおかげで増えており、一度にたくさん
の相手を倒すのには最適だった。
しかし敵は倒しても倒しても奥から出てくるばかりだ。

ラグ「これでもまだ・・・」

カリバー「ラグ、この敵・・・何か違和感があります」

ラグ「違和感？」

カリバー「はい、ポリZに連絡を取って解析を頼みましょう」

ラグ「別にメタルカリバーでやってもいいんじゃない・・・」

「ぐらああー!!」

ラグ「!？」

その瞬間、ラグの背後には敵がおりラグは反応して後ろを向き、自身の目で見た。敵が力を込めた腕を振り下ろす瞬間を。

ラグ「くっ!？」

ラグはカリバーでなんとか受け止めた。さらにそこからいったんはじいてお互いに離れた。

カリバー「メタルは無理ですね。メタルの分析は少々時間がかかる場合があります。しかし敵が多いので時間がありません・・・クリエイトならいけますがあれは「創造」ですから・・・」

ラグ「うん、ポリZに連絡しよう。”サークルレディアソード”!・・・ポリZ!!」

ラグはメタルカリバーの分析は不可能と判断し周囲の敵を”サークルレディアソード”で制圧しつつポリZに連絡、するとポリZから応答がきた。

ポリZ「こちらセンター、どうしました？」

ラグ「なんか敵がおかしいんだ。そっちのパソコンとかで調べられない？」

ポリZ「ラグの所もですか・・・」

カリバー「どういう意味ですか？」

ポリZの言葉に疑問を抱いたカリバーが質問した。ちなみにポリZは指示をするため博物館内のセンター室にいる。

ポリZ「実はメインからもその連絡がきてるんですよ」

ラグ「キノガツサ達から？」

ポリZ「はい、どうもコーディアさんが気づいたらしいです。彼女は五感強化ですからね、それで分かったんでしょう」

ラグ「それで、何か分かった？」

ポリZ「これはあくまで予測ですが「分身」ではないかと」

ラグ「分身？」

ポリズ「はい、さつきから一定のポケモンしか来ていません。ですから大元がいて全員大元から生まれた分身だと考えれば……」

カリバー「つじつまが合いますね……」

ポリズの意見にカリバーも賛同のようだ。

ポリズ「とりあえずこちらでは分身の大元を探しますのでなんとか踏ん張って下さい」

ラグ「オッケー」

ラグが返事をする通信は切れた。

ラグ「分身かぁ……」

カリバー「どう戦いますか？」

ラグ「そりゃもちろん……」

ラグがカリバーを構えた。目の前には向かってくる敵がいた。

ラゲ「いつもどおりに戦つよー!!」

カリバー「ですよね」

メイン

キノガツサ「くらえ” エナジーシューター” !!」

キノガツサは自身の周りに” エナジーボール” を複数発生させた。
そしてそれを向かってくる敵にあてていく。

コーデリア「キノガツサさん、右です！」

キノガツサ「おう！」

ストライクハンマー「 ロックバルカン”」

キノガツサ「おらあああ!!」

コーデリアが五感強化で敵を察知、キノガツサに教えるとストライクハンマーがキノガツサの拳に岩を装着させキノガツサが殴り倒していく。

そしてその場にいた敵を全員倒すといったんキノ、コーデリア、シヤロの元へと戻る。

キノガツサ「へっ、こんな実力で俺にバトルを挑むなんて100年早いぜ!!」

キノ「もう、あんまり無茶しないでよ」

キノガツサ調子がいいのかキノガツサはご機嫌、キノはそんな彼の油断を回復しながら注意した。そんなキノの回復のエネルギーの手伝いをシャロがしている。

キノガツサ「まあそう固いこと言うなよ。今回はお前以外に守らないといけないやつが2人もいるんだぜ？」

キノ「そうだけど・・・」

コーデリア「すいません、戦えなくて・・・」

シャロ「あたしも回復しか出来なくて・・・」

キノガツサ「気にすんな。つーかお前らは「察知」と「回復」でサポートしてくれてんだ。立派に戦ってるぜ？」

コーデリア「キノガツサさん・・・」

シャロ「優しいです!!」

キノガツサ「そうか?あ、あと・・・」

そうキノガツサが言った瞬間彼は消えた。次に声がしたのは3人の背後からだった。

「うつ！？」

キノガツサ「俺の相棒パートナーに手エ出すなよ。」

キノ「まさか敵が背後に!？」

シャロ「全然気付かなかった・・・」

コーデリア「すみません!」

キノガツサ「言っただろ、気にすんな。あいつらが間違えたただけだからよ。さて・・・」

キノガツサはそう言いながらストライクハンマーを敵の軍勢の方に構えた。

ストライクハンマー「ロードカートリッジ」

ストライクハンマーは一度ハンマー部分が上に上がりカートリッジセット部分が動いた。そしてハンマー部分が下がり元に戻る。するとカートリッジがロードされるとともにその影響で白い煙が少々舞

い上がる。そして1、2秒するとその奥からキノガツサが見えた。

キノガツサ「お前らの相手は「俺」だろ？ だったら・・・」

キノガツサが目をつぶりながら言った。言い終わると目を開けた。その目は真剣だったが顔は微妙に笑っていた。待っていた何かが来たように。

ストライクハンマー「ギガンテストフォーム!!」

キノガツサ「相手してやる。「本気」でな!!」

西口

サンダース「サンダーブレイド」

サンダースは自身の周りに雷の短剣を発生させて敵の周りに打ち込む。そして

サンダース「ブレイク!!」

合図とともに爆発、爆風に巻き込まれた敵はシュン!と消えた。

サンダース「やはりポリズの言うとおり分身か・・・」

敵の攻撃後の変化からそう判断するサンダース。そんなサンダースの両サイドでは凄まじい戦いが行われていた。

アクア「”氷水凍化龍”!!」

ネロ「はああああ!!」

アクアは龍ちゃんの突撃で、ネロは自身のトイズ「ダイレクトハック」でクレーンを操作して敵を一掃していた。

サンダース「しっかしネロも戦えるとはな・・・正直驚いた」

ネロ「こういう電子で動く系のものだったら操作できるからね」

アクア「でもそのクレーン使ってよかったの？」

ネロ「さあ?でも緊急事態だし仕方ないよ」

サンダース「だな。さて、まだまだ出てきそつだ。勝負はこれからだ。いいな？」

アクア「うん」

ネロ「もちろん」

東エリア

ハスポー「タチマル君!!」

タチマル「はい！」水風斬”！」

ハスポーに指示されたタチマルは手にあるホタチを剣として扱い風を発生させ攻撃した。攻撃は直撃した敵は消えていった。

ハスポー「タチマル君、ナイス」

タチマル「はい！」

笑顔で言うハスポーにほめられてうれしらしくタチマルも笑顔で答えた。

そんな彼の隣で・・・

エリー「えーい!!！」

エリーは手に巨大な木をもって横に振る。もちろん敵に直撃し同じようにシュン!と消えた。

タチマル「エリーさん・・・凄いですね」

エリー「だって・・・「アダムの涙」を守らないといけないから・・・」

エリーは恥ずかしそうに顔を赤らめて言った。恥ずかしがり屋という彼女の性格からだろう。

ハスボー「とにかく・・・」

ハスボーは敵の遠距離攻撃をバリアーで防ぎながら話す。

ハスボー「まだまだ頑張ろう!」

タチマル「はい!!！」

エリー「は、はい！」

???「これは・・・僕が行くしかないかな・・・」

一人のポケモンが暗い部屋でモニターでラグたちの様子を見ながら言った。

???「あんまり行きたくないんだけど・・・」

ポケモンは立ち上がり出口のドアへと向かった。

???「特に「ポリZさん」と「ハスボーさん」には会いたくないんだけど・・・」

???「なんだ、行くのか？」

ポケモンがドアを開けようとする他のポケモンが現れて行動を聞いた。

???「はい、どうも分身だけじゃダメみたいで・・・」

「……そんなにほしいか、「アダム」の涙が」

苦笑いしながら言うポケモンにこれまた他のポケモンが聞いた。

「……ほしいですけどそれよりも一度戦っておきたいんですよ。
「ポリZさん」と「ハスボーさん」のチームのリーダーを。」

「……それなら俺も戦いたいな」

「……わしもじゃ」

「……そんな……全員はダメですよ。誰が「アダム」の涙をとりに行くんですか？」

「……お前さん、さっきいらんといったじゃろ」

「……とにかくあなたたちは回収をお願いします」

「……まあいいか、俺も見に行くかな。「サンダース」と「アクア」を」

「……わしも久々に「キノガッサ」と「キノ」をみるかのオ」

「……ちよつとだけですよ」

「……ああ、それじゃあ……」

「????」行くかのお

謎の三匹は会話をすますとドアを開き外へ出た。

第九十八話 戦闘！そして新たな黒い影（後書き）

ということでバトルはラグたちが優勢です

キノ「なんか逆に怖いんですが・・・」

そう？

ポリズ「そうですよ。最後にだれか出てきましたし」

3人ね。あれ、重要だから

ポリズ「え？やっぱり重要ですか？」

もち。発言的に考えてみなよ。

ポリズ「僕やハスボーを知ってる・・・」

キノ「私やキノガッサのこともです」

もうひとりにはサンダーズやアクアのことを知ってたよね？さア、もうわかったでしょ

キノ「？」

ポリズ「？」

ポリさんは前にフラグ立ててるのに・・・

ポリズ「？」

あ、ちなみにここに出てくる敵のポケモンが何なのかは次回で！！

第九十九話 敵？味方？現れたポケモン（前書き）

今回はあの謎の3人の内1人をあかすことになりました。

キノガッサ「全員じゃねえのか？」

そこは勘弁してくれ（汗）

第九十九話 敵？味方？現れたポケモン

警備のための戦闘から数十分、ラグたちは懸命に闘っていた。

ラグ「ハイドロステインガー」

ラグは”ハイドロステインガー”で敵を一掃したが奥からまた敵は出てくる。

ラグ「ハア、ハア、何体倒してもきりがない……」

カリバー「ですね……こちらの体力ばかりが奪われています」

疲労で息が上がるラグ。そんなラグにポリズから連絡が入った。

ポリズ「ラグ！」

ポリズ「ポリズ！？」

カリバー「何か分かりましたか？」

ポリズ「はい、あの分身の元が君達の近くにいるらしいんです」

ラグ「近く!?!」

ラグは慌てて周りを見渡したが人影はなかった。

ラグ「どこにも・・・」

ポリズ「反応とラグの位置が重なりました!」

カリバー「つまりは・・・上か下です!!」

ラグはカリバーにいわれて上を見た。すると確かに何か近づいてきた。

そして何者かが拳を振り上げラグに当てようとした。

ラグ「くっ!?!」

ラグは急いでカリバーを頭上に構え攻撃を防いだ。そして一度離れるためにはじいた。

カリバー「あれが反応ですね」

ラグ「らしいね」

ポリZ「き、君は・・・」

ラグ「ポリZ知ってるの？」

突然^{バッチ}通信機からポリZの反応があったので聞いてみた。するとポリZの口からあるポケモンの名が発せられた。

ポリZ「カイリユウ君・・・？」

ラグ「えっ？」

ポリZ「君は、カイリユウ君・・・だよな？」

ポリZが再度聞くとカイリユウは笑顔で答えた。

カイリユウ「はい、カイリユウですよ。ポリZさん」

ポリZ「一体なぜここに・・・」

ポリZがここに来た理由を聞こうとしたその時、カイリユウの口が開いた。

カイリユウ「“でんじは”」

カイリユーは自身から微弱な電気を発生させた。それにより通信機
器は異常を起こし通信は途絶えてしまった。

カイリユー「ふう、これでとりあえずは邪魔されませんね」

ラグ「・・・君はポリズのお知り合い？」

カイリユー「はい、詳しくは話せませんがお互いに顔は知ってます」

ラグ「なんで僕のどこに来たの？ポリズのところにはいかないの？」

ラグが言うときカイリユーは微笑し、答えた。

カイリユー「僕の今回の目的はポリズさんに会いに来たわけではあ
りません、あなたと戦いに来たんです」

ラグ「僕？」

カイリユー「はい、強者として名をはせていたダーク幹部、彼らは
あなたたちとの最初の戦い以降、実力を持った組織として有名にな
っていました。「獄炎の使い手」「ヒードラン、「暗黒の月」クレセ
リア、「破壊の巨人」レジガス、そして「影の世界の王」ギラテ
イナ、それぞれが「対処力」「守り」「パワー」「トリッキー」・・・
とそれぞれのエキスパートだったんですが・・・」

カイリユー「高い性能の「攻撃」、計算と熱い気持ちの融合した「攻撃」、強化された破壊の「攻撃」、そして思いを乗せた「攻撃」・
・それぞれがそれぞれに敗北しました。そんな力を持ったチーム
「絆」・・・そのリーダー的存在と戦う・・・つまりあなたと戦
う、それが目的です」

ラグ「なるほどね、だから僕のところ・・・」

ラグは納得したらしく苦笑いで返事した。

ラグ「でも悪いけど戦う気にはなれないなあ」

カイリユー「・・・なぜ？」

ラグ「だって・・・ねえ・・・」

カイリユー「”しんそく”」

ラグ「!？」

ラグが「戦うのは無理だよ」と言わんばかりの表情をするとカイリユーは技を発動した。”しんそく”、それは高速で相手に接近し攻撃する技、そのスピードは発動者の能力によって変わるが、速いことと間違はなくラグには消えたように見えた。

ラグ「き、消えた!？」

カリバー「違います!きつとどこから・・・」

カイリユール「はああ!!」

ラグ「サークルレディアソード」!

カイリユールは背後から姿を現し攻撃しようとした。しかしラグは“サークルレディアソード”で対抗、攻撃を防いだ。攻撃を防がれるとカイリユールは一度ラグから離れた。

カイリユール「まさか“しんそく”を見切られるなんて・・・」

ラグ「見切った?違うよ」

カイリユール「え?」

ラグ「僕達ラグラーズには頭のヒレがある。これはレーダーの役目をしてるんだ。だから今君の場所が分かったんだよ」

さっきとは違い真剣な表情をしながらラグは言った。

カイリユール「まさか特殊能力だけじゃなく種族の能力まで使いこなすなんて・・・」やはりあなたは強い・・・本気できてください。あなたの本気を見てみたいです」

ラグ「本気って言っても「S L E」や「リミットバースト」は使っちゃダメって言われてるからね・・・でも」

カリバー「ロードエレメンタルカートリッジ、フレイム！リペルディング「ジェット」！！」

カリバーはエレメンタルカートリッジをロード、フレイムカリバーとなりさらにリペルトしてジェットとなった。

ラグ「これぐらいならいいよね！！」

カリバー「これで”しんそく”に追い付きます！！」

この変化にカイリユーは笑っていた。

カイリユー「面白い・・・その能力、この目でしっかりと見させていただけます！！」

あたりには風が吹いた。

第九十九話 敵？味方？現れたポケモン（後書き）

ということでした。

ラグ「僕を知りたいって・・・味方？」

でも偵察にきた敵かもよ？

ラグ「うん、どっちか気になるなあ」

第百話 VSカイリユー（前書き）

ついに100話です!!

ラグ「みんなのおかげだよ」

アクア「ありがとうね」

では記念の第百話、いつも通りだけど・・・

ラグ&アクア「スタート!!」

第百話 VSカイリユール

ラグ「はぁぁー!!」

カイリユール「くっ!! “ドラゴンクロー”」

カキンツ! という音を立ててラグのカリバーとカイリユールの“ドラゴンクロー”はぶつかった。
しかしカリバーの力は強くカイリユールは弾いて離れた。

カイリユール「まさか本当に“しんそく”についてくるなんて……」

ラグ「まだだよ!」

カイリユール「!?!」

カリバー「リペルトアウト!」

カリバーがそう宣言するとリペルト「ジェット」は解除され普通のカリバーの形、フレイムカリバーになった。

カイリユール「戻した? 一体なぜ……」

カリバー「ロードカートリッジ！」

カリバーの両サイドのカートリッジはガシャンと動き、力をためた。そして

ラグ「フレイムエクスクラッシャー」

ラグはカイリューにカリバーを叩きつける。カイリューはいきなりのことだったので対応出来ずくらってしまった。

カイリュー「ぐああ」

そのままカイリューは飛ばされ地面へと墜落した。カイリューの墜落したと思われる場所には煙が舞っていた。

ラグ「やった……のかな？」

カリバー「いえ、恐らくまだでしょう。あれくらいで倒れるとは思えません」

ラグ「だよね」

今回はラグもカリバーも冷静だった。ラグがカリバーをリペルトア

ウトした理由、それはリペルト状態では“フレイムエクスクラッシュ”を使えないからだ。カリバー曰わく

カリバー「フレイムエクスクラッシュ”はかなり負担がかかりますからね。リペルト状態では耐えきれないんですよ」

らしい。それはさておきラグもカリバーも変に感じていた。

カリバー「おかしいですね、上がってこない・・・」

ラグ「どうしたんだろう？まさか倒せた？」

カリバー「それはないかと・・・!？」

ラグ「どうしたの、カリバー？」

カリバー「まさか・・・」

カリバーは自分の意識でエレメンタルカートリッジをロード、メタルとなった。

ラグ「ど、どうしたの？」

カリバー「おかしいと思いませんか？さっきまで襲ってきた分身が襲ってこない。さらにカイリューは上がってこない。つまり他の場

所に移動したってことです!！」

ラグ「あ、そういうことか!！」

カリバーの考えはさっきまで自分たちが戦っていた相手はどこかへ移動したのではないか、ということだ

カリバー「……………見つけました!メインです」

ラグ「よし、行こう!！」

ラグは“ライトニングウイング”で作った羽を羽ばたかせてメインエリアへ向かった。

- - -

メインエリア

キノガッサ「“エナジーシューター”」

キノガッサは相変わらず敵を倒していた。しかしラグの時と同じように敵はどんどん出てくる。

キノガツサ「ちっ、きりがねえな」

ストライクハンマー「確かに・・・というか増えてませんか？」

コーデリア「ええ、さっきが182で今が218です」

シャロ「増えてます!!」

メンバーが焦る中キノだけは冷静に現状を見ていた。

キノ「（敵はなぜか増えてる・・・そういえば上空の戦闘が静まってる・・・まさか!?) キノガツサ、注意して!!」

キノガツサ「注意ってなんで・・・」

カイリユー「“しんそく”」

キノガツサ「!?!」

キノガツサはキノのおかげでストライクハンマーで危機一髪“しんそく”を防御、その後すぐに離れた。

キノガツサ「な、なんだよコイツ」

コーデリア「すいません、トイズは発動させていたんですけど・・・

「

キノ「しょうがないですよ、あれはかなり速いですから」

シャロ「キノガツサさん達のお知り合い……ですか？」

キノガツサ「いや、俺の知り合いにカイリユーはいない。コイツは敵だ」

キノガツサはカチャとストライクハンマーを構えた。それと同時にキノもシャロとコーデリアの前に移動した。

カイリユー「敵だなんてヒドいなあ……僕はただ「アダムの涙」をいただきにきただけですよ？」

キノガツサ「それが問題なんだよ！！つーかお前、ラグとの戦闘はどうした？」

カイリユー「あれですか？さすがに勝てなさそうなんで逃げましたよ」

カイリユーはまた笑顔で言った。

キノガツサ「んだよ、なのに俺に勝負を挑もつてか？」

カイリユー「はい、ここを通らないと「アダムの涙」はいただきに

きただけないと聞いたので」

キノガツサ「バカ言つなよ、誰が通すか!!!」

カイリユウ「そうくると思いました。なので手はうつてあります」

キノガツサ「？」

キノガツサは訳が分からず眉をひそめた。しかしその直後、その意味が分かった。

キノガツサ「なるほどな・・・一人で勝てないなら「数」で勝負つてか・・・」

カイリユウ「はい」

カイリユウの後ろからは沢山の分身があった。

キノガツサ「さっきから分身がカイリユウばかりだったが・・・お前が元か」

カイリユウ「はい、なので僕の言うことをしっかり聞いてくれるんですよ。まさかこの数でも勝とうとか思っちゃいます?」

カイリユウはなにくわぬ顔で言うが実際その数はさっきの218を

超え250ほどだ。いくら分身とはいえ少々は強い、そんな相手を200以上倒すのは相当きついだろう。しかしキノガッサは微笑していた。

キノガッサ「はは、コーデリア、今どれぐらいの数の分身がいる？」

コーデリア「恐らく250くらいかと思います」

キノガッサ「そっか、なら安心だ」

カイリユー「・・・何が安心なんですか？もしかして負けの理由ですか？」

キノガッサ「ちげーよ。全然ちげー。なあカイリユー、一つ聞くが「たった250」でいいのか？」

カイリユー「・・・はい？」

キノガッサ「だからたった250人ごときのお前で俺を倒せるのかってんだよ!!!」

ストライクハンマー「“ギガンテストスラッシャー”」

キノガッサ「うおおおお!!!」

キノガッサはストライクハンマーをバットのようにつく構えた。そしてストライクハンマーが技名を宣言すると思いつき振り振る。すると波動のようなビームが出て分身に向かった。そして激突すると分身を

次々に消していった。

カイリユール「ば、バカな……」

カイリユールは驚きを隠せない。それもそうだろう、なにせ自分の前にいた250人の分身がたった一つの技に全て消えてしまったのだから……

キノガツサ「はあ、はあ、どうだ？」「たった250」の意味……分かっただろ？」

カイリユール「……あなたはとんでもない人だ……」

キノガツサ「だろうな、だからここは……」

カイリユール「でも」

カイリユールはそう言う目をつむった。するとまた分身が一気に現れた。その数は……

キノガツサ「な……」

コーデリア「キノガツサさん、敵の分身が0からどんどん増えています……！」

キノガツサ「なに!?!」

カイリユー「分身使い」の僕とは相性がわるいようですね」

キノガツサ「分身使い・・・だと?」

カイリユー「はい、聞いたことありませんか?」

キノ「分身使い・・・“みがわり”、“かげぶんしん”等の技を使い出現した分身を自在に操る者・・・です」

キノは知っているらしく真剣な表情で答えた。

カイリユー「正解です 僕は分身使いなんです。だから・・・」

カイリユーがそう言いながら右手を上げた。すると分身のカイリユーはいつせいに口を開いた。

キノ「ま、まさか」

キノガツサ「くそっ!!」

カイリユー「さようなら “はかいこうせん”、発射!」

カイリユーが上げた右手をキノガツサに向けた。すると分身達はいつせいに“はかいこうせん”を発射した。

キノ「そんな・・・」

キノガツサ「・・・」

ドオオオオオオオオオ！！

キノガツサがいた場所には“はかいこうせん”がいくつもあたり、凄まじい音とともに爆発した。

第百話 VSカイリユー（後書き）

キノガツサ「……おい」

どした？

キノガツサ「どう考えても100話記念じゃないだろこれ！」

まあ仕方ない、みんなを活躍させようと思ったたらこんななっちゃった（笑）

キノガツサ「俺攻撃くらってるし！なんとかしろ！！」

まあそこは……ドンマイ……！！

第一百一話 解放されし能力 前編（前書き）

さあカイリユ一戦の続きです！！

キノガッサ「俺どうなったんだ？」

それは百一話で！！

第一百一話 解放されし能力 前編

ドオオオオオオオ！！

あたりには爆煙が舞っていた。理由は簡単、「カイリユーが“はかいこうせん”を撃ったからだ。しかしその数は20を超えていた。一度に20個の“はかいこうせん”・・・その威力は凄まじい。

カイリユー「・・・ふう、久しぶりの分身操作は疲れますね・・・」

カイリユーもかなりパワーを使ったようで地面に膝をついた。

カイリユー「本来なら1、2体を操作するのが普通なのに、それを一度に20も・・・これだけのことをしてようやく倒せた・・・強かったですよ、キノガッサさん」

カイリユーは爆煙を見つめながらゆっくりと立った。

カイリユー「僕がラグさんとの戦いを放棄したのは分身と共に空中戦をするのもっと大変だったからなんですよ。分身の行動も指示しないといけませんからね」

つまりは空中戦では分身のカイリユウの行動も操作しないといけ
ないが、陸戦ならただ“はかいこうせん”の発射を指示すればいいだ
けなので消費エネルギーが少なくてすむのだ。

カイリユウ「僕単体での戦闘は控えるように言われています・・・
だから分身が必要だったんですよ・・・!？」

静かに言うカイリユウの表情が変わった。その目線の先には・・・

キノガツサ「まったく、こんなことするなんて・・・攻撃が・・・
当たったらどうする・・・気だ？」

カイリユウ「・・・!？」

カイリユウは静かに驚いた。

ストライクハンマー「もしキノさんの支援を受けた“ハンマステ
ンションガード”が無かったら今頃黒こげでした」

キノガツサ「まったく・・・だ・・・」

キノ「キノガツサ!？」

キノは倒れるキノガツサを支えた。流石に20個の“かいこうせん”は強力だったらしい。

キノ「私たちを守るために・・・」

コーデリア「でも・・・」

シャロ「これで戦える人がなくなっちゃいました！」

そう、今まで戦闘要員だったキノガツサが倒せた。つまり戦う人はいなくなったということだ

キノ「こうなったら・・・」

シャロ「キノさん!？」

みんなの前に出てきたキノにシャロがおどろいた。

シャロ「キノさんは回復とかサポートする人じゃ・・・」

キノ「そうですけど今皆さんを守るためには・・・」

キノは決意の目でシャロを見つめた。

シャロ「キノさん……」

カイリユー「……そこをどいてください」

キノ「い、いやです!!」

カイリユー「僕はあまり人を傷つけない……だからどいてください」

キノ「いやです!! シャロさんもコーデリアさんもアダムの涙もキノガツサも……私が守ります!!」

カイリユー「はあ……」

カイリユーはあきれた表情をした。

カイリユー「しかたありません……これで終わってもらいます。

”エアールキャノン”」

カイリユーは羽をはばたかせて風を起こして攻撃した。その風は”エアーカーター”のように鋭いが”エアーカーター”よりも風圧が大きく、見ただけで高威力と分かる

キノ「（あれはひこうタイプの技・・・でも避けたらシャロさん達に当たる！）」

キノは目をつぶり攻撃を受けとめようとした。そして”エアールキャノン”は激突、あたりには衝撃で発生した煙が舞った。

カイリユウ「・・・これで二人目・・・あまりしなくなかったんだけど・・・でも向かってくるなら倒さないといけないんです」

カイリユウは悲しそうに下を向きながら言った。しかしすぐに異変に気付いた

カイリユウ「・・・？」

カイリユウが感じた異変・・・それは・・・

カイリユウ「あ、あなたは・・・！？」

ラグ「なんとか間に合ったあ・・・」

カリバー「ロードエレメンタルカートリッジ！「アイスカリバー」コンプリート！！リペルティング「ミラーモード」！！」

カイリユートの視線の先にはさっきまで戦っていたラグがいた。しかもカリバーは変化していた。カリバーに何かが溜まっていた

カイリユート「ばかな、僕が調べたカリバーの能力にそんなのは・
・」

ラグ「そりゃそうだよ、だって今発動したんだから」

カイリユート「今!?!」

カリバー「そうです。見つけたんですよ、このアイスにするためにはずさないといけないロツクが」

カイリユート「ロツク?」

ラグ「そうだよ、この人がね!!」

カイリユート「!?!」

ラグの手で示した先、そこにはコーデリアがいた。

カイリユート「そんな……人間の彼女がロツク?」

ラグ「らしいよ」

コーデリア「私……攻撃がヒットする前にカリバーに触れただけ

ですよ？」

カリバー「それがロックだったんですよ。あなたたちのトイズの力・
・それがロックだったんです」

ラグ「そして・・・これは返すよ」

カリバー「リターンミラー!!」

カリバーがコマンドするとアイスカリバーに溜まっていたエネルギーは反射されてカイリユーの元へ向かった。

カイリユー「くっ!?!」

カイリユーはあまりのことに反応できずそのままくらった。
その時カイリユーはあることに気づいた

カイリユー「（これは・・・“エアールキャノン”!?!）あ、あ
あなたは何をしたんですか!?!」

カイリユーは攻撃をなんとか弾いてラグに聞いた

ラグ「何をした?別に特にこれといって何もしてないよ?」

カリバー「ええ、ただあなたの攻撃をそのまま返しただけです」

カイリユール「まさか・・・ミラーって・・・」

ラグ「そう、このカリバーの能力は「反射」なんだ。まあハスボールのバリアーよりは劣るけどね」

ラグがアイスカリバーの説明を終えると・・・

サンダース「おーい、ラギー!!」

ラグ「あ、サンダースさん達だ!」

タチマル「ししょー!」

カリバー「タチマル君達もですね」

他のエリアを守っていたサンダース達とタチマル達が来た

ラグ「みんなどうしたの?」

サンダース「いや、なんかいきなり分身が消えてさ、相手がいなくなっただけ・・・」

タチマル「メインでバトル中みたいなんできたんです」

ラグ「なるほどね」

カリバー「恐らくカイリユーがエネルギーを使いすぎたため分身を維持できなくなったのでしょう」

カイリユー「くっ、ここは一旦引きますか・・・」

カイリユーが羽ばたき、この場から離れようとした時、カイリユーに異変が起きた

カイリユー「なっ・・・」

ラグ「逃がさないよ!!」

カリバー「エリーさん、私に触れて下さい!!」

エリー「は、はい」

エリーは言われた通りカリバーに触れた。するとカリバーの中心にある球体が光った。

カリバー「ロードエレメンタルカートリッジ「グランドカリバー」
!!!リペルディング「スクリユーモード」!!!」

カリバーはそのままエレメンタルカートリッジをロード新たなフォ

ームとなった。

カイリユー「また新しいフォーム!？」

カリバー「今度はエリーさんのトイズが影響したんですよ」

ラグ「これは拘束だよ」

ラグの言うとおりカイリユーは飛ぼうとして地面から離れた時、自身の足を土で固められていた

カイリユー「これじゃあ飛べない・・・」

ラグ「ここまでだよ、カイリユー君」

カイリユーは悔しそうな表情をしていた。

第一百一話 解放されし能力 前編（後書き）

ラグ「やったー新能力だー！」

だね

ラグ「このためでもあつたんだね、ミルキイのみんながきた理由」

イエス、なにせカリバーのリペルト能力はミルキイ12話をモデルにしてるんだからやっぱりその本人達も出さないと！

ラグ「でも今回はエリーさんとコーデリアさんだから・・・シャロとネロがまだだー！」

そのための「前編」なんだよ

第二二話 解放されし能力 後編（前書き）

さて後編です

ラグ「新能力だ〜」

何が？

ラグ「はい？」

誰が新能力を出すと言った？

ラグ「ええ！？だって前回のあとがきであとシャロとネロが……」
残ってる……だから出すとはいってないよ

ラグ「なんだ……」

でも今回は結構前から立ててたフラグを回収します

第二百二話 解放されし能力 後編

カイリユール「くっ……」

カイリユールは今、あるものに拘束されていた。自身の足で固まった「土」。それを操っているのは……

ラグ「ここまでだよ」

ラグだ。ラグはカリバーの新フォーム「グランド」の「スクリューモード」で土を操りカイリユールを拘束していた。

ラグ「これはさっきも言った通り「拘束」をするためのモード。土を操作して君の足にひっつかせて固めたんだ。よほどのパワーじゃないと壊せないよ」

カイリユール「僕の方では壊せない……」

カリバー「そういうことです」

カイリユールの言葉にカリバーの中心の球体が光り答えた。

カイリユー「（これはさすがに予想外でした・・・まさか新たな力が目覚めてしまうとは・・・）」ドラゴンクロー”！！！”

カイリユーはそう思いつつも”ドラゴンクロー”を発動、カイリユーの手の爪はエネルギーをまとった。そして

カイリユー「はあああああ！」

思いっきり自身の足を拘束している土に切りつける。本来ならそのまま土を壊し、脱出してもおかしくない威力だ。しかし現状は違った。

カイリユー「本当に硬いんですね・・・」

なんと土は壊れておらず、今もなおカイリユーを拘束していた。

カイリユー「僕も”ドラゴンクロー”には少々自信があつたんですが・・・」

ラグ「その土の硬さが君の”ドラゴンクロー”を上回った。それだけだよ」

カリバー「それではそろそろ話して頂きましょう、なぜこんなこと

をしたのか」

「????」はつぱカッター”」

ラグ「!？」

カリバーが問おうとした時、ラグに向かって”はつぱカッター”が発射された。ラグはその攻撃をカリバーで防いだ。

「????」なるほど、頭のヒレの影響か反応はいいですね」

「????」ああ、なかなかだ。それにあの拘束もなかなかの強度だ」

アクア「だ、だれ!？」

アクアが声の主に質問した。

「????」なあに、ただそのカイリューを迎えにきたただけですよ、お嬢さん」

「????」そうですせ、アクア。ちょっとは落ち着け」

アクア「なんで私の名前を・・・」

サンダース「・・・お前・・・まさか・・・」

「アクア」といったドサイドンにサンダースが反応した。表情からして驚いている。

ラグ「サンダースさんのお知り合い？」

サンダース「ああ、ちよつとな・・・」

キノガツサ「お、俺の方もだぜ・・・」

キノ「キノガツサ！」

意識を取り戻し、しゃべるキノガツサのところにキノが行きキノガツサを起こした。

キノガツサ「キノ・・・お前は・・・わかつるよな・・・？」

キノ「そりゃあ・・・」

ハスボー「あの人は誰なのキノさん？」

ハスボーの問いにキノは答えた。

キノ「あの人はパラセクトさん・・・エルビストの街長さんです・・・」

ハスボー「エルビストの街長さん!？」

ハスボーは驚きながら言う。するとキノはコクつと頷いた。

キノ「そうです。彼こそがエルビストの街長さん、パラセクトです」

ハスボー「でも今は行方不明に……」

パラセクト「そうじゃ、ワシは行方不明となっておる。「エルビスト」からはな」

キノ「それは一体どういう……」

パラセクト「“エナジーボール”」

キノ「!？」

キノガツサ「危ねえ！」エナジーシューター”！」

キノが聞こうとした瞬間、パラセクトは目の前に緑色のエネルギー弾を生成しキノに攻撃した。しかしキノガツサが”エナジーシューター”で撃墜、なんとか撃ち落としたが……

パラセクト「うるさいのお”ねむりごな”、”エナジーボール”」

パラセクトは”ねむりごな”を発動、それによってキノガッサを眠らせてキノに”エナジーボール”を放つが・・・

キノ「ウッドハンマー」

それに対してキノは自然のエネルギーでハンマーを生成、“エナジーボール”を叩き、消滅させた。

パラセクト「ほう、“ウッドハンマー”・・・新ワザかのお・・・」

キノ「エルビストを出てから覚えました。お話しを聞かせて頂きます！」

パラセクト「やれやれ、性格が少しキノガッサに似てきたのお・・・仕方ないのお・・・」

パラセクトは少しため息をした。

パラセクト「ここらでカツをいれるかのお・・・」

ドサイドン「さて、こっちはどうしようか……」

サンダース「ドサイドン、なぜお前がここにいるんだ？」

アクア「お兄ちゃん、知り合い？」

アクアがサンダースに聞くとサンダースはまゆをひそめていった。

サンダース「ああ良く知ってるさ。「ボルト」のメンバーだからな」

アクア「「ボルト」のメンバー!？」

サンダース「そうだよな、ドサイドン？」

サンダースは少し睨みながらいった。それに対してドサイドンは少々鼻で笑い

ドサイドン「ああ、昔の俺はチームボルトに所属していた。だが今は違う」

サンダース「お前はあの後……ボルトを抜けた後、どこで何してたんだ！」

ドサイドン「どこで何をしていた？それは答える必要のない質問だ。時間もないんでな……」
「ロックカット」

サンダース「!?! “こうそくいどう”」

ドサイドンは話した直後に“ロックカット”を発動、素早く移動した。しかしそれに反応したサンダースに道をふさがれてしまった。

サンダース「おい話しを・・・」

ドサイドン「おい、じいさん!」

パラセクト「じいさんと・・・言うな!」

ドサイドンはパラセクトに合図を送りパラセクトはそれに答えた。するとあたりいったいが歪んで見えた。

サンダース「な、なんだこれ・・・」

ドサイドン「じいさん・・・パラセクトの技だ。あいつはトリックマスターって呼ばれててな、相手を攪乱させる戦法で戦うんだ。」

フラフラするサンダースにドサイドンが教えた。状況から見てドサイドンはこの謎の現象の影響を受けていないようだ。

ドサイドン「それにしても・・・昔いったらどう?何もしなければ助けてやる・・・と。だからおとなしくしとけ。」

サンダース「それより・・・ちゃんと・・・事情を・・・」

ドサイドン「じゃあな“かわらわり”」

ドン！という衝撃とともにサンダースが倒れた。あのドサイドンの攻撃をまともにくらったのだから仕方ない。

ドサイドン「なんだ、アクア達もフラフラじゃねえか。これなら叩く必要もねえな。・・・そんなじゃ“アームハンマー”」

ラグやアクア達がパラセクトの技でフラフラになっている間にドサイドンは“アームハンマー”を使用、ドサイドンの腕にパワーが集まり、カイリユースを捉えた土を壊した。

カイリユース「・・・さすがのパワー・・・ですね」

ドサイドン「当たり前だろ。「分身使いのカイリユース」「トリックマスターのパラセクト」「パワーラウンダーのドサイドン」だろ？」

カイリユース「そうでしたね」

ドサイドン「さあパラセクト、行くつぜ」

ドサイドンがパラセクトを呼ぶとパラセクトはキノと対戦していた。だがパラセクトが圧倒的に有利だった。

パラセクト「なんじゃもうかの？」

キノ「・・・パラセクト・・・さん・・・」

パラセクト「もうワシらを追うな。お前らじゃ勝てんじやろつ。」

キノ「そんな・・・」

パラセクト「じゃあの・・・」

パラセクトは少し寂しそうに“エネルギーボール”を発射、キノは少し飛ばされ倒れた。

パラセクト「さて・・・それじゃあ「アダムの涙」を頂こうかのお」

カイリユウ「はい、正面の入り口から・・・入れるはず・・・」

カイリユウがしゃべった瞬間、三人を囲むように壁が現れた。

カイリユウ「これは・・・」

ラグ「はあ、はあ・・・発動！」

カリバー「メタルカリバー」コンプリート。リペルティング「クリエイト」モード！」

カイリユウ「ラグさん!？」

ドサイドン「おい、あいつは今フラフラ状態じゃないのか!？」

パラセクト「そうじゃ、わしは確かに……」

急に表れたラグに3人は慌てた。それもそのはず、さっきのパラセクトの技でメンバーは全員フラフラ状態になっていた。なのにラグは意識を取り戻し、さらにメタルカリバーのリペルト能力で3人を閉じ込めてしまったのだから当然だ。

カリバー「失礼ですがあなたの技はラグに対してもう効力を失ってしまいました」

パラセクト「な、なんじゃと!？」

ラグ「ごめんなさいパラセクトさん。でも僕にその技は効きません」

ラグは少しきつそうに、しかしはつきりと答えた。

パラセクト「一体なぜじゃ……」

パラセクト・・・だけでなくカイリューとドサイドンも驚いていた。

第三二話 解放されし能力 後編（後書き）

ということでした

サンダース「ついに回収したな・・・」

キノ「一体何人の方がエルビストの時に怪しいと思ったんでしょうね？」

それは分からないけど・・・フラグ・・・苦手かな・・・

キノ「どうしたんですか、急に？」

いや、書いててなんとなく・・・

キノ「まあしょうがないんじゃないんですか？この小説設定はかなり考えてますけどストーリーが・・・」

いきあたりばっかりだからね（苦笑）

第百三話 解放されし能力 後編 + (前書き)

さあはじまりましたよ！

ラグ「あれ、タイトルが後編+って・・・？」

後編のあとの後編ってことだよ

第百三話 解放されし能力 後編+

パラセクト達との戦いでフラフラ状態にされたラグ達チーム絆。そんな中、フラフラ状態のはずのラグだけが立ち上がりメタルカリバーの「クリエイト」を発動、3人を閉じ込めていた。そんな彼を見てパラセクトは「信じられない」といった表情だ。

パラセクト「なぜじゃ、ワシは確かにお主ら全員に“あやしいかおり”を発動したんじゃないぞ……」

カリバー「なるほど、あの技は“あやしいかおり”という技ですか。恐らく効果は相手に匂いを嗅がせて混乱させるというものですね」

パラセクト「!?!」

カリバー「「分析」です。あの技を分析した結果ですよ」

カリバーの言葉にパラセクトは驚いたがカリバーは当然のように説明した。だがパラセクトの疑問はまだあった。

パラセクト「……しかし分析しても対処まではできないはず……」

ラグ「出来たんです。シャロのおかげで」

パラセクト「なんじゃと!？」

ラグは体をずらしパラセクトにシャロを見せた。当の本人は「えっ、あたしですか？」と驚いている。

パラセクト「こんな娘が……」

カイリユー「もしかして……また「新しい能力」ですか……」

カリバー「その通り、「サイコカリバー」です」

ドサイドン「サイコカリバーだと？」

ラグ「状態回復専用のフォームです。カリバーにこれで回復させてもらいました。」

サイコカリバー、それはカリバーがサイコエネルギーを得ることで使用可能になったフォーム。攻撃に関しては普通の剣として戦うが異常状態を回復させることに関して言えばなかなかの性能を誇る。ただし使用者は一人回復させるとかなりの体力を消費する、というデメリットも持っている。

カリバー「まあ私が発動した場合ラグ一人しか回復させられません
が」

カイリユー「（なんて人だ。一度にこんな沢山の能力を……）」

カイリユーは今回アイス、グランド、サイコと3つも新能力を開花させたラグに驚いていた。実際これらの能力はダーク幹部戦時にはすでにカリバーにインプットはされていた。しかしどうしても外れないロックがあり発動できなかった。そのロックが彼女たちの持つ「トイズ」という能力によってはずされたのだ。

ラグ「リモーブ」、これで・・・くっ！」

シャロ「ラグさん!？」

カイリユー「？」

カイリユーが思考しているとラグは突然膝をついた。表情は片目をつぶり必死に3人を見ておりつらそうだ。

コーデリア「ど、どうしたんですか!？」

ラグ「あはは、流石に・・・疲れちゃった・・・かな・・・」

突然の変化にコーデリアが問うとラグは苦笑いしながら答えた。

ドサイドン「そりゃ残念だったな。もう戦えるやつはいない。お前らの負けだ。」

カイリユー「ここまでなれない能力を発動すれば疲れも一気にきま
すからね」

パラセクト「まあよく頑張ったほうじゃよ。」

ドサイドンとカイリユー、そしてパラセクトがラグに言った。しか
しラグの目はまだあきらめていなかった。

ラグ「僕達はまだ・・・終わってないけど・・・？」

パラセクト「なに？」

ラグが言った言葉にパラセクトは頭を傾げた。その時、カリバーの
球体が光った。

カリバー「ネロさん！」

ネロ「うん！」

ネロがカリバーに触れた。その事によりカリバーはさらに光を増し
た。そして

カリバー「発動！「クリエイトドラゴン」！」

その瞬間ラグの前から巨大な鉄の龍が現れた。
下半身は無く、腕もない。体だけならまるで蛇の様、しかし頭……
もとより首は「C」を左右対称にしたような形だ。

ドサイドン「なんだ？」

パラセクト「ドラゴンじゃと!？」

この事にドサイドンとパラセクトは驚いたがカイリユーは冷静だった。

カイリユー「構いませんよ。倒せばいい。今ラグさんの体力はこのドラゴンを維持するので精一杯……これを倒せば僕たちの勝ちです。」

ドサイドン「そうだな」

パラセクト「さっさと片づけるかのお」

カイリユーの言葉に二人冷静さを取り戻し、構えた。相手はドラゴン一匹、普通に考えて三人もいるカイリユー達が負けることは無かった。しかしそれは「ドラゴン一匹」だけの場合の話だった。

????「おいおい、俺らを忘れてねえか？」

「????」そうですよ、ひどいです」

「????」理由を聞かせてもらっつ、いいな?」

ドサイドン「お、お前ら……」

パラセクト「なぜじゃ……?」

そこにいたのはパラセクトの”あやしいかおり”をくらっつて倒れていたはずのキノガツサ、タチマル、サンダースだった。

キノガツサ「つたく、不意打ちとはいえあんな攻撃をくらわせやがっつて……」

タチマル「正直ピンチでしたね」

サンダース「ああ、ラグに感謝だな」

パラセクト「ラグに感謝じゃと?お前らは……」

いまだに驚いているパラセクト。そんな彼にサンダースが説明した。

サンダース「ラグが助けてくれたのさ、サイコカリバーでな」

パラセクト「な……だが、いつ……は!」

パラセクトはさっきの後景を思いだした。そこでは確かにラグはサイコカリバーの能力を発動していた。

パラセクト「・・・さっきの膝をつく前じゃな・・・」

サンダース「正解だ。あいつはあの時俺達を回復させた。だから一気に体力を消費したんだ。」

タチマル「ししょーは後をオイラ達にまかせてくださったんです！」

キノガッサ「ってなわけで早速行くか！」

キノガッサの一言にサンダースとタチマルは頷きカイリユードンに向かった。一方カイリユードン達は閉じ込められており非常に不利なので・

カイリユードン「とりあえずこれを壊しましょう、ドサイドンさん！」

ドサイドン「おうよ、”アームハンマー”」

ドサイドンは”アームハンマー”を発動、それによってメタルカリバーの作った壁を壊した。

ドサイドン「さあこれで思いっきり戦えるな」

カイリユー「誰が誰の相手をします?」

パラセクト「わしはキノガッサとやろう」

ドサイドン「じゃあ俺はサンダースとやる」

カイリユー「僕はフタチマルですね」

こうしてキノガッサVSパラセクト、サンダースVSドサイドン、
フタチマルVSカイリユーの戦いが始まった。

第百三話 解放されし能力 後編 + (後書き)

というわけでした！

ラグ「あれ？僕は？」

ん、しばらく寝てて。これからはサンダース達3人が戦うから

ラグ「えゝそんなあゝ・・・」

というわけで次回はバトルです。

第四百話 アダムの涙を護るための戦い（前書き）

さあ今回はサンダース達です。

サンダース「でも俺って相手は地面タイプ・・・不利じゃないか？」

そこをなんとかしてのサンダースでしょ！

サンダース「あいな・・・」

第四百話 アダムの涙を護るための戦い

ラグのサイコカリバーによって回復、カイリユー達との戦闘に臨んだサンダース達。そんな彼らとカイリユー達も戦っていた。

サンダース「10まんボルト」

ドサイドン「ふん！」

サンダースは体から”10まんボルト”を放った。しかし相手はドサイドン、なかなかの威力を誇るこの技も彼の前では無意味だった。

ドサイドン「まさかこんな攻撃が効くとも思ってたか？」

サンダース「そんなわけないだろ！」アイアンテール」！

ドサイドン「ぐっ！？」

ドサイドンの言葉をサンダースは否定、その瞬間サンダースは消えてドサイドンには”アイアンテール”が決められていた。岩タイプのドサイドンにはかなりこたえたらしくよろけるがなんとか踏みとどまった。その様子を見てサンダースは一旦離れた。

ドサイドン「アイアンテール」か、考えたな。だがスピードが速すぎる……」

サンダース「お前、さっきの”10まんボルト”のこと忘れてないか？」

ドサイドン「……なるほどな、そういうわけか」

分かった顔をしてドサイドンは言った。

ドサイドン「あの”10まんボルト”は俺への攻撃じゃねえ……
「このフィールドに電気を拡散させるためのもの」だろ？」

サンダース「流石だな、正解だ。俺の特性「ちくでん」は電気エネルギーを溜めて回復できる。俺はただそのエネルギーを「速度上昇」のために使っただけだ」

サンダースの説明にドサイドンは「やはりか」というような表情をした。

ドサイドン「昔からこいつは持っているものを工夫して戦っていた。その能力はまだあるってわけか……」いいぜ、面白い。そのスピードで俺を倒せるか？」

サンダース「もちろん……だっ！」

またサンダースは消えた。するとドサイドンはとっさに正面に腕をクロスした。その瞬間ドサイドンの目の前にサンダースが現れた。

サンダース「まさか防ぐなんてな・・・」

ドサイドン「俺をなめるなよ。”はかいこうせん”！」

ドサイドンはサンダースの突撃を腕で防御しながら”はかいこうせん”を発射、サンダースはくらい宙に飛ばされるがなんとか着地した。

サンダース「相変わらず威力は変わらず高いな」

ドサイドン「お前も俺の”はかいこうせん”をくらってピンピンしてるとは・・・直前で避けるのは得意分野だな」

お互いがお互いをかなり知っているゆえに分かることがあった。

ドサイドン「だが今は敵だ」

サンダース「分かってるさ、それじゃあ早く事情を聞かせてもらおうか」

ドサイドン「俺を倒せればな」

サンダーズ「もちろんだ」

その瞬間、改めてサンダーズは消えてドサイドンは構えた。

キノガッサ「おらああああ」

ストライクハンマー「プラッシュハンマー」

パラセクト「フオフオフオ・・・シザークロス」

キノガッサはストライクハンマーでパラセクトを叩く、しかしパラセクトは”シザークロス”でそれを防いだ。

パラセクト「なんじゃ、こんなもんか？」

キノガッサ「くそっ」

キノガッサはいったん離れた。そして手にエネルギーを溜めそれは種となった。

キノガツサ「くらえ、”バニッシュシード”」

キノガツサはそのまま種をパラセクトに投げる。すると種はパラセクトに命中、蔓が出現しパラセクトに巻きつき拘束した。

パラセクト「これは……」

キノガツサ「拘束技だ。これは”やどりきのたね”と違ってあなたにも効くはずだ」

ストライクハンマー「それでは効かせていただきますでしょうか、なぜ「アダムの涙」を狙うのかを。」

キノガツサ「ついで……じゃねえがきかせてもらっぜ。なんでエルビストから突然消えたのか」

パラセクト「ふふふ、キノガツサよ、少し気が速いぞ」

キノガツサ「なに？」

パラセクトの発言にキノガツサは眉をひそめる。ストライクハンマーも警戒していた。

パラセクト「ワシは……誰じゃ？」

キノガツサ「誰って・・・エルビストの街長だろ？」

パラセクト「ハズレじゃ、わしはな・・・「トリックマスター」じゃぞ？」

その瞬間パラセクトの体に巻きついていた蔓はほどけパラセクトは解放された。

キノガツサ「な、何しやがった!？」

突然のことに驚くキノガツサ。しかしパラセクトは冷静に答えた。

パラセクト「腐らせた」んじゃよ

キノガツサ「腐らせた・・・だと?」

パラセクト「だから言ったじゃろう、「トリックマスター」じゃと」

キノガツサ「くっ」

キノガツサはストライクハンマーを構えた。拘束が解けた以上いつおかしな技を使われるかわからないからだ。

キノガツサ「どうやって腐らせたかは知らねえが・・・手加減は無

用らしいな」

パラセクト「なんじゃ今まで手加減してたのか？年寄りをバカにしよって！」

キノガッサ「その言葉・・・後悔させてやるぜ」

ストライクハンマー「ギガンテストフォーム」

パラセクト「本気が・・・よかろう、引き続き相手になってやるかのオ」

タチマル「れいとうビーム」！

カイリユール「かえんほうしゃ」！

その瞬間、冷気をまとったビームと灼熱の炎がぶつかりあった。二つの技は相殺し、お互いに威力をなくした。

タチマル「それなら」水風斬」！

タチマルはホタチを振って風を出現させてカイリユールを攻撃、風は

まっすぐカイリユールに向かって行くが・・・

カイリユール「はかいこうせん」！

カイリユールは”はかいこうせん”を発動、”水風斬”はあつという間に打ち消され、”はかいこうせん”はタチマルに向かってきた。

タチマル「くっ」ソニックウインド」

タチマルは相殺できないと判断し回避するため”ソニックウインド”を発動、瞬時タチマルの足は風をまとい高速で移動、”はかいこうせん”の回避に成功した。

カイリユール（「避けた？それにあの技は・・・」

タチマル「今です！」

クリエイトドラゴン「クアアアアア！」

カイリユール「!?!」

カイリユールが考えている隙にタチマルはクリエイトドラゴンに指示、クリエイトドラゴンは首を振ってカイリユールの攻撃した。しかしカイリユールは何とか避けて離れた。

カイリユール「そうでした。そちらにドラゴンもいましたね」

タチマル「ししょーのドラゴンですがね」

カイリユール「それにしてもあれを避けるなんて・・・あなたが影キ
ラティナさんを倒したタチマルさんですか？」

タチマル「なんでオイラの名前を・・・」

カイリユール「調べさせていただきました。今回の計画のために。」

タチマル「計画？あなたたちの狙いは何ですか？アダムで何をしようとしているんですか？」

”ソニックウインド”を止めてタチマルが効いた。この”ソニックウインド”、前回のギラティナ戦ではまだ完成していなかったが数日を経て完成していた。しかし消費エネルギーが予想以上だったことから長時間の使用はしてはいけないのだ。

カイリユール「計画？分かりませんよ」

タチマル「分からない？」

カイリユール「はい、僕たちはボスのために働いているだけです」

タチマル「ボス・・・？（組織的ですね）そのことについて詳しく・

・・・」

タチマルが言った瞬間だった。突如カイリユウの体が光り始めたのだ。

タチマル「これは一体・・・」

カイリユウ「残念ですが時間が来ました。僕たちは本体ではありませんので出現時間が限られているんですよ」

タチマル「本体じゃ・・・ない!?!」

いきなりすることにタチマルの頭は混乱した。このカイリユウが本体ではないのならなんだというのか、それが謎だった。

カイリユウ「僕たちは本体から作られたクローン、通称「WP（work piece）」・・・」

タチマル「WP・・・?」

カイリユウ「それが僕たちです。まあ詳しいことはポリズさんにも聞いてみて下さい」

タチマル「でもまだ君たちはアダムの涙を・・・」

カイリユウ「仕方がないんです。時間が来てしまったんですから。」

それでは」

タチマル「あ……クリエイトドラゴン……！」

タチマルは急いでクリエイトドラゴンに攻撃を指示、しかしクリエイトドラゴンが動いたところにはカイリユーは光の粒子となって消えてしまった。

タチマル「くっ逃がしましたか……」

サンダース「おーい」

キノガツサ「大丈夫かー？」

タチマル「あ、サンダースさん、キノガツサさん！」

突然サンダースとキノガツサが走ってきた。

タチマル「お二人の相手……ドサイドンとパラセクトはどうされたんですか？」

キノガツサ「それが消えちゃってよ」

サンダース「光みたいに消えたんだ」

タチマル「えっ、あのカイリユーもですよ」

キノガッサ「マジかよ」

サンダース「これはないかあるな。とりあえずラグたちを運ぼう」

タチマル「それならししょーのドラゴンに手伝ってもらいましょう」

キノガッサ「そうだな」

こうして戦いは一度は終わった。

しかし謎は残ったままだった。

第四百四話 アダムの涙を護るための戦い（後書き）

というわけでなんとか護れましたね

タチマル「オイラはカイリユーを逃がしてしまった・・・」

でもクリエイイトドラゴンと一緒に頑張ってたよ。

タチマル「しかし彼らの目的は・・・」

謎だね

第百五話 ミルキイホームズとの別れ、そして……(前書き)

今回はあの戦いの後です。

ラグ「色々あるよね？」

まあちよい日常も入ってる……かな

第一百五話 ミルキイホームズとの別れ、そして・・・

カイリユー達との戦闘から数日後、ラグたちはすっかり元気になっていた。

今はインルーラのリフレッシュセンターにて療養中だ。

デンさん「それにしても皆さんがご無事でよかったですよ」

キノガツサ「まあちょっと危なかったがな。俺の活躍に敵はおびえたようだぜ！」

サンダース「正確にはラグのサイコカリバーのおかげだけだな」

キノガツサ「おいおいそれを言うなよ・・・」

サンダースの的確な言葉にキノガツサは苦笑いした。

タチマル「ししよー、ありがとうございます！」

ラグ「いやいやお互い様だよ、僕だってみんながいなかったらやられてたわけだし」

キノガツサ「そういえばあのサイコカリバーって・・・」

ラグ「これ？」

ラグはカリバーを出現させてエレメントカートリッジをロード、サイコカリバーにした。

キノガッサ「それだ、回復系のカリバーなんだよな？」

ラグ「うん、そうだけど……どうかしたの？」

キノガッサ「いや、そいつで体力回復はできねえのかなと思ってよ」

カリバー「このフォームは状態異常のみ回復できるので体力的な回復は無理ですね」

キノガッサ「そうかあ」

キノガッサが残念そうな表情をした。するとキノが聞いた。

キノ「なんでそんなことを？」

キノガッサ「だってそしたらキノとラグが回復役できて効率的じゃねえか」

キノ「……」

キノガッサ「……ど、どうした？」

キノガツサはキノの反応に少し戸惑う。いきなり黙ったのだから当然と言えば当然だろう。そんな心境の中、キノからキノガツサに返事が言われた。

キノ「だってキノガツサがそんなことを・・・効率的なんて・・・」

サンダース「ああ、驚きだな・・・」

ポリズ「そんな言葉言いませんからね」

ハスボー「というよりその言葉知ってたんだね」

タチマル「キノガツサさんの頭がよくなりましたね」

キノガツサ「・・・って、俺はそんなに頭の悪いキャラかー！！！！」

全員「うん！！」

それからキノガツサは部屋の隅っこでいじけていたらしい・・・

その日の夜

ラグ「ふう……」

ラグはインルールのリフレッシュセンターの屋上でため息をついた。

カリバー「どうかしましたか、ラグ？」

ラグ「あ、カリバー……」

ラグの心の中にカリバーの声が響いた。カリバーは発動していてもラグにのみ話しかけることができるのだ。

カリバー「どうやら困ったようですが？」

ラグ「うん、実はねカリバーのリペルト能力……あるでしょ？」

カリバー「はい」

ラグ「あれの一部がしばらく使えないらしいんだ」

カリバー「……やはりですか」

ラグ「え、やはり!？」

カリバーの言葉にラグは驚いた。

ラグ「やはりって・・・もしかして分かってたの？」

カリバー「私はラグと深くリンクされています。しかもリペルトは私自身の能力です。分からないはずがありませんよ」

ラグ「確かに・・・」

カリバー「それに短期間であれだけの新能力を開花させたんです。無茶にもほどがあります」

ラグ「ごめんね・・・」

カリバー「・・・まあ正直に申し上げると私にも問題はあります。あの時どれか一つでも能力の解放をしていなければ・・・」

ラグ「でもあの時どれかが発動してなかったらうまくはいかなかった。あれでよかったんだよ」

カリバー「なぐさめの言葉、感謝します」

カリバーが申し訳なさそうに言った。機械・・・と言えど心はあるのだ。それゆえに自身の思考もある。その結果がこの反応なのだろう。

カリバー「しかし、今回のことで敵が増えましたね・・・」

ラグ「うん、カイリユー君達・・・だね」

カリバー「彼らの目的が何なのか・・・それは謎です」

ラグ「でももし悪い事だったら僕たちはそれを止める・・・だよね？」

カリバー「イエス、その通りです。そのために力を貸します。ですから私を思いつきり使ってください。」

ラグ「もちろん、君は僕の相棒「カリバー」だからね」

次の日

シャロ達「ミルキイホームズ」は自分達の世界に帰ることになった。

ラグ「本当に帰っちゃうの？」

コーデリア「ええ、アダムの涙はちゃんと回収できたので。」

エリー「皆さんの・・・おかげです」

シャロ「ありがとうございます！」

ネロ「感謝してるよ」

それぞれが笑顔で言った。その表情からも感謝の気持ちは伝わってくる。

ネロ「それにしても僕のダイレクトハックがドラゴンを作っちゃうなんてなあ・・・」

ラグ「ネロのトイズは電子機器にハッキングだったんだけどね、進化したんじゃないかな。その内ネロも出来るようになったりして！」

ネロ「それだと面白そうだね。ダイレクトハックドラゴン、大事にしてよ？」

ラグ「うん、コーデリアさんありがとうね」

コーデリア「そんな・・・私は何もしてないわ」

カリバー「いえ、「アイスカリバー」の発動はあなたがいたからこそです。感謝いたします」

ラグ「それにエリーさんもありがとう！」

エリー「そんな・・・私はただカリバーさんに触れただけです」

ラグ「それがカイリユー拘束に役立つてくれたんだよ。そしてシャロ・・・」

カリバー「今回は異常状態回復がなければかなり不利でした。」

ラグ「ありがとうね」

シャロ「そんな、あたしこそ助けてもらってありがとうございまして。」

ラグがそれぞれにお礼を言うと4人は照れながらもうれしそうだった。とその時デンさんが現れた。

デンさん「それじゃあ皆さん、そろそろいいですか？」

ラグ「もう準備できたみたいだね」

アクア「元の世界でも元気だね！」

サンダース「本当にありがとうね」

キノガッサ「向こうでも俺の格好良さを広めてくれ！」

キノ「これからも怪盗との戦い頑張ってくださいね」

ポリズ「怪盗のトリックに困ったらいつでも連絡して下さい！」

ハスボー「みんな仲良くね」

タチマル「お元気で！」

ラグ「また・・・いつかきつと会おうね！」

シャロ「はい！また会いましょう！」

ネロ「楽しかったよ」

エリー「今回は・・・お疲れ様でした」

コーデリア「これからも頑張ってくださいね」

絆が大きく手を振るとミルキイの4人も大きく手を振った。そして4人は光に包まれ数秒後には消えていた。

ラグ「帰っちゃったね」

キノガッサ「ああ、そうだな」

サンダース「だが戦いはこれからだ」

タチマル「そう言えばポリズさん」

ポリズ「はい、どうしました？」

タチマルに聞かれたポリは返事をした。

タチマル「カイリユーさんがWPについてはポリZさんに聞くように言っていました。何か知りませんか？」

ポリZ「WPですか・・・」

ポリZは少しうつむいた。どこか悲しげな表情だ。

ハスポー「どうかしたの、顔色が悪いよ？」

ハスポーは心配そうに言った。そして次のポリZの言葉にメンバーは「えっ？」という表情を見せた。

ポリZ「WP・・・ワークピースは・・・」

ポリZ「私が昔研究していたものです」

第一百五話 ミルキイホームズとの別れ、そして……（後書き）

ということでもポリズが関わってるらしいね

ポリズ「WP……あれは……」

それ以上はネタバレだから禁止だよ！

第一百六話 WPとポリZ（前書き）

今回はWPとポリZの関係についてです

ポリZ「WP・・・」

何か関係があるんだよね

ポリZ「はい、まあそれは本編でどうぞ」

第百六話 WPとポリZ

WP・・・それは「ワークピース」の頭文字をとったことによつてつくられた言葉。そして「ワークピース」とは「働くコマ」という意味だ。

ポリZ「私は誰かが何かを行う時に手伝える者があれば人々を更に助けられるのではないかと考えたんです」

キノガツサ「そんなのロボットを作ればいいじゃねえか」

ポリZ「ロボット・・・確かに良い考えなんですがそれではやはり鉄の塊、いくら発展させても私たちのようにはなれません」

サンダース「機械は人ポケモンにはなれないからな」

サンダースは納得したようで頷きながら言った。今はリフレッシュセンター内、ポリZからWPについての話を聞いている途中だ。

ポリZ「そこで考えたんです。ロボットでダメなら本物を生み出せばいいのではないかと。」

キノ「それは・・・どういうことですか？」

ポリZ「つまり本人を二人作れば同じ本物が複数オリジナルいることになる、
そうなれば一人では大変なことももうひとりの自分と協力してでき
るんですよ」

タチマル「そのために一番良いアイデアが「クローン」……だっ
たんですね」

ポリZ「少し違いますが……大体はそうです」

ポリZは素直に答えた。

ポリZ「クローンならば同じ人物を複数出現させて協力することが
できる……でもそれには大きな「問題」がありました」

アクア「問題？」

ポリZ「世界には同じ人は複数存在しない……いえ、できない」
「ってことです」

ハスボー「どういうこと？」

難しいことにハスボーはかしげた。

ポリZ「同じ世界に「全く」同じ人物を作り出すことはできないん
です。必ずどこかに違う点が見つかるんです」

ラゲ「どうして？」

ポリZ「まずクローン制作するとき空気中などから色んな粒子が混合してしまうんです。しかもクローンを作る際には毛などの素が必要なんです。それにも色んなものが付着してしまう・・・これらを考えるとなにも混合していない素は存在しない、だからクローン技術で「全く同じ」存在は制作できないんです」

ラゲ「なるほど」

つまりはたとえクローンを制作しても素にそれまでに何かが混合されているので「全く同じ」は不可能、ということだ。

ポリZ「そこである一人がWP・・・ワークピースの制作を提案してきたんです」

キノガツサ「でもクローンは無理だったんだろ？それじゃあ何をしても・・・」

ポリZ「いえ、方法が一つありました」

サンダース「方法があったのか！？」

ポリZ「はい」

アクア「どういう方法？」

するとポリZは少し口を開き答えた。

ポリZ「素が外部にあると混合する」というのが問題、ならば「閉じ込められた空間」で行えば何も混合させずに済むんです」

キノ「何も無い場所ってどこですか？」

ポリZ「・・・コンピューター世界です」

サンダース「なんだって!?!」

タチマル「コンピューターですか!?!」

ポリZ「はい」

ポリZは頷いた。

ポリZ「コンピューター内部ならバグなどを除いて基本的には混合物はありません。ですから遺伝子情報を電子化しコピーをすれば・・・」

タチマル「全く同じ」クローンの完成ですか・・・」

ポリZ「そういうことです」

キノ「確かに理論上は可能・・・ですけどうまくいったんですか？」

ポリZ「流石キノさんですね、鋭い。そう、この遺伝子電子化複製計画（Gene electronic reproduction plan）、後の「WP」で通称「GER」にも問題が発生したんです」

キノガッサ「また問題かよ」

ポリZ「またです」

アクア「・・・それは？」

ポリZは聞かれると答えた。

ポリZ「活動時間・・・すなわち寿命です」

ハスボー「寿命？」

ポリZ「はい。我々生きている者には活動可能時間、寿命が存在します。それは限りあるものでありけして「無限」ではありません」

サンダース「確かにな」

ラグ「だからこそ今を精いっぱい生きてるからね」

ポリZ「この「電子上で作られたクローン」はその寿命が極端に短いんです」

タチマル「どれくらいなんですか？」

ポリズ「出現から約1日、稀に2日ですね」

ハスボー「そんなに短いんだ・・・」

ハスボーはこの事実には悲しそうに言った。実際生まれたものの命が1、2日であればそれは悲しいものだ。

ポリズ「だから私は反対したんです、この計画に。しかしどこかではこの計画が進められていた・・・その可能性はあるんです。そして怪しい人物が・・・」

ラグ「カイリユー君だね・・・」

ポリズ「はい、彼はこの計画の時に私の助手をしていました。ですからこの計画のことも知っていたはず。だから一応は可能性はありますが、彼が問題点を解決する方法を見つけていたらですが。」

キノガツサ「でも可能性ってだけだろ？それに俺たちの前に出てきたやつらがWPかはわからねえぜ？」

ポリズ「いえ、確実にWPです」

サンダース「理由は？」

ポリズ「消え方です。」

サンダース「消え方？」

ポリズ「はい、WPはあくまで電子世界で作られた者、それゆえに消えるときには「粒子」となって消えるんです」

キノガツサ「粒子だと!？」

「粒子のように消える」、その言葉にキノガツサは反応した。

キノガツサ「パラセクトは・・・あいつは最後粒子みたいに消えていきやがったぞ」

サンダース「ドサイドンもだ」

タチマル「カイリユー君もです」

ポリズ「やはり・・・でしたね」

しばらくあたりは静かになった。するとラグが口を開いた。

ラグ「でも・・・ドサイドンさんもパラセクトさんも、カイリユー君もみんな大切なんだよね？」

そう、ドサイドンはサンダースの元所属チーム「ボルト」のメンバー、パラセクトはキノガツサやキノの住む「エルビスト」の街長、

カイリユーはポリズの元助手だ。

ラグ「それなら・・・助けてあげようよ」

アクア「ラグちゃん・・・」

ラグ「何が理由かは分からないけど今回みたいに悪いことをしてるのには理由があるはずだよ。だからダーク化事件と一緒に解決しよう！」

サンダース「ラグ・・・お前・・・」

キノガッサ「へっ、ラグらしいな」

ポリズ「でもありがたいです。ありがとうございます。」

ラグの言葉に3人は喜んだ。もちろんキノやハスボーもだったがこの3人は特に喜んだ。
その時

ピピピ・・・

ポリズ「あ、連絡です」

ポリズはどこからともなくパソコンを出し、そしてチェックした。するとポリズは驚いた表情で言った。

ポリズ「クレセリアさん達の意識が戻ったようです！」

タチマル「ホントですか？」

ラグ「よし、行こうー！」

ラグの発言にみんなは賛成、クレセリア達に会うことにした。

第一百六話 WPとポリZ（後書き）

アクア「WPのことがわかったね」

うん、ちなみにクローンはホントに寿命が短いらしいですよ

アクア「これからカイリユ―君達について調べていかないとね！あと次回は・・・」

はい、幹部戦以降姿を見せていなかったクレセリア達です。まあ何をしていたかは次回で！

第一百七話 元ターク幹部達の話し（前書き）

今回の話は色々大変だった・・・

キノガツサ「色々？」

YES、スランプ・・・かも

第一百七話 元ダーク幹部達の話し

「クレセリア達が目を覚ました」、この知らせを聞いてある場所へと来たラグ達。そこは・・・

ラグ「ここだね」

サンダース「ああ、「インルーラ中央病院」だ」

ハスボー「おつきいね」

キノ「ホント、大きいです」

そう病院、インルーラにある病院に来ていた。それはなかなか大きく高さは普通のビルと変わらない。そんなビルを見上げてハスボーは自己の感想を述べた。

アクア「ここにヒードランさん達が？」

ポリズ「はい、連絡によるとそのはずですよ」

キノガッサ「おっしや、それじゃ入ろうぜ」

タチマル「そうですね、入りましょう」

病院内

ラグ「ここがクレセリアさん達の部屋だよね？」

ポリズ「はい、では入りましょう」

キノガッサ「そうだな」

ポリズが言うとキノガッサはドアを開けた。するとそこにはクレセリア、ヒードラン、そしてレジギガスがいた。

クレセリア「あ、絆の皆さんじゃないですか」

ヒードラン「ホントだ」

レジギガス「よく来てくれたな」

ポリズ「意識が戻られたと聞いたんで来ました」

クレセリア「ご心配おかけしました」

クレセリアは頭を下げた。そんなクレセリアに頭を上げるようにジェスチャーし頭を上げてもらった。するとポリズの表情が変わった。

ポリZ「ではいきなりで失礼かとは思いますが何か情報を持っていませんか？」

クレセリア「・・・やはりその話になりますよね。分かりました、知っていることをお話しします」

クレセリアは一度深呼吸をすると温かな表情を冷静な、だけど冷酷ではない表情に変わった。

クレセリア「まず私達がダークに入った理由、それはご存じですよね？」

サンダース「ああ、「いじめ」と・・・」

キノガッサ「会社の理不尽なところと・・・」

ポリZ「学校の間違った対処方法・・・ですね？」

レジギガス「そうだ」

ヒードラン「あれが「きっかけ」で僕たちはダークに関わったんだ」

クレセリア「そして「ダーク化」を習得したんです」

ラグ「ダーク化・・・」

ダーク化、その言葉を聞いてメンバーの顔が暗くなる。今まで戦ってきた多くのポケモンは「ダーク化」し自分達に襲い掛かった、それを思い出したからだ。

クレセリア「ところで皆さんはダーク化の長所と短所を知ってらっしゃいますか？」

キノガッサ「長所？そりゃパワーアップだろ？」

タチマル「あとは「闇の衣」をまとえること……ですか？」

クレセリア「確かにパワーアップもありますが「闇の衣」は特定のポケモンだけがまとえるのです。では逆に短所は？」

アクア「やっぱり心を闇に染めるから……ってあれ？短所……？」

ラグ「そういえばダーク化の短所って……何かあるっけ？」

キノガッサ「なんでだよ、「心が闇に染まる」、短所じゃねえか」

サンダース「それは違うさ、キノガッサ」

キノガッサ「なんでだ？」

キノ「ダークの人にとって心を闇に染めるのは短所ではないでしょ？」

キノガッサ「そうか……じゃあ短所ってなんだ？」

キノガツサはクレセリアに聞いた。他のメンバーも答えが気になりクレセリアを見た。するとクレセリアからは意外な答えが教えられた。

クレセリア「短所は・・・」

ないんです」

キノガツサ「・・・は？」

あまりに予想外の答えにキノガツサは驚きをそのまま言葉で表した。

キノガツサ「短所って弱点・・・だろ？ダーク化には弱点がない・・・ってことか？」

クレセリア「いいえ、弱点はあります。ただ弱点が弱点ではないのです」

キノガツサ「はあ？わけわかんねえよ。ちゃんと説明してくれよ」

クレセリア「先程キノさんがヒント・・・と言ってもほぼ100パ

「セントの答えをおっしゃったじゃないですか」

ラグ「キノさんが？」

ラグはアクアを見ながら言った。しかしキノは

キノ「私ですか？特に問題発言はしてないと思いますけど・・・」

クレセリア「ではさっきなんと申されました？」

キノ「ダークの人にとって心を闇に染めるのは短所ではないですよ？」といたしましたけど・・・」

ポリズ「なるほど、そういうことですか」

みんな何がヒントなのか分からない中、ポリズだけが納得の意を見せた。

キノガッサ「どういうことだ、ポリズ？」

ポリズ「そのままの意味ですよ。ダークの人にとって心を闇に染めるのは短所ではない、つまり自分を捨てているんです。だから・・・」

キノ「弱点は関係ない・・・ということですか」

ポリZ「そうです。違いますか？」

ポリZはクレセリアを見ていった。とうのクレセリアは少し驚いたがすぐに元の表情に戻り

クレセリア「流石ポリZさんです。正解です。一応短所、弱点はあります。それは「体力の消費が激しいこと」などポケモンによって違うのですがどれにも共通のいくつか注意しないといけないものがあります」

アクア「それは？」

クレセリア「1つは「体の破壊」です。ダーク化は能力強化はされますがそれに体は追い付いていきません。つまりは無理に動き過ぎるとある程度時間がたった後体に一気に負担がかかり、最悪そのダメージに体が耐えられず命を落とします。」

クレセリア「2つ目に「ダーク化の時間」です。ダーク化は確かに強力・・・ですが時間が限られています。これは体に闇を取り込む際に心にどれだけの闇があるのかで決まるんですがダーク化を多用するとその時間は徐々に短くなっていきます。」

クレセリア「そして一番の弱点が「精神の強奪」です」

ラグ「それってどういう意味？」

クレセリア「簡単にいえばダーク化2ndになると自我を保てなくなるんですが、あまりにも心の闇が多いと自我を闇に乗っ取られる

んです。」

ポリズ「つまりは第2の人格……のようなものになると?」

クレセリア「そういうことです。しかしこれらは身を捨てたダークのメンバーにとっては何ともない、だから弱点はないに等しいのです」

全てを説明し終えてクレセリアは「ふう」と息を吐いた。やはり気を緩めて笑いながら話す話ではないので多少緊張していたのだろう。

キノガツサ「なるほどな、ところでさ、ボスとか覚えてないのか?」

キノ「ボス?」

キノガツサ「ああ、もしボスを覚えていたら少しは戦いやすくなるんじゃないか?少なくとも情報は入りやすくなるだろ?」

ポリズ「なるほど……どうですか?」

ポリズはクレセリア達に聞くが残念そうな表情で

クレセリア「すみません、分らないです」

ヒードラン「僕も……」

レジギガス「我もだ・・・」

キノガッサ「だめか・・・」

キノガッサは落ち込んだ。その時、クレセリアは何かを思いついたような表情をした。

クレセリア「手掛かりがないんですか？」

サンダース「ああ、全くなしさ」

クレセリア「それなら「ステープ」に行ってみてはいかがでしょう？」

ラゲ「ステープ？」

ポリZ「ここから少し離れた場所にある街です。通称「岩の街」です
ね」

キノガッサ「岩の街か・・・でもそこになにかあんのか？」

クレセリア「あそこで怪しい人物を見たとの情報が入っている
んです」

キノガッサ「マジかよ!？」

タチマル「それは行ってみるしかないですね」

ラゲ「うん、行こう、ステープに！」

こうしてチーム絆は岩の街「ステープ」に向かうことになった。

第一百七話 元ターク幹部達の話し（後書き）

というわけで次回はステップに向かいます！！

キノガツサ「ステップか・・・かわいい娘は多いか？」

分かりません！！

第一百八話 タチマルのライバル登場！？（前書き）

さあ久々の更新です。

ラグ「作者さんミルクィばかり書いててずるいよ〜」

ごめんごめん

第一百八話 タチマルのライバル登場！？

インルーラでのクレセリア達の話聞いて「ステープ」へと向かうチーム「絆」。そんな彼らは今、草原に来ていた。

アクア「うわ〜キレイ」

キノ「草木のいい香りです」

チームの女子であるアクアとキノはその後景、香りに喜びの表情を見せる。近頃は戦いに明け暮れ、街にいたので自然に触れ合うのは久しぶりだからそれも仕方ない。すると

キノガッサ「お、確かにいい景色だな」

ラグ「太陽の光が温かいね〜」

後ろからはキノガッサとラグが来た。その二人の後ろには・・・

ポリズ「自然の豊かな場所ですね」

ハスボー「のどかだね」

サンダース「ああ、久しぶりの後景だな」

タチマル「いやされますね」

他のメンバーが歩いてくる。そこに・・・

????「エアーカーター」!

タチマル「!? “シエルブレード”」

突然“エアーカーター”が「絆」に飛んできてくる。がタチマルが反応し“シエルブレード”で応戦、“エアーカーター”は防がれた。

タチマル「誰ですか、いきなり危ない!」

????「ほう、セツシャの“エアーカーター”を防ぐとは、腕を上げたでござるな、タチマル」

そう言いながら現れたのは・・・

キノガッサ「・・・カモネギ?」

カモネギだった。

カモネギ「いかにも、セツシャは旅するサムライ、カモマルでござる」

ラグ「サムライ？」

アクア「旅する？」

カモマル「イエス、でござる」

カモマルは親指を立ててグッド！と言わんばかりのポーズをした。しかし

タチマル「・・・思い出しました。カモマル・・・オイラの・・・」

カモマル「ライバルでござるー！」

タチマルがため息をしながら言う途中でカモマルが乱入した。

タチマル「違います！クラスメートです！」

カモマル「何を！あの日のことは忘れんでござるか！？」

サンダース「あの日？」

キノ「一体何があったんですか？」

カモマル「あの日・・・そう、セツシャが食べようと思っていたじやがバターを食べたでござる!!」

キノガッサ「お前そんなことしたのか!？」

キノガッサが驚きの表情でタチマルを見る。他のメンバーもタチマルを見た。しかし

タチマル「違います!!あれはじゃんけんで勝ったからもらったんです!!」

カモマル「なにをー!?そんないいわけをするでござるか!？」

ラグ「言い訳って・・・すごい子だね」

タチマル「・・・昔からこんな感じでした・・・」

ラグとタチマルは苦笑だった。

カモマル「仕方ない・・・タチマル、勝負でござる!!」

タチマル「・・・はい？」

カモマル「今から勝負でござる!!あのときの決着をつけるでござる!!」

タチマル「あのとときの決着って・・・」

カモマル「何、逃げるでござるか？」

タチマル「な・・・」

カモマル「逃げるでござるか、セツシャが怖くて逃げるのでござるか？」

タチマル「そんなことない！オイラは逃げません！！」

カモマル「では勝負でござるー！！」

それから数分後、二人は少し広い場所に来ていた。ここには花は咲いていない。バトルが激しくなり、花が散ったりしたらいけないからだ。

カモマル「準備は完了でござるか？」

タチマル「もちろんです。そちらからどうぞ」

カモマル「それじゃあいくでござる、”エアーカーター”！！」

カモマルはバトルが開始されると”エアーカーター”を放った。タチマルに空気の刃が襲い掛かる、しかし

タチマル「水風斬」

タチマルは水と風を合体させた斬撃を放ちガード、”エアーカータ
ー”を防いだ。

カモマル「なかなかやるでござるな。だがこれは防げるでござるか
？」かげぶんしん”からの”真空十字字”

カモマルは”かげぶんしん”で自身の分身を2人出現させ、「手裏
剣」のような十字字の空刃を放った。

カモマル「これは”エアーカーター”を派生させて作ったオリジナ
ル技でござる。セツシャの最強技でござるよ！！」

タチマル「そうですね、ではこれを打ち壊せばいいんですね？」

カモマル「え？」

タチマル「アクアイスウインドゴーレム”！！」

タチマルhが水、氷、風を合わせた巨人を作り出した。そして

タチマル「はあああああ！！」

タチマルは思いっきり手に持ったシエルを剣のように振る。すると巨人も手の剣を振り下ろし”真空十文字”を切り裂いた。

タチマル「これはオイラの所有する最強技の一つです。このゴーレムを倒さない限りオイラを攻撃できません」

カモマル「なるほど・・・しかしタチマル、そうとも限らんでござるよ?」

タチマル「・・・?」

カモマル「忍者は様々な戦い方を持っているのでござる。秘術、くさむすび」

その瞬間、タチマルの足元から草木が出現し、タチマルの体を縛った。

タチマル「こ、これは・・・」

カモマル「どうやらそのゴーレムはタチマル、おぬしが動かないと動けないようござる。ならばおぬしを縛ればなんともないでござるよ」

タチマル「くっ・・・」

カモマル「おぬしの残りの最強技は恐らく”ビックシエルブレード”、それもおぬしが動けなければ無意味でござる」

タチマル「(くっ、確かに・・・)」

カモマル「セツシャの勝ちでござる！」 かげぶんしん”、そして”
真空十文字”！！」

カモマルは再度”かげぶんしん”で自身を作り出した。その数はさつきをしのぎ4人、そして合計5つの”真空十文字”がタチマルに襲い掛かった。

カモマル「これで終わりでござる！！」

カモマルの声とともにタチマルの縛られた場所では凄まじい勢いの暴風が発生、あたりは砂ぼこりに包まれた。

カモマル「これで終わりでござるな」

ラグ「ちょっと待ってよ」

カモマル「・・・なんでござるか？」

ラグ「まだ終わってないみたいだよ？」

カモマル「何、そんなことが・・・!？」

タチマル「まだです・・・まだ終わってません」

カモマルの目線の先、そこにはボロボロながら確かにそこに立っているタチマルがいた。

カモマル「な、なぜ・・・”真空十文字”が外れたとでもいうのでござるよか!？」

タチマル「いいえ、ちゃんとヒットしましたよ。ただ・・・それを耐えただけです」

カモマル「た、耐えた!? そんなことが・・・」

タチマル「といってもオイラの体力も残りわずか、なので次で決めます、”アイスポリソン”」

タチマルが”アイスポリソン”を発動、カモマルの周りに氷の壁がつくられ動きを封じた。

カモマル「これはスクールの時にタチマルが得意だった技・・・これが来たということは・・・!？」

タチマル「そうです、行きます!!”ビククシエルブレード ve 「極水氷風斬”!!」

タチマルは腕を上げて思いっきり振り下ろす。すると発動していた

ゴーレムの剣に三種のエネルギーが集まり、ゴーレムもそれを振り下ろした。

カモマル「しまった、”真空十文字”で”くさむすび”を切ってしまった・・・それでゴーレムも・・・」

タチマル「はあああああああ!!」

カモマルの言葉を待たずその大剣は”アイスポリソン”を破壊し、カモマルに直撃した。その瞬間さっきと同じくらいの勢いの風が発生、その威力を物語っていた。

キノガッサ「すげえ威力だな」

ポリズ「とくせいですね」

アクア「フタチマルのとくせいって確か・・・げきりゆうだったけ？」

ポリズ「そうです」

サンダース「自身の体力が凄く減った時技の威力を上げるとくせいだな」

キノ「でも動きが封じられているからワザと”真空十文字”を受けただんですね」

ハスボー「一石二鳥ってこと？」

キノ「そういうことです」

ラグ「タチマル君凄い!!」

カモマル「・・・負けたでござるか・・・」

夕方、気がつくときカモマルはそういった。

タチマル「怪我がないようですが・・・大丈夫ですか？」

カモマル「おぬしにそんな心配をかけるとは・・・セツシャとしたことが情けないでござるな」

タチマル「そんなことないです。あなたはとても強かった。オイラもギリギリでした」

タチマルはそう言いながらホタチを差し出した。

カモマル「はあ、覚えていたでござるか、セツシャがカモマルなのに「ネギ」を上手く扱うことを・・・」

タチマル「バトルの時も使っていなかったようなのでそう判断しました。それに・・・オイラも昔はそうでしたからね」

カモマル「そうでござるか、ならば次会うときは扱えるようになつておくでござるよ」

そう言いながらカモマルはネギを取り出し、ホタチと軽く合わせた。

夕日が静かに、次の再会を約束する二人のライバルを照らしていた。

第一百八話 タチマルのライバル登場！？（後書き）

ということだ。タチマルとカモマルでした。

タチマル「また会えますよね？」

かもね、次会うときはお互いの自慢の武器で戦えるといいね

タチマル「はい！！」

第九話 到着、岩の街「ステープ」(前書き)

久々の更新です

ラグ「何やってたの？」

主にツイッターだね

ラグ「・・・(汗)」

第一百九話 到着、岩の街「ステープ」

クレセリア達の話聞いて岩の街「ステープ」に向かうことになったチーム「絆」はついに「ステープ」についていた。

ラグ「ここがステープ・・・？」

ポリズ「はい、岩の街「ステープ」です」

キノガツサ「ホント岩ばっかだな」

アクア「ここにも岩があるね」

キノガツサの言うとおりステープは街の周りが岩で囲まれおり街の内部には天然の岩もたくさんある、そんな街だ。

キノ「そういえば怪しい人・・・どうやって探しますか？」

ハスボー「やっぱり聞き込みじゃない？」

サンダース「しかないな」

タチマル「それじゃあ分かれて聞き込みしますか？」

ポリズ「いえ、今回このステープは誰も来たことのないいわば未知

の場所です。迷子などを避けてみんなで行動しましょう」

キノ「ですね、ああいうのもいますし……」

キノが冷たい目線である方向を見た。そこには

キノガツサ「お嬢さん、かわいいな。俺とお茶しない？」

サンダース「……みんなで行動だな」

ポリズ「あはは……そうですね。では行きましょうか」

ハスボー「うん！」

キノ「ほらキノガツサ、行くよ」

キノガツサ「待ってくれ、あ！あの子……」

キノ「ウツドロック」

キノガツサ「ぐあー！」

またもや別の女の子をお茶に誘おうとするキノガツサをキノの「ウツドロック」が束縛、キノガツサを止めた。

キノ「さあ、行くよ」

キノガッサ「ま、待ってくれえええー！」

ポリズ「収穫なしでしたねえ」

キノ「皆さん噂のことはご存知でしたけど詳しいことは……」

ハスポー「そういえば今日泊まる場所はどつするの？」

サンダース「そういえばそれもどうにかしないといけないな」

アクア「今から宿探す？」

タチマル「でも見回った感じ宿らしき建物は少なかったですよ？」

アクア「あ……そういわれれば……」

ラグ「確かに少なかったね」

ラグが苦笑いで答える。そう、ここステープは観光客が少ない、だから必然的に宿も少なくなるのだ。

サンダース「これは困ったな」

キノ「どうでしょうか」

一同は考え一旦静かになるとポリZが口を開いた。

ポリZ「まあ宿は無いわけではないので少なくとも1軒1軒回って見ましようか」

ラグ「そうだね、それがいいかも」

キノガッサ「もしかしたら途中でカワイ子ちゃんに・・・」

キノ「はいその考えは持たない」

キノガッサ「うう・・・」

ラグ「よし、それじゃあ・・・」

ラグがみんなの方を見ながら歩き出したその時

????「すまない、君たちはチーム「絆」のメンバーか？」

大きな岩でできたようなポケモン、レジロックが話しかけてきた。

ラグ「はい、そうですね・・・」

レジロック「そうか、それは良かった」

ラグ「よかった？」

レジロック「それは・・・」

キノガッサ「おいおいおいおい」

レジロック「？」

キノガッサ「なんだよ、お前。いきなり話しかけてきて良かったって。まず自己紹介くらいしろよ」

キノガッサは少しにらみながらいった。少々警戒しているのだろう。

レジロック「それもそうだな、我の名はレジロック。このステープの守り神をしているものだ」

キノガッサ「守り神だと？」

レジロック「ああ、街の人々からはそう呼ばれている」

キノガッサ「なるほどな、んでその守り神さんが俺達に何の用だ」

レジロック「実はな、ラグに用事があるんだ」

ラグ「ぼ、僕？」

いきなりのご指名に驚くラグ。そんな彼を少しみてレジロックは答えた。

レジロック「そうだ、君に経験してもらいたいことがある」

ラグ「経験？」

レジロック「まあとにかく来てくれ」

そういうとレジロックは歩き始めた。

キノガッサ「ついていくのか？」

ポリZ「現状怪しいとはいえついていくしかないんじゃないですか？」

キノ「そうですね」

サンダース「とりあえずついていってみよう」

ラグたちチーム絆はレジロックについていった。

レジロック「ここだ」

レジロックに案内された場所は少し大きめの普通の家だった。

レジロック「まあ上がってくれ」

ラグ「じゃあ・・・お邪魔します」

ラグたちは家上がった。そして奥へと歩いて行くと・・・

レジロック「帰った」

レジアイス「御苦労でした」

レジスチル「お疲れさん」

ポリZ「もしかして・・・あなた方はレジ系の方々!？」

アクア「ポリZ知ってるの?」

アクアの質問にポリZは答えた。

ポリZ「私達・・・というよりキノガッサ達が幹部戦で戦ったポケモン「レジギガス」の束ねている3体のポケモン、それがレジロック、レジアイス、レジスチルです」

レジロック「よくそこまで我々のことを・・・」

ポリZ「これでも研究者ですから」

ラグ「ところでここで何かするんですか？」

レジロック「そうだったな、今から君には自分の心に入ってもらおう」

ラグ「こ、心の中!？」

レジロックの言葉にラグは驚いた。そんなラグを見てレジアイスは言った。

レジアイス「そうです、今のあなたではこれから戦うダーク勢とは対等に戦えない。我々はそう判断し考えた結果、君に得てもらおうと思うんです。新たなる力を」

ラグ「新たなる・・・力？」

レジスチル「そうだ、お前も・・・カリバーもな」

ラグ「カリバーまで・・・でもその間みんなは？」

レジロック「大丈夫だ、時間的には結構早く終わる」

ポリズ「すみません、1つ質問を良いですか？」

レジロックがラグに話すとポリズがレジロックに聞いた。

ポリズ「一体ラグに何をするんですか？それがわからないと私達も仲間として不安です」

レジロック「それもそうだな、簡単にいえば「催眠術」だ」

ポリズ「催眠術？」

レジアイス「特殊電磁波によって脳内の電気信号を心に送るんです。そうすれば心の自分と出会えます」

ラグ「心の・・・自分・・・」

レジスチル「あとはそいつにあって戦うなり話し合うなりしてお前自身に新たな力を作れ」

キノ「ずいぶん簡単そうにいいますね・・・」

ポリズ「ええ、しかしこれだけ自信を持って言っていること、信じたいと思いますよ」

話を聞いたポリズは納得していた。彼自身研究者、人に説明する際

にどんな喋り方を見るだけで信頼できかどうか分かるのだろう。

アクア「それで・・・ラグちゃんはどつするの？」

ラグ「え？」

アクア「だって周りがいって言うても結局決めるのはラグちゃん
でしょ？」

サンダース「そうだな、実際行くのはラグだしな」

レジロック「どつする、ラグ」

ラグ「・・・」

ラグはしばらく考えた。これから自分にはよくわからないことが起
きる。しかも心の中の自分と会ってこいと言われるのだ。迷っても
無理はない。しかしそんな彼の頭の中である考えが浮かんだ。

ラグ「（ここで強くなればみんなを守れるかも・・・）」

この思いがよぎった瞬間、ラグの答えは決まった。

ラグ「・・・行きます」

レジロック「そうか、ならばこちらへ来てくれ」

レジロックが更に奥の部屋に入って行った。そこには・・・

レジロック「この機械を使う。寝てくれ」

ラグ「はい」

ラグは代の上に寝た。するとレジロックは機械をいじり始めた。

レジロック「今から君に眠ってもらい自分に会ってきてもらう、いいか？」

ラグ「はい」

レジロック「では、いくぞ」

レジロックがボタンを押すと周囲で電磁波が発生、それと同時にラグは一気に眠った。

レジロック「さあ、どんな成長を遂げてくるか楽しみだな」

はたしてラグは何を得て帰ってくるのだろうか。

第九話 到着、岩の街「ステープ」（後書き）

というわけで次回からはラグの精神世界です

ラグ「ちなみにこれは・・・」

思い付きです

ラグ「ありやりや・・・」

でももちろんちゃんとしたストーリーにはしていくよ

第一百十話 精神世界とラゲの心（ハート）（前書き）

さあいよいよ精神世界です。

ラゲ「僕の心の中かあ、どうなってるの？」

それは読んでのお楽しみだよ

第一百十話 精神世界とラグの心（ハート）

特殊な電磁波によって自分の心へと意識を移動させたラグ。そんな彼の目の前にはある存在があった。

ラグ「ここが、僕の精神世界・・・少し暗いねえ。そして・・・」

ラグ「君が心の中の僕・・・だね」

ラグの問いに心の中のラグは少しほほ笑んで答えた。

ラグ（心）「そうだ、俺はお前の中にいるラグだ。一人称から違うかな」

ラグ「そうなんだ。・・・ところでさ、君のこと、なんて呼んだらいい？」

ラグ（心）「呼び方？」

ラグ（心）は無関心そうに聞く。表情からして本気で無関心なのだ

ろう。しかしラグはそれを（気づいていないのか）無視した。

ラグ「うん、だって僕たち二人ともラグだから呼び方が困っちゃうでしょ？」

ラグ（心）「そうだな・・・では俺のことはラグの心で「^{ハート}ラート」と呼んでくれ」

ラグ「分かった、ラートね」

ラート「それはそうとラグ、お前、ここに来た理由があるんだろ？」

先ほどとは違い少し険しい表情になったラート。いや、険しいというよりは真剣な表現するべきかもしれない。そんな表情だった。

ラグ「うん、やっぱりお見通しだね・・・。僕は・・・僕はここに「強くなるため」に来たんだ」

ラート「強くなるため？」

ラグ「うん、レジロックさん達にね、「新たな力を手に入れてこい」って言われたんだ」

ラート「なるほど、それでか。だが、ここに来るだけじゃそれは得られないんじゃないか？」

ラグ「そうなんだよね、だからどうやってそれを探そうかなって思

つて・・・」

ライト「ラグ、俺と勝負しろ」

ラグ「・・・え？」

ラグは大声ではないものの驚いた。そりゃあいきなりバトルを、しかも心の中の自分にしようといわれれば驚くだろう。しかもラグの性格上から考えてもいきなりバトルを申し込むことはない。それも驚く理由の一部だろう。

ラグ「ライトと戦うの？」

ライト「そうだ、俺と戦い何かを得るのだ」

ラグ「得るって・・・そんな急に言われても・・・」

ライト「ふう、こちらは・・・準備できているのだがな」

少し自信ありげな声で言うライト。そんな彼の右手には・・・

ラグ「もしかして・・・カリバー!？」

ライト「そうだ、俺はお前の心に住む者、悪いがお前に出来ることで俺に出来ないことはない」

ラグ「・・・なるほどね、本気なんだ」

静かにラグがいうとラグの右手にもカリバーが出現した。これがど
ういうことを意味しているのか、ラートには分かった。

ラグ「しょうか、バトル」

ラート「そうだな、お前も了承したことだし・・・いくぞ！」

ラートは少し笑顔で言うつとラグに向かってダッシュした。そんなラ
ートに対してラグは・・・

ラグ「臨むところだよ！“ハイドロステインガー”」

“ハイドロステインガー”を発動、ラグの周りには複数の水の短剣
が出現し一斉にラートにとんでいく。

ラート「効くと思ってんのか！“ハイドロスラッシャー”」

カリバー（心）「ロードカートリッジ」

ラート「はああああー！！」

ライトは止まりカリバーを後ろに構える。するとカリバーが反応しカートリッジをロード、エネルギーを溜め込みそのエネルギーを衝撃波にして“ハイドロステインガー”にぶつけ消した。しかし“ハイドロスラッシュャー”の方が威力が高かった為、“ハイドロスラッシュャー”はそのままラグに向かった。

ラグ「まずい!?!」

カリバー「ロードエレメントカートリッジ、「アイスフォーム」」

カリバーが瞬時に状況を判断しアイスカリバーとなる。

ラグ「（これは・・・でも考えてる暇はない!!）はああ!」

ラグはそのままカリバーを地面にさす。そしてアイスカリバーの剣身に“ハイドロスラッシュャー”があたると一瞬光り、すぐにライトに跳ね返る。

ライト「なめるな!“ストーンエッジ”」

ライトは“ストーンエッジ”を発動、“ハイドロスラッシュャー”を“ストーンエッジ”が受け止めて消えた。

ライト「なかなかやるじゃないか・・・ん？」

ラグ「まさか・・・なんで使えないはずのアイスカリバーが・・・？」

カリバー「どうやらこの空間ではアイスカリバー発動の負荷が減少、もしくはなくなっているようです。なので発動したのかと思われま

す」

ラグ「そう・・・なんだ・・・」

カリバーが冷静に判断し、意見を主に伝える。そんなカリバーの状況解析結果を聞いてラグは少しうれしそうな表情になった。

ラグ「つまり、メタルもサイコもグランドもフレイムも使えるってことだよな？」

カリバー「その通りです、どうしたんですか？うれしそうですよ？」

ラグ「そりゃそうだよ、しばらく使えないって思ってた能力が使えるようになったんだもん。うれしいよ」

ラグは目を輝かせて話した。そんなラグの表情にカリバーも自然とうれしくなった。しかし喜びもつかの間ラグを急に「土の壁」が囲んだ。

ラグ「これは・・・メタルカリバーの能力!？」

カリバー（心）「リペルト「メタルカリバー」「クリエイトモード」
」

ライト「カリバーのリペルトは自分だけの特権と思ったか？言った
だろう、お前にできることは心の中の俺にもできる・・・とな」

ラグ「そうだった・・・ね!！」

ライト「!？」

ラグはカリバーをメタルに変えて土の壁に刺した。すると壁はリソ
ーヴされ元の土に戻る、そして

ラグ「いでよ、鋼鉄の機械龍!！」

カリバー「クリエイト。ダイレクトハックドラゴン!！」

ラグの後ろに「土や鉄でできた龍」が現れる。いや「創り出した」
といったほうがあっているかもしれない。

ライト「ここでハックドラゴンか」

ラグ「お願いハックドラゴン!！」

ラグの指示でハックドラゴンはラートに向かっていく、しかし

ラート「俺にこいつが攻略できないと思ったか？」

ラグ「え？うあああ！！」

その瞬間ラートの周りが光輝いた。その影響でラグは目を閉じハックドラゴンはその光の中へ飛び込むような形になった。そして

ラグ「いったい何が・・・」

カリバー「ラグ・・・どうやらそれどころではなさそうですよ」

ラグ「？」

カリバー「目の前を見てください」

ラグ「えつと・・・！？」

目の前を見たラグは驚きを隠せなかった。そこには光輝き、頭のヒレとエラは鋭くなっており、何より微弱な「電気」を放っているラグラージがいた。

ラグ「そんな・・・まさか・・・デンラージ？」

ラート「正解だ、デンラージの”ライトニングエミッション”でハックドラゴンを消した、それだけだ」

ラグ「”ライトニングエミッション”!?”

カリバー「ラグがなのはさんの世界から覚えてきた3大雷^{ライ}技^キのひとつを……」

ラート「いっただろう、お前にできることは心の中の俺にもできる……と」

ラートは得意そうに言った。

ラグ「だったら……」

その瞬間ラグも輝きを放った。そして数秒後、デンラージとして姿を現した。

ラグ「やっぱり僕もこれで挑まないと……だよね」

カリバー「ここからが本当の勝負ですよ」

ラグ「わかってるよ、もつと全力で行かなくちゃ!」

ラート「いい気合だ、かかって来い、俺を倒してみろ」

二人のデンラージの放つオーラによってあたりいつたいの空間は光に満ちていた。

第一百十話 精神世界とラグの心（ハート）（後書き）

ラグ「バトルはじまっちゃった・・・」

そうだね、はじまったね

ラグ「あの・・・作者さん、凄くうれしそうだけど・・・？」

だってバトル書くの好きなんだよ、書いてるところ・・・燃えてくるじゃん？

ラグ「・・・（汗）」

第百十一話 VSライト 明かされる新能力(前書き)

ラグ「今回はどういっお話？」

もちろんラグVSライトだよ

ラグ「でも同じ力を持つてるんだよね？勝敗つくの？」

それは本編で！！

第百十一話 VS ライト 明かされる新能力

新たな力を手に入れる為、自身の心の中へと向かったラグ。そんなラグを待っていたのは自身の心、ライト（ラグのハート）だった。そして今、ラグとライトは共に「デンライジ」となり、バトルをしていた。

ラグ「ウォータルストリーム」と「プラズマストリーム」！！」

ラグはカリバーを振る、すると暴風と雷撃が合体し、1つの技となつてライトを襲う。その勢いは見ていてわかるが凄い迫力だ。しかし

ライト「メタルカリバー！」

カリバー（心）「イエス」

ライトの指示でカリバー（心）はメタルカリバーのリペルト能力を発動、ライトの前には土の壁が出現しライトを技から守った。

ラグ「それなら・・・」プラズマスラッシャー」

ライト「こつちも」プラズマスラッシャー」だ」

ラグとライトはお互いに”プラズマスラッシャー”を放ちぶつけ相殺した。

ラグ「さすがだね、僕の攻撃を全て無効化してくる」

カリバー「そうですね、確かに強い。しかしラグ、この戦いは負けられませんよ」

ラグ「もちろん、このバトルで何かが入る。それがもし勝つことによつてなら負けるわけにはいかないよね」

カリバー「イエス、ロードエレメンタルカートリッジ、グランドカリバー」

ラグ「いくよ、拘束!!」

カリバー「ソイルロック」

カリバーは土による拘束技を発動、ライトを拘束しようとライトの足元の土が動いた。

ライト「それをくらうわけにはいかないな、”ライティングウイング”」

しかしライトは”ライティングウイング”を発動し翼を生成、その

翼で飛翔し回避した。

ラグ「こっちも”ライトニングウイング”！！」

ラグも抵抗し”ライトニングウイング”を発動、同じく空へと飛んだ。

ラグ「いくよ！”デンミラージュ”！！」

ライト「真つ向勝負か、いいだろう”デンミラージュ”」

ラグとライトは共に”デンミラージュ”を発動、ラグとライトの分身がそれぞれにぶつかりあった。電気でできた分身はぶつかるたびにあたりに電流を促し、発光した。その光景は”デンミラージュ”の威力の高さを証明していた。

ライト「すごいな、”デンミラージュ”が大量じゃないか」

ラグ「そう・・・だね！」

ライト「!？」

ラグの言葉にライトは慌ててカリバーを後ろに構える。そこには2つのフレームカリバーを振りかざし、ライトを攻撃しようとするラ

グがいた。ライトは攻撃を阻止するために後ろに構えたようだ。

ライト「デンミラージュ」を解除、フレイムのリペルトで加速し攻撃をしようとしたか、残念だったな」

ラグ「まだだよ!!」

カリバー「リペルトアウト!」

ラグは一度はじいて離れる、するとカリバーはリペルトアウトした。二刀流となっていたカリバーが元の1つの剣になる。それと同時にカリバーを熱い炎が包んだ。

ライト「(これは・・・あれが来るか!?)」

ライトが心の中で予測をしカリバーを前に構える。アイスカリバーにすれば防御力は上がるが時間的にロードしている暇はないと判断したのでらう、プラズマカリバーのままだ。

ライト「(これで少しは威力を軽減でき・・・)」

ラグ「フレイムエクスクラッシャー」!!!」

ラグは技名を叫ぶとともに炎をまとったカリバーを思いっきりラー

トにたたきつける。”フレイムエクスクラッシュャー”、各フォームのカリバーでリペルトアウトしていないと使用できないエクスクラッシュャー系の中で発動までの時間が最速のこの技は威力はもちろん高い。その影響がプラズマカリバーでそれを受け止めたラートは衝撃で落下しそうにまでなる。

ラート「(くっ、かなりの威力だな・・・)やるじゃないか、だがなんとか受け止めたぜ」

ラグ「それは・・・どうかな」

ラート「・・・!?!」

ラグの言葉にラートは「はっ!」と気づきプラズマカリバーを見る。すると・・・

ラート「プラズマカリバーにヒビだと!?!」

カリバー「そうです、”フレイムエクスクラッシュャー”はかなり高威力の技、プラズマカリバーの強度では・・・」

・・・パキ・・・パキ・・・

カリバー「防げません!?!」

ラグ「はああああ!!」

パキッ!!

ライト「!?」

ラグが更に力をかける。するとプラズマカリバーは折れて技はライトに直撃する。威力はいうまでもなく高い、ライトを炎の高威力の技が襲った。

ライト「ぐああああ!!」

その衝撃でライトは飛行不能、落下する。しかしライトは途中で意識を取り戻し地上にぶつかる直前に大きく羽ばたき衝撃を抑えた。

ライト「強いな、おまえ」

ラグ「ありがとう、でもそれなら君も僕の心の僕なんだから強いよ。あれ、君が僕の心の僕で僕が君の・・・あれ？」

ライト「・・・フッ」

一人で言って一人で混乱するラグを見てライトはほほ笑んだ。

ライト「それに、面白いな。」

ラグ「え？何が？」

ライト「いや何でもないさ。ただな、ちょっと本気を見せてやろうかなって思ってる……な!!」

その瞬間ライトはカリバーにエネルギーを送り再度剣としての姿を取り戻させ、“ライトニングウイング”で一気に飛翔しラグに向かってきた。

カリバー「きますよ!!」

ラグ「わかってるよ!“ハイドロポンプ”!!」

ラグは“ハイドロポンプ”を発射、ライトを空中から凄まじい水圧の水流が襲った。

ライト「セイントリミット!!」

ラグ「え!？」

ライト「ファーストアビリティ、セイントバースト!!」

ライトがそう言いながらラグに接近してくる、”ハイドロポンプ”はその光に包まれて防がれてしまったのだ。

ラグ「な、何あれ・・・僕あんなの使えないよ？」

カリバー「恐らくはセイントカートリッジの能力でしょう。あそこには隠されたアビリティがありました。私たちではまだ開けられない・・・大きな力です」

ラグ「つまりこれはその内の1つってこと？」

カリバー「ファーストというところから一番目の能力でしょう・・・
・ラグ！！」

ラグ「!？」

ラグが少し隙を見せたその時、ラグは背後から違和感を感じた。何か大きな力を感じたのだろう。その予測は的中しラグが後ろを見たときにはたくさんの「光の剣」が構えていた。

ラグ「な、何これ!？」

カリバー「大まかで20〜30はあるでしょうね」

ラグ「そんなに!？」

ライト「セカンドアビリティ、スペシャルトロイス！コレクトズ」
“光の剣雨”」」

カリバー（心）「スペシャルトロイス「ライトソードレイン」！！」

ライト「さあ、いくぜ。”光の剣雨”だ！！」

ライトが合図すると「光の剣」はラグに向かって一斉に発射される。
その迫力は凄まじく大量の光がラグを襲う。

ラグ「くっ、”サークルレディアソード”！！はあああああ！！」

ラグは自身の周りに複数の水の剣を生成、それを操り攻撃を防いだ。
ラグのコントロール能力、ライトの技自体の威力、その高さの分かる瞬間でもあった。

ライト「やるな、なかなかいい反応だ」

ラグ「まさかいきなりセイントカートリッジを使ってくるなんて・
・僕の使えるものだけが使えるんじゃないの？」

ライト「残念だったな。お前のカリバーにセイントはちゃんと入っている。それをお前が使えていないだけだ。お前が使っていないということとは本来は使えるということ、俺が使えるのはそういう理由だ」

ラグ「よくわかんないけど、僕が使っていないだけってこと？」

ライト「そういうことだ!!」

その瞬間ライトの右手に炎が集まる。更にセントカートリッジによって発生した光エネルギーが融合し、光り輝く炎が出来上がった。

ラグ「なにあれ・・・？」

カリバー「あつちの私がフレイムになっているところをみるとフレイムの炎とセントカートリッジによって発生した光の集合体・・・でしょうね」

ラグ「でもあれを一体・・・」

ライト「どうするかって？こうするんだ・・・よ!!」

カリバー（心）「スペシャルトロイス「ホワイトホーリーフレア」」

ライトは右手を思いっきり横に振る。すると炎は伸びてラグに向かってきた。

ラグ「くっ、アイスカリバー!!」

カリバー「ロードエレメントカートリッジ、アイスフォーム!」

ラグ「これで少しは威力を・・・」

ライト「無駄だ」

ラグ「え？」

ライト「レフトターン！」

ラグが驚いた時にはすでに遅く炎はグニョリと左に曲がった。その影響でアイスカリバーで防御しようと思っていたラグの作戦は無駄になった。

ラグ「あの技・・・コントロールできるの!？」

カリバー「そのようです」

ライト「さあくらいな!光の炎を!！」

ライトのかけ声と共に炎はラグめがけて飛んでくる。それに反応しなんとか防ごうとするラグだったが・・・間に合わなかった。

ラグ「ぐあああああああ」

ラグを光の超高温の熱が襲い、体を芯から燃やしていく。その熱さは水タイプにもか買わずラグにジワジワとダメージを与えた。そして数秒後、シューと音を立てながら炎が消えた。それと同時に

ラグ「・・・」

ラグも落下した。

第百十一話 VSライト 明かされる新能力（後書き）

ラグ「決着ついちゃった!？」

ラグ、落下だね

ラグ「だって炎で気絶しちゃったんだもん」

それはしょうがないね（苦笑）

第一百十二話 自身を超える為の手段(前書き)

さあ前回は・・・

同じ力+持っていない力を持つライトに苦戦するラグ。一瞬のすきを突いたものの逆転されて大技をくらい落下してしまった。

果たして勝負の行方は！？

第一百十二話 自身を超える為の手段

ライトとの戦いで大きなダメージを負い、飛行不能となり落下したラグ。彼は意識の中で気絶しながらも思考は巡っていた。

ラグ「……そっか、ライトは僕プラス僕の持っていない能力まで持ってる、勝つなんて無理なんだ……」

ラグは悔しくなり手に持っているはずのカリバーを握ろうとする。がしかしそれは出来なかった。

ラグ「あれ……そっか気絶してるから動かないんだ。ちゃんと見えてるのに……動かない。もうこのまま落ちるしかないのかな……」

ラグは諦めて動かすのを止めた。どうせ動かそうとしても動く訳がない、そう考えた結果だった。

このままだら落ちるだけ、それ以外に出来る行動はない、そう覚悟した。

「……ラ……」

「……誰？」

「……グ！」

「（誰が……呼んでる……の？）」

ラグは誰が自分を呼んでる気がして意識をそちらに集中させると声ははつきり聞こえた。

「カリバー！ラグ！」

「（カリバー！？）」

「カリバー！ライトニングウイング！」

カリバーは自分で「ライトニングウイング」を発動、ラグの背に電気の翼が改めて展開し「ブォン！」と大きく羽ばたく、すると衝

撃は弱まり、無事に着地できた。それと同時にラグに感覚が戻った。

ラグ「カリバー・・・ありがとう」

カリバー「お礼はいいです。ただラグ、あなたはここで諦めるつもりですか？」

ラグ「え・・・」

カリバー「あなたは今意識の中で諦めかけた。違いますか？」

ラグ「・・・」

カリバー「あなたは・・・ここに、負ける為に来たのですか？」

ラグ「!?!?それは違・・・」

カリバー「違います!!」

ラグ「!?!?」

ラグは反論しようとするがカリバーの方が先に言葉を放つ。いつものカリバーなら考えられないだけにラグはとても驚いていた。

カリバー「あなたがこのまま負けを選ぶならここに来た理由は「負ける為」ということになる、違いますか？」

ラグ「それは・・・」

カリバー「負けることによって得られるかも知れない、そうですね、確かにそうかもしれない。しかしそれは「全力で戦った場合」ではないですか？」

ラグ「・・・」

カリバー「自分から諦めた戦いに何かを得ることなんてできない、私はそう考えています」

ラグ「・・・」

カリバー「このまま諦め、負ける戦いでレジロックさんの言っていた、あなたの望む「力」は手に入るのですか？」

ラグ「・・・」

カリバー「何も無い」、分かってますよね？」

ラグ「・・・でも・・・でもライトは僕の力を・・・全く同じ力を持つてる、こっちにできることは向こうにもできる。何よりライトは「セイントカートリッジ」の「セイントバースト」と「スペシャルトロイス」を持つてるんだよ？どうやって戦えば・・・」

ライト「そうだ、俺はお前とまったく同じ力を持っている。それに加えこちらにはセイントがある。それでどうやって戦う？」

上空からライトが言う。確かに考えれば考えるほどラグに勝ち目の

ない状況だ。しかしカリバーはあきらめない。

カリバー「……あなたは本当にラグと同じ力を持っているんですか？」

ライト「ああ、見てわからないか？ デンライジにこのカリバー……お前のデータは、記憶はお前がここに来るときにすべて拝見し、コピーさせてもらった。同じに決まっているだろう」

ラグ「やっぱり……同じ……」

ライト「だから……あきらめろ!!」

カリバー（心）「ロードエレメンタルセカンドカートリッジ、
「シエルカートリッジ」、スペシャルトロイス「ライトアクアホーリー
シエル」!!」

ライトのカリバーはシエルをロード、さらにスペシャルトロイスを
発動させ、カリバーに光をまとわせた。

ラグ「これって……」 ジェットサンダーカリバー「!？」

カリバー「違います、これは……」

ライト「いくぜ、第三のスペシャルトロイス”光水聖貝”!」

ライトは光と水、二つの力を含ませた衝撃波でラグを攻撃する。ラグは光が電気と似ていたので”ジェットサウンダーカリバー”と思ったのだろう。

光と水の衝撃波はまっすぐラグに向かっていく。そのスピードはなかなか速くラグが気づいたころにはすぐ目の前に来ていた。

ラグ「くっ……」

ラグが悔しかったそのとき

カリバー「リターンミラー」！！」

カリバーはアイスフォームだったことを利点に「反射」を発動、攻撃はアイスカリバーに直撃したもののそれを何とか跳ね返した。しかしライトはそれを軽々とよける。空中にいたので避けやすいのだ。

ライト「そうだったな……アイスで反射できるんだったな」

ラグ「あ、ありがとう」

カリバー「いいんですよ」

ラグはやさしい表情でカリバーに感謝を示す。しかしその表情はすくなく曇った。

ラグ「でも、あんなに強力な技があるんならもう手は・・・」

カリバー「手はありません」

カリバーの言葉に驚くラグ、そんな主の表情を理解してか否かカリバーは話を続けた。

カリバー「ライトの「セイントバースト」と「スペシャルトロイス」、あの二つは確かに強力です。今のあなたには無い能力でもあるのでかなり厄介です。しかもスペシャルトロイスには3つの技が登録されています。」

ラグ「やっぱり・・・」

カリバー「しかし」

ラグが新たな真相にがつくりと肩を落とす。しかしカリバーの声はまだあきらめていなかった。

カリバー「まだライトには弱点があります」

ラグ「弱点？僕と同じ力を持って・・・」

カリバー「それが弱点です」

ラグ「え？」

ラグは意外そうな表情を見せる。これまでプラスだと思っていたことがいきなりマイナスになるといふのだからそれも仕方ない。

カリバー「ラートはあくまで「ラグと同じ能力」を持っているんですよね？」

ラグ「そうだよ、これはどう考えても弱点じゃ・・・」

カリバー「いいえ、それが彼の最大で唯一の弱点です」

ラグ「どういふこと？」

果たしてカリバーの秘策とは？そしてラートを倒すことができるのか！？

第百十二話 自身を超える為の手段（後書き）

ラグ「これ・・・何か手段あるの？」

考えました。

ラグ「考えたって・・・」

あ、もちろんそれは秘密だからね

ラグ「うう・・・」

第百十三話 作り出す「新たな力」（前書き）

今回は・・・凄いよ！

ラグ「な、何が!？」

挿入歌との相性だよ。見ながら書いて読んだけど・・・意外に合ってる!!!

ラグ「自信作ってこと？」

今までのラグ冒で一番のバトルだと思うよ

ラグ「そんなレベル!?そしてそんな挿入歌は・・・」

「LEVEL5-judge11ight」です。「とある科学の超電磁砲」の第二オーブニングだね。<http://www.nicovideo.jp/watch/sm14069568>

ラグ「なるほど・・・では第百十三話、行ってみよー!!」

第百十三話 作り出す「新たな力」

「同じ能力」と「所持してない能力」を持つラートに勝てないと思
ったラグ。そんな彼に「まだ手はある」と伝えたのは彼の相棒、カ
リバーだった。

カリバー「あなたと同じ力」、これが最大で唯一の弱点です」

ラグ「カリバー、それは一体どういうこと？」

ラグはわけが分からず頭を傾げる。そんな主にカリバーは自分の策
を話し始めた。

カリバー「ラート、彼の能力はあなたと同じです。しかし彼はいつ
あなたの能力をコピーしたと言っていましたか？」

ラグ「えっと僕がこの世界・・・精神世界に入ったときに・・・っ
あ！」

カリバー「そうですね？あくまで「ここに来た時」ですよ？な
らば「ここに来た後」の力はコピー出来ないはずですよ」

カリバーの策にラグは大きく首を振り納得する。しかしそれもつか
の間、すぐにラグの表情は曇った。

ラグ「でも新技とか作るの？多分間に合わないよ？」

そう、いくらイメージして技を作ると言っても今までと大体の技ではライトもほぼ使えるので勝てない。つまりはライトも偽装的に同じ技が使えるのだ。それが大きな壁となってラグの前に立ちふさがった。しかし

カリバー「大丈夫です、「新たな技」ではありません。新たな「能力」を作ればいいんです」

ラグ「新しい能力!？」

カリバー「はい」

ラグ「それって余計に難しいよ？」

カリバー「いえ、出来ます」

それからカリバーは静かにラグに「新しい能力」を説明し、ラグは一瞬驚くが「そうだよね」といってライトを見る。

ライト「どうだ、作戦会議は終わったか？」

ラグ「うん、勝負はまだまだこれからだよ!」

ライト「これからか・・・安心しろ、もう終わらせる!」「光の剣雨」

「!

ライトの技発動と共にラグの頭上に光の剣が大量に発生した。

ラグ「またこれ!？」

カリバー「広域攻撃ですね」

ライト「いけ!」

ライトの指示で剣は一斉にラグに飛んでいく。

ラグ「(まだ諦めない・・・諦めたくない!!!)」

ラグはそう思いながらカリバーをギュツと握る。しかしその思いは虚しく“光の剣雨”は軌道を変えずにラグに向かっていき、そして爆発した。

ライト「・・・にしても凄い威力だな」

ライトは“光の剣雨”を放った場所を見ながらつぶやく。そこには巨大な煙が発生しており、その威力を物語っていた。

ライト「だがラグ、安心しろ。お前にもきつとこの技達が使えようになる」

ライトはまたつぶやくように言った。ライトの狙い、それはラグにこの「セイントカートリッジ」の能力を知ってもらうこと、だった。それをライトは体で覚えさせようとしたのだ。しかし

ライト「今回はもつと大事な「最後まで諦めない気持ち」ってのを手に入れた、これが一番か。んじゃ、アイツを助けに行くかな」

ライトがラグへと近づいた。するとラグのいる場所から放電が発生、ちょうど煙から放電するような形になった。

ライト「おい、これ・・・どうなってんだ？」

ライトはいきなりの事態に驚いてラグに近づくのをストップした。その瞬間強い風が吹き荒れ、煙は一気に吹き飛んだ。

ライト「くう、なんだ、これは・・・？」

ライトは飛ばされないように少し目を細めながら煙の吹き飛んだ場所、この風の発生源と思われる場所を見る。すると今度は中からバチバチッ！と音をたてて黄色い電撃が周囲に発生した。

ライト「これは・・・明らかにデンラージの電気、奴はまだ動けるのか」

ライトが少し厄介そうに言う。圧倒的に有利なはずのライトだったが彼の本能が油断を許さない。だがそれを抑えてライトは冷静に状況を判断する。

ライト「・・・とは言ってもラグの技は俺は全て使える。何よりスペシャルトロイスがあるんだ。理論上俺が負けることはない。負ける理由はない」

ライトは自分の勝利を自分の中で確実なものと念じる。こういう状況でいけないのは自分の力に自信をなくし、その力をフルで発揮できなくなること、そう知っているのだ。

もちろんこれは過信ではない、ただ単に「信じている」だけなのだ。ライトがそうしている間に煙は完全にはれ、中からはライトの予想した「ラグ」が来た。

ラグ「まだだよ・・・まだ終わってない」

ライト「そのようだな、なかなかしぶとい・・・だがどうやって“光の剣雨”を・・・」

ラグ「・・・」

ライト「敵に情報は公表できないってか・・・これなら・・・どうだ！！」

カリバー（心）「スペシャルトロイス「ホワイトホーリーフレア」」

ライトの掛け声とともにカリバーはもう一度スペシャルトロイス「聖龍炎」が発動、ラグに向かって行く。

ライト「さあ、どうする！」

ライトが得意げに言うがラグは目をつぶり、静かにカリバーを持ってない左手を前に出した。しかし何も起きずにただ「聖龍炎」はラグに激突し爆発、直撃したのだ。

ライト「（さっきの”光の剣雨”を防いだのはまぐれか？）どうした、もう終わりか？」

ライトが少しからかい口調で言う。「聖龍炎」は炎の高威力の大技くらえばいくら水タイプと言えどさっき落下した時のように大ダメージは避けられない。更にコントロールも可能という万能の技だ。それが直撃したのだからライトが少し安心し、からかい口調で言うのも無理はない。しかし

ライト「・・・何!?」

ブオンツ!と大きな音を立てて風が発生、けみりはすぐに吹き飛び、ライトの目に意外な後景が移った。その目に映ったものは「倒れたラグ」ではなく、「立っているラグ」だった。しかも体制はさつきと変わらない、変わっているのはただ目を開けているか、それだけだ。

ライト「バカな、完全に防いだのか!？」

ラグ「そうだよ、君のあの技・・・防がせてもらったよ」

ラグの言葉にライトはただ驚くしかできなかった。大量の広範囲攻撃、そしてこの大威力の攻撃、その二つをラグは「何らかの方法」で防いだのだ。

ライト「(くっ、ラグの技でこの二つを防げる技は数少ないはず・・・しかも両方なんて無理なはずだ)・・・へっ、これぐらいで俺が攻めるのをやめると思ったか!」光水聖貝”!!!」

ライトはすぐにカリバーを後ろに構えてエネルギーチャージ、そのまま振り切って衝撃波をラグに向かって放つ。だがラグはまた手を前に出してそれを防いだ。

ラグ「（この攻撃・・・さっきのよりも威力落ちてる？）」

カリバー「（その様です、恐らくはこの攻撃にあまり意識を集中させていない、つまり）」

ラグ「（この攻撃はオトリってこと！！）」

ラグはカリバーと精神で話してライトの狙いを予測した。すると

ライト「隙ありだああああ！！！！」

その瞬間ライトはラグの前に移動、そのままカリバーを振りかざしラグに攻撃しようとするが

ガキンツ！！

と音を立ててラグのカリバーに攻撃を防がれる。ライトはそれから2・3秒粘るが突破不可能と判断しはじいて一度離れる。

ライト「いい反射神経じゃねえか、それならこれはどうだ！」 聖龍炎”」

ライトの手に再度光と炎を融合させたエネルギー体が生成される。

しかも

ライト「ダブルだ!!」

そう、ライトは二つの”聖龍炎”を生成、ライトの両手には巨大なエネルギーが二つもそろったのだ。

ライト「こいつはかなり凄いぜ!かなりの威力、お前に防げるか!」

ラグ「やってみなくちゃ・・・分からないよ!!」

ライト「そうかい、じゃあ受けてみるか!この攻撃を!!」

ライトは炎に更にエネルギーを込めて威力を上げる。それに伴い炎は燃え上がり、また神々しさを放った。

ライト「いくぜ!”二連聖龍炎”!!」

ライトは右手と左手を振って炎をラグに向かわせる。二つとなったその技は勢いも迫力も2倍となりラグに襲い掛かる。

ライト「これならどうだ!!」

ライトは自信にあふれた表情をする。高威力の技をしかも二つ、これは防げないと思ったのだろう。しかしその予想は外れることとなった。

ライト「な・・・」

ライトは驚きで他に意識が回らない。浮遊しているのもカリバーがやっているからというぐらい意識がラグにいった。信じられなかったのだ。まさか「二つの大技が一つの技に消される」なんて思ってもいなかったから。

ライト「なんだ・・・そいつは・・・」

ライトの目撃したものの、それは「電気の球体」だった。

ラグ「第三のレジェンドコード・・・」サンダーボール”だよ「

ライト「”サンダーボール”・・・？そんな技・・・俺は記憶していない・・・」

カリバー「当然です、この技、いえ、能力はここで開花しましたから」

ライト「本当にここでさせたのか!？」

カリバー「はい、元々レジエンドコードはラグが登録できるもの、つまり自由に扱えるんです。そのタイミングはいつかは分からないの完全にランダムですが、ここでそのタイミングが来たんです」

カリバーの狙い、それはこれだったのだ。技の制作なら確かに少々時間が要する。以前なのは達の世界で技を作った時はすでに”ブルズマスラッシャー”という元となる技があり、それをアレンジして技を作った。しかし今回はそのようなことをすればライトも「原型的技」は持っているので偽装的にその技が使えてしまう、そこでこのレジエンドコードに目をつけたのだ。

ライト「だがその技、見たところ防御専門だろ?それならこちらにも勝機が・・・」

ラグ「確かに、この技は「攻撃ではない」よ。当たれば爆発しているのはあるけどそのダメージは小さいしね、でもね、これは「防御」じゃないんだ」

ライト「何?」

ライトが目を細めて問う。もちろんラグは答えなかったがライトにはその言葉の意味がすぐに分かった。

ライト「な、なんだこれは!？」

突然浮遊しているラートの周りを3つの”サンダーボール”が取り囲む、するとラートは身動きが取れなくなったのだ。

ラグ「”サンダーボール”は最大3つまで生成できる技、その能力はある程度の技を防御する”サンダーガード”と取り囲んでの相手の動きを封じる”デルタロック”があるんだ」

ラート「（なるほどな・・・）だが、俺を封じてどうする？攻撃しないと勝てないぞ」

ラグ「もちろん分かってるよ」

ラグはそういってカリバーを右手で持って前に出す。するとカリバーの変化が起きた。

カリバー「サードアビリティ、”インクリネーションフォーム”！」

ラート「サード！？インクリネーション！？」

分からない単語に混乱するラート。そしてカリバーは光を放ち変形していく。その姿は・・・

ライト「・・・弓!?!」

そう、カリバーは「剣」から「弓」へと形状を変えたのだ。

カリバー「これが・・・あなたの考えた「第三のセイントカートリッジ能力」ですか?」

ラグ「うん、今目の前にいる「僕」を超えて、これから出てくる「闇」を貫く正義の弓、それがこのインクリネーションだよ」

カリバー「そうですか・・・では、まいりましょう」

ラグ「うん!!」

カリバー「ロードカートリッジ!!」

カリバーは2つから1つとなったカートリッジを3発ロード、インクリネーションに雷撃が集結した。

ラグ「それじゃあ・・・いくよ」

ラグは自身のエネルギーで弦と矢を生成、そのままつがえて顔だけをライトに向ける。そして矢をつがえた弓を上げて左に持っていき、そのまま大きく引いた。

ラグ「（ありがとう、ライト。僕に大切なことを教えてくれて・・・これで・・・終わりだー!!）」

カリバー「聖光雷弓矢”!!!!!!”」

カリバーが技名を宣言するとともにラグは弦を離す。すると矢はまっすぐにライトへと風を切って飛んでいった。しかも

カリバー「ここで”サンダーボール”の第三の能力発動です」

ラグ「電気を使った攻撃の時にそのエネルギーとなり、技の威力が上がる”サンダーアシスタンス”だよ、これで・・・”聖光雷弓矢”の威力はもっと上がる!!!」

ライト「そうか・・・お前はここまで・・・強くなっただんな・・・

」

ラグ引き終わったラグが第三の能力”サンダーアシスタンス”について説明する。それを聞いてラートはラグのここでの急成長を確認し、ほほ笑んだ。そして”聖光雷弓矢”はラートに直撃、その高威力の技に煙が発生したがラートはすぐに落下した。

ラグ「ラート!!!」

ラグは急いで”ライトニングウイング”を発動、勢いよくラートの落下地点に飛んでいき、ギリギリでラートをキャッチした。

ラグ「ふう、危なかったあゝ」

カリバー「なんとかセーフですね」

ラグ「うん」

インクリネイションとなったカリバーの言葉に返事をした後、ラグは静かにほほ笑んだラートに感謝した。これがラグとその相棒が「己」を超えた瞬間だった。

第百十三話 作り出す「新たな力」（後書き）

というわけでした！

ラグ「今回は二つも新技・・・じゃなかった能力がでたね」

別に技で良いんだけど（笑）そうだね”サンダーボール”とインクリネーションが初登場です

ラグ「”サンダーボール”って・・・ネーミングが単純じゃない？」

レジェンドコードの技に単純な奴を入れたかったの！！でも強いでしょう？

ラグ「そりゃね、チートにならないか心配なくらい」

それは大丈夫させないから

ラグ「あとはインクリネーションだけど・・・」

はい、僕が弓道部なんで登場させました（笑）

ラグ「僕が引くときに上げて、左に・・・ってあつたけどあれって実際の弓道じゃない？」

そつだよ。弓を構えて体は動かさず対象を見る、そして弓を上にあげて右ひじをなるべく動かさないように、左の腕はまっすぐにしながら左に持つてくる。あとは下に降ろすと同時に大きく引く。これでおなじみの体制になるんだよ

ラグ「あとは右手で弦を引っ張ってるからそれを勢いよくはじいて
矢が飛んでいく、ってわけだね」

そういってー！

第百十四話 ラートの言葉（前書き）

皆さん、お久しぶりです。九州大会に行つてたんで更新できず（といふより執筆自体ができてませんでした）遅くなって水ませんでした。

さて、今回はラグがラートを倒した後ですね

ラグ「まだ闘う・・・とかないよね？」

・・・さあ？

ラグ「・・・（汗）」

第百十四話 ラートの言葉

ラートとの激戦を「新しい力を得る」ことでなんとか突破したラグ。
”サンダーボール”、インクリネイションと二つも大きく力を消費する能力を使用したことで疲れていた。

ラグ「ごめんね、ラート……」

ラグは少し申し訳なさそうに言う。ラート、ラグの心である彼との戦いは凄まじかった。同じ能力、そして持っていない能力を所持しているラートは絶対的にラグの上位、ラグの上だった。しかし覆したのは「ラグの潜在の能力」だ。

ラグ「あの時……僕はどうやって……」

ラグ「”サンダーボール”を出したんだろう？」

そう、ラグ自身、あの時”サンダーボール”が発動するなんて思っ

でもなかったのだ。いうなればあれは「まぐれ」、ラグの力があ
場で「たまたま」出ただけなのだ。

ラグ「これじゃあ本当に勝ったとはいえないよね」

ラグは静かにつぶやいた。彼の「自信がない」という性格は昔から
だ。今回のように成功しても自信は持てない、自己暗示で「自分
できる」と念じてもそれは念じているときだけ、終わればそれはな
かったことになる。

ラグ「だって今回はまぐれ……」

ライト「じゃねえよ」

ラグ「？」

ラグは少し驚きライトを見る。するとライトはもつすでに目を開け
ていた。

ラグ「あ、気がついた？」

ライト「気がついた？じゃねえよ。まさかお前、今回の勝利はまぐ
れだと本気で思ってたのか？」

ラグ「うん……」

ライト「なら間違いだ」

ラゲ「えっ？」

ライト「お前は今回俺に勝った。絶対勝てない状況で勝ったんだ。その勝因はわかるか？」

ラゲ「サンダーボール」とインクリネイションの発動だよね？でもあれは・・・」

ライト「まぐれ・・・ってか？」

ラゲ「うん」

ライト「じゃあ聞くがなんでそのまぐれが起きた？」

ラゲ「それはたまたま・・・」

ライト「そうかもな、けどな、お前にはあの時あっただろう」

「負けたくない」って気持ちだ」

ラゲ「うん、あったよ」

ライト「それだ、それがお前に奇跡を起こしたんだ」

ラグ「奇跡・・・」

ラート「そうだ、お前は「奇跡」を起こした。その起きた原因はお前の「気持ち」の強さだ」

ラグ「そうかなあ」

ラート「そうなんだよ」

ラグの「どうなんだろう」という表情にラートは少し微笑んだ。「ラグの心」、だからこそ怪しむラグの気持ちはわかるのだろう。それでも彼はこれが本当のことだから話すのだ。

ラート「それで、これからどうするんだ？」

ラグ「うーん、とりあえず戻ろうと思うけど・・・これってどれくらい経ってるの?」

ラート「そうだな、ざっと1年ぐらいだ」

ラグ「1年!?!」

ラグはラートの発言に驚いた。レジロックからは「結構早く終わると聞いていたので驚くのも無理ない。

ラグ「どうしよう、1年って・・・そんなに・・・みんな大丈夫か

なあ・・・」

オロオロするラグ、そんな彼を見てライトは少しずつ笑い始めた。

ラグ「・・・ライト？」

ライト「嘘だよ嘘、本当は2・3日経ってるだけだ」

ラグ「ええ！？ひどいよー!!」

ライト「ごめんごめん」

ポカポカとラグはライトを叩く、しかしこんなおふざけの中でもライトはしっかり確認していた。

ライト「（お前はそんなに思える仲間を持ったんだな、これなら安心だ）ラグ、ちょっといいか」

ラグ「ん？」

ポカポカ叩くのをやめてラグがライトを見る。その目は優しさにあふれているが、どこかしっかりとした目だ。

ライト「お前はここで新たな力を得た。これはお前にとってとても

意味のあることだ」

ラグ「そうだね、”サンダーボール”もインクリネイションも今までになかった技だからね」

ライト「だがお前は完璧じゃない、無敵でもなければ最強でもない、それはわかるな？」

ラグ「うん、僕はそんな強さは持ってない、わかるよ。でもね

「みんな」がいればがんばれるんだ」

その時ラグは自信にあふれた表情をした。仲間には誇りを持っていないけれど出てこない自信だ。

ライト「そうか、お前のその力は「仲間の協力」があって初めて本当に強い力となる」

ラグ「つまり仲間を大切に・・・ってことでしょ？」

ライト「そういうことだ」

ライトはやさしく微笑む、「こいつはもう、大切なことをわかってる」、そう判断したからだろう。その時、ラグに異変が起きた。

ラグ「あれ・・・体が・・・」

ラグの体は光り、少しずつ粒子のようになっていた。

ラグ「これは・・・」

ライト「もう帰る時間らしいな」

ラグ「この精神世界から？」

ライト「そうだ」

ライトははつきりというがラグはどこか少しさびしそうにいう。声のトーン、表情からそれは分かるだろう。

ライト「安心しろ、俺はお前の心だ。いつでもお前と一緒にだ」

ラグ「うん・・・そうだよね」

ラグの目から少しずつ涙が出てくる。自然と顔をしたに下げ、それを隠す。そんなラグを見てライトはラグに近づいた。

ライト「悲しむことはないだろう？俺は一緒にいるんだ。一生離れるわけじゃない」

ラグ「・・・うん、そう、そうんだけど・・・」

それでもラグの涙は止まらない。ここで得たこと、それはとても大きい。それを体を張って教えてくれた「ライト」に感謝している、その証拠に涙が止まらないのだ。

ライト「今度、また来い」

ラグ「・・・えっ？」

ライト「またこの精神世界に來い。その時また相手してやる。その時何かが得られるかわからないがな」

ラグ「・・・うん」

ライト「約束だぞ？今度は俺も”サンダーボール”、インクリネーションを使って戦ってやるからな」

ラグ「・・・うん、僕も・・・僕も負けないよ！..」

ラグが目を輝かせてライトに言う。まだ目に涙は残っているがそれでも笑顔だった。

ライト「それでこそお前だ」

それから数分後、ラグの戻る準備が完了し、ついに別れのとぎが来た。

ライト「さあ、これでOKだ」

ラグ「うん」

ライト「なんだ、まだしよげてるのか？」

ラグ「違うよ、僕はいつもどおり元気だよ！」

ライト「そうか、なら良い。それじゃあいくぞ」

ライトが言うとラグの体はさらに光りさらに粒子となっていく。

ラグ「ありがとう、ライト！元気でね！！」

ライト「当たり前だ！お前こそ元気でな！！」

ラグ「うん！それじゃあ・・・またね！！」

ラグが言い終わるとラグは消えた。ラグは精神世界から現実世界に

戻ったのだ。

ライト「「またね」・・・か。そうだな、またね・・・だな！」

アクア「ねえ、レジロックさん、ラグちゃんいつ戻ってくるの？」

レジロック「さあな、それはこいつしじだ。こいつが自分とさつさと話を済ませてればもう戻ってきてるだろうから・・・」

アクア「戦ってるのかな？」

レジロック「恐らくな」

アクアの苦笑いの言葉にレジロックも苦笑いで答える。彼に表情はないが声のトーンでそれは分かる。その時、突然ラグの体が光った。

アクア「な、何これ!？」

レジロック「戻った証だ。ラグが精神世界から戻ったぞ」

レジロックがそうだった瞬間、ドアが「バンッ！」と開いて、サンダースたちが出てきた。

サンダース「ラグが帰ってきたって!?!」

キノガッサ「どこだどこだ!?!」

キノ「ラグさん!?!」

ポリズ「ラグ!?!」

ハスボー「ラグ!?!」

タチマル「ししよー!?!」

「絆」のメンバーたちが次々に部屋に入ってくる。ラグの帰りを心待ちにしていたのだろう。

アクア「ラグちゃん」

アクアはラグをじっと見つめる。するとラグの目が「パチッ」と開いた。

ラグ「アクア……それにみんな……」

アクア「ラグちゃん・・・お帰り！」

アクアがうれしそうに言う。後ろにいたメンバーも「お帰り！」と声を合わせていった。

ラグ「みんな・・・うん！ただいま！！」

ラグは笑顔で返事をした。

そのときだった。

ピーー、ピーー・・・

サイレンが鳴った。

アクア「これって何のサイレン？」

レジロック「どうやら誰かが暴れているらしいな」

サンダース「うわさのやつか!？」

レジロック「分らん、だが住民に被害が出るかもしれん」

ラグ「それじゃあ・・・行こう!!」

ラグの力強い言葉にみんなが「おお!!」と返事した。
そしてラグたちチーム「絆」は現場へと向かった。

第百十四話 リートの言葉（後書き）

というわけでようやく事件発生です。

ラグ「暴れてるポケモン・・・強い？」

・・・さあ？

ラグ「前書きと同じくだりだよ、それ」

だってネタバレはダメじゃん？

ラグ「まあ確かにね」

ということとでここであえて相手は言いません。

次回発覚します。

第百十五話 リベンジ?つまり再戦! (前書き)

お久しぶりの更新です。

ラグ「遅いよ」

仕方ない。理由は更新予定のミルクィの前書きでします

ラグ「ところで今回闘う相手って?」

君が一度はあったことあるよ

ラグ「?」

第百十五話 リベンジ？つまり再戦！

ポケモンが暴れているということで現場に駆けつけたラグ達チーム「絆」。そこではあるポケモンが確かに暴れていた。

ラグ「暴れてるポケモンって・・・あの人かな？」

アクア「うん・・・多分だけど」

ラグとアクアが啞然としながらあるポケモンを見つめる。それは・

エテボース「よし、今度はあの家だ。やれ！」

エイパム「はい、“スピードスター”」

エテボースの指示でエイパムが“スピードスター”を放つ。それは少し離れた民間にとんでいくが途中で突然現れた「鉄の龍」に防がれた

エテボース「なんだあれは!？」

エイパム「わかりませうん、でも……アイツらはいますよ」

エイパムが独特の口調で後ろを見る。そこには「ラグラージ」と「ヘンテコな剣」があった。

ラグ「君たち……久しぶりだね」

エテボース「お前は……」

エテボースが驚きの表情でラグを見る。しかし

エテボース「……誰だ？」

ラグ「ええ、覚えてないの!？」

エテボース「ああ、すまない。さっぱり記憶に……」

アクア「ラグちゃんどう?あの人達は……」

エテボース「ああ!！」

アクアがラグに近づき話しかける。するとエテボースは突然大声をあげた。

アクア「な、何・・・急に・・・」

エテボース「思い出したぞ、以前我々をじゃました奴だな」

エテボースは眉をひそめて言う。よほど嫌な思い出なのだろう。しかしこの事実には一人だけ、悲しむ人がいた。

ラグ「うう、僕は弱いから覚えられてないんだ・・・」

ラグだ。少し離れた場所で体育座りで落ち込んでいた。

ラグ「・・・ってこんなことしてる場合じゃなかった！街の人に攻撃するって、どういうことなの!？」

ラグは切り替えてエテボースに質問する。するとエテボースは腕組みをし、ニヤッと笑った。

エテボース「この街をムチャクチャにしてくれ」って依頼されてな、それを実行していたところだ」

アクア「そんな依頼・・・受けたんだ」

エテボース「ああ、俺らは「組織」となったからな。仲間も増えた」

ラグ「仲間？」

エテボース「変だとは思わないのか、サンダーズ達がこないことを」

アクア「・・・まさか・・・」

エテボース「今頃は俺の仲間と戦っているだろうな。しばらくは来ないはずだ」

エイパム「そういう・・・こと!」

エイパムは“スピードスター”で攻撃してくる。それは真っ直ぐにアクアに向かってきた

アクア「うわっ!?!」

ラグ「アクア!?!ハックドラゴン!?!」

ラグは先ほど“スピードスター”を防いだハックドラゴンに指示しアクアの前に立たせる。すると“スピードスター”はハックドラゴンにあたるが貫けず消滅していった。

エテボース「なんだ、あのドラゴンは？」

エイパム「わっかりませ〜ん！でもけっこうつよいですよ〜？」

エテボース「そうだな、俺も手伝おう」

エイパムだけでは倒せないと判断したのかエテボースが腕組みをしながら前に出てきた。

エテボース「（まあ実際は余裕だと思うがな）一気に行くぞ」

エイパム「は〜い」

エテボースの言葉にエイパムが返事をし、二人は尻尾にエネルギーをためる。

ラグ「アクア、この戦いは僕が一人でやってもいいかな？」

アクア「いいけど・・・大丈夫？」

ラグ「大丈夫だよ、あの人たちに見せたいんだ。僕が「どれぐらい強くなったか」を！」

アクア「・・・うん、分かった！！がんばってね！！」

ラグ「うん！！」

そういいながらラグもまた一步前にでる。その瞬間ハツクドラゴンは消え、地面へと解ける。すると何かラグに呼び掛けた。メタルからウォーターへと変わったカリバーだ。

カリバー「今回の相手は彼らですか・・・？」

ラグ「うん、僕が君と出会う前に戦ったんだ」

カリバー「・・・結果は？」

ラグ「みんなが攻撃して倒しちゃったから僕は何も・・・だからここでそのリベンジするんだ」

カリバー「まあそれがリベンジといえるかどうかは怪しいですが・・・いきましよう、「成長した」あなたの姿を見せに」

ラグ「うん」

そう言うとラグはデンラージとなり電気を発する。その電気に一番驚いた人物、それはエテポースたちだった。

エテポース「なぜやつはラグラージなのに電気を発しているんだ！？」

エイパム「大丈夫ですよ、倒せばいいのは変わらないんですから」

エテポース「・・・そうだな、ではいくぞ」

エテボースの宣言とともにバトルは始まった。最初に先手を仕掛けたのはエテボース達だった。

エテボース「スピードスター」!

エテボースは星のエネルギー弾を5つ作りラグに放つ。迫りくるエネルギー弾、それに対してラグも動いた。

ラグ「カリバー、メタル!!」

カリバー「ロードエレメンタルカートリッジ「メタルカリバー」、リペルト「クリエイトモード」!!」

ラグ「これで!!」

ラグはメタルとなったカリバーを地面に刺す。するとカリバーの中心にあるクリスタルが光り土を分解をした。

カリバー「リゾーヴ、&・・・」

ラグ「クリエイト!!」

ラグがそう言うのと分解した土は再び構築される。それは壁の形となりラグの前に現れた。先ほどの”スピードスター”は全弾壁にぶつかり消滅した。

エテボース「まだまだ、エイパム!!」

エイパム「きあいパンチ”」

エイパムはラグの背後に回り、自身の尾にエネルギーを溜めてラグを殴ろうとする。

ラグ「今度はそっち!？」

カリバー「サンダーボール”!」

カリバーがエイパムの存在に気づき”サンダーボール”を発動、エイパムの前に電気の球が現れその攻撃を防ぐ。さらに

カリバー「ここで爆発です」

エイパム「!？」

カリバーの宣言どおり爆発、それに巻き込まれてエイパムはダメージを受けてエテボースのほうに飛ばされる。”サンダーボール”、

それは前回ラグが発言したとおり触れれば爆発を起こす技、エイパムは”きあいパンチ”の際に勢いをつけていたため”サンダーボール”をよけることが出来ず、その影響で爆発したようだ。

エイパム「ボス、あの球いきなり爆発しました」

エテボース「それがあの技の特徴なんだろうよ。なあに、離れて戦えばいいだけだ」

エイパム「なあるほど」

納得したエイパムがエテボースの元へと向かった。そして着くとエテボースとは反対側に飛ばされたラグが口を開いた。

ラグ「それも無駄だよ」

エテボース「何!?!」

ラグの言葉にエテボースは疑問を持つ。離れて戦えば”スピードスター”を持つエテボースたちが有利、そう思った、しかしラグは無駄といった。不利なはずなのに。だから疑問を持ったのだ。

ラグ「スピードスター”で勝てると思ったらしいけど、無駄だよ」

エテボース「なんだ強がりか?お前には遠距離攻撃がない、つまり

離れていればお前から攻撃を食らうことはないんだ」

ラグ「それが間違いなんだってば……」

カリバー「ソードアビリティ「インクリネイション」!!」

ラグはそういいながらカリバーを前に構える。するとカリバーは自身の姿を変化させた。正義の弓「インクリネイション」だ。

エテボース「おい、あいつのあれなんだよ!？」

エイパム「わかりませうん」

焦るエテボースの横でのんきにエイパムが答えた。

エテボース「(弓ってことは遠距離攻撃だろ……?だとしたらやつも遠距離攻撃を使えるってこと……)エイパム、逃げるぞ」

エイパム「はーい……って、およ?」

エテボース「な、なんだこのしびれは!？」

エテボースたちが感じたしびれ、それは”サンダーボール”によって発生した電気が起こしたものだっ

ラグ「デルタロック」、拘束する技だよ。これで君は動けない」

エテボース「く、くそお!!」

カリバー「終わりです」

インクリネイションに周囲の電気が集まる、エネルギーを溜めていくようにパチパチという音が絶えない。電気独特の音だ。そんな音の中でラグは弓を順序どおりに引いた。

カリバー「聖光雷弓矢」!!」

ラグはカリバーの技名宣言と同時に矢を放つ。矢はまっすぐエテボースたちに飛んで行った。電気を帯びたそれはまさしく「雷いかづちの矢」でありエテボース達がしゃべることなくエテボース達に激突した。

ラグ「よし!!」

ラグはカリバーをおろしてそう言った。カリバーもブレードへと戻りエネルギーを使ったことで発生した機内の熱を「プシュー」と煙と一緒に排出した。

ラグ「あ、でも……やりすぎ……じゃないよね?」

カリバー「はい、彼らは多分頑丈です。問題ないでしょう」

ラグ「あはは・・・」

カリバーの言葉にラグは苦笑いした。この勝負、ラグたちの圧勝である。

第百十五話 リベンジ？つまり再戦！（後書き）

ラグ「エイパムとエテポースだったんだ」

YES、誰に戦ってもらおうか迷いまいたがたまたま目についたんで再登場してもらいました

ラグ「でも結局逃げちゃったね」

まあそれは仕方ない。素早さが取り柄だからね

第一百十六話 対面！レオル（前書き）

さあ、今回は新キャラの登場だ！！

ラグ「新キャラ・・・まさか主人公的な！？」

それほど重要かは・・・分かりませんな（笑）

第一百十六話 対面！レオル

エテポース達との戦いから1日、ラグたちはレジロックの家で朝ごはんを食べていた。ご飯におかずがいくつか、そして味噌汁、和風の朝ごはん。

キノガッサ「それでよ、結構な数のやつらが来たが・・・俺のダイナミックな技たちでぶっ飛ばしてやったんだ！！」

キノガッサが自慢げに語る。どうやら昨日の戦いのことからしく本人は活躍を熱く語っていた。少々話が大きすぎる気もするがみんな「はぁ・・・」といった感じで見事にスルーしている。

キノガッサ「ラグやアクアにも見せたかったぜ、俺の強さを！あゝバトルしてえな」

レジロック「ならするか？」

キノガッサ「ん？何をだよ？」

レジロック「バトルだ、バトル」

キノガッサ「何ー！？バトル、バトルできんのか！？」

驚いて聞くキノガツサにレジロックはうなずいた。

レジロック「今ちょうどこのステープに「お前達以外の」ダークの活動を旅して調べているチームがある。そいつらとバトルするとい
い」

キノ「私達以外にも・・・旅をしている人がいるんですね」

レジアイス「はい、あなた方は「ルマーテ」の選抜メンバー、他の街それぞれに「その街の代表チーム」があるんです」

レジスチル「まあどこも主軸の一人がいてその仲間と一緒に旅をするって感じだけだな。あのチームを除いては・・・」

ハスボー「あのチーム？」

レジスチルの言葉にハスボーが反応し言葉を繰り返す。

レジアイス「あ、お気になさらず。とにかく今現在「フォルターナ」のチームさんがきていらっしやいます」

レジロック「恐らくは近くの空き地でバトルでもしているだろう。行ってみればバトルも出来るかもしれない」

キノガツサ「そっか、それじゃあ行ってみようぜ」

ラグ「あ、待ってよ」

キノガッサはそういつと走って家から出て行く。それに絆もついて行った。

レジアイス「・・・もう、スチル、気をつけてくださいよ？危うく知られるとこでしたよ」

レジスチル「すまねえ。だがいまだに思うんだが教えてもいいんじゃないか？あのチームのこと」

レジロック「ダメだ、まだ早すぎる。あいつらには知ってもらってはいかん」

レジアイス「そうです、特にラグって子には。だってまさか

自分たちが「ランキングNo1」のチームに狙われているなんて・・・」

キノガッサ「はあ、はあ、このあたりか？バトルできる奴がいるいは」

急いで走ってきたキノガッサが空き地を見ながら言った。

ポリズ「そうですね、この街で空き地はこのあたりしかないはずですが……」

ハスボー「誰もいないよ？」

ハスボーの言うとおりあたりを見渡しても人影はなく、ただ空き地があるだけ、バトルは出来そうだが問題の相手はいなかった。

キノガッサ「なんだよ、レジロックのガセネタかよ」

アクア「まあまあ」

ラグ「……!？」

アクアがキノガッサをなだめているとラグは何かを感じアクアの前に立ちカリバーを出す。そして攻撃を防ぐ体制に入った。

アクア「どうしたのラグちゃん……!？」

アクアがラグに話す瞬間に

カキンッ!

という音が発生、明らかにカリバーに何かが当たった音だった。

サンダース「今のは攻撃か!」

キノ「そのようですね、いったいどこから・・・」

???「俺の攻撃を防ぐとな、やるじゃないか」

ラグ達の来た道、ラグ達の背後から何者かの声がした。

ラグ「君は・・・誰?」

???「俺か?俺は見てのとおりリザードンだけど?」

ラグ「・・・名前は?」

???「レオル、レオルって名前だ。そういうお前は・・・ラグ
ージのラグ・・・だっかたか?」

ラグ「なんで僕の名前を・・・」

レオルというリザードンは「へへっ」と言った得意げな表情をする。
そんな彼にラグは質問するとさっきとは一変し「はあ」とため息を

ついた表情をした。

レオル「そりゃ知ってるだろ。俺達の敵である「ダーク」の幹部を倒したチーム「絆」のリーダーにして伝説のデンラージになれる存在・・・噂じゃいくつかの異世界の住人との交流もあるっていうミラクルラグラージ、そいつを俺達「フレア」が知らないわけないだろう?」

ラグ「フレア・・・?」

レオル「ああ、俺のチームの名前だ。メンバーは3人だがな」

キノガッサ「おい、ちょっと待てよ」

レオル「なんだ?」

キノガッサが二人の会話に割り込むように話す。

キノガッサ「旅は7人以上いないと出来ない、お前そのルール知らないのか?」

レオル「知ってるさ、だがそれはあくまで「ルマーテ」のルールだろう?俺達の出身地「フォルターナー」ではそんなルールない、もちろん条件はあるがな」

キノガッサ「な、フォルターナーのルールだと!?!」

意外な真相にキノガツサは驚きを隠せない。そんな彼にポリズが解説をした。

ポリズ「各地域で旅等に関するルールは存在しますがそのルールはすべて同じではないんです。ですからルマーテでは7人以上がルールでもフォルターナーでは違うんです」

キノガツサ「じゃあそのフォルターナーのルールってなんだよ」

ポリズ「確か・・・」チーム全体のレベルが18以上」だったと思います」

キノガツサ「レベル？」

レオル「フォルターナーではすべての住人に「レベル」が存在する。まあこれはある決まった時期に行われる試験時に決まるわけだが、そのレベルの合計が18以上なら旅に出れるんだ」

そう、フォルターナーではある決まった期間に希望する住人が試験を受けることが出来る。（試験はレベル1なら1のテスト、2なら2のテスト・・・という風にそのレベルの試験が用意されており、現在では12まで設けられている）そうして各自のレベルが設定され、チームのメンバーの合計レベルが18以上なら旅に出てもよいことになっているのだ。

レオル「俺が7、あとのメンバーが6と6、これで足せば19、だ

から旅に出ているわけだ」

キノガッサ「なるほどな」

レオルの説明にキノガッサが納得する。彼の頭でもしっかりと理解できたようだ。

レオル「それで、お前らはここに何しにきたんだ？」

キノガッサ「そうだった、レオル、俺と勝負しろ！」

レオル「勝負？バトルか？」

キノガッサ「そうだ!!」

レオル「うん・・・今はやめておこう」

キノガッサ「はあ!？」

レオルの返答にキノガッサは思わず叫んだ。

キノガッサ「今忙しいのか？」

レオル「そういうわけじゃない」

キノガッサ「じゃあ・・・」

レオル「お前ら絆とは別の機会に戦いたい、ということだ」

キノガッサ「・・・」

レオルは無表情でそう言った。それに対してキノガッサは黙ってしまった。あたりがしばらく沈黙に包まれる。そんな空気を破ったのはレオルだった

レオル「悪いな、だが名前は覚えておく、キノガッサ・・・ってな」

キノガッサ「ああ、もちろんだ、俺も覚えておくぜ、レオル」

お互いに「ニツ」と笑い握手する。わずかな時間ながらお互いが強いか弱いか判断し、対等と思った結果だろう。

レオル「じゃあな」

キノガッサ「ああ」

レオルはそのまま飛んでいく、行先は分からないが恐らくこの街からは出ないのだろう。

ラゲ「それでどうするの、キノガッサ？」

キノガッサ「何がだ？」

アクア「キノガッサがバトルしたいって言ってたからそのことだよ」

キノガッサ「そうだな・・・とりあえずレジロックの家に行くか」

ポリZ「バトルはいいんですか？」

キノガッサ「ああ、あいつはここで戦うよつなやつじゃないからな」

キノガッサは空を見て言った。

第一百十六話 対面！レオル（後書き）

ということでした。

キノガッサ「ホントに対面じゃねえか！」

そだよ、まだ闘いませんよ

キノガッサ「マジかよ……んで、これからはっ。」

それは次回のお楽しみ！！

第一百七十七話 新たなる情報！次なる場所は？（前書き）

今回でステープともお別れです！！

ラグ「長かったような短かったような・・・」

君は精神世界に行ってたからね、ではスタートです！！

第一百七十七話 新たな情報！次なる場所は？

リザードンの「レオル」と出会ったもののバトルをせずに終わったチーム絆、そんな彼らはレジロックの家に戻っていた。

レジロック「何、バトルはしなかったのか？」

ラグ「うん、レオルって人もキノガッサもなんでかバトルしないで意見でまとまっちゃって」

レジロック「そうか・・・キノガッサ、なぜバトルしなかったんだ？」

そう言いながらレジロックはみかんを食べるキノガッサを見た。

キノガッサ「あいつや俺の実力ならあの場で戦えば周りに被害が出る。そんなんはダメだろ？だから止めたんだ」

レジロック「そうか」

キノガッサ「もちろん大会で会ったら闘うがな、ま、俺が勝つがな」

キノガッサが「ニカツ」と笑顔で言う。勝つ自信はあるのだろう。そんないつも通りのキノガッサを見てメンバーは全員ほほ笑む

レジロック「ところでこれからどうするんだ？」

ポリズ「何も情報はありませんからとりあえず「ウィルード」にでも行こうかと」

レジロック「ウィルード・・・氷の街だな」

レジアイス「はい、年中氷に覆われた平均気温5°の街です」

ハスポー「なんか寒そうだね・・・」

ハスポーが想像したのか寒そうな動作をしながらコメントする。

実際ハスポーのような水タイプのポケモンは氷技に強い（水単体で考えた場合）。しかし寒いのが大丈夫かと言えば別、寒さや暑さに関してではタイプではなく個人で違うのだ。

レジロック「なあラグ、ガラタンクという街に行ってみないか？」

ラグ「ガラタンク？」

レジロック「ああ」

ポリズ「ガラタンク・・・鉄の街ですね、この地方で最大の鉄の生産数を誇る・・・」

レジロック「よく知っているな、実はな、あの街である問題が起きているんだ」

サンダース「問題？」

サンダースが聞き返す。レジロックの言葉にメンバーは全員反応したようだ

レジロック「なんでも国にいきなり王女が現れて問題になっているんだ」

アクア「王女様が？」

キノ「今まではいなかったんですか？」

レジアイス「いなかったんです。実はその方はインルーラの王女なんです」

タチマル「ええ！？なんでインルーラの王女様が・・・？」

レジスチル「それが分からないんだ、なんでも突然現れたとか・・・」

レジスチルも困ったような声で言った。実際いくらレジ系と言えど他街の

ことを全て把握しているわけではない。他街のこともしっかり知っているのはこの地方でもミュウぐらいなものだろう

アクア「ねえお兄ちゃん、インルーラに王女様なんていた？」

サンダース「いや、インルーラは王国制じゃない。街人の意見でなくても決めるようになってる。だから王女なんているはずがない」

サンダースは王女に関していないと言った。確かに今のインルーラは王国制ではなく街人制、住んでいる者が色々なルールを決めるようになってるのだ。

ハスポー「じゃあなんでわざわざインルーラの王女様がガラタンクに？」

ラグ「・・・旅行とか？」

アクア「いやそれはないと思うよ！」

ラグのおバカな発言にすかさずアクアが突っ込む。少しでもラグに関わりたい彼女の気持ち故にとった行動だろう。ある意味お似合いの二人である。

ポリズ「まあ冗談は置いて、気になりますね、それ」

サンダース「ああ、何故王女が連れ込まれたのか・・・」

キノガッサ「それじゃさ、行くこうぜ、そのガラタンクってとこによ」

キノ「それが一番ですね、どういふ状況かも分かるかもしれないで

すし」

キノガツサの提案にキノ、そしてメンバー全員が納得する。

キノガツサ「あ、でもさ、ここからガラタンクってどうやって行くんだ？」

ポリズ「たしかこのステープからは少し遠かったですね、数日ぐらいでしょうか……」

キノガツサ「そんなに歩くのか!？」

キノガツサは驚くとともにがっかりする。行く分には構わないが遠すぎると感じたようだ。しかし

レジロック「その心配はない、ある装置があるこっちにきてくれ」

レジロックがそう言いながら別の部屋へと移動する。それにラグたちもついていった。そしてその先で見たのは

ラグ「うわ〜おっきい」

アクア「ホント、数十メートルはある……」

ラグたちよりももっと大きな機械だった。真ん中にホールがあり、周りにはなにやら難しそうな装置がたくさんある。恐らく最新鋭の設備なのだろう

ポリズ「これは・・・すごく質のいい装置ですね」

レジアイス「ダーク化対策本部からの支給品です」

レジスチル「そしてこれは転送装置、これでお前らをガラタンクまで送るんだ」

キノ「なるほど転送装置ですか」

サンダース「でもなんで対策本部からの支給品なんだ？」

レジルチル「そりゃ俺らが対策部だからだ」

ラグ「ええ!？」

レジスチルの言葉にラグは驚く。声には出さないもののメンバーは全員驚いているようで表情が通常とは違った。

ラグ「ということはガラティナと同じ?」

レジアイス「そういうことです」

レジロック「そしてこの装置では基本的に対策部メンバーしか転送が許されていない」

タチマル「え、それじゃあオイラ達は無理じゃないですか？」

タチマルがもつともな事を言う。しかしレジロックは平然と答えた。

レジロック「何故だ？お前らも対策部じゃないか」

タチマル「え・・・？」

キノガッサ「俺らが対策部だと？」

レジロック「ああ、だってお前らダーク化対策部ルマーテの代表だろ？」

レジロックは「何を言っているんだ？」という顔で言う。確かにラグたちがこれまで行ってきたことはダーク化対策部の仕事ではある。しかし本人たちにその意識がなかったのか驚きの表情が解けないのだ。

ラグ「そういえば代表だけどすっかり忘れてたよ。えへへ」

レジロック「（仕事ではなくして今までの行動をしてきたとは・・・こいつらがここまでやってきたのは、そういった「心」が原因かもしれないな）」

ラグの言葉にレジロックがそう思う。このチームの強さが何なのか、少し分かったようだ。温かなほほ笑みをラグたちに向ける。

レジロック「そういうわけで早速送るぞ」

ラグ「え、今から!？」

レジロック「当然だ、善は急げと言っしな」

それから数分後、絆はホールの上に乗り、あとはレジロックがボタンを押すだけとなった。

レジロック「それじゃあ元気でな」

ラグ「うん、レジロック達こそね!！」

レジロックがボタンを押す、するとホールが光り一瞬でラグたちは消えた。いや転送したと言った方が正しいか。

レジロック「最後まで俺たちの事が・・・」

レジロックはラグの最後の「レジロック達こそね!！」という言葉

を思い出しながらつぶやいた。そんな彼の後ろでレジアイスがさびしそうにしていた。

レジアイス「とてもいい子たちなのに・・・なぜ本部では彼らの扱いがひどいんでしょうね？」

レジスチル「・・・そうだな、他のチームと比べて明らかに扱いが違う。実績も他のチームよりあるはずなのに・・・まるで「絆を消そうとする」ような扱いだもんな」

レジロック「（この事件・・・何かがおかしい、ラグたちが幹部を倒したあたりから絆の扱いが変わった。・・・気をつけてくれよ、絆・・・）」

レジロックは転送された彼らを思い、空を見上げた。

第一百七十七話 新たな情報！次なる場所は？（後書き）

ラグ「ガラタンク・・・？」

そうだけど？

ラグ「また作者さんの思い付きか・・・」

・・・ばれたか。そうですね、元々ガラタンクなんて考えてなかったのに次の目的地はそこですよ

ラグ「でもお姫様がどうこうって・・・」

それでしょ、さあ見ごと解決してみよー！

ラグ「・・・（汗）」

第一百十八話 ガラタンクへ、そして早速!?(前書き)

さあ、いよいよガラタンクです

ラグ「ここ、当初の計画ではなつたよね?」

そうだね、でもまあそれは計画上での話、今ではこここのストーリーもラグ冒の一部なので

ラグ「そんなガラタンク編・・・スタート!」

第一百十八話 ガラタンクへ、そして早速!?

ラグ「ここが・・・ガラタンク？」

ラグがあたりを見渡しながら言う。周りにあるのは鉄の山ばかり、流石は鉄の街というべきだろうか。

アクア「でもここって・・・街のどの位置？」

ポリズ「分かりませんね・・・初めて来ますし・・・」

絆の頭脳、ポリズですら首をかしげる。ここ、ガラタンクはインルーラなどの「街」ではなくそれより規模の小さい「準街」と呼ばれている。街自体の広さはなかなかなもの人口など総合面で見た場合その規模はインルーラ等の「街」より小さい、ちよつと「都市」と「田舎」だと思つてもらつうといいかもしれない。なので観光客も必然的にすくなる、だからポリズですら来たことがないのだ。

キノ「どこかに地図があればいいんですが・・・」

キノガツサ「まあそんなもんが落ちてるわけもないよなあ。・・・しゃーねえ、とりあえず街の中を歩くか」

タチマル「賛成です、このままここにおいても何も進展はありませんし」

ラグ「そうだね、それじゃあ行こ・・・」

ハスボー「ラグ、ちょっと待って!!」

ラグ「えっ?」

歩き始めようとするラグをハスボーが止める。それに反応したラグは自然と足を止め、ハスボーの方を見た。

ラグ「どうしたの?」

ハスボー「ねえあの人・・・」

ラグ「?」

ハスボーに言われて少し遠くの茂みを見る。すると

サンダース「あれはピカチュウだな」

気になったのかメンバー全員が同じもの・・・いや人を見ていた。そう、茂みには1人のピカチュウがいたのだ。

タチマル「でも・・・なんだか苦しそうですね・・・」

ポリズ「みたいですね、歩き方もヨロヨロです」

キノ「どうしましょうか・・・ってあれ、キノガッサ?」

キノがあたりを見渡すとキノガッサの気配がなかった

ハスボー「あれ、さっきまでいたよね?」

キノ「気にしないでください、恐らく・・・ほら」

ハスボー「あゝ・・・」

サンダース「は、速いな」

メンバー全員がキノの言う方向を見て苦笑いする。恐らくもう察しておられる方もいるだろう、キノガッサは・・・

キノガッサ「hey、そこのお嬢ちゃん!」

ピカチュウのそばに行っていた。

キノガツサ「どうしたんだい、そんなフラフラで・・・そうか、これは運命の出会いだ。俺が君みたいなかワイ子ちゃんと出会うなんてそうとしか考えられない。どうだい、これからお茶でも・・・」

ピカチュウ「あの・・・助けて・・・下さい・・・」

キノガツサ「？」

表情を変えろという unnecessary な努力をしながら語るキノガツサにピカチュウはそういった。流石のキノガツサも何かを察したのか語るのを止めてピカチュウを見た。

キノガツサ「それはどういう・・・！？ストライクハンマー！！」

ストライクハンマー「オーケイ、キノガツサ」

キノガツサが突如ストライクハンマーを呼びだし、構える、そして

ストライクハンマー「ハンマステンションガード」

ストライクハンマーは技を発動、キノガツサの周り、ピカチュウも含んだその空間をエネルギーのバリアが覆う。その瞬間キノガツサの後方から光線が放たれるがそれをうまく防いだ。

ラゲ「キノガッサ!?」

アクア「何かあったらしいね」

ポリZ「行きましよう!」

遠くで見えていたメンバーも異変を感じキノガッサの元へと向かった。

キノガッサ「大丈夫か?」

ピカチュウ「あ、はい。ありがとう・・・ございました・・・」

キノガッサ「気にすんな、ところで・・・」

キノガッサがそう言った瞬間バリアー内部の地面が膨らんだ。

ピカチュウ「っ!?!?」

キノガッサ「しまった、地面からか!?!?」

この“ハンマステンションガード”はあくまで地表上の対象を保護する技、地面から来られては反応が出来ないのだ。

ピカチュウ「きゃああ!?!」

タチマル「 アクアイスウインドゴーレム”！！”」

ピカチュウに地面のふくらみが近づいたその時、バリアーを破壊し、そのふくらみに向かって巨大な剣が振り落とされる。タチマルの” アクアイスウインドゴーレム”の大剣だ。そして

アクア「 2人とも大丈夫？」

ピカチュウ「 は、はい・・・」

キノガッサ「 ダイジョブだ」

絆メンバーが駆け付けた。

サンダース「 よかったな無事で」

キノ「 ホントよかったです」

ピカチュウ「 あの・・・この中でリーダーの方はいらっしやいますか？」

ラグ「 えっ？一応僕だけど・・・」

ピカチュウに呼ばれてラグが返事、ピカチュウの前に来た。

ラグ「どうかしたの？」

ピカチュウ「あの・・・さっきの大剣の技を使用されていたのはどなたでしょうか・・・？」

ラグ「大剣？ああ”ゴーレム”のことかな。それならこの子だよ」

ラグは体をどけて自分の後ろにいたタチマルをピカチュウに見せた。

タチマル「え、え、オイラに何か・・・？」

いきなりのもので困惑するタチマル、そんな彼にピカチュウは近づき

ピカチュウ「先ほどは助けいただきありがとうございます」

タチマル「あ、いや、あれは体が勝手に・・・気付いたら技を発動していただけです。怪我もなくてよかったです」

ピカチュウ「あっ・・・」

笑顔で話すタチマルにピカチュウが突如赤くなり、タチマルと視線を逸らす。

ラグ「あれ？ピカチュウさんどうかしたの？」

ピカチュウ「い、いえ……」

アクア「もしかして……」

キノ「（これは……）」

アクア&キノ「（恋!?!）」

相変わらず鈍感なラグと違って女の子組は即座に恋と判断、他のメンバーも

ハスポー「（この人タチマル君のこと好きなんだね）」

ポリズ「（フッフッフ、これが一目ぼれというものですね）」

サンダース「（タチマルは気付いてるのか?）」

といった感じだった。

タチマル「あ……ところでお名前は……?」

ピカチュウ「あ、すみません。申し遅れました。私はティラス、インルーラの王女です」

タチマル「えっ……えええええええええええ！？」

ピカチュウ、もといテイラスがニコツとほほ笑みながら言うのに対してタチマルは驚きを隠せず、叫びをあげた。

????「それで、どうだった？」

????「失敗です。何やらキノガッサとフタチマルに妨害されて……」

????「情けないやつらだ」

????「仕方ありません、何せ相手はあの「絆」です。一筋縄でいかないことは分かっております」

????「ほう、何か……手でも？」

????「もちろんでございます。とっておきを用意しております」

????「そうか、頼んだぞ」

????「承知いたしました。全てはこの街の未来の為に、そして大

いなるあなた様の為に・・・」

第一百十八話 ガラタンクへ、そして早速!?(後書き)

というわけで女王の登場です!!

ティラス「初めまして、ティラスと申します」

お嬢様って感じだね、ちなみに名前の由来は・・・適当です(笑)

ティラス「うう・・・適当・・・」

でも可愛い名前だと思うよ。タチマルも気に入ってくれるような

ティラス「あ、あの方は関係ないです!」

照れてる照れてる(笑)

第一百十九話 女王様のご事情は？（前書き）

さあ今回はティラスの話しが主ですね

ラグ「なんでガラタンクに来たのか・・・なんであの場所にいたのか・・・」

そして最後には・・・!?

第百十九話 女王様のご事情は？

ガラタンクに来てからいきなり女王様である「テイラス」に遭遇したチーム「絆」。彼らは今、テイラスに案内されて近くの喫茶店によっていた。

キノガツサ「んぐ、大盛り木の実飯を3つと鉄分たっぷりブルーンジューズの大を3つ！！あ、特大フルーツパフェも！」

キノガツサがメニューを見ながら店員さんに言う。店員さんは「かしこまりました」と言っつて厨房へと向かった。

キノ「ちよつとそんなに頼んで・・・」

テイラス「いいんですよ、皆さんには助けいただきましたから」

キノ「すいません」

苦笑いするキノに対してテイラスは笑顔で返事をする。

キノガツサ「しっかしさ、いいのか、女王様がこんなとこにいて」

テイラス「大丈夫です。ここの方は・・・いえ、国民の方は私の事情を知っておられますから」

ハスボー「事情？」

ティラスの「事情」という言葉にハスボーが反応、メンバー全員が反応したようだ

サンダース「事情って何だ？」

ティラス「それは・・・私があの場合にいたことにもつながるのですが・・・私は追われているんです」

アクア「お、追われてる！？」

ラグ「誰に？」

ティラス「この国の・・・王です」

ティラスの口から放たれた言葉に絆メンバーは全員が衝撃を受ける。まさかこの国の王が追っているなんて何か罪でもあるのかと思ったからだ。しかしその理由はこれを超える衝撃をメンバーに与えた

アクア「でも・・・なんで？」

ティラス「王が・・・地位を高める為です」

サンダース「地位を高める！？？どういうことだ？」

ティラス「私は元々インルーラで過ごしていました。実のところインルーラでは女王ではなく過去の王族の末裔とし生活していたんです」

サンダース「俺もインルーラに住んでいたが・・・だから王制じゃないあの街に女王様がいたわけか・・・」

ティラス「といっても普通の住人とし暮らしていました王族だったことも秘密にしていました」

ハスポー「なんで？なんで秘密にしてたの？」

ティラス「特別扱いが嫌だったんです。私は両親と、友達と楽しく過ごせばよかった。王族の特権のようなものは必要なかったんです。それより私には「普通の生活」が大切だったから・・・」

ティラスは少し懐かしそうな表情で言った。彼女にとって王族としての特権より普通に暮らす方が大切ということがよくわかる表情だ

ティラス「でも問題が起きたんです」

キノ「問題？」

ティラス「数ヶ月前、インルーラに突然謎の集団が侵入してきました。そして私の家に押し入り、私とお母さんお父さんをさらったんです」

サンダース「そんなバカな！インルーラでは侵入者を防ぐためセキユリティが・・・何より人がいたはずだ！」

ティラス「その日は街の機械が誤作動し、整備中でした。なので人もそちらの修復に・・・夜だったこともありあたりは暗かったので誰も気付いてません」

サンダース「そうか・・・」

サンダースが視線を落とす。インルーラでそんなことが起きていたなんて信じられないのだろう

ラグ「それで・・・ご両親は？」

ティラス「城に閉じ込められています」

ラグ「じゃあなんで君は・・・」

ティラス「抜け出してきました。両親が逃がしてくれて・・・」

ラグ「あ・・・」

ラグですら黙りこむ。これ以上聞けば彼女の心を傷つけてしまうかもしれない、そう思ったからだ。それは彼女の泣きそうな表情を見ればすぐに分かることだった。しばらくあたりが沈黙に包まれる。そんな空気を破ったのはタチマルだった

タチマル「あなたが・・・さらわれた原因、理由は分かりますか？」
ラグ「タチマル君、それ以上は・・・」

テイラス「大丈夫です。えつと恐らくですがさつきも言った通り地位を高めるためです。正確には力を手にすると言った方がいいかもしれませぬ」

タチマル「それになぜあなたが・・・？」

テイラス「私は王族の末裔です。ですから何か力があるのではないかと、思っているらしく・・・その・・・私と・・・結婚すれば力を手に入れることができると思っっているようです」

タチマル「け、結婚!？」

タチマルはあまりの衝撃に席を立ちあがり叫ぶ。そのあと冷静になり、周りの視線が集まっていることを知り赤くなりながら席に座った。

タチマル「そ、その・・・女王様は・・・好き・・・なんですか？その王様のこと・・・」

テイラス「好きではありません。だから無理やり結婚なんて嫌なんです。でもこの街の周りには監視カメラがあつて出れませぬ・・・ですがそれに気付いたのは両親と「助けを呼んでくる」と約束し、逃がしてもらってからでした。」

タチマル「それであそこに……」

ティラス「はい、あそこは街の隅、もしかしたら脱出できないかと思ひまして……」

サンダース「ん？それならなんで国の連中は女王様の事知ってるんだ？」

ティラス「お父さんの知り合いの方がいらっしやるんです。その人が説明してくださって……」

サンダース「なるほどな」

ハスポー「でも少なくともあの場所よりここにいた方が安全じゃないの？」

ティラス「そうなんですけどなんとかしてこの街から抜け出そうとしていたので……」

ティラスがうつむく。逃げ出した直後とはにかくこの街から脱出することを考えていたから冷静にここにいればいいと判断できなかったのだろう。それに対する反省の現れかもしれない

タチマル「助けに行きましょう」

ティラス「えっ？」

タチマル「だつてお城には女王様のご両親さんがいらつしやるんでしょ？」

ティラス「ま、待つて下さい！あそこは危険です。ここの方々に聞いた話ですがあそこは凄く強い兵たちがいるとのこと。私が脱出できたことが奇跡と言えるくらい……ですからそんな危険な場所にあなた方を……」

タチマル「じゃあ助けたくないんですか？」

ティラス「そんなことはありません！……ですがあなた方を危険な目に……」

タチマル「大丈夫です、オイラ達は簡単にはやられません。それにオイラは「女王様の為に」ご両親を助けたいんです」

ティラス「私のために……」

タチマル「はい」

タチマルは笑顔で、素直な表情で言った。

タチマル「女王様は笑つてる方が素敵です。悲しんでいる、泣いているより……笑顔がよくあつてます」

ティラス「／／／」

タチマル「だからオイラはその笑顔を守りたいんです。どうかオイ

ラに護らせてくれませんか？」

ティラス「!!!」

タチマルがティラスに聞いた。温かなその声は優しさそのものでありティラスの中の「不安」を取り除いた。そして確信したのだ。「この人になら任せて大丈夫」だと

ティラス「お願い……します……お父さんと……お母さんを……助けて……」

タチマル「もちろんですよ……って、あっ！」

タチマル温かい表情でティラスからの依頼を承諾するタチマル。そんな彼の胸にティラスは泣きながら飛び込んだ

タチマル「あ……あの……」

ティラス「ありがとうございます……」

ティラスは感激してタチマルの胸の中で泣いた。それに対してタチマルも最初は戸惑っていたが受け止め彼女を温かく包みこんだ

タチマル「任せて下さい、女王様」

ティラス「でも・・・絶対に・・・無茶はダメですよ・・・？」

タチマル「はい」

ティラス「約束・・・ですよ？もし破つたら・・・」

タチマル「その時はオイラが女王様の言うことなんでも聞きます」

ティラス「！？・・・ほ、本当ですか？」

タチマル「はい！！」

驚いたティラスが一度タチマルから離れて問う。タチマルは元気よく了承した。

ティラス「わ、分かりました。それと・・・」

タチマル「ん？」

ティラスが目線を逸らす。そんな彼女を覗き込むようにタチマルが見ると・・・

ティラス「ティ、ティラスって呼んでください・・・その・・・女王様じゃなくて・・・」

タチマル「えっ、な、名前ですか！？それは・・・」

ティラス「お願いします!!」

そう言いながらティラスがタチマルに抱きつく。いきなりのことに
タチマルは驚き急に顔が赤くなる

タチマル「え、ちょ、女王さ・・・」

ティラス「ティ、ティラスって呼んでください!じゃないと・・・
離しません!!」

タチマル「わ、分かりました!分かりました!!ティ、ティラス・・・
さん」

ティラス「はい!」

名前で呼ばれたことに喜びティラスが抱きつきを解除、タチマルを
解放した。

ティラス「あと特別扱いも禁止です!」

タチマル「そ、そんな・・・」

タチマルは反抗しようとするがティラスの抱きつきそんな表情を見

て反抗するのを止める。そして

「タチマル……分かりました」

その瞬間ティラスは最高に赤くなりながらも笑顔になった

第一百十九話 女王様のご事情は？（後書き）

タチマルー！！どんだけ赤くなってるんだ！！

タチマル「うぎゃ！な、なんですか作者さん！」

テイラスとイチヤイチヤして・・・

タチマル「イチヤイチヤって・・・僕は普通に女王様とお話しを・・・」

テイラス「もう！名前で呼んでください！」抱きつく

タチマル「うああ、ちよ、ちよっと・・・」

どうしようもないですね（笑）

第二百一十話 インルールの王様&妃様救出大作戦（前書き）

今回は作戦会議です

タチマル「いつたいどんな作戦が!？」

それは見てのお楽しみ

第二百十話 インルーラの王様&妃様救出大作戦

女王・・・もといティラスの事情を知ったラグたち「絆」は喫茶店で作戦会議をしていた。

ポリズ「では、作戦会議を開始しましょう」

タチマル「そうですね、早く女王さ・・・ティラスさんのご両親を助けないとですね!!」

タチマルが一瞬詰まりながら言う。やはり女王様と言う方が慣れているせいだろう。しかし言えばまたティラスの抱きつき攻撃、ティラスさんと呼ばざるを得なくなっていた。

ラグ「タチマル君気合い入ってるね」

タチマル「もちろんです！絶対に助けたいですから!!」

キノガッサ「気合いなら俺だってあるぜ！なにせティラスちゃんの為だからな!!」

キノ「ちよつとキノガッサ、ティラスちゃんって・・・」

キノガッサの発言にキノが中止しようとする。女王様に向かってい

きなりちゃんづけをしたせいだろ。しかし

ティラス「あ、そう呼んでいただいて結構ですよ。もしくは呼び捨てでも」

キノガッサ「そうか？それじゃあティラスって呼ばせてもらっぜ」

ティラス「はい」

キノ「いきなり呼び捨てって・・・」

ティラス「いいんですよ、私もお仲間になれたみたいで・・・嬉しいです」

キノ「そうですか・・・？じゃあ私もティラスさんって呼ばせて頂きますね」

ティラス「はい！」

キノが聞くとティラスはニコツとほほ笑む。それはまるで天使のようなほほ笑みだった

タチマル「・・・」

キノガッサ「何見とれてんだよ」

タチマル「な、見とれてなんか・・・ないですよ!!」

キノガツサに言われたタチマルが少しあわてながら言った。

キノガツサ「そっかあ？今「テイラスさんかわいい」って感じの表情だったぞ？」

タチマル「そ、それは勘違いです、勘違い！！」

キノガツサ「ふ〜ん」

キノガツサは意味深そうにそういうとポリZの方へ視線を向けた

キノガツサ「それで・・・作戦とかあるのか？」

ポリZ「もちろんです。まずは城についての情報を知りたいのでテイラスさん、情報を教えていただけますか？」

テイラス「あ、はい。まず城は全部で5階となっています。その内1階は地下です」

サンダース「別の言い方をすれば地下1階、あとが4階ってことか」

テイラス「そういうことです」

アクア「大きいんだねえ」

アクアが想像しながら言った。確かに地下に1階、外に4階はなかなかの大きさだ

ハスボー「それで・・・お父さんとお母さんはどこにいるの?」

テイラス「実は・・・その城の外にある牢屋に・・・」

タチマル「牢屋!? 牢屋なんか閉じ込められているんですか!？」

テイラス「はい・・・」

テイラスが目を伏せながら悲しそうに言った。そんな彼女を見てタチマルは見えないようにだが拳を握りしめた。恐らく悔しいのだろう

1473

ポリZ「では城は無視して牢屋に・・・」

テイラス「そういうわけにはいかないんです」

ポリZ「・・・どうしてですか?」

テイラス「牢屋のカギは王が持っています。そして牢屋の外側から攻撃を加えれば内部の機器が作動して閉じ込められた人を攻撃するんです」

サンダース「つまり・・・外からの攻撃は出来ない・・・ということか・・・」

ティラス「はい・・・」

ティラスの説明によってメンバーはしばらく沈黙する。するとタチマルが口を開いた

タチマル「王様を・・・倒しましょう」

ティラス「えっ？」

タチマル「王様を倒してカギをもらい牢屋のご両親を助ける。これならご両親は傷つくことありませんよね？」

ティラス「それはそうですね・・・」

ラグ「僕も賛成！」

ティラス「ラ、ラグさん!？」

ラグ「王様を倒していけばなんにも問題ないんでしょ? だったら倒そうよ」

アクア「確かに・・・それだと問題ないね」

キノガッサ「一発ぶつとばすか」

キノ「それだと無事に」ご両親を助けられますしね」

ポリズ「一番ストレートでいいですね」

ハスポー「頑張ろー!!!」

ラグの発言、他のメンバーの反応にテイラスは啞然とする。実はテイラスは「絆」の事は知ってはいた。ダーク幹部を倒したことを。だからこそ冷静に判断し、的確な行動をとり、確実に事を解決するエリート集団だと思っていた。しかし現実は違う。全員が的確な行動の為ではなく、人の為に行動し、確実ではなく無理だと思うようなことにも挑戦する、そんな無謀なチームだ。テイラスはそのことを知り、驚いていた。

タチマル「驚きましたか？でもこれがチーム「絆」です。確かに中央突破、王様を倒してなんて普通は考えないかもしれませんが、オイラ達「絆」はいつもこんな感じですよ」

テイラス「いつも・・・？」

タチマル「はい、今回みたいに助ける手段が倒すしかないなら倒していく・・・まあちょっと無茶ではあるんですけどね。でもオイラはこのチームが大好きですよ」

タチマルは目をキラキラさせながらそう語った。そんな彼を見てテイラスは自然と心が温まり自然とほほ笑んでいた

テイラス「とても・・・いい人達なんですな」

タチマル「もちろんです。オイラのししょーとそのお仲間さんです
から」

ポリズ「それではテイラスさん、ちょっといいですか？」

テイラス「あ、はい」

二人がほのぼのした中、テイラスはポリズに呼び出させる。恐らく
作戦のためだろう

ポリズ「それで・・・王様はどこに・・・？」

テイラス「分かりませんが、兵の話によると上階にいるとのこと
でしたけど・・・」

ポリズ「なるほど・・・つまりは3階か4階あたりに・・・」

キノガツサ「つてことは1階から行ってどんどん倒していけばすぐ
だな！」

ポリズ「それはそれで危険です」

キノガツサ「なんでだよ？」

ポリズ「外部からの攻撃に対応しているくらいです。あまり派手に
侵入すれば内部の器機を作動させて中の人を攻撃・・・ということこ
もあり得ます」

ポリZの考えを聞きキノガツサも理解したのか「うん」としばらく考える。しかし答えは案外速く見つかった

キノガツサ「じゃあ誰かがテイラスのとーちゃんとかーちゃんを護つとけばいいんだろ？んで守りといえばハスボーだろ」

ハスボー「うん、僕が護るよ」

ポリ「となれば私も行きますよ。ある意味タッグですから」

キノガツサ「じゃああのメンバーで突破していけば・・・」

テイラス「あの・・・ちょっといいですか？」

キノガツサ「ん？どした？」

キノガツサが「これで決まりだな」と言わんばかりの表情をするとテイラスが話すいかけてきた。

テイラス「あの・・・閉じ込められている人なんですけど・・・実は何人いらっしやるかわからないんです」

キノガツサ「テイラスのところのとーちゃんとかーちゃんだけじゃないのか？」

テイラス「はい、私が閉じ込められた時には数十人はいました。だ

から多分もつといるかと・・・」

ポリズ「なるほど・・・流石に大人数なら私やハスボーだけでは厳しいですよ」

確かにいくら護りの得意なハスボー、指示の確かなポリズとはいえその二人だけで少なくとも数十人、下手したらもつといる人達を護るのは難しい、それはこの話を聞いたメンバー全員が思った

キノ「ということは戦いを挑むのは最低限の人数・・・ということですね・・・」

ポリズ「そうなりますね・・・」

タチマル「・・・あの・・・」

ポリズ「ん？」

タチマル「オイラに行かせてもらえませんか？」

ポリズ「タチマル君が・・・ですか？」

タチマルの突然の申請にポリズはもちろん、ラグたちも驚きの様子だ

タチマル「オイラ・・・どうしても助けたいんです。自分の手で・・・だから・・・任せてもらえませんか？」

タチマルは真剣な表情でそう言った。まっすぐな、芯のしっかりした目だ

ラグ「・・・僕は・・・いいと思うけど・・・みんなはどうかな・・・？」

アクア「えっ、・・・ラグちゃんがそういうなら・・・いいんじゃないかな」

サンダース「ああ、俺もいいと思う。助けたいって気持ち故の行動だろうしな」

キノ「では私とキノガツサは護りにつきますね」

キノガツサ「ちょ、待て！なんで！？」

タチマル「せつかくタチマル君が頑張ろうとしているのに邪魔する気？」

キノガツサ「そんなことはしないが・・・タチマル1人じゃ厳しいだろ？だ、だから俺を・・・」

ラグ「じゃあ僕も行くよ」

キノガツサ「なにー！？」

ラグ「タチマルが頑張るなら僕もいかなきゃ！」

タチマル「ししょー！」

タチマルが目をキラキラさせながらラグを見る。そんな彼に対してラグもニコツとほほ笑んだ

キノガツサ「くそお、俺の出番はなしかよ・・・」

キノ「そうでもないよ、牢屋のみんなを助けなきゃいけないし」

キノガツサ「牢屋のみんな・・・はっ、もしかしたらカワイこちゃんがいるかも！！」

サンダース「あはは、結局そういう系につながるんだな・・・まあこの際、師弟コンビに任せてみるか」

アクア「そうだね、あの二人なら大丈夫だろうし」

テイラス「あ、あの私もついて行きます！！」

ポリズ「え、テイラスさん？」

テイラスのいきなりの発言に驚く。しかし彼女もまた、タチマルと同じような目をしていた

テイラス「城の中を案内します。戦力にはならないかもしれませんが」

が・・・サポートさせて下さい！」

タチマル「テイラスさん・・・」

ポリズ「どうしますか、タチマル君？」

タチマル「・・・是非、是非お願いします!!！」

ポリズ「それじゃあ決定ですね。ラグ、タチマル君、テイラスさんが王様を倒しに、サンダースさん、アクアさん、キノガツサ、キノさん、ハスボー、そして私は牢屋内の人々の救出、これでいきましよう!!！」

こうしてテイラスのお父さん、お母さん救出大作戦事項は決定した。

第二百十話 インルールの王様&妃様救出大作戦（後書き）

タチマル「あまり作戦って言う作戦じゃないような・・・」

つまりは「キノガッサ達はワザと捕まり、タチマル達が王様を倒しに行くってことだよ」

タチマル「それは分かりますけど・・・キノガッサさんが後から暴れないか心配です」

あゝそれは同意（汗）

第二百一十一話 突撃！ガラタンク城！（前書き）

さあいよいよ潜入です！！

ラグ「と言っても兵を倒しての侵入じゃない？」

・・・まあそういうかたい事は置いといて！

ラグ「ごまかした・・・」

第二百一十一話 突撃！ガラタンク城！

ラグ「タチマル君、テイラスちゃん、準備はいい？」

タチマル「もちろんです」

テイラス「はい」

ラグはタチマル、テイラスにガラタンクの城、ガラタンク城の目の前で最終確認をとった。あれから数時間後、作戦は開始され、キノガッサ達は上手く捕まった。

テイラス「捕まった方々は大丈夫でしょうか・・・」

タチマル「大丈夫とは思いますが・・・捕まる時にキノガッサさんは暴れたらしくて・・・数十人ほど倒しちゃったみたいです」

ラグ「多分単純に捕まるのは嫌だったんだよ」

テイラス「そういう性格ですものね」

テイラスが苦笑いしながら言った。ほんの数時間しか一緒にいなかったのに彼女はキノガッサの性格をなんとなくから把握していた。それは彼女の自身の観察力の影響もあるだろうが、一番は全員の個性の強さ故だろう

ラグ「よし、それじゃあ行くよ！」

タチマル「はい！テイラスさんはオイラの後ろにいて下さいね、護りますから」

テイラス「あ、・・・は、はい」

テイラスが少し赤くなりながら返事をする。そして彼らは城に突入した。

ラグ「ハイドロステインガー」！！」

ラグの周りに水の短剣が生成され兵達に向かって行く。すると短剣は兵達の前にぶつかり衝撃を起こす。

タチマル「はああああ！！」

一方タチマルはシエルブレードを二つ出し、打撃攻撃して兵を倒していった

ティラス「すごい・・・」

ティラスはそんな彼らを見て驚く。まさか大量にいる兵に二人で立ち向かい、倒しているのだ。無理もない。

タチマル「ティラスさん、大丈夫ですか？」

ティラス「あ、はい」

啞然と見ているとタチマルが近くに来て問う。どうやら心配してくれているようだ。ティラスはそんな問いに優しく返事をした。

タチマル「もうすぐ終わりますからあと少し待ってて下さいね」

ティラス「はい！」

それから数分後、大勢いた兵はみな倒れていた。今までかなりの強敵と戦ってきたラグたちにとって今回の兵はあまり苦戦しなかったようだ

ラグ「よし、終わったね」

タチマル「攻撃も本気じゃないから気絶だけのはずです」

ラグ「これで一階だから・・・次は二階だね」

タチマル「はい、早くご両親を助けましょうね、テイラスさん！」

テイラス「はい！」

テイラスは元気に返事し、それを見てタチマルも笑顔になった

ラグ「よし、それじゃあ次行くよ!!」

ラグたちは二階への階段を上がって行った。

キノガツサ「おゝい、テイラスのとーちゃんとかーちゃんはどこだあ？」

キノ「ちよつとキノガツサ、静かにしないとダメだよ」

ポリズ「そうですよ、気付かれたらどうするんですか？」

一方捕まり、テイラスの両親を保護する役目を持ったキノガッサ達は現在、牢屋内を歩いていた。牢屋といっても建物があり、その内部に小さな牢屋がある、ということなので全員が一か所に集められているわけではない

キノガッサ「にしても外は兵が大勢なのに内部は誰もいないってどういうことだよ」

ポリズ「まあいいじゃないですか、そのおかげでこうしてテイラスさんのご両親を探せてるわけですから」

ハスボー「でもどこにいるんだろうね」

アクア「たくさん牢屋があるからね、何か探す手段があればいいんだけど・・・」

キノガッサ「やっぱ大声で呼ぶしかないか？」

キノ「だからそれは気づかれるってば・・・」

キノガッサの発言にキノが苦笑いしながら返答する。とその時、ずっと黙っていたサンダースが口を開いた

サンダース「・・・見つけたぜ」

キノガッサ「マジか!？」

ポリ2「そうか、サンダースさんは電気タイプ、ティラスさんの両親の放つ電気が分かるんですね」

サンダース「ああ、ティラスはピカチュウ、だからその親も普通に考えれば電気タイプだ、だからずっと探してたんだ」

キノ「さすがですね、サンダースさん」

ハスボー「よし、早くティラスさんのお父さんとお母さんのところに行こう」

サンダース「ああ、こっちだ」

メンバーはサンダースについていった

サンダース「ここだ」

キノガッサ「へえ、ここか・・・おい、ティラスのトーチちゃんと

「かーちゃん、いるか？」

キノガッサがいきなりながら牢屋に向かつて呼んでみた。少々心配な方法だが他に思いつかないからかキノ達も黙っていた。すると

ライチュウ「あなたは・・・テイラスを・・・うちの娘を知っておられるんですか？」

二人のポケモン「ライチュウ」と「ピカチュウ」が現れた。ボロボロの状態からどうやらこの牢屋に閉じ込められているらしい。そんな彼らにキノガッサが返事をした。

キノガッサ「もちろんだ」

サンダース「あなた方を助けに来ました。ちょっとお話をいいですか？」

ピカチュウ「もちろんです。この牢屋の横に隠し通路があります。そこからこちらへ入っていただけますか？」

キノガッサ「分かった・・・お、ここだな」

キノガッサたちが横の隠し通路からテイラスの両親のいる牢屋に入る。これは万が一見つかった時にキノガッサたちが隠れることが出来るからだ

キノガッサ「よいしょっと……んじゃ邪魔するぜ」

ライチュウ「あ、はい」

通路を抜けたキノガッサがそういうと二人はニコツとほほ笑み了承してくれた。

サンダース「では……まずは自己紹介だな。俺はサンダース、インルーラに住んでたサンダースです」

キノガッサ「んで俺がナイスイケメンなキノガッサで、こっちが……」

キノ「キノガッサのキノと申します」

ポリZ「私はポリゴンZ、ポリZとでもお呼びください」

ハスボー「僕はハスボーだよ」

サンダース「とりあえずこっちはこんな感じですよ。あなた方のお名前をお聞きしてもよろしいですか？」

自分達の自己紹介が終了すると今度はライチュウ、ピカチュウの名前を聞いた。

ライチュウ「私はライル、ライチュウのライルです」

ピカチュウ「私はピカチュウのピカンと申します」

キノガッサ「ライルさんにピカンさんだな」

ライル「はい、それで・・・娘は・・・ティラスは無事なんですか？」

ライルが心配そうにそう言った。その表情から本気で娘のことを心配しているのだろう、親ではないサンダース達にもその気持ちは伝わってくる

サンダース「今、ティラスは・・・この国の王に戦いを挑みに行つてます」

ライル「なんと!?!」

ピカン「戦いに行っているのですか!?!」

サンダース「はい、王を倒してあなた方を助ける為に・・・」

ライル「まさか・・・ガルドに戦いを・・・」

キノガッサ「ガルド?この国の王の名前か?」

ピカン「そうです。ボスゴドラのガルド、数年前からこの国の王と

なつた人です」

ポリズ「お二方、お詳しいですね。インルーラの方じゃ……」

ポリズが不思議そうに二人に問う。そんな問いに二人は答えた。

ライル「実は……関係者なんです」

サンダース「関係者？なんのです？」

サンダースが質問するとライルとピカンは顔を見合わせてお互いに何かを確認するように頷く。そして口を開いた。

ピカン「ライルが……救助隊をしていた頃の……救助者なんです」

第二百一十一話 突撃！ガラタンク城！（後書き）

というわけで王の正体判明です

ラグ「ボスゴドラなんだ・・・いかにも鉄の国の王って感じだね」

そしてついにティラスの両親にも遭遇！

ラグ「ライチュウのライルさんとピカチュウのピカンさんかあ・・・

」

彼らの話す「王」とは！？

ラグに「ちなみに今回の戦いの挿入歌はもう考えてあるらしいよ」

ちよ、そういう情報はもらさないの！！

ラグ「そう、まさしく電撃って感じの・・・」

じ、次回もお楽しみに〜！！

ラグ「・・・あれ？」

第二百二十二話 ガルドの過去（前書き）

さあ、皆さんに支えてもらっての更新です!!

ラグ「そうだよ、僕たちはみんなに支えてもらってるんだもんね」

だからこそ頑張れるんだよね!!

アクア「何があったかは活動報告の「決意」等で分かるよ!」

それじゃあラグラージの冒険第二百二十二話 「ガルドの過去」・・・

みんな「スタート!!」

第二百二十二話 ガルドの過去

閉じこめられたテイラスの両親、ライルとピカンを救出すべく彼らの元へたどり着いたキノガツサ達、そんな彼らは今、ライル達からガラタंकの王「ガルド」の話しを聞いていた。

ライル「あれは数年前のことでした。私がまだ救助隊のメンバーだった頃、ガラタंक付近の山で土砂崩れがありました」

サンダース「土砂崩れ・・・？もしかして突然起こった大雨で止んだ時には山の5分の1が削られたっていう災害じゃないですか？」

ピカン「はい。そうですけど・・・どうしてそれを・・・？」

いきなり話題に食いついてくるサンダースに少々驚き気味のピカン、それはライルも一緒だった

サンダース「あ、まあちょっと・・・色々ありまして・・・」

ピカン「そうなんですか・・・」

サンダース「ああ、すいません。お話しを続けて下さい」

慌ててサンダースが話しを戻すようお願いする。「土砂崩れ」というワードに食いついたもののこのまま続けられれば話しがそれてしまう、そう考えたのだろう。そんなサンダースに返事をしてピカンは話を続けた

ピカン「その災害なんです、その時ライルは救助隊メンバーとして救助活動を行っていました」

ライル「急がないとまた崩れてからでは遅い、ということとで雨の中で2次災害の危険もありましたが救助活動、共に捜索は開始されました。そして私は、まだココドラだったガルドを救助したのです」

ポリズ「なるほど・・・それでガルドさんと知り合ったわけですね」

ライル「はい」

ピカン「私は病院で待つ医療担当だったのでガルド君を担当したのですが、幸い怪我も軽症で命の問題は全くなく、無事にこのガラタUNKに帰ってきたんです。他の人も全員が無傷ではなかったけど助かったはずでした。でも・・・」

ハスボー「・・・でも？」

ピカンの話しが突然止まり、ハスボーが「続きは？」と聞くように反射的に言う。そして彼女は口を開いた

ピカン「彼は・・・ガルド君は言いました。「ガルド君がいない」っ

て」

アクア「えっ……ちょっと待って下さい、さっき全員助かったって……」

アクアが驚き確認する。そんな彼女の反応にピカンは視線を落とした

ピカン「確かにそう思いました。でも違っただんです。もう一人の方が「俺の弟もいない」と言ってきて……調査の結果、ガルド君の弟「ガルド君」と「もう一人」、計2人の行方が分からなくなっていました」

キノ「ちょっと待って下さい、それって……」

ライル「そう、彼ら二人だけは……救助されなかったんだ……」

ライルの言葉に一同は驚き言葉を失う。災害によって救助が行われている状況で見つからない者がいた、これが何を意味しているか理解しているのだろうか

アクア「……それで……どうなったんですか？」

ピカン「ガルドはしばらく悲しんでいましたが、「弟の分も生きる」と言って元気を取り戻しました」

キノ「もう一人の方の親族さんは……？」

ピカン「悲しまれていましたが彼とは途中で分かれてしまって・・・私はガルド君の担当でしたから・・・」

キノ「なるほど・・・」

キノが顔を落としながら返事をする。やはりそんな健気な言葉を、そしてもう一人の子とを聞くと切なくなるのだろう

キノガツサ「・・・それで頑張った結果がガラタンクの王・・・つてわけか？」

ライル「そうです」

ハスポー「でも王様になるの早くない？」

ピカン「元々ガラタンクの王様はお歳で・・・近いうちに政権交代しないといけないと思っていたところにガルド君の事を知り、努力を知って王に任命してくださったんです」

ハスポー「そうだったんだ・・・」

そんな彼女の説明を聞いて納得するハスポー、しかしもちろん話はまだ続いた

ピカン「皆が「良い王」になると期待していた。でも・・・実際は・

「・・・そうではなかったそうです」

アクア「どうということですか？」

アクアが問う、そんな彼女の質問にライルは少し言葉を詰まらせながら答えた。

ライル「私たちはすでにインルーラに住んでいたので確かには分かりませんがガルドは「力を求める王」になるうとしたそうです」

ハスボー「力を・・・」

アクア「求める・・・？」

ピカン「はい、「失った弟を護れなかったのは自分の力がなかったから。だから力を手に入れ全てを護る」・・・そういうことを言っていたそうです」

サンダース「引きずっていたんだな・・・」

ピカン「それも仕方ないことではあるんです。彼の実の家族は弟君だけで・・・両親は早く他界されていましたから・・・」

アクア「それなら気持ち・・・全部じゃなくても・・・分かるね・・・」

アクアがさびしそくに言う。実際両親を亡くして、弟と共に生きて

きた、これを想像すれば誰もが辛い気持は理解できるし、力を欲するガルドの気持ちも分かるのではないだろうか

ライル「しかしそれが裏目に出てしまい、ある種の「独裁者」となっているのです」

ピカン「しかも・・・ダーク化にまで手を出して・・・」

ポリズ「ダーク化！？それは本当ですか！？」

急に出た「ダーク化」というワード、これを聞くなりメンバーの表情は変化し、ポリズは少し大きな声で二人に聞く。少し驚きながら二人はコクツと頷いた。

ピカン「捕まった時に聞きした。「俺はダーク化という力を手に入れた。とても強力な力だ」・・・と」

キノガッサ「一体どこで出に入れやがったか分かるか！？」

ライル「それは分かりません・・・ですが、どうやら闇の被害は周りのポケモンにまで及ぶようで、兵士も少々ながら闇に・・・」

ハスボー「周りの人も闇に！？」

ポリズ「それでは少しマズイかもしれませんね・・・」

アクア「どうして？ラグちゃん達じゃ勝てないの？」

ポリズ「いきなりの発言にアクアが反応し問う。とてもではないが
ガルドがたとえダーク化したとしても、同じくダーク化した「ギラ
ティナ」達ほどの力を持っているとは思えない。ならば倒せない相
手ではない、そう考えたからだ。しかしポリズの考えは少し違って
いた

ポリズ「そうではありません。実力ならもちろん信じてますよ。彼
らなら勝ってくれる、と。でも問題点はそこではありません」

ハスボー「どういうこと？」

ポリズ「覚えていますか？ギラティナ戦時、ラグがあのままでは勝
てなかったことを？」

アクア「もちろん覚えてるよ。ラグちゃんはギラティナが良いポケ
モンだったから攻撃できなくて・・・」

ハスボー「でもアクアの言葉で戦うようになったんだよね」

ポリズ「その通り。では今回は？」

アクア「今回って・・・あっ！」

キノガッサ「そういうことが・・・そう考えると・・・マズいな・・・」

ポリズの話が分かったのか、絆のメンバーはその場で苦い顔をしていた。「もしやラグにとってガルドはある意味もつとも最強の防御力を持つポケモンではないか」そう思ったからだ・・・

ラグ「さあ、いよいよだね」

タチマル「はい、この上の階のはずです。ですよね？テイラスさん」

テイラス「はい、この上の階です」

ラグ「よし、行こうか」

そう言つて三人は足を進める。テイラスの両親を助ける為に。だがこの戦いが数分で終わるものではないということに、ラグたちはまだ気付いていなかった

第二百二十二話 ガルドの過去（後書き）

というわけでガルドにも事情はありました

ラグ「悲しいね・・・これ」

でも本編で君はまだ知らないからね？

ラグ「うん。それとさ、気になったんだけど・・・小説に気になるワードが・・・」

亡くなるとかの「死」だね。今回から「死」というものをラグ冒に投入しました

ラグ「なんで？」

やっぱり命の大切さって言うのはこれがあるとより分かるかなって思ったからね

ラグ「ってことはここで発表？」

うん。実は第二章のテーマは「命」です

ラグ「なんか軽いなあ」

そんなこと言わないで（笑）

ちなみに「第一章は？」という質問にはあらすじにて公開しよう

思います

ラグ「これを知ってから読むと」なるほど」「って思える部分がある・
・かも」

第二百二十三話 VS ガルド（前書き）

今回はついにガルドと対面です！

ラグ「ついにかあ」

ガルドは強いよ、多分。君にとってね

ラグ「僕にとって？」

君の性格上だよ

第二百二十三話 VS ガルド

ガラタンクで出会ったピカチュウ「テイラス」の両親を助ける為、ガラタンクの王「ガルド」を倒すことを決意したラグ達。そんな彼らはずいぶんガルドのいると思われる部屋に入室していた。そこには

ガルド「お前達が・・・ラグか」

ガラタンクの王、ボスゴドラのガルドがイスに座っていた。彼の知らみながらの言葉にラグも知らみながら答えた

ラグ「そうだよ」

タチマル「でもなんでオイラ達のことを・・・」

ガルド「城の兵を次々と倒しているのだ、騒ぎにならないわけがない。気付くのも当たり前だろう。それにチーム絆のことは元々知っていた。デンラージ・・・その力が俺にあれば・・・」

ラグ「デンラージの力？それで世界でも征服しようと思ったの？」

ガルド「バカを言うな、俺はその力を使って・・・弟を・・・ガルドンを助けたかった・・・」

タチマル「どういう……ことですか？」

ガルドの「助ける」という単語に反応し質問するタチマル。そんな彼の質問にガルドは静かに答えた。

ガルド「俺の弟は昔土砂崩れに巻き込まれて死んだんだ」

タチマル「えっ……」

ガルド「俺の弟は死んだ！俺の力がなかったから！！だからあの時力を手にしていれば……力があれば救えたんだ！！」

ラグ「力があれば……？」

ガルド「そうだ、だから俺はガラタンクの王となり力を求めた。全てを護る為に！！そしてこれがその答えだ！！」

ガルドの体から黒い邪悪なオーラが放たれる。「ダーク化」だ

ガルド「俺はこのダーク化の力を手に入れた。この力で民を護れる……もうあの時のような……あんな悲しみはもう起こさない！！」

タチマル「どうやら事情があるようですね……」

ラグ「うん……きつと辛かったんだ……」

テイラス「私も・・・知りませんでした」

ガルドの話を聞いて彼の事情を知るラグ達。そんな彼らにガルドはにらみながら言った

ガルド「おい、ラグ。勝負しろ」

ラグ「えっ!?!」

ガルド「お前のその力・・・俺が頂く。お前を倒し、その力を得て更にテイラスの力を得る。これで俺はより一層力を得ることが出来る!」

タチマル「(ま、マズイ!?)」

ガルドの言葉にタチマルは心の中で焦る。ラグの「性格」を知る者なら全員が焦るだろう

ガルド「どうした、かかってこないのか?ならばこちらから行くぞ!!」はかいこうせん」

タチマル「くっ、テイラスさん!こっちです!」

テイラス「きゃ!?!」

口に膨大なエネルギーが集結しガルドはそれを放つ。タチマルとテ

イラスはギリギリで回避することに成功したものの光線となったそれはラグに向かって一直線に飛んでいき爆発を起こした

ガルド「さあどうした、見せてみる・・・デンラージの力を！」

そう言いながらガルドは右手に気を集中させてラグに向かって走っていく、”きあいパンチ”だ。しかし彼の目の前で水が弾け進むことを拒む。それに反応し、ガルドは止まった

ガルド「バブルこうせん”・・・”

タチマル「ししょーとは戦わせません。オイラと戦ってください！」

ガルド「お前は・・・ラグの弟子か・・・。残念だがお前には俺の求める力はない。故にお前と戦う理由はない」

タチマル「それでも・・・」

ガルド「いいのか、この戦いの中でティラスの身に何かあっても」

タチマル「!?!」

ガルド「俺はこの通り”はかいこうせん”が使える。つまりいつティラスに被害が出てもおかしくはないということ。そしてティラスに己を護るすべはない。それでもいいなら俺と戦うといい」

タチマル「くっ・・・」

ガルドの言うことは正しかった。確かにバトルの最中に技がティラスに影響するかもしれない。その時ティラスは自身を護ることができるか・・・そんな思考がタチマルの頭の中で広げられた

ガルド「そうだ、そこでおとなしくしている。俺もむやみに傷つけるのは好きじゃない」

そう言いながらガルドは”はかいこうせん”によって発生した煙むかって歩いて行く。その瞬間煙はバツと吹き飛び風圧がガルドを襲う。もちろんその風を発生させたのは

ガルド「やる気に・・・なっただか」

ラグ「くっ」

もちろんラグだ。”ライティングウイング”を使って羽ばたき、煙をのけたのだ。

ガルド「ダメージを受けていないところを見ると”はかいこうせん”もその羽で受け止めたか。実に早い反応、流石だな」

ラグ「僕たちは・・・戦わないとダメなのかな・・・」

ガルド「残念だが戦わなくてはならない。俺は力が欲しい。全てを護る為の・・・もうなにも失いたくないんだ。だからこそお前を倒し、お前とテイラスの力を得る！」はかいこうせん」

ガルドはもう一度”はかいこうせん”をラグに向かって放つ。そんな彼にラグは反撃せずただ避けた。外れた”はかいこうせん”は壁にあたり爆発を起こす。すると壁は見事に壊れていた

ラグ「（威力がある・・・これは何回もは防げない・・・ましてや二人にあたったら・・・）なら！」

ガルド「待て！！」

ラグは何を考えたのか急に走り出して階段へと向かう。屋上へと続く階段だ。そんな彼をガルドも勿論追った

タチマル「（ししよーは多分この場で戦うとオイラ達に被害が出るから屋上へ行ったんだ・・・それなら）テイラスさん、オイラ達は急いでここから脱出しましょう」

テイラス「ラグさんは見捨てるんですか!？」

タチマル「ししよーは多分オイラ達を逃がす為にわざと屋上へガルドさんを誘導してくれました。それならその意思を無駄にはならない。だから行きましょう」

テイラス「いいんでしょうか・・・」

タチマル「大丈夫です、ししょーは強い、負けません」

タチマルはニコツとほほ笑みそう言う。そんな彼に安心感を抱いたのかテイラスは「はい」とほほ笑み、二人は階段を下りた

ラグ「（二人を巻き込んだらマズイからこっちに来たけど・・・よかった。ちゃんと気付いてくれたみたいで）」

屋上へ着いたラグは心の中でそう思う。さっき階段を上がる際に降りる二人の姿を見たのだ。それもつかの間、ガルドが上がってきた

ガルド「なるほど、あいつらは安全な場所に・・・ってわけか」

ラグ「うん、やっぱり危ないからね」

ガルド「そうか・・・ではやる気に・・・なったか？」

ラグ「なってないよ・・・なれるわけがない。だって君は苦しみを知ってる人だから・・・」

ガルド「・・・そうやって甘い考えを持ち続けるから何も護れない
！！護りたければ・・・戦え！！力を手に入れる！！」

ガルドの言葉はラグの心にすごく刺さる。彼もまた「正しい」「こと
を言ってるから。護る為に力を得たい、それは以前の自分と同じで
ただがむしゃらにまっすぐな思いだったから

タチマル「ふう、とりあえずここまではきましたね」

ティラス「はい」

今タチマル達がいるのは城の入口、内部からは脱出していた。

タチマル「今のうちに牢屋の皆さんを助けましょう、早くここから
非難させないと危ないですから」

ティラス「そうですね、牢屋はこっちです」

タチマルの意見に賛同し、ティラスがタチマルを牢屋へと案内する。
そこにはもちろん兵士がいた

兵士「お前たちはなんだ」

タチマル「中の人を助けに来ました」

兵士「何だと！？者ども、かかれー！！」

リーダーらしき兵士が指示を出し、他の兵がタチマル達に襲い掛かる。しかしそんな彼らを「氷の龍」が攻撃、タチマルには近づけなかった

タチマル「この龍・・・アクアさん！？」

アクア「そっだよ」

タチマルが驚きながら龍の出現した方を見る。そこには牢屋にいたはずのアクア達がいた

タチマル「どうして・・・」

ポリズ「ラグから私やサンダースさんに電気信号が流れたんですよ。今脱出して」と

サンダース「んで脱出しようとしたらお前らが戦おうとしてくれていたってわけだ」

タチマル「そうだったんですか」

キノ「テイラスさん、怪我などはありませんか？」

テイラス「あ、大丈夫です。その・・・タチマルさんが・・・護ってくれましたから・・・」

キノガツサ「ひゅー！熱いな、おい!!」

ポリズ「キノガツサ・・・そんなハイテンションにならないでくださいよ・・・」

キノガツサの行動で周りは笑い少し明るくなる。そんな彼らの後ろにはライルとピカンがいた

テイラス「お父様、お母様！」

ライル「テイラス、無事だったか」

ピカン「よかった」

二人は娘の元気な顔を見てホッとした表情を見せる。よほど心配していたのだろう

キノガツサ「よかったな」

ポリズ「でもまだ終わってはいません」

アクア「ラグちゃん・・・」

そう、ガルドと戦っているラグだ。メンバーはラグのことを心配し城の頂上を見る。すると頂上から何かが落ちていく

サンダース「なんだ、あれ？」

ハスボー「ポケ・・・モン？」

キノガッサ「あれは・・・ラグだぞ!？」

アクア「そんな!」

キノガッサの言った通り落ちていくのは紛れもなくラグだ。しかしラグは地上に落ちる前に”ライトニングウイング”で羽ばたきなんとか衝撃を受けるのを回避した。そんな彼を追うようにガルドは城から飛び降りる。しかし地面からブロックのようなものが出現しその上にガルドは乗った。その繰り返しでガルドは地面に降りた

サンダース「あれが奴のダーク化の能力か・・・」

ポリズ「そのようですね」

ハスボー「・・・っ? ティラスちゃんどうしたの?」

ポリズ「？」

ハスポーの言葉にポリズが反応し、振り向く。そこにはなぜか苦しむティラスがいた。

ポリズ「大丈夫ですか、ティラスさん！」

ティラス「はあ・・・はあ・・・」

ポリズの言葉に答えずただただティラスは苦しそうになんとか息をする。

タチマル「一体何が・・・」

押されるラグ、苦しむティラス、そんな状況にメンバーは混乱を隠せなかった

第二百二十三話 VS ガルド（後書き）

ラグ「・・・僕戦うの嫌だ」

やっぱり

ラグ「ということはないけどさ」

あれ？

ラグ「たおさないといけないわけだし・・・でもやっぱり戦いにくいよ」

まあそこは頑張ってください（キリッ

第二百二十四話 ティラスの変化（前書き）

今回はティラスについてですね

タチマル「ティラスさんはどうしちゃったんですか!?!」

それは本編で!だよ

第二百二十四話 ティラスの変化

突然苦しみだすティラス、ガルドに押されるラグ、そんな状況に戸惑うチーム絆。そんな状況で一番優先して考えるべきはティラスについてだった

ティラス「ハア、ハア・・・」

タチマル「きゅ、急に・・・どうしたんですか？」

タチマルの質問にもティラスは答えられない。ずっと苦しそうにしていた

キノガッサ「おい、ポリズ、これはどういふことだよ!？」

ポリズ「私にもわかりません!彼女が病気だとかいうことは・・・?」

ライル「ありません、ずっと健康でしたから」

ライル達にすら苦しみの理由は分からない、それを知ったポリズの頭がフル回転した

ポリズ「（ということは昔からの症状ではないはず……でもライルさん達から逃げだした数日で発症する病気なんて……）」

ライル達の知らないところでこの症状の原因を得たのではないか、そうポリズは考える。そしてそれを考慮して考えると期間は逃げだしている愛だしかないのだ

ピカン「……あ、でもガラタンクに連れてこられてから数十日間
は私たちは牢屋に、ティラスはガルド君と一緒にいました」

ポリズ「……それは本当ですか？」

ピカン「はい」

ピカンの言葉でポリズの頭の中の謎は解けた。その数十日、そこで感染したのだ。しかもそれは恐らくもつともたちの悪い病気……いや病気と呼ぶべきかはわからないが1つ思い当たるものがあった

ポリズ「……皆さん、ティラスさんから離れて下さい」

タチマル「な、何を言い出すんですか！？ティラスさんは苦しんで……」

ポリズ「急いで！！取り返しのつかないことに……」

ポリZがそこまで言うのとタチマルとポリZの間に電撃が落ちた。二人は反応し避けたから良いものの受けていればダメージはくらっていただろう。タチマルなんかは水タイプだからなおさらだ

タチマル「この電撃・・・どういうことですか・・・」

タチマルが電撃の放たれた方向を見る、そこにいたのは

タチマル「テイラス・・・さん？」

先ほどまで苦しんでいた「テイラス」だった。テイラスはタチマルの問いに答えずただ下を向いていた。体の周りでは電気がバチバチと音を立てている

ライル「テイラス・・・？」

ピカン「これは一体・・・」

ポリZ「恐らく・・・ダーク化です」

キノガツサ「ダーク化！？でもテイラスに聞かなくて・・・」

ポリZ「忘れたんですか、キノガツサ。闇が周囲に移るって」

キノガッサ「!?!」

キノガッサの思考が記憶を呼び戻し、それは牢屋での話まで戻る。そして思い出した。ダーク化が移っている話を

キノガッサ「そうか、確かに言ってたな」

アカア「つまり、ガルドさんの闇が、ティラスさんに移った……ってこと?」

ポリズ「恐らくは。それがガルドさんのダーク化にひかれて強制発動しているのでしょう。喋ってない分、闇に取り込まれているのがよくわかります」

ポリズの冷静な分析にその場にいたポケモンは全員が納得する。1人を除いて

タチマル「……」

タチマルだ。タチマルは彼女の変化に驚き過ぎてずっとティラスを見てボーっとしている。恐らく今のポリズの話もほぼ聞こえていないだろう

ポリズ「タチマル君、残念ですがこれが現実です」

タチマル「・・・じゃあ・・・どうすれば・・・いいんですか」

ポリＺ「今までの経験からすると」「倒す」しかありません」

タチマル「!?!」

「倒す」という単語を聞きタチマルが反応した

タチマル「倒す? ティラスさんをですか? そんなこと・・・」

ポリＺ「ではいいんですか、このままでは闇にくわれますよ?」

タチマル「!?!」

ポリＺ「完全な闇になる前に・・・助け出して上げる・・・それが私達に出来ることはないですか?」

タチマル「・・・」

タチマルは黙り込んでいた。頭では倒さないといけないと理解できる。しかし現にそれをするとなるとやはり心が痛むのだ。その影響でしばらく黙っていたタチマルだったが数秒して口を開いた

タチマル「オイラに・・・やらせて下さい」

ポリZ「タチマル君に？」

タチマル「はい、オイラだけで戦わせて下さい」

ポリZ「タチマル君1人ですか？」

タチマル「はい、オイラがオイラの手で助けたいんです」

タチマルが真面目な表情でそう言った。その目からして本気、ティラスを倒して救って見せるという決心がよく分かった

ポリZ「分かりました、ティラスさんはあなた1人に任せます」

タチマル「ありがとうございます!!」

ポリZ「でも約束してください、必ず助ける・・・と」

タチマル「もちろんです」

そう言うとタチマルはティラスの方を見る。すでにシエルを構えている様子を見ると戦う体制は出来たようだ。ポリZ達はライル達に被害が出ないようにラグやタチマルの位置が見える限り離れる。今その二人から目を話しては状況が分からないからだ

タチマル「・・・ティラスさん・・・」

タチマルは悲しい目でティラスを見る。まさか自分がティラスを倒すなんて思ってもみなかっただろう。しかしあの時誓ったのだ。「自分の力で助ける」と

タチマル「いきますよ、”みずのはどう”」

タチマル”みずのはどう”を発動、水の輪はティラスへと向かって行きダメージを与えようとする。しかし

ティラス「”ひかりのかべ”」

”ひかりのかべ”によりそれは防がれる。遠距離攻撃はあまり聞かないようだ

タチマル「（でもだからって近距離で戦えばいつ電撃を受けるか分からない・・・）」「ここは！！」

何を思ったのかタチマルは突然目をつぶる。そして意識を集中させた

タチマル「”アクアイスウインドゴーレム”！！」

タチマルが技名を言った瞬間、タチマルの周りに水、氷、風が集まり1つとなり、巨大な巨人となる。タチマルの最強技の1つ”アクアイスウインドゴーレム”だ

タチマル「これなら近距離だけど遠距離で戦える。いきますー！」

それからタチマルは手に持つ貝を横に振る。するとゴーレムも自身の大剣をティラスに向かって振り当てる。その衝撃でティラスは少々吹き飛ばされた

タチマル「・・・」

タチマルは複雑な思いを持った。攻撃しなければいけない、しかし攻撃すれば目の前で起こっているようにティラスが傷つく

タチマル「頭で・・・頭で理解はしてる・・・だけど・・・辛い」

タチマルが悔しそうに歯を食いしぼる。どうしようもない状況にもどかしさを感じているのだ。するとティラスは倒れたの状態からゆっくりと立ち上がった

タチマル「やっぱりこれだけじゃ倒れてくれない・・・」

タチマルは改めて構える。また戦わなくてはならない。また傷つけない

タチマル「・・・」

タチマルが構えを崩さないように体に気合を入れる。しかしそんな彼の肝を抜くことが、起きた

ティラス「・・・タ・・・チマル・・・さん」

タチマル「ティラスさん!？」

ティラスはゆっくりと苦しそうながらほほ笑みタチマルに笑顔を見せた

第二百二十四話 ティラスの変化（後書き）

というわけでした

タチマル「ティラスさん・・・絶対助けますから!!」

意気込んでますね！そして忘れてはならないのが我らが主人公、ラゲ

タチマル「ししょーの方はどうなってますか？」

もちろん戦ってるよ。でもタチマルはティラスとのバトルに集中しなきゃ！

タチマル「あ・・・はい!!」

第二百二十五話 ティラスの笑顔とそして願い（前書き）

今回は久々に挿入歌入りです!!

ラグ「今回の曲は・・・」

『only my railroad』

ラグ「です!（、）、（、）」

なぜドヤ顔?

ラグ「なんとなくだよ、なんとなく。「とある科学の超電磁砲」ってアニメのOPだよね」

そうですね!そして・・・まあ今回はタチマル君が頑張っちゃいますよ!

ラグ「ちなみに作者さんいわく曲の「1番だけ」を流してほしいらしいよ」

ちょうどアニメのOPみたいな感じですね

第二百二十五話 ティラスの笑顔とそして願い

ティラス「タ・・・チマル・・・さん」

タチマル「ティラスさん!？」

完全ではないものの間に飲まれてしまったティラスを救おうと奮闘するタチマル。そんな彼に驚きの出来事が起きた

タチマル「まさか・・・戻ったんですか!？」

ティラス「いいえ、戻れたわけではありません。意識を取り返すことに成功しました、だからお話したいと思います」

タチマル「・・・はい」

タチマルは本当のことを言えば完全に戻ってきてほしかった。もう戦いたくはないのだ。しかし彼女はなんとか意識だけで自分の力で取り戻した。そのことに敬意を持って嫌な顔をせず話聞くことにした。しかし、彼女の口から放たれた言葉はとても意外なものだった

ティラス「今すぐ、逃げて下さい」

タチマル「・・・つえ？」

タチマルは思わず「つえ」とだけ言う。本当はちゃんと返事をしたかったがあまりこの事に言葉が出てこない。そんな彼にかまわずテイラスは話を進めた

テイラス「この体はもうすぐ闇の力で暴れだします。そうやってあなたを傷つけるのは嫌なんです。だから・・・」

タチマル「そんな・・・そんな理由で・・・オイラが逃げると思いますか？」

テイラス「思いません、あなたはとても正義感の強い人だから・・・でも！」

タチマル「でもじゃありません!!」

つぶやくようで、かろうじてタチマルに聞こえるぐらいの小さい声をかき消して、タチマルは叫んだ。それに驚いたのかテイラスは喋るのをやめる

タチマル「オイラは今、テイラスさん、あなたを護りたいんです。その証拠に言いました。「オイラはその笑顔を護りたいんです。どうかオイラに護らせてくれませんか？」って。そしたらあなたは「お願いします」と答えた、だから護らせてもらいます」

テイラス「ダ、ダメです。これ以上・・・もう・・・誰も傷つけない・・・」

タチマル「だから他の人が傷つかないようにオイラが助けます」

テイラス「でもそれではあなたが！」

タチマル「オイラ達は仲間です！」

テイラス「!？」

タチマル「オイラ達は仲間、仲間ってピンチな時に助け合うものなんです。今テイラスさんはピンチ、だからオイラは助けます」

テイラス「でも・・・きゃ!？」

テイラスの体から電撃が飛び出し、タチマルに襲い掛かる。それに反射的に反応したタチマルは右へと移動し、電撃を避ける。あたった地面を見ると黒こげになっており威力の高さがうかがえる

テイラス「やっぱり・・・ダメです。このままでは・・・あなたを傷つけてしまう・・・」

タチマル「大丈夫、オイラがちゃんと・・・助けます！」

そう言うとゴーレムは光の粒となり消えていく。タチマルがゴーレムの維持をやめたのだ。これから戦いがあると言っのに明らかにお

かしい

ティラス「なんで・・・ゴーレムを・・・」

タチマル「この技を使っていれば動けまなくなってしまうです。だから解除して動けるようにしたんです」

ティラス「でも接近戦になれば・・・」

タチマル「あなたの電気攻撃が来る・・・分かってます。ですから・・・」

タチマル「本気で生きてます」

その瞬間タチマルの周りで風が起き始める。それは数秒でタチマルを囲む小さな竜巻のようになり、威圧感をだしていた

タチマル「リミット・・・バースト!!」

集まった風は一気に吹き飛び、近くにあった石は飛ばされる。その影響は少ないもののティラスにも及んでいた

ティラス「これが・・・リミットバースト・・・」

タチマル「そうです、これがオイラの本当の力です」

ティラス「本当の・・・!?!」

ティラスがつぶやいた瞬間、彼女の周りで電気がビリィとうなる。まるで電気が「俺は負けない」とでも言っているようだ

ティラス「マズイ、闇が・・・強くなっていく・・・」

タチマル「大丈夫です、オイラはその闇を・・・倒します」

ティラス「うつ・・・うあああ!!」

刹那、彼女の体から複数の電気の光線が放たれる。大きく避けないとあたるぐらいの数だ。そこでティラスは叫ぶ

ティラス「避けて!!」

タチマル「避けません!!全部・・・落とします!!」スターダストブリザード」

しかしそれに従わず、タチマルはシエルブレドを構えて一振りする。するとタチマルの頭上から大量の氷柱が発生し、電撃にあたる。そして全ての電撃を凍らせた

ティラス「凍った!？」

タチマル「この技は超低温の氷を作り出し、落として攻撃する技です。これで凍らせました。水では防げなくとも氷ならあなたの電撃を防げます!！」

タチマルはシエルを構えなおしながらほほ笑んだ。そのほほ笑みは一瞬ティラスを安心させる。しかしそれは本当に「一瞬」だけであり、彼女の中で電撃が生成される感覚がくるとその感情は消えた

ティラス「でもダメです!!まだ私の体は止まらない、また攻撃を・・・あつ!！」

ティラスが手を前にかざして電気の球を作りそれを放つ。それはさつきよりも大きい分”スターダストブリザード”では防ぎきれないだろう。しかしタチマルはティラスに返事をしながら構えた

タチマル「いいですよ、あなたの攻撃・・・全て防ぎます!！」

その瞬間タチマルは迫ってきた電気の球をシエルで切りつける。すると

シュパッ!

・・・と電気の球は真つ二つに割れてしまった。二つに割れて原型を保てなくなつた電気の球は小さな光となり消えた

テイラス「あ・・・」

タチマル「言つたでしょう、避けません。あなたの攻撃・・・闇は全て防がせてもらいます。そして・・・一撃だけ・・・一瞬だけ・・・痛いのを我慢してください。いいですか？」

テイラス「・・・はい」

これらのことからタチマルを完璧に信頼したテイラスは無理とは言わず、痛みに耐えることだけを約束する。そんな彼女の返事にタチマルはほほ笑み、走っていく。そんな彼に対して闇は抵抗し、テイラスの体を使つて電気を生成、それは無数の雨のようにタチマルに向かつていった。しかし彼はやはり逃げなかつた

タチマル「オイラには・・・効きません!!”こおりのまい”!!」

タチマルは一度止まりジャンプして体を回転させ、同時にシエル周囲に振る。するとタチマルにあたるはずの電雨はシエルに弾かれ、タチマルにあたらない。しかも1つならまだし「全てのそれ」を弾き、回避に成功する。

テイラス「あれを全て・・・」

タチマル「まだですよ!!」

以上に降りたタチマルはタンツと地面を蹴り、テイラスに向かっていく。一方闇も抵抗しようとテイラスの手に電撃を集束させて大剣を生成、テイラスに持たせたタチマルに向かって振り落とさせる。しかしタチマルは怯えてはいない

タチマル「剣ですか・・・それなら負けません!!」 シェルブレード”!!!”

タチマルは”シェルブレード”で貝剣を生成、それはテイラスの剣に比べればとても小さい。しかしそれでもタチマルは”シェルブレード”を雷剣に構える。そして

タチマル「シェルブレード バージョン極水氷風斬」

そう言いながら“シェルブレード”にエネルギーを溜めて雷剣を受け止める。するとその場に凄まじい衝撃波が発生、しかしちゃんと雷剣を受け止めていた。それどころか・・・

テイラス「す、すごい・・・」

タチマル「ハアアアア!!」

タチマルが更に力を込める。すると雷剣はピキピキと音を立てて、そして

テイラス「お、折れた!？」

そう、折ってしまったのだ。まるでテイラスの闇を折るように・・・

タチマル「最後です、ちょっと我慢して下さいね」

タチマルがテイラスに切りかかる。それにテイラスは目をつぶって答えた。そして

タチマル「シエルブレード”!”」

タチマルは勢いよく”シエルブレード”を振り、テイラスにあてる。するとテイラスは体は空中に浮き、飛ばされる。そして落ちる。

・・・はずだったがタチマルがスライディングしてなんとかキャッチ、無事に保護することに成功した

テイラス「タチマルさん……」

タチマル「もう……大丈夫ですよ」

ほほ笑いながら言うタチマル、そんな彼の表情を見て安心したのか
テイラスはほほ笑いながら

テイラス「タチマルさん……ありがとう……」

タチマル「……えへへ、どういたしまして……です」

お礼を言われて照れているのかタチマルは少し赤かった。そんな彼
を見てテイラスはほほ笑む。しかしそんな平和な光景はあつと言っ
間に過ぎて「ドーンッ」と言う爆発音が二人の耳に入った

テイラス「ラグさんは……大丈夫でしょうか……」

テイラスが少々不安そうに言った。しかしそれに対してタチマルは
真剣な眼差しで答えた

タチマル「大丈夫です。ししよーは……ししよーですから」

ラグ「ハアハア・・・」

ガルド「どうした、もう終わりか？」

膝をつくラグに挑発するような表情のガルドが言った。そんな彼の問いにラグは懸命に答えた

ラグ「まだ・・・まだだよ・・・」

ガルド「つたく、お前もしょうがない奴だな。力を持っているのにそれを有効に使うとしない。力があれば・・・全てを倒し、全てを護れる・・・そう、力だけこの世界を意のままに操れるのだ！」

ラグ「!？」

ガルドの言葉を聞いた瞬間、ラグの表情が変わり立ちあがる。そしてガルドを見た。それは怒りの表情、その証拠に周りには電気が飛び交っていた

ラグ「それは本当に思ってることなの・・・？」

第二百二十五話 ティラスの笑顔とそして願い（後書き）

というわけでした」

ラグ「今回はタチマル君に新技だね」

”スターダストブリザード”でしょ。あれはフォックさんが原案の技です（感想蘭参照）
フォックさんありがとうございました！！

ラグ「ちなみに感想蘭に技名とその説明を書くラグ冒でその技が登場・・・かも。だって！」

採用の場合がありますよ（笑）ってなんか僕偉そう・・・

ラグ「というわけで次回は・・・？」

君だね

ラグ「やっぱり・・・」

そして挿入歌もあります（キリッ

ラグ「曲は？」

それはシークレット！

ラグ「やっぱりかあ・・・」

第二百二十六話 ガルドの思いと超速雷弾（前書き）

さて今回は・・・

ラグVSガルド

ですー!!

ラグ「今回僕勝てるの?」

どうでしょう?

ラグ「噂の暴走は?」

どうでしょう?

ラグ「もう、そればかりじゃん!」

まあまあ、そして今回の予告していた挿入歌は・・・

『only my railgun』

ですー!(´・ω・´)

ラグ「作者さんもドヤ顔!?しかも前回もこれじゃなかった?」

そだよ。ちなみに今回はフルでお聞きください!

ラグ「つまり長編ってことね。」

曲を聴きながら頭の中でアニメ化してください!!

ラグ「ちなみに最初の演奏を抜いて、いきなり静かな部分から聞いてほしいなあ」（歌詞は規制に引っ掛かるといけないので乗せてません）

さあ!」とある科学の超電磁砲^{レールガン}」のOPと共に、ラグ冒独特の感動を・・・

「アララ&ラグ」どつぞ!!」

第二百二十六話 ガルドの思いと超速雷弾

ガルドの言葉に怒り、ついに本気を出したラグ。周りにはバチバチと電気の音が飛びかい、その怒りのボルテージ現わしていた

ラグ「それは本当に思ってることなの・・・？」

ガルド「もちろんだ、力があれば・・・どんな者でも倒すことができれば、全てを護れるからな!!」

そう言いながらガルドはラグにお得意の”はかいこうせん”を放つ。しかしそれはラグの”サンダーボール”によって簡単に防がれる。しかしこれはまだガルドに想定内のことだ

ガルド「やはりその力・・・素晴らしい、それを手にすれば・・・きつと・・・護れるものは増える。なんとしても、その力を・・・」

ラグ「そんなこと・・・ないんだよ」

ガルド「何だと!？」

ラグ「この力は確かに強いと思う。でも、力だけじゃダメなんだ・・・」

ラグは少し悲しそうにうつむきながらガルドに言う。しかしガルドはその言葉を信じず否定した

ガルド「そんなこと・・・あるわけがない！あるはずがない！！」
「がんせきふうじ」

そう言いながらガルドは”がんせきふうじ”を使ってラグを岩に閉じ込める

ガルド「これでお前は逃げられない、お前に十分なダメージを・・・与えられる！！」

ラグ「・・・試してみる？」

ガルド「！？その言葉・・・後悔させてやる！！覚悟しろ！！」

ガルドはラグの言葉に怒ったのか口に闇を集める。その量は半端ではなく、彼の体内のすべての闇を集結させているようにも見える

ガルド「さあ、くらえ、これが俺の力だ！」メタルダークブレイカ
「！！！！」

ガルドはそれを一気に放ち、ラグへと向かわせる。それはまさしく

「黒き光線」であり、彼の「闇」を現わしたような色だった。それはまっすぐラグに向かって行き、”がんせきふうじ”で動きを封じられたラグはそれをくろうしかなかった。そして大きな爆発音がその場を襲った

ガルド「どうだ、これが俺の力だ!!」

ガルドが爆発によって発生した煙に向かって言った。自分の力がラグに・・・デンライジに勝利したという喜び故だろう。しかし次の瞬間、彼の予想は大きく外れ”がんせきふうじ”の岩もろとも、煙は一瞬にしてのけられた

ガルド「なっ・・・どういうことだ・・・俺は確かに・・・」

ラグ「倒せてないよ」

ガルド「!?!」

まだ少し残っている煙、その中からする声に思わず驚くガルド。その声の持ち主は先ほど”がんせきふうじ”によって行動を封じられ、”ダークメタルブレイカー”をくらったはずのポケモンーラグだった。”ライトニングウイング”を発動しているところを見ると煙たちはあれによつてのけられたようだ

ガルド「な、なんで・・・」

ラグ「君の攻撃の前に”サンダーボール”で”サンダーガード”、
防御したんだよ。しかも3つ使った。憎しみしかない・・・あれぐ
らいの攻撃なら防御できるよ」

ガルド「あれぐらい・・・だと!? ふざけるな!! 生まれつき強力
な力を持っているお前に何が分かる!!」

ラグ「僕が言いたいのは生まれつきとかそういうことじゃない。・・・
大切なものに気付いてほしいんだよ!!」

ガルド「何が大切なものだ、何が・・・力こそが・・・力が・・・
全てにおいて最重要なんだああ!!」

ラグ「違うよ、違う・・・大切なのは・・・力の強弱じゃない!!」

ガルド「黙れ・・・黙れエエエエエ!!」

そう言つてガルドは拳に気を溜めて”きあいパンチ”の準備、その
ままラグへと走っていく。そんな彼に対してラグは何も行動をとら
ない。そして

ガルド「うおおおお!!」

ガルドの”きあいパンチ”がラグに炸裂する。直前に”サンダーボ
ール”の発動も無ければ”ライトニングウイング”も広げていない。
ラグはただ数メートル吹き飛んだのだ

ガルド「どうだ!!力は無くとも思いの強さで勝てる・・・弱者は強者に勝利することができんだ!!」

ラグ「・・・そうだね、僕もそう思うよ・・・」

ガルド「!?!」

倒した。そう思って放った言葉にラグが返事をする。その瞬間ガルドは「そんなバカな・・・」と言った表情をする。そんな彼の目の前でラグはゆっくり立ち上がりながら言った。

ラグ「弱者が強者に思いの力で勝てる・・・そうだよ、それほど思いの力って強力だね・・・」

ガルド「お前に・・・お前に何が分かる!?!お前と言う強者に思いの力で俺と言う弱者は今、勝利しようとして・・・」

ラグ「それは違うよ」

ガルド「何だと!?!」

ラグ「僕は強者じゃない・・・弱者なんだよ」

ガルド「バカなことを言うな!お前はデンライジと言う能力を持っている・・・強者で・・・」

ラグ「僕は強くなってる。でも……」

ラグ「みんながいれば頑張れる……ただそれだけだよ」

その瞬間ラグの手にカリバーが握られ、構える。ガルドも反応し構えたがそれはすでに遅かった

ラグ「遅い！」 プラズマ……」

ガルド「なっ……」

ラグ「クラッシャーアアア」！！」

ラグはすでにガルドの背後にいた。しかも手に握られたカリバーには電気がためられている。電気を纏った攻撃”プラズマクラッシャー”、それをガルドはくらい数メートル飛ばされた

ガルド「な、なんだ！？ 奴の速度が……」

ラグ「グランドエクスクラッシャーアアア」！！」

ガルドはよるめきながら彼の姿を確認しようとする。しかしその彼、

ラグは一瞬でガルドの前に現れた。しかも

カリバーにエネルギーをチャージして

ガルド「ぐっあああああ」

”グランドエクスクラッシュ”を受けたガルドが地面に叩きつけられる。彼の弱点である地面タイプの技、しかもグランドカリバーの最上級の威力を持つ技をくらったのだ、無理もない。地面は周囲にクレーターを作っていた。そして

ラグ「デンインパクト」！！」

攻撃は止むことなく、ラグは拳に電撃を纏わせてガルドにパンチする。感情の高さが影響するその技は非常に強力になっており、あたたかガルドは城の真下に飛ばされた。ラグは怒っているのだ。彼の言葉一つ一つに怒りを感じ、ついに制限を超えた。だから高威力の技をガルド連発したのだ

ガルド「くそっ！」

ラグ「!?」

ガードが起き上ろうとしたことに警戒したラグはカリバーを背中に装備し、両手を前に出して電気の弾を作る。しかしガード起き上れずに抵抗しなかった

ガード「やはり・・・力の差・・・なのか」

ラグ「違うよ。力の差じゃない。思いの・・・方向の差だよ・・・」

ガード「ふざけるな！！俺だって弟・・・ガルスや国民のことを思う気持ちは負けてなんか・・・」

ラグ「じゃあなんで他の人は傷つけていいと思うの？君は悲しい思いを体験してきた。だったらそれを生かして人を救うことができるでしょ？少なくとも「力」だけを求めるなんてことにはならないよ」

ガード「そんなの・・・」

ラグ「間違いに・・・気付いてるんでしょ、だったら・・・やり直そうよ」

ガードはその場で黙り込む。しかしラグにはなんとなく分かっていた。彼ならちゃんと分かってくれる・・・と

ラグ「君にはまだやり直すことができる。ちゃんと・・・生きてる。間違いを正すことが・・・出来るんだよ」

ガード「!?!?」

ガルドも表情が何かに気付いたようにハツとする。そして立ち上がりながら言った

ガルド「・・・そう・・・だな。そうなんだよな。ありがとうラグ。俺は多分、それに気付いていた。でも自分を自分で止められなかった。だからずっと苦しかった。ずっと力のみを求めてて・・・でも今日お前が倒してくれたおかげで気付くことができた。自分の・・・間違いに。ありがとう・・・ラグ」

ラグ「・・・うん」

お互いがほほ笑み、やっとのことで心を通じさせる。これが「バトルが生んだ絆」だ

しかし二人が和解したその時、ある異変が起きた。それも・・・最悪のだ

アクア「あ！危ない！！瓦礫が！！」

サンダース「このバトルの最中の攻撃で崩れたか！！」

城が崩れて瓦礫は確かにガルドに向かつて落ちようとしていた。しかしガルドは全く抵抗がない。まるでそのまま死のうとしているようだ。その証拠にガルドは落ちてきそうなことを確認すると語り始めた

ガルド「そうか、罰があったたんだな・・・力を求めすぎたから・・・」

ラグ「・・・」

ガルド「ふっ、無様だよな。力を求めた結果がこれだ。結局何も護れずに終わってく・・・」

ラグ「・・・」

ガルド「やっと気付けたのにな、これからだったのに・・・な。悔しい・・・でも仕方ないよな。ありがとうラグ。本当にあり・・・」

ラグ「本当に良いの？」

ガルド「？」

ラグ「君は弟さんの分まで生きなくていいの？」

ガルド「!？」

瓦礫は着々と迫ってくる。そんな中、ラグの言葉を聞いたガルドの目が変わった。そう、弟という単語が出てきた瞬間に彼の心が変化

し始めたのだ

ラグ「君が護りたかったものは……どうでもいいものなの？」

ガルド「そんな、どうでもなんか……」

ラグ「じゃあ正直に言いなよ」

ガルド「!？」

ラグ「君が今どうしたいのか、はっきりと!」

ガルド「お、俺は……」

ラグ「早く!」

瓦礫の迫る中、ガルドが叫んだ

ガルド「俺は……まだ生きていたい。ガルの分まで……この国みんなを……護りたい……生きたいんだあああ!!!」

ラグ「分かった!!それで十分!!カリバー!」

カリバー「ロードカートリッジ!準備完了です!!」

カリバーがカートリッジをロード、電気の塊に膨大なエネルギーが

集まる。それに対して瓦礫はもう地上まで落ちてこようとしていた。あと数秒でガルドに激突してしまう、それ故にガルドは悔しさから歯を食いしばる。

ラグとの会話でできた弟・・・ガルン。彼分まで生きることが・・・
・大好きなみんなを護れないことが彼は本当に悔しかった。ようやく気付けたのに・・・

「生きたい」

彼はそう願った。それに反応するようにラグの周囲の電気はバチィバチィと激しい音を立てる。

ガルド「（でも・・・間に合わない）」

ガルドは瓦礫を見て自分の願いが叶わないことを確信した。自然と涙が出てこようとする。しかし、現実

ラグ「撃ち抜け！！全てを貫く雷いかすちの弾丸！」 エレクトリックレールガン”！！”

違った。

ラグが前に作っていた弾を放つ。するとその弾、”エレクトリック

「レールガン」は黄色と青の色を纏いながら凄まじい速さで、2秒ほどでガルドの頭上まで届き、まるで1つのビームの様にまっすぐ瓦礫へと向かって行く。そして落ちてくる瓦礫を粉碎しながら進んでいき、ガルドにあたろうとしていた瓦礫を粉碎すると消えていった

アクア「な、何あれ・・・」

キノガツサ「凄まじい威力だな・・・」

ポリZ「それより驚くべき点は速さです。計算ではラグとガルドさんでは約30メートルはある・・・」

キノ「秒速15メートルということですか!？」

サンダース「それで間に合ったのか・・・」

ハスポー「ラグすごい!!」

タチマル「流石・・・流石ししょーです!!」

ティラス「す・・・すごい・・・」

メンバーも驚きつつ喜ぶ。しかしティラスとガルド、この二人はまだ驚きを脱出できていなかった。特にガルドの場合、粉碎された瓦礫が落ちてくるがどれも粉々で自分に怪我など与えられる大きさではなかったことに口を開き啞然としている。あまりのことに涙も出ていなかった

ガルド「この威力・・・速さが・・・デンラージ・・・ラグの・・・
思いの力・・・」

ラグ「大丈夫？間一髪だったね」

ガルド「!？」

衝撃でひれ伏せていたガルドは反射的に上を見る。そこには手を差し伸べるラグがいた

ラグ「これで君はまた「生きれる」。これからやってきたことをやり直すことができる。もう命を無駄にしようとしちゃダメだよ？君の命はとつてもとつてもかけがえのないものなんだから」

ガルド「・・・ああ・・・ああ!!」

ラグのほほ笑みにガルドは自然と目から先ほどの目涙が出てきて止まらなかった

空にはまだ”エレクトリックレールガン”によって生まれた電気が舞っており「バチバチ」と少々ながら音を立てている。

まるでガルドの生存を祝福するように、そして

ガルドに「これから頑張れ」と応援するよつに

第二百二十六話 ガルドの思いと超速雷弾（後書き）

ラグ「勝ったああ!!」

やったね!しかもガルドまで救っちゃって……（感動の涙）

ラグ「そして今回出てきた技が……」

”エレクトリッククレールガン”ね、元ネタはもちろん「とある科学の超電磁砲」ですが、実際のあれとは違いますよ

ラグ「どこが？」

それは他のお話で。まあコイン使っていない時点で一緒ではないですよ？

ラグ「確かに……」

そして今回出てきた第二章のテーマ「命」です

ラグ「確かに大切だね。だからこそ「死ね」とかは言ってほしくないよね」

そんな願いも込めてのテーマです

第二百二十七話 プラスとマイナス（前書き）

今回はこの題名です！

ラグ「プラスとマイナス？どついう意味？」

これが「正体」だよ！！

ラグ「なんの？」

それは本編で！！

それと今回ラグ冒の声優の皆さん（仮）を考えました。なので後書きに手発表します！！

第二百二十七話 プラスとマイナス

ガルドを倒し、彼の心の闇を打ち破ったラグ達チーム「絆」。んな彼らは今、ガラタンのリフレッシュセンターにいた

ガルド「本当にすまなかった」

ガルドが深々と頭を下げた。自分がダーク化し迷惑をかけたことに対しての謝罪だろう。

ラグ「頭を上げてよ。もう何回も聞いたからいいんだよ」

ラグが苦笑いで答える。実はこの謝罪、さつきから数十回もしており、もはや正確な数は覚えていない、それほど謝っているのだ

ラグ「幸い君も自分が悪かったってわかってくれた訳でしょ？」

ガルド「ああ」

ラグ「だったらそれでいいよ、それで終わり、だから謝る必要もないんだよ」

ガルド「しかし・・・」

キノガッサ「あゝもゝ．．．」

とそこへキノガッサが頭をかきながら出てくる。そして

キノガッサ「うちのリーダーはな、こつという性格なんだよ、だからもう謝らなくていいんだ。実質おまえと戦ったのはラグだけだろ？」

ガルド「ああ」

キノガッサ「だったらそのラグが良いって言ってるんだ。それでこの話も終わりだ、違うか？」

ガルド「．．．そうだな」

ガルドはキノガッサの意見に反論できなかった。正当だからだ。ガルドはようやく落ち着いたようで猫背にしていた背をまっすぐに戻す。そして

ガルド「俺は少し外に行つて外の空気を吸つてくる」

キノガッサ「ああ」

ガルドが外へと向かった。そこへ他のメンバーもやってきた。しかし何があつたのかポリズとハスボアの姿が見えない

ラグ「ってあれ？ポリZとハスボーは？」

サンダース「何でも調べ物をしているらしくてずっとパソコンルームに入ったまんまなんだ」

ラグ「へえ、調べものかぁ……」

ティラス「あの……ラグさん……」

ラグ「ん？」

突然ながらティラスがラグに話しかける。いきなりだったが彼女の声小さいこともあり、驚くことはなかった

ティラス「1つお聞きしてもよろしいでしょうか？」

ラグ「なに？」

ティラス「あなたがガルドさんとの戦いで使われた”エレクトリックレールガン”……あれだけの速さを出す技なので相当なエネルギーを使うと思うんですけど、あの技について教えてくれませんか？」

タチマル「あ、オイラも聞きたいです！」

キノガツサ「俺も聞きたい！」

アクア「あ、私も！」

サンダース「俺も興味あるな」

キノ「是非聞きたいです」

ラグ「いいよ。少し長くなるかもだから座ろっか」

ラグの言葉に納得し、全員がイスに座る。するとラグは口を開いた

ラグ「まずあの技はね、あの戦いの中でいきなり使えるようになった技なんだ」

ティラス「いきなり……ですか？」

ラグ「うん、実際はガルドさんとの戦いで使おうとしたのは“サンダーボール”なんだ。だからあの時ガルドさんが話しをせずに向かってきたら単なる“サンダーボール”としてあの電気の球は使ってたよ」

キノガツサ「じゃあいつ“エレクトリックレールガン”に変わったんだ？」

ラグ「瓦礫が落ちてきそうな時だよ。あの時「助けたい」って思ったら腕に変化があって……」

キノ「変化……ですか？」

ラグ「うん、右腕に黄色い電気、左腕に青い電気が集まったんだ」
タチマル「ってあれ？ししよーの電気って普段は黄色い電気でしたよね？」

ラグ「そう、だから変化なんだ」

ラグの普段使う電気はいつでも「黄色い」だった。実際“デンインパクト”も“ライトニングウイング”、カリバーにより発生する電気ですら黄色いだ。青い電気なんて発したことはなかった

ラグ「それからあとは目の前の電気の球が今にも飛んできいそうだから腕に力を入れたら・・・」

サンダース「あの速度で飛んでいったわけか・・・」

ラグ「うん」

ラグは話し尽くした感のある言い方をした。本人は話し尽くしたかも知れないがしかし、メンバーとして謎だらけ、逆に謎が増えたくらいだ

サンダース「・・・難しいな・・・」

テイラス「すいません、興味本位で聞いてしまって・・・」

サンダース「いや、大丈夫だ。俺も聞こうとは思ってた、結果は同じさ」

サンダースがテイラスをフォローする。彼女に自分の責任だと自身を責めてほしくないのだろう。と、そこへ

ポリズ「いやー、すみません。非常に興味深くてついつい入り込んじゃいました……ってあれ？」

ハスボー「なんかシーンとした空気……どうしたの？」

タチマル「あ、ポリズさんにハスボーさん」

キノガッサ「それがラグの“エレクトリックレールガン”の正体がわかんなくてよ……。それでな」

ポリズ「そうなんですか」

サンダース「ポリズはなんか気になることがあるって言ってたよな？それ何か分かったか？」

ポリズ「はい、それで……調べてたことって言うのが……“エレクトリックレールガン”についてなんです」

キノガッサ「マジか!？」

キノガツサが目の前のテーブルに手をつきながら言う。そんな彼に
ポリZは苦笑いだっただ

ポリZ「ホントです。嘘をつくと思います？」

アクア「つきそうにないね。それで、何が分かったの？ラグちゃん
によると黄色の電気と青い電気があるって話しんだけど・・・」

ポリZ「それが重要なんです」

ポリZが急に真面目な表情をする。普段から真面目だが今回は特にだ

ポリZ「実はその2色の電気は「プラス」と「マイナス」の電気な
んです」

サンダース「プラスとマイナスだと？」

ポリZ「はい」

ご存じの方も多いと思うが電気にはプラスとマイナスが存在する。
この2つは別々であり、互いに違い引きつけ合い、同じであれば
反発しあう、という性質を持っている

ポリZ「ラグは”デンインパクト”によってプラスの電気をガルド
さんに付けた。そして”エレクトリックレールガン”に見られた青

い電気がマイナス、と考えれば、ガルドさんのプラス、レールガンのマイナスで、その引きあう力を利用すればあの速度が出てもおかしくありません」

キノ「でも待つてください。あの時には黄色の電気も見えました。もしあれがプラスであればガルドさんのプラスと反発して速度が落ちるのではないでしょうか？」

ポリズ「確かに落ちます。しかしあの場でプラスを持っていたのはガルドさんだけではありません」

キノガツサ「どうということだ？」

難しい話になんとかついて行こうとするキノガツサが質問をした

ポリズ「城で戦っていたならあそこにもプラスの電気はありますよね？そしてその城、瓦礫を”エレクトリックレールガン”は撃ち抜いた……」

アクア「そっか、瓦礫にもプラスの電気があったんだ！」

ポリズ「そうです、ですから速度は落ちなかったんです」

テイラス「でもなんでわざわざそんなことをされたんですか？プラスを入れなければもっと早かったのに……」

ポリズ「それにも理由があるんですよ」

テイラス「理由……ですか？」

ポリズ「はい」

テイラスの問いにポリズは優しく微笑みながら答えた

ポリズ「あの技にプラスの電気を流した理由、それは「コントロール力を保つため」です」

キノガツサ「どういうことだ？」

ポリズ「普段のラグはプラスの電気を使っています。でもレールガンの電気は青、マイナスの電気を使っていたんです。ですから普段使っていない電気を使うこととなり、不慣れからコントロールをミスする場合があります、だから慣れているプラスも入れることで速度とコントロール性能の2つを両立したんです」

キノ「なるほど、そうすることでガードさんのもつプラスを活かしつつガードさんではなく瓦礫に攻撃できる、とういうわけですね」

ポリズ「そういうことです。これで合ってますか、ラグ？」

ポリズがこれまでのことをラグに聞く。こっちは説明したもののやはり使用したのはラグだ。もしかすると違う部分もあるかもしれない。そんな気持ちのこもった言葉にラグは

ラグ「ZZZZ・・・ん・・・？あ、ごめん。呼んだ？」

寝ていた

ポリズ「寝てたんですか！？」

ラグ「いやあ、なんだか難しそうな話しだったんで」

アクア「まあラグちゃんらしいと言えばラグちゃんらしい・・・かな」

みんなラグの性格を知っているからか笑ってその場を済ます。すると

ガルド「おい、みんな！」

ラグ「ガルドさん、どうしたの？」

サンダース「とりあえず落ち着けよ」

ガルド「それが落ち着いてもいられないんだよ！」

ガルドが落ち着けず、慌てながら喋ろうとする。果たして何があったのか！？

第二百二十七話 プラスとマイナス（後書き）

ラグ 代永翼 さん

選抜理由：

大まかな理由は男性でありながら低くなく、だからといって高くもなく、その中間をとれる存在であったため。

詳しい理由としてはヴァンガードの「先導アイチ」役で「僕」という一人称を使っており、一人称に関して本人も違和感なく収録できるのではないかということ、声質的に落ち着いた声を発することが出来、それに加えて戦闘シーンもテイルズで挑戦しているのでラグのセリフで多いそれらを両方出来ると判断したため選抜させていたことができました

アクア 三森すずこ さん

選抜理由：

大まかな理由は少し明るめの女の子の声が出せるため。

詳しい理由としてはシリウスで暗い雰囲気の中でも少し明るめの声でシリウスと明るさを両立できる、ラグへのツッコミも明るく感情のこもった「愛のツッコミ」が出来ると判断したため選抜させていただきました

サンダース 森久保祥太郎 さん

選抜理由：

大まかな理由としては少しおらかな感じの声がかっこよさをだしているから。

詳しい理由としては少し低めの声であり、年齢的に17〜19のサ
ンダースにぴったり声年だと判断し、演じられるキャラも大体それ
ぐらいだったので慣れておられると思ったため選抜させていただきました

キノガツサ 鈴木達央さん

選抜理由：

大まかな理由としてはギャグとシリアスでの声の使い方が上手であ
ったため

詳しい理由としてはこの人の場合声、というよりも性格であり、デ
イsgaia4での「ヴァルバトーゼ」の物語での「シリアス」とイ
ワシに関しての「ギャグ」の使い方が見ていて非常にすばらしいも
のだったためそれを生かせるのではないかと考えたため選抜させ
ていただきました

キノ 佐々木未来 さん

選抜理由：

大まかな理由としては優しい声質をされており、それはまさしく「
癒し」であるため

詳しい理由としてはミルキイホームズで主に敬語を使うエリー役を
されていたため代永さんと同じく違和感なく演じることができ
るのではないかと、また性格上ミルキイのファンブックによると動物好き
とのことなので「動物に優しく出来る」「人にも優しい」ということ
で選抜させていただきました

ポリZ 水橋かおり さん

選抜理由：

大まかな理由としては落ち着いた声であり、状況の分析など頭のいいキャラであるポリZの特徴を捉えた声ではないかと判断したため詳しい理由は「リリカルなのは」でユーノ役をされており、そのキャラが説明をする際に落ち着いた声であり、僕がポリZの声に求めていたものだったので選抜させていただきました

ハスボー 徳井青空 さん

選抜理由：

大まかな理由としては声の質的に少年であるハスボーに合うと判断したため

詳しい理由としては彼女自体が僕っこであり、演じる際にいつもどおりの口調で話せるのではないか、またミルクイファンブックによると「マイペース」とのことなのでいつもマイペースなハスボーは似ているのではないかということと選抜させていただきました

タチマル 今井麻美 さん

選抜理由：

大まかな理由としては少年ながら少し高い声であり、まだ声変わりのしていないタチマルにぴったりだと判断したため

詳しい理由は少し高めの声により、「オイラ」という一人称が引き立ち、少年っぽさが出るのではないかと判断し選抜させていただきました

テイラス ゆかなさん

選抜理由：

大まかな理由としては優しい声であり、キノと同じく「癒し」と判断したため

詳しい理由としては彼女のほんわかした声と「お姫様」というテイラスのポジションが非常にマッチしており、「かわいい」という印象で結びつくため選抜させていただきました

というわけで仮決定です

ご協力していただいた那音さん、獣人（罪人）さん、ありがとうございました！！

第二百二十八話 本当のこと（前書き）

今回はガルドの慌てていた理由が明らかにつ！

ラグ「なんで？なんでガルドさんは慌ててたの！？」

それはね・・・

ラグ「ゴクッ」

本編で・・・だよ（キリッ

第二百二十八話 本当のこと

急ぐガルドに言われてラグ達チーム「絆」は今、ガラタンクのある通信室に来ていた

ラグ「わあ、凄い・・・機械が沢山ある・・・」

ポリズ「どれも通信用の機械ですね」

ガルド「ガラタンクは他の街と少しばかり距離があるからな。こつやって専用の機械で連絡をとってるんだ」

アクア「へえ」

ガルド「つとそんなことより・・・こつちだ」

ガルドは説明を終えると用事を思いだしたようで更に奥へと急いで行く。それにつられるようにラグ達もついて行く。そして

ガルド「着いたぜ」

キノガッサ「なっ、なんだここ!？」

キノ「大きいですね・・・」

ラグ達が着いた場所、そこはこの通信室の一番奥にあり、いわば「ガラタンク全体の通信機を中心」ともいえる場所であった。故にとっても広い

サンダース「これは凄いな・・・」

ハスポー「なんか秘密基地みたい」

タチマル「そうですね、確かにそれっぽいです」

ティラス「それで・・・どうされたんですか？」

ガルド「ああ、実はな・・・」

ティラスに聞かれたガルドがゆっくりと口をあける。そして衝撃的な一言を放った

ガルド「ガルンが・・・生きていたんだ」

ティラス「え!？」

タチマル「それ、本当ですか!？」

ガルド「ああ、さつき連絡が入ったんだ・・・どうやらあの災害の後インルーラの医療施設に送られて、この数年間、ずっと眠ってい

たらしい。それがさっき目を覚ましたそうなんだ」

ガルドがすごく嬉しそうに言う。まるで今にでも泣きそつだ。そんな表情をしながら彼は

ガルド「なあラグ・・・」

ラグ「？」

呼びかけられたラグが反応しガルドを見た

ガルド「生きてれば・・・こんなミラクルも起きるんだな・・・」

ラグ「・・・うん」

ガルド「生きるって・・・すごく素晴らしいことなんだな・・・」

ラグ「うん・・・うん・・・」

ガルド「あの時・・・助けてくれて・・・ありがとな」

ラグ「・・・うん!!」

ガルドはもちろん、ラグの瞳もうるつると涙を浮かべている。他のメンバーを見ても同様に感動しているようだ。そんな中、ガルドが

涙を拭って言った

ガルド「それでな、俺は一刻も早くガルの元に行かなくてはならない」

ポリズ「そうですね、せつかくですから早く行ってあげて下さい」

ガルド「ああ、そこで悪いんだがお前達に頼みがあるんだ」

ハスポー「お願い？」

キノガツサ「なんだよ、女の子関連なら問題なくオツケーだぜ」

キノ「それを言わない！」

キノがキノガツサの頭を「コツン」と叩く。もちろん痛くはないだろうがキノは相変わらず呆れた表情だ。そんな二人のやり取りに苦笑いしつつガルドは答えた

ガルド「実は「ガラタンク遺跡」に行つて欲しいんだ」

アクア「ガラタンク遺跡・・・？」

ラグ「それって単純にガラタンクにある遺跡・・・だよな？」

ガルド「ああ、この街の発掘中の遺跡だ。その遺跡でどうやら新しい石板が見つかったようだな、それについて呼ばれていたんだ」

サンダース「なんでお前が呼ばれたんだ？」

サンダースが首を傾げながら聞いた。そんな彼に対して

ガルド「俺はこの国の王、責任者だからな。ある仕事をしないといけないんだ」

ハスボー「仕事？それってなあに？」

ガルド「配達だ」

ハスボー「配達・・・？」

キノガッサ「配達って物を運ぶ・・・あれか？」

ガルド「そうだ、ガラタンクのあの遺跡では歴史上重要な役目を担う物がいくつもあるらしくてな。それが理由で見つかった物はダイク化対策本部に届けているんだ。んでそれが俺の仕事、というわけだ」

アクア「なんでダイク化対策本部なの？」

ガルド「さあな、どうやらそれがダイク化対しての資料じゃないかと思ってるらしいけど・・・詳しいことは分からない。まあとにかく、その遺跡で見つかった物をダイク化対策本部に運んでほしい、これが頼みだ」

キノガツサ「女の子関連じゃないのか」

ガルド「それ関連じゃなくてすまないな」

キノ「いいんですよ、ガルドさん。キノガツサはいつもこんな感じですから」

キノのコメントを聞いてみんなが「あはは・・・」と苦笑いする。
当のキノは呆れた表情でガルドに説明していた

ガルド「それで・・・引き受けてもらえないか？」

ラグ「僕は良いけど・・・みんなどうかな？」

ガルドに聞かれたラグがメンバーに聞くと全員が了承の合図を送った

ハスボー「キノガツサもオツケーなんだね、なんで？」

キノガツサ「女の子ともはともかく・・・行くのは「ダーク化対策本部」なんだから？それなら・・・な」

ハスボー「？」

ラグ「とにかくみんなオツケーだね。あとは・・・ティラスちゃんはどうする？」

ティラス「私……ですか？あの……わ、私も皆さんと……行っても良いですか？」

ラグ「もちろんオツケーだよ。でもお父さん達の了解は……」

ティラス「だ、大丈夫だと思います。届けるだけなら危険でもないですから」

ラグ「そう？よし、それだったら一緒に行きよう」

ティラス「はい！」

ティラスが嬉しそうに返事をした。その時にチラツとタチマルを見ていたことは誰も気づいていなかったようだ

サンダース「それじゃあとりあえずは……ガラタンク遺跡に行くか」

キノ「そうですね。あ、でも道が分かりませんよ？」

ガルド「それなら安心してくれ、この通信室で地図をコピーする」

ポリズ「ありがとうございます、助かります」

ガルド「何、頼んでるのは俺の方だしな。……よし、これが地図だ」

ラグ「ありがとう」

ラグが受け取った地図を見る。そこには詳しい道筋が書かれていた。迷うことはなさそうだ

キノガッサ「よし、地図ももらったんだし早く行こうぜ」

アクア「ホントどうしたんだろう、キノガッサ？あんなに張り切って・・・」

ポリズ「まあ張り切ってくれる分にはいいじゃないですか？頼もしい限りですし」

アクア「そつかあ、それもそうだね」

キノガッサ「おっしや、それじゃあ出発だ！」

サンダース「ところでキノガッサ」

キノガッサ「ん？何だよ？」

呼ばれたキノガッサが後ろのサンダースの方に振り向きながら言った

サンダース「お前、道分かってるのか？」

キノガッサ「!？」

タチマル「えっ、先程地図を見てるから分かるんじゃない．．．」

サンダース「いや、もらっていても見たのはラグだけだ。だからアイツが分かるはずはないんだ」

キノガツサ「ああ、道は分からん！！」

サンダースに言われたキノガツサが腰に手を当て堂々と言う。しかし見て分かれるとおり威張って言うセリフではないため全く凄そうに見える

ハスボー「ちゃんと道は確認した方がいいよ？」

キノガツサ「いや、ハスボー。男には迷わず進むべき時が．．．」

キノ「ハスボー君に変なことを教えないの！」

ハスボーに伝授するキノガツサをキノが止める。そんな光景にみんなが笑った

ラグ「それじゃあ行くね、ガルドさん」

ガルド「ああ、遺跡の方にはこの事は伝えてあるからよろしくな」

ラグ「うん」

そう言ってラグ達は通信室をあとにし、ガラタンク遺跡へと向かった

第二百二十八話 本当のこと（後書き）

というわけでした！

タチマル「ガルンさん・・・生きててよかったです」

ホントだよね、そして君たちは・・・

タチマル「配達・・・ですね」

そうです、初めての対策本部ですな

タチマル「そこでもまた・・・何か？」

その前にガラタンク遺跡のお話しだよ

第二百二十九話 ガラタンク遺跡（前書き）

今回はガラタンク遺跡です

ラグ「ここ・・・ずっといるの？」

いや、今回だけです。結構色々な物語が後ろに控えてるからねえ

ラグ「なにになに、ネタバレ？」

そんなことするか！（笑）まあ、あちこちでそれっぽいのはら撒いちちゃってるからあんまり言えないんだけど・・・

ラグ「これ、感のいい人だったら予測出来る展開かもよ？」

やっぱり・・・定番かな？

ラグ「だと思っよ」

ならオツケーー！！

ラグ「ええ！？」

だってこの小説「王道」だしね！！（キリッ

ラグ「まあ確かにそうだね」

第二百二十九話 ガラタンク遺跡

ガードから頼まれ、ダーク化対策本部へ届け物をする事になったラグ達チーム「絆」はその現場であるガラタンク遺跡に来ていた

ラグ「ここがガラタンク遺跡かあ」

アクア「古代の遺跡・・・って感じだね」

遺跡はアクアの言った通り、ピラミッドに使われるような石で制作されており古さを物語っていた

キノガツサ「んで、どこが入り口だ？」

キノ「あ、あそこじゃない？」

キノの視線の先には、ゴーリキー達が入り口と思われる場所から出入りしている光景があった

ポリZ「恐らくはあそこですね」

ハスボー「ゴーリキーさんがなんか運んでる・・・」

サンダース「多分仕事してるんだろう。彼らなら今回のことも分かるんじゃないか？」

ラグ「そうだね、行ってみよう」

そう言っつてラグはゴリキー達の元へと走って行った。

ラグ「あの、すみません」

ゴリキー「ん？どうかしたかい？」

ラグ「僕たちガルドさんをお願いをされて来た・・・」

ゴリキー「チーム「絆」・・・のラグ君・・・かい？」

ラグ「あ、はい」

急に名前を言われたラグは少々驚きながら答える。そんな彼を見て

ゴリキー「そりゃあ良かった。おい、ボドジーー！」

ラグ「ボドじい・・・さん？」

見知らぬ名前に疑問を持つラグ。すると近くのテントから1人のボ

スゴドラが現れた

ボドじい「なんじゃなんじゃ？」

ゴリキー「ほら、ボドじいの言ってたラグ君だ」

ボドじい「おお、おぬしがラグ君かのお？」

ラグ「あ、は、はい」

少し緊張しながらラグが答えると彼の後ろからキノガツサ達が来た

キノガツサ「どうしたんだよラグ、遅いから来てみたぜ」

ラグ「みんな」

ボドじい「君たちがチーム「絆」・・・かのお？」

サンダース「そうですが・・・どなたですか？」

サンダースもラグのように疑問を持って言う。その横でティラスが「はっ」とした

ティラス「もしかして・・・ボドじいさん？」

タチマル「テイラスさん、ご存知なんですか？」

テイラス「はい、お父さんの知り合いで・・・ガルドさんのおじいさんです。」

ポリズ「ガルドさんのおじいさんですか!？」

テイラスの言葉で注目が集まるとボドじいは照れながら

ボドじい「そうじゃ、わしはガルドの祖父にあたる「ボドラ」、人呼んで「ボドじい」「じゃ」

ボドじいはニカツと笑いながら言った。どうやら元気なおじいちゃんらしい

ボドじい「それで・・・あれじゃな、おぬし達はガルドに頼まれて来てくれたんじゃないな」

ラグ「はい」

ボドじい「それじゃあこっちじゃ」

ボドじいが遺跡の中へと歩いていく。ラグ達はゴーリキーにお礼を言うとその後について行った

ボドじい「これが、今回発掘された石版じゃ」

少々暗く、怪しげな雰囲気。遺跡の奥まで進み、行き止まりのところでボドじいが言った

ハスポー「これが見つかった石版？」

キノガツサ「随分とボロいな」

ボトじいの指差した石版らしきものはキノガツサの言う通りとてもボロボロ、土まみれ。まだ見つかっただけであまり手を加えていなかったらしい

ティラス「いかにも遺跡に埋まってたって感じですね」

サンダース「ちょうどノートくらいの大きさだな」

アクア「ほらほら、ラグちゃんも見みなよ」

ラグ「うん」

アクアに誘われてラグはサンダーズ達の間で頭を突っ込み、石版を見て見る。すると

ラグ「あれが見つかった石版かぁ・・・うつ！？」

アクア「ラグちゃん!？」

石版を見た途端に後ろに倒れ込むラグをアクアが後ろに回り込み支えた。そのおかげでラグは倒れずにすんだ

タチマル「大丈夫ですか!？」

アクア「大丈夫、ラグちゃん？」

ラグ「うん、なんかめまいがしちゃって・・・あはは、もう大丈夫だよ」

アクア「そう？それなら良かったあ」

ラグ「あはは、ごめんね」

ラグは笑いながらアクアやみんなを安心させる。しかし彼は気づいていた

ラグ「（なんだろう、今の・・・意識が飛びそうな感覚・・・まあ

気にする必要ないよね）」

サンダース「おい、この石版・・・何か書かれてないか？」

ポリズ「何か・・・ですか？どれどれ・・・“サイコネシス”」

ポリズが“サイコネシス”で石版を持ち上げると周りの土をサイコパワーで落としていく。すると確かに文字のようなものが見えてきた

キノ「ホント、何か書いてあります」

キノガツサ「えっと・・・これなんて書かれてんだ？全く分かんねえよ」

ポリズ「これは・・・古代文字でしょうか？」

サンダース「古代文字？」

ポリズ「ええ、数百年から数千年昔に使われていた文字です。でも今では使われておらず、歴史学を勉強する人ぐらいしか知らない文字です」

キノガツサ「そんな文字、読めるやついるのか？」

ティラス「わ、私読めます」

キノガツサ「なにー!？」

驚いたキノガツサの声が遺跡・・・洞窟内に広がる。それに気づき、キノガツサは叫ぶのをすぐに止めた

キノ「本当に読めるんですか、テイラスさん？」

テイラス「はい、昔勉強したことがあって・・・それで」

タチマル「へえ、すごいです、テイラスさん！」

テイラス「えへっ」

タチマルに誉められたのが嬉しかったらしくテイラスが微笑んだ。するとアクアが小さな声でポリZを呼ぶ。ポリZは石版を置き、アクアの方へ行った

アクア「ちなみにポリZは読めるの？」

ポリZ「もちろんです。これでも全科目の教師免許持ってますからね。でも今回はテイラスさんにお任せします。彼女に活躍の場をつくってあげたいですね」

アクア「さっすがポリZ！乙女心分かってるね！」

お互いにウインクしながら言った。どうやらアクアが伝えたかった

ことをポリZは理解していたらしい

ボドじい「それにしても読めるポケモンがいるとは・・・早速読んでもらってもいいかのぉ？」

テイラス「あ、はい！」

テイラスが元気に返事をし石版を見る。そして解読を始めた

テイラス「ひかりと やみ 。ふたつ の おおになる ちからは けて まじわる ことのない ちから 。 ひかりが つよければ やみ は きえ やみ が つよければ ひかり は きえる 。 もしも ・ ・ ・ だそうです。ここまでしか書かれていません」

キノ「なんだか難しいですね」

キノガッサ「ようは光と闇は交わらない、ってことだろ？」

サンダース「まあ聞いた感じそうだな。でもこれって・・・古代文字ってことは古代の人達が残したメッセージ・・・ってことか？」

ポリZ「恐らくは。しかしメッセージはまだ続いているはずですよ」

アクア「「もしも」で途絶えちゃってるもんね」

ポリZ「はい、ですからどこかに・・・あっ、ありました。テイラ

スさん、お願いします」

ティラス「あ、はい」

ポリズが周りを見渡すともうひとつ石板が落ちていた。今度のものは土をかぶっておらず、そのままでも読めた。そこにティラスが近づき読み始めた

ティラス「えつと・・・あらたな　ちから。　わたしたちは　むりよく　だ。　すべて　を　すくう　やさしさを　もてない。　だから　すくえなかったのだ。　すくうべきものを。　だからこそ　みらい　は　わたしたちの　もとめる　ちから　を　てにいれて　ほしい　・・・だそうです」

タチマル「なんか・・・悲しいお話ですね」

ハスボー「うん、救えなかったんだね・・・大切なものを・・・」

キノ「でも・・・これは何を意味しているんでしょう?」

ポリズ「難しいですね、こればかりは昔のことですから。ポドじいさんは何か聞いたことは?」

ポドじい「すまんなあ、ワシにもわからんのじゃよ」

ポリズ「そうですか・・・」

ポリズの言葉を最後にあたりは一旦静まった。しかし元の目的を思い出したように

アクア「とりあえず、これを運ぼうか。それが頼まれたお仕事だし」

ポリズ「そうですね、とりあえずは仕事をすませましょう。ラグ、これを持ってもらっても？」

ラグ「うん、それじゃあ・・・」

タチマル「いえいえ、ししよー。オイラが持ちますよ！」

ラグ「いいの？」

タチマル「はい！任せて下さい」

ラグ「それじゃあお願いしようかな」

石版を持つとしていたものの途中で止め、タチマルに頼む。普段のラグなら「いいよ、持つから」と言うはずだがこの時はそれを言わなかった。それはラグにある「異変」が起きていたからだ

ラグ「（なんだか体が・・・浮いてる・・・なんだろう、この感じ・・・？）」

ボドじい「それでは通信室からテレポーターを使ってみんなを本部まで送ろう。通信室へ行くのじゃ」

キノガッサ「おう！出発だー！！」

キノ「調子に乗らないの」

キノガッサをキノが止めるその姿にメンバーは微笑む。しかしラグだけはどうしても微笑むことが出来なかった。自分の中で異変が起きてるのが・・・分かったからだ

ラグ「（頭が・・・クラクラする・・・どうなってるんだろう・・・）」

そしてアクアもまた、ラグの異変に気づいていた

アクア「（ラグちゃん・・・？）」

第二百二十九話 ガラタンク遺跡（後書き）

アクア「ラグちゃん・・・」

心配ッスか？

アクア「そりゃ心配するよ。だってラグちゃんは・・・その・・・幼馴染だし・・・」

好きな人・・・だし？

アクア「そ、そ、そんなことは・・・」

顔赤いよ（笑）

アクア「きよ、今日は熱が・・・」

ないですよね？

アクア「うう・・・」

第三百三十話 ダーク化対策本部（前書き）

今回はダーク化対策本部です!!

ラグ「一体何がまってるの!?!」

それは本編で!!

第三百三十話 ダーク化対策本部

ガードからのお願いでガラタンク遺跡の石版2枚を届けることになったラグ達チーム「絆」はガラタンクの通信室にあった転送装置を使って届け先である「ダーク化対策本部」へと来ていた

キノガッサ「ここが本部か？」

ポリZ「そうですね、どうやら本部の転送室のようです」

サンダース「それにしても・・・デカいな」

サンダースが真上を見上げて言った。確かにここ「ダーク化対策本部」は巨大な基地であり、様々なポケモンが入ることが出来るのだ。その転送室と言えば転送装置がある施設からポケモン達がやってくる。場合によっては巨大なポケモンも来るかもしれない。だから少し大きめの設計となっているのだ

キノ「それにこの設備・・・あちこちがハイテクですね」

ハスポ「それにすごいキレイだよ」

アクア「流石、最先端って感じだね」

「????」お褒めの言葉、ありがとございます……なんてな」

アクア達があたりを見渡し感想を述べているところへ後ろから一匹のポケモンが現れる。どこかで聞いたことのあるような声だ

キノガッサ「ん？誰だ……って、お前は……」

ラゲ「ヨノワールさん！」

ヨノワール「久しぶりだな、絆のみんな」

ヨノワールがニカツとしながら言った

サンダース「そうか、お前らゴースト3人はこの本部で働いてるんだったな」

ヨノワール「ああ、それでガラタンクからお前達がくるって聞いてな。んで迎えに来たってわけだ。まあ今回は本部の部員だ。敬語の方がいいか？」

キノガッサ「止めるよ、いつも通りのほうがいいぜ。お前に敬語使われるのはなんかこう違和感があるしな」

ラゲ「それに何より僕たちは友達なんだし……そのままがいいよ」

ヨノワール「そっか、それならこのままの喋り方でいい」

ヨノワールの少しイジワルな質問に答えたキノガツサとラグが「うん」と頷いた

タチマル「あの・・・キノさん」

キノ「どうかしましたか？」

タチマル「あのヨノワールさんって・・・どなたなんですか？ししよーのお知り合い・・・ですか？」

テイラス「あ、タチマルさんも思いましたか？実は私も疑問に感じている・・・」

キノ「ラグさんの・・・というよりはみんながお知り合い・・・いえ、お友達ですよ」

それからキノがヨノワールについてタチマル達に話した。過去にインルーラであったこと、その時に彼らに会い、共に街長を救ったこと・・・色々なことをだ

キノ「・・・とまあ、こんな感じですね」

タチマル「なるほど・・・そんなことがあったんですね」

テイラス「確かに電気が使えない日が続いたことがありました・・・

あれを解決されたのも絆の皆さん・・・それにあのヨノワールさん達なんですね」

キノ「はい、それを踏まえてのお友達です」

キノがニコツとほほ笑む。するとヨノワール達の方の会話も終わったらしくヨノワールはキノ達に呼び掛けた

ヨノワール「それじゃあそろそろ案内するが・・・いいか？」

キノ「あ、はい。もうオツケーです」

ヨノワール「それじゃあいくぜ。それとよろしくな。タチマル君に・・・テイラスさん」

タチマル「あ、はい。こちらこそです！」

テイラス「よろしくお願いします」

そしてヨノワールが道を進んでいく。その道というのもいくつもあった。行っている途中迷わないかと不安になるくらいだ

キノガツサ「道の数が凄いな・・・」

ヨノワール「ああ、ここ本部はかなり広いから・・・俺も初めは地図を持って行動していたさ」

ラグ「地図持って行くの!？」

ヨノワール「これだけ広いとな。でも安心してくれ、もう覚えたから大丈夫だ」

アクア「よかったあ」

アクアがホッと胸をなでおろす。確かにこの人数が道が分からず迷ってしまったなんて言ったら恥ずかしくて仕方ない

ヨノワール「それで・・・確か石板を持って来たんだよな」

サンダース「ああ、ガラタंकの遺跡で見つけたらしくてな・・・でも俺らも詳しいことは知らないからな？」

ヨノワール「分かってるさ、渡してもらえば後はこっちで調べる。それによつて・・・ダーク化の事が分かれば良いんだがな」

ハスポー「ダーク化のこと・・・？石板からそれが分かるの？」

ハスポーの問いにヨノワールが進みながら後ろを振り向いた

ヨノワール「それは分からない。でも・・・それが資料になるかも知れないんだ」

タチマル「この石板って・・・過去の物ですよ？過去の調べることとは・・・」

ティラス「ダーク化は過去からあった・・・ということですか？」

ヨノワール「それは・・・分からない。もしかしたら全くなかったのかも知れない。でも「うちのトップ」が怪しいって集めてるんだ」

ポリズ「うちのトップ」・・・？本部のトップと言うことですか？」

ヨノワール「ああ、正確に言えば「ダーク化対策」関連のトップだな」

ラグ「ええ！？それじゃあすつごく偉い人だよ、その人。僕たちが行って大丈夫かな・・・？」

ヨノワール「大丈夫だろう。なんて言うか親しいリーダーだってイメージだな。あんまり関わりにくいわけじゃない・・・俺でも関わらせてもらってるぐらいだからな」

いつのまにか前を向いているヨノワールが少し嬉しそうに話す。声の感じからみんなそれに気付いているだろう

ヨノワール「そう言う面では・・・ラグに似てるかもな」

ラグ「僕に？」

ヨノワール「ああ。まあ会ってみれば分かる・・・かな」

っと喋っているうちにラグ達はいつの間にか大きな扉の前に来ていた

アクア「おつきな扉・・・」

サンダース「会話に夢中で気付かなかつたな」

ヨノワール「そう言ってもらえて何よりだ。それじゃあ・・・入るぞ」

ヨノワールが押すと扉はゆっくりと開く。そこに広がっていたのは

アクア「うわ〜キレイ」

ハスボー「本棚も綺麗に整理されてるよ」

キノガッサ「おいみろよ、レッドカーペットだぜ！なんか有名人の気分だな」

ヨノワール「お、おいお前ら・・・」

????「ははは、話しには聞いていたがにぎやかなチームだな。だ
がよいぞ、私にもぎやかなのは好きだ」

ヨノワール「隊長！」

室内に入りその環境にはしゃぐメンバー、そんな彼らをヨノワールが説明、その説明相手も理解してくれたようだ

ポリズ「ってヨノワールさん・・・あの方は・・・」

ヨノワール「ん？ああ、そうだな。みんなには話したことなかったな」

???「なんだヨノワール。私の事は話してくれていなかったのか？」

ヨノワール「はい、すいません」

???「まあ大丈夫だろう、今からでも遅くはないだろう」

ヨノワール「ありがとうございます。それじゃあ・・・みんな、ちよつといいか？」

許してもらったヨノワールが改まって絆を見る。それに気付いた絆は静かになり、ヨノワールの話しを聞いた

ヨノワール「えー、今、ここにおられる方は、ダーク化対策本部、通称「デルタ」の本部長であり、ダーク化対策系全てのトップである方・・・」

「アルセウス隊長だ」

第三百三十話 ダーク化対策本部（後書き）

以前お伝えしたキノガッサ、ポリZのCVですが、この方々が候補に挙下させて頂きました

キノガッサ：阿部敦さん

ポリZ　　：赤羽根健治さん

です！！

阿部さんは「とある」の上条さん役をされている方ですね。実はヴァンガードの「雀ヶ森レン」と言う役もされているんですよ

赤羽さんは光定ケンジってキャラの役をされています。

さわやかな口調が印象的ですが、敬語場面になるとポリZと合ってる、と判断したので候補にさせて頂きました

第三百三十一話 「デルタ」の隊長（前書き）

さて、今回は多分意外な展開です

ラグ「んん！？どんな展開！？」

それは・・・

ラグ「見てのお楽しみ、でしょ？」

僕のセリフ・・・

第三百一十一話 「デルタ」の隊長

ポリズ「アルセウス・・・数千年前にこの世界に現れた「悪」を最初に倒し、世界を平和へと導いたポケモンです。その力は強く、歴史上最強のポケモンとして名をはせていおり、その力を駆使して世界を災害から救ったりしているそうです。ただし、その存在はあまりに神々しすぎていて「幻」として扱われ、一般的には存在するかもしれない架空の存在「神」とされています」

アルセウス「紹介ありがとう。まあ実際のところ神々しいからというよりも姿を見せるタイミングがないだけなのだがな」

アルセウスが笑いながら言った。しかし絆にからずれば、あまりに驚き過ぎて笑っている場合ではない。今、自分たちの目の前にいるポケモンは・・・この白く大きなポケモンは伝説を超えた「幻」の存在、数多いポケモンの中で「最上級」の強さを持ったポケモンなのだ。冷静でいられるはずはなかった

アルセウス「ん？どうかしたか？」

ポリズ「あ、いえ、みんな緊張してしまって・・・」

ポリズが「あはは・・・」と楽しさの含まれない笑いをする。緊張、それをごまかしているのだ

アクア「目の前に……幻のポケモンさんがいるなんて驚きですから」

アルセウス「ははは、幻か。だがそんなことは気にしなくてもいい。私も君たちと同じポケモンだ。ただ種族がアルセウスというだけ、特別なことは何もない。だから普通に接してくれ」

アクア「は、はあ……」

アクアが無理やり納得するような返答をする。やはり普通には接しにくいのだろう。しかしその「雰囲気」の通じないポケモンがこのメンバーに3人もいた

ラグ「そっか、それじゃあ普通に話すね。僕はラグ、このチーム「絆」のリーダーをやってるラグラージだよ」

キノガッサ「俺はキノガッサだ。世界一カッコイイキノガッサって覚えてくれ」

ハスポー「僕はハスポーだよ、あれ？呼び方もアルセウスでいいの？」

アルセウス「ああ、構わんさ」

ハスポー「それじゃあよろしくね、アルセウス」

3人はまるで新しい友達が増えたように普通にあいさつをする。ハ

ズポーに至っては許可をもらったとはいえ呼び捨てで読んでいるレベル、普通では考えられない度胸だ

ティラス「ラグさんもキノガッサさんもハスボーさんも・・・初めてお会いしたんですよね？」

タチマル「そうですねよ、オイラ達全員、アルセウスさんに会うのは初めてです」

ティラス「じゃあなんでこんなに親しく・・・」

アクア「これがラグちゃん達なんだよ」

ティラス「えっ？」

疑問を抱くティラスにアクアが語りかけた

アクア「ラグちゃん達は相手が伝説だろうと幻だろうと関係ない。相手が友達を思っていればどんなポケモンでも友達なんだよ。だから逆にいえば警戒心がないうちも言える。それでもこういう部分がラグちゃん達の長所なんだよ。だからラグちゃん達をきっかけに私達も普通に話せるようになる。ラグちゃん達のこの性格に助けてもらってるんだ」

アクアがニコツとしながら言った。そんな彼女の話しに「そうなんだ」と呟きつつもう一度アルセウスを見る。するとすでにタチマル

もサンダースもポリズもアルセウスの元へ行き、彼と話していた

キノ「さあ、私たちも行つてアルセウスさんと仲良くなりましょう。せつかくのお友達です」

アクア「そうですね、よし、ティラスちゃん、行こう！」

ティラス「・・・はい！」

ティラスはこの時感じていた。このチームの持つ「温かさ」、そして人との関係をどれだけ大切にしているかを・・・

アルセウス「そうか、石板を・・・ありがとうな」

アルセウスがもらった石板を背中に載せながら言った

ラグ「良いんだよ、結構簡単なお仕事だったし」

キノガツサ「まあこれでカワイ子ちゃんに会えれば最高だったんだけどなあ」

キノ「それを言わない！」

アルセウス「ははは、残念だったな。今女性員は休暇中だ。しばらくは戻ってこんだろう」

キノガッサ「ちえー」

ポリズ「休暇・・・対策本部にも休暇はあるんですね」

アルセウス「もちろんだ、休暇がないと流石に体が持たないからな。まあ私やギリティナ、その他の伝説のポケモンは少し少ないが・・・それでも休暇はしっかりとってるさ」

サンダース「あ、そうだ。ギリティナ、あいつは元気なのか？」

サンダースが思い出したらしくギリティナについて聞いてみた。

アルセウス「アイツか？あいつは今も世界をパトロールしていると思うが・・・そうか、お前たちは幾度かギリティナと会ってるんだっただな」

ハスボー「そうだよ、ギリティナと僕たちは友達なんだよ」

アルセウス「そうか、アイツめ、捜査の途中でまた仲間を増やしたな・・・羨ましいやつだ。やはり私も旅に出るわけにはいかんだろうか・・・」

????「ダメですよ、あなたはここの総指揮者なんですからブラブ

ラ旅に出てもらっては困ります」

アルセウスのつぶやきに誰かが返事をする。そこに現れたのは

ラグ「ヤミラミー!!」

ヤミラミ「よう！久しぶりだな、元気にしてたか？」

サンダース「もちろんだ、お前・・・いや、後ろにいるヌケニンも元氣してたか？」

ヤミラミ「当たり前だ、なあ、ヌケニン？」

ヌケニン「・・・うん」

後ろにいるヌケニンがコクツと頷き答える。少し静かな返事なのは彼の性格故のようだ

サンダース「そっか、それはよかった」

アルセウス「・・・そうか、ヤミラミ達の事を教えてくれたのはチーム「絆」だったな」

ラグ「うん」

アルセウス「ありがとうな。とても仕事をしてくれて助かっている。

まあ今回のように少し口うるさいのがたまに傷だがな」

ヤミラミ「それはあなたがリーダーなのにフリーダムだからです！」

アルセウス「こんな感じだ」

アルセウスが苦笑いしながら言った。どうやらヤミラミはアルセウスのストッパー役らしい。いい意味で上下関係が出来ているのだろう

アルセウス「ところで君たちはもう帰るのか？」

ポリズ「はい、もうお届け物もしましたから・・・どうかしましたか？」

アルセウス「いや、少しバトルでもしていけないかと思ってな」

ポリズ「バトル？」

キノガッサ「バトルだとー！？俺の出番だな！！」

「バトル」という単語を聞いてキノガッサがポリズとアルセウスの間に飛び込む。しかしアルセウスは苦笑いだ

アルセウス「すまないな、キノガッサ。今回私は「ラグ」とバトルしてみたいのだ」

ラグ「ぼ、僕!？」

キノガツサ「何いー!?ラグとだと!？」

アルセウス「ああ。伝説のデンラージの力、というものを見て見たくてな。どうだろうか、ラグ？」

ラグ「いや、僕は別に良いけど・・・アルセウスの方は大丈夫なの?お仕事とか・・・」

アルセウス「心配はいらない。私は「ここから出ることを禁じられている」だけだ。ここでバトルをすれば問題ないからな。そうだろう、ヤミラミ？」

ヤミラミ「ええ、まあ確かに・・・でもここでバトルって・・・壊す気ですか？」

ヤミラミが汗を垂らしながら聞く。ヤミラミは少なくともラグの實力は見たことがある。だから分かるのだ、ここで戦えば施設自体が壊される・・・と

アルセウス「心配するな。バトル場を使えば問題ないだろう?あそこは元々バトルをする為に作られた部屋だからな」

ヤミラミ「まああそこなら・・・っというかアルセウス様、バトルを止める気ありませんもんね」

アルセウス「当然だ、久々の心躍る戦い、実に楽しみだからな」

ヤミラミ「・・・はあ、そんなに目をキラキラ輝かせて言わないでくださいよ。そんな目を見せられちゃ「ダメ」なんて言えません」

アルセウス「それは了承の返事で・・・いいな？」

ヤミラミ「はい。その代わりにしっかりやって下さいね」

アルセウス「分かってるさ、それに・・・ちょっと気になることもあるからな」

ヤミラミ「気になること？」

少しくらい表情で言うアルセウスにヤミラミが問う。しかしそんなヤミラミの問いにアルセウスは表情を再び明るくした

アルセウス「ああいや、何でもない。さあラグ、バトル場へ行こうか」

ラグ「うん」

ヤミラミ「他のみんなは俺に付いてきてくれ、バトル場の2階からバトルを観戦しよう」

サンダース「お、観戦出来るのか？」

キノガッサ「仕方ないか、今回はラグに譲るよ」

キノ「いいじゃない、見ていても参考になるわけだし」

ポリズ「そうですよ、見とり稽古ってやつです」

テイラス「でもラグさん大丈夫でしょうか？アルセウスさん、相当強そうですけど・・・」

タチマル「心配いりません、なんせししよーなんですから」

アクア「そうそう、ラグちゃんだってこれまで色んな戦いを経験してる。大丈夫だよ」

ハスポー「それじゃあ2階にレッツゴー！」

ハスポーの掛け声でメンバーは2階へと向かう。つまり1階でバトルするラグ達とは離れたのだ。そしてラグとアルセウスは1階のバトル場へと向かっていた

ラグ「・・・ねえ、アルセウス？」

アルセウス「なんだ？」

バトル場へ静かに向かう中、ラグが突然アルセウスに声をかける。そんな彼にアルセウスは疑問を持ち振り向きながら返した

ラグ「どうして僕とバトルしたいなんて言ってくれたの？」

アルセウス「ん？バトルの理由か？それはさっきも言った通り君とバトルを・・・」

ラグ「もつと何か「狙い」があるんでしょ？」

アルセウスの言葉を遮ってラグが言う。その目は真実を求めるようにまっすぐに迷いはなかった。そんな目を見てアルセウスはフツツとほほ笑む

アルセウス「狙い・・・か。警戒しているところ悪いが私は単純にバトルを楽しみたいだけだ。50%は・・・な」

ラグ「それじゃあ残りの50%は？」

アルセウス「それは・・・バトルの中で分かると思う。言えなくてごめんな、ラグ。だが今はそんなことを気にせずにバトルをしてほしい。ヒントがあるとすれば・・・そうだな、「本部の長として本当の意味で君の・・・チーム「絆」の力を見たい」と言ったところか」

ラグ「本当に・・・そうなの？」

アルセウス「ああ、真の实力を見なければわからないからな。疑問に思わなかったか？なぜ「絆」が本部の主なバックアップを受けてないのか・・・を」

ラグ「レジロックに聞いたことがあったけど・・・もしかして今回

のバトルで強さを見るって・・・」

アルセウス「さあ見えたぞ、良いバトルをしような」

ラグが言いそうなところで1階へとたどり着く。アクア達はすでに到着しており、観戦の準備は万端のようだ

ラグ「（そうか、このバトルは・・・試験」何だね。分かった、それなら僕も全力で楽しむよ）」

ラグはほほ笑むながらアルセウスと離れ、色の付いた指定位置へと向かう。もちろんアルセウスもだ

アルセウス「（さて、今のでラグは今回のバトルの意味を理解しただろうか？ホントはそんなことを考えずに実力を見せてほしかったが・・・いや、こちらの方が実力が出るかもしれんな。「仲間の為になると何倍もの力を引き出す」ようだからな・・・ラグは。久しぶりの強者とのバトル・・・私も負けないようにしなければな）」

アルセウスがさっきもらった石板2つを隅に置きながら思った。そして置き終わるとラグ同様に指定位置につく

アルセウス「君の先攻だ」

ラゲ「分かった。アルセウス、このバトル……全力で行くよ」

アルセウス「ああ、かかってこい！」

こうして神VSデジラーズの戦いが始まった

第三百三十一話 「デルタ」の隊長（後書き）

ラグ「こりゃまたぶっ飛んだ展開だね」

でしょ

ラグ「これでストーリー・・・大丈夫？」

大丈夫・・・なはず、いや大丈夫だよ！！

ラグ「あ、怪しい・・・」

あ、それと今回ダンテさんからラグ冒の声優さんを送って頂きました。ダンテさん、ありがとうございます。もちろん今回の声優さんも「推奨」であり決定ではありません。では発表させて頂きます

『ライコウ』

『中村悠一』さん

『サンダー』

『諏訪部順一』さん

『ミユウ』

『高山みなみ』さん

『クレセリア』

『かかずゆみ』さん

『カイリユー』

声優さん 『釘宮理恵』さん

です。

第三百三十二話 ラグVSアルセウス 前編（前書き）

さあ、いよいよバトル開始です

ラグ「まさか開始早々にフルボッコで「はい終わり」とかじゃないよね？」

それはないよ。なんせ今回のバトルは物語にとって大切なバトルなんだから

ラグ「大切なバトル？」

第三百三十二話 ラグVSアルセウス 前編

アルセウスの提案でバトルをすることになったラグ。アルセウスからこのバトルの持つ意味のヒントを得た彼はこのバトルで全てを尽くすことを決意する。

そして今、ラグの先攻で試合は始まった

ラグ「まずは“ハイドロステインガー”・・・ゴー!!!」

最初の攻撃としてラグの周りに水の短剣が生成され、そのままアルセウスに放たれる。しかしアルセウスは落ち着いていた

アルセウス「なるほど、なかなか強力・・・だが“まもる”」

アルセウスの前が光り、緑色のバリアーが展開される。“ハイドロステインガー”はアルセウスに向かっていくもののバリアーに遮られ、届かなかった

アルセウス「もう終わりか？」

ラグ「まだまだよ“みずのはどう”そして“れいとぅビーム”」

ラグはアルセウスの頭上に“みずのはどう”を放ち、それに向かつて“れいとうビーム”を当てる。すると“みずのはどう”は凍り、アルセウスに落ちてくる際にはつららとなっていた

アルセウス「（創意工夫された技だな）“めざめるパワー”！」

アルセウスはそれを冷静に見て“めざめるパワー”を発動、アルセウスの周りに複数のエネルギー弾が出現し光る。そしてそれらをつららへと放つ。すると二つの技は相殺し消えてしまった

ラグ「くう……届かないか……」

アルセウス「確かにラグライジとしても君は強いだろう。だが、君の真の力はこんなものじゃないはずだ。もったいぶらずに……見せてくれ」

ラグ「……ちょっと早い気がするけど分かった。それじゃあお望み通り……いくよ!!」

その瞬間ラグから凄まじい光りが放たれ同時に微弱な電気が流れ出します。そして光が収まると先ほどとは少し違う姿でラグは立っていました。デンライジ化だ

アルセウス「それが「君のデンライジ化」か。電気量が凄まじいな」

ラグ「そう？それじゃあまず一発目、「デンミラージュ」！」

デンラージとなったラグが技名を言つとラグの体から電気を纏った少し色の違う分身が4体出現する

アルセウス「なるほど、分身に体当たりをさせる攻撃か。ギラテナ戦で使った技だな」

ラグ「そうだよ、これならどう・・・かな!!」

ラグの声と同時に分身はアルセウスに向かって飛んでいく。そんな分身を見てアルセウスは目をつぶった

アルセウス「あの時よりも技の完成度が上がったか。ならば私も応戦しよう。来たれ、「裁きの光」」

技名の瞬間アルセウスが目を開ける。するとアルセウスの頭上にいくつかの間にか出来た光の玉から4つの光の光線が放たれ分身に向かつていく。そして驚くことに分身とぶつかるそのまま分身を貫いた

ラグ「なっ!?!(ミラージュがやぶられた!?!)」

いきなりすることに驚きラグは目を疑う。しかし光線はあくまで「貫いた」のだ。つまりそのままラグへ直行した。驚くままではいられない

ラグ「カリバー！」

ラグは光線に応戦しようとカリバーを出し後ろに構える。そして

ラグ「プラズマスラッシャー」！

思いつきカリバーを振る。すると電気を帯びた衝撃波が放たれ、“裁きの光”を打ち消した

ラグ「おはよ、いきなりの登場で迷惑かけちゃったかな、カリバー？」

カリバー「それは問題ありませんよ。すでに起きていましたから。それより問題なのは・・・」

ラグ「まさかミラーージュをやぶるなんて・・・流石だよね」

カリバー「ええ、アルセウス・・・やはり油断ならない相手です」

ラグ「あれ、アルセウスのこと知ってるの？」

カリバー「先ほどのあなた方の会話を聞いていましたから・・・」

ラグ「そっか。それじゃあこのバトルで全力を出すってことも知ってるんだ」

カリバー「もちろんです。このバトル、私も全力であなたと共に戦いますよ」

ラグ「うん、ありがとう。それじゃあ早速いくよ、カリバー！エレメンタルカートリッジロード！」

カリバー「ロードエレメンタルカートリッジ、フレイムカリバー」

カリバーがエレメンタルカートリッジをロードし、属性を変える。夕日色に燃える炎のカリバー、フレイムカリバーだ。更に

カリバー「リペルティング、ジェットモード」

ラグ「よし！」

カリバーがリペルトすることで二刀流となり、剣先にコア、ラグの背中に炎の塊をつけたジェットモードとなる。そのままラグはコアと塊から炎を噴射しアルセウスへと向かった

アルセウス「なるほど、これは速いな」

ラグ「はあああ!!」

アルセウスの目の前までくるとラグは右に持っていたカリバーを上から振りかざす。それに対してアルセウスは反応出来ず、そのままくらい怯む。するとその隙についてラグは左手のカリバーを横に振り、アルセウスを飛ばした

ラグ「・・・むう」

カリバー「ラグ、どうかしましたか？」

攻撃を終え、両剣を下ろしたラグにカリバーが声をかけた。その時ラグの表情は少し悔しそうに微笑んでいた

ラグ「さっきの攻撃・・・1度目の時“リフレクター”が発動してたんだ。つまり・・・」

カリバー「本来なら対応されていたってこと・・・ですね」

ラグ「うん、流石神様。サービス精神満載・・・困ったもんだよ」

ラグは飛ばした先、砂埃のたっている場所を見た。アルセウス、そのポケモンは強い、そう感じて目を離すわけにはいかないのだ。そして砂埃が収まり始めるとアルセウスは出てきた

アルセウス「いい速さだった。これがジェットモードか」

ラグ「そうだよ、そして今度は・・・これね!!」

カリバー「エレメントチェンジ、グラウンドカリバー。リペルティン
グ、スクリューモード」

ラグ「はあああ!!」

エレメントを変え、グラウンドとなりスクリューモードとなったカリ
バーをラグが地面に刺す。するとアルセウスの足元が揺れ始めた

アルセウス「これは・・・マズいな」

ラグ「逃がさないよ!“ソイルロック”」

足元の反応を見て飛ばうとするアルセウスを逃がさないようにラグ
は“ソイルロック”の発動を速める。結果、ギリギリではあったが
アルセウスの拘束に成功した

ラグ「捉えた!」

アルセウス「あちらの方が早かったか!」

カリバー「ロードエレメンタルカートリッジ&カートリッジ」

カリバーが自己判断でグランドからプラズマヘチエンジし、カートリッジをロードする。するとラグの前に電気の弾が現れた

アルセウス「あの技は・・・まさか!？」

ラグ「いくよ」

カリバーを背中に付けて、両手の空いた状態でラグが電気の弾を構えた。そして

ラグ「“エレクトリックレールガン”！」

電気の弾はバチィバチィと音をたてながらアルセウスに向かった。いく。その速度は速く、あたるまで大した時間を必要としなかった。

ドオオオオン!!

大きな音を立てて当たったかと思うと青と黄色の辺り一帯に電撃がほとばしる。そしてラグは構えた両手を下げたかと思うとすぐに背中の中のカリバーを手に取った

ラグ「これは・・・まだ終わって・・・ないよね」

カリバー「イエス、恐らくまだでしょう。油断は禁物です」

ラグもカリバーも油断をせずアルセウスを飛ばした方を見続ける。
するとラグの足元が揺れ始めた

ラグ「な、なに!？」

カリバー「分かりません。しかし危ない確率があるのは確かです。
かわしましょう」

ラグ「うん」ライトニングウイング”!!」

ラグは背中に電気の翼を生成し、大きく羽ばたく。するとその力によってラグは空中へ上昇した。そしてその瞬間

ドンッ!!

と大きな音がしたと思うとアルセウスを飛ばした方向から巨大な光線が放たれた

ラグ「今の地面の揺れはおとり!？」

カリバー「そのようです。それよりラグ対処を!!」

ラグ「うん!!」ハイドロポンプ”!!」

ラグは光線に対して”ハイドロポンプ”で応戦、水圧の強い大量の水が光線に襲い掛かる。しかし光線はそんな”ハイドロポンプ”をもものともせず、撃ち抜いた

ラグ「”ハイドロポンプ”が破られた!?”

カリバー「ラグ、跳ね返しましょう」

ラグ「うん!」

カリバー「ロードエレメンタルカートリッジ、アイスフォーム。リペルティング、ミラーモード」

ラグ「これで!」

属性を変え、攻撃を反射する能力を得たカリバーを野球のバットのようにならぬラグが振る。一方光線はそのままラグへ直行、そしてミラーとなったカリバーと激突した。しかしその威力は高く、なかなかはじき返せない

ラグ「こ、これ重い!」

カリバー「た、確かに強力ですね」

ラグ「でも・・・はああああ!」

腕に力を込めてなんとかラグがはじき返す。するととはじき、あたった地面が一気に第爆発を起こす。その爆風は飛んでいるラグの位置まで来ていた

ラグ「な、なんて威力・・・凄まじいね」

カリバー「あんなのくらったら致命的ですよ」

ラグとカリバーが技の威力を目の当たりにしながらコメントする。ラグのいる位置とはじいた地点は決して近くはない。しかし爆風は来ているのだ。このことから威力を実感していた。すると

アルセウス「なかなかやるな」

ラグ「!？」

急に後ろでアルセウスの声を聞き、ラグが振り向く。そこにはすでにアルセウスがいた

ラグ「は、速・・・」

アルセウス「ジャッジメントキャノン」

アルセウスの目の前に光りの球体が現れ先ほどと同じと思われる光線が放たれる。そんなアルセウスに対してラグは反射的にミラーモードとなったカリバーを光線に向けて構えた。しかし至近距離と言うことで反射しきれなかったのだろう。ミラーモードは壁とはなかったもののラグは衝撃で吹き飛ばされ、地面に叩きつけられる

アルセウス「あの瞬間にもちゃんと防御はしたか・・・良い反射神経だ。では私も少しばかり力を出すとしよう」

アルセウスはラグの実力を認め、ゆっくりと構える。それと同時に頭上に光りの球が発生した

アルセウス「さあ、ここからが本番だぞ。簡単に終わるなよ？」裁きの光」

アルセウスはそう言うと光の球体から4つの光線を発射させラグへと向かわせた。少々ジグザグながら光線は確実にラグへと向かう。しかしあたる直前、突如ラグの前に土で出来た壁が発生、”裁きの光”をなんとか防いだ

アルセウス「これは・・・土の・・・壁？」

ラグ「そうだね・・・アルセウス。ここからが・・・」

カリバー「リミットバースト!!」

カリバーの言葉と同時にラグが力を解放、あたりの電気も強さを増した。そのことをアルセウスも感じ取り、しっかりとラグを見ていた

ラグ「ここからが本番だよね!!」

アルセウス「・・・ああ!!」

ラグは嬉しそうに言った。そんなラグの言葉にアルセウスもニカッと笑い反応する。あたりにはビリビリと微弱な電流がほとばしっていた

第三百三十二話 ラグVSアルセウス 前編（後書き）

ラグ「やっぱりアルセウス強いね・・・」

そりゃね。まあそんな彼を君が追い詰めているように見えないこともないけど

ラグ「とにかく僕の全てをぶつけるよ」

第三百三十二話 ラゲVSアルセウス 後編(前書き)

ラゲ「今回は更新速いね」

うん、なんかかけちゃって・・・やっぱりバトルはいいよ、うん！

ラゲ「凄くうれしそう・・・」

第三百三十二話 ラグVSアルセウス 後編

アルセウス、神と呼ばれしポケモンの実力を体で感じたラグは改めて気を引き締め、戦いに挑んでいた

ラグ「プラズマクラッシュ」!

アルセウスの頭上でラグがカリバーに電撃を溜めて思いっきり振り下ろす。そんな彼の技をアルセウスも易々と受けるわけがない

アルセウス「あまいな“サイコシールド”」

自身のエネルギーを使い、ラグの前に盾を生成、ラグの振り下ろしたカリバーはそれにあたり結果、攻撃を防いだ

アルセウス「それで私にダメージを与えるつもりだったのか？」

ラグ「まだだよ!」

ラグは一度盾にはじかれるもののそのままカリバーを改めて上に構えた。すると

カリバー「ロードカートリッジ！」

ラグ「プラズマエクサスラッシャー！」

もう一度同じように電撃を溜めて振り下ろした

アルセウス「無駄だ“サイコシールド”」

一方アルセウスも先程と同じように“サイコシールド”を出し難なく防御した

アルセウス「一度通用しなかった手が今度は通用すると思ったか？」

ラグ「同じ？違うよ。これは・・・さっきの“プラズマクラッシュ”の上級版だよ」

アルセウス「なに!？」

カリバー「ストライク！」

カリバーのコマンドと共に“サイコシールド”は割れてしまう。そのことにより力をかけていたラグの攻撃はアルセウスにヒット、こればかりはアルセウスも読めなかったのか直前に“リフレクター”もなかった

アルセウス「（なるほど・・・あの力・・・今までにない力だな。私との戦いで発動するとは・・・やはり面白い人材だな）」

アルセウスが“プラズマエクサスラッシャー”の衝撃で落下している時にはそう思う。そして「ドオオオオン」と言う音を立てて地面に激突、周りが砂煙に包まれた

ラグ「これでとりあえずは大きいのを1発入れた・・・少しは効果あったかな？」

カリバー「分かりません。しかしまだ終わっていない、油断してはならないことは確実です」

ラグ「そうだね」

返事と同時にラグはアルセウスの落ちた場所をじつと見る。すると光の光線が複数ジグザグながらラグへと向かってきた

ラグ「来たよ！撃墜するけど・・・良い？」

カリバー「了解です」

ラグ「ハイドロステインガー」！！」

ラグが”ハイドロステインガー”を発動、最初の攻撃と同様にラグの周りに水の短剣は出現し彼を囲む。そして光ったかと思うと光線へと向かって行った

アルセウス「それで防ぐつもりか？」

砂煙が少し晴れ、アルセウスが言った

アルセウス「残念だが威力が違うぞ？」

ラグ「それはどうかな？」

アルセウス「何っ？」

ラグの余裕ある返事にアルセウスが警戒する。一方“ハイドロステインガー”と“光の裁き”は激突するものの“光の裁き”が“ハイドロステインガー”を打ち破り、ラグへと向かっていた

アルセウス「やはり“光の裁き”の方が威力が上のようだな」

ラグ「いや、まだ終わってないんだけど？」

アルセウス「まだ終わってない？」

アルセウスが貫いた攻撃を見るために上空を見る。すると貫きラグへと向かうはずの”光の裁き”は大きな水の球体に閉じ込められ、動けなくなっていた

アルセウス「これは・・・」

ラグ「”ハイドロステインガー ホール”・・・一度砕けた水剣の水を集合させて小さな水中を作り、その中に相手の技を吸収、結果動きを封じる技だよ」

アルセウス「動きを封じると!?!」

カリバー「これであなたのおの技は動けない。つまりラグには届きません」

ラグ「そして閉じ込められた技はいつまでも形を維持することができず・・・」

ラグ「消えてしまう」

ラグが言うつと彼の言葉どおり水中の技は消えてしまい、ある意味「撃墜」されていた

アルセウス「これで宣言どおり撃墜したわけか」

ラグ「そうだよ、僕だってそんなに簡単に終わるわけではないでしょ？」

アルセウス「・・・そうだな、簡単に終わっては面白くない。これぐらいなければつまらないな!!」

アルセウスが嬉しそうに言うと彼の前に光が収束する。もちろんそれをラグも無視するわけではない

カリバー「ラグ、何か来ますよ」

ラグ「うん、それならこつちも応戦だね」

カリバー「YES、ロードエレメンタルカートリッジ、フレイムカリバー。リペルティング、ジェットモード」

カリバーがエレメントチェンジ、フレイムカリバーとなりラグはそれを使って向かっていく。攻撃が放たれる前に攻撃する作戦だろう。しかしそんなことはアルセウスもわかっていた

アルセウス「（やはりきたな）」ジャツジメントキャノン”!!”

アルセウスは巨大な光の光線を発射、徐々にラグへと向かっていく

ラグ「これを受けるわけにはいかない！！カリバー、避けるよ」

カリバー「OK」

ラグが避けるために右に大きく跳び、回避する。巨大な光線といえど早めに避けたラグにとっては避けること自体はたやすかった。そう、避けるだけなら

アルセウス「ホーリディングネット」

ラグが避けたことを確認するとアルセウスが技名を宣言する。すると

ラグ「えっ!？」

ラグの周りに光が集結、一気に彼を覆うほどの球体となり、ラグを捕らえた

ラグ「ちょっとこれって・・・」

アルセウス「ホーリディングネット」、空中に拡散させた私の光というエネルギーを操り相手の周りを空間ごと閉じ込める技だ。さつきから私は”光の裁き” ジャッジメントキャノン”と光攻撃ばかりをしていたらどう？そのせいで今空中にはエネルギーが散乱している。だから捕らえるのは意外と簡単だ。ただし」

ラグ「ただし？」

アルセウス「光を集結させるため短時間とはいえ相手の周りで光が強くなり、相手に気づかれやすい。そこで”ジャツジメントキャノン”をおとりに使ったわけだ」

ラグ「つまり僕は君に寄せられた・・・ってことでしょ？」

アルセウス「簡単に言えばそういうことだ」

ラグ「こ、これは参ったなあ・・・」

光の中でラグが苦笑いする。今の彼は空間ごと閉じ込められているため、動くことができない。呼吸をすることができるのは幸いだろうが、それでもこの状況から戦うのは相当難しい

アルセウス「さて、どうする？降参するか？」

ラグ「降参・・・ねえ」

アルセウス「降参しても構わん。実際この技を使われては動くことができなくなるのだから、ただの攻撃では攻撃動作もできないため発動すら不可能。まあ動作のいらない”ハイドロステインガー”なら発動できるだろうがそれもそれを破壊できなければ意味がない。さて、どうする？」

ラグ「当然やめないよ！まだ勝負はついてない！！」

アルセウス「あっ……そうか、では私も攻撃するでしょう」

アルセウスはラグの言葉を聞くと頭上に光の塊を生成”光の裁き”の準備をし始める

ラグ「（さて……やめないっていったもののどうしよっか？）」

カリバー「（そうですね、この空間封鎖技はかなり強力です。おそらく無理に壊すのは難しいでしょう）」

ラグ「（それじゃあさ、僕に考えがあるんだけど……）」

ラグが心の中でカリバーに作戦を伝える。その作戦を聞いたとたん、カリバーはラグに驚きの声で語りかけた

カリバー「ラグ、それは正気ですか？」

ラグ「もちろん正気だよ」

カリバー「……全く、あなたがそういうなら止めません。その代わり絶対に成功させましょう!!」

ラグ「うん!!」

ラグが笑顔で返事をする。

アルセウス「何か策を練ったな、いいだろう。お前達の力を見せてくれ！」いくぞラグ、「ジャツジメントキャノン」！」

アルセウスは「フツ」と静かに微笑み「ジャツジメントキャノンを放った

第三百三十二話 ラグVSアルセウス 後編(後書き)

ラグ「って僕やられてない!？」

そだね、いわいる「ピンチ」ってやつですな!!

ラグ「だって動けないって・・・どうしよう?」

あれ秘策は？

ラグ「忘れちゃった・・・」

(汗)

ラグ「なんちゃって!ちゃんと覚えてるよ」

あ、怪しいな・・・

第百三十三話 ラグの秘策とアルセウスの強さ（前書き）

さあ、今年最後の投稿です

ラグ「今年も色々あったねえ」

確かにね、でもまあ楽しい1年だったよ

ラグ「それは確かに。色んな人からの感想で意見も聴けちゃったりして凄くうれしかったよ」

それじゃあ百三十三話・・・

ラグ「スタート!!」

第三百二十三話 ラグの秘策とアルセウスの強さ

アルセウスに動きを封じられ、攻撃も防御も出来なくなってしまうラグ。そんな彼にアルセウスは容赦なく攻撃を仕掛けた

アルセウス「ジャツジメントキャノン」

アルセウスから巨大な光の光線がラグに向かって真っ直ぐ放たれる。それを見てラグは悔しがっても、怖がってもいなかった。真剣な瞳で光線を見つめていた

ラグ「カリバー、いいね？」

カリバー「イエス」

ラグは静かにそう言うとかリバーをしっかり握り、光線から目をそらさない。そして光線はラグにせまりついに激突、大爆発を起こした

アルセウス「（さあ、何を仕掛けてくる！？）」

アルセウスはじっと爆発した空中を見続ける。煙の発生からよくは

見えないがそれもすぐに収まってくる。すると

アルセウス「・・・なっ!？」

目にした後景にアルセウスは思わず目を疑う。彼の目に写ったのはもちろんラグだが問題はその状態だ

アルセウス「何故お前はそんなに・・・ボロボロなんだ!？」

ラグ「ボ、ボロボロの理由?もちろん攻撃をくらった・・・からだけど?」

アルセウス「まさか・・・直撃をくらったのか!?あの攻撃の!？」

カリバー「イエス、正解です」

カリバーの言葉にアルセウスは今度は耳を疑う。拘束されていたとはいえ何も対策を練らずに攻撃をくらったのか、だとすれば先程カリバーと話していた作戦とは一体何なのか、そんなことばかりが彼の頭によぎってしまう。するとボロボロになったラグが口を開いた

ラグ「僕の秘策っていうのはね・・・君の強力な技をくらって、その衝撃を使って・・・この拘束から・・・脱出することだったんだよ」

アルセウス「なんだと！？そんなの・・・作戦じゃ・・・」

カリバー「ないですよねえ」

カリバーがアルセウスに代わるように続きを言った。音声からして少々あきれたような声、機械とも技とも思えないほど感情がこもっていた

カリバー「普通に考えればもっといい方法があるかも知れないのに、すぐに無茶をする、ラグの悪い癖なんです。まあそこがラグの

長所でもあるんですがね」

カリバーの言葉にアルセウスは驚いた。カリバーはあくまでもラグの武器であり彼の味方だ。口調からして今言ったことは本当なのだろう。だとしたら

アルセウス「何故そんなめちゃくちゃな作戦に協力したんだ？もっと最善の策が・・・」

カリバー「答えは簡単、私が「ラグの」カリバーだからです」

アルセウス「・・・」

カリバー「私はこの無茶な性格、理論上ではダメダメでも感情的に好きなんですよ。真っ直ぐと相手に向かっていく姿、それを全力でサポートするのが私の役目です。ですからラグの作戦にのった、それだけのことです。それに信頼してますから、ラグのこと」

カリバーが誇らしげに言う。その一言一言がアルセウスの心に響いていった。目の前にいる信頼を、絆を武器に無茶な作戦まで行ってくる者たち。そんな彼らにアルセウスは「フツ」とほほ笑んだ

アルセウス「そうか・・・お前たちはとてもいいパートナーなのだな」

ラグ「そうだよ、僕たちはこれまでの戦いの中で辛いことも沢山経験してきた。もちろん僕が折れそうになった事もあった。でもカリバーが、みんなが支えてくれたんだ。だからここまで頑張っただけだ。だからみんながベストパートナーなんだ」

カリバー「それを言うなら私だってあなたに使われて非常に嬉しいんですよ？あなたのサポートが出来る、それが幸せなんです」

ラグ「ええ！？それを言うなら・・・」

ラグとカリバーが急に話し始める。しかし今は戦闘中、アルセウスは「こんな2人だからこそ」ここで中断するようなことはしなかった

アルセウス「お取り込み中悪いが今は戦いの途中だ、戦闘を再開するぞ」

ラグ「えっ、あ、うん」

アルセウス「行け！」ジャツジメントキャノン”」

アルセウスが改めて光の光線を発してくる。しかし1度は見た攻撃、ラグ達も対策をしないわけがない

ラグ「来たね、カリバー！」

カリバー「ロードエレメンタルカートリッジ、アイスカリバー！リペルディング、ミラーモード！」

カリバーがミラーモードとなり「反射」の力を得る。そして

ラグ「てえええええい！！」

ラグが”ジャツジメントキャノン”に向かってカリバーを思いっきり振る。すると”ジャツジメントキャノン”とカリバーが激突、しかしミラーの効果で半ば強制ながら跳ね返すことに成功した

アルセウス「（あれを返したか、だが・・・）」ライトフェザーレ

イン”」

アルセウスが技名を言う。すると返されアルセウスへと向かう”ジヤッジメントキャノン”は分散し、1つ1つが小さな球体となりその場に停止する。そして再びラグへと向かって行った

ラグ「な、なにあれ!？」

カリバー「今までにない技・・・とにかくガードが最優先ですよ、ラグ」

ラグ「うん!」

ラグは返事をすると思いの”ライトニングウイング”を大きく広げ、自身の体を包み込む。そして”ライトフェザーレイン”と激突するも翼により、ガードに成功した。しかし

アルセウス「弾ける、”ライトネスプロージョン”!」

ラグ「えっ?・・・うわっ!？」

翼に包まれて見えないもののアルセウスの新たな技のコマンドにラグが驚く。すると彼の近く急に爆発が起きる。しかも複数だ

ラグ「何これ、どういうこと!?!」

カリバー「恐らくアルセウスの技です。大方外の”ライトフェザーイン”が弾となり、爆発でも起こしているのでしょう」

ラグ「そんな・・・あっ!?!」

その瞬間翼は爆発の威力に耐えきれず、破壊されてしまう。すると同時にまだ残っていた爆発がラグを襲った

ラグ「ぐあああああ!」

数秒後、爆発は終了する。すると最後の爆発の影響から衝撃を受け、ラグは地上へと落とされ地面に激突する。しかしアルセウスの攻撃はまだ終わってわけではなかった

アルセウス「悪いなラグ、だがまだ終わってないぞ!”グランドシヨット”・・・発射!」

アルセウスの周りに土の塊が20個ほど浮遊し始める。そしてアルセウスの合図とともに全てがラグに飛んでいく。そして激突、あたりには衝撃から砂ぼこりとなぜか「水」がまった

キノガッサ「おいおい、ラグ大丈夫かよ」

観客席でしばらく静かに見ていたメンバーのうち、キノガッサが我慢できずに口を開く。するとそれにつられる様に他のメンバーも口を開き始めた

サンダース「今の”グランドショット”や”ライトネスプロージョン”、そしてモロにくらった”ジャツジメントキャノン”・・・ダメージは相当大きいな」

ポリズ「恐らくそのダメージが原因で“ライトニングウイング”も保たなかったんでしょうね」

キノ「“ライトニングウイング”の発動維持すら難しいって状況ってことですか？」

ポリズ「状況が苦しかったというものあるとは思いますが・・・でもダメージが全く関係ないわけではありませんからね」

ハスボー「ラグ、ピンチなの？」

ハスボーの不安そうな表情にポリズが「それは・・・」と下を見る。すると

アクア「大丈夫だよ」

アクアがそう言った。タイミングからして恐らくハスポーへの返答だろう

アクア「ラグちゃんはそう簡単には負けない、私はそう思うから信じるよ。ラグちゃんはまだ終わらないって」

タチマル「そう・・・ですよ。そうだ、まだ終わってないんです。ししょーはまだ負けてません！だからピンチじゃないですよ、ハスポーさん！」

ハスポー「そうだよ、ラグまだまだいけるよね？」

アクア「うん、きっと。だから信じよう」

アクアがラグの落下した場所を見ながら言う。その表情は言葉通り信頼しているからか真剣だ

ティラス「（アクアさん、こんな時でもラグさんを信じてる・・・
2人の絆って凄いな）ラグさん・・・頑張ってください！」

そんなアクアを見てティラスが小さく自然と呟いた。

アルセウス「(終わったか・・・?)」

アルセウスが砂埃を見ながら思う。中にいるのはラグ、さっき自分の攻撃をくらったラグだ

アルセウス「私の技を3つくらった、それもジャッジメントは直撃、まだ動けるか？」

アルセウスが小さく呟く。途中まではいい動きをしていたラグ。神である自分と対等に戦っていた。しかし少し本気を出すとやはりすぐに倒れてしまう

アルセウス「やはり・・・こうなってしまうのか」

アルセウスが悲しそうな顔をする。やっと見つけた実力のある者、しかしそんな期待した人物も戦えば倒れてしまうのだ

アルセウス「(同じデンライジとやえどやはり・・・あやつとは違うのだな) 動けぬようだ、ではこのバトルは終わりに・・・」

ラグ「な、何を言ってるのかな・・・？」

アルセウス「ん？」

アルセウスが上にいるヤミラミにバトルを終了させようとした時、突然ラグの音がする。そのことによってアルセウスは改めて砂埃を見た

ラグ「まだ・・・終わってないよ？」

アルセウス「ほう、まだ立ち上がるか」

ラグ「もちろん、だってまだ僕は立てるんだし・・・」グランドショットのダメージは最低限に抑えたしね」

アルセウス「・・・そうか、”グランドショット”直撃時にまったあの水・・・防御技でも使ったか？」

ラグ「違うよ、防御技じゃない。ただ”ハイドロステインガー”を空中で待機させて”グランドショット”を相殺しただけだよ」

カリバー「”ハイドロステインガー”は動かせばまたその動作に体力を使いますからね。待機させるだけなら動かさずに、だけどダメージは減らせます」

アルセウス「（なるほどな・・・）よくあの短時間でそこまで考えたものだ」

ラグ「僕じゃないよ、カリバーが考えてくれたんだ」

カリバー「ラグを最大限サポートするのが私の務めですから」

ラグ「さあ、ここからだよ」

そう言つてラグが構える。言葉通りまだ終わらせる気はないらしい。また微妙にだが彼の周りの電気が量を増していた

アルセウス「（ここにきてまだ力を・・・）いいだろう、来い！」

ラグ「いくよ！」プラズマスラッシャー”！！”」

ラグがカリバーに電撃を溜め、それを放つ。すると電撃は一直線にアルセウスへと向かつて行った

アルセウス「エアロガード”！！”」

そんな技にアルセウスが對抗できないわけもない。アルセウスは自身の周りに空気を集束、壁を作り出す。すると”プラズマスラッシャー”は壁に激突するも分散し無効となつてしまった

アルセウス「どうした、これで終わりか？」

ラグ「もちろん・・・まだだ・・・よっ！！」

刹那、ラグが4体に分身する。”デンミラージュ”だ。そしてそのままアルセウスへと向かって飛んだ

アルセウス「（何をするつもりかは知らないが・・・）”グラントショット”」

ラグ「それを待つてたよ！」

アルセウス「なんだと？」

”グラントショット”を発射したアルセウスがラグの言葉に驚く。その瞬間分身のラグは消え、1人となってしまった

アルセウス「だが分身を自分から消してしまえば狙いは1つに絞ることが出来る！」

ラグ「それも分かってるよ！！だから・・・”サンダーボール”！
！サンダーガード！！」

ラグが接近しながら自身の周りに”サンダーボール”を3つ作りだす。そして集束させて1つの雷球を作りだす。そして”グラントショット”は全て”サンダーボール”へと衝突した

ラグ「くっ！」

衝撃により少々バランスを崩してしまいうラグ。しかしなんとか耐えきり、”グランドショット”がなくなるとアルセウスの目の前にいた

アルセウス「耐えきっただと!？」

ラグ「サンダーエクサクラッシャー”!!!これで!!!”

驚くアルセウスを気にせずラグは技の発動に入る。さっきよりも電撃を溜めこんだカリバーはバチイバチイと音を立ててその威力の高さを見せつける。しかし相手はアルセウス、彼はこの状況でもしっかりと対処できる力を持っていた

アルセウス「まだだ!!!”ライトネスプロージョン”!!!”

ラグ「えっ!?!」

振りかざす瞬間の出来ごとにラグは驚く。”ライトネスプロージョン”、それはさっきも見た技であり「爆発技」だ。つまり

ラグ「(でも怯むわけにはいかない!少しでもダメージを!!!)はああああ!!!”

「爆発によって自分の技の威力が全てアルセウスに叩きこまれるわけではない」と分かっているにもかかわらずラグは少しでもダメージを与える為に技を続行、アルセウスへと振りかざす。そして

ラグ「（よし！！）」

”サンダーエクサクラッシャー”は見事アルセウスに命中、アルセウスがダメージを受けラグもその手ごたえを感じる。しかし

ドオオオオオン！！

凄まじい爆発音とともに2人のいた場所が爆発を起こす。”ライトネスプロージョン”の影響だ。そのことによりラグは吹き飛ばされ、壁に激突してしまった

アルセウス「・・・なかなかの根性だった。まさか”グランドショット”を全て受けきるとはな

煙の中でアルセウスが呟く。彼は確かにダメージを受けた。しかしそれは「最初だけ」であり、ラグの技を最後まで受けたわけではない。カリバーの衝撃は受けたもののそのあとラグが吹き飛ばされたことでカリバーはすぐにアルセウスを離れた。つまりダメージは少なくてすんだのだ

アルセウス「（それにしてもあそこまで向かってくる奴も久しぶりだな。」ライトネスプロージョン”の発動が遅れていればそれなりのダメージを受けていた・・・かも知れんな）」

煙が晴れ、アルセウスはラグの飛ばされた方を見る。そこには同じように煙が晴れ、壁に激突したラグがいた

アルセウス「さて、まだ動けるか？」

アルセウスが少し大きめの声でラグに聞いた。するとラグが下を見ながらムクリと起き上る。そして口を開いた

ラグ「もちろんですよ・・・僕はまだ・・・負けてないんだから・・・」

アルセウス「・・・ラグ？」

いきなりの口調の変わったラグにアルセウスが驚く。その瞬間会場全体の空気が一気に変わった

第三百二十三話 ラグの秘策とアルセウスの強さ（後書き）

アクア「あれ、なんかラグちゃんが変なんだけど・・・」

そうです、ここでラグに異変です

アクア「ちょっと作者さん、今年最後に何をしでかしちゃったの？
まさかこれ以上チートに・・・」

それはないけど・・・いや、チート化か・・・

アクア「作者さんの怪しい発言・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7328j/>

ポケットモンスター ラグラーズの冒険

2011年12月31日01時48分発行